

私の名前は「
」

捻くれ餅

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一人の妖精が建造した艦は少しオカシイ艦娘だったようです。
何番煎じかわからない艦隊これくしょんの艦娘に転生ものです。

目次

漂流船

始まりの日	1
My name is…	14
艤装	23
いざ海へ	31
単艦の駆逐艦	40
休息	49
悪い人 善い人	57
砲撃?	66
砲撃②	74
雨天の日	82
日本へ	90

座礁	100
1章 くら幕間くら	110
鎮守府	

目覚め	119
工廠の二人組	128
悪魔の冊子	137
偉い人の判断	144
新兵器	152
歓迎	160
新艤装	170
艦載機	179
中身は知らない	187
濃い一日	196

気まずさ	207
秘書艦？	216
秘書艦②	226
夜の女王	235
帰還	247
夜戦の後の過ごし方	254
休日の過ごし方	262
食堂での話し合い	271
休日の過ごし方 ↳二日目	280
提督最後の日	289
2章 ↳幕間？	298
2章 ↳幕間②	308
ブラック鎮守府	

始まり	317
初めての遠征	327
遠征二日目	335
三日後の鎮守府	343
距離と時間 速度は？	352
都合のいい救世主は現れない	361
夕張さんに訊く解体事情	369
トンボ帰り	377
バケモノ	385
限界	394
自棄、諦念で出来た結末	406
大本営にて	
回想の終わり	423

良いニュースと・・・	426
ワルい大人	433
大本営の香取さん	442
厳しい個人授業	451
ちよつとした会話	461
最悪の寝覚め 増える教官	469
気持ちは問題	479
香取の妹	486
あきつまる（動詞）	496
突撃！ 佐世保の駆逐艦	505
リベンジマツチ	515
艦載機と駆逐艦	524
決着	536

試合後のひと時	544
心の内①	551
心の内②	561
4章 ㄱ幕間ㄱ	569
未完成 file スチユワート	579
新環境	
着任！	587
応援到着！	595
提督 見ゆ！	603
その駆逐艦、出撃禁止につき	612
提督 Ⅱ 主人公	621
バランスが大事	631

通常業務	640
任務は殆ど未達成	650
任務遂行（始まってない）	660
見送る人達	667
大鳳 嵐と爆弾	675
艦隊帰還？	684
帰還とその後	691
深海棲艦注意報	699
その駆逐艦は「取扱注意」の者です	707
716	
ハプニングは続くよ何処までも	
超下級の問題児	724

提督の憂慮	733
オーバーキル	741
戦いの後に	749
湯（ゆ）号作戦？	758
湯（ゆ）号作戦②	764
湯（ゆ）号作戦③	774
湯（ゆ）号作戦④	781
湯（ゆ）号作戦⑤	789
湯（ゆ）号作戦〜終	797
大型作戦	
バスの中で	806
個性だらけの新人たち	815
綺麗な新人、汚い先輩	823

愉快な頭

831

演習前の時間

839

盾の駆逐艦

850

気を抜く

859

台風の目が一番騒がしい

868

来客

876

第一印象は大事

885

心配、不安、悪だくみ

893

しんりにちかづいた！

904

もっと話して(want you

t

o talk more)?

913

曲線、時々破線

924

緊張感

932

正気じゃないね

940

未知との遭遇

951

～四日目

961

直前のひと時

971

猫は気まぐれ

981

心恋(うらごい)しき戦の火

990

紅色 ハシバミ色

1000

罨

1009

不完全燃焼 気分を添えて

1020

今日も警備府は平和です

1030

6章 幕間

1040

6章 幕間②

1049

6章	〜幕間③	〜
6章	〜幕間④	〜
故郷へ		
圧縮	〜	
二度目は嫌	〜	
コンテナ船	〜	
鬼と灸	〜	
初めてではないらしい	〜	
ファーストコンタクト	〜	
他所は他所	〜	
異文化交流は大体地雷	〜	
行き当たりばったり	〜	
揺り揺られ	〜	

1156114711391131112211131104109610871080

10701060

それはとてもグダグダな	〜	
換装	〜	
当たらなければ	〜	
手元に	〜	
違う捉え方 戯れ	〜 Play	〜 O u
t	〜	
騒いで、騒いで	〜 Let's	〜 d
o more	〜	
エンターテインメント至上主義達の騒	〜	
ぎ	〜	
寂	〜	
闇に一点	〜	
ただいまショック	〜	

1244123512251215 1207 1199 1191118111731165

待つ者	方向音痴	過不足あり	変わった子供たち	束の間	現地到着	各自準備	揃わない	アレコレ	7章	7章	7章	7章
									〜幕間①	〜幕間②	〜幕間③	〜幕間④
1366	1358	1349	1340	1331	1323	1313	1304	1286	1274	1264	1254	

1章	8章	8章	8章	波は治まる	光無き囁き	見える終わり	止まると死ぬ	1401	σ	風雲(ふううん)ではない	鈍色の執着心	不意打ち
〜幕間②	〜幕間③	〜幕間②	〜幕間①						スタート	(かがみうつし)		
1476	1466	1456	1447	1437	1428	1418	1410			1393	1384	1375

幽靈船

歸還、 仕事、 未練

沈黙、 情報、 天秤

名前、 艤装、 想像

化粧、 集会、 油断

機会、 理由、 進展

知識、 計画、 準備

予定、 不足、 不測

闇夜、 急襲、 姑息

防衛、 消耗、 危機

攻勢、 微光、 参戦

死神、 閉幕、 再開

再臨、 抗戦、 暴走

158515761567155815491538153015201510150214941485

再起、 呼称、 萎縮

畜生、 変化、 防錆

回収、 点火、 火花

炎上、 過程、 隠者

1622161416051595

漂流船

始まりの日

「——起きて——！」

いつの間に寝ていたんだらうか？

記憶に無いから夜中にスマホ弄つて寝落ちでもしたんだらう。充電は大丈夫だろうな？

そんなことは関係なく、起きろと言われたからには起きないといけない。

「ハイ起きましたー！」

いつも通りふざけた返事をしながら起き上がる。それにしても親はいつまで世話を焼いてくるのだろうか。成人近くなってもこれだ。世話を焼かれる側からしてみればかなり鬱陶しいから止めて欲しいが、ああだこうだ言ったところで止めてくれなかった。

そんなことを考えながら立ち上がると違和感がある。まず俺の布団はこんなに硬くないしザラザラした感触はしないし、部屋は一瞬で気が付くレベルで鉄や土みたいな臭いもしない。

「はあ？ ナニコレ？」

意味が分からない。

辺りを見渡すと薄暗い密室で、入口と思われる大きな扉の反対側には大量のダンボールが積みあがっている。どこかの倉庫か何かだろうか、学校の体育館くらいの広さがある。

「……なんで？ こゝ何処？」

それにしても、いつの間に移動したのかも覚えてない。

目の前の現実が全く受け入れられなくて完全に思考停止してる。パニックにすらならない。

「ハ、ハハッ」

もう乾いた苦笑いしか出てこない。なんの冗談だ？

それにしたってアニメや小説じゃあるまいし目が覚めたら知らない場所とか止めてほしい。こんな非日常は二次元だけで十分だ。リアルな夢って言われた方が全然納得できるんだよなあ！

中二病あるあるの「誘拐された時」とか「不審者が出て来た時」に似たようなシチュエーションが現実になった時、妄想の中の俺は如何にも対応出来てますくみたいな行動を取ってたけどそんなのは所詮妄想だクソの役にも立ちほしない。

「どうしようかな」

一周回って落ち着いて、行動することもなく思考の海にダイブするのが俺の現状だった。

まずは今いる場所。

知らない。スマホが無いから地図アプリも開けない。終わりだ。

どうして此処に居るか。

知らない。お酒は？んでないし、夢遊病でもないから俺が勝手にという線は無し。

「じゃあ次だ」

第三者：推定犯人の動機。

知らない。現代日本で俺みたいなイケメンでもない男が凌さらわれるとかあり得ないだろ常識的に考えて。家は特別裕福でもないし宝くじとかは誰もしない。

そもそも、いくら俺が自称サイコパスだったとしてもこんな犯罪行為をする奴の思考なんて分かるわけないじゃん。

「じゃあ次」

今の俺の恰好

なんか黒い女物の制服に着替えさせられてる。

それに……

「落ち着つきましたか〜？」

不意に聞こえてきた声に肩が大きく跳ねる。やめてくれよ……俺は臆病だから驚かせるのと死んじやうんだ。

と、心の中でふざける事で余裕が出来た。深呼吸をする。

そう言えば誰かに起こされたんだっけ？

知らない場所にいるインパクトですっかり忘れてた。

意味不明な状況で俺が独りではないと分かって、ちよつとの希望と多大な不安が押し寄せる。俺をこんな目に遭わせた奴がすぐ近くにいると思うと、急に心臓が嫌な音を立て始めた。

しかし緊張したままゆっくりと辺りを見回しても人影は見えなかった。

…幻聴か？

「ここです〜」

再び聞こえて来た声は足元からのもので、視線を向けるとそこには——なんだこれ。

「ええと……なに？」

「私は〜妖精です〜」

掌に乗るんじゃないかってくらいの大ききの人が居た。しかも自分で妖精とか言ってる。幻覚もか？

「ハンッ」

「鼻で笑われた!?! いくら何でも酷すぎるとおもいますう!」

「どうせ幻覚なんですよ? ああヤバい。良くない事実ばかり積みあがっていく」

「だから私は現実ですってばあ!」

「あっそ」

妖精が存在するかどうかなんて今はどうでもいい。

恐らく幻覚の存在が喚いたところでどうにもならない。

「まだ信じない…頑固ですう…それっ!」

「ああっ!」

いきなり顔に水が掛かった。

推定原因の妖精を見ると水鉄砲っぽい物を持つてる。

……マジ?

「現実? ウソだろオイ」

「だからさつきから現実だつて!」

自称妖精…人を浚うようなヤツは悪魔じゃないの?

まあいいや。コレが幻覚じゃないなら俺の頭は正常だつてことだ。

「あゝ…はい。じゃあ、この状況は何？ 動機は何？ 嫌がらせか？ 説明できる？」

かなり友好的な感じだから遠慮も配慮もしない。

知りたいことをドンドン聞いていく。

「あゝそれはですねえ。説明するより見てもらった方が早いですね。」

そう言つて自称妖精は移動を始めた。

さつきこの倉庫？ 内をちよつとウロウロした時にはダンボールが大量にあつただけで特に見所とか無かつたような気がするんだけど。

そう思いながらダンボールの角を曲がる。

「！」

思わず息を飲んだ。そして咄嗟に引き返してダンボールの角に隠れる。

「ヤベエよヤベエよ」

誰かいた誰かいた誰かいた。

他に人が居るなんておかしいだろ!? さつき一通り見て回つて誰も居ないつて判断したんだぞどうなつてんだ。音もしてないのにどつから現れた伝説の傭兵じゃあるまいし。

咄嗟に隠れちゃつたのは人が居たからというのもあるけど、その人物はぱつと見た感

じ日本では、少なくとも俺が今まで過ごして来た記憶では見る事が無かった奇妙な少女だったからだ。

取り敢えず隠れちゃうのは拙いと思つて、ジロジロ見ないように視線を逸らしながら角を曲がる。

視線をゆつくり正面に戻すと、変わらずそこには少女が立っていた。

いきなり殴つてこないだろうな？ 白髪っぽいけど日本語通じるかな……？

「え、え〜つとお……ハ、hello?」

挨拶とも言えないような挨拶をすると、目の前の少女の口が自分に合わせて動いたことに気が付いた。

発言が被つたか？ こんな時でもレディーファースト？ どうぞどうぞとジェスチャーする。

すると相手も同じように手を前に出してきた。ここまではほぼ同時……もしかと思つて右手でサムズアップすると少女も左腕を上げて同じ動きをする。

「鏡？」

「そうですね。それが今のあなたです」

そう言つて鏡の裏から自称妖精が現れると同時に電気が点いた。今までずっと薄暗かったからちよつと目が眩む。

それにしたって、これが今の俺？

「冗談だつて言つてくれよ」

鏡に映つた今の自分をもう一度見る。

深紅と黒の配色のセーラー服。セーラー服はサイズ間違つたのかわからないが襟が
凄く広い。

「うわあ……」

肩見えちゃつてんじやん。インナーだっけ？ ファッションはよく分からないけど
絶対に普通の人を着るような服じゃないよねこれ。

視線を落とす。黒に赤のラインが入つたスカートを履いてる。さつき鏡の中の人影
が少女と判断したのはこのスカートがあつたからだ。

「うわあ……」

なにこれ短すぎない？ スカートの膝丈よりちよい下つてのが俺の知つてる
学校の規則
一般常識だつただけぞ？

更に視線を落とすと凄い硬そうな膝まである鉄のブーツを履いていた。

「うわあ……」

こんなので踏まれたり蹴られたりしたら絶対痛いじやん。そんな趣味無いけど。

視線を上げるとその顔が良く見える。鏡の向こうからこちらを見つめてくる眼の色

は金、髪は薄い紫色でおさげ以外は結構短く切られていてヘアピンを着けている。

「どうですか？ 結構自信作なんですけどお」

「あーはい、そつすね」

鏡から目を逸らさずに相槌を打つ。よく見たら顔のパーツが滅茶苦茶整ってる。髪の色は染めてるのか？ 服装とかも合わさって一般人の範疇から完全に逸脱してる。精巧な人形……マネキンか？

全体的にファンタジーチックだ。ゲームとかに出てきてもおかしくなさそうなレベル。正直かなりかわいい方だと思う。

だけど残念なのはこれが俺ってことなんだよね。

女装趣味なんて勿論ないけど、そもそも目や髪の色……どころか骨格レベルで違うから「コレは本当に俺か？」ってなる。生粋の中二病患者である俺でもまさか自分が女になるとは思わなかったから頭の中は困惑に支配された。

だけどそれでも聞き逃せない情報はある訳で。

「自信作ってなんだよ。アンタは人を誘拐した上に無断で人の体弄ってたってことか？

俺の体はどうなったんだよ。確かにこの見た目は凄いなだけだよ……。」

「……実はあなたは死んでしまっているんです。」

「は？ 勝手に殺さないで」

「嘘じゃないんですよ。あなたは働いてる途中に機械に巻き込まれて死んじゃったんです」

憶えてないですか？　と言ってこちらをジッと見てくる自称妖精。そう言われても俺はいつも通り働いて、働いて……あれ？　その後どうなったんだっけ？

「は？　憶えてないが？」

憶えていないことを覚えてる。そして思い出そうとしたら途端に気分が悪くなってきた。呼吸が浅くなつて、視界が狭まり何が見えてるのか何を見ているのか分からなくなってくるのが分かる。

死んだとなつたら親に、家族に、会社に、知り合いにどれほどの迷惑がかかるのか。まだ親孝行の一つも碌にしていないんだけど。ゴメン父さん、ポルシエに乗せる夢は叶えてやれなそうにないよ。ゴメン母さん、彼女の顔を見せてやれなかつたよ。居ないから。

そして何よりも、親より先に死ぬとか……

吐き気がする。鳩尾の辺りから酸っぱいものが込み上げて来ているような気がする。

目が回る。視界が大きく揺れて今にも倒れるんじゃないかって思えてくる。

マジ？　コイツが嘘吐いてるだけだ。

でも思い出そうとしただけでこれはマジっぽい。

じゃあ何？ マジで死んだの？ じゃあここはどこ？

なんて思考が浮かんで消える。

やっぱりコレは夢なんだろう。いつそのまま倒れてしまえば悪い夢から覚めるんだらうか？

「それは駄目ですう」

—— 衝撃。冷たい感触。液体の音。

これらを受けて沈みかけた意識が戻ってくる。

ア。ツ！ 気管に入った感じがする！ すごいスースーする！ これ水じゃねえ！

「グヘツ、エヘツ……何すんだよ！」

咳き込みながらそう言い、何かをぶっかけてきた張本人を睨む。

「気絶されたらちよつと面倒だから許してほしいですう。そもそも私の話は全然終わってないですう。というか始まったばかりなのでどうせ倒れるなら全部聞いた後にしてほしいですう」

なんて奴だ！ 普通死んだことを自覚したような体験をした人は訓練されてないなら気絶しても何らおかしくは無いんじゃないかと思う。普通にS A N値削れて一時的発狂するわ！ したわ！

それをこの自称妖精は後回しにしろと、面倒だからと無理やり叩き起こしてきやがっ

た。自分で妖精なんて言ってるけどフェアリーじゃなくてグレムリンの方だろコイツ。やっぱり悪魔じゃないか。

「あなたは死んでしまってもそれを認めず、別の日の朝だと思い込んでいましたよね？ ですから私はそんな地縛霊であるあなたをこの体に入れて生きられるようにしたんです」

「え？ 何？ じばくれない？」

マヌケみたいな声が出たけどしようがないと思う。俺地縛霊なの？ しかも地縛^俺霊を使って疑似的な死者蘇生みたいなことしたの？ すげえファンタジーしてるぜコイツ、化け物かよ。コイツも俺も。

しかも死んだのに生きてるとは之如何に。

「で、そんなことしてわざわざ俺に何をして欲しいの？ 生き返らせましたなんて言われて何もされないっていうのはちよつと怪しすぎると思うんですけど」

気になる事実がポンポン出てくる。ずっと立って問答も疲れるしと思って積みあげた段ボールの一つに腰掛ける。すると自称妖精は俺の右肩に腰を下ろした。手で払うと反対側に移動した。

「で？ 話してくれない？ 死者蘇生までやったんだ。もう何が来ようと驚かねえぞ」

「実はここ、あなたが住む世界とは違う世界なんですよ」

「……」

なるほどパラレルワールドと来たか。なんとという出鱈目。一つ頷いて続きを促す。

「それでですねえ、あなたには人類の敵を倒してほしいのですよ」

「人類の敵」

自称妖精の言葉をリピートする。

人類の敵とは一体なんなんだろうね？ ゾンビか、宇宙人か、シンギュラリティ AIの類か、異常進化した猿か蟲とかだろうか。

「それってどんなの？」

「——深海棲艦って名前のやつらですう」

「……は？」

そして俺は今いる世界が『艦隊これくしょん』の世界だと知った。

My name is…

『艦隊これくしょん』——通称艦これ

一時期は……今もか？ 絶大な人気を誇っているブラウザゲームで、学校のクラスメイトも口に出していた気がする。

そんな自分はプレイしようか何度も考えたが、案外大変だと言う声が聞こえたことと、弟妹の情操教育に少々良くないのではないかという建前で、プレイしてるのを知られたくないという何とも小さな理由ブライドで伸ばした手を引つ込めた。

それでも投稿サイトにも多くの関連動画やイラストがあつて、視聴閲覧していたので全くの無知という訳ではない筈だ。

しかしいくら目の前の自称妖精——『艦これ』的には妖精さんが言ったように俺の地縛霊云々があつたとしてもだ、俺に白羽の矢が立つのは不思議でならない。

それこそ熱心に『艦これ』で提督業に勤しんでる人達の方が今の俺の状況に相応しいと思う。

何せ地縛霊をどうこう出来る上にパラレルワールドまで引つ張つて来られるような奴だ。俺よりも余程適性のある奴なんて星の数ほどとは行かなくても沢山いるだろう

し、その人たちから選別でもすれば良かったのでは？　と思う。

「なんで俺が選ばれたのさ。もつと相応しい奴はいつぱい居たんじやないの？　諸々の事情を抜きにしてもさ」

「あなたはなんだか面白そうな感じがしたからですよ」

予想外の、気の抜けるような返答の後に肩の妖精は続ける。

「この世界に來たい、深海棲艦と戦いたいわって人は沢山居たんですよ。でも、あなたと同意ような人ってあまり居ないですよね」

「これはアンタは変人だって喧嘩売られてるのか？　確かに俺は子供の時から変わり者だつてよく言われてきたし自覚もしてるけどさ。確かに同じ感じ同類の人には会ったことは殆ど無い。あまり居ないっていうのは間違いないじゃないと思うけどさ」

残念ながら事実だ。俺の性格は臆病で短気で落ち着きがなく、楽しいことが大好き。仲が良かった人からは「愉快犯みたいな人」「将来悪い意味でニユースに出そう」だなんて言われたりもした。否定はしないし出来ないけどあんまりじやないかなあ。

そう言われても特に否定もしないで肯定するから変わり者って言われるんだろうなあ……直すつもりは無いけど。

「あなたと同じように人類の敵を倒す人は艦娘って呼ばれますよ。大戦時代の軍艦の記憶を持った存在なんですけどねえ」

それは知ってる。いくら『艦これ』をプレイしたことが無い俺でも大雑把な設定と有名なキャラと好きなキャラの名前くらいは知っているつもりだ。妖精さんに続きを促す。

「艦装と呼ばれる物を纏って平和のために深海棲艦と戦っているんですう」

それも知っている。しかし辺りには積みあがったダンボールの山しかない。艦装のぎの字も見当たらない。

そうやってキョロキョロする俺を見て妖精さんは楽しそうにしている。

「艦装はどこだ？ って顔をしてますねえ。聞いて驚いてください！ 実は艦装は……」

「作っていません！」

いい笑顔で告げられた。

「は？」

と言い睨むと途端に困ったような顔をして

「作ってないんですよう……仕方ないじゃないですか。いつもと同じように建造、艦娘を造るならまだしも今回は随分と無茶しましたからねえ。キチンと動く事を確認して

から艤装を作るって決めてたんですよ」

それを聴いて成程と思う。初めて行う事だから慎重につて姿勢は嫌いじゃない。自分がそうであれと言われたらせつかちな自分では到底無理な話だけど。

「それでですね、今から艤装を作るに当たって一番必要なモノが足りていません」

「必要な物？ なにそれ？ 材料とか作業環境とか？」

「——あなたの名前です」

「なまえ」

何故名前が必要なんだろうと考えたが答えはすぐに出た。

『艦これ』には多くのキャラクターが登場するが、その多く、というよりは殆ど全ては艦の名前をしている。響や皐月、榛名ならまだしも、武蔵や飛龍、伊58なんて名前の女の子の名前は聞いたことが無い。もし居るなら親の頭を疑うレベルだ。絶対に虐められるだろう。

艦娘……彼女たちにも、本当の名前があったりするのかねえ……

なんて考えていてもしょうがないし、間違いなく妖精さんは前世？ の名前を聴きたい訳ではないだろう。でも今の自分の名前がポンつと出てくるわけではないし。

と、ごちゃごちゃ考えていたら目の前に妖精さんが居た。

「ウエェア!」

畜生！　ボーっとしてた。自分で呆けておきながら自分で勝手にビビるとか情けねえな。

っていうか目の前の妖精浮いてね？

「あなたの名前は判りましたか？」

「判つてたら答えてるよ。せつかちなヤツめ」

と返して溜息を吐く。名前なんてそこらへんに転がってる訳ないし、適当にウイリアムとか風風とか名乗ったところで今の体の名前だとは思えない。

「あなたの記憶じゃなくて体が記憶している名前がある筈です。早く集中して記憶の中から引つ張つてきてください。名前が判らなかつたら何時になつても艤装を作り始めることも出来ませんよお」

「はいはい。集中しますします」

とは言ったものの体の記憶つて何？　日常会話では絶対使わないよね？　っていうか今の体は艦娘なんだしそこはかとなく卑猥な感じがするんですけど……妖精さんに集中を乱される……いや、俺の煩惱か。

集中しよう。俺は軍艦。俺は軍艦。俺は軍艦……

いや無理だろ。

なんだよ俺は軍艦つて……

「ツ！」

そう思つてたら脳みその裏側!? がどこか知らんけどその辺に痛みとか違和感

！
普段は当てにならない勘も言つてる。ここに答えがある！

そして違和感を意識し始めた時、目の前は真っ暗になったが俺は気が付かなかつた。

妖精さんめ、集中してなかつたけどなんとかなつたじゃねえかよこの野郎……

音がする。大きな音と小さな音。大きな音は人の声で小さな音は波の音。

それで俺はいつの間にか船の上に居る。乗船経験は無いから凄く興奮する。

甲板? の縁まで歩いて下を見ると多くの人がこちらを見ていた。

大勢からの視線が苦手な俺はすぐに視線から隠れるように身を潜める。とんでもないドツキリだ。正直止めてほしい。いや、よく考えたら俺の方に顔が向いてたけど俺のことは見てなかつたような……見えていない? 見えていたら誰かが気付いて騒ぐ筈だろう何かの式典っぽかつたし。

暫く甲板に伏せてジツとしてると誰かが何か言ってるのが聞こえてくる。ああ分かる。これは聞き逃しちやいけないヤツだ。

「——art——」

……日本語じゃないじゃん。しかも距離があるからよく聞こえない！ ワンモアプリーズ！

「Clemson—class destroyer USS Stewart」

うわ。すつげえネイティブな英語。いや待ておかしい。俺の英語の成績は悪かった筈だがなんでこんなにハッキリと聞こえるんだ？ 耳がおかしくなったか頭が更におかしくなったかのどっちかだな間違いない。

だけどしつかり聴いたぞ。

——クレムソン級駆逐艦「スチュワート」

それが今の俺の名前らしい。俺の少ない艦これ知識じゃ聞いたことが無い。

壮大な音楽が響いてゆっくりと艦が降ろされる。着水して……沈まなかった。奇妙な達成感を感じ、意識が暗転した。

気が付くと先ほどの倉庫の中に居た。寝かせられてた。これで本当に寝てて妖精とかも全部夢でした。でも平和的でよかったんだが。

「ククク……」

なんというか、いつも妄想や想像の中にしかなかったファンタジーが、スリルが目の前にある。例えこれから『艦これ』の戦場に送られて、後悔することがあると分かっているとしても、目の前にある楽しそうなことを逃すなんて考えられなかった。気持ち悪い笑いが漏れる。

「あーあー、妖精さん？」

「なんですかあ？ 判りましたか？ 名前」

「バツチリだ」

よく聴け妖精さんよ、これが今の俺の名前！

「クレムソン級駆逐艦、スチュワート。それが私の名前だ」

名前が判って艦娘になったんだ。一人称「俺」は流石にまずいだろう。幸いなことに家に居る時以外の一人称は「自分」か「私」だったんだ。この際だから他人と話すときは変えてしまおう。

女子が友達に言うような気軽な感じではなくてちよつと事務的なイントネーションだからちよつとよそよそしいけど、ポロつと「俺」なんて漏らすより万倍良い。面倒だけどそこまで大変な事じゃない。

「クレムソン級駆逐艦のステュワート……ですかあ。分かりましたあ、艦装を作るのでしばらく待つててくださいあい」

え？ 艦装つてゼロから作れるの？ 作るような設備とか無いじゃん。つていうかここは『艦これ』の世界だつてことは分かったけど、あの世界も地球。今いる場所は結局わからないままじゃん。

近くのダンボールからインゴットを取り出し始める妖精にそう言っても反応は返つてこない。一度集中し始めると周りを気にしなくなる職人氣質なのか？

それはそれとして勝手にダンボール開けるとかそれ窃盗なんじゃないの？ でもここまで堂々としてるし、恐らく私物だろう。

眺めている俺に気付いた妖精さんはハツとした様子でこちらに近付きグイグイ背中を押して出口に向かう。凄い力だ、どこにこんな力があるんだよ。

そうして倉庫から出された俺が振り返ると妖精さんは告げる。

「絶対に中を覗かないでください」

『艦これ』は鶴の恩返しじゃあないと思うんですけど……

艤装

「絶対に中を覗かないでください」

そんな鶴の恩返しみたいな言葉と共に倉庫の外に叩き出された。

掌サイズの一体どこに恐らく人間サイズの俺に抵抗を許さないで押し出すだけのパワーがあるんだろうか。浮いてるところも見たし……艦娘なんて要らないんじゃないのか？

「25分もあれば出来ると思いますので、待っててくださいかい」

と言うなり扉を閉めてしまった。

25分つてちよつと微妙じゃない？ ただ待つてるには長いし、何かするには短い。散歩するにも道が分からない。

周りを見ると、近くには今まで居た倉庫に似た建物が並んでいた。コンテナだコレ。しかも張り紙には文字と数字が書いてあったけど日本語じゃない。

「日本じゃないのかよ」

そして海の香りがするから海の近くだと判断できる。海、コンテナ……港か？

海なんて人生で5回も行ったことが無い。港なんて初めてだ。

でも妖精さんの気まぐれで今の俺は艦娘だ。これから嫌だと言うほど海に出ることになるんだろな。

ゲームの中、アニメや小説の中といった命のやり取りは見ていて楽しいと思う。画面スクリーンやページの中には非日常があつて、スリルを感じる事ができるから。

これからは傍観者ではなくなる以上、被害が出ないから楽しむなんてことは出来ないんだろなと思う。なにせ此方は最近まで一般人だ。命のやり取りなんてしたことはない筈がない。

考えながらも石をいくつか拾つて倉庫の前にまとめて置いた。もっと分かりやすい目印があつたらいいのにと考え、あまり遠くには行かないようにしようと思った。

紺色の空に黒い海が目の前に広がっている。昼間は太陽の光を受けて輝いているであらう波は自己主張を抑えている。残念ながら夕日は背中にある。

「……」

俺の知っている海はいつもテレビの中にあつた。天気が悪い日の荒れた海と夏に人で賑わう騒がしい海。あとは大量のゴミが流れ着いた海岸くらいか。

だけどそんな海は影も形も無く、俺に夜の海がどれほど静かなのかを教えてくれた。……あの水平線の向こうでは今日も艦娘が命を懸けて戦っているのかと思うとセンチな気分になる。艦娘は一体何の為に戦っているんだろう？ 市民の安全か、誇りか、それともただ存在理由だからか。

小さな波の音を聞き、徐々に暗くなる空を眺め考えに耽る。

——風が吹くまでは

「うわっ」

風が吹きいてスカートが揺れ動く。咄嗟に押さえたからまだいいとしてもやはり、事情を知ってるならスカートじゃなくてせめて短パンにして欲しかったと思わざるを得ない。

こういったところ女子は本当に凄いと思う。冬の日にも脚を出してたりするのを見て寒そうだと思つたことは一度や二度ではない。今俺はスパッツを履いているが聞いた話だと女子はそうでもないらしい。羞恥心とかは無いのか？ 慣れなの？ 部活動では俺もスパッツは履いてたけどスカートなんか慣れるわけねえだろ！

溜息を一つ。最近溜息が増えた気がする。幸運がどんどん逃げていくなと考えながら、また溜息を吐く。

「……そろそろ時間かな？」

倉庫に向かって歩き出す。せめて情報収集とかすれば良かったのにしようもないことに時間を使ったなあど気づいたのもこの時だった。

倉庫に着くと扉の前に妖精さんが居た。

「ちょうどいい時間ですなあ、たつた今完成したんですよお」

そう言つて倉庫の中に入る妖精さんの後に続いて倉庫に入る。

すると、なんとということでしょう！ 先程までダンボールその他以外は何もなく、寂しい雰囲気の中、立派な艦装が佇んでいるではありませんか！ 点いている明かりの数も増え、出ていく前よりも明るい雰囲気になりました！

「ビューティフォー」

「早速着けてみてください」

見ているだけでワクワクしてきていたが、着けると言われると困惑してきた。どうやって着けると？ あれ金属でしょ？ どう考えても40キロくらいありそうなんだけど……持ち上げる？

「無理でしょコレ」

手に持つ砲だけならまだしもこれは……こんなに重そうなもの背負えといつて留め

具が無いとかお前ほんとに作業員かあ!? 安全第一つて言葉をご存じない!?

「()を、()です!」

腕に砲を着けられた。

「止めろっ! ……そんなに重くない?」

一体何故と自問自答。答えは簡単なもので、俺の知っている艦娘はみんな艤装を纏っていた。疲労で腕が下がるならまだ分かるが、艤装そのものを重たそうにしている艦娘は居なかった。

つまり俺は今、スチユワートという艦娘になったのだから同じように艤装を纏えるという訳か。

そうと分かれば早速装備してみますかね。

……現実には甘くないらしい。一般的な服装以外のものは身に着けたことがない俺にはどうやって装着するのかがさっぱり理解できず、唸っていたところに妖精さんが手助けしてくれた。着ける手順とかを見て覚えようとしたものの、あつという間に終わってしまったのでさっぱり理解できなかつた。恐るべし妖精パワー。

「似合ってますよ〜」

うんうんといい笑顔で頷く妖精さん。確かに鏡に映る自分の姿は不慣れからくる違

和感は大きく、やはり自分だと思ふことが出来ない。それでも鏡の中には『艦これ』に居てもおかしくは無いんじゃないかと言えらるくらいには艦娘に見える少女が居た。

「右手のそれは単装砲ですう」

そう言われて右手を上げる。重さを感じさせず滑らかな動きをして上がった右手には砲身の二つ付いた奇妙な形の銃が握られていた。

「これって二発同時に発射されるの？」

「そんなことは無いですよ。腰の二つも全部単装砲なのでバラバラに発射できると思えますう」

「じゃあどうやって撃ち分けするんだよ」

「念じれば出来ると思えますよ」

そんなアバウトな。念じればってなんだよ念じればって……しかも思うって……しっかりと切り切つて欲しい。ここでは試し撃ちも出来ないし、腰に着いてる艦装について聞いておいた方がいいかもしれない。

「側面下部に付いてるこれは魚雷ですう」

と一本渡される。鈍く銀色に光る筒、これが魚雷か。軽過ぎず重すぎないちょうどいい重さを感じる。手で持つてるけど大丈夫？

これ落とちやつて大爆発なんて俺は嫌だからね。

「これは？」

気になったのが腰の艤装の右側にある出っ張った部分。そこには単装砲？ とは形の違う砲が一つ付いていた。比較的小さいが長めの砲身、随分上向いてるけど当たるの？ これ。

そう思っていたら妖精さんが教えてくれた。

「それは高角砲ですう」

高角砲？ なんじゃそりや。

いや、形と名前から考えて大きい角度を持つているだろうから、航空機を打ち落とす為の砲か？ 妖精さんに答え合わせをしてもらったら、だいたいあつてるらしい。

「じゃあ背中にあるこのドラム缶？ っぼいのはいったい何なのさ」

そう、背中のコレはいったい何だろう。個人的な予想では燃料タンクと見た。まさか背もたれです休んでくださいなんてことはないだろう。

「それは煙突ですう」

「煙突う!?! なんで？ なんで煙突」

「煙突が無いならどうやって動くんですか？ 第二次世界大戦中の艦は何で動いていたと思ってるんですかあ？」

「あつ……ハイ」

なるほどね。現代の豪華客船だつて煙突が付いてる。当時の技術力で化石燃料を使わずに電気モーターだけで動く艦なんて考えられない。あつたとしたらそれはオーパーツだろう。

だから艦装にも武器だけじゃなくて煙突が必要なのか。水に浮けても進めなきや駄目だもんね。

さて、ここまで艦装について妖精さんとお喋りしたんだ。次にやることと言ったら……

「艦装もあるんだし海に行つてみましょう」

来た。これで俺も海上デビュー「そこで——」ん？ まだ何かあるの？

「大事な話があります」

ちよつと真面目な雰囲気を漂わせた妖精さんはそう言った。

いざ海へ

真面目な雰囲気になった妖精さんはそのまま俺の肩に乗ってきた。

大事な話っていったい何だろうか？　今ここで聞きたい気持ちを抑えつつ、妖精さんに言われた通りに倉庫から出て、案内されるままに進んで海に向かう。

「……」

数歩歩いたところで問題に気付いた。

このまま進んだら俺が今装備してる艦装が一般市民に見られるんじゃない？　という大問題だ。艦装って軍事機密とかに含まれる？

そんな機密とかじゃないにしろ、手に銃のようなものを持つてる上に腰に物々しいのくつつけて、暗くなつた道を辺りを警戒しながら歩いてる人なんてどう考えても不審者じゃない？

俺は警察に事情徴収なんてされたくないんですけど！　警察とか権力を恐れる一般的な臆病な日本人だぞ俺は！

「あのさあ……艦装って何処かに仕舞つたりできないの？　このままだと最悪海に着く

前に刑務所に行くことになりそうなんですけど」

「そこは気にしないでください。人は近くに居ませんし、近くに來たら教えますので」

「索敵能力高すぎない？ やっぱり妖精だけでも深海棲艦に勝てるんじゃないの？ でもバレないというなら堂々と、でもやっぱりコソコソしながら海に向かおうじゃないか。」

カツ カツ ——と歩くペースに合わせてコンクリートと金属製のブーツが接触し高い音を出す。

小気味のいい音を聞きながら進み、ふと良いことを思いついた。俺の大好きなちよつとした悪ふざけを妖精さんにやってやろう。

そう思いついたのでやるだけやってみようと思う。——やることは単純だけど難しい。歩き方を変える。それだけだ。

身体がこんなに可愛いんだから俺の仕草一つで台無しにするのは勿体ない。

今なら他人に見られずに妖精さんに矯正してもらえるチャンスだし、変なことをすることで緊張しているであろう妖精さんをリラククスさせられるかもしれないしで良いことづくめだ。

まずは肩から力を抜き、歩くペースも遅くする。そして無い胸を張って歩幅を狭くする。最後に道路の白線を踏みながら歩くように一直線を歩く。そして――

「あの、妖精さん？　歩き方を少し変えてみたんですけど、変じやないですか？」

これでよい。当然声も変わっているから口調と喋るペース、音量をちよつと変えるだけでまるで別人みたいになるね。……さつきまでが普段の口調だったから違って当然なんだけどね。

やっぱり人をからかったりするのは楽しいなあ！

「ブフツ」

噴き出した、効果アリだな。妖精さんを見ると腹と口を手で押さえている。すつげえ笑ってる。今までの……前の人生を含めて今までで一番笑ってくれた人かもしれない。人じゃないけど。

追撃しようかな？

「どこがおかしな所はありませんでしたか？」

さあどうだ？　……おつとお？　体を震わせている。しばらく見てると震えが治まって笑いを堪えるような顔で俺を見る。

「おかしな所は全部ですう。もう滅茶苦茶ですう」

「そんな……会心の出来だったのに」

「窮屈そうに歩いてるから違和感が凄いですう」なんて言葉を聞きながら歩く。どう補正したら良いかを聞きながら歩いて、続けてれば慣れる筈だと言われた頃には海に出た。

……さて、海に着いたから女の子の歩き方講座はお終いだ。

結局一般行人は居なかつたし、心配した俺がバカみたいじゃん。

「海に着きましたぜ妖精の姉御……で、大事な話とは一体なんのことぞ?」

「まだふざけるんですかあ? 実はここ、日本じゃないんですよ」

「知ってる」

なんだそんなことか。命に係わるような事じゃないのね。でもその情報は確かにすごく大事だ。

「実はここ……スラバヤなんですう」

「どこだよ」

スラバヤ。『艦これ』の中で描写されてた気がするから名前は知ってる。だけど場所は知らないんだよな。

自称一般人未満ポソツの俺にはアメリカ、カナダ、ロシア、オーストラリア、インド、ブラジル、ロンドンしかまともな場所を把握してる国なんて無いんだよ!

マジでどこ？ 地図とか無いの？ 読めるやつ。

「それでですねえ……スラバヤつてこんなんですけど、今から日本の鎮守府に向かって海上を移動してもらおう予定ですよ」

おつ、地図あるじゃん。

うんうん、深海棲艦の影響で消し飛んだ大陸とかは無さそう。見慣れた至つて普通の世界地図だ。

妖精さんの指す現在位置は……遠つ！ ハア!?

「嘘でしょ」

なんだよこれ。ほとんどオーストラリアじゃんこれ。しかも海上を移動つてことは飛行機は禁止つてことか？ 何キロあると思つてんの？ 馬鹿じゃないの？ 狂つてるぜこんなの！ 嘘だと言つてよバーニー。

「嘘じゃないですよ。こっちは大真面目ですよ。そもそも今のあなたパスポートもお金も持つてないじゃないですか。そんな状態でどうやって公共機関を利用するんですか？」

「いや、そこはその……妖精さんの不思議パワーでフワツツて」

「私たち妖精にも出来ることと出来ないことがありますよ」

御尤もで。そんな都合のいいことが出来るなら今頃テレポートとかして日本に居る

だろう。

……艦装を使って海上を移動できるなら理論上は日本に帰ることは出来るのか。だけれどこのとんでもない距離を一日二日で易々と移動しきれるとは到底思えない。

艦装を装備している状態で海上をどれくらいの速さで移動できるかが分からない。艦娘の進む速さを教えてくれよ妖精さん。

「艦娘の進むスピードってほしいどれくらいなの？」

「……どのくらいのパワーで海上を移動するかで変わります。例えば全力で移動するなら自動車より速く動けるでしょうし、少々遅くなりますが無理せずに移動することも出来ますよ。そこらへんは艦娘個人の艦種と匙加減だと思えます」

自動車と同じくらいとか十分早くない？　っていうか求めていた答えと違う！　俺は時速が知りたかったんだよ。自動車並みって言っても幅が大きくて何とも言えないんだよ。

艦装で移動するとき今の時速は何キロか訊いてみよう。そうすれば解決する。

……あとはコンパスがあれば日本へ行くことが出来るんじゃないか？

何はともあれ、まずは――

「それじゃあ、海に向かって進んでください。大丈夫です！　今のあなたは艦装を纏った艦娘！　ちゃんと海の上に立ってる筈ですよ！」

いざ海へ！

「海の上に立ってる」

そして海の上を進める。

感動的だ。前世じゃあまず体験できないよなこんなこと。何に捕まるでもなく海の上立ち、フローリングの上を靴下で滑るような感覚で前に進めるなんて。

移動についてはすぐにコツを掴めた。海に立つてからもの数分といったところだろう。まるで初めから動く方法を知っていたんじゃないかってくらいすぐに。恐ろしくも感じるが、大きな興奮の前じゃあ塵芥と同じよお！

……ただ波で結構揺れるのは三半規管に悪いと思った。

サーフィンに慣れてる人は艦娘の適性があると思った。

知らんけど。

「気持ちいいねえ、風を感じますよ」

「そうですねえ」

俺が呟くと妖精さんが相槌を打ってくる。海に出た直後に左へ行けと言われたから左へ進んでいる。そちらへ顔を向けると電気の点いた建物が沢山見える。反対側を向くと灯り一つない真つ暗闇が広がっていた。……海に出てから何分経った？ 今はどっちに向かつてるんだ？

「時計とコンパスってある？ あと今の時速どれくらい？」

「時計もコンパスもありますよ。時速は今……55キロメートルくらいですう」

「えっ」

意外と速かった。でも耳元で風が思ったより鳴ってない……いや、なんか違うな。鳴っていないんじゃないやなくて他の音がよく聞こえるようになったのかな？

これも艀装の効果かと思つて訊いてみたところやっぱり艀装の効果らしい。艦である以上通信機は必要でしょう？ と言われた。そんなあ、それじゃあこれから独り言とか呟けないじゃん。全部傍受されちゃう。

と、それは置いといてだ。今俺は「普通に」散歩とかと変わらないように動いてるつもりなんだよね。それで時速50キロメートルか……やっぱり艦娘つて凄いな。

「地図と灯り貸して」

「はいどうぞお」

灯りまで普通に出てきた。

どっから出してんのそれ？ 妖精さんより大きいよね？ ドラえ○んじやないんだから四次元に繋がるポツケとか止めてくれない？

「うーん。一日当たり10時間とすると、日本までざっくり……疲労やトラブルも考えると……?」

俺は日本まで40日もあれば行けるといった答えを出した。

……そりゃあ一日二日では辿り着かないし、寝る場所とかも必要になってくるし、怖いから出来るだけ沖には出たくないし。陸に近い場所を移動し続ける安定を採ったルートだと思う。正直かなり厳しいんじゃないかと思うが、目標を立てた今やることは一つ。突き進むだけだ！ 大和魂を見せてやる!!

それから2時間後、俺は呟いた。

「腹減った……」

単艦の駆逐艦

腹が減っては戦は出来ぬ。

昔の偉い人もそう言ってる。だから俺が「腹が減った」と訴えたことは何もおかしいことでは無い。

前世男が妖精相手になんてことを言ってるんだ。プライドは無いのかと言われそうだけどそんなモノは常識と一緒に母さんの腹の中に置いてきた。今更取りに行こうにも腹パンしたって出てこないしやったらやっただ家に鬼が現れることは想像に難くない。そもそも見た目は別人だしなあ……傷害罪？

溜息を一つ吐く。やっぱ溜息増えてるよね。言ってしまったものは仕方がない。この妖精さんが風と波の音を聴いていて俺の呟きが聞こえていないことを普段は信じてすらない神に祈ろうじゃないか。

「お腹空いてるんですかあ？ でしたらもう少ししたところの港で陸に上がってください」

神などいない。バツチリ聞いてんじやねえか！ つていうか陸に上がって何をやる気だこの妖精さんは。俺は金なんて持ってないんだが……流石にゴミ箱から残飯を漁

るなんて惨めなことはこの体に失礼極まるのでやりたくはないし、多分極限状態じゃない限りは理性が邪魔で出来ないだろう。

そんなこんなで妖精さんが言っていたであろう港に辿り着く。海の上を滑るように動くのも良いけどやっぱり自分の脚で歩くのも良いねえ。しかも非日常を経験しているから余計に気分が良い。

それにしてももう真つ暗だ。街灯と遠くの街くらいしか電気は点いていない。ここで妖精さんは一体何を――

「あそこのコンテナですう」

「……」

まじか。やっぱりグレムリンじゃねえかなこの妖精さんは。悪気も無さそうに泥棒行為しようとしてる……正直ドン引きだ。

艦装で撃つても良いんじゃないかな。妖精は死んでも一回休みだけって聞いたことがああるし。

いや待てよ、そもそもこの妖精は艦装を作る時点でいろいろ盗ってたように見えなくもない。あの時は私物だろうと思ってたけど今の態度からして怪しくなってきたぞ。仮にそうだとすると俺は盗品背負ってるってことになるのか？ ヤバくね？ 艦娘じゃなくて海賊だよね今の俺。指名手配とかされないよね？

「だ、大丈夫ですう。一人分無くなっても誤差の内……ですう」

声震えてんじゃん。ダメじゃん。大丈夫って言う奴ほど駄目だって昔誰かに言われたぞ俺は。

溜息を吐く。いい気分から急降下、一気に何とも言えない気分になってしまった。犯罪の片棒を担がされたら誰だってこうなるのは当然だと思う。

兎に角、チキンハートの俺には犯罪なんて犯せない。代替案を見つけなければ……「魚を捕るとか深海棲艦の拠点を探して盗む……とかじゃダメなの？」

すると妖精さんはうーんと悩み始める。深海棲艦の拠点から盗むというのは俺の中では一番いい案だと思う。敵の資源を使えるならそれはとてもいいことだ。良心も痛まないしね。

「確かにそれが出来れば一番良いんですけどお、今日艦娘として目覚めたばかりのあなた一人で深海棲艦の拠点を制圧出来ますか？ まともに艦装の撃ち方も知らないあなただ」

と言われてしまった。艦装の使い方は知らないけどそれはそれとして、拠点を制圧？

この妖精は一体何を勘違いしているんだろう。俺は盗むとは言ったが交戦するなんて一言も言っていないんだが？

目の前の悪魔妖精さんが言う「人から盗め」と。

頭の中の過激派ヤベが言う「敵を殺せ」と。

……だから俺は頭の中チキンの中立派の言葉に従い「敵から盗んでさっさと逃げる」という行動を取ろうとした。

差し当たつての問題は深海棲艦の拠点の場所を俺が知らないことだろう。これで場所は海深海の底ですなんて言われたら予定が根元からひっくり返る。

仮に陸上にあつたとしても余程警備がザルじゃない限りは盗みに行けるはずがない。俺はルパンじゃないから。

「なるようになるか。どうせ予定なんて立てるだけ立てて何もしないのがオチだ」

「それってただ無計画なだけじゃ……」

「うるさい」

肩を払って妖精さんを落とそうとする。……いつの間に艤装に座ってんだ。そしてお茶啜お茶つてんじやねえよ、俺にもくれよおい。

さてどうする。結局何もせずに海へ出た。一日間何も食べていないというのは飽食の時代の日本人だった俺には経験経験が無い事だ。足の下には水がこれでもかとおるから喉喉が

「渴くんだよなあ」

それでも空腹も喉の渇きもまだ我慢できるレベルだ。

艦娘になったことでこの辺の忍耐力が向上したと考えるべきか？

でも流石に海水を飲むなんて馬鹿はやらない。汚いだろうし、塩分濃度が高すぎて死ぬって聞いたことがある。

せめて鍋かフライパンでもあれば適当な無人島見つけてもらってワンチャン野宿があるだろうけどサバイバル初心者の俺が出来ることなんてたかが知れてる。

「泥棒か？ やはり倉庫に盗みに入るしかないのか？ あー駄目だ。眠いし喉渇いたしでまともに考えられない。ポカエリアスって凄かったんだなあ……ん？」

遠くに何かが見える。緑色の光が二つ見えるな、漁船？ いや、深海棲艦が居る世界だ。のうのうと一隻だけで漁なんて出来る筈がない。じゃあアレはまさか？

「おい妖精さん！ 起きろ起きろ」

「うぐ……いきなり叩かな「アレは何？」……深海棲艦!? ど、どどどとど、どうしますう!?」

叩いて起こして確認させたらやっぱり深海棲艦だったらしい。つていうかすつげえ動揺してんじゃない。自分より動揺してるやつ見ると逆に落ち着くって本当だったのか。

「俺が聞きてーわ。……アレって俺でも倒せる？ それとも逃げる？」

見た感じ緑の点は二つ。隻眼が二つとか潜水してる他のが居ますとかじゃない限りは同数だし、戦つてみたいよなあ？ 折角艦装なんて戦う手段があるのに使わないなんて勿体なくない？ ああヤバイ。考えてたらテンション上がってきちゃったじゃんか。「多分大丈夫……ですう」

多分だろうと大丈夫ってことは一方的にやられるってことはなさそうかな？ じゃあいざとなったら逃げられるって訳。

「じゃあ行こうか」

「ええ……」

突撃イーターツ！

遠くに見えた緑の光。それは駆逐イ級の目の光だった。

そんな駆逐イ級は俺でも知ってる『艦これ』のマスコット(?)だ。愛すべき雑魚だった筈だ。

だけど……

「やけに強いなオイ」

右手の砲を撃つ。当たってると思うんだけどなあ。外した時は小さいけど水柱上がったし。

魚雷の発射の仕方が分からないから左手で魚雷を掴んで投げる……手前に落ちた。全く当たるとは気がしない。腰に着いてる艦装の攻撃もだ。手の艦装が一番当てやすい。だけど当たっても効果が薄いとかなんだこれは、クソゲーか？

しかもやけに賢いぞこいつ。距離が空いたら撃ってきて、近づいたら噛みついて来る。絶対に一番最初に出てくるようなヤツがする行動とは思えねえぞクソ！ バカみたいと同じ行動ばかりしてたらいいのに。

「これが命のやり取りって？ やってられるか！」

逃げよう。最後に一撃食らわせたなら全力で逃げよう。死んだら終わりだ……左手に魚雷を持って

「これでも喰ら——居ない？」

どこだ？ ヤツはどこにいる？ 上は無いだろうし……

「下か!？」

「後ろですうー!？」

下を向きつつ振り返る。視界の上にヤツの影を捉えた。口を開けているのだろう、白い歯の縁の中は真っ暗だ。サイズがサイズだけに丸呑みだろう。ああ、俺はここで死ぬ

「クソがああああああ！」

残りの二本の魚雷をぶん投げる。まさかこの距離では外すまい。案の定ヤツは頭とその他の二つになって吹き飛んだ。片方は俺と一緒に。

「ぐはッ！」

衝撃！ 視界がブレて一瞬何も考えられなくなったと判断したのはこの数瞬後で、その時俺は空中を舞っていた。

息が出来ない。めっちゃ痛い。

やけにゆっくり流れた行く景色を見ながらなんとなく、ありふれた感想を思い浮かべていた。

海面に背中から叩きつけられる。背骨が折れたんじゃないかって思うぐらい痛い。艤装の思わぬ欠点だ。

近くには見事に半分くらいになったイ級が浮かんでいる。ぶつかつた時は凄まじい衝撃だったからさぞ重たいのだろうと思つてただけど、なんで沈まないの？

立ち上がり呼吸を整える。聞こえるのは自分の荒い息と早すぎる鼓動。心臓が爆発していいか心配になってくるくらい跳ね回っている。

動き過ぎたからか、生まれて初めて命のやり取りをした緊張と興奮、恐怖からか？

それとも勝利したことによる喜びか。分からないが分かることがある。心臓とトリッ
プした頭はまだ落ち着いていないということだけは分かる。

「ヘッ、やってやったぜ。ざまあみろ」

見下しながらそう言う。さっきまで鬱陶しいくらい元気だったイ級は今、物言わぬ塊
になつてゐる。

近づいてみても動かない。……死んでいるのか。せめて歯の一本くらいは貫つて
いつても文句は言われまいだろう。

歯を抜く。掌以上あるそれは、何度か蹴るまではびくともしない程に力強かった。逆
に、抜くときに触れた歯茎は柔らかく、そして冷たかった。

深海棲艦という不気味な存在を、所詮敵だからを侮っていたのかもしれない。
気持ち悪くてちよつと吐きそうになつた。

休息

「あーッ!? もうっ! 無茶しすぎですう!」

いきなり妖精さんが目の前に現れて騒ぎ立てる。俺は今まで妖精さんがどこにいたかを知っているから悪いとは思わない。この妖精さんは俺が砲を駆逐イ級に撃った後に艀装のハッチ? のような場所に入っただけから答えは分かり切っている。

無茶のし過ぎ? 果たしてそうだろうか? 受けた攻撃はたった一発。最後に一緒に吹っ飛んだときくらいだと思う。目の前でまだぶんすか! と怒っている妖精さんに適当に相槌を打って手を振ろうとして――

「あーハイハイ分かってる分かって――ッ!」

左腕に激痛が走る。腕を見ると袖が破れていて腕は血だらけ、深紅のセーラー服には血が黒いシミを作っていた。なんで今まで気づかなかつたんだろう。アドレナリンの力つてすげえな。この傷じゃあ妖精さんもそりゃあ怒るわな。

「ほら見た事かですう! 近くの港に行きますよ! しっかり休まないとすぐに死んじゃいますよお!」

人なんて死ぬときはあっさり死ぬかしぶとく生き残るかのどちらかだと思う。そし

て俺はあっさり逝く方だろうから、この妖精さんの言ってることは多分正しい。

そしてやっぱり倉庫に行くことは確定のようで、妖精さんは騒ぎ続けている。

確かに前世でも経験したことが無いレベルで出血してるし、処置しないとマズイだろう。それに飲まず食わずも辛すぎるし、この際にしっかりと休んでおきたい。……怪我したくらいで簡単に意見をひっくり返す俺は意志が弱いのだろうか。

もう一度イ級を見る。歯が一本抜けてちよつと間抜けな雰囲気を漂わせているものの、先程同様ピクリとも動かずに波に揺られている。

死体の処置について妖精さんは何も言わなかった。このまま魚や鳥に食べられるのか、それとも消えるのか、気になるところだったけれども、今はそれよりも大事なことがあるからそのまま放置した。

「難しいなあ……」

本当に儘ならないと思う。ゲームの中じゃあ一番の雑魚だった筈なのに、ゲームじゃなくなったらこれか。他のイロハ級、鬼や姫はこれ以上？ だったら人間、いや艦娘って規格外も良いところだろう。俺も仲間入りしてしまった訳だがイ級に苦戦するなら落ちこぼれもいいところじゃないか？

そう考えながら、妖精さんに言われた港へ向かう。港までの間に深海棲艦から襲われなかったのは夜で見えなかったからに他ならないだろう。

「知らない天井だ」

お約束を呟いた後に起き上がる。やってみたかったんだよねコレ。

この倉庫に着いた後は忙しかった。艤装を外して服と一緒に修繕、弾や燃料などの補給、食事と睡眠。この間僅か20分だ。因みに俺がしたことは艤装を外して服を脱ぎ、飯を食べて寝ただけである。ほとんど妖精さんがやってくれた。俺をダメにする気かな？

そして俺は今現在スポブラにスパッツという通報待ったなしの恰好……ではなくちやんと服を着ている。一番最初に服を直してもらった。いくら何でもあんな格好で寝るのはありえない。

「あつ起きましたかあ？ 体の調子はどうですかあ？」

妖精さんが話しかけてきた。腕もまだ痛むが昨日ほどではない。昨日は寝る前から何までお世話になった。お礼を言わねばなるまい。

「あー……昨日は助かったよ。ありがとう」

「無事なら何よりですよ、あ、これ食べ物ですよ」

そんなことを言う妖精さんは袋を持っている。……ん？ 昨日の食べ物といいそれといい、何処から持って来たんだ？ やっぱり泥棒？

「ちゃんと廃棄されたやつですから安心してください。完全にダメになる直前に採って来たので大丈夫ですよ」

絶対大丈夫じゃないヤツだ。海外と日本のダメの基準は違い過ぎるってテレビで見たような気がする。まあ食べるけど。それで腹痛を引き起こして痛い目にあって初めて俺は学習する。それでしばらくすると忘れるまでがワンセットだ。

「漁ったならセーフ……か？ 泥棒より良いけど……」

「つべこべ言わない！ 文句あるなら食べないでください！ あと普段から少しでも女の子らしい言葉遣いをしてください！」

確かにそれもそうだ。文句があるなら自分で調達してこいって話で……口調はうん、猫被るのは慣れてるし、そうそうボロは出さないだろうよ。

俺としてはそんなことより侵入するなら廃墟にしてほしかった。明らかに誰か使ってますってところで一晩過ごせたのはちゃんと休めたと同時に怖くて仕方がない。こちらら元日本人の一般人だぞ？ 不法侵入で捕まりたくはないんだよね。

まあ、これらのことも日本ではアウトでも海外なら案外セーフってこともあり得るのか？ 日本の法律も良くわからないのに海外の法律を知ってるわけがないが。

「まあ食べたら直ぐに出るからいいか。妖精さん、その食べ物頂戴」

「これの他にも食べ物がありましたのでえ、しばらくは持つと思います。頑張ってく

ださい」

……まだ移動から半日しか経ってないんだよなあ。こんなんで日本まで帰れるんだろうか。妖精さんの後ろにある袋は大きい。菓子パンなら六つくらい入りそうだな。一日、いや二日か？

地図を見る。今いる場所は……だつたらまずはジャカルタを目指そう。そしてブルネイ、フィリピン、台湾、そして日本だ。だいたい六千キロメートルと見た！ 四十日も要らねえ！ 二十日でクリアしてやるぜ！

「他に何か必要な物はありませんかあ？ 簡単な物なら用意できますよお？」

一体「何が」簡単なら用意出来るんですかね……盗みの難易度かもしれない。この妖精さんならやりかねない。廃棄処分とはいえ食べ物を盗ってきたから無いとは言い切れない。

「じゃあナイフとフライパンと水筒をくれ」

機装があるから動物は獲れるだろうし火も点けられるだろう。だから俺は調理器具を選んだ。水は煮沸出来るし、生肉を食べることもなくなるだろう。素人だから衛生の管理は大事だという事しか分からない。サバイバルの動画を見ても出来るようにはならないんだよ。

分かりましたあなんて言つてどこかへ行つてしまふ妖精さんを見送る。……俺も妖

精さんにばかり悪事を働かせる訳にはいか。もう既にやらかした後だ、今更善人みたいなこと言ってる場合じゃない。

倉庫の外に出る。雲が張っていて薄暗い。朝方か夕方か判断しづらい空をしていた。通行人からチラチラ見られている。……やつぱり外国だろうとセーラー服は珍しいんだろう。目当ての物を探して港をふらつく。

誰からも話しかけられないのは良かった。日本語、と多分この体は英語でも問題は無いだろう。しかしここはインドネシア。言語が通じるかわからない上にポツチ歴の長い俺には外国人の相手は難しすぎる。

「ここにもない……あそこには……あつた」

目当てのものを見つけたので場所を覚えて倉庫に戻る。きつと妖精さんが碌でもない方法で入手してきた三つの道具を持って待っているだろう。

「日本に行く為なら泥棒だつてやってやろうじゃねえか」

そう呟いた俺の顔はきつと、前世で友達から「悪い人がしそうな顔」と評価された顔をしているんだろう。今の顔は前世と違って自己補正があっても整ってると思うしそうそう酷い評価はされないだろう……

なんてことを考えながら倉庫に戻る。

——とある一般人たちの会話

「おい、お前見ろよ。あの子すつげえ可愛くね？」

「確かにな。お前の可愛いダリアが霞んじやうね」

「ぶつ殺されてえか!？」

「まあ落ち着け。俺が彼女のハートを掴んでくるのを見てろよ——ツ!？」

「な、なんだあの顔……やつべえ……」

「やつぱり止めるよ……ありやあテロリストの顔だ。絶対まともじゃない」

「ああそうしておけ。……残念だったな。そう簡単にいい女は見つからねえって話だ」

予想通り倉庫には妖精さんが戻ってきてた。三つの道具もある。ホントにどうやって調達してきたんだろうね？　せめて廃材からのリサイクルであって欲しい。何であれ希望を叶えてくれた妖精さんにはお礼を言うべきであろう。

「ありがとう妖精さん。……ところで外には普通に人が居るけどどうやって海に出るつもり？　昨日みたいに人避けて行けるかな？」

「それはやってみないと分からないですう」

そりやそうか。もしかしたら案外コスプレですくでいけるかもしれない。

「そうと決まれば行くか。なるようになるだろう」

いざ、二度目の海へ向かって……

悪い人 善い人

「もうそろそろしたら行けますう」

肩の妖精さんがそう言う。視線の先では人が通り過ぎていったところだ。今まで誰からも見つかっていないことが分かるのでその言葉は非常に心強い。きつと今回も大丈夫だろう。

「3、2、1……今っ！」

細道から飛び出して反対側の細道に飛び込む。おかしいな、艦娘はスパイじゃなかったと思うんだけど。なんで海に着く前にかこんなに疲れなきやいけないんだろうな？

その原因の1つ目は移動に艦装がかなり邪魔だということ。リュックサクサクなんて目じゃない大きさをしてるから狭い路地での行動でストレスしか生み出さない。

「そろそろ海に出るか。おっアレだ。妖精さん。アレが俺が盗ろうとしていた物だけど、アレ盗っても大丈夫？ 見つかるとかそっちの意味で」

「アレはかなり厳しいと思います。絶対に悪目立ちするので止めておいた方がいいです。……代わりにアレはどうですか？」

そう妖精さんが指さす先には一軒の家。古そうに見える壁には釣り竿が立てかけられている。……確かに釣り竿ならアレと同じことが出来る。なんで先に釣り竿って答えがでなかったんだろう。

2つ目の原因はたつた今なくなった。

最初は漁船から網を盗もうかと考えていたんだけど、取り外しとか持ち運びの点で問題が多かった。一度冷静になるとガバガバさに気づく。俺はアホだ。

代わりに釣竿を盗むことになった。

「それだ。……ごめんなさい釣り人さん。何かあつたら恨んでくれ。」

釣り竿を手取る。前世から通して初めて赤の他人の物を盗んだ。

凄く申し訳ない気持ちで吐きそうになる。

気分が悪い。このままだと自然体で道に出ることが出来ない。人の物を盗む覚悟も無い奴が盗んじやいけないってことか。

変に怪しい挙動をするから怪しまれるのであって、堂々と自然体でいたら精々「変わった服装」くらいにしか思われなと思う。だからしつかりしないとイケないのに……

「無理だ戻そう。今ならまだバレてない」

これは持つていつてはいけない。絶対に俺の心が壊れる。仲が良い奴の筆箱から何

かを取ったり（授業前には返すし俺も取られるからドロ）するのは訳が違う。これはやってはいけない、返そう。魚は諦めて海鳥でも撃ち落とそう。

来た道を引き返して先程の家の裏に着いた。近くには誰もいないらしく、言われた通り人っ子一人居ない。

「ごめんなさい。許してください……」

元のように釣竿を立てかける。誰も言わなきや気が付かないだろう。

そして今度こそ海へ向かう為に脚を進めて――

『おお!? こんなところで何をしている?』

「ツフエア!」

近くから声が聞こえた。

ビツクリして振り返る。さっきの家の小さい窓からハゲのおじさんがこちらを見ている。

人!! 居なかった筈じゃ!? ヤバい、見られた!? 通報される?

……終わった。

『おお、済まないねえお嬢ちゃん。驚かせるつもりは無かったんだ』

え? 何を言ってるか分か……る。多分英語だこれ。この体は英語の聞き取りは完

壁みたいだからきつと話すことも出来るんじゃないだろうか。

「ソーリー……んっん、……『ごめんなさい許してください!』」

やっぱり英語喋れるよ。まずは謝ろう。例えこのおじさんが俺の泥棒に気付いてなかったとしても全面的に俺が悪いのは明らかだ。

でもなんだろう、頭の中では日本語なのに口からは英語が飛び出てる感じ。……深く考えてはいけないう。この体の能力的なものかもしれない。きつとこの体で英語のリスニングテストを受けたらほぼ百パーセントで百点を取れるだろうという事は分かった。

目の前のおじさんは驚いたような顔をしている。その視線は腰の臙装に向かっていく。

『あー……、立ち話は何だから入ってくれ。簡単だがもてなそう』

あらやだ優しい。でも釣り竿については全くノータッチ? 本当に気が付いていないのか、それとも別の思惑があるのか? ダメだ分かん。いつそ逃げるか? でももてなすって言うてる。

うくん、なるようになれ!

『じゃあ、お邪魔します……!』

誘われるように裏口から家の中に入った、入ってしまった。最悪の場合はやっぱり盗

んだことに怒っていて……ってことはないな。目の前のおじさんはこちらに全く悪意のない顔を向けている。これはアレだ。田舎のお年寄りみたいなヤツだ。善意で出てくるタイプの人間だ。根暗な俺とはおお違い。

おじさんがカップを二つ持ってきた。受け取ると中には黒い液体が入っている。

『美味しいです。ありがとうございます』

アイスコーヒーにお礼を言つて椅子に……座れない。艦装が邪魔だ。

『それは艦装だったかな？ 君は艦娘と呼ばれる者だろう？』

『え、ええそうみたいです』

(そんなに簡単に知らない人に喋っちゃダメですう！)

なんか聞こえるんだけど……もしかして妖精さん？ 直接脳内に話しかけてくると

か怖いじゃん。大丈夫？ 脳みそが過負荷でボンツ！ てならない？

(なんで？ やっぱり軍事機密みたいな感じ？ うわあ、脳で会話出来てる感じがする。

気持ち悪い)

妖精さんからナニカサレタようで、テレパシーのような会話が出来るようになってることが判明したが、おじさんにはきつと聞こえてはいないだろうから沈黙しているように取られる訳で。

『おお！ やはり艦娘かね。実は私の甥がアメリカで提督をやっていてね、私は艦娘に

ついてそこらの一般人よりかは知っているつもりさ。詳しい事は多分、機密なんだろうけどね』

そう話しかけてきた。笑ってウインクを飛ばしてくるおじさんは今まで見たことがないタイプで、なんかカワイイと思えてしまう。

しかも話の内容は期待を良い意味で外れていた。どうでもいい世間話ではなく、釣竿の件で怒られることでもない。アメリカの提督の親戚だったとは驚きだ。更に今はバカンス中でここに居るのだと言う。

……これはこのおじさんについていれば帰省と共にアメリカへ行けるんじゃないか？ いや、パスポートは無いから結局移動は自力か。

そんなこんなで会話は弾んだ。因みにこのおじさんには妖精さんは見えていないらしく、妖精さんがクツキーを持ち上げたらポルターガイストの正体を知ってしまったと笑っていた。

彼は、甥は提督をしていて大変そうだが会ったときはいつも笑顔を見せてくれるんだとか。

俺は、何が何でも日本に行かなければならないが移動手段がないと大袈裟に嘆いて見せた。

『ああ、久しぶりに楽しい時間になったよ。ありがとう』

その言葉で世間話は終わりに近づいたことを知る。壁の時計は一時間近く進んでいた。

『ええ、こちらこそありがとうございます』

『ああそうだ、最後に聞きたいことが二つあるんだが、良いかな?』

一二つ? 一つは心当たりしかないけどもう一つが分からんぞ。

『ええ、答えられる範囲で可能な限り答えますよ』

『じゃあ教えてくれ。君が私が声を掛ける前にあんなところで何をしていたんだ?』

来たか。……正直に話そう。このおじさんはいい人だからちゃんと話せば許してくれるだろう。ああクソつ。なんで俺はこんな打算的な考えをしているんだろう。本当に嫌になる。

『壁に掛けられていた釣り竿を盗もうとしました。いえ、盗んだんです。それを返したところであなたに声を掛けられました。……ごめんなさい』

そう言うとおじさんにはっこりと笑った。

『そうか、盗ってしまったのか』

おじさんはそうかそうかと言いながら頷くだけだ。

『何故、怒らないんですか?』

『うむ、確かに君は悪いことをした。だがちゃんと良心に従って返して来ただろう。そ

れにな……』

おじさんは黒いケースを開ける。中には釣竿が沢山入っていた。

『あの釣竿はもう使ってなくてね。だから君が持つて行っても私は怒らないよ』

涙が出そうだった。この人はなんでこんなに優しいのだろうか。

『でしたら、私はあの釣り竿を貰っていきます。……本当に良いんですか？』

『勿論だとも。誰にも使ってもらえないより釣り竿も喜ぶだろう。大分ボロボロだけど、大事に使ってやってくれ。』

『はい、大事に使います。……それと私からも一つ訊いても良いですか？』

『なんだね？』

『貴方の名前を伺っても？』

この親切なおじさんの名前は絶対に聴いておかねばならない。いつかアメリカへ行ったときに彼の甥に伝えるために、絶対に。

おじさんは笑みを絶やさずに答えた。

『私はアラン・グレンだ。それと、私の聞きたいことのもう一つ、貴女の名前は？お嬢さん』

『私はスチュワートと名乗っています。これ以上はアランさんが言うには軍事機密らしいのでこれ以上は言えません』

『おや、意地悪なお嬢さんだ』

『私の秘密、軍事機密みたいですけど暴いてみますか？』

『ハツハツハツ』

楽しい時間はあつという間。流星に全く移動しないのはよろしくない。という訳でアランさんに別れを告げる。

『じゃあコレ、貰っていきますよ。大事に使わせていただきます』

『ああ、無事に日本へ行けることを神に祈っているよ』

『ではまたいつか会いましょう』

表の出口から見送られる。角を曲がるまで手を振っていたアランさんの優しさを無駄にしないよう、何が何でも日本へ帰らなくてはいけない。犯罪もこれきりだ。

「じゃあ妖精さん、行こうか」

「やつとですかあ？ 待ちくたびれましたよお……」

海に向かう足取りは軽かった。

砲撃？

朝日が眩しい。

「なんだよ……もう少し寝させてくれよ」

移動から五日目、俺は無人島に居た。地図でいうところのブルネイの近くにいらしい。漂流物のゴミ……布切れを見つけたのでそれを布団代わりにして寝ていたが、太陽に邪魔された為起きざるを得ない。昨日の夜に点けた火は消えていて、微かな温かさを放つ石と灰だけが残っている。

俺はノロノロと起き上がり支度を始める。ただ寝ていても港ではないので妖精さんは食べ物を持つこない。自分でどうにかするしかない。

艀装とは別の大荷物、背囊から釣り竿を取り出す。アランさんから貰った宝物である。あとは小分けにしておいた弾薬。これは火を点けるのに非常に便利だと知った。

何せ乾いた木を集めてちよつと油を付けてそれに向かつて発砲するだけだ。弾の温度で勝手に火が付くのでマツチよりも余程派手に燃える……炸裂するから危険だけどころかかかる時間はかなり短縮されるから無駄遣いでは無いはずだ。

「辛いなあ……」

独り言が漏れる。一人暮らしはしていたから独りで居ることには慣れていたと思っていたがどうやらそんなことはなく、妖精さんが居なかつたら相当危なかつた。何せずつと移動しているので娯楽なんて在りはしない。その上変わり映えのしない海が広がるばかり。市街地とは違って目移りのしようもないので退屈を極めるのだ。

五日目にして俺の精神は大分参っている。これでまだ予定の四分の一だとか考えたくない。

そんな俺の現在の唯一の楽しみがサバイバルである。五日もすれば慣れてきた頃合いで、あれやこれやと色々な罫のことを考えてたりすると時間が経ってたりするので結構気に入った時間の潰し方だと思っている。因みにあれから港には寄っていない。

つまり弾薬が補給できないということである。かなりピンチなのだが火をマツチも無しに点けるのは俺では恐らく不可能だろう。だから発砲式着火による弾薬の消費は所謂コラテラルダメージというやつだ。

この調子で行くと確実に日本到着の前に弾薬が底を突き、生肉を食すことになり最悪詰むので絶対に港に立ち寄る必要があると考えている。

「おっ？」

アレンさんから貰った釣り竿を海上で垂らすこと数分、手ごたえを感じたから竿に力を込める。

これであろうやく魚一匹。でも到底満足できないからこの前は魚を餌に海鳥を捕まえた。当然魚よりも大きいので空腹は凌げるからこれからも続けていきたい。しかし味はもう酷いもので、妖精さんが持つてきた香辛料が無かったら栄養失調だった。

まあ、アレンさんが居なかつたら今頃もどこの港で泥棒しながら生活していたに違いない。そんなことをしていたら俺のゼラチンメンタルは音を立てて崩れ去るのでアレンさんがいて良かったと心の底から感謝している。

魚よりもゴミの方が釣れる呪いの装備的なオブジェクトだったとしてもだ。きつと俺の使い方と釣りのスキルが足りないからゴミばかり釣れるんだ。

……海面から姿を現した魚は昨日より小さかったのでこれも鳥の餌コースだ。もう一度竿を垂らす。

「何処かの鎮守府の艦娘から見つけてもらえないだろうか」

「ブルネイ泊地が近くにあるみたいですねえ。艦娘が居れば補給とかの期待も出来るんじゃないですか?」

確かに。艦娘が沢山いるであろう泊地ならきつと俺を見つけてくれるだろうし、声を掛けるなら気付いてもらえるだろう。

目的地はブルネイ泊地。今日はそこまで移動することを決めてから竿を上げて無人島に撤収する。結局あのは鳥も魚も来なかった。仕方がないので痛んでしまう前に

食べた。もはや毒があっても気にしてられない。カサゴやフグっぽいのは鳥の餌だし、他の魚だつて捌く技術なんて無いし、一応火は通すから大丈夫だろう……多分。

魚をくれてやっても尚虫が鳴る自分の腹を押さえながら移動する。缶詰を使つても良かったんだが限界まで取つておこう……出し渋つて抱え落ちはもつと嫌だから今日の夜に食べよう。

「……なんか来るな」

遠くに黒い点が見えた。アレは駆逐イ級だろう。

荷物から以前引き抜いてきたイ級の歯を取り出す。これがそれなりにサイズがあり軽くて丈夫という優れものだった為削つて持ちやすくしてみた。スコップの先端みたいな形をしているので穴を掘つたりするのも使えたりする。

敵から剥ぎ取つて加工して戦うとか某ハンティングゲームを思い出して苦笑する。これから人生二度目の命のやり取りがあるかもしれないというのに何を考へているんだ。緊張で固まり動けないよりは余程いいだろう。

「聞いたところによるとイ級って食べられるそうなんですよねえ、刺身とかで」

「はっ、マジ!?!」

緊張を解す為なのかそれともただの独り言か、妖精さんが聞き捨てならないことを口

にした。

なんとあのデカブツは食べられるらしい。もし本当だったら俺の食糧事情はほとんど解決したと言っても過言ではない。これは精神衛生の為に何が何でも勝利して、弱肉強食の掟に従いイ級を食さねばならん！

味がちよつと気になるっていう理由もあるし。

こちらへ向かって来るイ級は俺が目的ではなかったらしく、ある程度の距離まで近づいた時に初めて気が付いたような反応をするくらいにノロマさだった。

そして今は俺がイ級と睨みあっている。

距離は遠く、イ級も近づいてこない。前回の経験からイ級はこのままの距離を維持すると砲撃を始めるだろうし、隙を見つけてこちらから近づき目に歯を突き立てるか。いや難しい。そんなに上手く事は運ばれないのを今までの人生で学んでこなかったのか俺は？捕らぬ狸のなんとやらだ。

だったら近づいて魚雷をぶつけた方が効果があるだろう。当たり所によっては二発で倒せたんだ。今度は三本くらいやれば倒せ——

ドン——

考え事の途中で攻撃するのはルールで禁止じゃないの？

右に避けて砲を撃つ。自分が先程まで居たところに水柱が上がる。俺の撃った砲は当たってはいるがあまり効いていないようだ。この砲は何なの？ 牽制用のゴム銃じゃないんだしもう少しくらい痛がってくれよ……そんなに気にされないところのプレッシャーが凄いなだよ。

砲は効果が薄いと踏んで魚雷で仕留める方針に変更する。でも遠距離から当たる気がしないし、どうにかして隙を見つけなければならぬ……

「でもどうすりゃ良いんだよ……」

「砲の使い方は一つじゃないですよ」

「まだなんかあるの？」

別の使い方とは？ でもきつと妖精さんは俺が自分で気づけるように教えて答えを言わなかったに違いない。さあ考えろ砲の別の使い方……うおっ危ねっ！

「だから撃つてくんじゃねー！」

怒りに任せて二、三発くらい砲を撃つ。やはり効果はなさそうだ。

イ級が近づいてきたから後退する。距離を詰められると噛みつきという即死級攻撃されるとか溜まったもんじゃやない。この如何にも貧弱そうな体では体当たりでも致命傷になりかねない。

さて、まずは艦娘と軍艦を比較して艦娘の優れているであろう点を挙げていこう。幸しいイ級は俺が攻撃しなくなつて回避に徹していても攻撃を続けている。まだ時間はある。

艦娘がモデルとなつた軍艦よりも優れている点、まずは俺がやっている後退、機動力だろう。後退や急旋回、ましてや砲弾の回避や防御なんてものは軍艦じゃ絶対に出来ないだろう。そんなことが出来る艦ぶねが存在するならその設計技術者達と船長と操舵手は変態だ間違いない。

そして攻撃の範囲の増加。砲弾の飛距離ではなく射撃の角度？ の増大か。流石の艦娘も20キロメートルも砲弾を飛ばすなんてことは出来ないだろう。

そこは大きく劣っている筈だが、動物的な動きで滑らかに照準を合わせて撃つのは軍艦では出来ないだろう。だから照準の定めやすさと連射性能、命中率は艦娘が優れているだろう。

あとは軍艦よりもスペースを取らない……当たり前か。これも今は関係ないな。

逆に劣っている点はさっきの射程と総合的な耐久力、深海棲艦以外に対する攻撃力だろう。

妖精さんの支援があつて深海棲艦にダメージを与えられるのであつて、そうじゃな

かった場合、鎮守府以外の陸上の場合には砲は拳銃並、魚雷も普通の爆弾くらいだといつか妖精さんが言っていた。

いや、普通の爆弾も十分に恐ろしいけどね？

そして俺は駆逐艦、他の艦種よりも速く移動できるらしい。そうなると大した火力の無い砲の上手な使い方は……

「閃いた！」

この勝負は俺が勝つ。

砲撃②

この勝負は俺が勝つなんて思ったが果たしてどうだろうか。

俺はイ級の標準的な強さが分からない。前回戦ったイ級が特別弱かったのかどうかの比較対象が今戦ってるコイツだから……もう少しサンプルが欲しい。

全力で攻撃し続ければ倒せるんだろうけど、「あとどれくらいで倒せるか分からない」のは非常に大きなプレッシャーとして押し掛かる。

「キーロ先のゴールまで走ってください」と「この先にあるゴールまで走ってください」ではペース配分は大きく変わるだろう。

艦娘歴たった6日な上に艦娘とも出会ってないからありとあらゆる基準が分からない。自分の速さや能力が他の艦娘に対してどれだけの優劣があるのかが分からない。

やっぱり比較対象って大事だ。

「早く鎮守府に、他の艦娘に会ってえな……」

そんな呟きは避け切れないと判断したイ級の砲弾を腕の艦装で弾いた音で掻き消される。よく考えなくても砲弾が見えるって凄い事じゃない？

有効打が無いことに痺れを切らしたのか当たらないと学習したのか、イ級が砲撃を止

めて突進してくる。嘯みつき同様サイズがサイズだから当たれば致命傷。無事に避けられたら大きな隙を狙えるだろうから当たる訳にはいかない。

「なるっ！ 当たる訳にはっ、とお！」

凄イスピードで突っ込んでくるイ級に対して離れようとするがなかなか距離が離せない。おいおいこっちは駆逐艦だぞ……あつちも駆逐艦だったな。

さて焦るな焦るな、こんな時こそ平常心だ平常心。追うものと追われる者……あつせうだ。

「コーナーで差を付けろ！ フツ」

急カーブをして停止した俺と大分遠くまで真つすぐ進んだイ級。ありがとうスポーツメーカー。

このまま見えなくなるまで突っ込んでいつて貰いたいがい級は倒して腹の足しにしたい。毎日の貧相な食生活では満足できないんだ。

「ハハツどうした？ こっちだぞポンコツ！」

幼稚園児みたいな語彙力で煽る。ヤツに意味が理解出来るとは思えないしそもそも耳があるのかどうかすら怪しい。でもちゃんと反応しているようなので何とかなるだろう。

もう一度距離が開いたことで再びイ級が砲撃をしてくる。……こいつって意外とバカなんじゃない？

さて、砲の上手な使い方という妖精さんからの宿題に取り組もうか。

「でもぶつつけ本番かあ。せめて六回くらいは練習させろよな」

なんて言ってもここは戦場。練習なんてしてたらブチ抜かれるのは目に見えている。

まあ、失敗しても大きなリスクはないしやられるつもりなんて微塵も

「ないんだがな！」

イ級の顔面目掛けて砲撃を一発撃ちこむ。そして魚雷も投げつける。そしてイ級の手前に砲弾を広げて三発撃ち込む。頼むから上手くいってくれよ。

イ級が吠える。どうやら運よく怯んでくれたみたいだ。目の近くにでも当たったかな？

三発の砲弾は狙い通りの位置に飛んでいく。ここが運命の分かれ道！

俺の作戦はこうだ。砲撃をするイ級の前に水柱を作る。これでイ級が怯まずに突っ込んできたら魚雷を四発、前回の3倍くれてやる。これで致命傷が与えられなければその時は詰みだ。逃げる。

イ級が怯んだら水柱に隠れて側面へ移動。頭部よりも弱そうな側面に魚雷を当てる。死角に回って不意打ちだ！

艦娘の機動力、その中でも駆逐艦という高い機動力を持っているのだからそれを活かすべきだ。

という訳で動いて動いて動きまくる。相手の隙を見つけるんじゃないやなくて隙を作つてやればいいんだよな、というのが俺の頭から出てきた答えである。

水柱が上がる。肝心のイ級は……

来ない！ プランA！ 側面へ移動する！

左側へ全速力で移動、気付かれては……ない。「喰らえ！」なんて叫んでは気付かれるから、とりあえず全力投球を

ツルツ……

「!?」

すつぽ抜けた。うつそだろオイ。でもイ級の隙だつて永遠じゃないんだからと、妖精さんからのアドバイスの通り右足で蹴りを入れる感覚で魚雷を発射。なんだよ投げなくても発射出来るじゃん。

「グオオooooooooooッ！」

イ級の声が聞こえる。深海棲艦の言葉なんて分かる訳が無いので痛みか怒りか分からない。せめて痛みで泣いてほしい。

その場で身じろぎしたイ級に対してこちらは回避に徹していたからほぼ無傷。でもずっと動いてたからクツソ疲れた。早く終わらせてゆつくりしたい。

まだ動くイ級のタフさに溜息を吐く。やっぱり口から魚雷を食べさせるくらいしないと2発で倒せるなんてことはなかったようだ。身じろぎの隙が大きいから追撃の魚雷を放つ。大分攻撃のコツも掴めてきたぞ……

——大きな音が聞こえる。無事に魚雷が当たったようで、一際大きな水柱が収まったところにはイ級がまだ居た。しかし動く様子は……ない。倒せたようだ。

前回のイ級戦と同様に呼吸は荒く肺ら辺と脇腹が痛い。だが違うのはそれ以外。俺は疲れたといえほぼ無傷なのだ。服も損傷していないし血も出ていない。この差はかなり大きいだろう。

「ヘッ、俺の勝ちい……どうよ妖精さん。言われた、通りに、上手な砲と魚雷の、使い方だろお？」

「思ってたのと違うけど勝ったんだから何とも言えないですう」

妖精さんに評価を求めたらそんな返答が返って来た。どうやら百点満点の動きでは無かつたらしい。まあ、平和な日本の一般人が戦いの場でいきなり満点の動きが出来たらソイツはきつと生まれる時代か世界を間違えたヤツだろう。

何が違うのか気になって訊いてみたところ「魚雷はまあまあですが、砲の使い方は全然ですう」と言われて気が付いた。確かに砲としての使い方じゃないなあれは。

「狙いやすさに焦点を当てるべきでしたね。一度攻撃した傷を狙うだとか眼とか口の中とか、弱そうな部分を狙うとか……次からは意識してくださいね〜」

「ウツス」

ホントに分かってるんですかあ？　なんて声が聞こえるけど、分かったからこそあれで正解だと思ってた自分が恥ずかしくて何とも言えないというか何というか。

それにしても次からは、ねえ……戦いなんて無いに越したことはないと思うんだけどやらなきゃいけないときには反省を活かしつつ全力でやろう。まあ、イ級に手古摺る俺の全力なんて高が知れてるだろうけど。

荷物からナイフを取り出してイ級の体に突き立てる。持ってた良かったナイフ！　出港前に妖精さんに頼んだ俺の判断は間違っていないかった。せつかく倒したのに食べられないなんて無駄骨にならなくて良かった。

イ級の頭部は固すぎて刃が入らなさそうだったので、足？　つばいところに刃を入れる。すると血にしてはちよつと色が薄いトロリとした液体が僅かに流れてきた。

「これホントに食べられるの？」

嘘ついてんじゃないの？　と妖精さんを軽く睨むと慌て始めた。様子が妙にコミカ

ルで笑える。

「ちやんと食べられますう。……食べてる人は少ないですけど」

んんん？ 最後の方になんて言った？ 食べてる人は少ないってそれはまさか「食べられる」だけでそれほど美味しくはないってやつ……？ それってもしかしてゲテモノって呼ばれるヤツじゃないかな。

「騙された」

「あなたが勝手に突っ走ってっただけですう。私は美味しいなんて一言も言っていないですう」

詐欺師のやり口じゃねーか！

いや、確かに妖精さんの言うとおりのだ。キレるのはお門違いだな、うん。腹いっぱい食べられるだけありがたいってことで納得しよう。

あつ魚雷で挟れてる。勿体ないけどいいか。デカいし多少減っても問題ないでしょ。……それにしても白身か、さっきの赤い液体は怖いけど身の部分だけ見ると美味しそうには見えるんだよね。深海棲艦っていう先入観で大分減点されてるけど……

ちよつと離れたところに島を見つけたので上陸して、さっそく人気のない場所でイ級を調理し始める。あつて良かったフライパン！

毛布代わりの布などの漂流物の中に混ざっていたペットボトルもちよつと海水で洗つて布やら炭やら入れて濾過装置にした。自由研究も偶には役に立つ。

ちよつと不安は残るけどこれで塩も水も手に入る。ペットボトルが都合よく漂つていたことを喜ぶべきか、ペットボトルが捨てられて漂つていることに不快感を抱けばいいのか微妙なところだけど、今俺は捨てた人のおかげで水が飲めるから喜ぼう。

なんて現金なヤツだなあなんて考えながらイ級の肉を刺身にしていく。

出来上がり、さあ食べようと思つたときに醤油が無いことに気が付いた。

食べてみると、チヨコとガムを同時に食べたみたいな吐き気を催すレベルで酷い食感と、鼻を抜けるような鉄臭さ。

好き好んで食べようとは思えないけど、量があるから空腹だけは誤魔化せる。

薬味で誤魔化さないと到底食べられそうにないけど、今は錆びた蛇口から出た水を嘔んでると思う以外に俺に出来ることはなかった。

雨天の日

考え事をしながら海を進む。今日は雨でかなり波が高いけど動かないよりはマシだろうと思つて移動を開始した。屋根もない無人島で雨に撃たれながら一晩過ごすなんてそれこそ意味がないと思う。

「しかし、悪天候の海つてこんな荒れるモンなんだな。あゝー気持ち悪い……早く止まねえかな……」

自分の身長以上の波に叩きつけてくる雨風、時折光る稲妻で俺はもうグロッキーだった。

上下左右に大きく揺られ、強い風を感じ続けても前へ進む。まるでジェットコースターだけどアレよりもだいたい遅い。それにジェットコースターはスリルを楽しむ物で、こっちはスリルもない癖に脳とか内蔵に直接ダメージを与えに来てる。

乗り物酔いの気持ち悪さを強烈にしたような気分の悪さに出発したことを後悔し始めたのも結構前のことで、意地で進んでしまったばかりに引き返せず、引き返すよりも進んだ方が近いと妖精さんも言っていた。

幸いなことに深海棲艦も見えない。流星の深海棲艦も雨の日には大人しくしてる

んだな。まあこんな状況で相手はいつも通りの動きが出来ますなんて言われたら溜まったもんじゃないからそのまま大人しくして欲しい。ずっと大人しくしてるのがベストだ。

そして考え事は荒れた海の事から戦い方と艦装の事、深海棲艦のことに移っていく。気持ち悪いのは変わらないけど何も考えずに無心で進むなんてことは俺には出来ないから何かを考えるしかない。せめて二人以上なら会話が出来るんだろうけど妖精さんは艦装の中に隠れたので非常に退屈だ。

まずは戦い方の事を考えよう。艦娘としての特性を活かしたであろう戦いは以前イ級相手に出来ただろう。しかしイ級ならともかく他の深海棲艦はどうだ？ 人型の鬼や姫級なんかにはあんな子供だましは通用しないだろう。

確かにここはゲームの中の世界だったがゲームの『艦これ』ではない。ターンなんてものはないし腹が減ったら動けなくなるし、天気が悪いと思うように進めない。

無くなったものが多いが決してそればかりではない。相手も恐らくプログラムデータから生物？ に変わっている。

そして生物である以上弱点が生まれる筈だ。人型なら特に、頭を撃ち抜けば即死するはずだ。なんならリアルだからわざわざゲームに出てくる砲の撃ち合いなんてしなく

てもいいのかもしれない。ああ、考えてたらワクワクしてきたな。面白くなりそうじゃない？

艦装をコツコツ叩いて妖精さんに呼び掛ける。艦装から頭だけ出して来た。こっちはずぶ濡れだというのに偉い身分じゃねーかオイ。

「なあなあ妖精さんよ、盾とか投擲武器って作れない？」

「……はい？」

妖精さんが「何言ってるんだコイツ」みたいな顔で見ってくる。それだ、それだよ。

予想外のことが起きれば意表を突かれた相手は呆然とする。恐らく深海棲艦だつて盾とか持つてるヤツとの戦いなんて想定してないだろうし、そこに付け入る隙がある筈だと力説する。

人が今みたいに割とどーでもいいことで困惑してるのを見るのが好きだとか、他人に迷惑が掛からないレベルでふざけて楽しくなれば、それで面白くなれば万事オツケーだとかは言わない。こんなしょうもないことでダメって言われたくない。

どうやら悪ふざけとか他人がしないようなピエロみたいなムーブをかますことは俺が俺である以上止められないみたいだ。他人がやらないであろう事をやるちつぽけな優越感が俺を幸せにしてくれるんだ。……だから友達に「犯罪者みたい」なんて言われたのかもしれないが。

妖精さんは考え込んでいる。頼むよ！有ったら絶対に役に立つから！なんて言っても考えたままだ。何故？ 刀を持った艦娘が居るんだから刀は作れるだろう。だったら盾だって作れるんじゃないの？

「作れないことはない……ですが、ちゃんと他の妖精さん達と話し合わないと難しいかもしれません」

「何が何でも日本へ行かないといけない理由が出来たな」

「こんなことでやる気になるなんてよく分からないですう……」

「何言ってるんだ！ ロマンは大事なんだよおーッ！」

これだから妖精さんは……いや、コイツだけかもしれない。だいたい『艦これ』の二次創作では妖精さんがやりたい放題してたりするし、工作艦の明石とかと一緒に時空壊れるようなもの作ってたりするし……

とにかく今は気分がいいから進む！ 気分屋な俺は気分が良い内にやるだけやっておかないと後で面倒くさくなっちゃらないことは俺自身が一番知ってる。

「今どの辺に居る？」

「フィリピンの近くですう。このままのペースで四時間くらいで見えてくると思いますよ」

「そいつあぁ良い！ 飛ばしていくぜー！」

20分後に気持ち悪くて吐いた。

長距離移動するときには意識してちよつと速く移動するだけで随分と到着時間が変わっていたりするものだ。妖精さんから言われた四時間くらいよりも早い三時間でフィリピンに到着した。地図を見るとスラバヤよりも日本の方が近いんじゃないか？ つてくらいの場所だ。まだ予想の40日の半分どころか四分の一くらいなんですけど……やっぱり俺の時間管理はガバガバだな！

久しぶりに港に來たから屋根のあるところで休もうと思う。……随分と凶太くなつたな。それともどうせ金は無いからと開き直ってしまっただけかもしれない。

どちらにせよ休まなければならぬことには変わりない。既に到着から時間が経っているのですろそろ妖精さんが何時ものように何処からともなく食べ物を手してくる筈だ。

二度あることは三度あると言うし、多分今回も碌でもないとこから拾ってくるんだろうな。それで助かってるから文句は言えないけど心の中で文句を言うくらいは許されるだろう。

今回は倉庫……ではなく廢墟だ。倉庫じゃないからまだ罪惡感が少ない上に倉庫と

違つて人が生活する為に建てたものだから生活用品も無くはない。

因みに大きな問題が一つあった。台所のテーブルに突つ伏したまま動かない人が居たことだ。

なんか外国人つてだけでは説明がつかないくらい肌の色がおかしかったし、妙に髪がパサパサだし、何より呼吸をしていないから十中八九死体だろう。やけに冷静なのはきつと現実だと認識できてなかつたからじゃないかな？ 触つたり、表情を見たり、わかりやすく血塗れだったり蛆が湧いてたりしてたら即発狂してたな間違いない。

どうにかして処理したいけど触るのは嫌だ……というわけで埃っぽい毛布を被せて見えないようにした。

そして手を合わせて信じてないけど神様にでも祈つておいた。……普段は神様なんて気にもしないのにこういう時だけ都合よく思い出すような俺の祈りが届くかどうか。天罰でも下るかもしれない。

外は相変わらず酷い雨風で、廃墟は隙間風と雨漏りが目立つ。それでいて埃が積もつていてカビ臭い。ざつと見た感じでは家具があまりない。多分今の俺と同じように入り込んだ泥棒が目ぼしいものを持って行ったのだろう。

二階に上がると部屋は三つあるようだとわかる。

「ゴミ部屋に、空き部屋に、寝室か」

俺は寝室に入った。ボロボロで中身が飛び出たベッドがある。やはり埃が積もっているが払えば使えるだろう。汚いなんて贅沢は言ってられない。コンクリや石の上で寝るよりよっぽどいい。

……風呂は？ シャワーは良いのかって？ 馬鹿言うなよ、この体で水浴びしたことなんて一度もねえよ。今日の雨でずぶ濡れになったのが水浴びなんだよ……

興味本位でシャワー室に入ったら水が出てこなかった。

「風呂に入りたい……とびつきり熱いヤツに」

だからだろう、日本人として当然の感想が出てくる。……もう一週間以上シャワーも浴びて無いし、飯は不味い。泥棒みたいなことして過ごしてたり一日中海を只移動してたり……こういったごく普通が出来ないってところから人間性って失われていくのだろう。

なんて暗い思いをしながら部屋を見回す。……人影もないし良いだろう。

セーラー服を脱いで椅子に掛ける。スカートも同様に掛けておく。インナーとスパッツは流石に脱がない。人目が無いからといってそこまでする度胸はチキンな俺にはない。

鉄製のブーツを脱いでひっくり返したら結構な量の水が出てきた。……『艦これ』の

キャラクターって靴の中に水って入らないのかな？

下着同然でベッドに腰かける。傍から見たらかなりアレだろう。前世の俺がここに居たら「すいませんでした！」って言って部屋から逃げるだろうな。この体の持ち主が俺じゃなかったら通報されてお終いだつたな。襲うだなんてとんでもない！

しばらくの間、特にこれと言つて考え事も無くボーつとしていたら妖精さんが戻つて来た。今回はパンかあく腹持ち良くないから好きじゃなかったんだよね……今は前世程食べられないから評価を改める必要があるそうだ。

「なあ妖精さん……いつもありがとうな」

「!?」

実感は無いが死んでしまったが転生させられて艦娘として生きていること、偶々だろうがこんな境遇でもいろいろと助けてもらっている。そのことにお礼の言葉を掛けたら信じられない物を見たって感じの反応を返された。今まで何回かお礼は言ってるじゃん。なんで今回だけこんな反応なの？ 流石に凹むんですけど……

驚いている妖精さんを放つておいて横になる。カビ臭いが柔らかい布団に挟まった俺の意識は疲れからかスツツと落ちていった。

日本へ

「よろしく願います。……はありきたり過ぎて面白くないよな」

「そこはもう盛大にはっちゃけても良いと思いますう」

「それは悪目立ちするでしょ常識的に考えて……だからといって今日から家^{ファミリー}族だ。なん
て言っても頭おかしいって思われるし」

「新人なんてどこでも目立つんですから諦めてください」

「それはそうだけどさあ」

妖精さんと会話をしながら進む。内容は鎮守府に着いたらどういった挨拶をするかについてだ。しかしまともな考えが浮かばず、妖精さんの言葉に従うことは俺のクソみたいなプライドが許さない。

なんだよ盛大にはっちゃけるって。人間は第一印象が大事なのにそんなふざけた事
出来ると本気で思ってるのか？ いくらなんでもそこまではしねーよ。

軽い会話をする俺たちの前に駆逐イ級が2匹現れる。が、妖精さん曰くレベルの上
がった俺の敵ではないらしく、艀装に引っ込む様子はない。

確かに今まで結構な数のイ級は撃破してきたと思うし、イ級じゃないイロハ級？ も倒して来た。だから今更イ級が2匹なんて苦戦はしない。楽勝とまではいかないけど初めて海に出た時みたいに常時綱渡りな状況にはならないだろう。

レベルが上がって何が変わったかというとまずは火力が違う。魚雷1発で確殺出来るとまではいかないけど、イ級1匹に魚雷が4発も必要になることはない。……なんで火力が上がるのかはさっぱり分からない。

妖精さん曰く「弾や火薬の質が上がってるから」だそうだが、なんで質が良くなるのかという質問には答えてくれなかった。この世には知って良い事と悪いことがある。

この疑問はきつと後者だ。でも気になることは気になるけど教えてくれる人が居ないからどうしようもない。きつとそのうち何とも思わなくなるだろう。

あとは速度スピードや防御力、航続能力航続能力がどうか言っていたけど、速度スピードは主に瞬間速度、防御力は艦装の耐久力、航続能力はそのまんまだった。

レベルが上がる原理も不明。レベルアップによって基本ステータスの底上げがされて強くなる。これだけ覚えておけば良さそうだった。単純でありがたい。

— そうやって考えてる内にイ級2匹も撃破出来た。遅くて火力の低い敵なんて引き撃ちするに限るんだよね……なにせ此方はソロプレイ。陣形なんて無いんだから1人

で好き勝手出来る。援護がないってデメリットはあるけどメリットも無いわけじゃないんだよね。

「そろそろ日本の領海に入りますう！ ……長かったですねえ、あと少しで日本の土を踏めますよお」

突然衝撃の事実をお知らせしてくる妖精さん。

「は？ マジン!？」

あと5日はかかるかな〜とか思ってただけに驚きを隠せない。

でも確かにそうだ。レベルが上がって早くなつたならその分早く着くよな。

だったらイ級から肉を剥ぎ取つてる場合じゃないな。妖精さんが居るなら正確なナビゲートで鎮守府にゴールイン。日本の食べ物と風呂と布団が俺を待っている！

…その前に色々あるんだろうけど、こんなことを真つ先に考える程度にはちゃんとした生活をした。切実に。

道中あれほど長い長い言っていたのにいざゴールが見えると案外そうでもなかったと思うのはどうしてだ？ いや、やっぱり長かったわ。

やる気が出てきた。今日は快晴。風は少なく日本にゴールインするにはいい天気だ。あと少しだから気を抜かずに行こうと妖精さんと顔を見合わせる。グツと力を込めて

一気に行こう。

「さあ、いざ日本へ！」

『行かせは……しない、よ……っ！』

肩を掴まれた。

「敵が居ねーことは良い事なんだろうけどよ、流石に何も無さすぎるのはどうかと思うぜ。体が鈍っちゃうよ」

「ぶっぶう〜！ 天龍は鈍るのが嫌びよん!? だったらみんなで天龍を追い掛け回すびよん！ 天龍は捕まったらみんなに甘味を奢るびよん！」

「そうだそうだ〜！ ボクたちから逃げられると思わないことだね！」

……これは放っておいてはいけなйдらう。確かに天龍の言う通りただ進むだけでは暇だが、それは遊んでいい理由にはならない。ましてや今は遠征任務の最中だ。

卯月の明るい性格には助けられたことは多いが、こうやってふざけ始めるのも早いのは直して欲しいと思う。

「駄目だぞ卯月。油断しきつていては突然の対応が出来ない。他の人にも迷わ「あら〜良いんじゃない？ ね、天龍ちゃん♪」……」

「おっ、おい龍田！」

「あの、そこまでしてもらわなくてもいい……です。」

龍田、あなたもか。

いや、龍田はきつと慌てる天龍を見たいだけだろう。それにしても弥生の反応が割と一般的だと私は思うんだが。全くこの姉たちは……。

わいわいと楽し気に会話ができるなら皆もまだ余力はある筈だ。帰るまでが遠征だ。最後まで気を抜くわけにもいかない。が、このままだ進んでいても気が滅入るだけだろう。やはりこれくらいは目を瞑るべきだろう。

——ドオン……

「そりゃあ無いぜ龍田く……今、砲弾の音がしたな」

「ふうく……そうなの？」

「確かに音はしたわよ？ その耳は飾りかしらく？」

「ヒエツ……」

「卯月、皐月……龍田さん、あまり苛めないであげてください。」

確かに音は聞こえた。そして今も最初よりは小さいがまだ聞こえている。つまり遠くで誰かが交戦している。

おかしい。遠征は一般的に深海棲艦と交戦することを前提で考えられていない。燃費が良く、深海棲艦との交戦を避けられるような艦種が主に行う任務で、資材の収集や敵艦隊の情報収集などを行っている。

だから基本的に砲を撃つなんてことはなく、敵に会ったらはぐれないようにしつつ全速力で撤くのが普通だと教わっている。実際に私も遠征で砲を使ったことは一度もない。

「あつちの方向だ。天龍、どうする？」

私としては何が起きているか凄く気になるが、仕事の途中で寄り道をするのも気が引ける。龍田ではなく天龍に振ったのは、旗艦というのもあるが彼女ならきつと……

「どうするって……行くに決まってるんだろ！ 行くぞお前らー！」

……消化不良で暴れたがっていたから絶対に行くと思っていたから。そして、半ば無理やり引つ張っていきそうだったから。

日本を目前にラストスパートをかけようとしたら肩に手を置かれてスタートさせてもらえなかった。

振り返るとそこには無表情な女の子……艦娘じゃない。けど知ってる顔だ。

駆逐棲姫じゃん……。

何？ 駆逐イ級とかの後にいきなりこれ？ 「こんには。死ねッ！」 って感じ？

そんな感じで固まっていたら肩に置いた手の反対側の腕で殴りかかってきた。

「ガハッ!？」

尋常ではない衝撃と痛み。体感的に間違いなく数メートルは吹き飛ばされた。立ち上がろうとしてすぐに直感に従い屈む。すると頭の辺でチリツツって音がした。モタモタしてたらヘッドショットされてた。おつかねえ……

駆逐棲姫。『艦これ』の割と初期の頃のイベントボスを務めた経験のある由緒ある強

キャラで、見た目も可愛く敵キャラながらかなりの人気があった筈だ。勿論イ級など雑魚の駆逐艦とは一線を画す性能をしている。

そんなのが目の前に居る。ただのパンチですらかなりのダメージを受けたんだ。砲なんて当たったら蒸発するんじゃないの？ ……涙出てきた。だけどこれが首の骨が折れたと錯覚するレベルの痛みからなのか、悲しい現実を見たからなのかは分からない。多分両方。

最初に浮かんできたのは諦めからくる開き直り、それ故の心の余裕だった。「負けイベ的なヤツでしょ？ お疲れでした〜」って感じのやつ。

実際どう頑張っても俺じゃ倒せないだろ。傷をつけられるかも怪しい。

でも砲を躲されたからか「？」って感じの表情をしていて撃ってこなかった。

これは……舐められてる？

「絶対にタダでは勝たせねえ」

だったら足掻いてやろう。……さつきまで諦めてたヤツ？ 誰だねそれは。俺じゃないぞ。あれはきつと別人格さ。

「今のうちです！ 逃げますよ！」

おっと妖精さん！ 出てきても大丈夫なの？ でも逃げるっていうのは大賛成だね。

勝てるとは思えないし、というわけで逃げる。じゃあな駆逐棲姫よ。またそのうち会おうや。

「あばよく駆逐棲姫の嬢ちゃん！」

『待つ……』

！
振り返ってから全力で移動する。咄嗟のことで今どっちに向かっているか分からねえ

「ハアツ、ハアツ……追いかけてくんなよクソが！」

ドオン！——

「げっ！」

畜生撃つて来やがった！ 俺ごときにこんなことしてないで大人しく深海に引込んでてくれよ。でも音は遠かったからワンチャン逃げられるか？

すぐ斜め後ろに水柱が上がる。とんでもない精度に驚き後ろを振り返る。見なきやよかったと後悔した。

駆逐棲姫が凄い速さで追いかけてきている。すぐに追いつかれそうだ。

——逃げられない。

「クソツッ！ どうすりゃ良いんだよ！」

マズいなんてモンじゃない。攻撃力、防御力に機動力、継戦能力もだろうな。これら全てが上回る相手に準備の時間もなく戦いを強いられるなんて死刑宣告と変わらない。この駆逐棲姫は俺に何か恨みでもあんのかよ……

『沈んで……』

いつの間に隣に!? しかも砲向けてきた。

「そおいー」

急に減速する。目の前を砲弾が通過していくのが弾に反射した太陽光の残光で認識できた。……この世界には中破とかの概念はあるのか? あんな砲弾、当たったら大破を通り越して即死するわ。俺なら掠ってもショック死するね。

やはりこの世界に神などいない。

「これはマズイですねえ……私が支援しますう」

そんな感じで諦めムードになってたら妖精さんから救いの言葉が出てきた。やっぱり救いの手は存在していた。

座礁

妖精さんからの支援とは一体なんだろう？ 前に聞いた話だと深海棲艦に与えるダメージが上がるなどといった艦装の効果上昇が主な内容だった筈だ。

でも妖精さんは支援するって言ってるし……あっそうか。

「今から更に強くなる……ってこと？」

「大体合ってます。今よりも強くなれますよお」

それは良い事を聞いた。つまりアレだな、妖精さんの更なる支援という名のバフだな。

だからイロハ級との戦闘ではやらなかったのね。強敵との戦いでそういうのに目覚めてこそ熱くなるからな。絶対にこの妖精さんはロボットアニメ好きだろ。

「具体的な効果は？」

俺としては何処かの吸血鬼みたいに時を止める……までは行かなくても、相手の砲弾の軌道がわかるとか資材を一切消費しないとかが良いなあ。

魚雷で大きな水柱を上げて陰に隠れて横に跳ねる。駆逐棲姫の方から発砲音がしたけど衝撃がないから回避に成功したんだろう、妖精さんからの答えが返ってくる。

「私が、深海棲艦の攻撃によるダメージを軽減しますう」
「ちよつと地味！」

でも実際にこういった砲弾の飛び交う戦場ではかなり嬉しい効果ではある。ゲームとかでも攻撃力が高くて紙装甲のキャラに長期戦はさせちゃいけないって俺も良く知ってる。毎ターン体力を回復させる手段がない『艦これ』に於いて、受けるダメージの軽減は全提督の垂涎物だろう。

「確かに多少は軽減出来ますけどあまり過信しないでくださいよ？ 妖精にだって限界はあるんですから多く被弾するとダメージを受け流せなくなりますう」

「するとどうなる？ 妖精さんは死ぬのか？」

「よつぽどダメージが多くない限りは死にはしませんよお。ただ、ダメージが増えると小破、中破、大破状態になってそこまでが私達の限界ですう。そこから先は貴女自身がその身と命を削つての戦いになりますう。その状態でも被弾が連続と轟沈……艦装が効果を失って、貴女は服と鉄の塊を背負って水中に行く事になりますう」

「言い方は悪いけど魚の餌か海の藻屑のどちらかですう。なんて言う妖精さんが非常に恐ろしい。」

「今までの戦闘はなんだったのか。遊びじゃないって言われた気がするんだけど……妖精さんも痛いのが嫌なのか？」

「ギリギリまで言わないつもりだった？」

駆逐棲姫を中心として円を描くように動いて攻撃を避ける。相変わらず攻撃を外す度に「？」って顔をしている。俺の方を向いても不思議そうな顔をしている、俺の顔に何か？

「ち、違いますよ！ 妖精の支援を受けた艦娘は敵に察知されやすくなります。長距離を気付かれずに移動するっていうのと、貴女の練習になればと思つて……」

なるほどね、だからあれだけ移動したのに思つてたよりは深海棲艦に遭遇しなかったのか。深海棲艦には妖精さん特攻のレーダーが搭載されているということか。だから駆逐棲姫も不思議そうな顔をしてたんだな。

でも俺の練習っていうのはちよつと分からない。確かにピンチは人を育てるつて言われてるけどそれで死んだら全部ペアじゃん。俺を選んでこうやって移動し始めた以上引き返せないって分かってただろうに……もうちよつと慎重になるべきだったんじゃない？

『そ……沈んで！』

不思議そうな顔から一転、駆逐棲姫が獲物を見つけたようなお預けされてた玩具を与えられたような嬉しそうな顔を向けて砲を撃ってきた。

「おつと！……あ？ やだ怖い……」

あの顔はアレだ。アニメとかに居るトリガーハッピー枠がするヤベー顔だ。マジ怖い。笑顔とは本来——ってヤツだ。

っていうか明らかに妖精さん支援始めたよね？　せめて始まるって一言欲しかったなあ！　いきなり体がフワってなるもんだから被弾しちゃったじゃん。

「確かにあんまり痛くない」

そう、痛くない。

精々雪玉に当たったくらい程度の痛みと衝撃。小さいとはいえ砲弾が当たったとは到底思えない。当たった所からも血は出てないし服すら破れてない。何故『艦これ』の艦娘が被弾しても痛みで気絶したりしないのかといった謎が解けた。ゲームだからというのもあるだろうけどこういうことだったのか！

（油断大敵ですう！　貴女は良くてもこっちは大変ですう！）

「ごめん。……さあこれからどうしましょうかね」

防御力が上がったところで駆逐棲姫には勝てるとは思えない。体力が限界を迎えるまでの時間が伸びたくらいじゃなからうか。でも妖精さんだつて頑張ってるんだし、俺も頑張らないとな！

「駄目かあ……」

しばらく撃ち合ったけど攻撃はまるで通用せず、煩わしそうに腕を振るわれるばかり。一方で俺はというと、機装も服もボロボロで手に持っていたの砲も曲がって使えなくなつた。

ハッキリ言つて心が折れた。圧倒的な戦力差は妖精さんの支援があつても覆らなかつた。妖精さんの声もさつきから聞こえてこないから限界なんだろう。

「妖精さん……ごめんよ、日本の地に辿り着かなかつたよ……」

(さつきから逃げてるばかりでしたけど、日本の海に辿り着いただけでも十分です。こちらこそありがとうですう)

いつの間にか日本の領海に入つてたらしい。

行かせはしない？ 日本に行かせちゃつたねと、恨みと嘲りを込めて駆逐棲姫を見る。

首を捻ると避けられる程度に狙いが定まっていないう砲弾を避ける。

やはり舐められている。

そう思うつてもどうにかする手段はなく、俺がまともに砲も撃てなくなつた辺りからわざと外してるとしか思えないような避けやすい弾を撃ってくる駆逐棲姫。

キレそう。いや、もうキレたね。

俺は、俺は……ッ！

舐められるのが大っ嫌いなんだよ！

窮鼠猫を噛む、鼯の最後っ屁、火事場の馬鹿力、何でもいから駆逐棲姫に一矢報いる。この俺、スチュワートは簡単にはくたばらんぞ……

「あああああああッ!!」

気合いの入った叫び声を上げて駆逐棲姫に突進する。近づいていく無表情にはどこか悔りの色が見える。タダでは転ばん！ 道ずれにしてやる！

駆逐棲姫に体当たりし素早く後ろに回って組みつく。何をされるか分かった様で振りほどこうと藻掻く駆逐棲姫だが、海上にプロレス技なんてあるまい！

「やめろおとおおっ！」

五月蠅いぞ！ 残りの魚雷、全部くれてやるぜ！

丸ごと自爆してやるぜえーっ！

俺のキルマークは誰にも渡さねえ！

最後に感じたものは今までで一番大きな音と衝撃。閉じた瞼を紅く染める太陽の光、そして大きな悔しさと小さな達成感だった。

(本当にごめんなさい。そしてありがとうございます)

そして妖精さんの言葉。

「良いよ良いよ。俺も楽しかったし」

そう言おうとしたけど口からはゴポリという最後に聴きたくない生々しい音しか出なかった。

前方で見知らぬ艦ふねが深海棲艦と戦っている。……単騎で深海棲艦に挑むなんて余程のバカか命知らずだけだろう。

私がそう呆れながら目の前のそれを認識したときには相手の深海棲艦、駆逐棲姫に雄叫びを上げて突っ込み始めていた。

「なっ!?!」

何をするか天龍達も分かっているのだろう、同じように驚きの声を上げている。

あの艦は……自爆する気だ。あまりにも自分を省みない凶行に顔が歪む。

「おいっ! やめろおとおおっ!」

天龍の怒号も空しく、大きな爆発が起こった。

爆発による水飛沫が治まった頃には私たちは爆発地点の近くまで来ていた。そこに居たのは

『うう、痛い……』

「……………」

傷だらけの駆逐棲姫と、満身創痍で今にも沈んでしまいそうな艦が居た。

「血が……………」

「龍田あ！ 弥生と一緒にあの艦を保護しろお！」

「わかったわー。さ、行くわよ弥生ちゃん」

「は、はい……………」

あの艦の保護に龍田と弥生が行ったなら大丈夫だろう。あとは私たちが駆逐棲姫にしっかりと止めを刺せば大丈夫だろう。

「他の艦は駆逐棲姫の撃破！ ビビってんじやねえぞお！」

私たちが返事を返さないのに一人で攻撃を開始した。こういつたときの天龍の勇ましきは本当に素晴らしいな。

「二人も私に続け！ 遅れるなよ！」

「言われなくても！」

「びよんっ！」

四人から放たれた大量の砲弾と魚雷は、もともと傷だらけだった駆逐棲姫に反撃も撤退も許さずただひたすらダメージを与え続け――

『まだ……まだ、先に……』

無事に倒すことが出来た。

一息ついて周りを見渡すと離れたところに弥生と龍田が居た。……あの艦は大丈夫なのだろうか？　ここから鎮守府まで半日以上掛かるが……

「天龍ちゃんお上手〜。この子はまだ大丈夫そうよ〜。……でも鎮守府まで間に合うかというところよ〜と不安かも〜」

「じゃあコイツは貰っていくぜ。反論は受け付けねえぞ」

「その子を担いで何処へ行くつもり〜？」

「ハプニングはあったが遠征は完了してる。帰投するぜ」

龍田が言うには間に合うかはギリギリらしい。だからと言って見捨てる訳もないし天龍にも反論は無い。

「それと、コイツの機装は皆で手分けして運んでくれ。頼むっ！」

「もう〜。天龍ちゃんに頼まれたなら仕方ないわね〜♪」

……反論は無かったんだが、流石にこの鉄の塊は私たち睦月型には辛い。

一言物申したかったが、天龍に担がれた艦の容態も気になるから我慢した。

こうして、私たちの遠征任務はいつもより速いペースで引き上げられ、鎮守府に戻る
ことになった。

1章 〈幕間〉

・謎の艦娘

『——って名前は知っているけど……そんな艦娘は見たことが無い。偽名でも使われていたんじゃないか？ 軍事機密だからって理由でさ』

「いいや、そんなことは無い。そんなことを言うヤツは「軍事機密みたいですけど暴いてみますか？」なんて言ったりはしない。しかも身内に提督が居るって言う人にだ。

それに英語もとっても流暢だった。あのレベルはアメリカで生まれたか長年住んでない限りは無理だろう。

事実私も気になったから君に電話しているじゃないか、それで君はそんな艦娘は見たことが無いって言うてる。だったら、彼女の言うことは本当だという事じゃないかね？」

『だから、ウチの鎮守府に居る妖精は「今はこれで精一杯です。新しい艦が発見されたら……」みたいなことを言っていた。世界の誰よりも艦娘に詳しい妖精、それもアメリカの妖精か知らないって言うてんだから存在しないんだよそんな艦娘は！……確かに資

料にはスチュワートって名前はあるけどさ』

私はあの後——スチュワートと名乗った艦娘が出ていった後に甥に電話を掛けた。

「今日、スチュワートと名乗るアメリカの艦娘に出会ったんだ」と。

会社の有給をふんだんに使って旅行をして、いつものように夜中まで映画を見ていて寝坊した。その日目が覚めたら裏口の方から物音が聞こえた。普段は猫も通らないであろうというほど細く、薄暗い路地なのに珍しいなんて思いながらドアを開けて外を見渡すと人影が見えた。

「おお!?! そんなところで何をしている?」

そう、声を掛けたことが始まりだった——

ちよつとジョークのセンスが無いのが残念だったが根は素直で善良、心配性なだけかもしれないが……人の物を盗っておいて返しに来る人はいない。「盗めるから。そんなところに置いておく方が悪い。だから自分は悪くない」なんて考えをしている人は沢山いるが良心に従い返しに来る人はその中の何パーセントだろうか。

また、非常に行儀がよく「お邪魔します」や「頂きます」などの言葉を口に出し、座る際にも服装に気を付けたりすぐに頭を下げるその様はまるでジャニーズのようだった

た。

「そうなんですよ！ 車並みのスピードが出るのは最高です、風を感じることが出来たとつても爽快なんですよ。ただ距離が長過ぎるのが難点ですね、アメリカ横断を一往復半と同じような距離ですよ？ 映画の登場人物だって飛行機とか使うでしょうに……やれやれだぜ」

なんて言つて大袈裟に嘆いて見せた彼女は無事に日本に辿り着けるだろうか？ クツキーを持ち上げて彼女のコーヒーに入れるお茶目な妖精が付いてるようだからきつと楽しく移動してることだろう。

そう思い受話器の向こうにいる甥に言葉を掛ける。

「そのうちでいい。半年後でも来年でもいいから日本からの出向依頼にスチュワート……彼女を呼んでみたらどうだい？ もし来てくれるようなら君は艦娘の不思議を一つ知ることが出来るし、私もまた彼女に会いたいからね」

『叔父さんは本当に気に入ったんだね彼女の事。恋でもしたの？ おばさんに怒られるよ？ ……まあ、思い出したら呼んでみるよ。その時は電話する』

「ああ。楽しみにしているよ」

そう言つて電話を切る。

普段は言ううことを聴くのに時折変なことをして「マズい事でもした？」とでも言いた

げに不安そうな目を向けてくる昔飼っていた犬を思い出し

「似ているな。彼女は」

そう思った。



・工場の慌ただしい夜



「じゃあ交代よろしくね夕張。それに妖精さんも」

夜に工廠に向かうと明石からそう言われた。

今日の日中も特に大きなトラブルも無かったみたいで、いつものように手と服の一部を修理や整備で汚しちやっただのかな？ 苦い顔をしながら手を洗っている明石を見て

目線を横に逸らす。

すると先ほどから常に鉄臭い工場の中にもいつもよりも香ばしく、鼻を擦る香りを振りまいている人物が視界に入る。

……今日の昼番は金剛さんかあ。退屈はしないんだけど工場の中でお茶し始めると妖精さんの手が止まるからあんまりして欲しくないんだよねえ。

となるときつと今日の夜番も金剛型の誰かなんだろう。まだ来ていないみたいだけど……

「Hey、霧島あー！ 遅いデース！ 引継ぎの時間はまだあるからこっちでアフターディナーティーをするヨー！」

「はいっ。お姉様！」

いつの間に来ていたんだろう？ 今日の夜番は霧島さんだった。

私の横を通り過ぎる時に「今日もよろしくね」って言ってくれたりする細かい気遣いもさることながら、流石は艦隊の頭脳と呼ばれるだけあって艤装の修理も他の戦艦の人よりも手際よくやってくれる。

言い方は悪いけれど戦艦の皆さんの中では当たりだと思っている。因みにハズレは扶桑型と伊勢型の計四人。

工廠内が暗い雰囲気になったり瑞雲にベツタリで作業してくれなかったり……作戦の時にはしっかりと成果を挙げてくれるんだけどね。やっぱり全てにおいて万能な人

なんて居ないんだなあつと思う。

「それじゃあドッグや建造デツキに不備が無いかチェックしてくるわね。何かあつたらそこに居るから呼んで頂戴」

「わかりました霧島さん。チェックよろしくお願いします」

そう言つて離れていった霧島さんの背中を見送る。

……いつからだつたか、工廠内に明石と私以外の艦娘、それも戦艦や重巡が来るようになったのは。提督の計らいだつて明石が年末に騒いでいたような気がする。

妖精さん達が居ると言つても姿が見えるだけで、会話の相手も無くずっと工廠に籠りきりで作業をする。そんな環境が改善されたと知つて明石と一緒に提督にお礼を言に行つたのは記憶に残っている。

「工廠に戦艦や重巡が居ると有事にも対応しやすくなる。それに、独りぼつちは寂しいからね」

その時の言葉に私は感動した。きっと明石もそうだろう。工廠に戦艦や重巡が居ると有事の時に対応しやすいつてというのは事実。

知らせが来てから寮から出るのでは抜錨までの時間は違う。その数分で状況が変わることは想像に難くない。

だけど、大規模な作戦や深海棲艦の侵攻があるわけでもない時の有事なんてほとんど経験したことがない。つまり工廠内にちよつとは言え戦力を割いたのは私と明石の為に他ならない。

そう思うと毎回心が温かくなってくる。

作業の手を止めて顔を上げる。視線の先では戻つて来た霧島さんが誰の寮からだろうか？ テレビを持ってきていてガンガン叩いている。——アレはマズイ。

「きつ、霧島さん！ そんなに叩いたら逆に壊れちゃいます！」

「あら、そうなの？ ……ごめんなさい、電気には弱くて……」

そう言う霧島さんはテレビを隅の方に置きにいった。こういうことがあるから以前よりもどこか楽しく作業をすることが出来る。効率こそが全てじゃないってことを提督は教えてくれた。

——深夜アニメの録画予約してたっけ？

大体のチェックが終わって手持ち無沙汰になって、そう考え始めた頃。工廠に誰かが駆け込んできた。

「こんな時間に珍しいね〜……つてどうしたの!？」

「夕張さん！ ……哨戒任務中に遠征隊から連絡がありました。「重症者が一人居るそ

うなので修復剤の用意をお願いします」だそうです。矢矧さんはあと三十分で着くって言うていました」

重傷者だなんて一体何があつたの!? 明石に連絡を飛ばす。

『——はい、明石です……なにかありましたか?』

連絡に出るまでの時間と話すペースが遅い。やっぱり寝てた。申し訳ないと思いつつ有事だから許してほしいとも思う。

「重症の患者が居るみたいだから修復剤使うけど良い?」

『ん〜? え、ちよつと何、重症者!? ちよつと待つてて! そつち行くから!』

すぐに切れてしまった。隣に居た霧島さんはやって来た艦娘……風雲ちゃんから詳しい話を聴いていたみたいで、一緒に出て行ってしまった。足元に妖精さんが集まっていたので屈んで説明する。

「重症の艦娘が運ばれてくるみたいだからベッドの準備しておいてくれない?」

すると蜘蛛の子を散らすように動き始めた。今まで点検していた艦装が見る間に組みあがっては仕舞われていく。ベッドの方向にも何人か向かっていったので到着する頃には使えるようになってるんじゃないかな。

……それにしても妖精さんは私たち艦娘の声を理解しているのか。逆に妖精さんの声が聞こえるのは提督だけ……不思議よね〜と思つていたら明石が入つて来た。

早い。と思ったが髪はボサボサなままだ。……相当急いで来たんだね。

「こんな夜更けにごめんね明石」

「本当よ……こんな夜更けにやってられないわ。でもっ！ やるならやるで全力で修理、治療しなきゃね！ それで、修復剤だっけ？」

「そうそう。誰よ遠征で重症なんて負ったのは……」

そんな会話をした後、全く見覚えのない艦娘が運び込まれた。

この瞬間から私と明石の本当に忙しい一週間が始まる。



鎮守府

目覚め

——ここは何処だ？

俺は歩いていて。前後左右も足元も空も全部真っ白な世界だった。足音も風も感じない。

「貴女は——」

後ろの方から声が聞こえた。振り返って走り出す。

一体どれほど走っただろうか。十秒か？ それとも二十分以上だろうか。

すると前方に黒い点が見えてきたので思わず足が止まる。全てが真っ白なこの世界に於いて自分以外の「色」はかなり浮いていた。

「貴女は、こつちに来ちゃ駄目ですう」

そんな最近までずっと聞いていたような、ずっと聞きたかったような間延びした声を聞いたから、止まっていた足を再び動かし始める。

点は少しずつ大きくなり、掌大のになったときには足元にあつた。

「……なんで来ちゃうんですかあ？ 最後の時といい頭大丈夫ですう？」

「随分辛辣じゃない？ それはそうと来るなど言われるほど行きたくないのは人の性だから諦めて。それと俺の頭はこれでデフォルトだから安心しろ。追加パッチも空き容量もないから改善はしないぞ諦めてくれ」

文句を言う妖精さんを拾い上げてそう返す。随分と懐かしく感じるのはなんでだろう。

「で、(ハハ)どい？」

「死後の世界ですう」

ふーんと返事を返す。実感も何も無いから感想も出てこない。精々「実在したのか」くらいだ。

それにしても……薄々と気付いていたが死後の世界、あの世ねえ。まあ駆逐棲姫に自爆特攻したんだから自分も魚雷の大爆発に巻き込まれたんだらうなあ。

「今頃は粉微塵ミンチになって魚の餌かなあ？」

魚に突かれて痛みと共に体の表面から少しづつ削られて無くなっていく感覚を味わわずに済んだと喜ぶべきか、溺死する苦しみを味わわずに済んだと喜ぶべきか、妖精さんから貰ったこの体を粗末にしたことを謝罪するべきか、そういえば駆逐棲姫には一矢報いることは出来たかなんて心配するべきか。

「まあいいか、過ぎた事だし」

「あつさりし過ぎじゃないですかあ？」

「お互い様じゃない？ 妖精さんは俺に対して「もつと逃げに専念していたらもしかしたら助かったかもしれない」とか怒鳴る権利があると思うんだけど？」

そう言ううと妖精さんは鼻で笑った。

「あまり自惚れないでください。駆逐棲姫と言ったらかなりの強敵ですう。それを艦娘歴の浅い雑魚駆逐艦娘の貴女がどうこう出来るなんてハナから思っていないですう」

「ッ！……の——」

続く言葉は頭を叩かれたことで中断された。反射的にそれを手に取るとハリセンだった。しかもみるみるうちに小さなクリアファイルに挟まれた紙に変化した。どうなってるんだ。

「それを持つて後ろの橋を渡ってください。……絶対に中を覗かないでくださいよ？」

だからそんなこと言われると余計に見たくなるんだって……。あと今のやり取りも懐かしいな。鶴の恩返しじゃ無いんだよ。

振り返ると、先程まで白かった世界に明るい紅に塗られた橋が架かっていた。色褪せたら良い感じに渋くなりそうな橋だけど今は非常に目に優しくない色をしている。

「これはどこに繋がってるの？」

妖精さんの言葉と直感、前世で身に付けた知識から考えてあの先は現世だろう。だけ

ど確信が欲しいから妖精さんに訊いたが手の上には妖精さんは居なかった。

——どこからともなく声が聞こえる。

（私は別に貴女を恨んだりはしてませんよ。日本の海で散れただけ全然良かったですう）

「……ああそうかい。俺はアンタの頼みごとを最低ラインまでしかこなせなかったって訳ね。じゃあ妖精さん。またいつか会おうな！俺は忘れねえからよ！」

（その時は貴女が死んだときなので「二度と会わねえ！」くらいは言っただけですう）

そんなもんなのか。振り返って端に向かって歩き出し、一歩足が掛かったところで大声を出す。

「あーあー！最後まで締まらねえなあ！俺らしいけどよお！じゃあな！」

橋を渡る途中、そして渡り終わって辺りの白が黒に変わるまで、妖精さんからの返事は無かった。

「なんだよもう……」



あれから一週間、謎の艦娘——彼女が工廠の医務室に運び込まれてから私たちは付きっきりだ。

運び込まれた直後に修復剤をぶっかけたり、体を洗おうとして風呂に連れて行ったら耐性の無い駆逐艦の子が気分悪くしたり、静かに首を横に振る妖精さんを叱ったり……「これで目を開けなかつたら恨むわよ……はあく疲れた〜」

「修理できない艦はありませんって言えなくなっちゃうもんね……。でも、昨日は咳してたし一応回復はしてるんだよ？ だから自信持ちなよ明石」

でも……なんて言っつかり自信もやる気も気力も失くして机に突っ伏す明石を見る。

艦装は妖精さんが全員首を横に振ったから仕方がないにしても轟沈寸前、沈んでないのが不思議な状態で運び込まれた彼女は本当に酷いものだった。

むしろよくここまで回復したとすら思える。これが妖精さん、艦娘の力なのかと私たちの事なのに不気味に思えてしまうほどに。

もはやガラクタ同然の艦装を見る限り戦艦や空母、潜水艦ではない。かなりコンパクトなので恐らく駆逐艦だろう。聞いた話だと彼女は単艦で駆逐棲姫と交戦していたらしい。そのときは驚きと呆れで言葉が出なかった。

いろいろと訊きたいことが多すぎるけど、目が覚めるまではどうしようもない。

ベッドで眠る彼女を見ると呼吸もしっかりしているしここ最近の体温も高い。あとは明石の言う通りちゃんとして起きて「問題ない」って言ってくれば良いんだけど……「さっさと起きなさいよ。本当にそろそろ動かないと「処置無し」って判断されちゃうわよ。解体されたくないなら早く起きなさいよ……」

そう言った私は日々の疲れからかゆつくりと瞼が降りて行くのを止められなかった。

「ん……」

目が覚めた。身動きすると何か柔らかいものに包まれている感触がある。これは……布団か？ 布団……^{オフトウン}布団!?

張り付いたように固くなっていた瞼を開ける。倉庫、コンテナ、廃墟、空、そのどれでもないような天井が目に入る。病院みたいにとてもきれいな天井だ。

掛け布団には妖精さんが数人乗っていた。敷き布団ではなくベッドだったか。

妖精さんが居るとなるとここは……鎮守府？ いやいやまさかそんなと思って周りを見ると見たことがある人が二人居た。……あれは明石と……誰だっけ？

「え？ ホントに？ マジで鎮守府なの(ここ)？」

「おお！ 様子を見に来てみれば。気が付いたのかね？」

誰だこのオジ様!?

死角から話しかけてきたのは白い服を着て柔和そうな顔をしている人だった。

これは誰だか知らないけど知ってる。『艦これ』に於いて立ち絵もボイスも一切ないが最も重要な役割……提督じゃん。

俺がここに居て助かったのはきつとこの提督のお陰だろう。お礼を言っておかねば……

「こつ、この度は助けてくださいますとこつ……誠に有難うございました！」

喃んだ……所詮俺のコミュ力なんてこんなもんだよ。

「ハッハッハ、元気になって何よりだ。今はまだ万全ではないだろう。ここに居る彼女、明石と夕張の言うことを聞いて安静にしていなさい。後日、君から話を聴けることを楽しみにしているよ」

そう言つて二人を指す提督。ああそうだ、夕張だ夕張。……つて違う！

「あの……」

「おつと忘れていたよ。私はここ、佐世保鎮守府で提督をやらせてもらつている田代という。気軽に提督と呼んでくれ。……それで、君のことは何て呼べば良いかな？」

なるほど、田代さん。いや提督さんね……つてヤバイヤバイ。

俺も名乗らねば……頭の中空っぽ！ どうすりゃいいんだよ。

「ク、クレムソン級駆逐艦、スチュワートです……？ え、つと……ありがとうござい
ました……ハイ」

やっぱり今回も駄目だったよ。見ての通り、苦笑いすら貰えない残念な自己紹介だろ
う？

「あーっ！ 起きてるっ！ って提督う!? お、お茶でもしていきますか？」

「遠慮しておくよ。彼女の様子を見に來ただけだからね、仕事がまだ残っているんだ。
お茶はまた時間があるときに付き合おう。それに君たちも疲れているだろう？ 彼女
も目を覚ましたみたいだからゆっくり休んでくれ。それと、後日彼女を連れて執務室ま
で来てくれ。時間は大淀に伝えるといい。空けておこう」

「分かりました！」

近くでうたた寝していた夕張が飛び起きて騒ぎ出す。分かりましたなんて言っただ
けど提督さんが出て行ったときに残念そうな顔をしてたから多分提督と一緒に居た
かったんだろう。

慕われてるじゃん。ま、言葉からして優しい人って分かるんだけどさ。

グルリ！ と効果音が付きそうな速さで夕張がこちらに顔を向けた。怖……あと目
がヤバイ。獲物を狩る目をしている。

「私は兵装実験軽巡、夕張よ。それでそこで寝てるのが工作艦の明石。おい、明石く？」

……起きなさいよ！ 彼女、起きたわよ？」

「何よ夕張……え、彼女が起きたあ!？」

これが、鎮守府で目覚めた俺の最初的一幕だった。

工廠の二人組

「ごほんっ！……初めまして、私は工作艦の明石です。よろしく願いしますね。それで、貴女の名前は何ですか？」

「初めまして、私はスチュワート……です。夕張さん、明石さん、助けてくださいありがとうございます。どうぞございました」

とりあえずお礼を述べる。少しでも柔らかい雰囲気になればいいんだけど……

「修理するのは当然ですよ。私たちの仕事ですから！……それで？ 体の方に問題は無いですか!? とりあえず立ち上がって確認してみてください！」

「艀装は完全には直せなかったけどどうする？ 折角だから何か好きな物でも積んでみたりする!! 今なら——」

勢いが強い！ 質問とかは一人一つまでって小学生でも知ってるんだぞうわ一体何を……ウボアーツ！

「もうダメ……殺して……殺して……」

俺はベッドに体育座りをして膝に顔を埋めて嘆いていた。女の子みてえな事してん

じゃねえよ気持ち悪いって？ あんなことされたら羞恥のあまり女々しくなるわ！

庄の強い2人の勢いに押されてワタワタしている間に明石に手を取られ立ち上らせられ、病衣を外されて触診された。驚きのあまりフリーズし、戸惑い、止めようとしたら既に終わっていたようで服を元に戻されてご覧の有り様である。

怪我と服装が元に戻っても心に傷が出来ちゃあ世話ねえよなあ……

今の体の裸を初めて見た俺は酷く混乱していた。何？ 女同士だからってこんなに脱がせることに抵抗無いの？ それとも明石がレズだったりするのか？ もしそうなら警戒しておこう。

脱がせられるのは好きじゃない。露出癖なんてないしそもそも精神は男だ。女の体だからってホイホイ脱ぐのは完全に変態だろう。そもそも俺童貞にそんな度胸はない。

「ご、ごめんなさい。貴女の体が気になってつい……」

……これってかなりの問題発言では？ 自分は触り魔ですって言ってるようなものじゃない？ こんなのが医務室に居たらおちおち怪我もしてられない。

「ごらっ！ 何やってんのよバカ……。ごめんなさい、許してくれない？ スチュワートちゃん……言いくいいわね……。スーちゃんの容態が気になってたのは私もだから」

「スーちゃん!!」

「うん。ダメ？ まあ、アレ明石はちよつとやり過ぎだけど、悪気があった訳じゃないのよ

「？」

「ダメ、じゃないです……けど。」

かなり気軽に、シンプルな渾名を付けられて困惑してる。渾名が付くまで早すぎないか？ もうちよつとこう、お友達とかの段階って無いの？ いや、邪険に扱われたって訳じゃ無いから嬉しいだけど……ええ？

「えつと……ありがとうございます夕ば「それでスーちゃんの艦装はどうするの!? もう妖精さんも直せないくらいポロポロだったんだけど……」」

感動が台無しだよ！ 確かに艦装は大事だけどさ……

「えつ。……まあそうでしょうね。艦装って作り直せるんですか？」

「もつちろん！ 私と明石に任せて！ ……それでだけど、この際だから私が考えた新兵装、搭載してみない？」

あつ……夕張は夕張で結構なマツドサイエンティスト味を感じる。明石のことアレって言う前に夕張も結構アレだと思ふ。

でも新兵装と聞いて食いつかねば漢が廃る……今は艦娘だけど。それでもロマンを捨てるだなんてとんでもない！

保留にしてもらう旨を伝えると非常に喜ばれた。怪しげな笑い方をしている夕張を見ている俺に明石がそつと耳打ちしてきた。いつの間に横に……ビクツツとしてしまう。

今ので寿命が半年は縮んだ間違いない。

「夕張は、今までのいろんな子に似たような提案をしてたんですけどほぼ全員から素気無く断られてまして。貴女が前向きに考えてくれたから喜んでるんです。……何されるかは分からないけど、きつと大丈夫ですよ！」

一気に不安になつてきた。提督さんの様子から二人とも普段はまともなんだろうと分かるが、これはちよつと……。二人の言うことを素直にハイハイ聞いていたら玩具モルモットにされるでしょコレ。

なんて考えていたら腹の虫が盛大に暴れ始めて俺たち三人の動きを止めた。めっちゃ恥ずかしい。……クツ、殺せ！

二人に引き連れられて食堂へ行く。

と言うのも、2人の勢いが強いこともあるけど、俺の足が役立たずになつてるからだ。筋肉痛を酷くしたような感じでかなり歩きづらい。包帯でグルグル撒きにされてるのもあるのかもしれないけど。

時間は午後四時くらいだからだろうか、人は居らず広い空間はガランとしていた。良いい匂いはするものの電気は点いておらず、どこかアンバランスな雰囲気醸し出していた。

「すいませーん！ 間宮さーん！」

夕張が声を張り上げる。すると奥の方、恐らく厨房があるところから女性が出てきた。彼女が間宮さんだろう。

「はーい！ ってあら？ 彼女起きたの？」

良かったわね。なんて言ってくる間宮さんに挨拶をする。明石が言うには俺が昏睡しているときの飯も間宮さんが作ってくれたそうで、つまり大恩人ということになる。頭が上がらない。

「初めまして、給糧艦間宮です。夜中以外は食堂に居るからお腹が空いたらいつでも来てください」

間宮さんがそう言うと夕張が「スーちゃんは何食べますか？ 間宮さんの料理はとっても美味しいですよ」なんて言ってくる。

スラバヤスラバヤから法律スレスレ？ の盗品モドキとかかなり痛んだ果物とか、消費期限が切れた食べ物ものとか獲った魚や鳥ばかりを食べてきた。途中からは駆逐イ級も追加される。何度腹を壊したか分からない。

そんな俺の目の前には日本語で書かれたお品書きがある。……感動だ。腹一杯、ちゃんとしたものが食べられるなんて。

「私は蕎麦！ よろしく間宮さん！」

「カレー、は無さそうですし……悩みますねえ」

夕張は即決、明石は何を食べようか悩んでいるようだった。その反応でどれも本当に美味しいということが分かる。

「うどんを……うどんをお願いします……」

感動のあまり涙声が出た。

少し待ったら出てきたうどんはかなり美味しそうで、実際に美味しかった。空腹は最高のスパイスなんて言うけど、そんなものが無くても美味しいだろう。

うどんを大切そうに食べる俺を見て間宮さんもニコニコしていたと後で知った。

工廠、医務室にて俺は夕張から詰め寄られていた。

「それで、本当にスーちゃんは今までの艦装と似たような艦装を使うことで良いの？ ドリルは？ トマホークミサイルは？」

「そこまでは……」

夕張は一体何を言っているんだろう。ドリルは重りか飾り以外の何者でもないだろう。しかもトマホークミサイルって……え？　なんで実物っぽいものがあるの？　本物よりは小さいだろうけどまだデカいし、あんなのどうやって撃つんだよ。持ってくだけで精

一杯だろ。

「夕張は試験的に建造された所謂先駆者つてヤツで、間違つても色んな武器武装を実験していたんじゃない！」

というのは前世の友達の話であるが、目の前の彼女はどう見てもマッドサイエンティストである。これじゃあどっちが本当なのか分からないな。

まあ、自壊しながらオーバーストする機^ツ構^ダだったり、青緑色の発^コ光^ツする粒子が出ないならまあ……予想できる使い勝手から検討させてもらおう。両者ともに絶対に作つて欲しくないけど。

それと、トマホークミサイルが作れるなら以前例の妖精さんに言ったような物も作れるかもしれない。

「えっと、いくつかりクエストさせて貰えるなら腰に着ける艦装と魚雷だけで、手に持つ砲は軽いやつが良いです。あと……盾を貰えないですか？出来れば片手で扱えるデカイヤツが良いですね」

「へっ、盾？」

「なんでそんなをモノを……」

うーん、何故と来たか……漢のロマンなんて言つても「はあ？」つてなるのは目に見えているし納得され……るかもしれない。この2人には通用しそうな気がする。

適当な理由でもでっち上げておくか。考えるの面倒臭くなってきたし。唸れ俺のアドリブ力ウ！

「え〜つと……ほら！ 駆逐艦の主な兵装つて魚雷だと思っくんですよ！」

「う〜ん、まあ間違つては無いわね……でも、砲も大事でしょ？ 一部の駆逐艦娘は低い攻撃力を補おうと必死なのよ？」

「私もそう思います。だけど、盾を持つて防御力を上げて継戦能力を上げることの結果的にプラスになるんじゃないかなあつて思っています。それに、剣とか持つてる艦娘も居るそうですし」

おっコレ結構良い感じの理由なんじゃない？ 反応はどうだ？

「へ〜面白いじゃない。研究価値あるよそれ！」

釣れた釣れた。さっすが夕張さん！ 話が分かる。

「ありがとうございます。他にもやりたいことがあるので妖精さんを何人か借りて良いですか？」

「へー……他にも何かするつもりなんだ……だったら私にも一枚囓ませてよ！」

何かするつもりじゃないとそんなことは言わないと思うんだよ。あと、一枚どころか希望だけ出したらあとは全部投げるから十枚だろうが百枚だろうが囓ませてあげよう。イヤという程に。

「ちよつと！ 修理するのは私もなんだから一人だけ除け者にしないでよー」

明石も食いついてきた。正体表したね。

『艦これ』の二次創作で大体なんでも作ってる技術者二人を味方に付けたんじゃないか？ と思うと自分のやりたいことが出来るような気がして、自然と口元が緩んでいった。

悪魔の冊子

「それで？ 盾を作ると言いましても、私たちだつて作ったことないので勝手に分かりません。私たちはやりがいのある仕事が出来て良いんですけど、その間貴女は何をするつもりですか？」

「それは……」

明石から放たれた一言で冷静になる。

確かに、目が覚めない重症患者なら仕方ないけど、目が覚めた野良艦娘をただ居候させる訳にもいかないだろう。深海棲艦と戦争している以上どうでもいいところりソースを割くメリツトは鎮守府には無い筈だ。

それに、間宮さんの飯をタダ飯にするのは、戦っている艦娘に対してかなり失礼なことだろう。

「だからといってほとんどの艦娘と顔を合わせたことが無い上に正式な艦娘ではない……違法入国してきた怪しいヤツに仕事が振られるかと言われたら、そんなことあるワケないじゃんって笑われてしまう。」

「こつ、工廠とかの清掃くらいしか出来ませんが……見捨てないで貰いたいなあつて

……」

情けない上に汚いやり方で嫌になるけどこうする以外に思いつかない。鎮守府から見捨てられたら終わりなのは間違いない。ホームレスになるし、なんなら純粋な人間じゃない以上人権があるかも分からない。

「どうしてそうなるのよ！ スーちゃんは明日、提督の執務室に連れて行く！ そこで

今後のことについて提督から話を聴く！ それでいいでしょ!?! 明石！」

「ええ。……聞き方が悪かったですね。ごめんなさい」

あー……確かに提督が夕張に後日ホニヤララって言ってたな。後日って明日かよ。

後日（明後日以降とは言っていない）みたいなの？

「あーもうっ！ 明石の所為で変な雰囲気になっちゃったじゃない！ 明石！ 後で大

淀さんに明日の昼過ぎに提督の時間空けておくように伝えておいてよ！」

「分かったから、そんなに怒らなくてもいいじゃない……ごめんなさい。ただ手持ち無

沙汰な時間をどうするか気になっただけで」

「いいえ、こちらこそ変な事を言いました。明石さんは心配してくれたいたのに、変な解

釈をしてみました。私の方こそごめんなさい」

「本当ですよ……捨てるために拾うなんてことはしません。もう少し物事を前向きに捉

えるようにしてみたらどうですか？」

これは前世から言われてきたことだ。こう言われたってことはやっぱり俺は俺なんだ。……だったら返す言葉もこうだ。

「善処しますが、期待はしないでください」

「いいえ、期待しておくので曖昧にして逃げないでください。……夕張もそう思いませんか？」

「そーそー。物の捉え方一つで世界は案外簡単に変わるモンだよ？ 私も期待してる」

うええ……この返しは初めてだあ……逃げ道が塞がれたぞ？ まあ、善処するって言ったからちよつとずつ頑張つていけばいいや。少しずつだよ少しずつ。いきなり変えろなんて言われてないんだし。

「ハードルを上げてきますねハハハ……。ん？ 明石さん。妖精さんが何か渡したいものがあるそうですよ」

「あら、ありがとう妖精さん。……これは？」

いつの間にか近くに来ていた妖精さんはクリアファイルを持っていた。

なんて眺めていると紙を持った妖精さんは離れ、そこに他の妖精さんが群がっていつ揉みくちやにされていた。

クリアファイル……ああ、覗くなつて言われたヤツか。

なんて呆然としてたら、先に紙を見てた明石と夕張が呟いた。

「設計図ね」

「あくこんな時間になっちゃったか……スーちゃんはまだ寝なさいよ。明日、提督のところ连接到行くから体調調整しておかなきゃいけないでしょ？」

「そうです。まだ病み上がりですからゆつくり休まないと。ベッドはあの部屋にありますよ」

夕張と明石にそう言われて外を見る。確かに外は暗くなっていた。

提督のところに連れて行くつてのもあるだろうけど、なんか適当な理由を付けて追いつて感じがする。釈然としないけど従おう。2人だつて俺に付き合い続ける以外にも時間を使いたい筈だ。それを邪魔するわけにはいかない。

まあ、提督なんてお偉いさんと対話するわけだから、イメージの4つや5つはしておかないと緊張でガチガチになってしまう。寝落ちにもピツタリだからやらない理由はないか。

「それではおやすみなさい。明石さん、夕張さん、妖精さんたち」

医務室に向かう扉を閉めながらそう言う。扉の向こうから夕張の「また明日ね」なんて声が聞こえた。

横になって明日のイメージトレーニングしようと思つてたらいつの間にか寝落ちし

た。

「新しい朝が来たっ……なんてな。フフッ」

目が覚めて一人で呟いて笑う。外は明るい寝過ぎた感じの空の色ではない。俺の体内時計は六時半頃だと告げているからそのくらいの時間だと思いたい。

部屋には俺以外に誰も居らず、外は案外静かなものだと思う。『艦これ』に出てくる艦娘は三百くらいだったか？ それが鎮守府という敷地の中に居るんだからもつと騒々しくても良いと思うんだが……

そう思ったがすぐに出撃や遠征のことを思い出し、常にそれだけの人数が居る訳がないと勝手に納得する。

近くの台の上には水の入ったペットボトルと何かのファイルと……いつの間にか作つたのだろう、深紅と黒の色をしたセーラー服。紛れもなくあの妖精さんが作って俺がずつと着ていた服だった。踏まれたら痛そうな金属のブーツまでしつかりと用意してある……ん？

「なにコレ？」

服の下には薄い冊子があつた。

「ちよつとバカな貴女へ？　へえく……ハアツ!?」

タイトルだけならまだ良かった。だけどこの中身は喧嘩を売ってるとしか思えないから俺の怒りは当然だろう。「日々の髪のお手入れ」だの「服の着方」だの「女らしい仕草」とか……今すぐ死んであの世に行つてアイツ妖精さんを数発ぶん殴つても許される。そう思える所業だ。

そう憤つていたのも束の間、部屋の外から「起きてるみたいですよど入つてもいいですか?」なんて声が聞こえてきて焦る。この冊子だけは隠しておかないとマズイ。

「だ、大丈夫です!」

冊子は丸めて布団の下に押し込む。多少の折り目は付くけど秘密がバレるのに比べたら些細な問題だ。

「おはようございませう明石さん。何か御用でしょうか?」

「おはようございませう。提督のところへ貴女を連れて行く時間ですけど、提督もお忙しい身なので、出来れば今から30分後に連れて行きたいと思つています。準備しておいでください」

「分かりました」

それだけ言うとして出て行つてしまった。居られると困ることが多すぎるけど、連絡がかなり事務的な内容だったから実は嫌われてるんじゃないかと勘違いしそうになる。

それにしても困った。30分後っていう余裕の無さもそうだが、その時間内にしつかりと服を着られるかが問題になってくる。枕から妖精魔さんの置き土産書を取り出す。

「止む無し……か。恨むぞ妖精さん」

結果はというと、髪に癬が付いているものの、服装自体はしつかりと着ることができた。「服着るだけだろ」なんて思ってたけど、実際はブーツを履くのにかなりの時間を使った。

前を進む明石は一言も喋らずに提督の執務室へ歩を進めている。……なに？ 俺殺されるの？ せめて一言くらい掛けて欲しい……もう既に緊張で胃が捻ねじ切れそうだ。

「はいです」

「……です。じゃないよ……」

偉い人の判断

「ハハハです」

ここです。じゃねえよ……。千尋の谷の底に叩きつけるように落とさないで？ 何か明石を怒らせるようなことしたっけ？ 心当たりがないんだけど……

唾を飲み込んで深呼吸。まだ、まだ意識はあるし緊張のあまりの吐き気はしない。まだ舞える……。俺はやれる。

ノックを3回する。2回だっけ？ それはトイレだっけ？ まあいいや3回で。

木製の扉は木特有の奥に響くようなコンコンという音が出る。

デカイ扉に手を掛ける。よく手入れがされているのか重そうな割にはスーツと開いた。

「失礼します……」

そう言つて部屋に入る。目に入ったのはシンプルな造りの部屋だった。本棚が沢山あるが圧迫感や窮屈さを感じさせず、朝方だというのに暗くない。

執務机の上には数多の紙束が置かれ、綺麗に清掃されていて、無駄なものが殆どない部屋との違いに違和感を覚える。

……提督ともなると優雅にティータイムもするんだなあ。なんて、雑多な物が綺麗に並べられている棚に置かれた物の中で、一際存在感を放つティーセットを見てそう思った。

視線を執務机に戻すと、その机の主は俺が来たことに反応して、執務中だったのだろうか、顔を上げてこちらを見た。

「おはよう。昨日はよく眠れたかね？」

「おはようございます。お陰様で元氣です。ありがとうございます」

「それは良かった。それで、君に来てもらったのは他でもない。君について話を聴きたい。簡単に言うなら事情聴取だ。受けてくれるね？」

「はい」

そんな言い方されると断れない。元から断るつもりなんてないけど。

まあ、事情聴取は予想通りだ。提督がどこまで詳しく報告を受けて何を知っているのか俺は知らないけど、単艦で駆逐棲姫に挑んでズタボロで、しかも見たことが無い艦娘。俺が提督の立場でも助けるまでは全然オツケーだけど、そのあと絶対に事情の説明を求めらるだろう。

むしろ容態が安定し次第、拘束や監禁されなかつただけ余程マシなんじゃないか？

視線を提督から逸らす。提督の両隣には二人の艦娘が居て、一対一で話し合う事を想

定していた俺の精神に大きな揺さぶりをかけていた。

その内一人は大淀。恐らく、提督の机の上にある書類の処理をしていたんだろう。二次創作でもだいたいその立ち位置は変わらなかつたし、多分間違いじゃない筈だ。

——目が合った。無表情を浮かべたままこちらを見ている。嘘や矛盾の一つも見逃さないという強い意志を感じる目に見える。

思わず目を逸らす。このまま大淀の目を見ていたら心の中まで覗かれる。そう思つて目を逸らしたけど、疚しいことがあるから目を逸らした、なんて思われて突つ込まれたことを訊かれたら終わりだと感じた。

もう一人は長門だ。仮に俺が擬態した深海棲艦だつたとして、暴れたりしても対応できるようにここに、提督の護衛の為に居るんだろう。

——目が合った。腕組みをして威圧感を漂わせているが、穏やかな顔をしている。俺が暴れたりしない^{チキ}と^ン野郎^だと気付いているぞ。と言いたげにフツと笑つた。

「二人は長門と大淀だ。ここにはとある用事^{事務と秘書艦}の為に来てもらっているから気にしなくても良い」

気にするわ！ 大した用事じゃなきゃ終わるまで待つてるから！ もしくは一時退出を促せば良いんじゃないの？ それをしないってことは何かしら今からの会話に関わってくるってことだよな？

……なんて思っても言えないし言わない。口は禍の門、その一言で何が起きるか分からない。だったら極力気にしない方向で……無理だろ。

「それでスチュワート、君は一体どのような経緯であの傷を負い、ここに辿り着いたのか、聴かせてもらえるかな？」

うわあ……予想通りの質問だけど嘘^大発見器^錠と暴力装置^{長門}が居るのに迂闊な発言は出来ない。

取り敢えず、転生関係と食糧事情は言わない方向で話していけばいいか。何か訊かれたら「知らない」と「妖精さんがくれた」で良いだろう。妖精さん、オラに力を分けてくれー！

「私は——」

それからは語った。語るに落ちたんじゃないかって自分で錯覚しそうになるくらい語った。

スラバヤとある妖精さんから造られたこと。

妖精さんに従い日本へずっと移動していたこと。

日本を目前にして駆逐棲姫に捕まったこと。

コミュ障碍させた俺は半ばパニック状態。

身振り手振りで何とか伝えようとして、語彙力の無さに恥ずかしくなって、あとはな

るようになれって感じで諦めた。

「——そして今、ここに居ます。これが私の話せる全てです」

「そうか……それで、君の言っていた「妖精さん」は今どこに居るんだね？」

「妖精さんは駆逐棲姫に特攻した時にその……。最後に「ありがとう」だなんて……。気の
良い妖精さんでした。ちよつと変なところもありましたけど、旅の道連れだったんで
す」

良し！ これが多分ひと段落はするだろ。最後まで殆ど嘘 “は” 言っていない
もりだけど、大淀はどうだ？ チラ見する。

「では貴女は今、どこにも属していないんですね？」

手元の紙に何かを書いているみたいだけど、角度的に見えない。議事録とかだったらボ
ロが出そうで怖いんだけど。

「まあ、そうなります……よね？」

「うむ。胸が熱くなるような話を聴いていなかったのか？ 大淀。そもそもどの鎮守
府でもないところで建造されたんだ。どこかに属している筈がないだろう。そうだな
？ 提督」

「ああ、長門の言う通りだが少し違うぞ。スチュワート、君はどこにも属していないので
はない。どこにも属していなかったんだ」

ん？

「提督、それってまさか……」

「ああスチュワート、君をこの鎮守府の一員として迎えよう。これは私が判断した決定事項だ」

「えつと」

おお？ おお。

驚きが天元突破してチンケな感想しか出てこない。だって鎮守府の一員ってことはつまり鎮守府ってことだろ？ ってことは何？ ……安定した衣食住と警察に怯えることのない素晴らしい毎日って事だな！

「これからよろしく頼むよ。スチュワート」

脳内でパニックを起こしていたら立ち上がった提督が椅子から立ち上がり近くに來ていた。右手を出してるからこれは……握手をしないとイケないのか！

「こつ、こちらこそよろしくお願ひします！ 頑張ります！」

提督と握手をする。俺の手が前世よりも小さいからか、提督の手はより大きく、頼もしく感じた。

握手を終えると、後ろから長門が頭を押さえつけてきたので思わず「痛っ」と言っ
てしまう。

「おお！ 濟まないな。提督！ そうと決まれば今日はスチュワートの歓迎会をするべきだろう！ 勿論、許可してくれるな？」

あまりにも突然の話にそれでいいのか？ と言いたくなった。いくら何でもやりた
い放題じゃないか？

「許可しよう。だが、今日の仕事を終わらせてから、が条件だ」

「ふふつ当然だ。この長門はいつだって全力だ！ スチュワートは待っている。大丈夫だ、私に任せておけ！」

そう言うが早い物凄い勢いで書類を捌き始める長門に戦慄する。一体どこからそんなやる気が出てくるんだ……歓迎会って言って、自分たちが騒いで楽しむための理由が欲しかっただけだったりして……

「あ、もう戻っても大丈夫ですよ。明石も呼んでありますので」

大淀にそう言われて執務室から連れ出される。「失礼しました」って言うのも忘れな
い。

部屋の扉の近くには明石が立っていた。隣の大淀が怖過ぎで、連れ出された時は何処かに連行されるのかと思つてたけど、見知った顔があつてなんかホツとした。

「……大淀さん、ありがとうございます」

「ありがとう大淀。さ、行きましようか。妖精さんが面白い物を貴女の為に作つたらし

いんですよ」

「それは気になりますね。一体何でしょうね？ あ、それと……これからもよろしくお願ひします。明石さん」

「それって……良かったわね。こちらこそよろしくね。スチュワートさん」

あ、なんか柔らかくなつた。……やつぱり今まではどこか信用してなかつたって感じだつたのかな？

執務室から工廠に向かって明石と歩く。

窓から外を見る。

「なんか鎮守府に着いてから現実感が無いです。上手くいき過ぎてる感じで。」

「夢みたい？ でも現実だよ」

そんな会話もやつぱり現実感がなかつた。

でも、悪い気はしなかつた。

新兵器

工廠に戻ると妖精さんが何人か寄つて来た。身振り手振りだけで何を言ってるかが聞こえない。パントマイムをしている訳ではないんだらうけど……もしかして、あの妖精さんが実は凄いヤツつてことだったりして……

何はともあれ妖精さん達の指す方へ向かう。

「おつ、来たね。スーちゃんに妖精さん達からすっごいプレゼントがあるよ〜」

向かった先には夕張と……誰だ!? いやどっちだ!? 『提督』経験ゼロの俺には分からんぞ! 伊勢型のどつちかなのは分かるんだけど。伊勢の方かな?

「プレゼントですか? 気になります。えつと初めまして。駆逐艦スチュワートです。今日からこの鎮守府の一員になりました。よろしくお願いします」

「ご丁寧にも。私は航空戦艦の日向よ。………ふうん。悪くない」
日向の方だったか………って悪くないって何!? 黙つてないで説明して欲しい。気になって夜も眠れなくなる。

「それじゃあ夕張、日中はよろしくねー」

そう言つて夕張の返事を背に受けながら明石が工廠から出ていく。歩くペースが先

程とは打って変わって遅く、フラフラしている。アレは……徹夜して作業してた間違いない。昨夜はお楽しみだったようで。

なんて思ったけど、隣に居る明石と同じことをしてそんな夕張は妙にツヤツヤしてるし……分からないな。

「それでスチユワートと言ったな。お前もどうだ？　これを見る。瑞雲と言うんだがな」

そう言ってプラモデルのような戦闘ヘリをどこからともなく取り出す日向。

妖精さんといい、この世界の奴らはどこにそんなの仕舞ってたんだよってくらい手品めいた方法で物を取り出す。袂…は無いし、懐も厳しそうだ。いやホントどっから出したの!?

「へ、へえ……それが瑞雲ですか」

「ちよつとスーちゃん！　待つ「そくだ。お前にも瑞雲の素晴らしさを教えてやろう！」始まった……」

夕張の止めようとする言葉が聞こえてきた。なんかマズい事でもあるの？

しかし夕張の反応が間違っていないさった。俺が後悔し始めたのは、30分経つても終わる気配を見せない瑞雲トークにうんざりし始めた頃だった。

「——とまあ、瑞雲の素晴らしさについては取り敢えずこんなものでいいだろう。正直まだまだ話足りないが……。私は伊勢に会って来るよ。瑞雲の話が聴きたくなったらいつでも来い。待っているぞ」

日向は工廠から去っていった。

「待たせるのはアレだけど絶対に行きたくない……。瑞雲洗脳じみたことされるつてしか言えなくなるぞアレは……」

つい、そう呟いてしまった。

「それがスーちゃんの素!? うんうん、そっちの方が自然な感じがするよ。無理して丁寧に話さなくても良いんだからね?」

「素じゃないです。ちよつと疲れと悪意が混ざって口が悪くなっちゃいました。それはそうと……。何でしたっけ? 妖精さんからのプレゼント?」

危ねえ危ねえ、これで騙されてくれねえかい夕張さん。流石に前世に突っ込まれるのは精神衛生がヤバイことになるからちよつと……

俺も妖精さんからのプレゼントは気になってたんだ。瑞雲の話で2時間もお預け喰らってたからそろそろ好奇心でエゴ自我も殺せろと思う。

「そーそー。妖精さん達がすごい頑張ってるね、私もつい徹夜しちゃうくらい熱中しちゃってさ! 盾もある程度の目処がついてね、一週間は掛からないと思うよ! それ

と妖精さんが作った物はその台の上にあるから、妖精さんに見せてもらいなさいよ」夕張が顔を向けた先には確かに台があった。妖精さん達がたくさん集まっている所だろう。

寄ると、自販機の小さい缶と同じくらいのサイズの何かが布に覆いかぶさっているのが目に入った。

妖精さんが布を取る。そこにあつたのはやはり俺が欲しがっていた物。手榴弾！

……ではない。魚雷をぶん投げたら簡易な爆弾として成立することは知ってるからだ。ありがとうイ級^{実験台}。

「何よそれ？ 妖精さんたちが頑張ってたのは知ってるけどそれが何なのかはイマイチ分からないのよね」

夕張が訊いてくる。やっぱり第二次世界大戦中には存在していなかったのか？ 俺は武器マニアでも何でもないから分からないけどさ。

夕張が知らないって反応で俺は満足できた。むしろトマホークミサイルは知ってるんでコレは知らないんだよ……知識が微妙に偏ってないか？

「これはスタンングレネード。フラッシュバンとも呼ばれます。閃光や爆音で相手の視力や聴力を一時的に奪える代物です」

駆逐艦みたいな素早く行動できる艦種なんだし、ロールプレイングゲームみたいにサ

ポート、妨害に特化すれば良いんじゃないか？　　つて考えを妖精さんに言ったら面白そうだって結構乗り気だったのを覚えている。

どう頑張っても戦艦とかの火力には及ばないのは予想できたから、速さを活かそうと考えた結果がこれである。

あとは純粹に中二病を発症して、衝動的に妖精さんに作って欲しいって頼んだから。きつと移動中に設計図とか書き上げてたのかもしれない。

台の上で一人の妖精さんが、偉そうに腰に手を当てて踏ん返り返っているのが見える。間違いなくその妖精さんが作ったんだろう。周りの妖精さんがちよつと引いて、その妖精さんの周りに空間が出来ているのが面白い。

「これはこうやって使うんですよ」

そう言つてピンを抜いて、工廠の何も無さそうなところに投げる。自分の近くにポイって投げたら只の自爆なんだよね……しかも本来は屋内での使用を想定してるから海上で使うとなると性能の半分も出せないだろう。

でも常識の外側にあるものに対して適切に処置できるヤツはそうそう居ない事を俺は知っている。戦場に汚いもクソもあるか。

「ん？」

カンツと音を立てて缶は健在している。

「起爆しない?」

「イイーーン!」

「!?!」

まるで黒板を引つ掻いたような背筋にダイレクトアタックしてくる音が工廠に響く。

あああ! 耳が、耳が……

耳鳴りが治まるまでちよつとの間、耳を押さえる夕張と視線を交わす。「ちよつと!いきなりとか止めてよね!」って言いたげに睨んでくるので目を逸らす。

「いやあ、想像以上でしたね……流石は妖精さん」

てつきり予備の鼓膜を妖精さんに作って貰う羽目になるかと思った。

「ちよつと! 耳が聞こえなくなったらどうするつもりだったのよ!」

「私も喰らいましたのでお相手つてことになりませんか? 妖精さんが手を加えていたらしく、想定と違いました……」

絶対に起爆のタイミングと中身弄つてあるだろコレ。特に眩しいくらいの閃光は出なかつたし、これはただの音響手榴弾じゃね? フラッシュによる目の眩みが無いとかどうしてくれるの? と思ったが似たような種類の缶が沢山ある。一つずつ片っ端から投げていく訳にもいかないしなあ……

「せめて妖精さんと会話とかで意思疎通出来たらかなり楽なんですけどね」

「それはそうだけど、私たち艦娘が妖精さんと会話出来たら提督なんて要らないし、そうになると艦娘も人間から「敵」って見做されちゃうかもね」

確かにそうだ。もし夕張が言った通りなら人間から見た艦娘は、一般人には見えない妖精さんと会話が出来て、人間並みに賢く、水上を高速で移動できる上にかんりの力を持つ人型生物。敵対したら脅威以外の何者でもないだろう。

なにせ個で見たら完全に人間の上位互換みたいなものだ。何としてでも友好的にしないといけない。そして取引をする。譲歩をする。不満が溜まっていきやがて戦争へ……

もしもの、仮にあり得たかもしれない可能性は悍ましいモノだ。想像しただけで怖くなってくる。今は深海棲艦が居るから艦娘は存在しているけど、深海棲艦が居なくなったら？ 戦わない軍艦艦娘に価値は……ん？

「なんですか？ ……あくなるほど」

明後日の方向に思考が飛んだところで妖精さんが紙を渡してきた。渡された紙には缶の種類が書いてある。

「妖精さん。出来れば中身の種類ごとに缶に色を着けて分けてください。このままではどれがどれだかすぐに分かりません。……夕張も盾の制作頑張ってください。楽しみ

に待ってます」

とりあえず深海棲艦はまだいるんだし、もしもの話にアレコレ考えるくらいなら目の前のことに取り組んだほうが良さそうだ。

あの妖精さんはもう居ないけど今は鎮守府の仲間が居る。1番の新参者らしく色々
と指導を受けてこの世界に適応していこう。

歓迎

「やっぱり覚えられません！ 数が多すぎます！」

工廠の一角で夕張や妖精さんが作業している音をBGMにファイルを読んでいた。勿論あの妖精さんが用意した指南書危険物ではない。

恐らく大淀か明石辺りが用意したのでらう、ここ佐世保鎮守府に所属している艦娘の写真と名前、プロフィールやメモ書きが載っている紙が綴られていてファイルだ。

艦娘たちの顔と名前を覚えようと読み始めたけど、それなりの厚さがあるファイルの半分もいかないうちに集中力が切れた。

「大丈夫だって。皆のことはそのうち覚えるよ」

果たしてそんな日は来るのか。パラパラと捲ってみた感じではページ数は余裕で百100を超える。もしかしたら200も有り得るかもしれない。

これが服装指定のある中学や高校とかなら全員の顔と名前を一致させるだけでもかなり社交的コミュ強だと思う。人の顔と名前を覚えるのが苦手な俺にはかなりの難易度だ。

でも幸いなことに服装は全員が完全に統一されていい。○○型つてのはあるけどそのグループ毎に似たような服装をしている。そして、艦娘は髪の色はかなりカラフル

だ。

これらがなかったら覚えることを諦めて狭い交流で良いやって付き合う人を限定してたに違いない。

そう考えながら読み進めていく。

メモ欄に力強く「一番！」だったり、もの凄い達筆で「大和ホテルとは呼ばないで——」だったり、「*猫の足跡が描いてある*」だったり、笑いを誘うようなことも書いてあった。

写真もまた、各艦娘毎にちゃんとした物と変わった物があり、寝起きだったり、サインが入っていたり、絶妙にイメージに合わない可愛い服を着ていたりした。これらを撮った人は今頃生きていないだろう。

それと、すごく目の保養になった。艦娘の容姿が整いすぎてて基本的にどんな写真も画になる。凄すぎない？

「おっ。」

ふとファイルから目を逸らしたら、いつの間にか机の上にUSBメモリが置いてあった。

『……only know fairy?』何これ」

さつきまで無かったから滅茶苦茶怪しい。

でも態々英語で書いてあるってことは俺宛ての何かってことで良いのかな？ でも USBメモリの接続部のカバーが外せないんだけど……これが妖精さんだけが知ってるヤツか？ 謎アイテムだ。

「まあくれるってんなら貰っておこうかな」

使えないからって捨てないように気を付けよう。

そもそも夕張以外の人目なんて無いけど誰にも見つからないようにコソつとポケットにUSBメモリを忍ばせた。

その後何事もなかったかのようにファイルを一度読み、二度目を通し、三度目、これを見ている目的が変わって来た頃、窓の外は紫色に変わっていた。随分と時間が経つ早いなあなんて思っていたら夕張がソワソワしていることに気が付いた。

「何かあったんですか？」

「ま、マイペースね……これから貴女の歓迎会だって聞いてるんだけど」

そういうえば長門がやるって言ってたな。

ファイルの内容が普通に面白くて夢中になってた。ただのプロフィール集なのに一言コメントと写真で個性とか関係とかが見えてくるの面白すぎか？

「忘れてました」

ヤバい。もしかして待たせちゃってる感じか？

急いでフアイルを近くの台に置いた。

「みんな待つてるわよ！ 行きましよう！」

「え？ あっハイ」

すつかり忘れてた。

夕張に手を引かれたまま小走りで付いていく。絶対に楽しみにしてたな？

「みんな、お待たせーっ！」

俺は今、非常に混乱していた。

目の前の大勢の艦娘と大量の料理はまだ分かる。

しかし隣には提督が居る。これが分からない。

「この子が今日からこの鎮守府の一員となった。みんな仲良くしてやってくれ」

しかもそう言つてマイクを渡してきやがった。いや、挨拶の大切さは知ってるしやらなきゃいけないってことも分かるんだけどさあ……この人数の前で喋るのは初めてだからすごく緊張する。

こんな時に何て言うかを移動中に妖精さんとシミュレーションしてた筈なんだけど

全然覚えてない。どうすればいい……アトリフ適当でいいか。

「は、初めましての方は初めまして。たった今、提督より紹介されましたクレムソン級駆逐艦、スチユワートです。まずは私の歓迎会ということで企画、実行をしてくださいました長門さんには最大限の感謝を。そして集まってくれたみなさんもありがとうございます……私からの一言としましては、提督さんも言っていたように仲良くしてください。いい、以上です……」

よし、何事もなく言い切れたぞ！

長門も頷いてるし、問題は無い筈だ。

拍手の音が聞こえたことにホツとして、これ以上注目されなくなかったからスツと椅子に座る。

艦娘になってから絶対にコミュ力上がってるわコレ。まあ、そんな堅苦しい言葉なんて思いつかないし、このご馳走の前じゃあ「長い。早くしろ」って言われるかもしれないしこれでいいでしょ。

「うむ。それでは皆、グラスを持って！」

長門がそう言うのとコップの鳴る音が聞こえてくる。グラスに注ぐような音とアルコールの香りが……まさか全員酒飲むとかはないよね？ いや、長門がジュースだ。良かった。

「では、新たな仲間の歓迎と私たちの健闘を祈って！」

——「乾杯〜！」——

グラスがぶつかると高い音がそこかしこで鳴る。

すぐに楽しそうな会話と笑い声があちこちから聞こえてきた。

みんなが楽しそうに会食できる環境だと理解して安心できた。

俺をダシにした宴会って感じがするけど、邪険にされてるような雰囲気は全く感じないし、みんなが笑ってるなら俺は別にどうだっていい。

お茶の入ったコップを傾ける。

「はら、間宮のご馳走だ。君も食べなさい」

「はい、頂きます」

箸が伸びたのは美味しそうな唐揚げだった。

「さて、私はそろそろ抜けさせてもらおうよ。あとはみんなで楽しんでください」

歓迎会という名の宴会が始まって時間が経った。

誰もがお腹が一杯になって箸を止め、酒の席特有の世間話や愚痴がメインのフェイズに突入した頃、提督が食堂を離れた。

結局提督は多くの艦娘が酒を注ぎに来て、ゆっくり少しずつ飲んでいった。見た感じ

結構高齢……そろそろ六十くらいだろうか？ 流石に自分の限界くらいは分かるのか、それとも自分が居ることで艦娘が羽を伸ばしきれないと思っているのか。

「No！ 提督うー！ 待つて下サーイ！」なんて声が聞こえたから、もしかしたら酔った艦娘に何をされるか分からない恐怖を感じたのか……だとしたら人気過ぎるつても考え物だな。

「……」

周りを見ると談笑や愚痴を言い合う艦娘たち。当たり前前だけど “生きてる” “つて感じがする”。

でもやっぱりちよつと疎外感を感じるといふか何と言うか……正直なところ会話に混ざれない。人付き合いが無くて共感できる話題がないつてのが大きいだろうけど、これはどうしようもない。

つまりやることがない。

まあいいや。もう少しサラダを食べて、頃合いを見て長門に声かけて医務室に退散しよう。

「なに湿気た面で飯ばつか食つてんだよ！」

と、近くにドカツと腰を下ろした艦娘が居る。

「でもまあ、元気になって何よりだな！ オレは天龍。よろしくな！」

「天龍ちゃんの判断次第では貴女は今ここに居なかったのよ？ それと、自分を大切にしない子には、お仕置きが必要かもね？」

マジ!? 天龍さんマジリスペクトっスわ! さすがおっぱいのついたイケメンって呼ばれるだけはある。あと龍田さん怖すぎでしょう……

「えっと、ありがとうございます天龍さん。それと龍田さん、お仕置きだけは許してください……」

「うーん、どうしようかしらあ？」

「ヒエツ」

「龍田あく。もつとガツンと言っちゃっていいびよん! 自爆するだなんて超ド級のバカだびよん! ふっふくふうく! 悔しかったら何か言い返してみるびよん!」

この特徴的極まりない語尾は卯月だな? 俺の自爆を知ってるってことは卯月も天龍達と一緒に居たつてことか。悔しかったらつて言われても、全くもつてその通りだから黙るしかない。あと重い。肩に手を載せて跳ねないでほしい。

「卯月の言う通りだよ。まったく……かわいくないね」

また声を掛けられた。卯月と同じような服装だから睦月型で、黄色だから確か臯月と、もう一人は……水無月?

「ごめんなさい。助けてくれてありがとうございます。臯月、水無月」

「弥生です。別に……怒ってなんかいいですよ？ 呆れてるだけ、です。」

「おおう、名前間違えちゃったよ。でも確かに怒っては無さそう。本当にただ呆れているだけなのか言葉も出ない程怒ってるのかのどっちかの判断は難しいところがありそう。せめてもう少し顔に出てたら分かるのに。」

「だが、元気になってなによりだ！ よし！ スチュワートも向こうで飲もう！ なにせコレはスチュワートの歓迎会だからな！ 説教など盛り下がるだけだからまた後日だ！ 借りていくぞ！」

「緑の髪……長月か。つてめっちゃ酒の匂いするんだけど!? 誰だこんな中学生以下にしか見えないようなのに酒飲ませた奴は!？」

「進む先に居た夕張と目が合った。助けてくれ。酔ってる駆逐艦に絡まれてるんだが……」

「あつスーちゃん！ おいでおいで〜」

「手招きされた。ホツとしたのも束の間、夕張とその他一緒に座っていた面子の顔も薄っすらと赤くなっている。そして近くに転がる酒瓶。」

「安全地帯じゃなかった。ここも地獄だ。」

「おお！ 今行くぞ！」

「えっ待つて、このままだと俺もお酒飲ませられそうなんだけど?」

長月は出来上がってるし、他の子供にしか見えない艦娘も顔赤いから多分飲んでる……でも俺は飲まないぞ！俺は成人だったけど、この体はまだまだ子供なんだからな

！

新艦装

「……」

ガンガンと響く頭の不快感で目が覚めた。昨日の歓迎会で結局お酒を飲まされて……アレ？ 記憶が無いぞ？ としたらその拍子に何か変な事でも口走ったとかしてないよね？

それが起きて最初の感想だった。慌てて飛び起きる。そしてよく見なくても工廠の医務室じゃない。昼が敷いてあつてその上に布団だ。

ちやぶ台の上にはペットボトルに入った水と何かの錠剤が置かれている。 “ 二日酔いに効く！ ” とメモ紙もあった。口に含んで水で流し込む。

するとどうだろう、頭の痛みが引いていき、鳩尾の辺りの不快感がスーッとなくなり爽やかな感覚が体中を駆け巡る。

何これは……即効性と効果が高すぎるだろ。ヤバいもの配合されてそう怖い。薬も過ぎれば毒となるって昔から言われてるから……

他に何かある訳でもないから立ち上がって出入口に向かう。相変わらず着脱の難しそうなブーツがしっかり揃えて置かれていた。脱いだ覚えはないけれど。

部屋の外に出たら廊下だった。なんて当たり前の感想を持ったけど人が見当たらない。人が居たら俺は何をしないといけないかを聞きたいんだけど。

やっぱり提督の部屋に行つて指示を仰ぐのがベストだろうか……忙しそうにしてたし気が引ける。となると、やっぱり見知つた顔に会う為に工廠に向かうしかない訳だけど、ここがどこなのかイマイチよく分からない。窓から見ると外は一階なので最悪窓から出て手当たり次第にウロウロするって方法が残されてるけど、流星に不審過ぎるからまだ止めておこう。

「あれ？ スチュワートさん、どうしたのです？」

「いえあああつ!？」

どうしようかなあなんて考えてたら声をかけられた！ ビックリして肩が跳ねる。

振り返ると、廊下の扉が開いていて、そこから雷と電が顔を出している。音もなく扉を開けて話しかけてくるなんて完全に驚かそうとしてるだろ狙つてやったでしょ。

どうしてみんな俺を驚かすのがそんなに上手なのか……俺の隙があり過ぎるのか？ それとも小さなことですぐに驚くほど胆が小さいのか？ 何か特殊な訓練でも受けたの？ だつたら俺にも教えて欲しい。

「こ、工廠に行こうとしてたんですけど、どっちに行けばいいのか分からなくて困つてま

して」

「だったら私に任せなさい！ 付いてきて！」

どことなく嬉しそうにそう言って電と俺を置いて歩き出す雷。

「雷ちゃんに付いていけば工廠に着く筈なのです。……誰かに頼られるのが好きなので、偶に頼ってあげて欲しいのです」

「はい、分かりました」

雷は確か「ダメ提督製造機」とまで呼ばれていたらしく、友人も雷に骨抜きにされてケツコン指輪を捧げた……らしい。

いや、ケツコン指輪ってなんだよ。字面ヤバすぎだろ。画面にの向じこう側んで良かったな
友よ。リアルなら終わってたぞ。

でもこうして頼られるのが好き ↓ 頼る ↓ 喜ぶ ↓ 頼る ↓ 喜ぶ……

無限ループって怖くね？ 確かに全部雷に任せきりになってダメになるわ。

しかし残念ながら俺はそこまで色々任せるのは気が引ける人だ。そう友人に言ったら「ふざけんな！」ってピンタされたことがあるが、俺は決して悪い事を言っていないと思う。

しばらく上機嫌な雷に付いていくと、数回は通ったであろう建物の出入り口が見えて外に出た。今日も波に輝く太陽光と潮風が目が悪い。

工廠に入ると明石が誰かの艤装を磨いていた。ここまで案内してくれた雷と電にお礼を言う。

「困っている人を助けるのは当然よ！ もーっと私に頼って良いんだからねっ！」

「なのです！」

と、笑顔を向けてきた。是非そうしてやろうとも。雷に「ママー！」って言って頼って見た時の反応を見るのも面白いかもしれない。……俺にそんな度胸があればな。

……捻じ曲がった俺に君たちの純粹さを少しでいいから分けてくれ。

2人は手を振って何処かへ行ってしまった。俺も工廠の中に入る。

「おはようございます。昨日はお疲れ様でした。よく眠れましたか？」

ええ、記憶も残さず溶けるようにね。なんて言わない。そんな状態で知らない部屋まで移動できるとは思えないので、きっと誰かが運んでくれたんだろう。

それに、歓迎会で飲酒を嫌がる俺に無理矢理お酒を飲ませた艦娘に対する苛立ちを明石にぶつけるのはお門違いだ。

「はい、ありがとうございます」

だから無難な返答しかできない。

記憶がなくなつて気が付いたら朝つてことは、よく眠れたつてことに違いないから嘘は言つてない。だから大丈夫だと勝手に納得する。

「それは良かったです。……そろそろ夕張が盾を完成させる頃だと思えますよ。歓迎会の後からも随分と頑張つてましたから。今日は夕張の実験に付き合つてあげてくださいね？」

「え？　もう出来たんですか？」

盾が欲しいつて夕張に頼んだのは一昨日だったような……。2日で完成するつて随分早いな。でも昨日の歓迎会の後つてどういふことなの？

なんて思つたけど、そういえば妖精さんは俺の艦装を20分くらいで作つた。まあ、艦娘や艦装についてはプロ中のプロである妖精さんと比べるのは流石に酷というものだろう。

だから妖精さんと比べるような発言はしない。

でも、明石や夕張が妖精さんに劣つているかと言われるとそんなことは無い。俺だつたら材料があつても艦装を作れるとは思えないし、この2人以外も多分無理だろう。そういう意味では唯一、唯二無三の能力と言えるだろう。

艦装の作成にプラモデルみたいな手順書とかがあれば俺もまだ何とかかなると思つ

けど……

「出来た〜!」

なんて嬉しそうな声を響かせて夕張が衝立? の裏から盾を持って出てきた。

「あつスーちゃんおはよう! たった今盾が出来たところよ。はいっ、大事に使ってね!」

「ありがとうございます。……うわっ!」

受け取ったら想像以上に重くて、危うく新品の盾を落として傷つけるところだった……。どうせ砲弾を弾いて傷だらけになるものだったとしても、名誉の傷以外は出来るだけ付けたくない。

「シンプルで良いですね。大切に使います」

そう言つて左手で盾を持つて上下左右に素人ながら盾を構えてみる。屈めばすつぱりと盾の陰に隠れることが出来た。それと、やはり艷装なのか見た目通りの重さは感じられなかった。

「うんうん、そうよね! 会心の出来だと思つてるわ! 早速だけど試しに行きましよう!」

あつ、そういうえばなんか明石が夕張の「実験」つて言つてたな。まさか俺はモルモツト?

俺の思考を他所に夕張に引っ張って行かれる。これは俺でも分かるぞ。完成品のテストをしたくて堪らない研究者の顔をしている。さて、俺も素晴らしいモノを貰ったんだし、期待に応えられるように頑張らなくちゃいけないだろう。

今は海の上。それなりに離れた場所には艦装を着けた夕張が立っている。ここに至るまで艦装が保管してあるロッカールームがあることを知ったり、夕張に優しく艦装の付け方を教えてもらったりした。

一つだけ言い訳させてもらおうと、日本への移動中は妖精さんに艦装の着脱をしてもらっていて、教えるときは感覚で具体性が無く、盗み見ようにも早すぎて得られるものが何もない状態だった。俺は悪くない筈だ。

「それじゃあ行くわよ〜!」

「はい!」

なんて返してみる。距離の割に良く聞こえるのはやはり妖精さんの言う通り、艦装の効果だと言われた。

さて、夕張の攻撃を出来る限り防いでみますか! 気持ち切り替えて、集中集中……

正直に言つてこれは期待以上かな……

これが素直な感想だった。

私が放つた砲はほとんど全てを捌ききり、魚雷は苦手なのか対処に手古摺っていたけど大したダメージは受けているようには見えなかつた。

私としては大した攻撃が飛んでこないのは、あまり自信の無い回避をせずに済むので非常にありがたいけど、私の攻撃が殆ど効果なしつてのは精神的にかなりくるものがあった。

「ホント、盾持たせるだけで何をどうやったらこんなことになるのよ……」

私もスーちゃんも互いに被害は少ない。けど、消費した弾薬の量が違い過ぎる。私は間違いなくスーちゃんの3倍以上の弾薬を消費している。つまり、このままやり合つても私に勝機は無い。少なくともフェアな戦いにならない。

もともと勝ち負けを決めるようなものではないし、ただ単に出来上がった盾の性能を見たいつてというのが主な目的だったけど、良いように攻撃を捌かれっぱなしつていうのもちよつと……そう、ちよつとだけ気に障るところがあつた。

主砲や魚雷を斉射して、防ぎようのない物量を叩きつけてみようかなんて思い浮かぶ

けど、それで大破されても困るのは私と明石で……うくん。

「夕張さん！ 後ろ！」

スーちゃんから突然言われて振り返る。後ろには……何も無かった。平和そうな鎮守府が見えるだけで、深海棲艦とか^{ヒマ}楽しい事を^{持て}嗅ぎつけた^{駆逐艦}人達が乱入してきたとかでは無いようだった。……引っかけられた!? と思つて振り返ると案の定スーちゃんは目の前に居て、盾を大きく振り上げていた。

まさか盾で直接攻撃しに来るとは思わなかった。流石は艦娘なのに盾を欲しがらる変わった子。

それでも流石に……

「ちよ、非常識」

ズガアン——!!

艦載機

ズガアン——!!

凄まじい爆音と目が眩むような閃光。爆風もあつていつの間にか屈んでいた。屈まされていた、という表現が正しいような気がする。

「大丈夫ですか？」

スーちゃんがすぐ側に盾を構えて立っていた。口元だけの笑顔も無くなって完全に無表情。そしていつもよりも目つきを鋭くして何かを睨んでいる。

……何か只ならぬ事態になっている？

「何が起こったの!？」

「夕張さんの後ろから艦載機？　みたいなのが飛んできました。盾で庇うにも結構距離があつて焦りましたけど、何とかなりましたね」

気になることを訊いてみたら軽く答えてきた。でもそれを聞いた私はそれどころじゃない！　こんな鎮守府近くで艦載機がきつと爆撃してきたに違いないと思って鎮

守府に緊急連絡を取ろうとしたら……

『いや〜スマン！ 盾持つてるから戦艦ル級かと思っちゃってさ！ ホントにごめんよ〜』

なんて連絡が飛んでくる。この声は、隼鷹さん？

それにしたって勘違いで艦載機による爆撃を受ける私って……しかも勘違いした相手のスーちゃんではなくなんで私の方に飛んでくるのよ！ なんて言いたいけどグツと我慢する。後で文句だけ言っておこう。

取り敢えず私が気付かなかった艦載機に気付いて対処してくれたお礼をする。

一応目的は果たさせたんだし、スーちゃんを連れて鎮守府に戻ろう。

……なんか一気に疲れた。後でお風呂に入ってゆっくりしよう。



突如夕張の背後から何かが飛来し、すわ U・F・O かと思って夕張を庇に行ったらギリギリで間に合った。盾を構えたら衝撃と爆音がしたので空襲みたいに爆弾でも落としていったんだろう。

たまたま手元に盾があつて助かった。……それにしても、艦娘って空爆にも対応しな

いといけないの？ 恐ろしすぎるわ。

鎮守府に戻ると、結構な数の艦娘が集まっていた。別に見世物とかじゃあなかつた筈なんだけどなあ……見世物よりも面白^Uい物^Fはあつたけど、大きさからして見えた人は居ないんじゃないだろうか。

「ホントゴメン！ でもアンタもやるね〜！ アタシの艦載機を落とすとはねえ〜」
隼鷹が謝る。名前は鎮守府に移動するときに聞いておいた。実際、明石の用意したファイルと歓迎会だけではまだ全然覚えられてない。俺の記憶力はそこまで良くない。もつと人間関係を頑張らないと……キツイ。

隼鷹のよると俺が落としたのは U・F・O ではなく、彼女の艦載機ということになる。艦載機を落としたタネは簡単。通過するだろう地点に向かってスタングレネードを投げただけだ。

高速で動くもの程一瞬の隙が大惨事に繋がりやすいって自動車教習所で教わったことを覚えている。今思うと腰の高角砲を放てば良かった。絶対にそっちの方が楽チンだつてどうしてあの時気が付かなかつたかなあ……経験が足りない。

それに隼鷹の言う通り、艦載機が一機だけとはいえ対処出来たということが分かったのは大きい。その内自分の限界を知る為にも空母の皆様にも声を掛けさせてもらおう。

なんて心の中で犯行声明を出していると、他の艦娘からも話しかけられてきた。

「その盾は何？ また夕張が変なの作ったの？」

「スチュワートさん、貴女には見所があります。二水戦の皆さんと一緒に訓練しませんか？」

「凄いつばい！ 夕立もスチュワート演習（殺りあい）したいつばい！」

などなど……つて待てい！

なんだこのセリフ軍は!? 夕張が普段から変なのを作ってることが確定したことは放っておこう。

神通からは訓練のお誘いだった。鬼教官みたいなきことをどこかで聞いたことがある。前世だったか歓迎会の愚痴の中だったかは覚えてないけど、ボロ雑巾みたいになるまで扱かれそうだ。取り敢えず保留の旨を伝える。

ここまではまだ良い。だが夕立はダメだ。

無邪気な笑顔に騙されたが最後、そのお誘いに乗ったら『艦これ』の駆逐艦詐欺レベルの圧倒的火力を叩きつけられる。果たして俺の死体が残るかどうか……夕立の素敵なパーティー会場の床は俺の血肉で塗られたレッドカーペットのようです。全く笑えないんだけど？

そんな果たし状だか死の宣告だか分からないものはここで安請け合いするわけには

いけない。砲の代わりに盾を装備した俺の攻撃力はクソだから一方的に殴られるのは目に見えている。そんな実質サンドバッグの俺をタコ殴りするのは虐めと変わらないだろ。

そもそも盾を持つてるからちよつと防御寄りなだけで死ぬときは死ぬんだよ。

「神通さん、訓練はまた別の機会をお願いします。夕立もその、私は強くないので演習はちよつと……」

「うゝん。なら仕方ないっぽい。訓練頑張るっぽいゝ！」

これは上手に断れたんじゃない？ 訓練を受けること

でもそう、まだ艦娘としては新人も新人の俺には何よりも経験が足りてない。盾が欲しいなんて言うっておきながら、艦載機や魚雷のことを全く失念していたのはよろしくない。敵は水上だけではなく空中と水中にも居たんだ……夕張の実験に付き合わされて良かった。ありがとう夕張、ありがとう隼鷹……

腰の艀装は砲を更に減らして高角砲を増やす。ソナーを搭載するなどすれば多くの攻撃手段に対応できるんじゃないだろうか。やっぱり男にはこうゆうロマンが必要だよね？

なんて、爆撃されたこともすっかり忘れて談笑や考え事をしていた。まだ午前中だというのにめっちゃ濃い一日になった。これが毎日続いたら胃が潰れそうだ。

だけど、想定外はいつだって突然やってくる。

「スチュワート、素敵な盾は頼もしいのですけれど、慢心はいけません。航空母艦、赤城がお相手致しましょう」

アカギ……赤城!? ありえない、何かの間違いではないのか? いやホント、神通と言いつつ俺は何かハードモードのスイッチでも押しちゃったワケ?

「……。 ……ハイ。胸を借りさせていただきマス。よろしくお願いします」

艦娘歴一ヶ月程度、盾装備歴一時間未満の俺が一航戦という大ベテランの相手になる訳が無い。

断ることを許さない雰囲気から演習の申し込みに頷いたけど……胸を借りるって言ったけれども! 流石にレベル差があり過ぎてヤバイ。これがゲームだったら絶対負けイベの類でしょ。

しかし無情にも時間は進む。

『私は準備完了です。いつでもかかってきなさい』

通信で聞こえてきた声に身体が硬くなる。

もう言動が強者なんよ。

「勝てる訳ないじゃん……」

だからと言って始める前から諦めるのは良くない。どうせ誰も俺が勝つなんて思っていないんだ。やれるだけやってみるしかない。

嬉しいことに先制は譲ってもらったけど、射程や攻撃力は赤城の方が数段どころではなく上だろう。俺が勝っているのはせいぜい速度、あと防御力くらいか。だったら速攻で片を付けるように近づいて行くべきか？

いいや違うだろう。相手は大ベテランだ。当然俺がそうしてやることくらいは読んでいるだろう。そもそも歴戦の艦娘が俺ごときの速攻でやられる訳がない。

なら、勝つんじゃないかって負けないことを目指そう。

となると大事になってくるのは如何に赤城の攻撃を捌くかだけど、こつちもこつちで難易度が高すぎる。でも赤城を攻撃してダウンさせるよりは簡単に思えてくる。

それに、スタングレネードなんて夕張以外は知らないであろう初見殺しの隠し球もあるからワンチャン行けそうに……いや無理だわ。艦載機による爆撃で蜂の巣にされる。

勝つのも無理、負けないのも無理。

じゃあ俺なりの目標でも決めよう。

できるだけ長時間生き残ること。赤城の艦載機を出来るだけ落とすこと、この2つをスコアにしよう。

とにかく沈められないことと、艦載機を一つでも多く墮とすこと。

「分かりやすくなっているいいね。……さて」

あまり長い時間待たせるのは良くない。そろそろ行こうか。

赤城目掛けてに魚雷を放つけど、距離が空いてるから余裕をもって避けられる。

そしてそれを開戦の合図と捉えたのか、赤城が居る方から3機の艦載機、戦闘ヘリが飛来してきた。

「速過ぎだろ……へへッ、大ベテラン相手に新人が生き残るスコアアタックの始まりだ」
もう苦笑いするしかない。

とことんやってやるよこの野郎

中身は知らない

——ブウーーン

そんな音を響かせ飛来する艦載機。そして投下される攻撃は火の雨と言っても大袈裟な表現じゃない。

正に絨毯爆撃。横に大きく動いたところで攻撃の密度がちよつと下がるだけで、全く当たらなくなるなんてことは無い。俺はそんな数の暴力による爆弾の雨の中、盾を上建構えながら僅かな隙間を縫うようにして大ダメージを受けないようにするので精一杯だった。これなんてクソゲー？

「チッ！ ああもう！」

俺はマゾじゃないから上からの衝撃によってかなり重く感じる盾を持ち続けたくはないし、防御に徹したところでご褒美なんて喜ぶこともない。

艦載機が邪魔だから一向に近付けない状況で攻撃され続ける……つまりハメられてストレスが溜まってる。

思えば、最初の3機の対処を間違えたのが失敗だった。

戦力を小出しにしているうちに墮とせるだけ墮としておくべきだった。墮とせるかどうかは別として、少しでも減らしておけばその分だけ後で楽になったのに……。
でも後悔してももう遅い。

この現状をどうにかしないとゾリ貧になることは確定的に明らか。だったら多少の被害には目を瞑ってスタングレネードでも投げて艦載機を落とした方が良さそうだ。

片手で盾を構えてこの鉄の雨の衝撃に耐えられるとは思えないけど、適当に宙に放つても艦載機の数が「なんで衝突事故起こさないの？」ってレベルだからほぼ確実に複数機は落とせると思う。

艦載機一機当たりの攻撃力がどの程度なのかは知らないけど、腕が疲れてプルプルしてきたから早く実行に移して余裕を作らないと……

「でもどうする? ……あつ」

そういえば投擲物はスタングレネードだけじゃない。踏ん返り返った偉そうな妖精さんは複数種類の投擲物を作っていた。

目線を腰に向ける。赤、黄、緑、青紫の缶が目に入る。黄色がスタングレネードってことはさつき隼鷹の艦載機に投げた時に分かっている。でも他の色が何なのか分からない。

すまねえ妖精さん。折角すぐ分かるように色付けてもらったのにそもそも何が入っ

てるか分からねえ……

「全部投げよう。まずは……つと」

どれを投げたら効果的か考えてたけど、中身が分からないならどれを投げても変わらないことに気が付いたから適当に投げてみることにした。決して考えることが面倒臭くなつたからじゃない。

まずは青紫色の缶を手取る。取り敢えず投げてみるとサイズと重さが丁度いい感じに投げやすく、結構飛んで行った。

「せいっー」

青紫色の缶は俺から離れた海面に着水し、プシュー……なんてマヌケな音と共に大量の紫色の煙を吐き出し始めた。幸運にも風は無く、毒々しい色の煙で辺りの視界は最高に悪くなってきた。

赤城と俺の間に視線を遮る物が出来たから、これで少しは攻撃の手が緩むだろう。

「……」

——ドドドドド——

……全然緩まねえ！　じゃああの艦載機は赤城自身が照準合わせてるんじゃないかって、中に妖精さんでも入ってるかカメラみたいなので視界を共有でもしてるってこと!?!

こんなの溜まったもんじゃない。俺は逃げさせてもらおう！　煙がかなり濃いとこ

ろに逃げ込む。煙に突っ込んだ時に毒っぽい色してるけど、マジで毒じゃないよね？
って思ったけどただの色付きの煙で助かった。自分の武器で意図せず自滅だなんて
情けないにも程がある。

「ハア、ハア……ハア。助かった？」

煙の中に入るとほぼ同時に盾に受ける衝撃が明らかに減った。海面に爆弾が落ちる
音と艦載機の飛ぶ音も殆ど聞こえなくなつた。まさか音もなくホバリング出来るなん
て思わないし、赤城の元に撤退したんだと思いたい。

「マジ疲れた」

ずっと攻撃を受け続けたから腕も肩も腰も痛いし体力的にも限界が近い。これで手
加減されてるとか冗談じゃない。

「……やっぱりヤバいわ空母」

あれだけの数の艦載機があれだけ弾や爆弾を吐き出し続けたにも関わらず、最初から
ペースを殆ど落とさずに攻撃し続けるだなんて、流石は「正規喰母」だなんて弄られる
レベルで燃費が悪い艦娘だ。それに見合つた殲滅能力だと思う。盾が無かつたらバラ
バラになってたんじゃなかるうか？

空母の出力の高さを思い知つた。砲や魚雷を中心とした駆逐艦娘とは違う、艦載機を
用いた面での制圧。しかも言い方は悪いけど艦載機は消耗品だから艦載機をどうにか

しても本体は無事っていうのが性質が悪い。

そして、そんな攻撃能力をたつた1人に向けたらどうなるか。

「ただの弱い物イジメなんだよなあ……」

この感想には一方的にただ攻撃され続けた私怨が多分に含まれてるから正当な評価じゃないだろう。でも少なくとも俺はそう思った。

そもそもの出力が違うんだよ。

柔道とかボクシングだつて階級別に分けられてるつてのに……やっぱりフェアじゃない。こんなの絶対におかしい。

「ふうく……仕切り直しだ」

盾を下ろして休めていた腕を上げる。初めて持ったときよりも重たく感じた。やっぱりかなり限界が近いつて。明日はきつとまともに動けないに違いない。

「やれるところまでやる……よし」

艦載機からの絶え間ない攻撃を中断させた今、俺が疲れたことを除けば振り出した。それでも、空母がどんな存在かをちよつと理解したつもりだ。

言つてしまえばゲームで強敵から逃げて回復もせず、装備の変更もしないまままた戦鬪に突入するのと似てる。

だけど、行動パターンをちよつと把握していると立ち回りが分かる。対策が練れる。この差はかなり大きいと思う。

風が吹いて、煙が横に流され始めた。

少しでも回復しようと大きな深呼吸を繰り返す。

そして煙幕は晴れ、数分ぶりに太陽の光に曝される。

「あつ……」

眩しくて細めた目の隙間からは赤城と思われる小さい点と、こつちに飛んでくる艦載機。相変わらずブウーンなんて耳障りな音を立てながら、今度は煙を出されたくないのか、一気に畳みかけるように纏めて飛ばして来た。思わず顔がニヤける。

「当てやすくして良いな」

腰から緑色の缶を抜く。側面には音符マークが描いてある。正直なところ中身の予想が全くつかない。まあ今に分かるでしょ。

赤い缶も抜く。こちらには炎の絵が描いてあつた。これは分かりやすくして良いな。恐らく火炎瓶の仲間だろう。中にはきつとよく燃える何かが詰まっているに違いない。

……ぶつけられるほど近くに標的が居ないんだけど。レバーはまだ開いてないけど、ピンは腰から抜くときに外れるようで、どうしようもない俺は両手に缶を持って迫りく

る艦載機をただ見つめていた。

「いや、少しでも数を減らさないと……」

そういえば高角砲はあるんだ。

落ち着いて狙いを定めて ——

「撃つー！」

突然スチュワートの目の前から毒々しい色の煙が噴き出し、艦載機に乗った妖精さんが私のところまで戻って来た。

「お疲れ様です。ですがまだ勝利した訳ではありません。装備換装をして備えてください」

妖精さん達が慌ただしく作業を始めるのを横目に、風が無いから晴れない煙幕を睨む。

正直に言うと私は、あのスチュワートという艦娘を全く信用出来なかった。

深海棲艦の活動が活発になって数年、私は何度も海外に外向した。人の名前はすぐに覚えられる私が、日本よりも種類の少ない海外の艦娘の名前を覚えられないとは思って

いない。そしてその中に「駆逐艦娘のステュワート」は存在しなかった。

そんな不審な存在を私は、例えば提督や妖精さんが信じたとしても自分の目で判断するまでは信用できなかった。だから適当な理由を付けてこうして攻撃している。提督や妖精さんを信じていない訳ではないけれど、味方の中にみすみす敵を招き入れるだなんて愚は犯せない。

妖精さんが作業を終わらせたのか飛び立って、私の上をクルクル回り始めた頃、風が吹いて煙幕が晴れた。

「嘘、よね？」

あれだけ艦載機の攻撃に晒され続けても逃げの一手を打たず、煙幕のあつた場所に立っているステュワートに驚いた。本当に駆逐艦かどうか怪しくなってくる頑丈さだ。

「——ッ！ 第一次、第二次攻撃隊、全機発艦！」

すぐに立ち直って艦載機を飛ばす。いつまでも呆然としては居られない。

「ステュワート、貴女は私たちの仲間だと認めましょう」

深海棲艦は艦娘に比べて動物的な行動が多い。いくら鬼や姫級だって危機的状況になつたら逃げる。

ただステュワートは逃げなかった。それは彼女が艦娘であることの証拠。

こうして相手をするときに皮肉げに送った言葉である「素敵な盾」は間違つてはいな

かった。

挑発するように言ったことに対して、後で謝罪をしなくては。

だけどそれはそれとして、このままでは駆逐艦すらまともに撃破出来ないと思われるでしょう。それでは加賀さんに顔向けできない。

だからスチュワートには悪いけれど、轟沈……までは行かなくとも動けなくなるくらいにはなつて貰おう。

「ごめんなさいね」

彼女は仲間。もう信じられる。そう呟いた私の口は笑みの形を作っていた。



濃い一日

『そろそろ降参してください!』

なんか降参しろって言ってきた。

「ハア? やだ」

好き放題に攻撃し続けて日頃のストレスがスッキリしたのか知らないけど、俺は良いように攻撃され続けてストレスがマツハなんだが?

新品の盾もボロボロにされてるかもしれないし、俺自身もボロボロなのにどうして一矢報いることもなく降参する必要があるの? 艦載機を墮とすだけじゃ気が済まない。せめて一発殴らせて? 殴らせろ。

煙が晴れて2度目の艦載機の攻撃を最初と同じように、盾を構えるところからスタートしなかっただけで随分と展開が変わった。

まず最初に艦載機の群れに緑の缶を投げた。その中身は閃光や煙ではなく、頭が痛くなってくるような音 “音” だった。

その結果、バランスを崩した艦載機が近くの艦載機に衝突。これだけで間違いなく10近くの艦載機が落ちてった。

そして次に赤い缶。炎のマークが描いてあったから殺傷力高そう……って思い艦載機に投げたら当たった艦載機が派手に燃え始めた。

しかも爆発した破片も火の玉のように燃えていて、近くの艦載機に飛び火、結果的にこちらも100機くらいの艦載機をダメにしてくれた。

連鎖的に艦載機がダメになっていく様は見てて最高に気持ち良かった。

艦載機のパイロットが動揺でもしたのか、動きが悪くなった艦載機は高角砲で墮としいった。

優に100を超える艦載機に対して30くらい墮としたからってどうなの？ って思ったけど、全然違ったんだなあくコレが。

まず攻撃密度が下がったから体力の消耗が少ない。そして盾が受ける衝撃が少なくなつたからさつきと比べて移動する余裕が生まれた。

とは言つても、俺自身も疲労でまともに動けなくなつてるから、目に見えて俺が有利かと言われたらそんなことは無い。

ただ、マジで限界だから最後に一発殴りに行きたい。

もうそんな気持ちだけで動いてた。

多少の被弾を覚悟して赤城に向かって突つ込む。

盾は頭の上、いつでも振り下ろせる最高の形。

喰らえッ！

「はあああッ！」

「惜しかったですね」

目の前を横切った艦載機が爆弾を投下した。

艦載機がやや上昇しながら投下された爆弾はフワリと上昇し、わずかな時間その場に留まった。置き爆弾とでも言えるような設置技と化したソレがようやく自由落下を始めた頃、回避する余裕が無い俺が突っ込んだ。

「アッ！」

そして俺だけが吹き飛ばされた。

青い空が見える。白い雲が見える。無数の艦載機が見える。眩く光る太陽が目に入る。

「はあく……」

視界の端に現れた赤城が見える。赤城の太陽の逆光で窺えないが、俺の表情は疲れの余り歪んでいた。

もうちよつとだけでいいから頑張つてくれよ表情筋。立ち上がろうとするけど力が入らない。深呼吸のような溜息を吐く。

「私の勝ち、です。今まで居ないタイプだったのでとても新鮮でした。演習、感謝です」
「……」

努めて無視しつつ赤城が視界に入らない方に顔を向けると、波打つ海面と水平線が見える。

結局赤城には一撃も与えることが出来ずに完敗した。多くの艦娘の憧れの空母には手も足も出ず、言葉通り殴る拳は届かなかつた。

「ハハッ……」

あくあ、なんか燃え尽き症候群つて感じ……何もやる気が起きない。

海面に浮かんでる現状から立ち上がることさえ億劫だ。いつそのまま波に流されて海に溶けて消えるも、鎮守府なりどこか知らない浜辺に打ち上げられて、身動きできないクラゲみたいになるのもいいかもしれない。

なんて考えていたら、視界に再び赤城が入り込んできた。

「参りました。どうぞ炒るなり裂くなり好きにしてください」

適当に、ぶつきらばうにそう言うけど、そういえば胸を借りると言った相手にコレは無いだろうと発言の後に気付き焦る。

「うふふつ。面白い子ですね。その盾、貴女自身もとても素敵でしたよ。これからも真に頑張りましょう」

なんて言つて手を差し伸べてくる。これが人間性の違いつてヤツかあ……俺には真似出来そうにないかなあ。これは正規喰母なんかではなく頼れる一航戦だなあ……流石にここまでしてもらつてその手を取らないなんて選択肢を選べる俺ではない。

「はい。これからもよろしくお願いします。赤城さん」

そう言いながら手を掴んで立ち上がる。赤城の顔は演習が始まる前よりも柔らかく、憑き物が落ちた……とまではいかないものの、どこか固かった雰囲気霧散しているように思えた。

「あゝつ。お腹空きましたね。美味しいものでも食べに行きましょうか」

鎮守府に赤城と戻る途中、彼女が発した一言目がコレだ。

えっ連れてつてくれるの？ なんて思ったが――

「加賀さんと」

つて次の一言で台無しになった。俺とじゃないんかい！ だったら何で俺の前で言つたし……

まあこんな新人よりも長年の同僚と一緒にの方が色々楽しいだろう。

でも加賀には挨拶しておきたいなあ……なんかそういう礼儀とかに結構口煩そう
な雰囲気あるように感じるし……

「あの、出来れば加賀さんにも挨拶させて貰えませんか？ その、加賀さんが居るところ
まで連れて行って貰いたいなど」

そういうと赤城はニコリと微笑み

「良いですよ。さ、行きま……ってあらら」

「？」

「そういえば加賀さん、3日前から出向でイタリアの方に行ってたんでした……ごめん
なさいね。挨拶してくれるのは嬉しいのだけど、また今度ね」

じゃあ仕方ないか。

そんなこんなで鎮守府に戻る。またしても多くの艦娘が寄ってくるけど俺は既に疲
労困憊。悪いが赤城に押し付けさせてもらおう。さっさと工廠に戻って休みたい。

そう思い、艦娘の輪の中からそつと離れた俺に、声が掛けられた。

「スーちゃんお疲れ様。疲れたでしよ。さ、一緒にお風呂行くわよ！」

「え？」

「ん〜？」

「……………え？」

……………ハッ！ ヤバイヤバイ、フリーズしてた。

え、待つて？ 風呂とか嘘でしょ？ せめて最初とその後10回くらいは慣れる為にも一人で静かに入りたいんだけど……………。

女の子とか女性と一緒に風呂だヤッホー！ なんて考えられる神経は持ち合わせてないんだよ！ 羞恥のあまり死ぬから！ なんでそんなにこやかな笑顔してんだよ断りづらいじゃん！ 笑顔は最強の交渉武器だった……………？

どうしよう……………ハッキリ言つて逃げ場が無い。

この間僅か0・3秒。嘘、30秒くらい。

その大きすぎる隙を逃す彼女、夕張ではなかった。

「何ボーつとしてるの！ 早く行きましょう。ほらほら〜」

「えっ、いやその……………」

考えろ考えろ……………きつとどこかに答えはある。

「何その行きたく無さそうな顔……………因みに私、スーちゃんが演習終わるまでお風呂に行くの我慢してず〜と待つてただけど」

「ワカリマシタ……………」

これは勝ち目ないわ……待たせたって借りがあつて以上断れない。

返事をした瞬間腕を掴まれてグイグイ引つ張られる。俺の腕はゴムみたいに伸びはしないから夕張に合わせて歩く。腕を掴まれてるのが何となく嫌で、振りほどこうとしたがビクともしなかつた。

そんな細い腕のどこにそんな万力みたいになつて痛い痛い痛い！

「何か失礼な事考えなかつた？」

「気のせいですよ」

全く動かないことを例えただけだから失礼な事じゃない筈だ。俺の口が嘘つきで良かった。

「ううっ……グスツ!? ゴホツゴホツ！」

湯船の中でわざとらしく鼻を鳴らしていたら湯気で咽た。でもわざとじゃなくても泣きたい。勿論感動や喜びではなく羞恥で。

工廠に超スピードで連れて行かれ臙装を外され「ロツカーはここね！」つて言われて、気がついたら脱衣所にいた。展開に付いていけず脳がエラーを吐いてフリーズしていたら夕張に好き勝手されていた。

具体的には服を脱がされ髪を洗われた。年下の妹の世話をする姉じゃないんだから止めてほしかった……

体の方は出来ると言いつつ、皮膚を削るような擦り方をしたら絶対に怒られると察したので、隣で洗う夕張をバレないように観察しつつゆっくり洗った。

髪といい体といい、女がどうして風呂やシャワーの時間が長いかの理由が分かった気がする。

「どお？ 沁みるところとかない？ そつかー、綺麗に治つて良かった良かった」

素直に反応するとそう言いながらすぐ隣に寄つて来たので少し距離を取る。体をタオルで隠しているが、まだ安全とは言いい切れない。そもそもこの空間は2人だけとはいえ童貞の俺には刺激が強すぎるから凄く辛い。

多少のケチが付いたものの、久しぶりの風呂は気持ち良かった。

身体の傷は治つたみたいだけど、心が死にかけてた。

工場に戻つてから夕張が俺の替えの服が無いとか言い出したり、赤城にズタボロにされた盾を直してもらったり、なんか偉そうな妖精さんに演習の感想から考えて艦装の要望を出したり、椅子に座つて船を漕いでたりして、気がついていたら真つ暗になってた。肩には薄い毛布が掛けられている。

しかも工廠内が雰囲氣的にも物理的にも薄暗くなっていた。明石と……黒いロングの戦艦？ 長門じゃないし、不幸で知られる……誰だっけ？

「あれは扶桑さんですよ。スチュワートさん、貴女に提督から連絡があります」

後ろから声を掛けられた。毎度突然のことで心臓が飛び上がるから止めてほしい。提督からの連絡つてのもあって、眠気は吹き飛んだ。

「貴女に艦娘寮の部屋が与えられます。場所は島風さんの隣です。案内しますので付いてきてください」

「……はい」

どうやら自室が貰えるらしい。さらば医務室のベッドよ。

今まで俺の指定席だったベッドに別れを告げる。

「こちらです」

「はい、ありがとうございます」

ドアを開ける。中には畳にちやぶ台と布団があつた。物は少ないけどシンプルイズベスト。物が溢れかえって足の踏み場が無いゴミ部屋よりは余程いい。

「あの、明日の予定とかっていつ分かるんですか？ 予定表みたいなものとか……」

「はい、貴女の明日の予定は……えっ嘘……コホン。失礼しました」

おっ、気になる反応。なんて書いてあったの？

「貴女の明日の予定は、秘書艦です」

「……はっ？」

……はっ？

気まらずさ

『明日の予定は、秘書艦です』

電気を消して布団に入ってからずっと、大淀に言われた言葉が頭の中で駆け巡る。

秘書艦ってアレでしょ？ 一時間おきに時間を提督に伝えたり、3度の飯を提供したりされたりするやつでしょ？

書類仕事は慣れてないし、料理も家庭料理ならまだしもティーセットが部屋にあるような提督に出せる物は作れない。しかも24時間起き続けるのは非常に厳しいところがある。

しかも秘書艦は『艦これ』の中ではほのぼのとした雰囲気になるが、実際はどうだろう。書類仕事の手伝いとか提督の護衛とか、コミュニケーションとしての面もあるのかもしれない。

目を閉じる。瞼の裏に映された妄想は、俺が書類をばら撒いたり飲み物を溢してたりうたた寝してたりする光景ばかりだった。まだ日付も変わってないというのに胃が痛くなってきた。もし現実になったら笑えないぞ……。

っていうか入ったばかりの新人に対して研修も何もなくていきなり仕事振るとか正

気じゃない。非常事態でも簡単に説明とかはあると思うんだけど。せめて鎮守府全体の案内、日頃の業務内容とそのやり方、福利厚生の説明くらいはして欲しいな……

でも食堂で美味いモノ食べられるし、艦娘寮もすっかりしてる。二次創作でありがちな所謂ブラック鎮守府特有の薄汚れた服を着たり、やつれてたり、目が死んでる艦娘も居ないからホワイト鎮守府だと思う。

っていうか艦娘って日本のどこの組織に分類されるの？ やっぱ海軍——海上自衛隊？ だつたら公務員ってことになるのか？ あれ、ってことはやっぱりブラック？ ブラック組織のホワイト鎮守府とか頭おかしくなるな。

まあいいや。

「……寝れない」

そんなことが昨日の夜だ。結局駆逐イ級を数え始めたら20もしないうちに意識が落ちた。とにかく寝ることには成功した訳で、気持ちの良い朝を迎えることが出来た。

寝間着、この体には少し大きい白いシャツを貸してくれた夕張曰く「武蔵さんは出向で居ないので大丈夫！」だそうだが、俺の部屋に洗濯機が無い。どうしよう……

「明日の朝、部屋に迎えに行くので準備して待っていてください」って大淀は言っ

た。……そろそろ時間じゃないか？ 時計が無いから分からないけど、それは寝坊していい理由にはならない筈だ。

——コンコン

「つは、は〜い」

来た。よし……覚悟を決めろ。ここからが本当の地獄だ。

でも変な事したらそれが現実になるであろうことは想像に難くない。素直で大人しい従順な犬のように、言われたことに反抗せずに従っておけば取り敢えず問題はないんじゃないか？ それで行こう。

「おはようございます」

「おはようございます。準備は出来てるみたいですね。それではこれから執務室に連れて行きます。取り敢えずは執務室だけでいいので場所を覚えてください」

了解しました。なんて言ってから大淀に付いていく。やっぱり艦娘の数だからだろうか長い廊下には多くの部屋があった。昨日は雷と電に案内してもらったけどやっぱり広いわ。

途中で他の艦娘とすれ違ったりしたけど、会釈や挨拶だけで立ち話は出来なかった。朝から艦装着けてたし忙しいんだろうな。

大淀の後ろを付いていき、進むたびに緊張してくる。前も同じようなことがあった

なあ……あの時は明石に連れてってもらったんだっけ？ ……なんで明石も大淀も一言も喋らねえんだよ！ これが夕張とかなら絶対に世間話とかワンポイントアドバイスみたいな話題があると思うんだけど、この差は何よ？

「提督、失礼します」

「入りなさい」

あつ、もう着いている……ヤベエよ心の準備がまだだよ。だからそんな早く入れっで目で見ないで！ キラリと光る眼鏡が怖いから！

「失礼します……」

執務室に入ると執務机の上以外は変わらない部屋と、相変わらずお人好しそうな提督がお出迎えしてくれた。俺が入ると大淀にコーヒーを3人分用意するように言っで、執務机とは違う、お茶をする為にあるだろう小さなテーブルに移動した。

入り口に立ったまま眺めていたら、コーヒーを淹れた大淀が戻って来た。

「貴女も座りなさい」

「……はい。失礼します」

あつ、一緒にお茶しようっで流れ？

正直マナーとかも分からないし、そんなのいいからさっさと秘書官の仕事を教えてくれと言いたい。でもそう思ってもイヤとは言えないのが本当に辛いところ。

言われた通りに提督の体面に座って、促されるままコーヒを飲む。熱い。もう少し冷めるまで放っておこう。

カップを置いてそつと息を吐く。その間提督はずつと俺の方を見てニコニコしてるだけだった。

しばらく提督を見ていたが一向に口を開かない。提督の隣に座る大淀もだ。

……これは俺が何か話題を出すべき？ それとも秘書艦つてことでここに居るんだから秘書艦のすることの確認を取るべき？

うん……後者！

「あのく、秘書艦つて何をすれば良いんでしょうか……？」

大淀を見る。眼鏡に朝日が反射して目が隠れてしまっている。マンガだと面白い場面なのに、今はただ怖い。相手の目が見えないってのはかなり不安を煽られる。気まづくなつてすぐに目を逸らした。

提督の方を見ると笑顔は消えてキリつとした顔になっている。……なんか問題発言したかな？ いや、発言の内容自体に問題は無い筈だ。だったら何でこんな硬い雰囲気になつてるの？

「スチュワート、君に教えることは無い」

「……もう一度お願いします」

「君に教えることは無い」

どうやら俺の聞き間違いじゃなかったらしい。

『教えることは無い』らしい。

これは間違っても免許皆伝みたいなノリじゃなくて、意味することは教える程の基礎が無い。もしくは教えたくないのどちらかだということか？　どこで提督の機嫌を損ねるようなことをした……？　全く心当たりがないぞ。

なんて動揺してたら更に声が掛けられる。

「ああ、今のは嘘だ」

「えつと……」

「完全に嘘ではないんだ。秘書艦の仕事というのはそこまで大変な事ではない。だから教えることは殆ど無いんだ。簡単な仕事はあるけど、それ以外は自然体で構わない。雑談しようが居眠りしようが自由だ」

何を言ってるのかが分からない。わざわざ秘書艦つてくらいだからきつと大事な仕事だろうと思ってたから拍子抜けだ。っていうか雑談も居眠りも自由って何？　それ仕事じゃないじゃん。いくら何でもやり自由過ぎだろ。でも、提督がこう言ってるんだし許されてるのか？

「？ ……はい。分かりました」

いまいち納得できないけど領いておく。

仕事でここに来てゐる以上、自由にするのは論外だろう。

「じゃあもう少しお茶にしようか」

提督の方から仕事を放りだすのか……

「……」

「……」

向かいに座ったまま無言を貫く提督と大淀。そして俺も喋らないから部屋にはコーヒーカップを動かす音と、外から微かに聞こえてくる艦娘達の話し声以外の物音がしな

い。
俺は秘書艦の仕事をしに来た筈なのに、どうしてこうなった？

何を求められているのがサツパリ分ならず、しかし余計な事をしてやらかすのも怖
いから現状維持をし続けてきたが？けど、あまりにも気まずい。

……これはもしかすると何かの試練なのかもしれない。休憩ばかりする提督に仕事
をさせろという無言のメッセージか？

「あの、提督？」

「何だい？」

「気まざり雰囲気とは裏腹にあつさりと返事が返つて来た。やっぱりあの無言は俺から話しかけろつて意味だったの？　もしそうなら分かり辛いわ！」

「その、ただお茶を飲んでるだけでは仕事にならないのではないのでしょうか……」

「……秘書艦の仕事は、先程提督が仰つた通り簡単なものです。提督に時間をお伝えすることと、ご飯を提供する事です。それ以外には、提督の護衛や書類整理などが主な仕事です」

「おお、やっぱり普通に仕事があるじゃないか。」

「チラリと壁に掛けられた時計を見ると現在時刻は7時半。」

「執務机の上にも書類が積もっている。」

「これはまさか、俺が何か行動しなければならぬのか？」

「とりあえず提督と一緒に仕事しようって伝えよう。」

「えつと……提督、7時半です。溜まった書類もあるようですので、そろそろ仕事に取り掛からないと……その、自分も出来る限り手伝いますので。その、今日はよろしくお願ひします」

「そう言つても2人は動かない。」

「また何かやらかしたか？　なんて思つてたら、大淀が口を開いた。」

「因みに提督はまだ、朝食を食べていません」

「ああ、お腹が空いたなあ……」

そしてワザとらしく呟く提督。「朝食はまだかのお……」みたいなノリでコミカルな動作なのに内容がとんでもない。

提督の朝食がまだ。そして秘書官の仕事には3食の提供がある。つまり俺は既に仕事をサボっていたことになる。

となるとこんなことをしてる場合じゃなくないか!?

「し、失礼しました！ 今から準備してきます！」

振り返って執務室を出る。

取り敢えず食堂に行つて事情を話そう。そうすれば厨房の一角と食材は貸してもらえるかもしれない。でも朝の食堂つてめっちゃ忙しそうだよなあ……

焦る気持ちは歩くスピードに表れ、狭まった視野は一人の艦娘を追い抜いたことに気が付かなかつた。

「オウツ!? 歩くの速……」

そんな声が後ろから聞こえた……気がする。

秘書艦？

提督の朝食を忘れるという失敗をどうかしよう、せめて少しでも早く朝食を用意する為に食堂までの道のりを急ぐ。

食堂に着いてから間宮に訊けばアレルギーも嫌いな食べ物もないみたいだから、適当に白米と納豆と味噌汁とトマトを用意した。

そして溢さないようにしながら執務室へ向かう。

「うん、美味しい。ありがとう」

出てきた感想がコレだった。

味噌汁は油揚げとネギと味噌で出来る簡単な物だし、白米は間宮が炊いてたもの。納豆は既製品だしトマトは水洗いしてカットしただけ。俺がまともに調理したのは一品だけだから……提督の感想はリップサービスで間違いない。

確かに量は少ないかもしれないけど、そこまで致命的なメニューではない筈だ。

因みに、味噌汁と作ってる途中にどこからともなく磯風？ が現れて、魚の形をした暗黒物質の親戚みたいなのをご飯に乗せようとしてきたから全力で阻止するなんて一幕があった。

だって単に焦げただけじゃ絶対にあんなったりはしないだろう、全く光を反射しないモノが食べられる訳がない。

一応艦娘つて艦ふねとしての一面を持つてるつて妖精さんは言つてたけど、そんな第二次世界大戦中に食べ物で遊ぶなんてコイツ絶対勇者だろ……つて思った。

とにかく、恐らく料理下手であろう磯風よりはまともな朝食を用意できたと思じた
い。

提督の食べ終わった食器を片付けて、お櫃の中に残つてた白米を2、3口分拝借してから執務室に戻る。

途中で何人かで固まって歩く艦娘たちを見かけた。私服を着ていて明らかに楽しそうな雰囲気ですら何食べるゝとか話し合つていた。

声を掛けられたが、秘書艦であることを伝えたら頑張つてくださいつて言われた。翔鶴姉つてことは瑞鶴か？ そんなに睨まないで……貴女の翔鶴姉を取つたりしないから。

「……………」

暇だ。

提督が記入した書類の内、渡されたものに判子を押していた。クリップと一緒に渡されたものは留めたり、ある程度量が溜まったら封筒に入れたりもしたが、これらがとにかく暇なのだ。

書類になんて書いてあるかを見ても

「大本営での会議の出欠確認」

「休暇希望届」

「戦果、被害報告書」

などなど。

パツと見た感じで面白いものはないし、仕事が始まった時に指示を受けたきり互いに口を開かないし、ずっと座りっぱなしだし、最初に言ってた通り仕事は簡単だから暇を持って余してる。

ハッキリ言おう。滅茶苦茶眠い。

ただどこかで「提督に時間を伝える」って仕事があるからうたた寝も出来ない。この環境の中で寝てはいけないなんて一種の拷問だと思う。

さつきから欠伸を噛み殺すのに神経を使ってる。

チラリと提督の後ろに掛けてある時計を見る。

なんで提督から見えない位置に置いてあるのか、時間を伝える機能は付いていないのかは凄く気になるけど、そろそろ10時になるからお知らせしなきゃいけない。

それにしても……ずっと書類と向き合ってる提督の集中力は凄いなと思う。俺の集中なんて判子を押し始めてから20分と続かなかったというのに、いったい提督と何が違うというんだ……

あ、10時になった。

「午前10時です。適度な休憩も大事ですよ？」

「ああ、ありがとう」

「コーヒーを用意してきますね」

「お願いするよ」

顔を上げた提督が小さく首を縦に振った。OKは貰ったからこれで1回食堂に退避できる。さつきは我慢が限界を迎えてちよつとだけ舟漕いだし、あんな暇なところで単調な作業を繰り返してたら退屈のあまり病気になる。コーヒーでも淹れて気分を変えられるしかない。

午前10時を伝え、飲み物を準備しにスチュワートが出て行った扉が閉まるのを私は

見ていた。

先程までずっと室内にあった紙が擦れる音もしなくなり、部屋を静寂が支配する。

「ふう〜」

大きく深呼吸をして身体を伸ばす。するとポキポキと音を立てて、僅かな痛みと共に少し重たくなった肩が軽くなった。

流石に私も歳かなあ……と目を書類の置いてあったところへ向ける。

いつもなら雑談やお茶をしながらゆっくりと処理していて、それでも間に合うくらいの量に調整された書類たちは、少しづつ溜まっていき定期的に大淀に手伝わってもらっている。

しかし、公私を分けて淡々と仕事をする子や、書類仕事に強い子が秘書艦だとその日の書類は驚くくらい早く無くなる。

そしてスチュワートも黙々と作業をするタイプのようだった。暇なのか退屈そうに書類を眺めることはあっても私に話しかけてはこなかった。

おかげで仕事は非常に捗り、今日やる筈だった書類は午前中にして早くも半分くらい処理されている。この分だと昼過ぎには終わってしまいそうだ。

「私もまだまだ現役かな? それにしても……」

時雨や加賀など大人しかつたり無口な子は居る。だけど1時間前も「午前9時です」

だけで終わり、つい先程までの1時間、何も喋らないどころか一息つくような声すら出さないような子は流石に居ない。

ずっとお喋りするのでも仕事が進まないのでも少し問題だと思いが、喋らなさ過ぎるのもある意味問題だと痛感した。

もしかしたら話題が無かったり、単に緊張しているだけなのかもしれないけど、他の子達に比べるとあまりにも静かで物足りなく感じる。1人だけで作業しているように感じて寂しくなってきた。

きつとこのままでは秘書艦の仕事をしている間に会話が無いだろう。……昼からは私の方からコミュニケーションを図っていかうか。

駆逐艦スチュワート。

彼女の第一印象は「普通の艦娘」だった。

強烈な個性を持った子が多い中、その子達と比べるとちよつとコミュニケーションが苦手で大人しい性格に感じたけれど、これはまだ付き合いが短いから本当かどうか分かんなく、あまりあてにならない。

とにかく、昨日の昼頃に彼女と演習したらしい赤城が報告を聞きに来るまで私はそう思っていた。

報告を聴く限りでは盾型の艀装や煙幕、音響兵器らしきものを使って赤城の艦載機をいくつも落とたらしい。防空駆逐艦でもない駆逐艦を、かなりの時間大破まで追い込めなかったと赤城が悔しそうに言ったときは本当に驚いた。

「駆逐艦スチュワート」は記録にも残っていてアメリカのかなり古い駆逐艦らしい。実際に高角砲を搭載していたから艦載機を複数落とすとした。だつたらまだおかしな所は無いが、やはり盾や煙幕などはどこから出てきたのかは非常に気になるところだ。

そして、彼女が来てから工廠の一部の妖精さんが非常に騒がしくなつたと、多くの妖精さんが口を揃えて言っていたことも気になる。

スチュワート、彼女自身も何か隠し事しているような気がする。文句も言わず……それこそ何も喋らずに秘書艦を務めてくれる様子から、きつと命令したら例え嫌な事だろうとしてくれるだろうし、隠し事だつて教えてくれると思う。だけどそれは私の主義に反するので自分から話してくれることを気長に待とう。

あと、命令に対して従順なのはいいけれど、命令に絶対服従する必要はないということの後で教えておかないといけないと思つた。

何故なら艦娘は人間であつて、機械ではないのだから。



食堂の厨房にまたお邪魔している。またまたスマンねって事と、食材は勝手に使っても良いのかってことを訊いたら、「厨房くちやうに立っているのがいつも私だけで、食べ物皆さんのものですから」って言われた。その素晴らしい精神を深海棲艦にも分けてあげて……海は皆の物なんだぞ。

そういった会話を間宮さんとしながらお湯を沸かし、インスタントコーヒーを用意する。給料とかが出るならコーヒーミルでも買ってみたい。

その為にも毎日の仕事を頑張らないと。

今日みたいな秘書艦は勿論、他の艦娘たちがやつてる遠征とか……とにかく経験を積んでいかないと。

特に提督は多くを語らない人みたいだし、もし休日とかが暇だったら執務室にお邪魔して、他の艦娘が秘書艦としてどんな仕事をしているのか観察するのもアリかもしれない。

「……」

快適な自室に思いを馳せていたらお湯が沸いた。水で溶いたコーヒーを飲み干してから急いで提督用のコーヒーを用意する。

さて、コーヒーも出来たし執務室に戻ろう。いつまでもここに居たらサボっていると

勘違いされかねない。

また来るってことを間宮さんに伝えたらニコリ、と微笑んだ。

いつもニコニコしてる人ほど怒らせると怖いから、絶対に間宮さんは怒らせないようにしよう」と心に誓った。

提督にコーヒーを渡してから暫く、休憩を挟んだ上にカフェインをキメた俺は眠気を吹き飛ばし快調だった。

「11時です」

時計の秒針が真上にきたタイミングでそう伝えたら提督が小さく溜息を吐いた。机の上を見るとあまり書類は残っていないから、昼過ぎには終わる……まさか。

さっきの提督の溜息、そして昼過ぎ辺りに終わるであろう書類……これはつまり、昼までに終わらせないといけない書類が終わっていないということなのでは？

となると終わらなかつた原因は俺だろう。初めてだったということもあるけど、単調な作業だ。他人に比べて特別遅れているという事は無い筈……。やっぱ朝食の用意とかで始める時間が遅かつたのが原因では？

そろそろ書類の山は片付くだろうし、次はどんな仕事があるんだろうか。もし何も無いようだったら勇気を振り絞って座学とかして貰うように頼んでみようかな？

友達は『艦これ』の提督だったけど勿論ただの一般人。一方でこの提督は本物の提督。戦闘指揮のプロフェッショナルの筈だ。

艦娘歴の浅い俺にとって、提督から受ける座学はただ時間を持て余すより非常に有意義な時間になることは間違いないだろう。その他にも鎮守府での決まり事や各種仕事の内容とか……ワオ、考えたら訊きたいこと沢山あるじゃん。

その為にも俺も頼まれた仕事をどんどんこなしていこう。とりあえず次は正午のアナウンスだ。

楽しい時間はあっという間で忙しい時間もあっという間。ただし退屈な時間は1日に60時間くらいあるけど。でも気がついたら正午を少し過ぎていた。だからなんて時計に時間を伝える機能付けないんだよ。チャイムとかもないし……意味不明だ。

「正午になりました」

今度こそ余裕をもって昼食を用意しようと思気込んで、お昼ご飯を準備してきましたって言おうとしたら手で制された。俺の飯が食べねえってのか!? いやまあ、朝に適当な物出しちゃったからメシマズ認定されたのかもしれない。なんてことだ。

「食堂まで行こう。昼は私が作る」

「……はい?」

秘書艦②

提督に連れられて食堂。昼食を提督が作ってくれるらしく、席に座って待っているように言われた。

お昼時つてのもあつて食堂も混み始め、賑やかになると同時に隅の方に避難した俺は、何事も起きませんようにと祈りながら壁の染み……ではなく空気と同化するつもりでジツと提督が来るのを待つ。

「あーっ！ 提督が厨房に立ってるー！」

なんて声がすると同時に食堂の時間が一瞬止まった。それは、人口密度が上がったことで熱気を帯びた食堂が一瞬だけ涼しくなるのと同時で、直後にさつき以上の熱気を感じるようになった。

一体何が起きていると言うんだ？ 提督に飯を作らせてはいけなかったのか？

そう考えていると、食器を二つ持った提督が厨房から出てきてキョロキョロしている。周りには艦娘が集まってきていて、既に飯を食べている艦娘がなんか悔しそうにそれを見ている。

提督が作った飯を皆は食べたいんだろ？ なあなんて答えに辿り着く。成程そう考え

ると提督の作る飯はきつと美味しいんだろう。

「ただ、飯を食べてるときはなんとというか……救われてなきやあダメなんだ。知らんけど。」

でも、こんなピリピリした雰囲気の中だと間違いないくどんな飯も味がしなくなる。そして俺だったら空気に吞まれて緊張で吐く。間違いない。

提督がこちらを向いたことで目が合いそうになる。直前に顔を逸らしたけど提督がこちらに歩いてくる——見つかったか。

「ここに居ただね、準備が出来たよ。さあ召し上げれ」

そう言っただけの俺の前に皿を置いて対面に座る。皿の中身は……炒飯だった。いただきまずと言っただけから食べ始める。朝をまともに摂っていない故の空腹も相まって非常に美味しかった。

「フエイチャンハオチー
「非常好吃」

これは本場で修業したに違いないと判断して

感想を言ったら

「ハハハ、私は日本生まれだよ」

そう朗らかに笑われた。それがきつかけになったのかちよつとした世間話を交えながら昼食を食べた。

提督の話題の引き出しが多くてつい、食事の手が止まったりしても気が付かないくらいお喋りに夢中になった。全然話さないから寡黙な人かと思つてたけど案外フランクじゃんこの提督。

優しい人つてのは薄々分かつてたけど、挨拶や仕事上だけのビジネスライクかもつて思つてた。実際はそんなことはなかったし、これは確かに艦娘から慕われますわ。

それと、テーブルマナーとか全然知らないけど一般女性として変じゃなかったことを祈ろう。流石に口に食べ物含んだまま話したりなんてことはしなかったけど……

「仕事に真面目に取り組むのは良いことだけど、多少の雑談くらいは全然構わないよ。今日だつてもうすぐ仕事が終わつてしまひそうでね、午後から何をしようか考えているんだ。スチュワート、君は何をしたい？」

これは僥倖。だつたらさつき考えてた通り座学とかしてもらおう。知識は無くても生きていけるけど、あつた方が楽に生きていけるからね。

「じゃあ……座学をお願いします。出来れば筆記用具の方もあって嬉しいですね」
「うむ。分かつた」

そんな会話もあり長い昼食を終えた。時刻は午後一時を回っていた。せめて食器だけは片付ける旨を伝え食器を洗う。その時、厨房に居た間宮さんに夕食の仕込みを手伝ってもらう事を頼むのは忘れない。

その手のプロが居るんだから協力してもらえるところはしてもらおう。提督の飯が美味かったからなんか悔しかったとかそんなんじゃない。

ふう、と一息ついた提督がこちらを向く。俺も昨日の資材消費の書類から顔を上げる。

「書類仕事は終わった。ご苦労様、スチュワート。今は何時か教えてくれないかね？」

……時計は後ろに掛けてあるんだから自分で見れば良いものを、わざわざ俺に振ってくるのは提督の氣遣いだらう。本当に優しい人だと思った。呆れ半分の溜息を小さく吐く。

「お疲れ様です。時間は……午後3時15分、ヒトゴーチゴーチです」

「無理に言い換えなくてもいいよ。それじゃあ次は、君の希望通り座学にしよう。工場に行つて明石にノートとペンを貰つてきなさい。支払いはコレを使いなさい」

そう言つて封筒を渡された。重さからして中には紙が入っているだろう。ありがとうございますと言つて工廠に向かう。

こつそり封筒を開けると見覚えのあるお札が入つておらず、白い紙が見えた。出して確認しようとするが、丁度前の角から誰かが曲がつて来たので出来なかった。

工廠に着いたら明石が居たので欲しいものを伝えてから封筒を渡すと、中を確認した明石が狂喜乱舞し始めた。

怖かったから急いでその場を離れた。欲しいものは手に入ったから良しとする。俺は購買で買っただけ。ナニモミテナイヨ……？

それから午後6時まで、休憩を挟みつつ3時間に渡って提督から色々教えてもらった。

日頃の仕事のことや他の鎮守府について、世間の艦娘のイメージとかも聴いた。艦娘の存在そのものは機密でも何でもなく、妖精さんが関係するところ——妖精さんそのものや艦装、「建造」辺りが機密だと知った時は驚いた。艦娘じゃなくて妖精さんがシークレットなのか。

そういった内容を中心にノートは綺麗に書くことを意識した文字や文章で埋められた。あとでもう一回分りやすく纏める必要があるだろう。

そんなこんなで7時を迎えようとしていた。

「午後七時です。夜は私が用意しますね。提督は休んでいてください」

そう言つて本日3度目の食堂へ。間宮さん、農じゃよ。晩御飯の用意は出来とるかのお？ おお！ 玉ねぎ微塵切りにしてあるじゃん。玉ねぎの微塵切りだけはいつま

でたつても慣れなくて時間がかかるから助かる。

お礼を言つてからフライパンを取り出し材料の用意……ヨシ！

作るのはカレー。ただしドライの方だ。

「執務室にカレーを運ぶ。少し余つたから間宮さんに分けてきた。4食分作つたし誰かは食べてくれるでしょ。」

「午後8時です。私の作つたドライカレー……どうですか？」

「ゴホツ……うん、美味しいよ」

咳き込んだの聞こえてんよ……ちよつと辛かつたかな？ 完食が厳しいなら無茶してまで食べないでほしい。作つたのは俺だけだ。

俺も一緒に食べたけど、まあ激辛ペースだからそこそこ辛いよねってくらいの辛さのはずだ。

玉ねぎと人参の甘味で中和されてるから市販の辛口程度には抑えられてる筈だしなあなんて考えながらスプーンを口に運ぶ。提督が信じられないものを見るような目で見てきた。

食堂で食器を片付けてたら間宮さんから叱られた。どうやらカレーに手を付けたの

は暁のようで、辛くて食べきれなかったらしい。

また、やはり提督も辛いのはちよつと苦手なようで、基本的にこの鎮守府で作られるカレーは誰でも食べられるように中辛までと暗黙の了解で決まっているらしい。

今回は厨房の引き出しに入ってた激辛のルーを俺が目敏く見つけてしまったことと、諸事情を知らないことで許してもらった。

因みに、残りの2人前のカレーは無くなった。

時刻は午後9時。真つ暗になって鎮守府も少しづつ静かに……

『皆行くよ！ 三水戦、全艦抜錨！』

ならなかった。

深夜テンションンっていうには早すぎない？ 近所迷惑にも程があるね。

「スチュワート、川内を止めてきなさい。彼女に伝えておきたいことがあるんだ」

「えっ？ あっはい、分かりました！」

急いで部屋を出て全力疾走する。工廠の近くには灯りに照らされた人影が見える。

……間に合ったか。

「ハア〜つ……川内さん！」

「なに？ 貴女も夜戦に混ざりたいの？ 新入りなのに頑張るねえ。見所あるよ！」

肺の空気を絞って叫ぶように大声で名前を呼んだら、人混みの中から川内が出てきた。

「提督が……呼んでますので、来てください」

「夜戦終わってからじゃダメ？」

「一 駄目です 二」

何故か一部を除いたほぼ全員が、団結して「提督が呼んでるなら行かなきゃダメです」みたいなことを言つて、必死になつて川内を提督のところに行かせようとしている。三水戦つて仲悪いのかな？

川内を連れて執務室へ向かう。途中に何度も「今度夜戦に行かない？」つて訊かれたから「今日は秘書官だったので、その内気が乗つたら行きます」つて応えたら目が、全身が光ってるんじゃないかってくらい嬉しそうにし始めた。

「やっぱり神通みみたいな訓練だけじゃなくて、夜に実戦するのも大切だね？ ねっ!？」

「は、ハイ……」

実戦は大事だと思ふけど、別に夜である必要は無いと思うんだ。

「スチュワートは一回出ていなさい」

そう言われて追い出された廊下で待つ。明日の予定はなんだろうかと考えていたら部屋の中から喜びに満ち溢れた声が聞こえた。

人が喜ぶときに出す声の筈だけど、何故かその声を聞いても釣られて少しいい気分になる……なんてことは無かった。

そしてそれがただの偶然ではないことはこのすぐ後に証明されるのだった。

夜の女王

——バン!

扉を勢いよく開け放ち、執務室から飛び出してきた川内に対して、廊下で待つてた故に突然の事に固まっている俺。

獲物を見つけた獣のような獰猛で、無邪気な笑顔を顔に浮かべている川内に腕を掴まれて凄いい勢いで引っ張られる。漫画とかでありがちなの引っ張られる方の足が床についていない状態に近い。

「さあ! 夜戦の時間だよ! 準備しておいで!」

「え? ……いやあの、今日は秘書艦でして」

「いいから行くよ!」

「うわあっ!」

腕を引っ張られる。

今秘書艦って言ったよね? 野戦ってそれよりも優先度上なの!? あと、準備しておいでって言われても腕掴まれてるから何も出来ないぞ!

高いテンションで「夜戦だ夜戦だ!」と叫びながら艦娘寮内を走り回る川内と付属

品と化した俺。あとは部屋から出てきて追いかけてくる殺気立った数人の艦娘たち。

そして川内は騒ぎながらも追っ手を撒いて工廠に突っ込んだ。自分では動いてないのにも関わらず非常に疲れた俺に艦装を渡してくる。ロツカーには一応鍵付いてた筈だよね？

渋々艦装を着けるや否やまた腕を引つ張られる。工廠から出るときに明石の近くを通ったときに小さくごめんさいって言われた。

だったらこのハイテンション川内を殴つても止めてくれって思つた俺は疑いようもなく常識的だろう。

「おつ、ちょっと少ないけど皆準備出来てるね。じゃあ行くよ！ 貴女も付いておいで！」

さつきから拒否権と自由意志の尊重は？ 無いの？

「駆逐艦朝潮です。よろしくお願いします」

「え？ ハイ」

なんて奴だと川内を見てたらいきなり挨拶されてつい挙動不審になる。返事できただけまだマシな方だと思ふ。

「大潮、満潮、荒潮も、挨拶を……満潮？」

「あつ……ふん……」

俺から顔を背けて離れていく満潮と断りを入れてからそれを追いかけて離れる朝潮。
え、俺何かしたつけ？ 全く心当たりがないんだけど……

歓迎会のときに酒に酔ってウザい感じの絡み方でもしたのかな？ 満潮が不機嫌な

理由は知らないけど後で謝っておこう。

なんて考えていたら他の人にも声を掛けられた。

「は〜い。荒潮よ。スチュワートさん、これからよろしくね？ うふふつ」

「大潮です！ 一緒にアゲアゲで行きましょう！ ハイッ！」

「あたしは敷波。よろしく」

「綾波型駆逐艦、天霧だ。よろしく頼むぜ！」

「アタシは江風つてんだ。これからよろしくう！」

「陽炎型駆逐艦の十七番艦、萩風です。一緒に頑張りましょう」

「そして私が川内だよ。これからも ” 一緒に ” 夜戦、しようね！」

うん、情報量が多い。

え〜つと……さっきの真面目そうなのが朝潮で、挨拶してないのが満潮、なんか見た
目と雰囲気一致しないのが荒潮で、陽陽の者者が大潮ね。これは全員服装が同じだから朝

潮型駆逐艦で決まりだろう。

それであつさりしてるのが敷波、メガネが天霧で、二人とも綾波型……で良いんだっけ？ ……良いんだ。吹雪型と似てるって言われない？ 似てると思うけど……え？ 違う？ ……そう。

そして目立つ赤い髪が江風で落ち着いてるのが萩風ね。江風は白露型だったっけ？
そして夜戦ってしか喋れないんじゃないかって疑惑を早くも俺に植え付けた張本人が川内と。リーダーがコレで良いのか？ このリーダーだから良いのか？ 分からないなあ……

俺も挨拶と自己紹介。それが終わったら川内がとんでもないことを言い放った。

「あ、そうそう。スチュワートは三水戦に入れるから！」

「……………」

あまりにも突飛な内容で脳が理解を放棄してフリーズする。説明プリーズミー。

海の上で進みながら説明を受けた。

提督から俺の訓練を兼ねるなら夜戦の許可を与えろと言われてたらしい。

確かに座学の時間に訓練はしたいとは言ったけど、その数時間後に川内が来るまで一切の素振りナシでいきなり始まるなんて思わないだろ普通は。

しかも敷波の推測によると、コレは毎晩のように夜戦に出る川内の為ではなく、それに付いていく（付いて行かされる）艦娘が無断出撃にならないようにする為の措置らしい。

そうかな？ ……そうかも。

いや、俺の訓練をオマケ扱いされるのはそれはそれでなんか嫌だ。

そして三水戦が云々って話はなんと、俺が三水戦に居たら毎日夜戦しても怒られないだろうと判断した川内の独断っぽい。

その話を聞いて流石に滅茶苦茶過ぎると思ったのか萩風に謝られた。 ……逆になんで他の艦娘たちは歓迎ムードなんだよ。

どう考えてもやりすぎな事実にドン引きだぞ。

夜戦する大義名分を逃がさない為にここまでやるか？ その熱意はもはや尊敬できるレベルなんだけど、別に痺れも憧れもしない。

夜にも哨戒してる艦娘が居るらしいのになんでわざわざ敵を探して叩いてんだか ……

このままでは川内に振り回されて死ぬ。そんな未来が見える。

これは提督に一言物申さねばなるまい。

「敵艦を見つきました！ 10時の方向、気を付けてください！」

「よし野郎どもオ！ 突撃だ！ 続けー！」

深海棲艦が見つかった連絡と共に騒がしくなった。

朝潮と萩風以外は緊張するような素振りを見せない。……この2人が清涼^{まとも}剤だな。

他の人達が次々と敵に向かって突撃していく中で、まともな攻撃手段を持たない俺は何をすれば良いのか分からなくなっていた。

「え、速……」

困惑して、取り敢えず付いて行こうとした時には既に人影は遠くに居た。しかも見える光と聞こえる音からすると既に交戦しているらしい。

取り残された。いや、置いてかれた？ 俺の訓練ってどうなったの？ 何すれば良いの？

「いつまでも突っ立ってんじゃないわよ！」

「あああああつ?!」

めっちゃビビった。心停止するかと思った。すぐ後ろから突然大声出さないで……。でもいつまでも突っ立ってるのは確かにマズいだろう。

おかげでちよつと現実に戻ってこれたかも。逃避してても深海棲艦は居なくなつた

りしないからね。

「あ、ありがとうございます。もう大丈夫です」

「前を見なさい！」

「え……っ！」

お礼を言っていたら砲弾が飛んできてたらしい。怒られて気が付いたソレを盾で弾くと、駆逐イ級のものよりもだいぶ強い衝撃が盾越しに伝わってくる。

「そうだ、俺が盾を望んだのは何でだ？ 確かに誰もしたことが無いようなことがやりたかった。俺が楽しければそれで良かったんだ。」

「だけど……それはきつかけの一つに過ぎなかった。」

妖精さんを亡くした時みたいにこちらの攻撃は通用しなくて、でも相手の攻撃は避けられない。なんて時に攻撃を捨てて防御に特化すれば自爆なんてしなくても済むかもしれないと思いはじめた。

そして夕張や赤城との演習で、攻撃能力が高い艦の護衛に回ることで心置きなく攻撃に移ってもらうことが出来るかもしれない。と考えはじめた。

でもそれだけじゃダメだ。相手の攻撃を待つんじゃないやなくて俺の方から俺に攻撃するようにしてやれば良いんだよ！ ゲームでありがちなたんく職。その手のゲームはやったことないから経験は無いけど知識ならちよつとだけある。やってれば自然と体

は動くようになるだろう。その為に演習とかもあるんだろうし。

「満潮、しばらく下を向いててください。攻撃は任せましたよ」

「はあ？ いきなり何よ……つまらない作戦なら許さないから」

視線の先には青いオーラを纏った深海棲艦。満潮は呻くように軽巡棲鬼と名前を言った。〇〇棲鬼つてことは、俺が出会った深海棲艦の中では駆逐棲姫と同等かそれ以上の強さだろう。

だけど今回は俺の他にも隣に満潮が居る、後ろに心強い仲間が居る。

だったらやるべきことは俺が攻撃を引き付け続けることだ。その為の盾だ。仲間が攻撃してるときに盾に包まれて震えるなんてカッコ悪いにも程がある！

間違えても沈んでやるものか。軽巡棲鬼にも多くの取り巻きが居るみたいだけど、果たして赤城相手に数分持ちこたえた俺を沈められるかな？

「やってみろクソがあッー！」

そう叫んでからスタングレネードを全力投球して軽巡棲鬼に近付く。必然的に軽巡棲鬼の周りに居た他の深海棲艦から囲まれるけど、ここで夜の闇を科学の光が吹き飛ばす。

視界が一瞬明るくなり、不意を突かれた深海棲艦は動きを止めた。俺は細目で辺りを見渡す。

「うげえ……」

「さっきの提督との座学で説明を受けた深海棲艦がチラホラと……空母ヲ級に重巡リ級？ あれは軽巡の何級だったかな？ 兎に角見たことない種類の深海棲艦が何種類か居た。」

でもヲ級は赤城より上つてことは無いだろうし、無視して構わないか。あとは取り巻きの後ろで様子見してる軽巡棲鬼も無視でいいだろう。

だからまずは俺と同じようなクソデカイ盾っぽいのを二つも持つてる深海棲艦を海の藻屑にしてやろう。同族嫌悪つてヤツだ。海上に輝く盾は一つで十分だよ。

近くに来ていたイ級にゼロ距離で高角砲をお見舞いする。ゼロ距離なら艦載機じゃなくても当たるんだよねこれが。普通の砲よりも威力は出ないけど何もしないよりは良いだろう。

イ級が俺に向かって体当たりしようとしたタイミングで後ろの方から魚雷が複数向かってきていることに気が付いた。不思議なことに危険な物ではないと分かる。

それらは俺の脇を通り抜けてイ級とその他に大きなダメージを与えているみたいだった。あの妖精さんが言う通りなら満潮のレベルはかなり高い。

……これなら案外楽に勝てるんじゃないの？

前言撤回。かなりキツイ……やっぱり戦いは数なんだなって思う。ヲ級が3人も居たらそりゃあ赤城と同等かそれ以上に苦戦を強いられるでしょうよ！ しかもまだ盾持ちの深海棲艦は沈んでくれないし。

高角砲が無かったら今頃満潮と一緒に仲良くお亡くなりになってたかもしれない。

大見栄を張ったばかりにそれだけは勘弁してほしいと思いつつ、軽巡棲鬼が川内が居る方の戦場に向かっていったから助かった。

軽巡棲鬼用にとっておいた魚雷を眼前の深海棲艦に惜しげもなく放つ。相変わらずダメージはあるみたいだけど満潮の魚雷と比べると威力が低すぎる。

それにしても、艦載機が多すぎる。

切実に1回休みを貰いたい。

ただで深海棲艦がそんなことをしてくれる筈もなく、焼夷手榴弾と音響手榴弾を投げたから後退して危機を脱する。

やっぱり場数をこなして適切な対処方法をゆっくり身に付けていくのが一番の近道か。なんて考えてたりしたら、突然攻撃が優しくなった。

ちよつとした余裕に辺りを見渡すと、首から上が無くなってるヲ級が居た。

「ヒエツ……グロい」

「私たちの事を忘れてるんじゃないの？」

「スチュワートさん、大丈夫ですかっ!？」

なんて声が聞こえてきた。川内に朝潮!？」

ああ……すつかり頭から抜け落ちてたよ……。

「あつちの戦いは……」

「終わりました。あとは私たちに任せてください」

萩風に連れて行かれて戦場から少し離される。そこにはかなり疲れた様子の満潮が居た。大きな怪我はしていないみたいで、殆どの攻撃を引きつけた甲斐が有ったなあと思う。

「へへッ……」

「なによ、気持ち悪いわね……ありがとう」

聞こえてんだよ。可愛いくないヤツめ。

主に満潮が減らしたとはいえ人数差があつたこともあつて、それほど時間も掛からずに残っていた盾持ちとヲ級3人は海上から姿を消して、静かな海が戻ってきた。

「みんなお疲れ様。早く鎮守府に戻って、明日の夜戦に備えるよ!」

「……」 「おーっ!」

川内の放った言葉に対する反応は二通りだった。白い目で川内を見る大多数と、元氣

よく右腕を上げる江風と天霧。俺は勿論前者だ。そんな元気は既に無い。他の面子もだいたいそんな感じだろう。

だつて空が薄つすらと明るくなつてきてるんだし。

ほぼ徹夜して尚騒げるのは生粋の夜戦バカ。と頭の中で注意書きをしてから、出撃の時より大分ペースが遅くなつた三水戦と鎮守府に戻る。

……秘書艦つて昨日の午前8時頃に始めた筈だからまだ一日経つてないんだよね。

毎日こんな感じで夜戦に付き合わされてたら過労で頭おかしくなる。

明日……いや今日も、頑張らないといけないのか。

帰還

俺は激怒していた。必ずやあの邪知暴虐の提督に問い詰めねばと決意していた。俺には提督の考えが分からん。俺は元々ただの一般人だ。口笛を吹いて、友人と遊んで暮らして来た。だから政まつりごとに対しては人一倍鈍感だった。今日未明、俺は執務室に向かつて出発し、戸を越え廊下を渡り、10分掛からずこの執務室の前に辿り着いた。

とは言っても詰問って程ではなくて、ただ単に色々と質問がしたいだけだ。……なんで当事者である俺を抜きにして川内と話を進めたのかも聞きたいし。

「川内さんも執務室へ？」

「うん。寝る前に報告しないとね」

川内がノックをするとかや遅れて返事が返ってくる。

……もしかして寝てたか？ だとしたら起こしちやつたかな？

確かに『艦これ』では時報は24時間あるみたいだけど、それは『提督フレイヤー』が起きてた場合の話か。常識的に考えたらまだ寝てるか寝起きだよな普通は。

でも既にノックしたし、返事も返ってきたよ!?

「川内です。夜戦の報告に来ました！」

……お構いなシとかヤベえな。

要件を伝えた後に執務室に入っていった川内に慄きながら続いて執務室に入る。

提督から労いの言葉を貰ってから川内が報告を始めた。三水戦は全員無事なこと、南側に進んだところで軽巡棲鬼と戦艦水鬼が現れたこと、戦艦水鬼は深手を負わせたものの逃がしてしまったが軽巡棲鬼は撃破したこと。

……俺を勝手に三水戦に入れてくれたことが報告されてないんじゃないか？

「そうか……戦艦水鬼は大きな脅威だから是非とも撃破してほしいが、君達が無事であることの方が余程大事だ。ご苦労様。ゆっくり休んでくれ」

はくいと気だるげに返事をしてから出ていく川内と残る俺。俺のだって色々と言いたいこと、訊きたいことがあるからしっかりと答えてもらおうぞ。

「スチュワートも疲れただろう。休んできなさい」

「はい。……ですが、休む前にいくつか質問があるのですがよろしいですか？」

「勿論大丈夫だ。何が訊きたい？」

「なんで私を条件にしたんですか？」

「そのことか……。スチュワートには悪い事をしたと思っっているが、度重なる川内の無

断出撃に正当な理由付けが出来るから。というのが一番の理由だ」

敷波の言う通りだった。

ここで「なんとなく」なんて言われてたら盛大に顔を顰めていただろうし、仮に崇高な理由があつたところで俺に理解できるとは思えない。

それに、提督にここまでさせたってだけでどれだけ川内がヤバいのがよく分かつた。俺の鎮守府生活に早くも暗雲が立ち込める……ではなく夜の帳が降りてきたって感じだな。

「分かりました。あと……昨日は一応秘書艦でしたけど、次の人への引継ぎとかそこら辺のアレコレとかはどうなってるんですか？ 終了時間とか。質問する前に連れて来てまして。……因みに今は午前5時半です」

「秘書艦業務は午前7時から午後9時までだ。私だつて1日中働けるほど若くないし機械でもないからね。……他に訊きたいことはあるかね？」

「川内さんから三水戦に加入させられたんですけど……」

よし、一番言いたいことを言うことが出来たぞ。別に三水戦が嫌って訳じゃないけど……せめて他の部隊とかを見学して、自分に合つてるところに入るべきだと俺は思う。

「嘆願書を提出しろと伝えてくれないか」

「あつ、分かりました」

やっぱり無断なのね。提督も呆れ気味というかキレ気味だから今までもこういうやり取りがあつたんだらうなあなんて思う。

—— コンコンコン

背後で扉がノックされた。提督が返事をするの大淀が入ってきて、俺を見ると驚いていた。……つて今日も沢山の紙を持つてる。

朝早くからお仕事お疲れ様です、と会釈したら無視された。酷い。

すると提督が、今大淀が机に置いた紙とは別の紙を俺に渡して来た。カレンダーだった。

「秘書艦をした子は次の日は基本的に休日になっている。休みは週2日で、スチュワートはしばらく土日休みで良い。そして今日は金曜日だから、ゆっくり休んでくれ」

「……ありがとうございます。あ、最後になりますけど、次の日の秘書艦の人に伝えるまでが仕事で良いんですよ？」

「そうしてもらえると助かるな。今日は確か……ハチだったな。この時間には食堂で朝の支度をしていると思うけど、もしそこに居なかつたら寝ている筈だ。部屋は誰かに聞くとかして探してくれ。……夜間出撃ご苦労様」

その言葉を最後に会話が終わり、安心して食堂へ向かう。

まだ明け方なのに飯の支度とか、みんな朝から何を食わせようとしてんだよ……1時

間半もあるんだけど、朝からそんな凝ったもの出すのが普通なの？

普通に白米に焼き魚に味噌汁で良いじゃん……

食堂に着いた。灯りは一部にしか点いておらず、厨房に間宮さんが居るのがチラチラ見える。

お邪魔しますつと厨房に入り、朝から一生懸命な忠犬ハチ子を探すとすぐに見つかった。明らかに厨房にそぐわない格好をしている。

なんと水着にエプロンだ。凄まじく変態チックな服装にドン引きする。もっと恥じらいを……いや、常識を身に付け……この場合はまともな制服を身に着ける。見てるこつちが恥ずかしくなってくる。

正直話しかけたくはない。話しかけたくはないが……

「グ^Gー^uテン^tモⁿル^Mゲ^rン^g、スチュワートさん。今日は私が秘書艦、分かってますよ」

あつちから先に話しかけられた。まあ、ここに居る以上は分かっているだろうけど一応ね。と挨拶してから部屋に戻ろうとしたら世間話が始まった。

やれ秘書艦業務はどうだったあの、昨日は災難だったねあの……やっぱり川内は災害扱いなね。

「あなたは好きな本とかある？ ギンター・グラスとかシェイクスピアとか」

そして唐突に読書の話題を振られた。

しかし平成の世を生き、スクリーンと睨めっこして育った俺はそんな崇高な本は読んだことが無い。シエイクスピアは名前だけ知ってる。罪と罰？ を書いた人でしょ？

「シャーロック・ホームズゴナン・ドイルなら少しは……でもそんなに読書はしないので……ごめんなさい」

まあこう言っておけば問題ないだろ。読んだことはあるから一応内容は大雑把には説明できるはずだ。推理小説以外はなんか途中で飽きちゃうんだよねえ……まあ、これらもただ読んでるだけだから俺の頭が探偵みたいに良くなる訳でもないんだけど……。「そう……ちよつと残念。本が読みたくなったら私の部屋に来てね。海外文庫まで揃ってるから」

「それは図書室では？ ……その時は邪魔しますね」

「それって来ない人が言う台詞。……引き止めてごめんね。ゆつくり休んでね」

優しさが心に沁みる……

疲れた足取りで自室に戻って、ノロノロと布団を用意する。

それにしてもハチの用意した朝食を見たところ。パン派と言うことが分かった。しかも早朝という時間から考えると恐らく生地から作る本格派。一体何がハチをそこまで駆り立てるのか……

布団も敷き終わり、ダイブしようと思ったけど踏み留まる。このままの格好で布団に入るのはいただけない。布団を汚さない為にも風呂に入らないとだよなあ……。

女の風呂、シャワー事情なんて知ったことではないけど、一昨日の夕張は演習後すぐ風呂に連行してきたんだしきつと朝とか夜とか関係なく仕事終わりにひとつ風呂つて感じなんだろう。

提督やハチと話したし、夜戦してた人たちとは時間はズレてるだろう。今なら誰も居ないに違いない。

「ん？ スチュワートじゃんかさー！ 今から風呂？ 一緒に行こうぜえ〜ほれほれ」

「Oh…」

江風と鉢合わせた。思わず溜息を吐く。一人でゆっくり風呂に入ることは出来る日は来るのか……

夜戦の後の過ごし方

布団にダイブ。風呂場が艦娘寮のすぐ近くつてこともあつて僅かながら外の空気に触れ、表面だけは冷えたがまだ熱が籠っている芯は再び体を温め始めた。

「疲れが取れた気がしない……」

溜息を吐く。

実際は大変だったなんてモンじゃない。風呂場に台風が留まつてゐるって感じだった。

予想通り風呂場には誰も居なかったけど、途中で江風に捕まったのが運の尽き。この時はまだ「一人じゃないのかあ」くらいの軽い気持ちだった。

江風がちよつと温くなった湯を熱くしようとして蛇口を捻るところまでは良かったけど、そのまま寝落ちして沈んでいたり、引っ張り上げてから風呂場の椅子に座らせたり、その間に熱くなった風呂に入つてたら起きた江風が入つてきて熱いと騒ぎ始めたり、心配した海風が見に来て俺が盛大に焦つたり e t c ……

「川内と一緒で、振り回して来たなあ……」

バカと天才は表裏一体つてのを思い知った。

眠気が吹き飛んだのか、勢いよく質問し続ける江風にビビりながらも答え続けた、そ

して江風にもいろいろと訊いた。

白露型の姉貴たちについて嬉しそうに色々喋ってたことは覚えてる。白露は何でも一番を目指そうとするから努力し過ぎて頻繁に体調を崩すだとか、山風はついつい可愛がつて控えめに叱られるのも良いとか、涼風は唯一の妹だから可愛いとか……仲がよろしいようで。

名前からして海外の艦娘じゃんって言われたけど、知らぬ存ぜぬで突き通した。実際に俺が知ってることは殆ど無い。アメリカの艦だつてことくらいか？ 休みは簡単に「駆逐艦スチュワート」について調べてみるか。ロールプレイに役に立つし。

「ア……ッ フウ……」

きっと他人には見せられないような、はしたないって妖精さんに言われるだろう大欠伸が出た。するとなんらかのスイッチが切れたんじゃないかってくらい眠くなってきた。

これは寝るなと理解して、そのまま目を閉じた。

それから数分後

ハラリと微かな音を立てて「壁」が剥がれ落ちる。

落ちた壁の向こうにはカメラを持ち「どんな顔？」と10人に訊いたら13回くらい「悪い顔だ」って答えられそうな顔をした女性が立っていた。

女性がソロリソロリと、ゆっくりと音もなく、しかし慣れた足取りで寝ている艦娘の枕元まで近づいて行つた。

——カシャツ！

「いや〜。良く寝てますなあ……一枚、いただきましたよ！」

女性は何かが書いてある紙とペンをちゃぶ台の上に、それ以外の痕跡は一切残さず、最近この部屋の主になった寝ている艦娘にそう呟いてから出て行つた。

その後の部屋には、何事も無かつたかのように規則正しい寝息だけが響いていた。

「ん。んーっ、ハア……」

なんか寝た。すっごい寝た。

もそもそと布団の中の冷たい部分を求めて動く。次第に布団全体が暖まってきて、心地よい眠気が不快感を伴う熱気に換わってきたのでゆっくりと体を起こす。

髪が耳とかに絡まってウザい。耳に絡まないように後ろで束ねようにも髪の長さが足りない。邪魔なのに伸ばさないと退けられないとか不便だ。

何度も切ろうかとも思ったこの短くない髪。なんと妖精さんから伸びないし、妖精以外にカット出来ないって言われてるんだよね……。諦めてお洒落しろって？ 冗談じゃない。

制服だから仕方ないとは言えスカートを履いてるから今更だけど、リボンはずよつと抵抗感が強い。やっぱり慣れるしかないのかと考えて寝起きから憂鬱になる。

ノロノロと布団を畳み終わって大きく伸びをすると、ちやぶ台の上に並べられている紙束に気がついた。

カレンダーの他にも封筒がいくつか。あとペンも。

早速開けて確認する。

「ん〜つと……ああなるほどね」

紙の内容はプロフィールの記入を求める物で名前やプロフィール、一言などを記入するように紙に指示されていた。

これに記入したら、艦娘のプロフィールとかが載ってるあの冊子に俺の項目が増えるのかと思うと恥ずかしい。

「クレムソン級駆逐艦で……スチュワートつと」

身長と体重は……これって艦の方？ 艦娘の方？ どっちも知らないからパス。

好きなものは……困ったなあ。『艦これ』だったらキャラクターごとに好き嫌いが艦歴とかを反映させたものだったりするから……やっぱり明日か明後日には調べに行かないといけないな。取り敢えずこれも飛ばす。

……この調子だと碌に埋められる気がしない。やっぱり今すぐ調べに行こう。幸いまだ外は明るいから、図書館とかが近くにあることを願おう。

書類の記入を諦めて他の封筒を確認すると、中には紙が2枚。

取り出してみると……論吉さん!?

「えっマジ?」

ドッキリとかじゃないよね? 監視カメラとかないよね? あの冊子に使うような

オモシロ画像なんて撮られたくはないんだけど!

焦って部屋を見回したけど隠し撮りはされてなさそうだった。安堵の息を吐く。

そして論吉さんじゃない方の紙は……

「初めての休日、これで羽根を伸ばしてきなさい。ただし門限は守ること……提督の作業か」

何をするにも大なり小なり金は必要だから、本音を言えば遠慮せずに貰っておきたい。でも財布も持ってないし……

「問題が多すぎるな」

財布を買いに行くことが最優先か？ いやでもその前に、俺のセーラー服せいらいふくで市井に出たら絶対に目立つ。

普通な服は工廠にあつたつけ？ 確認しよう。

「明石さ〜ん」

工廠の購買で明石を呼ぶ。はいはいなんて言いながら出てきたので、外に出ても不自然にならないような服は無いか？ と訊いたところ、幸いなことに鎮守府からそう離れていないところに服も売ってる店があるらしい。

しかも嬉しイストくことに、鎮守府が近いからこの辺の住民は艦娘慣れしているらしい。

鎮守府で催イストしとか、他にも災害があつた時の援助とかで制服姿で顔を合わせる機会も多く、特に漁業関係者は仕事でも結構顔を合わせるんだとか。

他にもアレコレ訊こうとしたら「購買には余所行きの服は売ってないし、住民も慣れてるし、悪目立ちはしないから諦めて外に買いに行きなさい！」って怒られた。

艦娘に慣れてるからと言っても、見慣れない存在である俺には好奇の視線が注がれることは間違いない。注目されるのは好きじゃないんだけどなあ……。

なんて落ち込んでたらケツを叩かれた。

「明石さんは最初、固い人だなあなんて思ってたけど、全然そんなことなかったです」

「ちよつと、ソレどうゆうこと?」

「そのままです」

「……貴女も言うようになったわね」

いや、ずつと言ってたよ? 心の中で。

俺もだんだん慣れてきたから喋り方のセーフティラインが見えてきたような感じがある。でもポロつと男言葉を漏らさないように気を付けないと……。

でも江風とか天龍とか居るし、漏れても案外何とかなるかもしれない。まあその時はその時でいいか。

受付みたいなどころには “ 普通 ” の警備会社の社員みたいな人が座ってた。

外出したいと言っても特に引き留められるような事は無く、あっさりと外に出ることが出来た。

「……何も無いじゃん」

レンガ造りの壁に作られた扉を開けると、そこは舗装された道路と、その両サイドに

林が広がっていた。

懐かしき日本の街並みは遠く、木の隙間からちよつと見えるだけ。

「交通の便、悪くない？」

出鼻を挫かれた気分だ。

休日の過ごし方

耳に入る市街地の生活音。

目に入る信号機や電光掲示板などの光。

鼻には車の排気ガスや土っぽい匂いが入る。

自販機の炭酸飲料を片手に街並みを歩く。

空き店舗のショーウィンドウに映った自分の姿が目に入って立ち止まる。

「早いもんだな」

『艦これ』の世界に妖精さんに連れてこられる形で転生してから大分経った。

何も分からないまま海の上をただ進み、深海棲艦なんて化け物と相対して死にかけた
り、ゲームの中のキャラクターがリアルに居て、鎮守府で過ごして……

「……すっかり日常と非日常が入れ替わったなあ」

なんと鎮守府に着いてから既に一週間以上経ってる。

新しい武器を作ってもらったり、大ベテランから洗礼を受けたり、夜戦に連れてかれ
たり……

人は慣れる生き物だって言われてるけど、毎日が非日常だからそうそう慣れることはなさそうに思える。

今なんて特に、非日常の連続から急に俺が知ってる日常に逆戻りしたから脳が混乱してる。

突然の休暇だったから予定なんて無いけど、服装は何とかしたいと思ってる。

今も俺は妖精さんから貰ったスカート初期装備を着けているけど、寝間着以外にこれしか無いんだよね。

制服はいつの間にか……というか寝てたら朝に綺麗に畳まれて置いてあったから、妖精さんが隙を見て洗ってくれてるらしい。

つまり、極端な話にはなるけど、余所行きの服が無くても鎮守府内では清潔な服装で過ごすことが出来ると言うわけで、制服以外の普段着なんて必要無いんだけど……。

「やはりスカートは恥ずかしい……ッ！」

街並みを歩いてると、数は少ないけど車の中からちよくちよく視線を感じる。まあ、歩行者俺が飛び出さないと限らないし、交通安全的に間違いじゃないけど……俺は道路の真ん中で反復横跳びなんてするつもりはないから安心してほしい。

だから見ないでくれ。邪な視線を向けて来ない艦娘ならともかく、見ず知らずの人に見られるのは抵抗がある。おう今ガン見してた姉ちゃん、アンタに言っただよ前向い

て運転しろよ。事故つても知らないぞ。

「おっ?」

交番があつた。

周辺の地図が描いてある看板とかがあるから実際、今の俺みたいに迷子になったときは間違いない役に立つんだよなあ……。

「うわ……結構離れてる」

なに? いつの間にこんなに歩いたの? ってくらい離れてる。正直なところ、メモか何かが無いと自力で帰れる気がしない。

近くにコンビニあったから、メモでも買ってくるか。

「ヤバいなあ」

この一言が全てである。

お手製のメモで複雑な道を正確に辿れなかつた俺は今、真正銘の迷子である! やっぱリスマホのマップ機能は素晴らしいってことがハッキリ分かつた。

迷路は迷つたら分かる場所まで戻るってやり方も、迷路みたいに右手の法則? も市

街地では役に立たず、交番の場所地点も分からない。

そんな現状である。見たことない街並みをあっちへフラフラこっちへフラフラと、もはや当初の目的地を目指しているのではなく当てもなく彷徨い続けている感じだった。空を見上げる。空は綺麗な橙色に染まってきたけど、建物の陰に隠れながらもゆつくりと沈んでいく夕日を呆けながら眺めている余裕は俺には無い。

「まだ、まだ沈まないでくれよ……!」

焦燥感が募っていく俺は、さつきからずっと街中を小走りともとれるような早歩きで移動していた。道を訊こうにも物欲センサーに引かかかったみたいで、迷う前はそれなりに人通りはあったにも関わらず、迷子になってからは車の往来があるばかりで、人影は全くない。

時間的に居そうなちよつと買い物帰りのおば様方々? 散歩やランニングしてるおじ様達々?

「チツ……ああもうっ! クソツッ!」

苛立ちのあまり怒声を上げる。東側の空が紺色になってきたのを確認して、俺の足は更に速く動いた。

……すっかり暗くなってしまう。街灯と車のヘッドライト、家の灯りのお蔭で海上よりも随分明るい。

だけど帰る見通しが全く立たない俺は気分が落ち込んで周りよりも暗くなっている。空を見上げると星が出ていた。

俺は公園に居た。夜戦終わってから何も口に入れてないから腹が減り、ずっと小走りだったから喉が渴いていた。公園の水飲み場で水を飲んで、疲れた足を休めるためにブランコに腰掛けていた。

「辛いわあ……」

このまま帰れなかったらどうしようかなんて、ネガティブ極まる考えが出てくるあたり相当参っているらしい。

鎮守府で過ごした一週間の間に随分贅沢な生活に慣れた……質素な生活から抜け出していたものだ。ククツと苦笑いする。

人間、贅沢を知ってしまうと中々に戻れないなんて言うけど、以前なら半日食べなくても何とかなっただろう。だけど今はもうダメだ。空腹による胃酸かストレスのどちらかで腹が痛い。

走り回った影響からか、セーラー服もリュックも汗でベチャベチャになってる。

こんなことなら、恥を忍んで誰かの家を探ねて道を訊くとか、いつそ余ったお金でタクシー呼ぶとかしてもらえば良かった……どうして手遅れになってから簡単な解決法が浮かんでくるんだらう。

「はあく……」

クソデカい溜息を吐いてから軽く地面を蹴る。ブランコが小さく揺れて哀愁のある音を立てる。しばらくそれを繰り返してフツと自嘲する。こんな状況なのに焦らずに諦めた俺の不甲斐なさよ。

「あく居た居た。もうっ！ 随分と手、掛けさせてくれるじゃない？」

……どちら様で？

俺を探しに来たってことは鎮守府の人だろう。わざわざ俺の事を探しに来てくれたのか……

「えつと……ごめんなさい。お手数をお掛けしました」

でもどうやってだ？ 俺はGPS機器なんて持ってないし……訊いてみるか。

「どうやってこの場所に居るって分かったんですか？」

「……私たち艦娘に大事な事は三つあるわ……勝利への意欲」

「はい」

あ、艦娘だったの。

なんか見たことあるけど……誰だろう？

「美への意識」

「……はい」

「そして……勘よ」

「はい？」

いや、1つ目と2つ目は分かるよ？ 相手を倒してこちらも倒れたら負け。相手もこちらも倒れなかつたら分け。勝利の為には相手を倒してこちらが生き残る必要がある。道理だ。

そして艦娘だって恋する女の子だ。『艦これ』でも提督LOVE勢なる人たちもいるみたいだし。……ウチの提督はいい歳いつてるから流石に恋愛対象外……だよ？

でも、恋愛云々を抜いても女性だから美意識を高く持つのも道理の筈だ。俺？ 俺は適当で良いんだよ。二百を超える艦娘の中で一人二人くらいは女子力ゼロが居たっていいだろ。その中に俺が居ても問題は無い筈だ。

そして気になる3つ目。これが分からない。何だよ勘って。

「勘は大事よ？ ここぞって時には案外バカに出来ない力を発揮するわ」

アツハイ……でもそんなことを言えるのは高性能な勘を備えてる人だけなんだよなあ……俺はそんなこと言えないもん。

「そう！ 私たちは貴女を探しに来ていたの！ さっさと帰るわよ！」

「足柄？ 遅いですよ。見つかったなら早く戻ってきなさいな」

「み、妙高姉さん……」

もう一人の声がした。そこには足柄と呼ばれたのと同じ服を着ていて、俺を探しに来る人達で、妙高姉さんと呼ばれていたから……あつ、妙高型重巡かあ！

型まではあつさりと覚えられそうだなあ……。服装も纏ってるか似てるし。え？

陽炎型？ ……あんなの無しだ無し！ 統一感が無いから覚えられない。統一感が無いのが陽炎型って覚えておこう。

「ほら、早く鎮守府へ戻りますよ」

そう言つて歩き出す妙高の先には、白い車があった。

まあ、成人女性みたいな見た目の艦娘も多いし、車の免許持つてもなんらおかしいところは無い……か？ 軍艦が車に乗るつてのは、面白いって意味ではおかしいけどな。

「……もう少し速く走らせても良いんじゃないですか？」

遅っそ。安全運転のし過ぎでノロノロと走る車に乗ってる感想がこれだ。後ろ詰まってるじゃん。学生が運転してる教習車でももつと早く走るつて。

これなら俺が運転した方が良いだろ。無免だけど。少なくとも今より余程快適な速度で運転できる。

「交通規則を破る訳にはいきません。そんな考えだと——」

隣に居る足柄が「何てことしてくれんのよ!」みたいな顔をして俺を睨んでくるけど、俺は悪くないと思う。

実際道路路つて流れが大事だと思うんだよ。いくら交通规则守ってたつて……ほら、後ろの方だんだん詰まってきたぜ。煽られるまであとどのくらいだろうなあ。

「あつ、そうだ! 妙高姉さん!」

「——達は市民を守るに当たって、模範となるように……何ですか? いきなり大きな声で」

「私、大淀さんから提督が近いうちに辞めるつもりだつて聞いたんだけど!」

へえくそんなニュースが……

え?

食堂での話し合い

「私、大淀さんから提督が近いうちに辞めるつもりだつて聞いたんだけど！」

「えっ嘘!？」

「Oh…」

マジ? 血迷ったか提督。

提督が辞めるとか……一部の艦娘達が暴動を起こしかねんぞ。平穏な日常が無くなっちゃうだろうが!

「それで、暴動を起こした人達を一先ず鎮めた大淀さんが、提督にサプライズで送別会を企画しててね……」

ええ……もう暴動起きてたの? 行動力ヤバいな。そしてそれを鎮めた大淀強くない? 絶対に鎮守府の裏のボスでしょ。

「ええ、分かりました。この妙高、並びに妙高型も参加することを大淀さんに伝えておきます。それよりも、何故そんな大事なことを今まで言わなかったの?」

「あっ……」

あゝあ、また口煩くお説教が始まりそうな予感がする。

何してんのさ足柄く？　なんて考えながら足柄を見る。果たして視線に思考は乗せられるか。

うんざりしたような顔をしながらハイハイ言つてた足柄も、お説教の内容が小言から提督の送別会に移ると生き生きとし始めた。

やっぱり提督つて慕われてんだね。ケツコン指輪渡したら人によつては感動、感激のあまり気絶するんじゃないの？

つていうかさつきから俺に話題が一切振られてこない。完全に姉妹で空間を作つて楽しそうにしてる。まあ新人の俺には提督との思い出なんて無いし、別にいいか。

話が無いなら鎮守府に着くまで寝てようかな……走り回つて疲れた……。

安全運転極まる車内は殆ど揺れないから、意識はスツと落ちていった。

「起きなさいよー！」

やや乱暴に揺すられて大声を出されて起きない人などいない。それでも起きないヤツは寝たふりか死体かマネキン。もしくは強力な睡眠剤か、起きていると自己認識でない狂人の五択だろう。

勿論俺はその中には入っていないから素直に「何事お……」なんて寝ぼけながら起きた。

鎮守府に着いたらしく、足柄の後ろを欠伸をして目を擦りながら歩く。

「ハア……きつとこんな時間じゃ食堂はやってないわね……。よし！ 今から私が夕食を作るわ！ 貴女もいっぱい食べて、力を付けなさい！」

「……食堂、電気点いてますけど」

「あら、ホントね」

そう言うと、キョトンとした様子で食堂の明るい窓を見る足柄。因みに妙高は提督のところに行っている。車の鍵を返しに行くらしい。

俺が夜間まで帰らなかったのはお咎めナシらしい。緩くね？

でも聞くと、無許可での外泊やその他の迷惑、犯罪行為以外はほとんど自由らしい。人によっては居酒屋で日付が変わるまで飲んでコツテリ絞られたこともあるそうだ。

……緩くね？

休日にしつかり羽を伸ばすって意味では間違っていないんだろうけど、艦娘だつて一応海軍……海上自衛隊の中の深海棲艦対策本部？ に所属してる軍人だ。もつと規律とかでガチガチに縛られてるもんだと思つてたんだけど、偏見だったかな。

食堂には多くの艦娘が集まっていた。きつと夜間の見張りと、出向で居ない艦娘以外は全員居るんじゃないかってくらいのださだ。だからだろうか、人が集まる故の熱気と

独特な酸素の薄さにクラクラする。

俺と足柄が入って来た時に、扉越しでも聞こえてきたような喧噪はピタリと止んで、何故かほぼ全員が立ち上がったってこちらを見ていた。……凄く張り詰めた空気に食堂に入って一歩目の姿勢で俺は固まった。

が、俺と足柄を見るとあからさまに空気が緩み、各自が椅子に座り始めてまた騒がしくなった。……これは何かを隠してるな？

見やすいところには大きなホワイトボードが出されていて「提督の送別会について」なんて大きく書かれている。その下には大勢からの意見なんだろう。豪華な夕食、記念撮影などの赤マルを付けられた案と、人体実験で若返らせるなんていう悍ましい案が横線で消されていた。考えたヤツの頭は絶対にイカれてやがる。早急に明石に頭の修理をしてもらうべきだ。

ワイワイと騒ぐ艦娘たちの輪から一步離れた場所で見てたら、テーブルの上におにぎりや軽食が並んでいるのが見えた。

「足柄さん、夕食はいいんじゃないでしょうか」

「そうみたいね。私も混ぜなさい！」

そう言つてズンズン人が多い方へ進んでいく足柄を、食堂の入り口に立つてる俺はただ見ていた。おにぎりを手に取り……具材ナシ。塩味が疲れた体に沁みる。

「静かにしてください」

私がそう呼び掛けても、一瞬だけ静かになるばかりで、すぐにざわつきが大きくなっていつて元に戻ってしまいます。これでは一向に会議が進行できません。

たしかに、提督が辞めるという情報を他の人に知らせたのは私ですが……。

暴動を起こすほど提督を慕っている人が居ることまでは予想できていたので、こうして「提督の送別会」という形で、それに向かって全力を出してもらうことにしました。

共通の課題があると、バラバラな集団も団結する、と提督が仰っていたので参考にさせて貰ったら、本当に団結したので驚きを隠せません。……団結し過ぎてる上に暴走気味なので今、困っています。

今食堂に入る皆さんは、各々の用事があつて時間が無い中で焦る気持ちがあることは分かっているんですが、円滑な司会進行に全く協力的ではありません。普段はまとめ役をしてくれる長門さんも拳を握り締めて何かを熱弁しているので、今は期待できないでしょう。

色々と書き込まれたホワイトボードを見る。そこには「各自が一言を綴った色紙を渡す」といったまともな案から「提督参加型の鬼ごっこ」「提督も一緒に飲み明かす」といっ

たちよつと許容しかねる案まで様々なことが書き込まれていました。

……島風さんも、伊14さんも、提督が鍛えてるからと言つて随分と無茶をさせよう
としますね……「私はもうそんなに若くない」って口癖のように言っているでしょうに
……

ハア……と溜息を吐きますが、皆さんの声が五月蠅いのできつと誰にも聞こえてはい
ないでしょう。それでも。良く通る言葉はあるもので――

「――誰か来るッ！」

そんな声を出されたのは、食堂の出入り口でさつきまでおにぎりを3つほど食べて噎
せていたスチュワートさんからでした。

その一言で食堂内は静まり返り、皆さんが立ち上がつて、少しでもホワイトボードが
出入り口から見えにくいように立ちはだかります。……どうしてこういった連携が、話
し合いで出来ないのでしょうか……きつと私は今、苦い顔をしているでしょう。

「……皆さん？　どうかしましたか？」

やつてきたのは妙高さんでした。先程の足柄さんが入つて来た時と同じようにまた、
空気が緩んで……ああ、また騒がしくなつてしまいます……

「はい！　大淀さん。お……私もう眠いので部屋に戻つて良いですか？　明日もあるの
で……」

突如そんな声を出して食堂から出て行ったスチュワートさんに私は何も言えませんでした。皆さんも「信じられない」といったように口を開けて固まっています。

「薄情な人……」

そんな呟きが聞こえてきましたけど、それと同時に長門さんが正気に戻りました。

「そんなことは言うものではない。我々にも明日の仕事がある。それに支障が出ては却って提督を心配させることになるだろう。大淀、早く話し合いを進めようじゃないか」

「はい。……今出てる案から——」

やっと進行が再開出来ました。やっぱり長門さんは頼りになります。そして、一度空気を止めてくれた妙高さんと、マイペースながらも長門さんを立ち直らせたスチュワートさんには感謝します。

▲
廊下を歩く。

「あゝ眠い……」

なんて呟きながら欠伸をすると、目の前の部屋から提督が出てきた。部屋のプレートには「海風 山風」と書いてある。……たしか江風の姉貴達だったな。

でもなんで……まさか提督が提督として提督自主規制してるなんてことはないだろうし……

分からん。

「！」「」

アカン。目が合った。目と目があつたらポケオン勝負だつて決まつてるから……え？ 違う？

じゃあ恋でも始まる？ これも違う？

じゃあ「開心術」？ 違う？ だつたらなんだつていうんだよ！

「艦娘の子たちが見当たらないんだが……」

ああそのこと……こればかりは口が裂けるまでは言えねえな。適当な嘘で誤魔化そう。

「あく……それでしたら、今食堂で「女子会」をしているみたいで……集まつて騒いでましたよ。提督こそ、お夜食ですか？ だつたら準備してもらいますけど」

「いや、いい。……あまりにも誰も居ないから少し心配になってね。皆居たのかい？」

「はい。私は眠くなつたので抜けてきましたけど」

「そうか。なら良いんだ」

なんて言つて提督は執務室のある方へ戻つていった。俺も風呂入つて寝ようとしてたけど、提督が心配で見回つたことと、女子会で騒いでたつて誤魔化したことは伝えておこう。来た道戻るとかめつちやダルいけど、仕方ないか……

「ハア……」

溜息を吐く。

この後、食堂に戻って伝えたら、何故か凄く真面目な雰囲気です話し合いをしていて凄く驚いて、仕返しとばかりに提督が心配してたと言つて驚かせたりした。

去り際に見えたホワイトボードからヤベー案が消されていたのでちよつと安心した。提督の命の危機は去つたらしい。それも身近なところに潜み、気付いた時には手遅れなヤツがな……。

「ふあ……」

風呂に入つて寝よう。

休日の過ごし方 ～二日目～

朝、カーテンの隙間から日差しを受けて目が覚める。

天気は今日も晴れ。季節に合わない爽やかな日だ。

俺は窓を開けて朝の爽やかな風を浴びていた。

「……あり得ないだろ常識的に考えて」

そう。この世界の天気はいまいち前世とリンクしていない。今の時期は梅雨で、ここ九州では台風やらの影響で毎年のように凄い雨が降るイメージあったんだけど……一週間の間、ほぼ毎日快晴である。

これも『艦これ』の世界の常識なのかな？ 確かに日本は台風や地震、噴火とかの自然災害だけで毎年いっぱいいっぱいな感じなのに、そこに深海棲艦まで追加つてなるとハードすぎるけども。

「世界がバランス調整している可能性が微レ存？」

「よう、気持ちよさそうだな」

「ふおっ!？」

ビックリしたあ……。部屋が1階だから、窓開けたら近くを通りがかった人から話し

かけられるつてことをすつかり忘れてた。

「え〜つと、木曾さんも休み……ですな」

木曾は今日休みのようだ。断言できる。何せ如何にもこれから釣りしますつて格好してんだもん。こんなんでも出撃なんてしないだろう。……『艦これ』の季節、イベントのグラフィックつて間違つてもあの格好で出撃してるなんてことは無いよね？ ……無いよね？

それはそうと、俺も久しぶりに釣りしてみるかなあ〜。

「私も〜」一緒にしても良いですか？」

「ああ、良いぜ」

了承を貰つたから急いで準備をする。早速、昨日買った動きやすい普段着を身に付けていく。

準備に5分も掛かった。待たせ過ぎて怒られんかなあ……

「おつ、来たな」

「お待たせしました。あ、工廠に寄つてつて良いですか？ そつちに釣り竿あるので

……」

「ああ」

「すぐに取りつて来ますね」

釣竿を取りに工場へ向かうと、工場の一角には何故かまだ解体されてない使わなくなった砲と、アランさんから貰った古びた釣り竿が纏めて置いてあった。

砲も釣竿も、駆逐棲姫に自爆特攻した時に奇跡的に壊れていなかったらしく、糸は交換してあるみたいで綺麗になってるけど、他のところは以前と変わらない見た目で安心した。

「随分使い込まれてるな。お前もよく釣りするのか？」

「これは貰いものでして……私自身はあんまりって感じですよ」

「そうか……ま、楽しい釣りにしようぜ」

一瞬だけ残念そうな顔をしたけど、直ぐに元に戻った。肩でトントンしている釣り竿がやけに様になってた。超カッコいい。

やっぱり彼女の4人や5人くらいは居そうだなあ……。

待つて！ 言葉にしてないじゃん！ 何で睨むの!? 眼帯の奥に心が読める第2の目でも入ってるの!?

「……」

「フフツ、またかよ！ 鈍くせえなあ」

「ぐぬぬ……」

そんな会話をしている俺の目の前には、錆びた空き缶が針に掛かつて揺れている。

端つこの方を指先で摘まんで椅子の隣に置くと、プルタブや空き缶、靴の紐？ など
のゴミで出来た山がまた少し成長した。

潜水艦の皆さんにはポイ捨てされたゴミを少しずつでいいから拾って欲しい。簡単
にホイホイ釣れていいゴミの量じゃないって。

すぐ隣では、木曾がまた青魚を釣り上げていた。何が違うというんだ……。やっぱり
経験？ それとも運？

「……にしたって、昨日のアレはちよつと良くねえな。」

「アレ？」

アレ……どれだ？ 心当たりが温かった風呂を熱くしたことくらいしかないぞ？

「すみません。心当たりが……」

「マジかよ……。提督の送別会の話し合い。途中退室はいただけねえな」

「あゝ……ハイ」

「ま、話し合いが進む切っ掛けになったし、長門がフォローを入れてくれた。あとは、提
督の様子を伝えるに戻ってきたのは助かったな。駆逐艦のチビ共には夜更かしさせられ

ねえからな」

「はあ」

「だからそんなに落ち込むこたはないってことだ。そう悪くは思われてねえ筈だ。ただ、気にするヤツは気にするってことを覚えておけよ」

「ハイ」

マジかあ……他の人と比べて提督と思いい出なんてほとんど無い俺が居ても邪魔じゃね？ つて思ったのと純粹に眠かつたのと、息苦しかったから早く出たいってことで食堂から出たら機嫌損ねるってなんだよ……。そんなヤツがうたた寝しててもキレない訳が——ッ！

「きつ、来たあつ!？」

「おつ、引いてる引いてる。よかつたじゃないか」

そう茶化され、フラフラしながら少しづつ引き上げていく。ゴミにはない引きだ。木曾みたいにアジとかじゃなくてせめてイワシでも良いからまともなモノを釣りたい。環境保護のお手伝いをする為に釣りしてるわけじゃないんだよ。

「おりゃああー!」

プルプル・・・

「えっ」

なんだこのバケモノは!! 掌より少し大きいサイズでペンギンみたいな配色して……ケツ? の方から白い綿? が飛び出たウミウシなんだかナマコなんだかナマモノなんだか分からないモノが釣れた。

「木曾さん、これは一体?」

「……」

あつ、顔逸らされた。

困ったときに頼れないじゃん! ちよつと、いや大分困る。だって触りたくないもんコレ。触っていいかも分からない。

テレビとか本とかでも見たことないもんこんなの。なんだっけこうゆうヤツ……ミュータント? ホラーゲームに出てきても違和感ないぞこんなの。

「……うん」

見なかったことにしよう。

そう思つてそつと、ゆつくり海に向かってナマモノを降ろしていく。

「ナシだな」

リリース禁止なの!? まあ食べられそうにもないけれども……嚴重に袋で密封して棄てよう。……これって棄てて良いヤツ?

ビニール袋で直接触らないようにしながら空き缶にぶち込む。嫌に温かくて柔らか

かった。ああ、夢に出そう。

時間は昼頃。近海を哨戒していただろう人達がポツポツと戻ってきた辺りで釣りを止めにする。

俺の釣果は結局、小魚一匹と大量のゴミとU未確認生命体MAしか釣れなかった。対して木曾は大量の青魚である。

「突然の突風か津波で流されてくれないかなあ……」

「抜かせ。俺が釣ったんだ。このくらい当たり前だろ？」

ホントに隣で釣ってたのか怪しくなってくるくらい釣果の差が激しすぎる。実は潜水艦の艦娘が海中に居て、針にゴミ引っかけてたとかないよね？

「さて、この魚は夜に酒と一緒に貰うから俺は鳳翔んとここに寄って来るよ。付き合ってくれてありがとう」

そう言われたからこちらこそと返して部屋に釣り竿を置いて、食堂に向かう。

気配を殺して列に並び、甘口で作られたカレーに唐辛子を大量にかけた。近くに座っていた暁が親の仇でも見るような目で見えてきたので、急ぎつつ、出来るだけ優雅に食べた。何か言いたげな目で見てきた。

図書館で「駆逐艦スチュワート」について調べようとしていたけど、本なら沢山ありそんな場所が鎮守府にもあるってことを思い出したから、俺はここに居る。プレートには「伊8」と書いてあるから間違いないと思う。

ノックをしたらはいいなんで声が聞こえてきたから普通に入っていく。

「昨日ぶりです。私の部屋に来てくれて嬉しいです。どんな本をお探ですか？」

「どんな本があるのかを見に来ました。今は英和辞典を探してます」

「……珍しい。一応あるけど。……はい、どうぞ」

あるの!?　じゃあわざわざ鎮守府の外に出て調べる必要なかったじゃん。

「ありがとうございます。貸出期間とかは……」

「汚したり、失くしたり、鎮守府の外に持ち出したりしないなら無期限です。でも、こまめに返しに来てね?　回収するのも楽じゃないの……」

英和辞典を受け取って自室に戻る。早速スチュワートの意味でも……

「ややつ!　ドーも、青葉ですう。ここに一言、お願いします!」

部屋には何故か青葉がいた。出会い頭で挨拶と共にペンを渡され、色紙に一言書くことになった。

とは言っても俺はそんなに提督に思い入れが無いし……なんて書こうかな。どれどれ他の人は……

「あたし的には、とつても寂しいです」 滲んで読みにくい……。ふうん、阿武隈ね。

「辞めた事後悔させるくらい活躍するからテレビでも見てなさいよこのクソ提督！」うわ。曙のこれは大丈夫なヤツなの？

「どんな言葉でもだいじょーぶです！ 気にしないで書き込んでください」

「そうですか」

じゃあ――

提督最後の日

色紙も書き終わってから青葉とちよつとした雑談、もとい取材を受けて午後を過ぎた。

それでも余った時間に工廠に行つて、どことなく暗い夕張と山城の前で川内と江風の物マネをしてみたりした。ショートコント「夜戦バカ達の夜」。

物マネはそこそこ得意だから自信はあつた。ウケなかつたらどうしようと思つてたりもしたけど、結構ウケたから良かったと思つてる。

日が落ちてくると、また妖精さん達が物々しい感じで武装して工廠から出て行つた。夕張曰く艦娘が集合したりするときは妖精さんが一時的に防衛を行つてくれるらしく、お陰で集まつて騒いだり出来るからとても助かつているらしい。

他の鎮守府から一時的に防衛を行つてもらふ時も場合によつてはあるみたいだけど、今回は提督にサプライズでこと書類他の鎮守府に防衛依頼が必要になりそうなることはできなかつたらしい。時計を見ると予定の時間が近づいていた。

「さて……山城さん。スーちゃんも行きましようか」

「ええ。姉さまもきつと、同じ気持ち……」

「ちよつと暗くない？ そんなんじや提督も気持ちよくお別れ出来ないよ〜？」

ちよつと茶化してみるけど全然明るくならない。食堂もこんな感じだったら提督は辞めても辞めきれないんじゃないかな……まさかそれが狙いだったり。

なんてことは無く、食堂に着いたら既に半分くらい出来上がっていた飲兵衛たちが騒いでいて、別れることを望んでいるって空気じゃない、学校の卒業式みたいな雰囲気にも包まれていた。

テーブルの上には豪華な料理を見ると楽しくなるだろうと予想できてワクワクしてしまう。でも出入り口付近に目立たないように置いてある重しは……見なかったことにしよう。

恐らく逃がしてもらえないであろう憐れな提督には、艦娘達の好感度を上げ過ぎたことを後悔しながら穏やかな老後を送ってほしい。

午後7時。ざわざわとしていた食堂内も1人2人と席に着き……気づいたら全員が椅子に座り、一言も喋らないからお通夜みたいな雰囲気になった。

駆逐艦が多く座っている辺りからは早くも鼻を吸るような音が聞こえてくる。さっきまでの雰囲気はどこに行ったとツツコみたい。

そんな時ガチャリ、とドアノブを捻る音が嫌に大きく食堂内に響いて大淀と提督が入ってくる。提督の方は驚いたのか目を大きく開けている。

拍手でお出迎えするとすぐに他の人達も乗ってきたので取り敢えず一安心。あのままじゃガチのお通夜になるところだった。

「皆……これは一体？」

「提督が辞職されると耳にしまして、提督の送別会を勝手ながら企画させていただきました」

それを聴いた提督は嬉しそうに笑い、それなら……と遠慮せずに空いてる席に移動しお礼を言ってからお酒を注ぎ始めた。

「今日は私も遠慮せずに飲むっ！ 付き合ってくださいね？」

そう言ってお猪口を高く掲げて一人で乾杯をした。

するとみんな一斉にお酒を注ぎだし、乾杯！ と思いきいに騒ぎ出す。元から準備は万端の飲兵衛たちが真っ先に提督に突っ込んでいったのは見ていて面白い。

「スチュワート、お前は どうする？ ジュースか？ 酒か？」

向かいに座った長門が訊いてくる。その手にはジュース。こういつたときくらいお酒飲めばいいのに……。

俺はどっちにしようか悩んでることにして長門に意見を求めようか。

「お酒を飲んで一緒に馬鹿騒ぎしても楽しいでしょうし、ジュースを選んで酔わずにこの光景を目に焼き付けても良い……悩みますよね？」

「うむ。私と同じ意見のヤツが居て助かった。この胸が熱くなるような光景はずっと見ていたいからな……」

「話は聞かせてもらいました！ この青葉、この光景を余すことなくフィルムが一杯になるまで収める次第です！ お任せあれ！」

「済まないな青葉……任せて良いか？」

「勿論です！」

「よし、スチュワート！ 我々も飲むぞ！」

あれよあれよと酒を注がれ、酒を飲んで酒にアルコール呑まれ……

あつという間に頭がフワフワになった。

提督が何か言ってるけど、頭が働かなさ過ぎて何を言ってるかが分からない。

……歳だから辞めるって？ そう思ったら「もうちよつと頑張れよく！」なんて口にしてた。

あつヤベって思ってたちよつと酔いが覚めたけど、周りからも「そうだそうだー！」なんて聞こえるし、提督も楽しそうだしまあいいか。

何？ 後任の提督は明日来ることになってるって？ 話はそれだけ？ 眠いし寝る。お休み〜。

「……知ってる天井だ」

天井に謎のフックが付いている部屋なんてそうそう無いだろう。だからここは俺の部屋。ちやぶ台の上にはいつか見た錠剤と水が置いてある。

たしかコレって不気味なくらい効くんだよね。

昨日の送別会はあくまでサプライズだから今日は休みではなく普通にお仕事だ。カレンダーには……近海の哨戒って書いてある。

「さて、新しく来る提督にガツカリされないように1発目！ ビシツと決めていこうかね！」

だんだん慣れて来た手つきで服装を整え、部屋の外に出たら鬼怒が立っていた。

「お、おはようございます」

「おうっ！ おはよ。今日は一緒に頑張ろっ！ さ、付いてきて」

若干ビビりながら挨拶すると元気良く返された。若いつていいな、なんて爺臭いこと考えていたら今日の仲間も待っていた。どうやら俺が一番遅かったらしい。

夕雲型の姉妹達から遅い遅いと文句を言われるけど、夜更かしして酒まで入っておきながら目覚まし時計も無いんだ。時間前集合は出来なかったけど遅刻はしてないから許してほしい。

皆に謝って艦装を取りに工廠へ急ぐ。戻ってくると、盾がやっぱり珍しいのか色々と言問された。言問には海の上で答えると言って誤魔化しておく。昨日の送別会の話題を出せば勝手にそつちに話が逸れてくれるだろう。

さあ出撃するぞと意気込んで出て来たは良いものの、提督が海を眺めていたのを発見し、みんなが足を止める。

「おお、君達も出撃かね？」

「うん！ これからこの子達と一緒に近海の哨戒任務だよ！」

「そうか……頑張つてきなさい、鬼怒、高波、早霜、秋霜、清霜、スチュワート。これからも君達の応援をしているよ！」

「提督、このタイミングで泣かせに来るのはパナイって……」

「司令官。高波、その言葉だけで頑張れる気がするかもです。いえ、頑張れますっ！」

「静かだけど騒がしい、夜の鎮守府も寂しくなりますね……もう、司令官も見れないのね」

「戦艦になった清霜を見せられないなんてえ……」

「はやはや、きよきよ、そんなにメソメソしないでよお……うちまで泣けてきちゃう……」

「……」

あゝあ、提督五人も泣かせた。どうせ今日は朝早くからここで出撃していく人たちに激励の言葉を掛けては大勢を泣かせてきたんだろ？ 罪作りなヤツめ……後ろから刺されても知らんぞ。そんな提督をじつとりと睨むと、少し狼狽えたように目を泳がせた。

「さ、さあ！ 深海棲艦はすぐそこまで来ているかもしれない。ここでしんみりしている場合ではないよ」

「っ！ はい！ 鬼怒、出撃します！ みんなもついてこーい！」

そう言つて振り返り、海に向かって走り出す鬼怒とそれに続く四人。俺も付いて行かなくちやいけない。でも――

「提督さん、拾つてくれてありがとうございます。……それじゃ私も出撃するのでこれで……お元気で！」

俺もそう言つて先を進む五人に追いつくように走り出す。ああもうあんな場所に！

「ま、待って！ 待って〜！」

そう言っただけでしばらくしてから止まってくれた。その頃には鎮守府は点のようになっていて、当然提督も見えなかった。

「ううっ……」

「……グスン」

俺が追いついた時には、一か所に固まって泣いていた。提督には出来るだけ涙を見せないようにしてたのか……。

恋する乙女……かもしれないし、そうではないかもしれない。だけど、戦う乙女の強さってヤツを見せつけられたような気がした。

哨戒任務自体は時々はぐれた駆逐イロハ級が数匹ずつ現れるって感じで、異常は無いらしかった。

綺麗な涙を流しながら提督との思い出話に花を咲かせ、それでいながら深海棲艦を材料とした汚い肉片の華を咲かせる彼女らを見て、俺は何とも言えない気持ちになった。

……彼女たちの気持ちの整理の為に挽肉にされる駆逐イ級にちよつとだけ同情するぜ。

そんなこんなでどこかスッキリした五人と鎮守府に無事戻って……問題が発生した。

「スチュワートさん……何を……」

「……ごめんなさい。大淀さん……皆さん」

「ううう……ああああっ……」

あの後、思い出すのも憚られるような悍ましい事件が起こり、俺は――

提督を撃った。

2章 　　〈幕間?〉

・工廠の狂信者

少しくらい前に、この鎮守府に知らないモノが入り込んできました。見た感じは艦娘にそっくりで、中身もほとんど違わないモノでした。

酷い傷を負って工廠に運び込まれたので修復剤を使ったら傷が治ったので多分艦娘だと思いました。

イマイチ確信が持てなかったのは、私たち妖精が艦娘を「建造」するやり方とは何かが違うやり方であることと、日本では見たことが無い艦娘だったという理由がありました。

しかし、とある妖精……とても変わった妖精の一言で全てが変わりました。

「こつ、これは艦娘です！　誰が何と言おうと艦娘！　異論は認めないッ！　それもあの伝説の妖精が作り上げた究極のツ！」

「……………」

私たちは「またコイツか……」みたいな顔で彼のことをジツトリとした目で見つめま

したが、彼は尚ヒートアップして騒ぎ続けました。

その勢いたるや疾風怒濤の如し。島風さんよりも疾く、大和さんよりも力強く、金剛さんよりも勢いがありました。その上駆逐艦並に燃費が良いのかずつと……ずーっつと騒いでいました。

そんな問題児な彼は、平時は優秀な技術者で、どんなにボロボロに大破した艦装でも直せるので非常に頼りになるのですが、いつも偉そうに踏ん返り返っている上にこうして「伝説の妖精」が絡むと途端に頭がおかしくなるのが玉に瑕です。

「バカと天才は紙一重」、「天は二物を与えず」と言った言葉が非常に似合う彼は、そんな運び込まれた艦娘の艦装を意気揚々と修理している途中で――

「なんと……おお……おいたわしや……」

なんて嘆き始め、私たちには分からない理由で泣き始めました。私や他のそういったことに慣れてる妖精は「また始まったよ……」とスルーしていましたが、慣れていない妖精は普段は頼りになる彼が泣き始めたことで非常に慌てていました。……その内慣れますから今のうちに慌てておいてください。

その後何事も無かったかのように艦装の修理を終えた彼は、私たちを集めて小さな紙を広げました。そこに書いてあったことは――

・死んじやった。ゴメンね♪

・この艦娘はちよつと特殊だよ

・彼女は盾と投擲物を欲しがっている

要約するとこの三つのことが書かれていました。そして下には両端に矢印が付いたSのサインがありました。それは紛れもなく「伝説の妖精」のサインでした。

私たち妖精には名前はありませんが、妖精同士でやり取りするサインがあります。これは妖精にしか見えないもので、名前の代わりになるとても大切な物です。因みに私は桜の花弁とスパナを組み合わせたようなものです。

そしてその「伝説の妖精」——がなぜ伝説かというと

・ジエスチャーではなく、艦娘にも提督と同じように会話で意思疎通できる

・単独で艦娘を「建造」できる

・普段は任務が無いと鎮守府から出られないという妖精の特性を無視して世界中を巡った

等々……本当に私たち妖精と同じ妖精なのか疑いたくなるようなレベルでブツ飛んだ行動力のある妖精で、いつしか「伝説の妖精」だなんて呼ばれるようになってしまった。

そしてココ、佐世保鎮守府には「伝説の妖精」の熱心なファン……狂信者とも言えるような彼が生まれました。……生まれてしまいました。

「そういう訳でワタシは「伝説の妖精」の意志を引き継ぎ、彼女の望む物を作成するッ！」
なんて堂々と言い張る始末。変人だから技術が身に付いたのか、技術を身に付けたから変人になったのか。コレは私の仲が良い妖精グループの中で永遠の謎とされています。

「まあいいんじゃないですか？　上が優秀過ぎても下が育たないなんて言いますし、こちらの邪魔にならないなら……普段の艦装修理を同じくらいの費用で修理や艦装の作成をしてくださいね」

すっかり釘を刺しておくのを忘れない。上限を設けないと好き放題し始めるのには目に見えています。

——こうして、佐世保鎮守府に「とある艦娘専用の妖精」という名の狂信者^{キチガイ}が生まれた。



・お酒の席　く空母たちく

「油断や慢心などは、無かったとは言いい切れません。最初から様子見をせずに全力で叩いておけば良かったと思っっています」

「いや、初めから全力を出すのも手だが、耐えられると一気に相手のペースに持ち込まれることが多い。ましてや初めての相手なら互いに何をしてくるか分からないという状況だ。情報は大事になってくる。様子見で正解だろう」

「そうだよ。あのパツと光るヤツで私の艦載機を落としてくるようなやつさあ、アレは何なんだろうーね?」

「分かりません……ですが、その他にも煙幕を張ってきたり艦載機を燃やしたりしてくるような子でしたので、結果的には様子見して良かったとも思っっています」

「はあ!?　煙幕って何よそれ!?　出鱈目も良いところじゃない!」

「でも、赤城さんがこうして愚痴をこぼすなんて本当に珍しいですね。話を聴いてる限りでは、相当変わった戦い方をするみたいですけど」

「そうだよお!　あの立派な盾見てさあ、戦艦ル級かと思っさあ!　ほら!　赤城さんもお酒飲んで、嫌な事もパーツと流しましょうよ!　鳳翔さん!　お酒追加で!」

そう言われて私は隼鷹さんに日本酒を渡し、カウンターの向こうでお酒を飲んでい

面子を改めて見ました。

赤城さん、翔鶴さん、瑞鶴さん、日向さんが、隼鷹さんにお酒を注がれていました。話のネタは、どうやら最近ここに来た駆逐艦のスチュワートさんみたいです。

……それにしても、あの赤城さんが駆逐艦を大破まで追い込むのに時間が掛かったっていう噂は、こうして愚痴をこぼしている時点でほぼ確定なんでしょうか？ だとしたらスチュワートさんはとても防御に秀でているのではないのでしょうか。

「おうい！ 摘まむ物はまだかー！」

「今作つてますよ。もうちよつと待つて下さいね」

……こここの常連の隼鷹さんは本当に遠慮がありません。体が心配になるくらいいつもお酒を飲んでいきます。……でも、私も注意しておきながら、なんだかんだお酒を出してしまうので、甘いのもかもしれません。

時間もすつかり夜遅くになってしまいました。空母の皆さんと日向さんはお酒を飲みながら談笑し続け……

「加賀さんに知られてしまったらどうしましょう……ツク……駆逐艦に手古摺るだなんて一航戦の誇りが……」

「赤城さん！ 貴女ねえ……ッ！ 一航戦の誇りは駆逐艦を落とせなかつただけで損なわれるようなモノだったの!? もしそうなら艦隊全員に謝りなさいよね！」

「ちよつ、ちよつと瑞鶴!？」

「翔鶴姉は悔しくないの!? たまたま駆逐艦一人、演習で追いつめられなかつただけでダメになるような誇りを持ってる人が、多くの人から期待され、憧れとなってるのよ!？」

「……瑞鶴の言う通りです。赤城さん。もし立ち直れないようでしたら、一航戦の看板、二航戦のお二人か私たちに譲ってください」

「それは……」

ええーっ!? いくらお酒が入ってると言ってもこの話はかなりとんでもない内容ではないでしょうか!？」

驚いて店内を見回して、他に誰も居ないことを確認してホッと一息つきます。流石に内容が内容ですので、他の方には聞かせられないというか……。

隼鷹さんには、お酒を回したからには責任を持って収めて貰いたいです。

「うひゃひゃひゃ! 良いねえ良いねえ、やつぱり酒の席はこうして騒いでナンボよお! グチグチとチビチビとやってちゃ詰まらないよ!」

……期待できそうにないですね。日向さんはちよつと離れたところで顔を伏せて

います。……寝てしまいましたか。毛布を掛けておきましょう。

「……瑞雲は……良いぞ……」

「ふうっ」

……寝てても瑞雲ですか。らしいと言えらしいですけど、他にも素敵な艦載機は沢山あるので、そちらにも目を向けてほしいですね。

「それは……出来ません」

ずっと黙っていた赤城さんが口を開いて言葉を発しました。凄まじい葛藤があったのでしょうか。かなり汗を掻いていて、髪が頬にくっついてしまっています。

「もう一度、互いに全力を出してスチュワートさんと演習をします。前回は彼女、魚雷を撃ってきませんでした。私だけが一方的に攻撃するのはフェアじゃありません。互いに全力で、後から「まだ全力じゃない」という逃げ道すら残させないような状況で、叩き潰します」

「「……」」

「それでですけど、スチュワートさんは、先ほど隼鷹さんが言っていたように盾を持っていてかなり頑丈な上、謎の手段で艦載機を落としてきたりと、一筋縄では大破まで追い込めません。翔鶴さん、瑞鶴さん、隼鷹さん、ひゅ……鳳翔さん。彼女を倒すために知

恵を貸してください」

赤城さんはそう言つて頭を下げてきました。防御性能が高い艦を、みんなで協力して倒す……なんかちよつとワクワクしてきますね。スチュワートさんはちよつと可哀そうですけれど……。

「分かりました。挑戦や研鑽をし続ける限り、私は赤城さんを一航戦だと認めますよ。一緒に知恵を出し合ひましょう」

「ふふつ、翔鶴さんは優しいですけど、甘くは無いですね」

「ほ、鳳翔さん！ ……ハア……瑞鶴もそれで良い？」

「そう言われたら仕方ないわね。なんかズルいような気もするけど、これで倒せなかつたら許さないから！ 空母たちの威信をかけてると思つてよね！」

「あく私は今はパスで。ちよつと飲み過ぎてね、難しい事は考えられないや。アハハ〜！」

「……う〜ん……瑞雲を出せ〜……Z z z……」

この会話をスチュワートさんに伝えたら……

「へえ、それは……楽しそうですねえ！」

乗り気でした。そして、この時の居酒屋での会話がきっかけでこの後、スチュワートさんにかに大ダメージを与えたり、撃破できるかといった一つの挑戦、「スチュワートチャレンジ」なるものが生まれ、スチュワートさん自身も防御力の向上に役に立つみたいなことを言っていたりするのは、別の話です……。



2章 〔幕間②〕

・だつてアイツは……／＼b》

《b》

進むのを止めて、暗い星空と黒い水平線を眺める。後ろの方からは何を言ってるかは分からないけど、お喋りしているのは分かるような声は聴こえる。

あんなことをして一人離れて行ったら、朝潮が心配して私に声を掛けてくるんだろうなあ……ほら。

「満潮！ ……どうしたんですか？ スチユワートさんに挨拶を——」

「イヤよ」

朝潮の言葉を遮って断る。……誰がアイツなんかと……。

この前、歓迎会が開かれると聞いてウキウキしていた私は、新しくやって来た人を見て気分が悪くなった。一目見た時から「アイツは好きなれない」……そう感じた。

食わず嫌い……とかに似てるかもしれない。まだ私はアイツと碌に喋ったこともないのに、そう決めつけた。実際、見るだけでちよつと気分が悪くなってくる。不潔だとかそういうのじゃなくて……何て言ったらいいのかが分からない。

ただ一つ、言えることは――

「だってアイツは……私を、満潮を大破させたヤツなのよ!? 仲良くだなんて正気じゃないわ!」

「満潮……」

「私の他にも夜が苦手、潜水艦は苦手っていう人は居るでしょ!? あの人たちの気持ちがよく分かったわ! ……なんというか、認めたくないのよ。自分を大破、轟沈させたヤツがさ、素知らぬ顔で接してくるなんて……」

そう言うと、朝潮は一瞬目を伏せて私の方に寄つて来た。そして――

――ペチン

私の頬を軽く叩いてきた。

「満潮」

「……何よ」

「昔は昔、今は今です。艦の時のことを忘れて、全て水に流してくださいとは言いません。ですが、あの時は人同士の戦いで、今は深海棲艦との戦いです。私たちは、海外の方とも共通の敵を持つ仲間として接しないといけません」

「……」

分かつてる。分かつてるけど、だとしたら――

「ついさつき挨拶すらしなかった私が、いきなり友好的に接しても違和感だらけで関係が破綻するに決まってる」 そう思ってますね？」

「っ！」

凶星だった。仲間なんて言われても、きつと私はキツイ態度になつてしまふだろうから上手くはいかないだろうと考えていた。

「私は、朝潮型の長女ネームシツプです。妹たちの事ならお見通しです。……佐世保鎮守府に居る艦娘の皆さんは仲間ですよね？」

頷く

「提督も仲間ですよね？」

頷く

「他の鎮守府の方も仲間ですよね？」

頷く

「ほら、アメリカの鎮守府の方だつて仲間です。友好的であることに越したことはありませんが、無理に仲良くする必要なんてどこにもないんです」

「そういうものなの？」

「ええ、満潮も海外に出向したら分かりますよ。……イタリアには、お酒が入ったまま出撃して何故か戦果を挙げるとんでもない方が居ました」

それは……確かにとんでもない。言い方は悪いけどクソ真面目な朝潮とは馬が合わなさそう……。

そういうことね。艦娘には艦と違って、ひととなり為人があるんだから昔の事だけで評価は出来ないってことね。

「……朝潮。分かったからもういいわ。……心配かけて悪かったわね」

「分かってくれましたか。それじゃあ頑張ってください」

そう言っ集まりの中に戻っていく朝潮。

「……アイツになんて言おうかな……」

私ではできるだけ友好的な会話を考え始めた。

「よーし！ 野郎どもオ！ 突撃だ！ 続けー！！」

そう言っ江風を先頭にみんなが突っ込んでいく。私は最後尾に居たから出遅れてしまっつていた。早く追いつかないといけないと思ひ、進もうとしたら、一人の人影が動いていないことに気が付いた。

「あの……」

すぐ後ろに移動するとそんな眩きが聞こえてきた。大方、何をしたら良いのか分から

ないんだと思う。初めて出撃したりする人は偶にこうなることがあるってことを聞いたことがある。

それにしても、さつきからコイツは全く動かない。敵に近付いて、味方に攻撃を当てないように敵に攻撃を当てればいいのにどうして分からないんだろう。

——イライラしてくる……

「いつまでも突っ立って……ウザイのよ!」

そう言うと、コイツは肩を跳ね上げて私の方を向いた。ああ、やってしまった……。友好的に話しかけようと思っていたのに、イライラしてたからつい怒ってしまった。

言いたい言葉はこんなのじゃなくて——

「ありがとうございます。満潮、もう大丈夫です!」

それなのにコイツはお礼なんて言ってきた、更には、前方から飛んできた砲弾を盾で弾いていた。

まさか、江風たちが突っ込んでいったのとは別の深海棲艦の群れがあったなんて! 見渡すと、うっすらと見えるシルエットから、戦艦、空母が見える。更には……

「ツ! 軽巡棲鬼……!」

こっちは駆逐艦たった二隻、相手は多くの駆逐艦まで連れてくる。

血の気が引いていくような感覚がした。今すぐにも逃げて合流しないと……。と

思っていたが、隣で何が面白いのか悦に入っているみたいニヤニヤしていたコイツが言った。

「満潮、しばらく下を向いててください。攻撃は任せましたよ」

「はあ？ いきなり何よ」

こんな鎮守府に来たばかりの新人、それも好きになれなさそうな上、こんな絶望的状况でニヤついているようなド級のバカにこの場をどうにかできるとは思えない。心細すぎる。

それよりだったら後ろに居る心強いみんなのところまで戻って……挟まれるのか。

……：……しょうがない。このバカに委ねるしかなさそう。きつと何か案があるんでしようし。

「つまらない作戦なら許さないから」

そう言うのと、息を大きく吸い始めた。そして――

「アンタラの豆鉄砲じゃワタシは倒せねえぞおおッ！」

「うるさっ！」

そう叫んで一人、敵に突っ込んで行ってしまった。コイツはド級のバカじゃない。超弩級のバカだと確信した。

舐めていた。手に持った盾の艤装と眩しく光る謎の攻撃を。そして理解した。砲雷撃戦が始まる前に放った言葉の意味を。

『攻撃は任せましたよ』

何を言っているんだと思った。アンタは攻撃をしないのかと。

「でもこれなら……仕方ない……かつっ！」

砲を撃つ。撃ち続ける。撃ち続けられる。

敵がみんな揃ってアイツの事を狙うから私は非常に楽だった。何せちよつと狙って撃てば当たるから。そして、敵から狙われないからストレスが無い。だけど随分長い事撃ち続けていたから疲れてきた……

「それでもアイツは……」

きつと多くの深海棲艦に狙われ続けてまだ無事みたい。私に狙いをつけてこないのが一番の証拠だ。

砲を構える。疲労で腕が重く、震えてきていた。これじゃあ照準が……

「満潮ちゃん、後は荒潮たちに任せて頂戴。うふふっ♪」

「満潮、お疲れ様。休んでいいよ。……みんな！ まだ夜戦は終わってないよ！ 動ける子達は私に付いておいで！」

荒潮と川内に声を掛けられる。……向こうの戦闘は無事に終わったみたい。

「助かった……」

「あらあら、こんな沈めておいて言うわねえ。ちよつと頑張り過ぎじゃないのお？」
「だってアイツはまだ、頑張ってるから……」

負けたくなかった。そう言おうとしたけど飲み込んだ。

視線の先には萩風に連れられてやって来たアイツが居た。私の方を見て笑っている。

「なによ、気持ち悪いわね……ありがとう」

友好的な言葉は言えた。聞こえていただろうか。別に聞こえていなくてもいいんだけど、取り敢えず今はこれで良いと思う。

そして次はさっきの作戦とも言えないようなモノの文句を言わないといけない。……だけど、それは今じゃなくても良いか。

昔と今は違う。朝潮の言う通りだった。かつて満潮を大破させたスチュワートは今

「回、絶望的状况の中で、敵に対して私に大ダメージを与える事すら許さなかった。

「満潮、無事で何よりです。スチュワートさんにお礼は——」

「言ったわ。なかなかやるわね、スチュワートって人」

そう言うと、朝潮は嬉しそうに微笑んだ。



ブラツク鎮守府

始まり

「君は佐世保鎮守府の提督を殺害した。間違いないね？」

「確かに提督は撃ちましたけど、アレを提督だと私は、佐世保鎮守府の皆は絶対に認めませんよ」

「……そうか。私は、君が提督を撃つまでの経緯を詳しく知りたい。話してくれないか？」

「分かりました。事の始まりはこうです——」

そんなに聞きたいなら聞かせてやるよ。

やっぱりお通夜みたいになつて……

それが人の人数からは考えられないくらい静かな食堂に入ったときの感想だった。

前を歩いていた夕雲型の4人も、食堂の雰囲気から既に提督が鎮守府に居ないと思っただのか、廊下までしていった談笑を止めた。

鬼怒は報告に行くと言って執務室に行っている。後任の提督が居るかは分からないけど、居ないなら居ないで大淀あたりが秘書艦の椅子に座っているだろう。

やっぱり提督の影響って大きいんだなあ……普段は執務室からあまり出てこなかったりするから、レアモンスターよろしく殆ど会ったりしないというだろうに……。

「あ……秋霜？ 早霜の料理食べてみたいなあ……美味しいって言ってたから」

「う、うんうん！ はやはや、うちもハラペコだからご飯作って。たかたかときよきよも食べるよね？」

陰鬱な食堂の雰囲気を少しでも和らげようと話を振ると乗ってくれた。食堂中の視線が突き刺さるけど負けてはいけない。この無言の圧力とでも言えるような食堂の中で、それなりに明るい話題を途切れさせたら病むわ。

「……分かりました。準備してきますので、しばらくお待ちください」

そう言っただけで早霜は厨房に消えていった。間宮さんの料理も美味しいけど、姉妹達から評判の料理はどんなものか気になる。

五人が座れるようなスペースを見つけて座ってお喋りをする。早霜の料理の話題か

ら俺の盾の話題、そして次の提督はどんな人なのかといった感じで話続けていた。

「……そういえば、なんでこんな霧囲気暗いのか分かりますか？ 提督が居なくなつたつていうだけでここまで暗くなるのは流石におかしいんじゃないかと……」

「いやー、うちに言われてもねえ」

「後任の司令官がとつても嫌な人だったりするかも、です？」

「ええ……。高波姉さん怖い事言わないでよー！ 清霜は戦艦にしてくれる人なら誰でも歓迎！ つて思ってたんだけど、酷い人でみんなが傷付くのは嫌だな」

あくなるほどね、新しい提督が良い人だったり有能だとは限らないってことか。それでみんな不安になつてると……そんなところかな？

「きよきよー！ やっぱいい子だねえー！」

秋霜が清霜に抱き着いた。実に目に良い光景だね。良き哉良き哉。

「あつ、ここに居た！ 私も一緒に食べて良いかな？」

「どうぞどうぞ、鬼怒さんはこちらへ……」

鬼怒がやってきたので隣に座らせる。話のタネ結構持つてそうだから楽しくなりそうだ。うだ。

「鬼怒さん、新しい司令官には会ってきましたか？ 私達どんな人か分からないから教えて欲しいかも、です」

そんな高波の質問は俺も訊こうと思つていたヤツだ。むしろこの場の誰もが知れた情報だろう。俺たち以外に誰も喋つてないから静かだったけど、その誰もが鬼怒がどんな言葉を発するのか耳を傾けているように感じた。

「ねえ、なんでこんなに静かなの？」

「きつとみんな不安なんだと思います」

「そう？ ……執務室には……大淀さんしか居なかった！」

「そうですか……新しい司令官はまだ来ないというのね……どうぞ、舞鶴仕込みの肉じゃがです……。鬼怒さんの分は今からよそいますね」

「やったー！ はやはやの肉じゃがだー！ いったただつきまーす！」

「秋霜。早霜と鬼怒さんと一緒に食べ始めたほうが良いかも、です」

そんな会話を聞いてると小、中学生みたいだなあくなんて思う。多分世間一般の感想は「守ってもらえるのは有り難いけど、小っちゃい子に戦いをさせるのは申し訳ないと思う」って感じだろうか。

目の前では清霜が早潮に「もつと頂戴！ いっぱい食べて戦艦になるんだ！」なんて言っていた。おいおいマジ؟! 駆逐艦でも戦艦になれんの？ だったら俺も大盛りにしてもらおうかな……。ん？ 何さ高波。あつ違うのね……。頑張れ清霜、応援はしな

いが祈つてるぜ。

いや、早霜の肉じゃがは美味しかった。秋霜の言う通りだったわ。なんていうか……味が染みてて美味さが2倍！ 空腹が相まって更に2倍！ 早霜の手料理補正で更に3倍の合計12倍美味しいね！

「やっぱりはやはやの料理は美味しいねえ……これが食べれるなんて幸せ者だよ」

「鬼怒さんも、スチュワートさんも……お気に、召しましたか？」

「勿論！ 間宮さんにも引けを取らないくらいだったよ」

「秋霜が絶賛する理由が分かりました」

「そうですか……それは良かった」「でしょー!? はやはやの料理は美味しいんだって!」

その後は、普段なら各自風呂なり自由時間になるのだが……俺は、俺たちは食堂で新し提督が来たという知らせをお喋りしながら待っていた。

箸の扱いが海外の方にしては上手だとか、鬼怒の姉妹についてだとか話していた。

8時を回り、夜の五月蠅いのが今日は静かだねという話題になり……

9時を回り、新しい提督はどんな人か予想しようかと話題になり……

10時を回り、話題が無くなってきて、秋霜がトランプ持ってきたり……

11時に差し掛かった頃に長門が来て「いつまでもただ待っている訳にもいかない。

各自明日に備えて休め」と言ってきたけど誰も食堂から出て行かなかつたり……
そして11時を回った頃――

勢い良く食堂の扉が開け放たれた。

「新しい提督が来たよー!」

そう言いに来たのは島風だった。その一言で静かだった食堂内に音が戻る。

流石に嘘や冗談ではないだろう。この状況下でそんなことをしたら物凄^{ひんしゆく}い響^{ひび}をかうことは間違いない。最悪の場合は折檻モノだろう。

「Hey. 島風! よくやりましたー! 全員で新しい提督をお出迎えデース!」

そう言つて騒ぎ出す金剛。やつぱり提督ガチ勢つて凄^{すご}いなだなあ……さっきまで物言わぬマネキンみただったのにパツと華が咲いたように……

食堂内に島風が戻つて来た。大淀に食堂に連れてくるように金剛からの伝言を伝えて来たそうだ。どんな人だったか訊かれている。

「タクシーが見えたよ。鎮守府に出向と遠征以外は全員居るし、時間的に提督しかありえないよ」

と言つていた。そんな証拠があるならほぼ確定だろう。

食堂の扉が開き、険しい顔をした大淀が入ってくる。

……なんて顔してんのさ？ 仕事のし過ぎで体調不良にでもなったか？
多くの人も訝しんでいるみたいだ。

提督が入ってきた。

背は高くガツチリしてる男で、髪は短めでそれなりに若い。おそらく40前後だろう。

新しい提督は鋭い目つきで食堂内を見回す。

「俺がここの新しい提督の黒川だ。……それじゃあこれからお前たちには遠征に出てもらう」

その言葉で俺は直感的に察した。

これは、『艦これ』二次創作で見かける典型的なブラック鎮守府の提督だと。そりゃあ大淀の顔も険しくなるわ。

食堂の大勢が初めは何を言っているか分からないといったようにポカンとしていた。そして数舜の間を開けて食堂がまたざわつき始めた。

「ま、待ちやがれ！ 今から遠征!? 哨戒じゃないのか!？」

「俺は遠征と言ったんだ。聞こえなかったのか？」

摩耶様が突つかかったが言い間違いではなかったらしい。そして隣に居る大淀に声を掛けた。

「は、はい何でしょうか……」

「一番事務仕事出来る奴はどこだ？」

「わ、私です……」

「じゃあすぐに班を編成して出撃させろ。……早くしろ！」

「……了解しました……」

そう言つて縮こまる大淀。

摩耶様も突つかかつてたし、周りの反応を見てもおかしい仕事なのになんで拒否しないのか。後で聞いてみるか。

なんて考えてたら軽巡と駆逐艦、潜水艦は集まるように言われたから俺も呼ばれた方へ行く。横目で提督を見ると、戦艦や空母が多く座っている所を睨んでいた。……あれは提督と呼ばびたくないなあ自称提督でいいか。

大淀の割り振りで決まった俺の班は、長良、初月、望月、黒潮、旗風だった。

互いに挨拶を交わして準備に入る。

確か提督が言うには遠征って場所によっては日を跨いで行うものだから食料品とか

の管理もしないといけないんだっけ？

初月に付いていくと、缶詰が沢山置かれている部屋に入った。

「遠征用食糧庫？　へ〜……」

「スチュワートか。間宮さんの食事に慣れていると辛い目に遭うかもしれないね。それにしたって……新しい提督は随分と嫌な感じがするな。あ、そっちの方に牛の缶詰があるはずだから取ってくれないか？」

「何個で？」

「……8個くらいで大丈夫だろう。ありがとう」

そうして食材と寝袋や簡易テント、調理器具、燃料などを入れておく容器を持つて準備が終わった。

「あとは艤装を着けて出撃か……」

持ち物を見る限りだとキャンプでもするつもりなのかね？　随分楽しそうじゃん。でも業務だつて言うくらいだし、そんな優しいものじゃないと思うんだけど……想像出来ねえ……。

提督が鎮守府を去り、新しい提督の風上にも置けないようなヤツが鎮守府に来た日は、夜遅くに突然遠征に駆り出されるといふ、異例の事態で終了した。

この日を境に地獄のような日々が始まることになる。

初めての遠征

海、海、海。見渡す限り海……当たり前なだけどもね。

それにしても遠征の基本が全くとっていいほど面白味に欠ける。

サーチ&デストロイ
見敵必殺ではな

く見敵遁走が基本とか刺激が少なくてやる気が削れていくに決まってるんだよなあ

……。

そんな遠征の目的は長距離移動からの深海棲艦の有無、数の把握といった情報収集が主で、資材収集はオマケみたいなものだ。提督が言っていた。それから考えると、出来るだけ移動距離は稼がないといけないだろうから、逃げ切れるならそれに越したことはない。ってことは分かっているつもりなんだけど、つまらないものはつまらない。

だからと言って深海棲艦とドンパチするのも躊躇われる。全力で逃げなきゃババのような強敵と出くわすのもちよつと……。でもちよつとスピード上げたら撒けるような駆逐級ばかりだと面白くないのも事実……。これが勝手に行動しちゃうダメな集団行動のデメリットの一つだよなあ……。

溜息と、拍子に一緒に欠伸を手で隠す。

「それにしても、長門さんの言う通りに少しでも休んでいけば良かったです……」

「せやなあ。旗風ちゃんは大分辛そうやし、そろそろ休まへん？ ウチも限界近いわあ」

「そうしたいけど、近くに休めそうな場所は無いの……もうちよつと頑張つて！」

「うへえ、マジい……？」

確かにこれは辛い。何よりも普段なら夜間の哨戒とか夜戦川内パニツクイベント以外なら間違いなく寝てるような時間にも移動させられてるってことだ。

寝てから翌朝出発します〜とかしようものなら何されるか分からないような雰囲気があつたから、俺たちを含めてほぼ全駆逐艦たちが出撃しているだろう。

望月が比較的近場に島があるところに向かった人たちが羨ましいなんて言っていたように、俺たちは東シナ海のご真ん中を目指している。島があればハツ泥ピーのなよ気う持ちににな眠れることは間違いない。

「つてゆーか、あんな人でも司令官に成れるんやねえ……」

いや、ホントそれ。

「アレは適性検査があるなら本当に通つたのか疑問に思うレベルですよ」

「性格以外は優秀なタイプかもしれないね」

「前の司令官のが良かったあ。いきなりコレ遠征とかマジありえねえー」

「……他の班は大丈夫でしょうか……」

「いや、まずはウチらの心配せなアカンで？ 他人の心配はその後や」

「そうね。……ちよつと目的地へのルートから外れるけど、島があるみたいだから休みましょ。もうひと踏ん張りよ！」

そう言った長良に続いてVの字ターン。ぶつちやけ俺もクソ眠いからありがたい。

「おつ。お前たちもここに来たのか」

ルートを外れて向かった島に俺たちが上陸したとき、声を掛けてきたのは天龍だった。

焚火の僅かな灯りに照らされた後ろには、暁型の四人と浦風が居た。みんな寝ているようだ。

「はい。やっぱり各自疲れが溜まっているみたいで……勿論私も相当キツイですな……」

「だよなあ……あの野郎、なんで明日からじゃなくて今すぐになんて言ったんだか。佐世保は資材も潤沢だし、変な拾い物する以外には特に問題は無かった筈なんだけだなあ」

おい、俺の方を見ながら変な拾い物って言うな。事実だろうけどちよつと傷付くぞ。

「それと、悪いがしばらく見張りは頼むぜ。俺は寝るから4時間半後、マルロクマルマルに起こしてくれ」

そうなると……俺たちは天龍の班よりも睡眠時間が確保できないってことになるな？ ……天龍め、なかなかやるな。

まあ徹夜するよりはよっぽどいい。

え？ 俺は4番目の見張り？ 初月の後で望月の前？

………。

いやいやいや、待て待て。それってつまりアレか？ 寝てるところを初月に起こされて、見張りが終わったら寝てる望月を起こすってことだよな!?

人によっては完全にござ褒美じゃねーか！

いや、でも……艦娘同士だったら特に意味は無いよな。うん。

なんて考えていたら寝袋を渡された。ゴツゴツした岩や砂利の上、濡れてる草の上で雑魚寝するよりは大分マシだけどなんか虚しい……。

でも俺は初月から起こされることを楽しみに待ってよう。そして脳内に永久保存するんだ！ 風 裸のお付き合ひ 童貞 呂は俺には辛かったけど、起こされるくらいなら全然問題は無いッ！

……早く時間経たねえかな……

「おい、おい、起きろ！」

ん？ 誰かに起こされてる……？

……あ。

「フアツ!!」

起こされるってことは寝過ぎした!? ヤバいやバい、と思ったら目の前には驚いた初月の顔がある。まあ起こしてるヤツがいきなり飛び起きたら誰だって驚くわな。

「お、おはようございます。驚かせてしまいました。ごめんなさい」

「いや、大丈夫だ。それじゃあ、何かあったら起こしてくれ。それと、初めてだろうから言っておくけど、正面ばかり見えていてもダメだ。後方にも注意しておくといい」

「分かりました。警戒お疲れ様です」

モソモソと寝袋に入り、直ぐに寝息を立て始める初月。……切り替えが速過ぎる。休むときにすっかり休めるのは優れた兵士だっどつかで聴いたことあるんだけど……まさかのび〇くんは最強の兵士だった？

あ。寝てるところを起こしてくれる美少女を脳裏に焼き付けるの忘れたわ。

「歩き〜♪ 進〜む〜♪ 果て〜無き旅路〜♪」

「ええ歌じやお。そりや置いといて、うちらも見張りせにやあ公平じゃないと思うけえの」

よいしょつと。と腰かける浦風。……すまねえ、何弁だか知らんがサツパリなんだ。大阪のほう？ 何を言ってるかは大体解るんだよ？ 天龍の班はみんな寝てたのに俺たちの班に見張りさせるのはフェアじゃないってことでしょ？

「いや、距離的に考えてここに着いた時間はそこまで大きく違わないでしょ？ だつたら1人で見張りしてた方が全体から考えた時の消耗は少ないんじゃないかなあと。1人でも足りてたんだし、浦風は寝ててもええよ？」

「いや、そりやうちが納得できん」

……うくん困つたなあ。1人で足りてるんだから2人も必要ないと思うんだけどなあ……あつそうだ。

「じゃあ次は望月だつたんだけど、起こさないでおくかから後は浦風に任せるよ？」

「それでええ。任しとき。……望月の次は誰じゃ？」

「旗風だつたんだけど、その前に夜が明けれると思う」

空が段々明るくなってきたから恐らく、そろそろ夜が明けれると思う。

「そうじゃねえ……じゃあ後はうちがやつとくけえ、寝とつてええよ」

「ありがとうございませす」

「お互い様じゃ」

あく優しい……。凄く話し易かった。浦風と話してたらコミュ障が治るかもれない。思わずタメ語で話しちゃったけど大丈夫みたいだったし、もしかして他の人もタメ語でも気にしてなかったり？ もしそうならどんどんタメ語で話していきたい。戦艦とかの見た目が女性ならほぼ無意識的にちよつと丁寧な言葉遣いになるんだろうけど、そんな言葉遣いは俺に合っていないんだよなあ、疲れるし。

そう考えながら初月と同じようにゆっくり寝袋に入って目を閉じる。

寝袋とかテント特有のビニール？ みたいな独特の臭いを感じながら意識は落ちていった。

目が覚めた。まあ2時間くらいなら昼夜逆転してるけどほとんど昼寝みたいなもんだよね。

東の水平線には太陽が見える。完全に出勤してるから6時は過ぎてるだろう。

「おはようございます、スチュワートさん」

「あ、おはようございます」

先に起きてた長良に挨拶されるから返す。周りの人達は……起きてるけど静かにし

てる人が半分とまだ寝てる人が半分か。……寝坊して待たせてたとかじゃなくて良かった……。

あゝ……いつだったか、日本目指してサバイバルしてた時を思い出すなあ。あの時は日の出とともに起きてアランさんから貰った釣り竿で食料を確保したり、港によって泥棒したり……泣けてきちゃう。秋霜の口癖移ったかな……。

そうこうしてる内にみんなが起きたようで天龍の班も揃って朝食になった。

「はい、今日の朝の分だよ。大分質素だけど我慢してね」

朝ご飯はしっかり食べようって小学生の保健体育の教科書にも書いてあるだろ！

何でこんなパンの缶詰＋αなんだよ！俺はまだ我慢できるけど、普通なら不満爆発だろ！

それでも、渡された缶詰を大勢みんなで食べるのは美味しかった。

遠征二日目

——ガンガンッ!

盾に弾かれた砲弾が大きな音を響かせる。俺の前には重巡ネ級? と駆逐級が複数体。チラリと後ろを見ると後方に居た駆逐級を撃破したのか離れて行く他の5人が見えた。そろそろ流れ弾も気にせず回避しても問題ないだろ。

「ここらが潮時かな……」

でも、^{しんがり}殿を務めた俺は逃げる前にしなくちゃいけないことが残されてる。俺たちが見つけた原因、深海棲艦が放った偵察機をぶっ壊すことだ。それから逃げても大丈夫だろう。

「これは高角砲の順番かなあ……」

俺は投擲物と高角砲の使い分けを決めていた。最近投擲物が便利過ぎて腰の臙装をほとんど使っていない気がしたから、自分の持つリソースを無駄なく発揮するにはどうしたらいいのか考えた結果、相手や状況によって使い分けるという結論に至った。

赤城を始めとする空母や軽空母などの艦載機を沢山飛ばしてくる相手には高角砲は勿論のこと、スタングレネードや音響手榴弾といった範囲攻撃は一網打尽って言葉が似

合うくらい有効打になるから投擲物を積極的に使っていく。

だけど今の相手の艦載機は数が少ない。そんな時には確実に落とすためにも腰の艀装の高角砲を使っていくつもりだ。

命中力を犠牲に範囲攻撃力に優れた投擲物と、威力は控えめだけど艦載機に対しての命中率の良い高角砲。うゝん、手札の整理で選択肢が広がるって気持ちいいな。

「狙って狙って……そおい！ ……あつ」

……。

——バンツバンツ！

当たってたら落ちていくんだろうけど、フラフラすらしてないからまた外れたんだろ。ああ、こんな時に防空駆逐艦である初月が居れば……。まあ、まだ数回外したただけだし。最悪スタングレネード投げればいいだけだし……。

——バンツバンツバンツ！

「ええいこうなつたら……。おつ、当たった」

偵察機の撃墜を確認！ なんてこう諦めかけた時に限って成功するんだ……。

まあ、役目は果たしたしさっさと逃げますかね。

「お疲れ様です」

「噂には聞いていたけど本当に防御に優れてるね」

「その代わりに攻撃力はほとんどありませんけど……今みたいな殿には恐らく私は最適ですよ」

「ホンマやで、ネ級出て来て挟まれた時はどーなるかと思つたわ。でもその盾えらい頑丈やんか。ウチらが離れるまではずっと逃げないで受け流しきつてたしなあ」

「スチュワートさんは、私達神風型駆逐艦よりも旧いの……凄いです」
「?」

旧い……? 新人だけど……。

「軍艦だつたころの話だよ。それにしたつて神風型より旧いつてマジい?」

ああ、艦ふねの話ね。休日に調べてないから全然分かんないんだよね。ただ、神風型よりは旧くて、それは旗風と望月の反応から見ても相当旧い方だつてことが分かつた。マジで「駆逐艦スチュワート」について何も知らなさ過ぎだろ俺。

「うーん……その辺はあんまり気にしたこと無いんですよえ」

取り敢えずやんわりと適当吐いてこの場を誤魔化そう。そうなの? つて感じで一応納得はしてくれたみたいだから情報収集を休日に……出来ないか。出会い頭に遠征

に行かせるようなヤツだし、多分休日なんて来ないだろう……困ったなあ……。

「ああそうだ。旗風？」

「はい、何でしょうか？」

「強くなりたいの？」

「護ることも強さなら……はい……」

うわ。めつちやカツコいい事言ってる……。見た目美少女からこんな言葉が聞けるなんてリアルならまず無理なんじゃねえかな……。だったら俺もカツコつけてみますかね。

「旗風。現状維持とは緩やかな衰退を意味します。一步戻ることも後ろに進んだって成長の証です。ちよつとだけ後退して、ちよつと違う道を進む。するとこうなったりもします」

そう言つて盾を持ち上げて揺らす。旗風の目が盾に吸い寄せられて上下に揺れる。

「まあ、他人の受け売りの上にこういつた機会が無いと忘れてしまう、ぼんやりとした言葉ですけど」

「……」

「何が言いたいかつていうと、強さを求める過程でちよつとの間弱くなったとしても、それよりも強くなれば問題は無いってことです。弱くなることを恐れて何もしないのが

一番ダメってことで」

「でも、弱くなつたまま強くなれなかつたらどうすれば……いえ、何でもありません」

何でもないとって言うヤツはだいたい何かあるんだよね。でも弱いままならどうしようなんて心配事はあるよね。

「そんな時は元に戻せば良いんです。一番簡単で手っ取り早い解決法ですよ」

因みに俺は、防御を固め過ぎた弊害として、攻撃面が疎かになり決定打に欠けるっていう明確な弱点が存在する。使い切りの切り札で解決はしてるけど、長期戦になつて切り札を使い切ったら攻撃力がカスみたいになる。

だけど、他の艦や攻撃力の高い艦を守り、戦鬪を安定して継続させることで総合火力は伸びるんじゃないかって発想が無いこともなかった。結果として、防御とサポートには優れるだろうけど、火力は無いなんていうおかしな艦娘俺が生まれた。

つまり、俺みたいに予めデメリットを決めておいて、それを許容諦しつつ普通より大きなメリットを得るか、一度真つ白な状態にして、欲しいもの能力がある都度、少しずつ取捨選択をしていけば良い。判断が正確か否かで器用貧乏にもオールラウンダーにもなれる。

「艦娘はかつて軍艦ふねだったからと言って、剣や盾を持つちゃいけないなんて誰が決めましたか？ 天龍さんだつて木曾さんだつて剣持ってますよね？ なりたい自分を目指

す。満足できればそれで良いんじゃないですか？」

「なりたい自分……。ありがとうございます」

そう言つて頭を下げて離れて行く旗風。……ちよつと説教っぽくなつたか？

でも俺は言いたいことは言つた。後悔はしていない。中二病だなんて言われそうだなあなんて呑気なことを考えてる俺の視線の先には、どこかの空でみんなに付いていく旗風が居た。

「もう少しで目的地よ！ 頑張つて！」

「長良、それは本当か？ 随分と早いな」

「勿論！ 日頃の走り込みのお蔭でペース配分には慣れたのよ」

「……そうか、頼もしいな」

これがガチランナーの本氣つてヤツですか……。初月も納得してないで何かツツコンですよ。長良はチーム全体の移動速度上昇のパッシブスキルを持つてる、と心のメモ帳に書き込む。覚えておいて損は無いだらう。得になるかは怪しいところだけど……。

そして辿り着いた目的地。海の下真ん中……。かは分かんないけど、島も何もないところまで止まって周囲を確認する。そして来た道を引き返すことになつた。

遠征の折り返し地点という訳か。家……ないし鎮守府に帰るまでが遠征ってか？

「帰還まで何事も無ければ良いんだけどねえ」

「おつ、望月い、帰還までつて祈願か？」

「……」

うゝん黒潮、これは……有罪判定かな。

前方後方共に異常ナシ！

夕方に辿り着いた島は小さい島だった。簡単に全方位を見渡せるのは有り難い。皆が寝てるところに戻って焚火に可燃剤を入れる。ちよつと油臭くて、薪みたいにパチパチ爆ぜる音が無いからちよつと寂しいけど、弱まった火が復活したから良しとしよう。灯りの確保はしておきたいし。……なんでランタンじゃないんだ？

「……あくそつかあ。光源じゃなくて熱源としても使うからか」

医療機関なんて無い海の上、小さい島の上。熱を通さないと食べ物なんて怖くて口に運べないだろうし、これで良いのかもしれない。妖精さん謹製の廃材で作られた可燃剤の方がカセットコンロよりも嵩張らないし。

「……」

「暇だ……」

手元には拭き続けて綺麗になった盾がある。布で金属は削れる訳がないのに、心なしか減ったように感じる。

それくらい俺はずっと盾を拭いていた。

ずつと盾って呼ばれるのもアレだし、暇つぶしとして盾に名前でも付けてみようかな……。初月のアレにも長10cm砲ちやんなんて名前ついたりするんだし。

「う〜ん……無二の盾、ハードシェル、家守……地味だから可愛い感じの名前には間違ってもならないんだよなあ……。生きてるみたいに自立行動し始めたらシールドビツ〇なんて言われるんだろうし……」

溜息を吐く。友人からも「ネームセンス無えな！」って言われるくらいだし、大人しく他の人になんていう名前が良いか訊こう。俺よりもよっぽど良い名前を付けてくれるだろう。

「さて今の時間は……ウヘエ……」

あと1時間もあるのかよ……冗談じゃない。

三日後の鎮守府

昨日は黒潮にバトンタッチして寝袋へダイブしたことしか覚えてない。

朝に起きてみんなと一緒に質素な飯を食べて長良から今日の予定を聴く。どうやら時間、体力的に余裕が出来たみたいだから資材を集めに行くらしい。望月が生返事をして怒られたことが印象に残った。

絶対に怒られるって分かってても態度を変えないとか凄いなあ。絶対に注意やお叱りで済むと分かり切っているからこそその判断という訳か……。

手の込んだ手抜き……じゃないな。サボる為に全力を尽くす……みたいな感じだな。ウン。

そんなことより大事な事があつただろう！

「資材を集めについて……何をするんですか？」

「あゝ。スチュワートさんは初めてだから分からないのよね」

知ってるはずが無い。っていか知ってたら凄くない？ いやホント。

それに資材って言ったって、重油か石炭か知らないけど、化石燃料がそこら辺にホイホイ落ちてるとは考えられない。弾薬と……鋼材だっけ？ 金属製品もそこらに生え

てるはずが無いし……事前に掘削機とかが建てられてたりでもすんのか？

「資材はね……拾うのよ！」

「……え？」

聞き間違いかな？ 拾うって聞こえたんだけど。

もしかして海底から？ きつと深海棲艦の残骸とか死骸とかのことでしょきつと。海にダイビングでもすんの？ 深海の水圧に耐え切れずにパーンしたりすんのは御免被りたいなあなんて……。

「なに変な顔してるの！ 普通に落ちてるのを拾うのよ」

「……」

普通に落ちてるの!? なんでゲームみたいに鋼材とか化石燃料の類が落ちてんの？

あ、ここ『艦これ』っていうゲームの世界だったわ。

……じゃあ落ちててもおかしくはないな！

ってなるか。アホか。

あくダメだ。なんでなんでと考え始めたらキリがない。俺の知ってる常識が崩れるのが先か、俺の正気が削れるのが先か。……まあいいや。この世界だと化石燃料は大して貴重でも何でもないってことね……ふくん。

「なるほど……わかりました」

「そう？ それじゃあ今から目星をつけた島に行くわよ」

「いや、長良？ コレは思考を放棄しとるで？ 絶対に何も分かつたらん」

「そうなの!!」なんて長良が訊いてくるけど「そんなことありませんよ」と受け流す。常識が違うって怖いな。

「うわあ……」

「やっぱ初めてだとそう思うよね？ ウチもコレはちよつとどうかと思う」

まさか本当に資材が落ちているとは思わなかった。

でもそうだね。普通に考えて石炭とか弾丸、砲弾が綺麗なまま落ちてるはず無いもんね。

だからと言って、真つ黒な瘵にツヤツヤしているタールっぽい何かが目に入ると突っ込まざるを得ない。あれが資材だなんて言われてもとても信じられない。

そう考えながら俺達は砂浜の一角に広がっていた汚泥に手足を突っ込む。

「うっ……吐きそう」

「ウチもや……」

とんでもない悪臭と生理的嫌悪感を催す音、ヌルヌルする触感。それらを五感で感じると吐き気を催すことになるのは必然だった。

鋼材と弾薬はかなり重く重労働だが、肉体よりも精神にクる燃料を集めるのよりは人気があるらしく、みんなが必死で押し付け合っているらしい。

最終的にジャンケンをして黒潮が負けたので俺もこんなことをしている。ここまで酷いとは思わず、何か押揃からかってやろうと思ったけど、ガチな雰囲気で落ち込んで謝って来たから何も言えなかった。

「でも他の班でも誰かはやることやし……」

「負ける訳には……ッ！」

そう言つて、秒単位でも早く終わらせる為に嘔吐えずしながら手を動かす。

——汚泥に塗れた奇妙な友情が、ここに誕生した。

時間はすつかり夕方。出発の時とは違って消耗品の代わりに資材でパンパンになった鞆を背負つて鎮守府の近くまで到着した。

「なあ……長良？」

「おかしいわね」

「ああ、何かおかしいな」

「そうですね……」

「なんか変だよねえ」

「そうなの？ 遠くに鎮守府っぽい影は見えるけど……そんなに分かりやすい異常があるようには見えない。」

「なんで艦載機が1機も飛んでないんでしょうか……」

「あつ」

なるほど言われてみればそうだ。鎮守府が一応目で見える距離だつて言うのに艦載機が全く飛んでない。

鎮守府近海は毎日、空母や軽空母が最低2人以上は防衛の為に艦載機を飛ばしている筈だ。それが今は全く存在しない……一体何があつたんだ？

「みんな止まって！」

「な、長良さん！ 助けてえ！」

突然の長良の静止の直後、前方の海面が弾けた。

そこには肩から上を海の上に出して叫んでいるイムヤがいて、只ならない雰囲気助けを求めている。

「イムヤさん!? どうしたの!?!」

「いや、戻ってきてくれただけで助かったんだけど……。とにかく！ あの子たちはも

う限界よ！ 少しでも良いの……お願いっ！」

一気に捲し立てるイムヤを気圧されるみんな。一体何があったと言うのか。

「取り敢えず落ち着いて……戻ってから話を聴くわ。皆、急ぐわよ」

「分かった了解！」

これまでも長良のペースは速かったけど、イムヤの様子から緊急事態だと判断したのか更にペースを上げて鎮守府へ戻っていく。

俺の中ではサボリ魔の印象が定着した望月は文句を言うんじゃないかと思っていたけど黙って付いてきていた。

いつもは飛んでる見張りの艦載機がない鎮守府周辺、軽度のパニック状態のイムヤ、限界だというあの子達。

なんて言うか……第一印象からして『艦これ』の二次創作に出てくる典型的なブラッ
ク鎮守府の提督って感じはしてたから、予想通り……今更想定内よって感じがする。

最悪の場合は戦艦や空母が提督から無理やりあんなことやこんなことで年齢R制限指が
付くことになってるってことだけど……無いよね？

「酷い……」

旗風の吹きは、俺たち全員の共通認識だろう。何時もは居る軽空母や空母は海の近く
のどこにも居なかった。代わりにそこに居たのは……

「長良さんっ！ 皆さんも！ みんな！ 助かったよ！」

「助かった？ うう……」

俺たちを見つけるなり嬉しそうに声を上げる択捉と、安堵からか泣き始めた海防艦の
面々。

「えつと……イムヤ、説明してくれる？」

「勿論よ。嫌と言う程聞かせてあげる」

イムヤの口から出て来たのは流石に想定、予想の範疇を越えていたものだった。

普段行っている哨戒は、海防艦と潜水艦だけで行われているということ。

書類仕事は大淀がほぼ全てやらされている為、限界が近いこと。

ここまでなら海防艦とイムヤしか居ない現状と、これくらいはやるだろうという予想
の範疇だった。俺以外の面子は既に言葉を失っているようで、戦艦とか重巡はどこにい
るのかという質問すら出てこないようだった。

「戦艦、重巡、空母と軽空母は全員、提督命令で出撃したわ。だから遠征に行つたあなたたちが戻ってくるまで本当に私達だけだったのよ」

「待つて下さい！ それじゃあ、他の任務は？」

「手が回る訳無いじゃない！ だから助かつた、なのよ。……悪いとは思つてるんだけどさ、今から警備か哨戒、もしくは他の任務やつてくれない？」

「……大丈夫、これから他の班も戻ってくるわ。だからまずは私だけでも報告しに行かないと——」

「ダメよ！」

うおっ、ビックリした。

「お願いだから報告には行かないで……。絶対にまたすぐに遠征に行かされるわ！ だからお願い！ 報告に行かないで今だけ！ 任務や哨戒じゃなくてここで見張りするだけで良いの！ 人手不足でみんなほとんど寝られてないの！ ……お願いよ……」

「……」

「長良さん……」

「僕たちが代わろう。海防艦の皆は休んで」

旗風と初月が海防艦に声を掛けた。みんなが嬉しそうに、集まってはしゃいでいる。

これで目の下に隈が無く、出てくる言葉が「やっと休めるね!」とかじやなかったら微笑ましいんだけどなあ……。

それにしても、たった3日でここまでとんでもないことになるのか。

想像を超えて極限状態になっている海防艦を見て、やるせない気分になった。

距離と時間 速度は？

黒潮と長良、意外なことに望月も哨戒に行つたので、今残っているのはスヤスヤと眠る海防艦たちに付いている旗風と、他の艦娘達はどこに行つて何をしているか話している俺と初月とイムヤだけだ。

「それで、戦艦、空母、軽空母、重巡が出撃したつて言つてたけど……本当か？」

「本当みたいよ。「安全な海を取り戻すの為に一刻も早く、少しでも多く深海棲艦の数を減らす必要がある」とか言つて無理やり出撃させたの。信じられないよね!」

「提督の言いたいことは分かるし、理屈も間違つてる訳じゃない……でもいくら何でも急すぎるし、前提督はゆっくり確実に深海棲艦の居ない海を広げていくつもりだったからやり方が違い過ぎる。大本営としては鎮守府ごとの方針は各提督に一任しているか？」

「さあ？ そんなこと私が知る訳ないでしょ。……それよりも！ あなた、スチュワートだけ？ みんなが出撃して目標にしている所に向かつてくれない？ あの提督、空母や戦艦ばつかりの編成で出撃させたから駆逐艦も潜水艦も居ないのよ！」

「それは……本気なのか？ 敵潜水艦が居たらどうするつもりだ？」

「えつと……大丈夫、じゃあなさそう？」

「そう！ 大丈夫じゃないのよ！ でも私はここを離れられないし……」

初月が俺を見る。そして頷いた。

「スチュワート、僕はここで防衛をする。だから君がみんなの支援に行ってくれないか？」

……1人では？ ちよつと無茶振りが過ぎるんじゃない？

でも……仕事を任せられるなんてなんか信頼されてるみたいで嬉しくなっちゃうね。ちよつとニヤニヤしてきたかもしれない。

「分かりました。艦隊の支援ならお任せあれ〜」

ふざけてワンクッション置いてから立ち上がる。

「皆さんはどこを目標に出撃しに行つたんですか？」

「ソロモン海域よ……」

「何!? ソロモン海域だと？ どれだけ長期間掛かると思つて……。大型作戦並じゃないか！」

初月が声を上げる。

ソロモン海域？ つて夕立とか綾波とかが頑張つたヤツだっけ？ 綾波の活躍はに

わか俺でも涙が出ちゃうんだよね……。

でも単語は知ってるって感じだけど場所がどこなのかは分かんない。ソロモンってヨーロッパっぽいけど実はイスラエルとか西、南アジアの方なんだっけ？

それに大型作戦並って……絶対に即決で「よし、やろう！」みたいなノリでやつちやいけないヤツでしょ。それに、ゲームの脳筋チンパンジープレイしか出来ないようなヤツの計画で攻略出来るのは俺は思えない。

艦娘たちは俺以上に無理だつて分かってる筈だろうに……多分功を焦って職権乱用して反対意見を封殺したんだろうなあ。

「大淀さんも他の皆も反対したの！ でも、止められなくて……」

「分かっている。……こうしている暇は無いぞ。やつぱり僕も行く。準備を始めよう」

あ、結局初月も来るんだ？ ってどこ行くねーん！

「一緒に遠征用食糧庫まで来てくれ。2人分だとしてもそれなりの量になる。……速くしろっ！」

「イ、イエス、Y e s、マム！m a m！」

「……僕はあの提督に心底失望したよ」

「だろうね」

遠征用食糧庫……3日前に俺たちが食べる缶詰が置いてあつた部屋だ。あの時は缶詰が大量に置いてあつてしつかり整理されていたけど、俺たち以外にも遠征の班で消費する上に、初月曰く当然、大型作戦にも食べ物が必要な訳で……

つまり何が言いたいかというと、缶詰はほとんど残っていないかつた。沢山はあるのだが、何せ一般家庭と違って人数が多い。これでは他の遠征班が戻つたとしても再び出撃するのは無理だろう。飲まず食わずになる人が出てきてしまう。

「3日もあつたらそれなりの準備が出来てると思うんだけどな」

「それすらもやらない馬鹿者だつたつてことか……ハア」
「でも大淀さんが見過ごすとは思えないですね」

「確かに。……まさかとは思うが——」

「止められた？」

もしそうなら正真正銘のクズだ。そもそも見た目女子供の艦娘、それも海防艦をあんな目に遭わせて、更に事務は大淀に放り投げてる時点で情状酌量の余地無しって感じだけれども……

「……いや、それどころじゃないな」

「まずは戦艦たちの支援に向かわないと」

「ああ。不幸中の幸いだが、戦艦が多数でしかも集団行動していたとなると当然、駆逐艦

よりも速度は出ない。最低限の荷物だけ持つて全力で追いかけるっていう手もある。……これで行こう！」

戦艦たちを全力で追い駆けるってこと？ 3日近くのハンデは流石にキツイと思うんだけど。でも、みんなが通ったルートなら深海棲艦も蹴散らされてるだろうし、索敵も捨てて速度極振りで良いのか。だったらワンチャンありそうかな？

そうなると準備は手慣れたる初月に任せよう。

「じゃあ私は工廠に行ってくる。便利なモノあれば貰ってくるよ」

……決してこんな状況なのに挑戦的な笑みを浮かべる初月が怖くて逃げた訳じゃない。

「そうしてくれると有難い。ああそうだ。長10cm砲、一緒に行っておいで」

「おっくい？ もしもくし？」

返ってくる返事はない。妖精さんはいつもより大分数か少ないけど何人か残って忙しそうにしている。

「明石も夕張も出て行っちゃったのかな？ 非戦闘要員みたいなこと言ってたような気

がするけど……」

明石はアイツ^{提督}の脳ミソをクリーニング出来なかったのか……。綺麗なジャイオンみたいに妙に気味悪くなつたらなつたで害になるから、最初から救いなんて無かつたのかもしれない。

これは誰かが提督を海の藻屑に変えるまでは一切状況が好転しないまでであり得るな……。

あ、手の空いてる妖精さん見つけ。

「妖精さん、探照灯ください。あところの子を出来るだけ早く。お願いします」

すると妖精さん達を掻き分けて現れたやけに偉そうな妖精さん。

その妖精さんが持つていた探照灯を受け取って、俺が受け取つたと同時に長10cm砲ちゃんを引つたくるように奪い取って工廠の奥に消えていった。

……アイツもしかしてあの妖精さんの分身だったりしないよね？

アレだ。ゲームとかの主人公に付いてくるお便利キャラ感が半端じゃない。

しばらく待っていると、初月が工廠に入つて来た。

「こつちの準備は終わった。……僕の長10cm砲は？」

「妖精さんに攫われましたよ。……それで、どんな計画ですか？」

「まず僕は、高角砲と機銃を置いていく。君も高角砲を搭載しているようだが、必要ない

だろう」

「どうしてですか？」

「空母や軽空母、重巡が出張ってるんだ、僕らの高角砲は大した価値が無い。求められるのは一早く追いつく事、そして魚雷だ」

「対空は必要ないから魚雷を持っていくってことですか？」

「そうだな……あ、妖精さん。改良型艦本式タービンと強化型艦本式缶。の組み合わせを2つ貰えるか？ うん、そうだ」

初月が妖精さんに何か言ってる……まるで魔法の詠唱みたいだ。

それにしたってタービン……聞いたことはあるんだけどなんだったか。

原動機やんけ！

「え？ 攻撃手段は主に魚雷だけで、タービンで速度にブーストを掛けることで早く到着するってこと!？」

「そうだ。艦装の機能をほぼ全て速度に充てる。幸い手が空くから長10cm砲は連れていける。君も取捨選択を……って必要は無さそうだな」

まあね。盾と投擲物で両手は埋まっちゃってるんだよね。初月の周りに妖精さんが集まってきて高角砲を除いてタービンとかを取り付けている。途中で初月も干渉がどうとか言ってたけど、ああいうのは慣れと経験からくるんだろうなあ……。

俺の場合は高角砲を取ってそこに着けるだけで済んだから関係ないんだけど。

準備が終わって海の上。俺と初月は最後の確認をしていた。

「早く到着しなければならぬから、基本的に移動しつばなしだ。かなりの忍耐力が求められる上に体力勝負だ。……行けるか？」

「勿論さ」

艦娘は知らないだろうけどなあ！ 多くの人間には部活動なる先生に理不尽に怒られながら只管ひたすら走らせられるような文化があるんだぜ？

それに、多少の我慢なんて危機に瀕してたらアドレナリンの力でどうとでもなるに決まってるんだよなあ……。

「頼もしいじゃないか。……よし、行こうか」

「ヘッ……戦艦たちに追いつくまで、精々楽しいデートにしようじゃないか」

「お前は何を言っているんだ……」

「い、1日で追いついてみせようか」

「そうだな。それが出来れば最高だな」

辺りは暗くなり始めていた。俺たち……俺は適度にリラックスしていた。

「では……初月、出撃するぞ！」

「駆逐艦スチュワート、行きまあす！」

タービンの力つてすげーなー。ハインケルH.162サラマンダーより速いかもしれない。

前方に影を発見！ あの特徴的な死神天使の輪は龍田か。

「あら？ 二人してどこ行くのおく……!?!」

ドップラー効果を伴って聞こえなくなる龍田の質問。時間も時間だから多くの遠征班とすれ違い同じことを訊かれた。

ただでさえ高速だったのに俺たちは今、それを越えている。しかもすれ違うんだから会話なんて出来ない。それでも、俺と初月は止まることなく――

「ソロモン海域で待ってる！」

そう叫びながら今はただ、目的地へ。

都合のいい救世主は現れない

屈辱だ……。

目の前には深海棲艦の残骸が大量に浮いている。こちらの被害は軽微で敵は

ほぼ “ 全滅状態だ。それだというのに……”

「総員！ 一気に引き離すぞ！ 金剛たちに続け！」

そう言わざるを得ない。まだ目標地点の半分どころか二割も移動できていないのに、様々な問題のせいで思うように進めない。

それでもかと言うほど湧いてくる水上艦は問題ではない。あの愚か者^{提督}が組んだ編成では水上の敵は簡単に制圧出来る。

「くっ……潜水艦共め……」

しかし水面下からジワジワと少しづつ、だが確実に被害を与え続けてくる潜水艦が問題だった。伊勢型の二人や軽空母、戦いは苦手と言う夕張が頑張ってくれているが、疲労から動けなくなるのは時間の問題だろう。

「こんな時に軽巡や駆逐艦のみんなが居てくれれば……って顔してるわ」

「陸奥……」

横から声を掛けてきた陸奥の言葉の通りだった。ここに居る全員がそう思っているだろう。

出撃から四日、未だ大破まで追い込まれた者は居ないが、明石は一人しか居ないし、妖精さんだって鎮守府から全員来てもらうなんて出来なかった。それに資材の問題もあるのだから頭が痛い。

私は出撃してからすぐに全員である程度固まりながら移動することを提案した。班分けしてそれぞれ別のルートから移動することも考えたが、固まった方が被害は少なくなると判断したからだ。

「ああ、その通りだ。新しい提督は我々の期待を手酷く裏切る者だったな。所詮は軽巡、駆逐艦と侮ったのだろう。彼女らにも遠征以外の重要な役割があるというのに……」

結果としてはどうだろう。確かに基本的な被害は少ないと思う。潜水艦以外からの被害は殆ど無いと言っても良いだろう。だが、これまでは運が良かった。たまたま、夜間に深海棲艦が大挙して押し寄せたりしなかったのだから。

そして、それがこれからも続くとは限らない。

「そろそろ日が落ちるな……遠征に行った駆逐艦たちは無事だろうか……」

「長門さん！」

大鷹と青葉が大きな声で、だが真逆の表情で私の前にやって来た。

「なんだ？」

「私の子たちが前方に多くの潜水艦を発見しました！ どうしますか!？」

「なっ!？」

大鷹の言葉に私と、陸奥も驚いた。

つい先程、潜水艦から逃げないように移動してきたばかりなのに前方にも潜水艦だと!? 後方の奴らが追いかけてきていたら間違ひなく潜水艦に挟まれている状況だ。……夜間も近いし、少々拙いか？

「……濟まない大鷹。もうひと頑張りだ、頼む」

大鷹には無茶を強いることになってしまいが、皆の安全の為にやってもらうしかしい。だから私は、こうして頭を下げるしかなかった。

しかし、その貧乏くじを引かされた筈の大鷹は思っていたより爽やかな顔をしている。←

「長門さん。私は大丈夫です！ 心強い小さな味方がもうすぐ来てくれますから！」
その言葉のすぐ後に、後方から低い爆発音が聞こえた。

「見えたー！」

「探照灯を貸してくれ！」

「ほい」

遠くの方に星とも都市のネオン管とも違う光が見えた頃、初月が戦艦たちだと判断した。

俺はもうヘロヘロなのに隣の初月はそれらしい反応は無いし、戦艦たちだと確信するのも早いし……練度が違う。

そしてありがとうなんて言ってからカチカチ灯りを点けては消してを繰り返す。これはまさかモールス信号？ まるで映画を見るみたいだ……。

「よし……さて、ラストスパートだ」

丸一日移動し続けた俺と初月は、遂に戦艦たちと合流することが出来るらしい。きつとあの後にもイムヤから話を聴いてこっちに向かっている人も多いだろうし、ここからが踏ん張りどころか？

「……っつておい待て！ 潜水艦が居るぞ！」

「えっ」

敵の潜水艦を発見!?

慌てて止まると、手前の海面が弾けた。

海の下でも見えてんのか？ 潜水艦が居るってどうして気が付けるんだよ……化け物か。

まあいいや。俺たちは俺たちの役目を果たさないと。

「魚雷発射了！」

確か演習で夕張の魚雷を見た限りだと『艦これ』世界の魚雷ってある程度ホーミングするんだよね……。一見オーパーツと思えるけど、艦と艦娘はサイズの違いがヤバいからね。ちよつと考えると、ある程度のホーミング性能でも持つてない限り当たる訳無いんだよね。

つまり「前方に潜水艦が居る」って分かっていたら前方に魚雷を放つ。すると、ある程度の命中率は確保されるらしいってことを初月に聞いた。

……魚雷に操縦席でも設置されてんのかね？ そしてそこに妖精さんが座って神風アタックよろしく自爆特攻しているのだとするとホーミングには説明が付くような気がする。だけど乗ってた妖精さんがどこに行くのかは……謎だ。

ホーミングするからと言って放った魚雷が水飛沫を立てて進んでいく訳でも無いとなると、どこにあるのかは正確には分からなくなるから不安になる。「だいたいあの辺」って感覚的に分かるだけでも相当だと思うけど、やっぱり目で見えないからしっか

り命中したかどうかは分かんないんだよね。

そもそもそういう時の為のソナーなんだろうけど、そうすると高機動型魚雷発射装置に完全変体するから勘弁してほしい。潜水艦にブースターでも付けてた方がまだ良いだろう。

ズシンと花火みたいに体の芯まで響くような低い音と衝撃を複数感じてからしばらく、海面に貞子みたいなホラーチックな女が虚ろな目を浮かべながら浮かんできた。そのほかにも黒い破片とか腕やらなんやらと色々と一緒に。それも大量にだ。

「キモ……」

「……うん、片付いたみたいだ。これから一度艦隊に居る長門のところに行って指示を仰ごう」

「……了解です」

俺と初月は多くの重巡や空母たちから歓迎された。

俺たちが来た方向とは反対方向、つまり前方ではまだ爆撃の音が聞こえる。どうやら潜水艦から挟まれたところに俺たちが到着したらしい。

「初月、スチュワート、よく来てくれた。潜水艦だけは我々だけだと厳しいから……本当に助かった、ありがとう。……それにしても早くないか？ 我々が出発してからまだ

四日目だぞ？」

長門がお礼と共にそんなことを言ってくる。

いや〜大変でしたなあ……。何せ遠征明けから徹夜で移動し続けたんだもの。

初月が長門に説明している隣で俺は結構頑張ったんだぜ？　って感じでドヤつてよう。別に罰は当たらないだろう。

「私だつて嫌だつたさ！」

ホワイツ!?　何事!?

「だが「出撃しないヤツは解体だ」なんて言われたら……行かない訳にはいかないだろう！　違うか!？」

「Wait!　本当にあの時そんなこと言ったんデスか?」

「ああ言っていたとも!　そうでもなければ軽巡も駆逐艦も居ない編成で出撃なんてするか!」

長門のその言葉を聞いた人たちの怒りのボルテージが目に見えて上がっていく。

「それはあの野郎が軽巡と駆逐艦を無理矢理遠征に行かせたからだろう!　おかげであたしらがいつも以上に危険な目に遭つてる!　編成のバランスも考えないようなヤツの言う事は拒否すれば良かったんじゃないか!？」

「ああその通りだ。だが「解体させる」なんて脅しが出た時点で出撃せざるを得ないだろう

う？ 実際には解体するかは分からないまでも、今まで苦楽を共にしてきた仲間が理不尽な理由で解体させられるのは本意では無い」

長門は俺が知る限りでは時には頼れる大人として、時には意外と子供っぽい一面を見せる魅力的なキャラクターだったけど……こうして見ると本当に艦娘の中のリーダー格って感じがする。

そんなリーダー各の長門だけじゃなくて、ベテランの艦娘たちがこぞって不満の声を上げている現状。まず間違いなくあの提督と長門は出撃前に揉めたんだろう。それを無理やり黙らせて言うことを聞かせるようなヤツが上司？ 冗談じゃないぞ……

ここは現代日本じゃなかったのかよ……お上の偉い人達は何考えてるんだ。教育はどうなってるんだよおい。

「あり得ないだろ……」

転勤初日から部下のほぼ全員から不満を持たれるようなヤツを寄こすんじゃないよ。そんなのをこの鎮守府のトップに据えてて良いのか？ 居ない方がよっぽどプラスになると思うけど。

「いつそ漫画みたい都合の良い救世主とかが現れてくれればなあ……」

誰が放ったか、そんな呟きが聞こえてくる。

怒気を放っている艦娘の集団から少し離れ、熱気が冷めるまで眺めていた。

夕張さんに訊く解体事情

視線の先には長門を中心に未だ熱くなっている人の輪。話題は言わずもがな新しい提督のことだろう。

「……まだ終わらないの？ 流石に長すぎるんだけど」

こうしている内にも鎮守府では何が起こっているかもしれない。愚痴とかは移動しながらでいいからさっさと作戦を終わらせて、みんなで提督が後悔するまで袋叩きにした方が絶対に楽しくなると思う。

「100%の怒りと、更に120%の恨み辛みを拳に乗せて、顔の形が変わって洗面器よりもデカく腫れあがるまで殴ってさ……とにかくポコポコにしたら気持ち良いだろうな」

「ええ……スーちゃんはこんな離れたところで何してるの？」

「オウツ!？」

虚空を見つめてニヤニヤしてたら話しかけられてビックリした。っていうか結構ヤバイ独り言だったから聞かれてたかと思うと気が気じゃない。夕張の反応はドン引きって感じだし……これは終わったな。

それよりも言い訳を……いや、話題を逸らすべきか？

「夕張さん、なんで皆さんはあんなに “解体” って単語に対して怒ってるんですか？」

すると夕張は信じられないものを見たような顔で俺の方を見てくる。

これは何かやっちゃまった感じがする。多分だけど普通の艦娘なら常識レベルのことだったってことなんだろう。

「言葉にするのが難しいかな……ちよつと待ってね」

“解体” が艦娘にとって良くないことってのは分かるけど、そんなに複雑な事なのか……

さて、夕張が言葉に悩み始めたから少し、解体のことを考えてみよう。

まず “解体” とは何か。それは『艦これ』を含むゲームにおける要らないユニット等の売却システムで、一部の提督からは 2 | 4 | 11 なんて言われるくらいには親しみのあるネタになってるけど、実際にスクリーン越しじゃなくて現実だったらどうか。

例えば艦装を使えなくなるように何らかの処理を受けて、記憶処理やら何やらをされて市井に放たれる……とか？ 現実味が無いな。

いやホントどうなんだろう。全然想像がつかない。

「最悪の場合は文字通りバラバラにされるまであり得るのは怖いな。色々手間が掛からないからかなり楽な解決方法だろう。されるかもしれないと思うとちびりそうだけど。」

でもきつと屁理屈を捏ねて捏ねて拗らせて、艦娘は人間ではないなんていう思想の人は居るだろうし、そんな人から見たら艦娘の殺処分は何でもないのかもしれない。

「ハア」

「考えがどんどん暗い方向に向かうなあ……。」

「ちよつとー やつとなんて説明していいか纏まったのに、溜息なんて吐かないですよー」
……確かに。ちよつと失礼過ぎたかな。

「あつ、ごめんなさい」

「よろしい。……それで解体っていうのはね、私達艦娘の中でいつつちばん嫌われてる終わり方よ」

「轟沈とかは聞いたことがありますけど、それよりも？」

「当たり前じゃない！ 轟沈は沈むまで戦ったことでしょ？ うっかりで沈んだなら目も当てられないけど、そうじゃないなら名誉の最期ってやつよ。まあ、無いに越したことは無いけどね」

流石にうっかりで沈むような人は居ないんじゃないかな？ 俺ならともかく普通の

艦娘なら戦場で気を抜くなんてあり得ないだろうし。

「それで雷撃処分はね、拠点から遠いところで大破状態まで追い込まれたときに偶に行われることがあるらしいわ。轟沈と同じように作戦中の負傷が原因ね。だけど轟沈と違って、移動に支障が出て隊全体に支障をきたすときに自主判断で行われることが多いみたい。これも作戦中の名誉の負傷ってやつね」

なるほどね。艦娘の最期には幾つか種類があるのね。

艦装がダメになるまで戦って深海棲艦にやられたら轟沈。戦い終わってからも、艦装の損傷が激しくて部隊の足手まといになるくらいなら雷撃処分。

戦いがあるところに犠牲は付き物だし、これらは抜一的に殉職とほぼ同じで良いっばい？

「何か分からないところがあつた？」

「あ、多分大丈夫です」

「そう？ ……それで最後に解体だけど……詳しい事はよく分からないの」

「え？」

「でも、解体された艦娘が市井に居るって話は聞かないから、艦装を使えなくなるだけって訳じゃないみたい」

じゃあ何？ マジでバラバラにされるの？

「詳しい事は分かってないけど、轟沈、雷撃処分と違って嫌われる理由は状況ね」
「状況？」

「そう。轟沈や雷撃処分と解体は違うの。解体処分は……提督から必要ないって判断されたってことなの」

「それは……」

昔は軍艦として海の上で戦い、今は艦娘として深海棲艦と戦っている艦娘が、上司たる提督から「存在価値が無い」って言われるようなものか。とんでもない屈辱だろう。しかもこれまで佐世保鎮守府で戦ってきた他の艦娘たちからすれば相当な侮辱にもなる。しかもそれに死刑が付いてくるだなんて笑えない。

常識もキャリアもない、ちゃんとした艦ふねの記憶もない俺ですら雰囲気のかかなり嫌な気分になる。……俺が周りと同じ立場なら解体するって決められたら心が折れるかもしれない。いや、間違いなく折れるな。

「それは……嫌われそうですね」

「そうでしょ!! やっぱりそう思うわよね? それをあの提督と言え! 出撃しないヤツは解体!?!冗談じゃないわ!」

「だったら全員解体してくれって感じじゃないですか? そしたらあの提督一人で深海棲艦と戦ってくれますよ」

「あつ、それいいわね」

やっぱりそう思う？ 口からポンつと出て来た割には名案じゃないかなコレ。まあ一般人に大きな被害が出るからダメだけど、そうじゃないなら完璧だと思うんだ。

「おーい！ そろそろ出発するぞー！」

重巡の……加古が俺と夕張に声を掛けて来た。はいなんて言つて夕張が加古とお喋りしながら進んでいった。

その時に「次に解体つて言われたら全員で解体されましょう」なんて言つてたような気がするけど……もしそうなつても俺は悪くない……と思う。冗談だよな？

そして前方から軽空母の大鷹と重巡の足柄、戦艦の扶桑が来た。進行方向から考えて俺は最後尾に居て置いてかれそうだから……殿かな？

「スチュワートさん、初月さんと一緒に来てくださつてありがとうございます。……この子達も、潜水艦の相手は出来るんですけど、この多人数をカバーできるほどではなくて……」

「二人が来てくれたことが、不幸中の幸いだったわ。ありがとうございます」

「あー……自分としては……」

「良いの良いの！ お礼は素直に受け取つておくものよ！ みんな助かつたんだから

！」

……ここまで歓迎されるとなんかこそばゆいというか、逆に素直に受け取り難いというか。恥ずかしくなってきたやうね。適当に苦笑いを浮かべながら3人の会話を聞いて、相槌を打ちながら進んでいった。

途中に深海棲艦が出たって知らせが入ったけど、艦隊の前方、俺たちが居る反対側だったから戦闘の音も聞こえなかった。固まって移動してると言ってもそれなりに距離は離れてるんだね。

「今日はここで休むことにする！」

長門の一言でそこまで広くはない島だったけど野営キャンの準備が始まった。艦娘が大勢いるけど、全員が見張りの交代で逐次入れ替われば何とか寝られるだろう。俺と初月は潜水艦が出なければずっと寝てても良いそうだ。

すっかり俺たちの体調まで把握してるのはどう考えてもリーダーの鑑。そう考えながら熱くなったインスタント味噌汁を食べたら眠くなってきたから寝袋へ直行する。因みに初月はもう寝ていた。俺も寝よう……

ゴソゴソとした物音で意識が覚醒する。

「うん？」

寝ぼけ眼を擦って起き上がる。夜明けが近いのか空は薄紫色に染まっていた。そしてそんな空をバツクに浮かび上がるウサギみたいな特徴的なシルエット。

「オウツ!! 起こしちゃった!! ごめんよ」

——やかましいわ。

俺は目覚まし時計の頭を叩いて黙らせ、ちゃんと目覚めた後に謝ることになった。

トンボ帰り

「ううゝまだ痛いゝ」

嘘つけ絶対にもう痛み引いてるだろ。

そんなに何回もアピールしたところで呆れるだけで逆効果なんだよなあ……。

「何度も謝ったじゃないですか……」

「そ、そんなのじゃないようゝ」

じゃあなんだよ。

チヨイチヨイと、手を振って「こつちに来て」とジエスチャーする島風。

近くに寄っていくと耳に顔を近づけて――

「提督が出撃した艦隊に戻れって言ってたから私が来たんだよ」

なんて言ってきた。

戻れ……って何かの間違いだよな？ 俺と初月は兎も角、大勢を出撃させたのは提督

だったよね？

「……その話は長門さんにするべきでは？ っていうか見張りはどうしたの？」

「遅かったから引き離して来た！」

おい、胸を張れることじゃないだろ。

「島風じゃないか。よく来てくれた。歓迎しよう」

おや、噂をすれば長門じゃん。

島風がたつた今俺に言ったことと同じことを長門にも話した。

「実は——」

「ええい！ やつてられるか！」

長門が近くに落ちてた石を拾って投げる。相当遠くまで飛んで行ったのは見えた。

……戻ってこいって言う以上にヤバい情報も島風は持ってきたみたいだ。

「ふざけるのも大概にしろよ……」

「ど、どうしよう」

長門は拳を固く握って鬼の形相をしてるし、島風は事が大きすぎてどうしたらいいか分からないみたいだ。

……この空間に居辛いんだけど。振り返ってまだ夢の世界に居る芋虫達（寝袋）に向かって
叫ぶ。

「スウー……艦隊！ 総員起こしー！」

お前たちも俺らと同じ悩みを共有するんだよ！ 寝てて知りませんでしたはナシだからな！

「スチュワート?! いや……済まない。こういつた時こそ皆で話し合うべきだな」

3人で寝てる人たちを起こして回る。まずやらなきやいけないのは情報の共有と問題回避の為に話し合うことだ。見張りを除いても30くらいの頭数はあるから、俺たち3人の10倍のくらいは居るからそれなりの知恵は出てくるだろう。

「皆、こんな夜明け前に済まない。だが緊急事態だ」

長門の一言で集められた人たちが静まりかえる。さっきまでいきなり何とかアレコレ文句を言ってたのに切り替えが早い。でも緊急事態にされたんだから文句は提督に言つて欲しい。

「我らが佐世保鎮守府に近いうちに監査が入るらしい。それを何故か危惧した提督が我々に戻つてくるようにと、ここに居る島風に伝言を頼んだようだ」

一体何に危惧しているのか予想はつく。提督の椅子に座つて踏ん返り返つて好き放題しているのを見られるのが困るんだろう。

他の鎮守府と協力もしないで大型作戦並の出撃を敢行し、守るべき市民の安全の確保を20人も居ないくらいの海防艦と潜水艦に任せるなんて、どう足掻いても無能の烙印

を押されるのは間違いない。

せめて表面上だけでも普通に運営してますよってアピールをしたいと見た。

「鎮守府近海の防衛を行えるだけの人員を帰還させて、他は作戦続行した方が良いでしょう？」

「折角ここまで進んだのだよ？ わざわざ全員帰るのも馬鹿らしいわ」
なんて言葉が出てくる辺りやはりアイツは提督として認識されてないな。でもその案は通らない。通せない。

「因みに戻ってこなかったら各自の私物を処分するそうです」

「ちよつと！ それどういうこと!？」

俺に言われても困ると肩を竦める。でもこれがなんと嘘や冗談じゃないらしいんだよね。……なんで私物を処分する必要があるんだろうね？

だからそのまま屁理屈をこねる。

「戻ってくる人数に具体性が無いので、瑞鶴さんの言った通り少人数だけ鎮守府に戻って、後は作戦続行でも問題ないかと思えます」

だって “ 全員戻ってこなかったら “ って言われてないし。まああの提督は何やってても文句は言ってきそうだけど……。

「……作戦遂行の指示に従わなかった場合には解体の可能性があると思うと、全員が引き返すのは逆に危険だと考えている。瑞鶴の案を中心に考えているが、異論のあるもの

は遠慮せず声を出してほしい」

長門が尋ねても異論は出ない。俺としても遠征から帰ってきたであろう駆逐艦と軽巡たちが今どうなっているかも気になるし、島風も来たから一旦ここは鎮守府に戻りたいなあなんて考えていた。

「……居ないようだな。では、このまま作戦を続行する者と鎮守府に戻る者の選定を行う。各自希望を出してくれ。ただ、希望通りにならなかったとしても文句は言わないでくれよ」

やっぱり長門はリーダーだよなあ……。

俺は希望通り鎮守府に戻るグループに分けられた。メンバーは蒼龍、飛龍の二航戦2人に衣笠、加古、鳳翔を加えた計6人。たった6人、されど6人とも言える。相変わらず潜水艦には物凄く苦戦しそうな面子だけど、多分何とかなるでしょ。

島風が言うにはきつと他の人も何人かは来るだろうからしばらくここで待機しているのも良いかもしれないとのことだった。

今は俺と初月とは違って “ 何故か “ フル装備でやって来た島風が居るから潜水艦も大丈夫だろう。

それにしても……どうやったたら俺たちがタービン付けてブーストした距離を数時間程度の遅れで到着するのか、これが分からない。

今まで深海棲艦を倒しながら進んできた道を引き返したただだから戦闘自体は殆どなかつたけれども、偉大な先輩達の力を間近で見ることができた。

特に、二航戦の艦載機を用いた広範囲の索敵は流石と言わざるを得ない物で、他の艦種では絶対に真似できないだろうことが分かった。

重巡の2人は途中に出て来た深海棲艦相手に派手にぶつ放してくれたし、俺も少なかつたとはいえ潜水艦をダメにしてやつた。

戦闘での活躍があまりなかつた鳳翔さんだけ……戦闘以外のこと、例えば休憩中の心配りその他諸々が上手すぎる。皆に慕われているつてことに納得できた。

そんなこんなで2日、鎮守府近海まで戻つて来ることができた。しかしやはり言うかなんて言うか……やっぱり何かがあつた。

「駄目ね。いつもの見張り地点にも誰も居ないみたい……」

艦載機で鎮守府を偵察していた飛龍が告げた言葉に全員が衝撃を受けた。

具体的に言うとは遠征班、哨戒の人ともすれ違つてない。

こんな海の上、多少離れてても黒い点として認識くらいは出来そうなモンだけど……。

「見張りが誰も居ないって冗談だよな……?」

「じゃあもしかして鎮守府は……」

乾いた笑いを出す加古ときつと最悪な想像をした衣笠。まあこんな状況だし誰だつてそんなつちやうのは仕方ない。俺だつて鎮守府が深海棲艦に襲撃されたのか不安で仕方がない。

「慎重に行こう。深海棲艦が居るならできるだけ早く倒さないといけないわ」

蒼龍の言うことは御尤もなんだが……とところで深海棲艦つて陸上でも活動できるの？

人型ならともかく駆逐イ級とかは無理だと思っただけ……。

そんな割とどうでもいい事は置いて、鎮守府に対して艦娘が安心して帰れないつていうのは一般的な『艦これ』の世界観とは随分違うんじゃないか？

「……内部の様子を見てきます。敵が居たら合図を出してから逃げますので、その時はやっちやつてください」

あ、気が付いたらなんか口走つちやつたぞ。ヤバいな……出来るだけ安全に鎮守府内部を探れないかと思つていたらつい口から出ちやつたよ……。

「……ならお願い。艦載機だけじゃ建物の中まではどうしてもね」

「分かりました」

そう言つて一人で鎮守府に向かう。艦娘の全くいない近海と敷地内。だけど建物内

部は分からない。

俺は都合よく盾なんて持つてるんだからそう簡単には落ちないと思う。生きて情報を持ち帰るっていうのも大切な仕事だし、正に打って付けて訳だ。

何事もなく上陸出来たけど、見慣れた風景なのに静か過ぎて不気味に感じる。

「本当に誰も居ない……？」

見渡しても動く影はない。それを余計に不気味に感じながら工廠や食堂などを見て回る。

ありとあらゆる曲がり角や隙間に意識を向けながらの探索に疲れ、スパイごっこなんて思うような余裕は吹き飛んだ。

「……チッ」

格艦娘たちの部屋を開けて回る度に、警戒するだけ無駄だと思うような “ 何もなし ” という結果が得られることへ苛立ちが募る。

しかし、探索はまだ始まったばかりだ。

バケモノ

——コツ——コツ——

外の風と波の音しかない鎮守府内を歩いていく。

この部屋にも誰も居ない。

「……………」

それにしても、建物内にも誰も居なさそうなのはかなり奇妙に感じる。あの野郎が視察を気にしているなら艦娘たちに部屋の片付けなりなんなりをさせるだろうけど、そんな物音すら聞こえない。

遠征に行かせたんだとしたら近海で全くすれ違わないのはおかしいし、深海棲艦に侵略されたとしたら荒らされた形跡が無い。……汚い部屋の人は居たけど。でも防衛に誰も居ないならやっぱり陥落しちゃったって考えて良いのかなあ？

——コツ——コツ——

曲がり角で立ち止まってゆっくりと奥を覗く。物音は全くしなかったから居ないと分かっているけど警戒せざるを得ない。安堵の息が漏れる。

最初は足音を気にして、靴を脱いで探索しようと思ったけど深海棲艦が居るなら遅か

れ早かれドンパチが始まるだろうし、艦娘が居たなら全力疾走で話しかける。

提督が見回ってたとしても……

「よくよく考えてみると、新しい提督の命令を素直に聞く必要が何処にもないな？」

佐世保鎮守府に所属してる艦娘たちは何かしらの規律とかに縛られてるんだろうけど、俺は居候の身分だからそんな縛られるようなものは無い。

俺には日本に向かって妖精さんと移動して死にかけてくれた所を助けてくれた佐世保鎮守府には馬鹿みたいに命の恩がある。

それを成したのは前提督と艦娘たちであつてあの野郎ではない。

……これは、恩を返すべきではないのか。

「ああああー……！」

声が聞こえたような気がした。

「一階の……あつちの方？」

たしかあの辺は使われてないとかで立ち入ったこと無いけどどんな部屋があるんだろう？ まさか拷問部屋とかじゃないだろうし……。分かんないから取り敢えず行つてから考えればいいか。どうせ何の部屋なのか表示はあるだろうし。

「……まさかこんな部屋があるとはね」

聞こえる声が叫び声だと判り、近付くにつれて大きく、ハッキリと聞こえるようになった時、いかにもそれらしいプレートを見つけ、部屋の前で立ち止まる。

懲罰部屋——そのプレートが見える部屋の扉からは断続的に誰かが叫んでいる声が聞こえてくる。おいおい、やつぱりなんかヤベー事してるよアイツ。

咄嗟にドアを開けようとして、思い留まる。何かあつたら合図するって言ったわ。

少し離れた場所に移動して窓を開け発煙筒を放る。程なくして辺りは紫色の煙に包まれた。風があるからすぐに煙は晴れるだろう。

「んっ」

恐らく飛龍が飛ばしたであろう艦載機が俺のところに来て来た。ずっと艦載機で上空から偵察してたってことね。そして発煙筒を確認した直後に俺のところへ飛ばして、艦載機コレを目印に進んでくるんだろう。

手を伸ばして艦載機を掌に載せる。そして窓を閉めて他の人が到着するのを待てばいい。

……艦娘って妖精さんが居る限りプロもビックリな暗殺集団なんじゃないかな……
全く、俺も随分と非日常しょうじゅうじつにも慣れたもんだ。

「まあいいや……」

バタバタと複数人が走ってくる足音が大きく響き、僅かに遅れて室内からの叫び声がいなくなった。恐らく無駄だとは思うけど、やって来た5人に向かって指を唇にあてて「静かに」とジェスチャーをする。

「なんでこの部屋だつて判つたの?」

「先程まで誰かの叫び声がありました。誰かが被害者になつてる以上、鎮守府内に加害者が居ることはほぼ間違いないかと」

「行くよ!」

「え、待つ……」

話を聞くなりドアを開け放つた飛龍を突き飛ばして盾を構える。……衝撃無し。そのまま1歩、2歩と進むと廊下に居た5人が続いて入ってくる。

「なんの真似だ」

「それはこつちのセリフだ!」

やはり相当酷いことが起こっているらしい。

提督の声が聞こえたと思つたら後ろで加古が怒鳴つた。それ見て射撃の恐れは無いと盾の構えを解く。

すると目に入ったのは檻。そしてその中には艦娘が何人か収容されている。でも一

人だけ外で倒れててその前にはアイツが居た。

手には竹刀を持っている。……なるほどね。

「クソ野郎だな」

「なんだその口の効き方は」

「こんなことしてるんだから当然じゃ？」

檻の中に捕まつてる人たちの解放させるには鍵が必要で、コイツが持つてるとしたらどうやって鍵を奪おうか……適当に答えながら目の前の男を観察する。

腐っても軍人。格闘の経験なんて碌に無い俺がどうこう出来るとは思えない。砲撃出来れば楽なんだろうけどなあ……殺人だからなあ。

やっぱり転ばせるか。そう考えるなり再び盾を構えて突進する。

しかしド素人のタックルだからかあっさりと捌かれ、逆に盾を蹴られて俺がしりもちをつく結果になってしまった。臙装は持てるけど出力は人並みらしい。

ケツが痛い。と感じた次の瞬間には盾を思いきり踏みつけられた。その衝撃は勿論、縁の部分が体に食い込んで痛い。

けど耐えられない程じゃない。もがきながらポケットの膨らみに手を伸ばし、金属製の何かを掴んで皆の居る方に放る。

「なっ……お前！」

俺の掴んだ物はやはり鍵だったようで、受け取ったであろう飛龍が檻へ近づいていく。

それ見たこの男がアレコレ喚きながら脱走を阻止しようと飛龍を止めに行くが、そんなことはさせない。足を掴んで転ばせる。

顔を蹴られ、腕を蹴られ、滅茶苦茶に暴られたけど、絶対に離さないとガツチリとホールドした。

そして段々と狭く、暗くなる視界に空の檻を収め、してやったりと思いつつ、最後の足掻きとしてコイツの玉を力の限り殴りつけた。

バシイッ!

「あ、あ、っ!？」

強い衝撃と痛みを受けて目が覚める。それで初めて今まで寝てたか何かで意識を失っていたことに気が付いた。

それにしても変な体制だ。椅子に座ってるのに倒れてやがる。違うな、叩かれたから倒れたのか。

「痛い……?」

元は一般人。殴られる経験なんてほとんどしたことが無い。それもこんな成人男性からなんて初めてだ。顎外れたりしてない? 滅茶苦茶痛くて……痛いってことしか分からないんだが?

そもそもなんでこんなことするんだよコイツは? 何か艦娘に恨みでもあんのか?

「お前たちは、言うことさえ聴いていけば良いんだよ」

……初めてコイツの命令以外の言葉を聞いた気がする。

何か引き出せそうか?

「……艦娘にだつて意志はあります。休み無く働き続けたら不満が出るのは当然では?」

俺がそう言うや否や、顔を真っ赤にして腹に蹴りを入れてきた。咄嗟に腹筋に力を入れようとするけどそんなものは殆ど無く、なけなしの防御力ではまともにダメージを受けてしまった。

痛い、吐きそう……鳩尾だったら死んでた。

咳き込みながらそんなことを思っていると、何かを言い始めた。

「お前たちの不満がなんだって言うんだ? お前たちが休み、呑気に遊んでる間にも深海棲艦による被害が出ていないと思ってるのか?」

あく……確かにそれを言われたらそうなんだよなあ。深海棲艦の脅威から守つてるとは言つても被害は出ているらしいし。

俺としては被害者の家族のことを思うとお気の毒に感じてだけど、それでは済まないのが艦娘とか提督って訳で……もしかしてコイツ完璧主義者か？

「だったら……なんでこんなことやつてるんですか？」

「見せしめが必要だからだ」

「見せしめ。……そんなこととしても団結して反対するに決まつてるじゃないですか。どうして艦娘と協力しようとしませんか。前の提督みたいに」

「お前らみたいなバケモノと協力なんて出来るかよ」

えっ、バケモノ？

バケモノって言った？ 何で？

「黙りか。良いか？ 人にそっくりで、同じ名前、ヤツの見た目は同じ、記憶も殆ど同じ。そんなのが日本国内だけで複数も居る。しかも建造で “ 造れる ” ときた。これがバケモノじゃなかったら何なんだよ」

「……な、なるほど」

めっちゃ嫌つてるじゃん。確かに存在そのものは不思議の塊だけどさあ……そんな『艦娘とは何か』なんて俺たちだつて知らないよ、多分。

大本營にでも聞いてくれ。

「チツ……深海棲艦が居なかつたらお前たちが人間に殺されるに決まってる」
そんな未来はあり得たかもしれないけどね。とにかくコイツは艦娘が気に入らないってことは分かった。

それはそうと、この世界って戦ってる時はガチで戦うけど、それ以外の時は艦娘同士のキヤツキヤウフな世界だと思ひ込んでただけ？

いきなり中東からスタートするし、なんか物騒な考え方してる人は居るし、もしかして結構ハードな世界なの……？

そうやって一人で戦慄していると、アイツは振り返って部屋から出ていった。

起こし方は最悪だし蹴られたりもしたけど、マンガとかでよくあるようなヤバい折檻をされたりとかは無かった。

「えっ……愚痴聞かす為に来たの？ マジで？」

重たい椅子に縛られて床に転がされた俺と、無造作に転がされてる盾だけが部屋に残された。

限界

今は何時だ？

あれからどれぐらい経った？

床に転がされたまま眠って同じ体勢のまま目を覚ます。椅子が重い上にそもそも姿勢が悪いからまともな身動きが取れず、廊下の方から物音がほとんどしない。

「暇過ぎて死にそう……」

窓が無いから時間感覚が滅茶苦茶になってることもあって、とにかく退屈を持て余していた。

誰かに来て欲しい。ハムスターは寂しいと死ぬなんてデマはあるけど、人間は孤独を拗らせると本当に発狂するらしいからさ。

この際あのクソ野郎でも構わない。退屈を紛らす何かが必要だ。

よし、暇潰しも兼ねて何度目かになる情報の整理をしよう。

アイツは言った。深海棲艦が居なかったら俺たちが人類に殺されると。言うことを聞いていれば良いんだと。

それから考えると、アイツは深海棲艦よりも艦娘に恨みを持っているような気がする。

どうやったらそんな状況になるか。

俺が知る限りでは艦娘よりも深海棲艦の方が余程危険度は高い。それなのに艦娘を親の仇のように憎むのは何故か……。

「……」

ダメだ思いつかない。一番考えられるのが知人を艦娘絡みの何かで喪ったってことくらいだけど、艦娘が人を撃つかと言われたら違うと思う。

「艦娘の救助とかが遅くて間に合わなかったとか？ それとも漁船の護衛してたけど力及ばず……ってこと？」

これだ。一番しつくりくる。

だとしても、そもそも悪いのは深海棲艦なんだから艦娘に当たるのは違うよね？
「拗らせただけかな？」

取り敢えずこういうことにおこう。

「……今は何時だろう」

結構時間経ったんじゃないやねえの？ 寝てた時間もあるだろうし、一日くらいは経ったでしよ。

ずっと同じ姿勢だからもう身体が痛い！

「腹減つたなあ……喉も渴いたし……」

せめてさあ……水とか無いの？ 日本の犯罪者でももう少し良い思いしてると思うんだけど。

——ドン——ドン——

「おっ？」

足音だ！……人数は一人かな。

じゃあ多分アイツだろうな。

「チツ……起きてるじゃねえか。おい」

「……なんででしょうか」

不機嫌そうで何より。それよりもこっちはアンタに転がされたままなんだが？ 常識的に考えて椅子を元通りにするとかさあ……してくれても良いんじゃないの？

「そういえばお前は最近ここに来たんだったって？」

そんな新人に何が訊きたいんだろう？

「そうですね。……ちゃんとした会話がしたいなら、せめて起き上がらせてくれてもいい

いと思うんですけど」

姿勢の改善を要求したら椅子を起こしてくれた。

正直無視されると思ってたからちよつと意外だったかも。でもまあ、不満気な雰囲気はしつかりと伝わったらしい。嫌そうな、罰が悪そうな顔をしている。

いや、椅子倒したのお前だよ？

「お前は……艦娘についてどう思っている？」

質問の内容が抽象的すぎるだろ。

「深海棲艦と戦う存在ですかね？」

他の人たちみたいに平和な海とか、深海棲艦の脅威から守るといった存在意義というか、崇高な理念？ そんなの俺には無いし……まあ同意はするけど。

そんな無難な回答を聞いたら口の端を上げた。……悪いおっさんの悪そうなスマイルなんて要らないよ。

「そうだ。お前たちは提督の指示の下で戦う存在だ。……それなのになんだコレは!? この鎮守府の提督が退任するからと配属されてみれば！ 碌に深海棲艦から海を取り返して無え現状！」

「そうだったんですか。最近来たのでよく分かりませんでした」

愚痴を言いに来たのね。なるほど了解です。

それにしたって言い方ってモンがあるだろ……前の提督、各地の提督は全くの無能でしたって言ってるようなもんだぞ。

「深海棲艦が現れてから数年経ってるんだぞ？ それなのに未だ日本は漁船に護衛を付けないと碌に漁にも出られない状態だ。いくら何でも遅すぎると思わないか？」

事が事だから対応に遅れが出ても仕方ないとは思うんだけどなあ……それに、深海棲艦が確実に絶滅したって認知されない限りは、念には念をの精神で護衛は付くと思うんだよね。

「俺が軍学校で教わった通りに進められていたなら、今頃はもつと深海棲艦の脅威は少なかった筈だ！」

いや、理論上可能なことと現実を一緒にしないで？ それが出来たら科学者が永久機関を発明して技術者がガンダムを作ることになるぞ。

「お前たちは戦う為の存在だ。それなのに俺が来た時には食堂で大勢集まっていやがった。街で聞いてみたら休日があるそうじゃねえか。いいご身分だなあ？ 機械人形の癖によお……」

実際に戦場に出る訳でもないのに偉そうだなあ……って感じで聞いてたらやつぱりだ。コイツは前の提督と艦娘に対する考え方がまるつきり違う。

前の提督は艦娘を人間だと言った。それぞれの意志を尊重して一人の人間として付

き合っていた。

それに対してコイツは、艦娘を人形だと言った。そして俺たちの都合を無視して無理やり行動させている。

確かに同一人物っぽいのは居るだろうし、解体や建造で増えたり減ったりするのは人間じゃない。普通の人とは違うっていう意味では確かに化け物なのかもしれない。

それでも俺たちには意思があり、考えがあり、感情がある。そしてそれを言葉にできる。これはどう考えたって人間である証拠だろう。

意思を汲まず、考えを無視し、感情を蔑ろにして、言葉を踏み躪るコイツは……コイツみたくないヤツこそが人間が真に打ち倒すべき相手なんじゃないか？

「何だよその反抗的な目はあー！」

——バシッ！

「ぐあッ……！」

手に持っていた棒状の何かで頭を叩かれた。脳みそが零れたんじゃないかと思うような痛みにも襲われる。

「市民を守るとか言っておきながら、遠征や出撃の任務を与えると反抗する。休みが欲しいだ？ イライラするんだよ……一丁前に人間ぶりがあって」

そう言い残してコイツは部屋から出て行った。

「ヒステリックなことで……」

キレちゃったよ。一周回って冷静になってる。

もう殺しちゃっても罪に問われないような気がしてきたぞ……。

椅子に縛られてるだけの自分に無力感を感じる。

……限界だ。

トイレくらいは行かせてくれても良いだろうがよお！

こんな歳で！ 不可抗力とは言えお漏らしは嫌だぞ！

「ん？」

椅子に自分由来じゃない振動を感じてトイレで埋め尽くされた頭が一瞬で冷静になる。

いつの間に俺の後ろで何かしてる奴は誰だ？ 誰も入ってこなかったと思うんだけど、せめて声くらい掛けて欲しい。

「うわっ！」

フワツと拘束が緩んでベシヤリと体が床に延びる。

「痛つてえ……あ、どうも」

開放してくれた誰かにお礼を言おうと振り返ると妖精さんが居た。しかも見慣れたあいつ。いつもいつも、気が付いたらそこに居るお前はマジで一体何者なんだ……。

「よつと……おつとお!？」

上手く立ち上がれない。ここ最近はずつと椅子にくつついてたから足が固まって動けねえや。思わず苦笑いが出る。

屈伸運動と軽いジャンプで多少解した後放置された盾のところに向かう。

「あくあく、埃被っちゃって……」

それじゃあ、トイレに行つてから提督をぶちのめしに行くか。

「絶対にただじゃ済ませねえ。不本意だけど一緒に地獄に落ちようじゃねえか……」

扉はあっさりとおいた。アイツに痛い目を見させてやる前に食堂……。腹減つたけどまさか取り壊しには……なつてない!

扉を開けると中にはそれなりに人が居た。みんなビックリした顔で俺の方を見てる。まさか人が居るなんて思わなくて俺もビックリした。

「スチュワートさん! 無事でしたか!」

そんな声を皮切りに俺は歓迎される。

なんだよ……せめて誰か助けに来てくれても良かったんじゃないの？ って言おうと思っただけど止めた。きつとみんなもみんなアイツとの戦いがあつたんだろう。辛いのは俺だけじゃない筈だ。

「……皆さんは遠征に行かされてると思ってましたよ。取り壊しになつてなくてビックリしました」

近くにいた長良にそう話しかける。

「私たちはね、遠征を　『ぼいこつと』　することにしたの。……もうあんな人の言うことなんて聞かないんだから！」

「そーだそーだー」「誰があんなヤツのー」と騒ぎ出すその他大勢。

「随分と頼もしい不良たちですね。あ、問宮さん？　……ありがとうございます」

今の俺を含めてみんな笑顔だから悲壮感が無い。僕らの鎮守府戦争つて感じがする。こう……大規模な悪戯、そんな感じのやつ。

アイツからしたら溜まったもんじゃやないだろう。道具がいきなり使えなくなった上に使用者に襲いかかってくるなんて普通の製品だったらクレームもんだ。だけど俺たちはアイツが言うには機械人形。しかも意志が搭載されてるから、変に刺激したアイツが悪い。全面的に。

出て来た水を飲み、おにぎりに齧り付く。ちよつと零れて下品だろうが構わない。最後に楽しければ良いんだ。俺は今楽しい。

飲んだ水が染み渡るような、そんな気がした。

「さて、一仕事してきますかね」

「どこに行くつもりですか？」

おつ、ここってカツコつけるところじゃない？

「……書類に埋もれたお姫様を救ってくる」

抑止を振り切つて執務室に向かう。

——絶対にアイツはそこに居る。

「妖精さん、ナイスだねえ」

俺が執務室近くに来た時には偉そうな妖精さんが誰かの砲を持っていた。俺のは壊れちゃったから誰かに借りるしかないのは心苦しいけどやるしかない。

「初めての……か……」

本音としてはやっぱりやりたくない。人を撃つだなんて考えるだけで顔が歪む。あれだけ覚悟を決めたつもりでも、やっぱり直前になると日和つてしまう。

今まで深海棲艦なんて沢山倒してきたのに……

チラリと砲を見ると「さみだれ」と書いてある……随分カワイイじゃねーか。
「そうだよな。殺人砲なんて嫌だよな」

死は救済って言葉もあるくらいだし、命だけはとらないでおくか。

「これ以上あなたの横暴に付き合うつもりはありません！」

なんか既に大淀が揉めてるんだけど。

まあいいや。

「何だっ!？」

部屋に突入して、アイツを素早く探して照準を合わせる。

まず狙うのは——耳だ！

バアン！

アイツの耳の上の方が吹き飛んで蹲る。

後ろの壁が開いたけど、気にせずに右肩を撃つ。

「ぐあああああつ！」

「なっ!?! スチュワートさん!?!」

提督が叫び、状況を理解した大淀が止めに入ってくる。
でも、もう遅い。

最後に右膝を撃ち抜いた。

自棄、諦念で出来た結末

——バァン！

砲弾は外れなかった。

そのことを認識した直後に大淀に抱き留められる形で押し倒された。

「なんてことをするんですか！」

「ハァ……ハァ……早く処置をしないと」

大淀を押しつけて立ち上がると、床に赤い水溜りを広げ倒れているアイツが見える。痛みに気絶したのかピクリともしない。

それともまさか……死んだのか？

これをやったのは誰だ？

——俺だ。

本当にする必要はあったか？

——なかったかもしれない。

罪は誰にある？

——俺だ。

お前はこれからどうする？

もうどうでもいい。捕まって終わりだ。

目が回る。こんなクスだから罪悪感が少なくなるのかそんなことは全く無かった。生後間もない赤子だろうが、死にかけのジジイだろうが、コイツみたいなクス野郎だとかは関係ない。人殺しは人殺しで一括りにされる。

ニユースで見て「へえ、殺しなんて馬つ鹿でええ」なんて興味なさげに言ってた俺がやることになるとは……手に持ったコレ砲で……。いや、急所は外したつもりだけどまさか本当に？

それで……それで……？

「……ウツ……」

喉の奥から酸っぱいモノが押し寄せてくる。我慢できる精神状態じゃない俺は、水と混ざった胃液を吐いた。

あまりの気分の悪さと、喉の痛みと、これから訪れるであろう俺の処罰死刑の予想から涙が出てくる。

四つん這いになって胃液すら吐き尽くしてなお無を吐き、涙を流し、嗚咽を漏らしながら動かない俺。

そんな俺の惨状を見たのか、それとも別の何か切っ掛けか、大淀が俺の代わりに慌

てながらアイツのことを診ている。

廊下の方からも大人数の足音が聞こえてくる。

「何の音だ!？」

「スチュワートさん……貴女本当に……」

「ごめんなさい、大淀さん……皆さん」

俺はもう、申し訳無さからただ謝ることしか出来なかった。

「……落ち着きましたか?」

「ごめんなさい……怖いです……由良さん……これからどうなる……んですか?」

執務室でのやらかしで、正に魂が抜けてた状態の俺は工廠に運ばれていた。

血、吐瀉物、涙で汚い俺を見ても困ったような顔をするだけで、工廠に連れてきてから隣に座ってずっと頭を撫でてくれた由良の優しさが荒んだ心に沁みる。

「それは由良にも分からないわ」

……そう言ってまた困った顔をする由良。

「……怒ったり怖がったりしないんですか? 人殺しですよ?」

「死んではないってさっき言われたから、そこだけは安心していいと思うわ。それに、こんなことを言うのは不謹慎だと思うけど……私はあまり怒ってないの」

「え？」

「なんで？ ……ああ、怒ってゝはゝいないんだね。つまり多少怖がつてはいると。まあ当たり前かな……。犯罪者になっちゃったんだし、これからは嫌悪の視線とかにも慣れていかないといけないのか……」

「ハア……」

「あら、なんで溜息を吐くの？ 大丈夫よ。ねっ？」

「いや、何が「ねっ？」よ？ 何も大丈夫じゃないんだが？」

「……確かに、スチュワートさんが全く悪くないってはいけません。提督だってあんな杜撰な指示ばかり出してたんだもの。誰だってイライラするに決まってるわ」

「……でも、実際は誰もアイツに手を上げませんでした」

最初に我慢の限界に達したのが俺だっただけで、アイツをどうかしたかった人は実際沢山いたのかもしれない。

それでも最初にやつちまった俺が一番悪い訳で……。

「あゝもういい！ メンドクサイ！」

「ど、どうしたのいきなり!？」

「ウジウジ悩むのはもう終わり！ 由良さん！ ありがとうございましたっ！」

「え、ええ？ どういたしまして……？」

終わるときは終わる！ 覚悟はしただろ！

ベッドから起き上がる。さて、大淀はどこかな？

「……ハア」

「スチュワートさん、もう大丈夫なんですか？」

大淀は相変わらず執務室に居た。俺が来るとは思わなかったんだろう。驚きと心配が混ざったような声をかけられた。

俺が荒らした後片付けをしてたから手伝うように伝える。

「まあ、何とかって感じです。それで、お願いがあるんですけど……」

「何ですか？」

「視察の日に、視察官に自首しようと思うんですけど」

主に自分の為に。

たとえ殺人ではなかったとしても、抱えたままだと俺の心が罪悪感で潰れるに決まっ

てる。だからもういつそのこと早く罰を受けたいと思った。

罰を受けたから罪が消えるかと言われたらそんなことは無いんだろうけど、これは「罰を受けた」という事実を以って、少しでも早く楽になりたいという浅はかな考えだ。「……そうですか。私にはそれを止めることは出来ません。……ただ、後悔しないようにしていただきたいね」

「ハイ……ありがとうございます」その必要は無い」

「!？」

何だ!？」

驚いて振り返る。そこには黒い服をしつかり着こなした男の人と、その隣には俺の方を睨む不知火が居た。

視察の担当者が口を開く。

「黒川提督は以前から日頃の態度などが問題視されていた。抜き打ちと言う形で偽った予定日を伝えていたが、まさかこんな事になっていたとは……」

「……見慣れない艦が居るようなのでまずは名前を言うべきだと思いますが」

「そうだったね。不知火さんありがとう。……私は荻野。大本营に努めている憲兵だ」

憲兵？ 言葉は聞いたことはあるけど実際見たのは初めてだ。この鎮守府では見た

こと無かったからってつきり都市伝説かと……。

あとこれはヤベエな……。間違いなく俺と大淀の会話は聞かれてただろうし、アイツの存在現状がバレたら俺は間違いなく捕まる。潔く自首しようと思ってたけどこれは……すぐく逃げたい。

「の——は——ます……」

「は——は——でしよう？」

目の前では大淀が憲兵の……ええと……憲兵に自己紹介と今の鎮守府の現状を話しているようだった。

頼むよ！大淀。鎮守府の頭脳！この状況から俺が比較的穏やかに捕まるように誘導してくれ……ッ！

「——という訳でして、——スチュワートさんに担当させます」

……？ 大淀が俺の方に手を向けた。何か分からないから取り敢えず会釈だけはおこう。

顔を上げて尚、さつきから俺の方をジッと見ている不知火が怖すぎるんだけど……。

「スチュワートさん、鎮守府視察の見回りのお供は任せましたよ。……どこに行きたいか尋ねられるので、そこに連れて行くだけで大丈夫です」

え？ それだけ？ 提督はどことか、その他の細かい質問は答えられないんだけど

……。そもそも自称コミュ障の俺に接客紛いの事させるとか……。死ねって？
「ええ〜つと……。ま、まずは！……。どこからが良いですか？」

ああ〜！ 緊張のあまり声が震えるッ！

目の前を歩く艦娘……。スチュワートさんを見る。僕が部屋に入った時に、大淀さんに何かを自首すると言っていたのが聞こえた。……。後で訊いてみようと思う。

僕は今まで何度も各地の鎮守府を監査、視察してきて分かったことがある。それは、連絡日時から多少前後した日に訪問するということ。

抜き打ちと言う形になってしまうけど、ある程度の日時は伝えてあるのだからそこには目を瞑ってほしい。

何故なら僕が監査に赴いた時に、一番気にすることは「普段」だからだ。予定日時を教えてしまうと対策を取られてしまう。そうなると、異常事態に気が付きにくい。

提督が変わって一週間程経ったから行ってこいと言われてやって来たけど……。あまりの変わりように驚いた。

僕は前の提督にはお世話になった。突然訪問しても快く対応してくださったし、鎮守府には活気があって、艦娘に話を聴いても特に不満とかも出てこなかったし……。

それなのにこれは……。

まず思ったことは艦娘の数が少ないということ。廊下の外をチラリと見る。

確か以前なら海沿いには空母や軽空母の艦娘が居た筈なんだけど……。

廊下を歩いても誰ともすれ違わない。廊下の外にはただ一人、夕日に向かって佇む一人の影が見えるだけ。部屋からも物音が聞こえない。

閑古鳥が鳴いているような鎮守府内に以前の面影はなく、全く違う建物に入ったとすら思った。

先程大淀さんから大体の事情は聴いた。前提督の溜めていた資材が危機的状况ではないものの相当減ってしまったこと。その為、今は最低限の防衛を除いて情報収集ではなく、資材集めを主目的とした遠征に行かせているということ。

戦艦や空母など、主力となる艦娘達はみんな提督の命令で出撃していると聞いた時には不知火さんも困惑していたみたいだし、新しくここに配属された黒川提督は、以前から聞いていた噂と変わらなかな問題がありそうだ。

「次は工廠を見てみたいな」

「あつ、分かりました」

先程から必要最低限の言葉以外は一言も話さずに淡々と僕が希望した場所に案内してくれるスチュワートさんには、もうちよつと何か喋って欲しいんだけど……。

「……そういえば、提督の姿を見ていませんね。……提督はどちらに？」

不知火さんがそう言ったと同時にスチュワートさんがピタリと動きを止めた。

「……一度執務室に戻ります」

クルリと向きを変えたスチュワートさんに不知火さんと付いていく。心なしか先程よりも歩くのが速かった。

「大淀さん、アレなんですけど……大丈夫でしょうか？」

「少し待ってください……大丈夫だそうです」

執務室に黒川提督は戻っていなかった。一体どこに居るのだろうか……。

スチュワートさんは大淀さんと「アレ」といった僕には分からない短い会話を
行い、再び付いてくるように言って歩き始めた。

医務室と書かれたプレートが見えるその部屋にスチュワートさんが入っていった。

医務室？ 体調不良何だろうか……でもそれなら提督個人の部屋で療養するなり、病院へ行くなりやりようがありそうだけれども。

「……………」

不知火さんと目を合わせてから閉じられたドアを開くと、ベッドで眠っている黒川提

督が目に入る。

「これは一体……どうなされたんですか？」

「提督は先ほど耳、肩、膝を撃たれる大怪我を負いました。……私が犯人です。さあ、捕まえてください」

そこにあつたのは一つの真実だった。



「さあ、捕まえてください」

目の前には驚いた顔のまま固まっている憲兵と不知火。

対して俺は両手を上げて目を閉じる。これで……これで終わりだ。

「……」

まだ？ 腕がキツくなってきたんだけど。

「それは……何かの冗談かい？」

お、反応アリ。

「いえ、本当のことです」

「……不知火さん」

「分かりました。……動かないでくださいね」

いや動かんよ。不意打ちもナシだ。捕まえてくださいって言ったし、ちゃんと捕まえてくれるよね？ 問答無用で眉間にズドンされても文句は言えないことしてるから不安になってきたぞ。

しかしそう考えてる間にも不知火は隣まで来て、俺の両腕を後ろにして手際よく縛っていく。「縛りプレイか……」なんてクソ程どうでもいい事を考えている間に作業が終わる。

「終わりました。彼女はどうするんですか？」

「……このことは私の一存では決められない。可及的速やかに大本営に連絡を入れてくれ。大淀さんに話を聞くためにもう一度執務室へ向かう」

「分かりました」

そう言つて部屋から出て行く音が聞こえる。目を開けると眉間に皺を刻んだ憲兵が居た。

「もう一度聞くが、本当の事なんだね？」

「はい」

「そう言わされているとかではなく、本当に？」

「はい」

なんか真面目そうな雰囲気あるし、ちよつとこの人苦手かも……こう、「悪は裁く！

虚偽や偽りは許さんッ！」って感じの人はちよつと一緒に居辛くて……なんだっけ？
水清ければ魚棲まず？

「……貴女の言うことを信じましょう。……ハア、大変なことになったぞ」

「ご理解いただけただけで何よりです」

そう言つてスマイルを浮かべる。きつとこの顔は可愛いだろうし、悪い印象にはならないと思う。

不知火が戻ってくるまでずっとニコニコしてたら胡乱げな目で見られた。解せぬ。

「お待ちせしました。荻野さん、至急大本営に彼女を連れて戻ってくるように、と」

「分かった。スチュワートさん、付いてきてきてもらえるかな？」

「はい」

ついてきてもらえないかな？　じゃねーよ拒否権無いだろそれ。拒否するつもりは無いんだけどさ。

それにしても大本営ね……。今更だけど凄い大事になってきた気がする。

「それじゃあ私たちはこれで失礼するよ。突然の来訪、失礼しました」

「はい、現状の報告をよろしくお願いします……監査、ありがとうございます」

執務室に戻って憲兵——荻野さんが大淀に別れを告げる。大淀がお礼を言ったのは、決まり文句つてのものもあるけどそれ以上に、鎮守府の現状をすっかり報告してくれる存在が意図していないとは言え予定よりも早くやってきたことに対するものだろう。

そう考えていたら荻野さんにチラチラ見られる。……まさか、俺にお別れの言葉を言わせようとしているのか？

目を合わせると荻野さんが頷く。そういうことらしい。

「大淀さん、大変ぶ迷惑をお掛けしました」

大淀が俺の方を向く。後ろで縛られた腕を見て顔を顰めた。

アイツが残した負心のキズの遺産と俺が残したであろう爪痕悪評で大変だろうけど頑張つて欲しい。

事件を起こした張本人である俺にそんなことを言う資格なんて無いんだろう。ただ謝罪として、お礼として形だけでも受け取つて欲しい。

そこでふと、歓迎会で気を失いかけるまで構い倒されたことを思い出した。

他にも、工廠で艤装のあれこれでお喋りをしたこと。

提督にイタズラ半分で激辛カレーを食べさせたこと。

誰も持つてないような新兵器で皆を困惑させたこと。

思い出すのはそんな、ここに来てからの思い出ばかり。

喉が、目頭が熱くなる。

口元が震える。視界が滲み出す。

耐えるように下唇を噛む。

「短い間でですけど……お世話になりました。楽しかったです……。他の皆さんにも伝えておいてください」

なんかいつもと違う声が出た。ああ、中学、高校の卒業式でさえ泣きやしなかったのにこんな……俺はこんなに涙脆かったか？

「はい、必ず。」

もうダメだ……。大淀の言葉を聞いて我慢できなくなった俺は涙を流す前に執務室から出た。

滲む視界には人は居なかった。

執務室の入り口、閉まった扉の前で俺は蹲り、声を殺して泣いた。

「……」

……後ろには足音を殺して付いてきていた不知火が居ることを知らずに。

「さて、大本営に戻ろうか」

「一番早いのは最寄り駅から数本乗り継いだ行き方です。既にタクシーは呼んであります」

「ありがとう。スチュワートさんも行くか」

「はい……」

「恥ずかしい……まさか泣いてる時に後ろに不知火が居たなんて……」

三人で歩いている内にいつぞや来たことがある煉瓦の壁。

「これを越えたらここでの生活が終わるのか……」

「嫌だなあ……」

「ん？ 何か言ったかい？」

「え？ いえ、何も……」

「……」

「そうか……」

「やっぱり一度だけ見たことがある舗装された道路とそれを囲む木々。

そして酷く懐かしいタクシーがそこに鎮座していた。

「あれに乗れば終わりか……」

そして俺たち三人はタクシーに乗り込んだ。

そういえば、長門たち出撃班は上手くやってるだろうか？

いい結果を聞く前にお別

れになったのが心残りだ。

……もう一度、戻ってきたいなあ……。

俺は、沈んでいく夕日を見ながらそう思った。

|

|

|

大本営にて

回想の終わり

「——とまあ、こんな感じでここに連れて来られて、あとは皆さんの知つての通りだと思います」

いや、長い思い出話でしたね……。

いや、事件の事だけでいいじゃん！ 事情聴取つて言うくらいなんだし！ 俺が向こうでどんな生活をしていて何が楽しかったあの、休日はどう過ごしていたのかとか細かくてどうでもいいと思うことなんて絶対に提督殺傷事件に関係ないと思うんだよね。

それなのに重箱の隅を突くように事細かに聞いて来やがって……。俺のプライベートルとか知って何を得するんだよこの人たちは……。そこまでするならいっそのこと俺の一日みためにタイトル付けて隠し撮りでもしてやがれつてんだ。ケツ。

大本営に着いてからというと、不知火から数人の憲兵へ引き渡されて、ドラマとかに出てきそうな刑務所みたいなところに連れて行かれて、一週間くらいそこで謹慎してた。

すげえよな。簡単な読み物と無機質なベッドがあるんだぜ？ しかも許可を貰えばトイレにも行けるし、少ないけどちゃんと二食出て来た。勿論理不尽な暴力は無い。

どっかのクソ野郎なんて椅子に縛つてあとは放置なんだもんなあ……真つ黒になったバナナとか綿が浮いたお茶すら出てこなかった。……極限状態まで追い詰められないと流石に口にしないとと思うけど。

「……そうか。佐世保鎮守府の現状は視察に行つた荻野から聴いている。何があつたのかも、荻野、不知火、佐世保の艦娘からの報告と一致している。君の言うことは嘘ではないと信じよう」

「あつ、ありがとうございます」

「私たちも、黒川提督を提督として認めるに当たつてもっと慎重になる必要があつたな……済まない」

「いいえそんな……」

そ う だ よ ！ なんて言える訳がない。

こちとら中身は権力を恐れるチキンだぞ!?

大本営の如何にも偉そうな人なんて逆らわない方が良いに決まつてる。へへつ、靴でも舐めましょうかあ……？ あつホコリ付いてるじゃん。汚い。

「これから君の、佐世保鎮守府について会議がある。黒川提督にも大きな問題があつた。

だから君がそこまで強く自分を責める必要は無い。先程も言ったが、私たちにも責任はあるのだから」

「はあ」

取り敢えず無視は良くないと思つて要領の得ないただの相槌ともとれる返事をする。しかしこのお偉いさんが黙ると、俺からペラペラ話すことは出来ないから本当に気まずくなる。

しばらく沈黙が続き、後ろに居た艦娘……大和が俺の視線に気付くと声を掛けて来た。

「もう退出していただいて構いませんよ?」

「あつ……ハイ。失礼しました」

特に話した内容以外に悪い事はしてないけど、早く一人になりたかつたから逃げるように部屋を後にして、一週間籠っている独房(城)(仮城)に駆け込む。

硬いベッドにダイブしてようやく人心地ついた俺は、体とは違つて頭の中は混乱していた。

「……助かるかもしれない」

あの偉そうな人は結構艦娘に対して寛容なのかもしれない。

そう思うと、 “ まだ ” や “ 次 ” があるような気がして、心が少し軽くなった。

良いニュースと・・・

今日も今日とて新聞を広げて市井のアレコレを見る。

お偉いさんからの事情徴収の後から音沙汰が無い。

眠気も無いのに寝るのも、どうやって暇を潰すか考えるのも楽じゃない。せめてWi
—Fiとスマホがあれば違ったんだけどなあ……

でもまあ、提督を撃った危険人物に対してこの扱いは相当マシな方なんだろう。贅沢
を言つてはいけない。

「ハッ、また汚職事件かよ……」

前世で見たニュースとさして変わらない内容が新聞には書かれていた。〇〇議員の
賄賂を巡つての問題がくなんて、時代や世界が変わつたつてやる奴はやる。それが分
かつて逆に安心した。

その他にも外国との貿易がくとか、新鮮味の無い、いつも通りの新聞を眺める。 ”
深海棲艦 “ の文字がちらほら見えるものの、探すつもりが無いと見つからないくらい
には存在しなかった。一般市民向けの新聞だからだろう、それならそれで平和つてこと
で良い事だと思う。

「ん？」

【艦娘に対する見方が変わる今】

「へえ……」

【突如として現れた深海棲艦は未だ、私達の生活に大きな影響を与えている。それに対抗できる存在の艦娘に対しての見方がここ最近、変わりつつある。

近年、国内での深海棲艦の被害は少なく、特に先月は最も多い月の5%を下回っている。昨年からの死者もゼロで、今現在の日本の海は平和だと思われる。

その影響からか、艦娘に対して良い声が聞こえなくなりつつある——】

「——もう一度、艦娘に対する見方を考え直してみてもどうだろうか」

まあ、今年は死者は出てないし、被害も最近は減ってるから、税金を多く割いている鎮守府に、悪い目が行きがちだけど、変に排斥して被害が出るようになってからじゃ遅いから、今も守られてるってありがたみを忘れないようにしようね。って内容だった。

鎮守府で聞いた話だと、漁師は遠洋まで漁に行けないし、本当に近海でしか漁はしてないって自重してるみたいだからそれもあって一般市民の被害は少ないのかもしれない。戦場に漁船とか場違いにも程があるから遠洋まで漁しに来ないでくれよ……。

でも、海と関連しない人達からしたらまさに対岸の火事だもんな。池とか水溜りから

深海棲艦が自然発生する訳ないし、危機感なんて無いのかもしれない。危機感を持たせないように頑張るのが艦娘の仕事とも言えるけど。

それに一般市民に取材するにしても都心部ばかりじゃやっぱ偏りそうだし。やっぱり関係者とかにも聞き込んだのかなあ？ 仕事とは言え危ない橋を渡るなあ…。

それからは、テレビに流れてそうなありきたりな記事ばかりだった。

ただ目を滑らせて、「ふくん」くらいの感想を持って、途中で興味を失くして新しい健康医薬品とか化粧品の広告を見てから新聞を放る。

「……」

暇だ。暇が過ぎる。

まさに生き殺し。退屈過ぎて死にそうだし。まさか俺がこうなることを踏まえて会議がなかなか終わらない？

——コンコン コンコン

ノックだ。

「あ、は〜い……っ!?!」

俺の口から出て来た声に自分で驚く。なんだこの緊張感のカケラも感じられない返事は！ これじゃあまるで俺が謹慎をガツツリ満喫してるみてーじゃねーか！

そう思いながらドアを開ける。外には偉そうな人。やっと俺の沙汰が決まったらし

い。

「会議が終わった。君にとって良いニュースと悪いニュースがある。……続きは私の部屋で話そうか」

「はい」

悪いニュースってなんだ？ 処刑、解体が決定したとかか？ 助かるかもって希望持たせておいて殺すとかだったら人間の所業じゃねえぞ。

ワンチャン別の何かだろうけど、そんな何かには心当たりが無い。……だけど、連帯責任で佐世保鎮守府のみんなも解体とかだったら俺は発狂する。自信がある。

「失礼します」

「掛けてくれ」

「はい」

「……さて、どちらから聴きたい？」

「良いニュースからでお願いします」

良いニュースと悪いニュース、なんて映画に出てきそうな言い回し。もちろん聞くのは良いニュースが先だ。良い事は良い事として素直に喜びたい。悪いニュースが先だ

と気落ちしてそれどころじゃなくなってしまう。

「分かった。……良いニュースだが、再び佐世保に行かせた荻野の報告書では、佐世保鎮守府の出撃していた大部隊が帰還したそうだ。幸いなことに沈んだ者は居ない上、結構な戦果を上げたそうだ」

「！ それは……良かったです」

「どうやら誰も欠けることなく戻ってきたらしい。それに結構な戦果つてことは、佐世保のみんなは見返してやろうって維持で滅茶苦茶に暴れたに違いない。」

昔だったら絶対に「あ、そう？ 良かったね」なんて心にも思っていないことを言うて適当に流していたに違いない。

一生懸命……って言えるほど艦娘として艦娘の仕事？ に打ち込んではいけど、それでも前世の学生時代のの “ やらされてる ” 勉強や部活よりも余程意欲的に取り組んだ。

だからだろう、まるで自分の事みたいにホツとした。

「それで悪いニュースだが……君も予想は付いているだろう。君の罰についてだ」

来たか。良いニュースが俺の処刑の取り消しとかじゃないならこっちに来るだろうなどは思ってたけど、その閥の内容は如何に……。

解体ならせめて痛くないで欲しいけどなあ。

「君の罰、解体だが……されない方向で決まった」

「……はい？」

殺さないってこと？ それの何が悪いニユースなんだ？ 俺を殺したくてしようがないってことか？ でもそれだったら俺にとつては良いニユースになるし……分かん。

「うん？ 荻野と君の話の話を聴き、君を見た私からの感想だけど、君は死にたがっているように見えた」

「……はい？」

いや、なんで勝手に死にたがりの不幸少女にジヨブチェンジさせられてんの？ そんなに死んだ魚の目してないだろ！ 勝手に俺の思考を捏造して人格創らないで。

「艦娘が嫌う解体をさせられるかもしれないのに抵抗する素振りも無く、逃げ出す様子もなく、謹慎中に不満も漏らさない。……君は、生きていることに諦めていたんじゃないのか？」

「……」

いや、この人の目に穴でも開いてんじゃねーの？ 抵抗したら折角の自由が縛られるじゃん？ 逃げたら疚しい事でもあるのか疑われてめんどくさいじゃん？ 不満を口から漏らさなかつたのは……元々悪いの俺だし、多少のことは我慢するよね？

それでも生きることが諦めた訳ではない。決して。そう決してだ。ちょっと、いや結構望み薄いなくって諦めてたところはあったけど、それでも助かるかもって餌をチラつかせられたから踏みとどまれた。

いや、確かに死んだら色々と楽にはなれそうだなあとは思ってたけれども！

「……君は、生きたいのか？」

「勿論です」

「そうか……。分かった。君には罰が罰にならないようだ」

当たり前前だ。こんなの罰でも何でもない。大本営の偉い人達って結構ユルい？

「だから私から君に別の罰を与える」

「……謹んでお受けいたします」

「君には、これから新しく設置される大湊警備府に、初期艦として異動してもらうことにする。解体されることで終わりを迎えることを許さない。国の為に、その土地で暮らしている市民の為に、生きて戦い続けることを罰とする」

その言葉で俺が混乱を極め、エラーを吐いてフリーズしたのは言うまでもない。

ワルい大人

「勿論それだけではない。ただ異動するだけでは納得しない人は必ず出てくる」

「……」

「だから君は、初期艦としての異動に加えて一年間の謹慎とする。謹慎の理由は……解るね？」

「…ハイ」

危ぶないところだった……なんとか反応できたぞ。

んで何？ 大湊警備府つてところに行けつて？ そこで戦い続けることが罰になるつて？ でもしばらくは謹慎してねつてこと？

「二年の謹慎の理由だけど、その間大人しくしていれば、今回の事件は黒川提督の監督能力の無さに問題があつたと責任転嫁できるからだ」

なるほどね。

あととは出撃したまま逃げるのを防止することも兼ねてそうかな。

罪を忘れるなど言いつつ逃げたら許さんつてことか。生きて貢献することが償いになると。

俺が処刑にならなかつたのはきつとこの人が何らかの手を打つたに違いない。反艦娘派の人じゃないってことが分かつたけど、だからと言って艦娘に甘い訳じゃないのね。嫌いじゃない。

良いじゃねーか。やってやろうじゃねーか。

謹慎つてのがその大湊警備府の敷地内から出るなつて意味だったら、たつた一年くらい大人しく引きこもつてやるよ楽勝だよそんなの。その後は「謹慎なんてさせなきや良かつた」つて後悔するくらい暴れてやる。俺は負けず嫌いなんだよ。

「自分の処置については分かりました。……です、異動先の提督と顔を合わせておきたいのですけど」

そうと決まれば俺の下らない八つ当たりにつき合わせられる憐れな提督の顔を拝んでやろうじゃねーか。……ちよつと可哀そうだけど、偉い人の決定だからね！　しようがない。断れないって日本の縦社会を恨んでくれ。

「それは許可できない。私は君がそう危険ではないと判断しているが、周りの目は厳しいぞ」

「……」

確かに。顔も合わせたことが無い人からしたら

・鎮守府で建造されてない上に世界中で報告の無い怪しさ満点の艦娘

・類を見ない艤装を使う意味不明な艦娘

・提督に発砲して昏睡までさせた艦娘（New!）

これは酷い。そんなヤツがいきなり同じ建物に入ってきて

「二年間よろしく! ……大丈夫! 大人しくしてるから」

なんて言ってきたても信じられる要素が無い。絶対に何か企んでるだろうって思われる。

俺だったら胡散臭すぎて監視付けるね。

……あ、そういうこと?

「それにこれは私が今決めた事だ。だから大湊警備府に配属される者にはまだ連絡を入れていない」

ありや……まあ、異動したら嫌でも顔を合わせることになるんだし、別に後でもいいか。

すると話は終わりだと言いたげに頷いて立ち上がりドアの方へ向かっていく。

「……そういえば、佐世保鎮守府にも新しく提督が配属されてね。急遽戻ってきてもらった田代元提督に教育を受けているだろう」

そう悪戯っぽくわらう男の言葉は衝撃的だった。

「はっ」

オイオイオイ、それが一番のビッグニュースなんじゃないか？ 良いなあ……じゃなくて、また提督が一時的とはいえ戻ってきたならみんな安心だろうなく。特に大淀辺りが。

っていうかそれを聴いたら大湊ってところに行ってる場合じゃないね！ あの人は優しくてユルいから色々出来て楽しいけど……俺もやっぱり佐世保に戻りたいんだが？

「……最後になったが、大湊警備府に配属される提督と連絡が付いて、諸々も終わるまでは大本営で謹慎してもらおう」

え……まだ謹慎続くの？ 正直今なら大嫌いな筋トレとかも喜んで出来るかもしれないくらいには暇なんだけど……。

……どうでもいいけどまだ話あるなら座つたら？

「そこで、出撃は許さないが、演習や訓練は許可することにする。君もずっと籠りっぱなしだと鈍ってしまうだろうし、何よりも退屈だろう？」

E x a m p l e !。いやホントに、出撃、敷地からの外出が禁止だろうが問題ないね！ 謹慎部屋とは違って動き回れるだけ……

艦装が無い

「あの……」

佐世保に置いてあるんだったー！俺の頼もしき盾と手榴弾たちィ！いや、レンタ
ルしよう。きつとあるはずだ……

「やはり暇を持って余していた訳か。そんなにソワソワするなんて案外子供らしいところ
もあるじゃないか」

ああ聞きたくない！ 艦装が無いって焦ってるだけで小学生みたいにはしゃいでる
訳じゃねーよ！ 嬉しくない訳じゃないけれども！

「部屋から出る時はそうだな……香取に声を掛けて一緒に居ろ。そして香取の言うこと
を聴く。これが出来ないならまた謹慎部屋に籠ることになるぞ」

「……分かりました」

誰かが一緒に居るなんて冗談じゃない！ 自由が満喫出来ないじゃないか！ なん
て思ってたけど条件だと聞いた直後に脊髄反射で返事をした。退屈な謹慎だけはイヤ
だ……。

男が少しだけ笑みを浮かべて頷いた。話が終わったってことだろう。
こうして、俺の処分について教えてもらう話は終わった——

「ふう。偉そうな真似事は疲れるね。……どうだい？ この部屋には他に誰も居ない

し、お酒でも飲むかい？」

「……何を言っているか分からないんですが？」

一息吐いたと思つたら豹変するとかビツクリするから止めてくれよ……。しかも見た目未成年の俺にお酒勧めてくるとか本当に大本營の椅子に座つてる偉い感じの人なのか怪しくなってくる。権力にモノを言わせたワルい大人だ。

「君もずつと謹慎で疲れただろう？ 息抜きとして一晩くらい飲んで大丈夫さ！」

……今のはオフレコで頼むよ」

まあ、俺も水よりだったら味がある飲み物の方が良いんだけど……アンタは本当にそれで良いのか？ 俺の見た目を考えろ見た目を！ 仮にも偉い立場の人の発言だとは思えないんだが？

「私はビールを用意してくる。君は何を飲みたい？ ……貰いものだが良いお酒は沢山有つてね」

「水でお願ひします」

「詰まらないな。せめてここに居る間だけは警戒なんかしないで寛いで行つてくれてもいいのに」

「気持ちだけ頂いておきますね」

本当にこの人は偉い人なんだろうか？

ダメな大人って感じがする。俺の中で株が大暴落してるんだけど？

「なあ〜に、私は艦娘が好きでね。……別に恋愛的な意味ではなくて、良きパートナーとしてだ。……全く、反艦娘派の人達と話をするのは疲れていけない。君にはたつぷりと愚痴を聞いてもらおうかな」

ああ、愚痴を聞くことになるのか。正確な心情の把握なんて出来っこないのになんてやって話を続けるか……。

部屋の奥にあつた棚から瓶を持ってきた自称偉い人。蓋が取れ、酒の匂いが漂ってくる。マジで酒飲む気なのこの人？

もう一つのコップを奪い取り、酒を入れられる前にポットから水を注ぐ。

「えっと……それじゃあ」

「この件の一先ずの区切りに」

「区切りに？」

「乾杯」

……うつそだろ？ 何かのお酒の付き合いだと思つてたら本当にこの人結構個人的な理由で俺を誘つてきた!？」

取り敢えず煽おだてておけば間違い無いか。

「じゃあ早速だけど聞いてもらおうじゃないか——」

ビールを飲む。目の前には顔を真っ赤にした顔の艦娘——スチュワートが居る。

「ハア……」

「あれえ？ どうしたんですかあ〜？ 溜息ばかりだと〜幸せが逃げやすいですよ？」

……これは後片付けが少々面倒になるかもしれない。

佐世保鎮守府以前の経歴のスチュワートは本当に深海棲艦のスパイではないのか？ と判断する為にお酒を使つて酔わせて、何か新しい情報を聞き出そうと思つたんだが……中々お酒を飲もうとしなかつたから、殆ど命令に近い形で飲ませた結果、完全に出来が上がつてしまった。

この状態が演技なはずが無い。上半身は絶えず揺れ、私の溜息に反応出来して変に絡んでくるし、随分陽気になった。結構な量を飲ませたのに意思疎通が出来る時点で相当お酒に強いと分かるが。

……仮に今の酔っているのも演技だとすると、完敗だ。

しかしながらその口から出てきた情報は田代元提督が聞いたと言う情報とさして変わらなかつた。深海棲艦のスパイではないのか？

なんて考えている間にもスチュワートの体が大きく揺れ、座っていた椅子のひじ掛け

に体を預けて眠ってしまった。

「どうしたもんかねえ……」

彼女に言った大湊警備府の話は本当の事。だけどそこに志願したのが新人提督ただ一人だけだったとは……。

「荻野の言う通りだったな……我々の人材不足も深刻だ」

酒やグラスを片付けながらそう呟く。明日から条件付きとは言えある程度の自由は与えたし、どんな行動をとるか……

「まだ今日の分の書類が終わってないな……いや、お酒を飲んでしまったんだ、明日にした方が良さそうだな」

会議が終わってから仕事がかたと言うほど残っている。

「……本当に面倒くさいことをしてくれたな」

私も相当酔ってきたようだ。早く彼女を謹慎部屋のベッドに届けなくては……。

「彼女には勢いで言っちゃったけど、香取にも許可を貰ってこないといけないな」

翌日、寝坊してその香取に叱られたときは流石に反省した。



大本營の香取さん

目を覚ますと最早見慣れたと言つても過言ではない謹慎部屋に居た。

昨日お偉いさんから俺の処遇を聞いてから帰つて来た記憶が無いんだけど……何があつた!?

「記憶処理? いやいやまさかそんな」

しかしいくら頭を捻つてもまるで思い出せない。マジで記憶処理された可能性があるな。ヤバいぞ。

——コンコン

「スチユワートさん、起きてますか?」

扉がノックされ、呼ばれたのでベッドから素早く起き上がって身だしなみを確認する。多少服に皺が出来ているだけでそれ以外は何ともなかったから多分問題は無いだろう。

「はい、どちら様でしょう……か?」

ドアノブに手を掛けて声を出しながら開ける。

そこに居たのは……そう、女教師っていう言葉がとてもピッタリな女性だった。

「あら、おはよう。私は香取よ。今日から貴女に色々と指導するように言われているわ」
「あつ、ハイ。おはようございます」

女教師——香取さんつて……俺がこの部屋から出る為に一緒に居なきやいけないんだっけ？

「これからしばらくの間、よろしくね」

「……ヨロシクオネガイシマス」

ああヤバイ！ 事情聴取の時に偉そうな人の隣に立ってた大和を見てから一週間。何も無い部屋で新聞ばかり見てたから佐世保で培った女性への耐性が落ちている。そのせいで上手く喋れない！

そもそも緊張のあまり会話どころじゃないから、スルリと近寄って握った手を離して欲しい。出来れば後二メートルくらい離れて欲しい。

「うふふ♪ これはまた虐め甲斐のありそうな子……♪」

何故か俺の方を向いて楽しそうに微笑んでいる香取さん。何かを呟いていたみたいだけどボリユームが小さくて聞こえなかった。気のせいかな？

「挨拶はこれくらいにして、と。朝からそんなに緊張しなくても大丈夫よ。まずは朝食にしましょう」

「……分かりました」

俺は香取さんに連れられて食堂にやってきた。壁や床は佐世保鎮守府よりも近代的だけどもあまり広くなかった。佐世保鎮守府とは似ても似つかない。

それに途中で憲兵さんとはすれ違ったけど艦娘とはすれ違わなかったから、恐らく大本營は鎮守府とは別の建物で、俺みたいにヤバイやらかしをした艦娘の処罰をしたり各地の提督を集めて会議したりと、艦娘に関係はするけど艦娘が関わらなくても出来る仕事を主とする施設だろうなと思った。

そのうち適当な席に座らせられて、別れた香取さんが皿を手に戻ってきた。

「はい、トーストとコーヒーよ。少なかったらおかわりはあつちね」
「ありがとうございます」

……さっきからなんでこの人ずっとニコニコしてんだろう。

そう疑問に思いながら久しぶりのコーヒーを啜る。砂糖が入っていない普通の苦いコーヒーの風味が口の中に広がる。美味しい。

特に会話が為されるでもなく、全て食べ終わるまで会話が無かった。

久しぶりの色どりのある朝食にリラックスして思わず足を組みそうになったけど、慌てて元に戻したから香取さんには気付かれなかった。

「あら、どうかしたの？」

「……少し気になることがあるんですけど」

「ええ、何でも訊いて頂戴。答えられるものなら答えるわ」

……じゃあバンバン質問していいこうか。情報は何よりも高価ってどこかの偉人も言ってたんだし、俺も做って情報収集に励んだとことで何もおかしくは無い筈だ。

「ここは大本営ですよね？」

「確かにここは大本営と呼ばれているわね」

「……だったら何故艦娘が居ないんでしょうか？」

「良い質問ね。でも、ちよつとややこしいから、後で教室に案内するわ。そこで授業をしましょう♪」

そう言つて立ち上がり、食べ終わった食器を片付けに行つた香取さんに付いていく。食堂の従業員も普通の人だったし、やっぱり大本営には艦娘が居ないんだなあ。

食堂を出てからちよつと歩けば「第一学習室」とプレートが見える部屋に着いた。中には誰も居らず、それを確認した香取さんが中に入っていく。

室内はいかにも会議室ですつて感じのデカイホワイトボードやスクリーンがあつた。

「席に付いてください。授業を始めます」

「はい」

促されるままに椅子に座る。するとそれを見た香取さんがホワイトボードに向かって進み始め、何かを書き始めた。

○大本營とは

そう大きく書かれた下にずらずらと文字が書かれていく。

全ての鎮守府の中枢で最も影響力のある施設らしい。大規模な作戦の立案や、海外からの出向要請の諾否を決めたり、視察の計画を立てたり……まあ、予想通りつちや予想通りだった。

その他にも新人の提督や憲兵候補、見習いの教育施設としての面や、もつと別の役割もあつたりするらしい。

そんな大本營はというと、横須賀鎮守府の敷地内に設置されているらしい。それなのに艦娘が見当たらない理由は単純で、艦娘にも秘密にしないといけないことが露見するリスクを減らす為らしい。

「——と、ここまでは理解できましたか？」

「はい。……でも、先日の事情徴収の時に大和さんが居たんですけど、それは良いんですか？」

「ええ、あくまでリスクを減らすというだけで、艦娘の一切の立ち入りを拒否している訳

では無いの。それに余計な詮索をされないように、門や要所には厳重な警備がされていきますから」

ふうん。まあ、「絶対に入るなよ」よりも「出来れば入らないでね」って方が好奇心が湧かない。それに『艦これ』の艦娘は基本的に提督の言うことをよく聞くから、そもそも気になっても自主的に入っていったりはしないだろう。それに警備もあるみたいだし。

……一体何を隠しているんだろうね？ でも怖いから近寄らんとこ……。

それからは俺が香取さんから色々と質問される番だった。いつ頃からどこの鎮守府に居たのか、作戦中に困ったことは無いか、どういったことが得意で苦手か、足りないと思うことは何か。

「へ、へえ……凄いわね。初めて鎮守府の外に出たのが川内さんから連れて行かれた夜戦だなんて」

「……嵐のように全てを巻き込んでいきました」

これについては丸つきり嘘……ではない。その前には夕張や赤城と演習をして外に出てるけど、それは鎮守府近海だから実質鎮守府っていう屁理屈が通る。けどその前にスラバヤから日本に向かって移動してきたんだよね。だから鎮守府の外に居た時間はそれなりにあるはずだ。だけど鎮守府 から 外に出たのは川内から連れてかれ

た夜戦が最初だった筈だ。

ある程度話を進めていくとチャイムが鳴った。時計を確認すると入って来た時から二時間近く経っている。それまで俺の話を聴いて何かをメモしていた香取てさんの手が止まる。

「……いい天気ね」

「……? そうですね」

「うふふ♪ ずっと座ってるのも退屈でしょう? 他に訊きたいことが無いなら、外で体を動かしましょうか」

ええい! なんでこの人は一々言動や行動が妙にエロいのか!

でも外で体を動かすのは大歓迎だ。艦娘に病気の概念があるのかは知らないけど、運動不足は拙いだろう。

「はい」

外に出る。久しぶりに浴びた太陽光が物凄く心地良い。それに屋外に出たのも久しぶりな気がする。

「ん、くっつフウ……」

思いつきり体を伸ばしてリラックスするのは仕方ないと思う。例えすぐ近くで微笑ましいモノを見る顔を俺に向けている香取さんがいて、もの凄く恥ずかしかったとしてもだ!

「うふふ♪ 気持ちよさそうね。そんなところ悪いのだけど、早速あなたの实力を見させてもらおうかしら」

「……一体何をすれば良いんですか?」

「あら? 私達艦娘が实力を見ると言っても、こんな陸上では何も始まらないわ」

「え……」

この人艦娘だったの!? 肩になんか軍人正のソレ章が乗ってるから珍しい女性職員かと思ってたんですけどお!! それに大本営には艦娘はあんまりない理由を語った本人がまさか艦娘だとは思わなかった……。熱心に『艦これ』をしていた提督達なら一目で見抜いただろうに……。

「何をしているの? 海に出ないと何も出来ないわよ?」

「……艦装が無いから海に行けません」

そうだ、艦装が無いから海に行ったところで何も出来やしない。實力云々の前にスタートラインにすら立ってない。是非とも別の方法で俺の實力を「大丈夫よ」

!?

「艤装に頼らない基本的な動きを教える為に、私達練習巡洋艦は艦種ごとに決まった艤装を貸し出しているのよ」

あ、艤装あるの？ だったら久しぶりの海を満喫しようかな。軟禁に謹慎で海から二週間近く離れてたし、なんて素晴らしい日だ！

「だから艤装が無いなんて言い訳はさせないわ♪ 大丈夫よ、非殺傷性の弾が入っているわ。だから——」

待つて、前言撤回するわ。なんか物凄い嫌な予感がするんだけど……

「全力で掛かってきなさい♪」

「は、ハイ……」

……死刑宣告か何かで？

厳しい個人授業

久しぶりの海。大本営から出た後に横須賀鎮守府から借りたレンタルし艦装は、初月と R T A してるのかと言われる程の速度が出るようなブースターでも、夕張と明石に作って貰った盾、妖精さんに作って貰った投擲物でもなく、『艦これ』に出てくるような極々普通の、標準的な艦装だった。

……最初にあの妖精さんから作って貰った砲はもう無いからなあ……自爆特攻なんてしなきゃよかったよ……。

スイスイと進みながら足に波を感じ、身体で風を受けるこの爽快感よ。

誰にも邪魔されず……自由で、静かで……何と言うか、救われる気がする。……目の前にさつき俺を脅してきた恐るべき香取さんが居なければ、きつと俺は青天に溶けるような気分になれるだろう。

そう思いながら香取さんの後ろに続く。海に出てから暫くたっただろうか？ 香取さんがスピードを落とした。

「……さて。ある程度離れたので、これから貴女の実力を見させてもらいます。佐世保鎮守府に居た期間から考えて……私が合図するまでの間、十五回私に弾を当てることか

出来たら合格とします」

「ハイー！」

そう返事をしながら俺は心の中でガッツポーズをした。

いくら香取さんが見た事のあるブースターピンを着けているからと言って、砲弾よりも早く動ける筈が無い。

そんな中どれくらい制限時間が在るかは分かんないけど、十五回当てるなんて楽勝だぜ。

「では……始めっ！」

その合図と共に香取さんに向かって砲を構える。……しばらく盾しか持っていないから砲を構えるなんて久しぶりだなあオイ！ どうなるかと思っただけど案外上手く照準合わせられるじゃん！ これなら全然問題ないね！ 早速一発目貰っちゃおっかなく……ん？

視線の先にはその場から少し離れた場所で人差し指を上げて「あ！ 思い出した！」って感じのジェスチャーをしている香取さん。……まだ何かあったの？

砲を一旦降ろす。

「……。……そうです。忘れていました」

「……何ですか?」

思ったよりも声が聴き取り辛かったから近くに寄る。言い忘れたことって注意事項か?

だけど近寄っていた俺に向けられたのは言葉ではなく——小さなピストルみたいなモノだった。

「私も反撃させていただきますので、当たらないように頑張ってくださいね♪ 因みに、結構痛いですよ♪」

「え?」

……マジ? それ最初に言ってくれない? っていうか既にロックオンされてんだけど? 不意打ち染みた事してくるとか……見た目に反してやるのが中々エゲツねえ

「なアツ……つとお!」

反射的に左に飛んで避ける。狙われていた場所……多分顎からは外れたみたいだけど、代わりに右耳に掠ったみたいで、燃えるような熱さを感じる。

……これ実弾じゃないよね? 急所に当たっても死なないよね!? 俺の耳吹き飛んでないよね!?

耳に手を当てる。頗る痛すばいいけど、手は赤くなつて無かった。……良かった。まだ血が

出てる訳じゃないのね。

「あら、良く避けたわね。だいたいが今ので戦闘継続不能になるのに……」

香取さんがそう言うてくる。これは……褒められてるってことで良いんだよな？

「でも……回避が良くても駄目です♪ 今の私は仮想敵ですよ？ 相手が分かりやすい隙を晒しているのに撃たないなんて、随分と余裕があるみたいね？」

……隙？

「……まさか」

「ええ。さつきも、そして今も。相手が喋っていて動かないなんて絶好の機会ですよ。何故撃たないんですか？ ……あ、時間ですわね」

そう告げた後にどこからともなくホイッスルを取り出してそれを吹く。

制限時間が終わってしまった。

「……」

「私の被弾はゼロです。貴女は？」

「……」発貫いました」

ここで掠つたのはノーカンだつてことにしてもきつとバレる。何せ相手は確実に俺よりも長い期間戦い続けているベテランだ。嘘は見破られるだろう。それに俺だつて油断して近づいたっていうミスがあるんだし……ここは素直に答えておくべきだろう。

「なるほど。……では一度、戻りましょうか。昼食を食べながら反省会にしましょう」
「……ハイ」

そう返事をして横須賀鎮守府、もとい大本営に戻る。

……滅茶苦茶悔しい。

「——貴女は少々覚悟が足りないようですね？」

「……と言うと？」

俺は食堂で香取さんにお小言を言われていた。半目で俺を睨みながら淡々と箸を進める様は明らかに不機嫌だと分かる。

「今回は初めてだったのでまだ許しますが、演習、訓練の相手が見知った顔だろうと、仮想敵、深海棲艦だと思つて殺すつもりで撃つて来なさい。……その為の非殺傷の弾です」

「……仰る通りです」

ぐうの音も出ない程の正論だ。部活の先生も「練習で出来ないことが試合で出来る訳無いだろ！」って良く怒つてたし、しかも学校の部活動とは違つて生死が関わってくる。

深海棲艦相手を上手く殺る為に、深海棲艦に殺られない為に演習や訓練をするんだろ

う。……俺がやったのは手加減（紙めプ）に当たる行為だ。……これでは俺は勿論相手の為にもならない。……これは香取さんがキレ気味なものにも十分納得がいく。

「食後に少し時間を空けたらもう一度やりましょう」

「……ハイ」

「……それでも改善しないようなら、三回目以降は私は本気で貴女を沈めに掛かりますよっ」

「ッ！……ハイ」

「……それでは、午後の部を楽しみにしていますよ」

そう言つて食べ終わった食器を片付けに行つた香取さんを見送る。

「……沈めるつていくら何でも過激すぎんだろ……」

自分で言つた言葉にツボつて乾いた笑いが出てくる。

午後に向けてゆっくり考え事をしながら食べようか。

……取り敢えず分かつた事としては、不意打ちを多用してくるから、常に俺のペースで攻撃するつてことと、香取さんはブースターを付けていて速いが、攻撃能力は（多分）高く無いこと。だからノーガードで撃ち合えば多分俺が勝つだろう。

それからしばらくはどうやったらあの意外と短い間に十五回当たるか、それでいて香取さんから反撃を喰らわないかを考えていた。

「ズズ……… うえ………」

すっかり冷めて温くなった上に汁を吸ってブヨブヨになったうどんは最高に美味しくなかった。

「それでは、二回目の演習を始めます。今度は私を納得させられる動きをしてくれることを期待しているわ♪」

「ハイッ!」

昼過ぎ、俺は宣言通り始まろうとしている二回目の演習に来ていた。

食堂で色々と考えて来たんだ。今度こそこれでもかと言うほど弾を当ててやるから覚悟しておけ……。不味くなったうどんの恨み……。思い知れッ!

「では………始めっ!」

さつきと同じ始まりの合図——

「ああっ! やっぱり待って下さい!」

「え? ——ッ!」

俺は直後に放たれた言葉に反応して一瞬、そう、一瞬動きを止めた。

ただそれだけなのに……目の前にはピストルを向ける香取の姿がある。

「嘘……かよッ！」

言葉の意味を理解してフェイクだと判断して頭を砲でガードする、盾で培った功名か、砲を持つ手に衝撃が走った。上手く弾けたみたいで良かった良かった。

砲の隙間から前を見る。そこにはピストルを撃った時と変わらない体制の香取さんが居た。

……これならイケる。

「うおらッ！」

直ぐに砲を構えて撃つ。幾つか外れた弾が飛んで行って、分度器みたいになっているのが見えた。……だけどそんなことは今はどうでもいい。

「なっ!？」

いくつか当たったんだろう、少し怯んだ香取に向かってダメ押しとばかりに砲を撃つ。

「……………くっ」

……ちよつと声を漏らしたと思ったら横に移動されて弾が外れた。どうせだったらずつとノックバックしてて嵌め殺しにされても良かったのに……。

だけど香取さんはピストルを構えてない。対して俺はちよつと方向転換するだけで当てる事が出来る。

だったら撃つしかないだろ！

——カチ

「……………」

——カチカチ

「……………」

……………アレ？

……………弾が出ねえ……………故障した？

——…ピイイイイイッ！

あ、終わっちゃった……………納得出来ねえ……………。

「はい、終了♪」

「……………あの、砲^コ壊れたんですけど……………」

「今回は……………私の被弾回数は七回です。貴女は？」

あゝ……………どうだろ？ 弾いたのってノーカン？ 分かんねえな……………。

「……………ぜ「一回よ♪」……………ハイ」

「貴女が戦艦だったらその答えでも良いのだけれど、駆逐艦の貴女がそんな被弾を前提にする戦い方をしてはいけません」

「……………ハイ」

……………香取さん嫌いになりそう……………。だって俺、佐世保鎮守府で盾作って貰ったんだぜ

? それを全否定されたようなモンなんだけど!? ……認めたくねえ……でも返事はしておかないと……。

「それと、貴女に渡した砲は恐らく故障では無いわ」

じゃあなんだよ?

「ワザと弾を一杯に込められて無いだけよ」

衝撃の事実なんだけど。これってまさか、不意打ちと反撃に気を付けつつ、残弾まで気にしながら制限時間内に規定回数攻撃を与えろと?

……流石に厳しすぎるんじゃないかなあ……。

「……因みに、弾が抜かれている理由について教えてもらっても良いですか?」

「あら、簡単な事よ。弾が沢山入っていたら、考えなしに対象に向かって斉射する子がいるんだもの。今回の貴女みたいに♪」

「……」

これは……随分と厳しい教育……修行になりそうだ。

ちよつとした会話

「はい、そこまでね？」

「ハア……ハア……」

またダメか……。

疲れ果てた俺に投げかけられる無慈悲な終了宣言。今回も弾を早々に撃ち尽くしてしまい、合図の笛が鳴るまでひたすら逃げ回った。……疲れた。

「大分お疲れみたいね。今回の私の被弾は四回よ。……ちよつと虐め過ぎちゃったかしら？」

香取さんから実力を見せろと言われて始まった演習。始まってから半日、休憩を挟みながら延々と香取さんを狙い続けた。……そして今回、辺りが暗くなって来た頃に最後と言われて挑んだが……俺が疲れ果てて動けなくなったという何とも情けない結果で終わった。

言葉で動揺を誘い、制限時間で焦らせ、残弾で注意力を分散させ、ピストル型の取り回しの良さそうな武器で後の先よろしく反撃をかましてくるコンボを、俺は未だに突破できないで居た。

それでも最後の方は、俺が最初以降は香取さんの声に騙されないように合図が出るまでは一切を無視したのが功を奏したのか、騙すような声を出さなくなっていた。俺に通用しないと判断してすぐにそれをしなくなるなんてやつぱり香取さんは相当優秀なんだなって思った。

……俺としてはだんだん慣れて来た頃だったから「あくはいい。演技乙w」くらいの感覚で心の中で笑って無視できるようになったばかりだったから、せめてもうちよつと優越感に浸っていたかった。「フン、効かぬわ!」ってやつてみたかったんだけどなあ……。

因みに昼過ぎからは兎に角俺なりに試行錯誤をしていた。

ブースターを着けてやつと俺と同じくらいスピードだったから、更に速度を上げて翻弄しようとしてみたり、近接戦闘みたいにゼロ距離で撃ち合ったり、弾が切れたと嘘のアピールをして油断を誘ってみたり……。

それでも俺が考えたこれらの方法はまるで通用せず、派手に動き回る俺の何故か腕ばかりを撃ってきたり、嘘を見破られて「アレ? アレ?」ってやつてる間に額に撃ち込まれたり……。

「それじゃあ、もう大分暗くなってきたので戻りましょうか♪」

「……ハイ」

こうして今日の分が終了した。……一番多く当たったのが目標の十五に對して十二発だった。俺がいつもしたくないとか思いながら仕方ないって言ってやっちゃう自爆特攻。超近距離で十二発当てた代償は、俺も相当被弾してかなり痛い思いをしたこと。当然香取さんからは嚴重に注意された。

「明日も引き続き行うので、しっかりと休んでくださいね♪」

「……」

嘘やん。鬼かこの人。

こんなの絶対に練習とか訓練ってレベルじゃないと思う。試練だよ試練。ゲームとかで言うところのトロフィー取得の為の高難度クエストと同じタイプだと思う。

「……厳しいなあ……」

「何ですか？ ……そうですか。フフツ♪」

小さく呟いた独り言にまさか反応されるなんて思いもしなかった。慌てて何でもないですと言ったら未だ何か言いたげだけど、再び前を向いて大本營に戻り始める香取さん。

聴き取り難いけど、小さく鼻歌を歌っているから、不機嫌だという訳ではなさそう……むしろ上機嫌？

一体何故……？ まさか香取さんってDS？

「……」

「……」

そう考えてたら急に振り返って目をジッと見られた。いつかの夕張もそうだけど、なんで皆して俺の心読めるの？ 今回なんて目も合わせてないのになんで？ 怖すぎるだろ……。

「……ふう。久しぶりに誰かを教育しましたが……疲れますね」

「……」

食堂で香取さんが口を開き、また小言かと思ったら出て来たのは今の言葉。

……これってなんて相槌打つのがセオリー？ 無視は良くないだろうけど年寄り臭いなんて素直に言ったら間違いない瞬間一つする間にあの世に送られるだろう。……あ。

「お疲れ様です」

これだ。 無難な答えが出て来たことに安堵しフツと顔を緩める。

「……それにしても、スチュワートさんには驚かされました」

……うん、俺も驚かされた。目の前で綺麗に食事を進める香取さんも、海の上に出れ

ば勝てば官軍を地で行く戦士ソルジャーに早変わりなんだもんな。

佐世保のみんなはまだ遠征とか、出撃の休憩中くらいしか一緒に居たことはなく、緊張はあるもののガちな雰囲気じゃなかったから比べられないけど、それでも香取さんほどメリハリがしつかりしてる人はあんまり居ないんじゃないかな……。

「佐世保鎮守府に居た期間から考えると、ちよつと難しい課題だったと思いましたが、そう思わせない結果でしたね」

「ありがとうございます。実力を見せてくださいと言われたので……見れましたか？」
「ええ。勿論よ」

ほら、つい一時間前なんて微笑みながら俺に銃口に向けて来た人がこれだ。こうして休憩中には褒めてきたりアドバイスをくれたり、他愛のない会話をするんだから……。演習中の雰囲気とのギャップが凄すぎて萌えるを遥かに通り越して俺は不気味に感じるね。戦場で培われてきた狂気みたいなのを感じる。

……でも今の言葉のちよつと難しいってなんだよ。どう考えても “ちよつと” じゃないだろうよ。早撃ちの選手にでもさせるつもりか？ 一回 “ちよつと” の意味を調べてきて欲しい。

でもこうして褒めてくれるのは恥ずかしいけど嬉しい。我ながらチョロいと思うけど、ポッチ気質の俺だけど承認欲求は人並にあるんだよね。

「……ですが！ 何回も言いますけれど、被弾を前提に戦うのは良くないです。貴女はまだ知らないでしょうけれど、深海棲艦には姫や鬼を呼称に冠する強力な者も居ます。そんな彼らの攻撃力は高く、駆逐艦である貴女は、受けるのではなく、躲すことを意識しなきゃ駄目ですよ？」

「はっ……」

返事はしたけど頭の片隅に置いておくくらいに留めておこう。なんせ俺には妖精さんが作ってくれた盾があるんだからな！ どうしても行き詰った時に一旦盾を下ろして、その時に香取さんの教えを活かせばいいんだ。

強力な深海棲艦って……『艦これ』のイベントボスでしょ？ 戦艦水鬼とか北方棲姫とかが有名だっけ……。そうじゃなくても俺は駆逐棲姫相手にズタボロにされたり、軽巡棲鬼の取り巻き相手に頑張ったりしたんだけど……。

いやあ、今駆逐棲姫を相手にしてもまず勝てないだろうね。結局あの時は自爆特攻して、天龍達が助けてくれたんだっけ？ ……俺は駆逐棲姫にキルマークを付けることが出来たのか？ 次に天龍に会ったら訊いておこう。

香取さんとまた他愛ない会話を繰り返しながら麻婆豆腐を口に運ぶ。

うん、やっぱりこの舌が痺れるようなこの辛さと痛みが堪らない。やっぱり刺激的な

香辛料は最高だぜ。

昼のうどんには、これでもかと唐辛子をブチ込んでちよつと引かれたから、ラー油を足せないのと、温泉卵が付いてないのが残念だ。

「あら？　香取姉と……どちら様？」

「！　あつ……」

麻婆豆腐に舌鼓を打っていると、後ろから声が掛けられた。ビックリして豆腐がお盆に落ちて碎けちゃったじゃねーかよオ！　どうしてくれんのさ！

「あら、鹿島？　……この人はスチュワートさんよ。どうしたの？」

「初めまして。香取型練習巡洋艦二番艦、鹿島です。よろしくお願ひしますね♪」

「……こちらこそよろしくお願ひします。 たった今香取さんから紹介された、スチュワートです」

後ろから現れて俺の対面に座る香取さんの横まで歩いてきた鹿島さんを視界に入れた瞬間に悟る。

（あ、ヤツベエ……これは俺が関わっちゃいけないタイプの人だ）

なんというか……うん。香取さんだけならまだしも、この二人を同時に視界に収めた時に俺の精神がゴリゴリと音を立てて削れていくのが分かる。元男で童貞の俺には辛すぎる……。

よし、逃げよう。

「……お話したいのはやまやまですが、少々疲れてしまったので休ませていただきます。……それでは失礼します」

「あら、それじゃあまた今度ね。しっかり休んで、明日に備えておいてね♪」
「はい」

そう言つて椅子から立つ。後ろの席に座っていた憲兵の椅子にちよつとぶつかつてしまつた。

「あつ……すみません。」

「ごちうこそ、申し訳ない」

へえ。憲兵にも女性つて居たのか……。きつちりした黒い服を着て……下はスカートなのか。隣の人はなんかフードまで被つてゐるし……。変わった人も居るんだな。

ま、良いか。ちよつとつて言うには疲れすぎたけど、久々に身体動かしたから、今日はグツスリ寝れそうだ。

最悪の寢覚め 増える教官

「ハッ……ハッ……ハッ……」

ただ走る。止まる訳にはいかない。

唾液が乾燥して喉のどが粘つく感覚が気持ち悪い。脇腹が蹴られたように痛む。

それでも、隣に居る奴と一緒に逃げないといけない。

すれ違う人の、家々の窓から俺を見る顔を真っ黒に塗り潰された人の視線が気持ち悪い。

目すら黒く塗り潰されているのに何故か視線は感じる。

「アイツはどうなった!？」

俺がそう訊いただけで、振り返りもせず隣のコイツが答える。

「駄目だ! 全く変わってない!」

その答えでまだ終わらないのかと思う。

俺はコイツと一緒に逃げていた。

昔よく遊んだ公園を——

玉虫色の空に黒い雲が渦巻いている。

通っていた小学校の廊下を――

教室から黒く塗りつぶされたデカイ人影が俺たちを見てくる。外は夕暮れだった。

中学校のグラウンドを――

周りには昼休みにサッカーをする子供しかいない。人は多いのにぶつからない。

高校の体育館を――

走っても走っても入り口から出口まで辿り着かない。景色は流れるのに終わらない。

ただひたすらに逃げる。

……どれだけ走ったか分からない。それでも色々な場所を逃げたから相当な距離で追いかけてこをしたんだろう。俺たちは今、部活動で何回も来ている大きな総合体育館の用具室に居た。

跳び箱を背もたれにして、互いに息を切らせながら座り込んでいる。

――ギイイ……ガコン

俺たちがこの用具室を開けた時と同じ音がした。

「おいでなすつたみたいだぜ」

「……………(イ)までか」

目線を上へ向ける。足音も立てずに俺たちの目の前にソイツは立っていた。

「……」

俺たちを追いかけていた時は手ぶらだったのに、今は何故か日本刀を手に持ち、追いかけているときと変わらない無表情で、息も切らさずに無言でこつちを見ている。

逃がっている時は半ば直感的にだったが、実際に見てしまった今は確信した。

——殺される。

そう思った時には視界の隅が赤く染まり、生温く、どこか鉄臭い液体が大量に降り注ぐ。そして一緒に逃げて来た男の首が俺の前まで転がってくる。

「……」

「……」

転がって来た首を見る。

……鏡で見慣れた——前世の俺の首だった。

こんなことをしたやつ顔を見る。

……随分と見慣れてきた、妖精さんが作った艦娘の、スチユワートの顔だった。

「……」

視線を下ろして両手を見る。

まるで影が実体を持ったかのように真っ黒だった。

別のところ、腰辺りの服も、靴だつて真っ黒で、輪郭も曖昧だ。

俺は……

「今の俺は……誰だ？ 何だ？」

「知らんよそんな事」

転がっていた俺の首が笑いながら喋って、直後にスチユワートが一步踏み出す。

「……」

そして握られていた日本刀を振りかぶり――

「うわああー！」

飛び起きた。……なんかすつごい夢見てた気がする……。

「ハア……ハア……ハアアア」

とんでもねえ目覚めだ。ヤベエ夢見たつてことは覚えてるんだけど……。殺される

夢とか縁起悪いなあ……

「うええ……」

寝起きから汗だくとか……最悪かよ……。

「……疲れた」

おかしい……睡眠時間はガツツリ確保したはずなのに、なんで余計に疲れて起きるんだ？

香取さんから演習のお誘いがあるから二度寝も出来ないとか……やっぱ辛いわ。簡易的なシャワールームで汗を流して着替える。

そういえば謹慎させられてるけど、この部屋つて割と充実してるんだよね。娯楽が殆ど無いだけで。漫画とかの牢屋とかよりはよっぽど良い。中途半端に満足させて脱走されないようにしてんのか？

まあ俺は香取さんの言うことを聞いていれば出られるんだけどね！条件付きとは言え簡単に出られるなんて謹慎室の意味もあつたもんじゃねえな。

——コンコン

「スチュワートさん、起きてますか？」

おっと、噂をすればつてヤツ？香取さんのお出ました。

「はあ？」

そう返事をしながらドアを開ける。いつもいつも俺の手が空いてる時に誰か来るんだからなあ……。部屋の中透視でもしてんのか？

「おはようございます」……フツツ

言葉が被るなんてあるあるじゃん。でもなんか新鮮かも。

「コホン……今日も演習……と行きたかったんですけど、貴女に紹介したい人が居るので、そちらを優先しましょう」

紹介したい人？ 昨日の鹿島さんのことかな？ 逃げるように退散したから改めてつて事？ やっぱり鬼だわこの人。折角失礼を承知で逃げたのに強制エンカウントとか嫌になるわ。

まあ、どれだけ心の中で文句を言っても、俺に拒否権なんて無いんだけどね！

場所は食堂。朝食ついでに紹介するらしい。

……という訳で香取さんと朝食を食べる。

香取さんはパンにコーヒーや果物。俺は白米にベーコンエッグとコーヒー。

香取さんが俺のお盆に並んだものを変な目で見てくる……食いたい物を食って何が悪い！

「……昨日から思ってたんですけど、箸、お上手ですね」

「え？ ええ……。」

そりやあ日本生まれ日本育ちですから……って言葉を飲み込む。

そういえば傍から見たら俺ってアメリカの艦^{ふね}らしいじゃん。そんなのが超スムーズに箸使ってたらそりやあ怪しまれるよなあ!?

「練習しましたから」

ドヤ顔でそう宣言する。コレデヨイ……。何とかなる筈だ。

「そうですか……昨日の事と言い、一生懸命なんですな♪」

「えっ」

何が!? 確かに昨日は頑張ったけどさ？ 一生懸命って何さ!? 心当たりが無いん

だけど……。それに評価下すの早くね？ もうちよつと長い間観察してからしつかり

とだな……。

……まさかとは思いますが、中々Sの気がある香取さんのことだ、「一生懸命足掻いてカワイイ」くらいの気持ちかもしれん。

……もしかしたら箸の件も俺の素性をそれとなく聞き出そうと……? やはり侮れん。だが俺に悟られた時点で勝負は付いた。そうホイホイ大事な秘密を喋って溜まるか。

そうこうしている内に食堂に人が集まってきて、丁度食べ終わったから片付けをする。それでも香取さんが紹介したい人が来ないから設置されているテレビを見る。……そろそろ梅雨になるって……遅くね？ 今六月だろ？ 相変わらず『艦これ』世界の天気は分かんないなあ……。

「申し訳ない。待たせてしまったのでありますか？」

「……」

「スチュワートさん、昨日ぶりです♪」

暫くテレビを見て待っていると、昨日椅子ぶつけた憲兵さんとその隣に居たフードの人、そして鹿島さんがやって来た。

「あら、待っていたわ」

「ど、どうも……」

鹿島さんは来るだろうなとは思っちゃいたけど……なんか多くなあ？ それに語尾に「〜であります」って付ける人初めて見た……。テンプレなツンデレと同じようにリアルだと絶滅危惧種だとばかり……。いや、『艦これ』の世界なんだからキャラ付けの一つとしては問題ないのか？

「それでは紹介しますね？ こちらが昨日少し顔を合わせた妹の鹿島で——」

「改めて、よろしく願いますね♪」

「こつちの黒い二人の内、特徴が無いのがあきつ丸さん♪」

ひでえ……人間第一印象が凄い大事なのにこの紹介の仕方はひでえな……。

「ちよっ!? もう少しマシな紹介は無かったのでありますか!?!」

「そしてフードを被っている方が神州丸さんよ」

「よろしく願います」

「こちらこそよろしく願います」

赤ずきんが黒くなったらこんな感じにでもなるのかな? ……って目が死んで

るウーツ!? ……何か触れてはいけない過去とかありそうだからあんまり絡むのは止

めとこ……。

「あきつ丸さんと神州丸さんはなんと……陸軍の艦娘なのよ」

「……?」

なんで陸軍が艦を作る必要があるんだ……? まさか飛行船? 昔の人が考えるこ

とはよく分かんないなあ……。

「私たちもスチュワートさんに興味が出ちゃったの♪ だから香取姉と相談して、今日から私達もスチュワートさんを教育するわ。よろしくね♪」

マジかよ……。

どうやら、俺の教育はいつの間にか教官が増えて、特別強化プログラムになっていたらしい。

せつかく謹慎部屋から出られたと思っただらこんな日々が来るなんて……。

気持ちは問題

「いやいやいや、「興味出ちゃった♪」じゃねーよ。そんなことで俺を混乱させるの止めてくれないかな……。」

「えつと……どういふことですか？」

「あら、鹿島が言つた通りよ？ 彼女たち三人も、貴女の教育に混ざるからよろしくねつてこと♪」

マジ!? 一人目の香取^ホさん^スすらクリアしてないのにおかわりとか冗談じゃねえぞ……。マジ震えが止まらねえからよ……。

「……私は貴様、スチュワートに近接格闘、ひいては提督殿、要人の護衛の仕方を教える」
相変わらず死んだ目をキリツとさせる神州丸さん。

……きつと過去に要人警護で大切な人を亡くしたんだらうな。俺にはよく分からなけれど、きつと根性論とかは一切出さずに、経験に基づいた実践的な訓練になるだらう。

「私は、書類仕事を教えさせていただきますー！」

どこか嬉しそうに俺を見ながら元気にそう宣言する鹿島さん。

俺は玩具じゃないから、新しい玩具を前に我慢できない犬みたいな目で見ないで

……。そこはかとなく不安だけど、香取さんが止めないってことは変な教育にはならないだろう……。ならないよね？

「自分は「特に無いわね♡」そっ……。そんなこと無いのであります！ 自分は——」

何故か焦ったようなあきつ丸さんにやいのやいのと何かを言っては盛り上がる四人。俺は輪の外に弾き出されてしまった。……。これが悲しきかな、ボツチ気質の宿命なのよね……。

「えつと……。有難いんですけど、なんでこのタイミングなんでしょう？」

これは訊いておきたい。……。だって昨日の時点で鹿島さんとは接触してないし、神州丸さんは顔を合わせてないし、あきつ丸さんなんて椅子がぶつかったただけだ。一体どこに興味を持つというのか、コレガワカラナイ。

「昨日スチュワートさんが休んでる間に、提督さんと私たちがお話する機会があったの。そしたらスチュワートさんが新しく設置されるその初期艦に選ばれたって聞いたの！」

「あつ、そうですよね……」

選ばれたってなんか誉れある何かっぽくない？ それよりだったら何方かと言うとお仕置きの意味で行けって感じだし、一年は出撃も出来んし……。それは当事者の俺と、決めたあの人くらいしか知らねえよな。

でも、俺に興味が出たって言うのはそういうことだろう。新しい秘書艦がどんなヤツか見定めてやるって意味か？ ……やっぱり香取さんの妹か。仄かにただよふ S のかほりがするぜ……。

「だから、私たちでスチュワートさんを完つ璧な初期艦にしましょうって決まったの！」
あゝ……うん。俺を忙殺しに来てない？ せめて影分身とか使えたら全部簡単に熟せるんだろうけど……そんな人間じゃないし、そもそも生物ですらそんなの出来なさそうだからどつちにしろ無理だね。

「その時に私が書類仕事を——」
「私が戦闘を——」

「自分が「あ、あきつ丸さんは昨日も言ったように教える事無さそうだから挨拶も済んだし、帰っても良いわよ？」あ、あんまりであります！」

……あきつ丸さんには悪いんだけど、滅茶苦茶イジられてるのは、見てる分には愉しいから介入はしないことにした。それにしたって不憫ポジとか……実は結構美味しいポジションに居るんじゃないかな。

「………そうです。もっと抜いてください」

「……これ以上は、無理です……ッ……!?」

神州丸さんの吐息が耳に掛かって、くすぐったさからまた体が跳ねて注意を受ける。

「……もつと意識してください……そう。姿勢はそのままに」

ピタリ、と意識して動きを止める。

「……」

俺は神州丸さんに連れられて畳張りの部屋に連れてこられていた。

衣草イグサの、畳の香りがジャパニーズブラッド、ヤマトソウルを刺激する。

しかも目の前、ではなくほぼ密着状態で俺の腕や肩を掴んで揺すつてくる美少女神州丸が居るとなると、訓練なんて頭の中から飛んでいく。男の心を持つヤツはもつと別のナニかも刺激されるだろう。

むしろ緊張して力が抜けないんだが!?

それは俺も例外ではなかった。友達付き合いの悪友の肩組みとかそういうのじやないとなると、童貞で自称コミュ障の俺に、このシチュエーションはハードルが高すぎる。

「やつと力が抜けて来ましたね……」

「……ちよつと窮屈さを感じますね」

「始めたばかりなので仕方ないです。最初から上手い人なんて居ないんですから……シッ!」

「!? ……え？」

神州丸さんが掛け声？ を上げて一拍としない間に拳が目の前で寸止めされていた。

俺の口からはマヌケで呆けた声しか出てこない。

油断していた言ったら言い訳になっちゃってしまうな。

……そうだ。これはあの香取さんが選んだ三人の人物からの教育だった……。香取さんよりは多少難易度は低いでしょ……。みたいな甘い考えを、なんか訓練って雰囲気か神州丸さんとの距離が近い所為であんまり感じないんだよなあ……。みたいな弛んだ思考を、光の灯らない目で見透かしたとしか思えない動きだった……。

「……………」指導よろしくお願ひします！ 師匠！」

つい、ノリで言っちゃった。

「~~~~ツ！」

顔を真っ赤にした神州丸さんに一本背負い？ されて悶絶した。

死んだ目と無表情がデフォルトなのにあんな顔もするとか……。ギャップってすげえな。超絶チキンの俺が柄にもなくドキッとしたね。

「午前中は神州丸さんの訓練、お疲れ様でした！」

そして午後は鹿島さんから書類仕事の教育……ってこんな眠くなるに決まっとるやろ！俺は今日夢見が悪くて睡眠不足気味なんでね。それに午前中は訓練でずっと座りっぱなしか、力を抜くために頑張ってたからね。

しかもそれに加えて静かな部屋、食後、心地良い日差し……フルコンボじゃねーか！私が教えるのは書類仕事です！ スチュワートさんは確か、佐世保鎮守府に居たんですよね？」

「はい、そうですね」

「そこで秘書艦って経験しましたか？」

「え？ あ、はい」

確か提督に淡々と一時間毎に時間を知らせて、飯を用意したり、身の細々をやって、負担を軽くする他にも、護衛的な意味があるんだっけ？ 確か激辛カレーをな……フーフ。今度の新しい提督サマにはどんなものを……って鹿島さんが凄く驚いてらっしゃる。

「えっ嘘っ!？」

「?」

一体何？俺が佐世保で秘書艦するとなんで驚かれるの？

「そ、それじゃあ私は何を教えたなら……え、えくつと……書類仕事について分からないこ

ととか、訊きたいことはありませんか!？」

え? 何でそんな必死なの? 俺なにか変な事したっけ?

……でも何も質問しないっていうのは意地悪なのかねえ……あの様子だと絶対に何かしらの質問しないといけなさそうだし、何でもいいから何か質問してください”
つて顔に書いてあるし……。

……あの慌てよう、まさか……。

「か、鹿島さん?」

「はっ、ハイ!」

「ちよつと言いいにくいんですけど……まさか、新人さん?」

「うっ」

そう一瞬呻き声を上げて後ろに半歩下がった鹿島さんの目が凄いい勢いで泳ぎ始めた。きつとデフォルメで今の鹿島さんを絵に描いたら間違いなく顔は真っ青で目はグルグル状態だろう。

……ちよつと香取さんの気持ちがあつちやつたかもなく。

香取の妹

「うっ」

そう一瞬呻き声を上げて後ろに半歩下がった鹿島さん。

凄まじい勢いで泳いでいる目と明らかに落ち着きを失って揺れる体を見て、香取さんが弱い者イジメ……もとい “ちよつと” 追い詰めることを繰り返すのか分かったような気がする。

……うん、これは愉たのしい。

一度手を出せば病みつき必至、二度目で中止められない毒、三度もやれば死止まらないに至る素敵な優越感と
言う名の毒快樂が摂取出来るんだもんな。

煙草や酒を止められないおっさん達とか、弱い者イジメをする小学生と同じだ。人間、痛みには滅法強くても快樂には耐性が無いって何で知った知識だっけ……まあいいや。

「あの……鹿島さん？」

「なっ、何でしょう!？」

そろそろ落ち着いて欲しいんだけど……。なんで俺が秘書艦経験あるっただけでこ

んなに動揺されるとこつちが悪い事したみたいじゃん。

「……そろそろ落ち着いてください。秘書艦経験があるからなんだっていうんですか」

「それは……」

「香取さんがダメって言わないなら、鹿島さんも優秀な教官なんじゃないですか？」

「……」

ヤベ……俯いて黙っちゃまったよ。嫌味に聞こえちゃったか？ でも神州丸さんも可愛い……すげえ強かったし、きつと鹿島さんもパツと見新人っぽいけど間違いなく優秀だろう。

俺の前に教官^{先生}として立ってるってことは誰かに「教えても良い」って評価や判断されてるって事で……教師になる為には相応の努力や資格、知識諸々が必要な訳で……教師のハードルってやつぱり高いんでしょ？

「……ですよね。」

おつと何か言ったか？ 聞き逃しちゃったぜ。

「そうですね！ 香取姉からもお墨付き貰ったんだし、この程度では挫けません！」

わあ。突然元気になった。……ヤケクソじゃないよね？ 俺だつて教えてもらうなら意気消沈した人より澆刺とした人から教えてもらう方が良い。……「諦めんなよお！」なんて言い始めない限りは真面目に教えてもらおうそうしよう。

「そうと決まれば早速……準備したこちらの書類を——」

「えっ」

なんだあの量!? 一センチはあるぞオイ! 冗談だろ?

「こちらの紙に書いてある条件に従って捌いてください。」

そう言つて一枚の紙を渡してくる。

- ・ 全ての紙にサインを記入すること
- ・ 例外として薄い青の紙はサインを記入せず纏めること
- ・ 同じ内容の紙が三枚以上ある場合それらは捨てても良い
- ・ 十分置きに時間を伝えること
- ・ 私が話しかけたら会話をすること
- ・ 分からないことは私に訊くこと

面倒くせえ……。

「えつと……質問良いですか?」

「はい、どうぞ」

「制限時間はどれくらいでしょう?」

「全て捌ききるまでの時間を計ります」

うわ……苦手なヤツだ。でもゴールラインが見えるだけまだマシだろう。

「……筆記用具はどこにありますか？」

「こちらをお使いください」

ザ・普通のボールペンとメモ用紙？ の紙を複数枚渡された。傷も無いから恐らく新品だろう。

「……他に訊きたいことはありませんか？」

「どのくらいで終わらせると良い感じでしょうか」

「それは……秘密です♪」

あゝあゝ あああー！ そのくらい教えてくれても良いじゃんモチベーションに関わるからー！ そういえば鹿島さんは香取さんの妹じゃん！ ちよつと意地悪なところがそつくりとかなんなのさ！ この鬼！ 悪魔！ 香取さんの妹！

「……分かりました」

だが今はちよつと我慢しようじゃないか。艦の記憶云々を抜いた精神年齢だけならそんじよそこらの艦娘よりも高い筈だ。…… 〃今は〃 つて付くけどレディーなんだから無闇矢鱈とキレ散らかしたりしないようにしよう。

「準備は良いですか？」

頷く

やってやるよ。如何にもこういったことから逃げ出して遊びだしそうな卯月を始め

とする駆逐艦とは違うことを見せつけてやるぜーッ！

「では……始めっ！」

▼
凄いです……。

素直にそう思いました。一度でも秘書艦を経験しただけあつて凄いスピードで書類を捌いていっています。

元からこういうことに慣れていいますか適性があると言いますか……。
ちよつと悔しいですけど、作業のスピードだけなら私よりも速いかもれません。

「十分が経過しました」

そう考えている内に十分が経ったみたいです。書類の山はまだありますけど、処理が終わつて纏められた書類も多くなってきました。

そつと後ろに移動して手元を覗き込むと、メモ用に渡した紙に汚く、癖のある字で色々なメモが書いてありました。見る見るうちに紙に正の字が増えて、ゴミ箱に恐らく重複したであろう書類が丸めて投げ込まれていきます。

さて、ちよつと話しかけてみましょう。

「スチュワートさんは、随分慣れているみたいですね」

すると肩が跳ねて私の方に振り返り「うわあっ！」なんて言ってから溜息と同時に空

気が抜けるように脱力してしまいました。

驚かせてしまったようです。反省しなければいけません……と言うよりはこんなに驚くくらい私の存在を忘れ去っていたのでしょうか。もしそうなら素晴らしい集中力だと思います。ちよつと分けて欲しいくらいです……。

「フウ……そうですねえ……反復作業や流れ作業は嫌いじゃないので……では、作業があるの？」

……やっぱり性格的に相性が良かったみたいです。私は反復作業や流れ作業はあまり好きではないので、スチュワートさんの気持ちを理解するのはちよつと難しいですけど、きつと楽しさや面白さを見つけて楽しんでたりするんでしょう。……隣の芝は青く見えるってこういうことを言うんでしょうか。ちよつとスチュワートさんが羨ましいです。

——コツコツ——カサカサ

「……」

——クシヤクシヤ——ゴツ——ガサ

「……」

スチュワートさんが書類越しにボールペンで机を叩く音、紙が擦れる音、偶に紙が丸

められる音、どれもこれも眠気を誘うものばかりで、昼食後ということもあってとても眠いです。ちよつとウトウトしてしまいました。

……もしかしたらうたた寝くらいはしてしまつたかもしれないかもしれませんが、もしそうならスチュワートさんに気が付かれていないことを祈るばかりです。

「スチュワートさん、少し休憩しましょうか」

「……もうちよつと待つて下さい、そろそろ終わるので。……はい、終わりました」

「え？」

……速くないですか？

「因みに開始からえゝつと……四十分経過してますね」

「嘘っ!？」

ああどうしましょう。うたた寝してしまつたみたいです。教官である私がこれではスチュワートさんに示しが付きません……。

……というか、四十分経過の時点で終わつたつて……やっぱり作業が速過ぎます。

しっかりと分けられた書類を受け取つて確認していくと、きちんと全てにサインが記入されています。こっちの方はちよつと癖があるもののキッチンと書かれています。

ゴミ箱には重複した書類が丸められて沢山入っていますし、書類の数も……合っていますね。

「時間経過の声を聞いてないんですけれど……」

そう！ スチュワートさんには悪いけれど、それさえあったら私も寝ないで済んだと思います！ 条件の一つを満たしていませんし、少しくらい怒っても良いと思います！

「それは……鹿島さんが気持ちよさそうにしてたのでそつとして置こうと……」

「うっ……」

ダメです。寝ちゃった私が全面的に悪いので何も言えません……

香取姉……助けてください。スチュワートさんに教えることが……ありました。

「不合格です」



「不合格です♪」

「えっ」

嘘やん。俺めっちゃ頑張ったのに不合格？ おいおい鹿島さんや、意味わかんねーこと言わねえで、合格つて言ってくれせえ！

途中に寝てるの起こさなかつたから？ それとも平均より遅い？ それとも重大なミスでもやっちゃったか？

「……理由を訊いても良いですか？」

「はい。スチュワートさんの仕事はとても速く、結果だけなら満点に近いです」

「……………」

なんでそれで不合格なん？ 満点に近いんでしょ？ だったら合格にしてよ。名前の記入欄とか見当たらなかつたから名前未記入で零点なんて無いだろうし……もしくは一発合格は許さんつてヤツ？

「……スチュワートさん。なんで不合格にしたか分かってますか？」

「分かりません」

分かるかよ。即答だよ。俺は出来る限りの力を使って超スピードで書類を捌いた。それは褒められるべきことで、決して悪い評価に繋がるものでは無い筈だろう？

「スチュワートさんの仕事には華がありません」

「はい？」

どーゆーことだ？ 仕事は仕事だろ？ 今回は作業だったけど、どこに華が必要になるってんだ。茶道や華道、お茶会みたいなものが求められるとでも言うつもりか？

「一緒に仕事をして楽しい、心地よいと思わせることが出来るようになるまで、私はスチュワートさんに合格を出しませんからね！」

「えっ」

「作業の速さと正確さは文句無しなので、課題が丸見えですね♪ これから頑張りましょう」

「……」

「頑張りましょう！」

「……ハイ」

やはり香取さんの妹だ……。一筋縄では合格をくれないってことか。
まだまだ教育は続きそうだな……。

あきつまる（動詞）

	じ	か	動	は	人	
	ば	ね	ら	や	て	め 褒
	せ	み	て	せ	さ	
て	せ	か	聞	て	つ	言
			せ	み	て	つ や

そんな名言がある。確か山本五十六って人の言葉だったような気がする。
 う。どんな意味かは調べた訳でも無いからよく分からないけど、きつと言葉の通りだろ

口だけであれこれと指示するだけして後は放置……なんてことはせず、手本を見せてから説明して、試しにやらせてみて良いところは褒める。そうすることでモチベーション

ンを維持させることで人は働うくつていう意味だろう。

教わる人だけではなく、教える側の人間にもしつかりと教えようとする心構えと情熱が必要だと、俺はそう解釈する。

……いきなりこんなことを考えるなんて、遂に気が狂ったかと言われそうなものだけど、俺は今、椅子に座ってコーヒーを飲んでた。

どうしてこうなったかと言うと、一度鹿島さんが俺を提督だと想定して秘書艦をやらしく、それを見て俺がいかにクソだったかを見ろつて感じのことを、オブラートに包んで言ってきたからである。

因みに今飲んでいるコーヒ―は鹿島さんが淹れた滅茶苦茶濃いヤツだ。味は悪くない……というか普通に美味しい。……ちよつと苦すぎるような気もしないでもないけど、濃いめつて言つてたしこんなものだろう。

「提……スチュワートさん、眠気覚ましの珈琲のお替りは要りませんか？」
「え……大丈夫です」

ここで要るゝなんて言えるヤツおる？ もし居たのならソイツは日本遠人離じゃないか、精神構造が並の人間のソレじゃないかの二択だろう。

「分かりました。飲みたくなつたらいつでもお声がけくださいね♪ あ、時刻はヒトナナマルマルになりました！」

……どんだけコーヒー推してくるつもりなんだ……。自分寝ちゃったからって俺にまで特濃コーヒーが出て来るとか……。眠気覚まして絶対嘘だろ！ ヒトナナマルマール……。午後五時に眠くなる訳ねえだろ仕返しのつもりか？ だとしたらミルクや角砂糖よりも甘いぜ。

ガチで狙うならカフェイン中毒にすれば良いのに……。有無を言わず前にドンドン置いていけば飲まなきゃって使命感に駆られてしまうのが日本人。あつという間にカフェインでハイになるか、トイレに籠って出てこれなくなるに違いない。

まあ、身内で潰し合うなんて、Smash^{兄弟} Brothers^激じゃないんだし……。深海棲艦っていう敵が居るんだしそんな馬鹿な事する人は居ないだろう……。いや居たわ。あのクソ野郎がな……。

「どうかしましたか？ 何か殺気のようなものを感じましたが……」

ヤベ。鹿島さんに気付かれたわ……。落ち着け、落ち着け俺。今は鹿島さんの秘書艦をしつかり見て置かないといけねえんだぞ……。……。

「フウ……。何でもありません。お気になさらず」

「そうですか……。では、なにかお喋りしましょう。スチュワートさんのこともつと知りたいです♪」

ウエツ!? グイグイ来るなあ……。話題話題……。あ。

「そういえば、あきつ丸さんって何を教える人なんですか？」

「それが……私にも分からないんです。あきつ丸さんに話を伺おうとする度に横槍が入ったりするので……香取姉も教えてくれませんでしたし……」

「横槍って？」

「〃何故か〃 近くで職員さんが書類を落としたり、クシヤミの音で聴き取れなかったり、呼び出しの放送で遮られたりする……」

「ええ……」

何それ……タイミング悪いっていうレベル超えてね？ ギャグ時空でも生成してんじゃねえの？

「あきつ丸さん自身は特に何もしていないんですけど、不思議ですよね」

「ええ……」

「あ、これで最後ですな♪ ……はいっ、終了です」

ありや、結構時間経つの早いじゃん。……これが、鹿島さんのいう「華」の力……？ 「スチュワートさんも作業ばかりではダメです。提督との雑談などにも意識を割いても良いんです。気を張って集中することが悪い事だとは言いませんけど、ずっと集中し続けられる人なんて居ないんです。それに、大型作戦のや緊急事態ではない限り、そこまです書類は多くないので、急いで終わらせても時間を余らせるだけになりますよ？」

「……」

それもそうだ。前に秘書艦やらせて貰った時だって、結局午後は殆ど提督から色々教えてもらうだけの余裕があったし、それほど忙しくは無いのかもしれない。

……いや、さっさと終わらせて自由時間を作った方が良いのでは？ 提督だってプライベートな時間は欲しいだろう。……よし決めた。俺は鹿島さんの言うことは話半分くらいで聞いて、この場だけは合格を貰えるようにしよう。俺は提督のプライベートを気遣う優しい初期艦になってやるぜ！

「……今日はもう中途半端な時間になったので、ちよつと早いですけど夕食にしましよ
うか♪」

「はい」

「……そういえばなんですけど、スチュワートさんって料理は作れますか？ 苦手だと
言うなら教えますけど……」

「あ、作れますのでお気遣いなく……」

ただし香辛料マシマシだけだね。

「む？ 鹿島とスチュワートでありますか。些か早いようですが……」

食堂にはあきつ丸さんと、同じ制服を着た比較的若い男女が沢山居た。

……なんの集まりだコレ？ 明らかに小中学生っぽいのも混ざってるように見えるんだけど……。

「ちよつと中途半端な時間に一区切りついちゃったので……」

そう言つてアハハと小さく笑う鹿島さんと、それを見てじゃあ仕方ないねつて感じの顔をするあきつ丸さん。

「それじゃあ、私が夕食取つてきますね♪」

去つていった……。香取さんはゲテモノとか食べなかつたし、きつと鹿島さんに任せ
ておいても変なのは採用しないだろう。

「あの……」

食堂にいる大勢の人が気になるから訊いてしまおうか。いつも「何をしているか」を
訊くとダメみたいだけど、「アレはなんだ」くらいなら全然セーフだろう。

「あきつ丸さん……あの人達つて一体何なんでしょう？」

「あれは……s 「おいっ！ ふぎけんなよ！」」

「!？」

なんだなんだ？

「お前が——」——うるせえ！」とか聞こえてなんか穏やかじゃないとは思うけど、

今の俺と同じように何事かと立ち上がってる人が多すぎて喧噪の中心が見えない。聞こえる声の高さからして中学生以下なのは間違いないだろうが……。

そうこうしている内に周りから同じ制服を着た人たちが集まってくる。……どうやら俺たち、と言うよりはあきつ丸さんの座っていた場所が悪かったのか、前後左右を人で固められて身動きがし辛くなってしまった。

「スチュワートはちよつとここで待っているであります」

そう言い残して野次馬と化した人や人の間を縫うようにして消えていったあきつ丸さん。

……忍者かな？ 都心の通勤ラッシュ並に人が集まってたと思うんだけど……。

しばらく待ってたら人が散っていくような足音と共に喧騒が止んだ。

俺は疲れたし、どうせ見えないからと椅子に座って机に突っ伏していた。

「戻ったので……寝てるのでありますか？」

「……起きてますよ〜」

そう言いながら起き上がる。

「鹿島があちらの席に夕食を用意したみたいであります。移動しましょう」

指された場所には豪勢に見える夕食をテーブルに展開して俺たちの方を向いて手招

きしている鹿島さんの姿がある。

「はい……そういえば、結局聞きそびれましたね。あきつ丸さんが何してるか」

「自分は——」

あきつ丸さんがそこまで言ったとき、すれ違った人を死角にして出て来た人とぶつかってしまった。……つて

神州丸さん
「師匠!? ゴ、ごめんなさい!」

「私は教官だが、貴様の師匠になった記憶は無い。……それにしても、油断していた訳ではないがまさかぶつかってしまうとは、こちらこそ済まない。……まさか貴様、あきつ丸に何をしているのか訊こうとしていた訳ではあるまいな?」

「ヒエツ……」

何故バレたし。

「……やはりそうか。……一つだけ言っておく。痛い目に遭いたくなかったらこれ以上あきつ丸に何をしているのか訊くのは止めた方が良いだろう」

相変わらず光を灯さない目が一段と冷たく突き刺さるような感覚がする。……怖い
が過ぎる。

「……ハイ」

「私の意志は無視でありますか!」

「今まで、下された指示書と関係者以外に、自分が何をするのか教えることが出来たと言えるなら考えてやる」

神州丸さんがこんなにも警戒するとか……。あきつ丸さんは俺もちよつとだけ知ってるSCPである可能性が微粒子レベルで存在している……。？

その後、懲りずにもう一度だけ訊こうとした時には、誰かが財布をひっくり返したのか硬貨が散らばる音が聞こえて、食堂が静かになったから、結局訊くことは出来なかった。

突撃！ 佐世保の駆逐艦

香取さん、師匠神州丸さん、鹿島さんの三人からの教育が始まって早くも一週間で経とうとしている。

相変わらず香取さんの目標には僅かに届かず、一部の人達が喜びそうな顔で「うふふ♪ 惜しかったわね♪」なんて素晴らしい激励の言葉を貰い続けている。一応目標の十五回は達成したことは何回かあるけど、そしてら弾数難易度を上げられたを減らされた。それからはさっきの通りだ。

神州丸さんの背は遙か彼方で、先日「一週間で達人に成れる訳無いじゃないですか」なんて言ったら無言でぶん投げられて滅茶苦茶痛い思いをした。

冗談ですよ神州丸さん……一週間で達人とか精神と時の部屋じゃあるまいし。

秘書艦仕事は……合格を貰えた。鹿島さんはチヨロかったぜ。

だけど気を遣いに遣って……クソ大変だった。接客でもないのにあんなに気を遣ってまでゆっくり作業する意味がどうしても解らなかつたから鹿島さんに質問したら提督さん提督さんと言っていたので納得した。

『艦これ』の世界だもんなあ……艦娘がまともな提督に好意を持つのは当たり前……

なのか? ゆっくり作業するのは好感度……もとい好意からなる何とやらで、一緒に居たいってヤツか? 雑談しながら仕事をしてストレスや退屈を紛らわすのは分かる。だからと言って仕事をゆっくりしても良い理由にはならない筈だ。

そして今日は休み……って言うか、元々何もなかった所に教育が捻じ込まただけで本来何も無いから元に戻っただけなのか。

偉い人から呼び出しが掛かったから教育が無くなったのが理由で、指定された時間まではぶつちやけ暇なのである。

「目覚まし時計が有ったならなあ……」

溜息を吐きながら呟く。

海の上で動き回り銃砲を乱射し、数時間は達人と柔道だか空手だか合気道なんだか分からないもので気を張らせ、椅子に座れば笑顔を顔に張り付けてコミュ力お化けの鹿島さんとお喋りしながら書類課題を捌く。

こんな生活が一週間も続けばいくら艦娘の体と言えども相当な疲労が溜まるもので……ぶつちやけ疲れを取る為に二度寝……ないし昼寝したい気分だ。だけど約束の時間に遅れるのが怖くて寝れないとか、遠足前のガキかよ……。

——ドンドン

「はっ!？」

こんなに乱暴にドアを叩く人知り合いに居ないし……勿論新聞配達や宅配便ではないだろう。

クツッ怪しいけど覗き窓なんて無いしなあ……。

「お邪魔します! —— ぽいっ!」

仕方ねえなあ……って感じでドアノブに手を掛けた途端にナニコレ?

ドアが開け放たれ、直後飛び込んできたのは大声を上げてダイナミックお邪魔しますしてくる侵入者。

「は?」

頭が事態に付いていけずに——衝撃——ツ!

尋常じゃないくらい痛かった。まるで大型犬のハグくらい。

不意打ちを喰らって無様に吹き飛ばされた。

「グエツ」

神州丸さんからの教育の成果か、良い感じに受け身を取ることが出来たから、後頭部の痛みは思ったより少ない。……これだけでも護身としてはかなり有用だと思うんだけど、神州丸さんはまだ合格をくれない辛口判定。……嫌いじゃないけど、一体俺に何を目指せと言うのか……。

「(ぎょ)ごめんなさい……っばい?」

……ぼくない。もっとしっかりゴメンナサイして。自動車は相手に怪我が無くてもぶつかっただけで大問題なんだぞ。

「はい。大丈夫です……夕立さん? 入る部屋間違えてませんか?」

「大丈夫っばい! 夕立、間違えたりなんてしてないっばい!」

侵入者——夕立は相変わらずこの時空^{創作や現実}でも賑やかだ。元氣一番。白露の姉貴にも引けを取らないとは江風の談だったか。

……でも間違えてない “っばい” って……そこはかとなく不安を煽るからちゃん確認してから凸って来て欲しい。

「えっと……じゃあ私に何か用事が……?」

「うんっ! 今日、此処の艦娘達と合同演習っばい! だからさ、スチュワートさん!」

ええい五月蠅い! 至近距離で大きな声で話すでないわあ! ……余りある元氣な声と一緒にやろくって副音声が付いているように聞こえるのはなんでだろうな? ……遊んで欲しい犬みたいな反応しやがって……全く。

あと俺の名前が出て来たってことは間違いなく佐世保の夕立だろう。……まさかワシマンショーなんてするつもりじゃないだろうし、他にも佐世保から何人かは来ると

思うけど……誰だよ夕立のリード手放したヤツ。

「夕立さん？ 独りで行動してはいけません。それに元々此処には来るつもりはありませんでしたし、あまり迷惑を掛けては——」

噂をすればまた艦娘が来たみたいだ。入口と俺の間に夕立が立っているから誰が来たのか分から——分かった。夕立の影から顔を出したのは神通さんだった。

「スチュワートさん……」

「……ちよっ!?!」

いきなり俺の名前呟いたかと思ったら真顔で涙流し始めて——
抱き着かれた。

……ちよつといいっすか？ まずは一言、ナニコレ？ さつきからずつと神通さんが謝ってくるんだけど……助けて夕立イ!

「神通さんは前の人をどうにも出来なくて、スチュワートさんに全部やらせたことを深く後悔してるっばい。……だからしばらくそのままさせてあげて欲しいっばい」

……俺が悪いの!?! アイツじゃなくて!?!

……あ、香取さんも来た。夕立が騒いだから来たんだろうな。

「賑やかで良いわね〜♪ なんの騒ぎかしら?」

「[[……]]」

ハッ!? 気を失ってた……。香取さんが相変わらず怖過ぎるけど言いたいこと言わないと。

「香取さん、夕立が私も合同演習に混ぜて欲しいみたいなんですけど……。駄目ですか？」

「ここだ! 喰らえ鹿島さん直伝の何時使うか全く分からなかったおねだりの視線!

「……」

「……」

自分で使っておきながら嫌になる。ほら見る俺の表情筋は既に限界寸前なのに、香取さんは微動だにせず絶対零度の視線で俺を見降ろしている。……鹿島さん? どんなヒト提督もイチコロって言ってたじゃん。話違くなあい?

「……」

「……ハア、分かりました。」

折れた! もうダメかと思つて諦めかけたらOKが出た。疑つてごめんよ鹿島さん……妹直伝だつて言うのは多分バレてるだろうし、後で変な事教えたつてことで香取さんに怒られてくれ。……俺は見本と使用例を言われただけだし……。

香取さんの一言を聞いてちよつと安堵した俺、パアアつと花が咲いたように笑顔に

なつていく夕立、ようやく俺から離れてただ申し訳なさそうな目で俺と香取さんを見てくる神通さん。そしてそれらを確認して小さく溜息を吐いた香取さん。

「……スチュワートさんは今日の午後、呼び出しがあつた筈です。それに間に合うなら私は演習参加については何も言いません」

おお、これは僥倖。おめでどう夕立、念願の俺との演習が出来るそうだぞ。俺としては『艦これ』の駆逐艦詐欺レベルの火力からタコ殴りにされるの怖いんだけど……。今は盾持っていないからやわらかタンクなんだよ……。

「……それでは佐世保鎮守府からは、神通さんと夕立さんを含めた計六人で宜しいですね?」

「あの……はい、お願いします……」

立ち直つたのか、会話の主導権が夕立から神通さんに移る。……計六人つて結構居るなあ。他の四人は誰なんだろう?

『艦これ』では戦艦や空母は資材を大量に消費する……らしい。資材が少ないところはグロ画像なんて言われるくらいだし……『艦これ』が現実になつてもきつと強力故にコストの重たい艦種は合同演習なんかにはホイホイ参加なんてしないだろう。

……そう思っていた時期が私にもありました。

俺の隣には香取さん、鹿島さん、神州丸さん、あきつ丸さん、そして白い水着の誰かさん。

そして対面の列は、神通さん、時雨、夕立、満潮、伊26? さんと……赤城さん。

集合場所? に着いて赤城さんを見た時には目と頭と常識を疑ったね。香取さんの驚き顔なんてスパーレアまで拝めちゃうなんてよ。……やつぱりおかしいだろコレ。

そして俺たち側に居るこの白いのは誰だよ。初めて見るんだけど……。

「まるゆの予定も空いていて助かったのであります」

「いいえ、全然大丈夫ですっ! 頑張りますね!」

「……どちら様なんです?」

「あの子は陸軍出身の潜水艦よ♪ 仲良くしてあげてね♪」

ええ……何やってんの陸軍。陸上で潜水艦が使える訳ねえじゃん。それでもマジで潜るってんなら……

「地中……土竜モグラかな?」

「今……今モグラって……グスツ……あんまりですう〜!」

……地雷だったの? そんな泣きそうな顔しないでよまるゆ? さん? ……滅茶苦茶語感悪いなあ……。

やるからには勝ちたいけど、こんなので勝てるかなあ……。

「スチュワートさん」

そう思つて夕立に乗せられたことを若干後悔してたら赤城さんに声を掛けられて、振り向いたら……

視界が真つ黒に染まった。

「はえ?」

「……私が無理を言つて合演習に來たのは貴女を打ち倒すためです。……ですから、これを」

黒。それが俺の盾だと理解したのは、盾を突き出した赤城さんが、盾を引つ込めつつ下に降ろして俺の視界が開けてからだつた。よく見ると後ろに居る時雨が投擲物を持っていた。

「おお……ありがとうございます。……おいそれと負ける訳にはいなくなつちやいましてね……」

受け取つてから投擲物を腰に、盾を手に……あつ、なんかすつげえ馴染む……コレだよコレ。そして余つた砲は香取さんへ……

「……何ですかソレは?」

香取さんが俺の盾を怪訝な目で見てくる。この盾が普通の艦娘から逸脱しているのは重々承知だ。

「秘密兵器でも何でもない、ただのとっておきですよ。これが本当の護衛駆逐艦つてね」盾を持つてちよつと巫山戯る俺と、それを見て空気を張り詰める佐世保の皆。

まあ俺もなんと言うかね? 佐世保の皆……つて言つても一部だけど、会えてテンション上がつてんのよ。

それに教官たちにも情けない所は見せられねえし、負けたら後が怖過ぎるし……。対面して並ぶ十二人、その内俺を含む半分が獰猛な笑みを浮かべていたことが印象的だった。

……俺はそんなつもりは無いけど、他の人は戦争でもおつ始めるつもりなの?

リベンジマツチ

演習開始の直前、場所は海の上。俺は教官たちと頭を突き合わせていた。内容は勿論「相手に勝つ方法」だ。

香取さんさえ予想できなかったスーパースター赤城さんの襲来は他の教官たちをもビビらせるには十分過ぎる程で、教える立場故に敗北は許されないのでろう、ヤツベーの来たなあ……なんて呑気な考えをしている俺以外は顔を青くしていた。

「まさか一航戦が直々にお出ましとは……」

「流石に予想外でした……ですが、負ける訳にはいきません」

「赤城さんだけではなく、武闘派で知られる神通さんと夕立さんまで居るのが本当に厳しいですね……」

「伊26さんはまるゆが抑えるよ。多分何とかなるから、それまで持ち堪えてもらえな
いかな?」

「それは相当厳しいのであります。……ですが一番確実に勝てるであろうまるゆから戦局を作っていくのが一番現実的と思われまます」

「ふむ……では目標は各個撃破、最低でもまるゆが決着を付けるまで持ちこたえること。」

「……これで良いか？」

「最初に赤城さんを落とすか、最後に皆さんで力を合わせて挑むかも問題になってきますね」

おお……流石は教官たち。なんかかつこいいぞ。

……つていうかまるゆ強くな？　ほぼ確実に撃破可能って何者だよ……。誰も疑ってないってことはガチつてことだろ？　……いやホントに何者だよ。

「どちらか厳しそうですね……。ですが、各個撃破は賛成です。……ところで、スチュワートさんはその盾で何が出来ますか？」

俺はこのまま映画のワンシーンみたいな最高にイカす作戦会議見てるだけで十分なんだけど……。やっぱり混ざらなきゃ駄目？　……視線が痛い！　分かった！　話す。話すからあー！

「えつと……各個撃破は賛成です。その時に私は赤城さんをマークさせてもらえないでしょうか？」

「……理由を訊かせてもらえますか？」

へっ。自慢話だぜ。

「佐世保鎮守府に居た時に一度、赤城さんと演習をしまして……。その時は負けてしまいましたけど、赤城さん相手に相当時間を稼いだってちよつとした噂になりました……。」

それに先程の赤城さんの言葉から考えて、今回赤城さんは私が相手することを望んでいると見ていいと思います。……それに、鎮守府に居た頃と比べて、皆さんに扱かれたので……今回は赤城さん相手に大破するつもりもありませんよ」

「それは頼もしいな。ならば私は……神通の相手をしよう。……それと、一航戦が相手ならば雀の涙だろうが……制空権確保の為、微力を尽くそう」

お、マジ!? すっげえ助かるわ。なんせ前は遠距離から只管ボコボコにされたもんな……こういう時に微力って言って謙遜するのはだいたい実はスゲー奴って相場が決まってるから、期待しても良いんだよね？

「それと、まるゆさんは開始直後は水面から顔を出しててください。これをお見舞いするので」

そう言いながら手に持つのは緑色の缶。確か中身は音響手榴弾。超音波染みたアホみたいにデカイ音が出てくる危ない缶だ。開始直後、コイツをに水中にシューウウーッ!! するつもりだ。どんな音が鳴るかは分からないけど、普通に投げたら予備の鼓膜が必要になると錯覚するレベルの音量だ。きつと水中でも良い感じに仕事してくれるだろう。水中の音の伝わる速さは空気中の四〜五倍だから、二十パーセントくらいの音量でも実質いつも通りだしな。

俺は言いたいことを言った。今は味方なんだし、手の内はどんどん明かしていくべきだろう。

「スチュワートさんはちよつと変わってますけど、凄いです！　なんだか勝てそうな気がしてきました！」

「鹿島。決して油断して勝てる相手では無いのよ。もう少し気を引き締めなさい」

しゅんと大人しくなる鹿島さん。そして話し合いの最後だという雰囲気を出しながら話し始める香取さん。

「皆さん、最初は相手の艦の近くに居てください。そうすることで味方を巻き込んで爆撃すること懸念し、赤城さんの攻撃の手が緩くなる可能性があります。機動力は全体的に彼方が上ですが、頑張りましょう！　例え卑怯だと言われようとも、戦場にあるのは善悪ではなく、生か死だけです。生き延びた方が正義です。いいですか!？」

「勝てば官軍負ければ賊軍です！」　ね♪」

「……優勝劣敗」

「負け犬の遠吠えであります！」

「えつと……し、死人に口なし……?」

「勝てばよかろうなのだ……」

みんなバラバラじゃねーか！　締まらねえなあ……。

教官たちだし大丈夫でしょなんて思ってたんだけどいきなり不安になってきたぞオ
イ!

遠くから響いてきたスタートの合図で俺たちは散開する。

まるゆだけは俺の後ろで小さく隠れるよう神州丸さんからアドバイス? を貰って
いた。なんでも潜水艦だから影が見えなくても違和感が無いからだそうだ。……あの
人実はどっかの特殊部隊とかで強襲作戦のプロだったりしない? ダンボールに隠れ
てもなんらおかしくは無さそうなんだけど……

「まあいいや。それじゃあまるゆさん! 目エ瞑っててくださいい……ねっ!」

海面に向かって緑の缶を叩きつけ——ない。足元に落として、沈む前に叩き込むよ
うに脚で海の中に捻じ込んだ。

ズン……!

重く響くような音そして振動が体の芯まで届いてくる。その後にも一瞬だけ高い音

が聞こえたかと思うと、大量の泡が海面まで上がってきて……超！ エキサイティング！

「まるゆさん、もうオツケーです。頑張ってください」

「ありがとう！ あなたも頑張つてね！」

そう言い残して水中に消えたまるゆ。俺は宣言通り赤城さんの相手をしないとな……。

「頑張ってください、ねえ……」

遠くに見える点。その内一つの周りに薄く黒い靄が掛かっているように見える。間違はなく赤城さんだろう。香取さんの予想はどうやら間違っていたみたいだ。

「フヒツ……マジかよ……」

思わず苦笑いが出る。

「アレ」 相手に一対一しろって？ 多少なりとも他の教官たちにも攻撃してくれたら楽だったんだけど……

「いや……」

神州丸さんが残していつてくれた戦闘機がある。だから二対一だ。これで負けてしまったら必然的に教官たちの負担が激増する。

「それは宜しくないな……」

俺たちのチームは一人でも欠けたらそこで試合終了。

その為に分の良いまるゆの対面を速攻で落としてサポートに回らせることで、それぞれの負担を軽減して対面同士の勝率を上げることが重要だ。

俺の役目は赤城さんを抑えること。今は俺を挑発するかのように大量の艦載機を待機させているが、俺が赤城さんの相手をせず誰かのところに行ったらフリーの赤城さんが好き放題に暴れ始めるのは目に見えている。

「まあ言い出したのは俺だし、行きますかあ……」

そういえば、鎮守府での演習のリベンジマッチじゃんコレ。

そう思うと負け続きは嫌だなあ〜なんて……。

ボルテージ上げて往こうじゃないか。

俺はメンドクサイのは嫌いだけど、負けが続くのはもつと嫌いなんだよね。

▼
鎮守府のあの一件からスチュワートさんが姿を消しました。

聞いた話だと、提督を殺害したから大本営に連行されたんだとか。

その話を聴いた時、私はどう思っただっけ……

提督の殺害なんて信じられない——違う

私達大人が対処すべきだったのに——違う

そもそもあの無茶な命令を突っぱねておけば——違う

お腹が空いて聞こえなかったことにしましょう——違う

……ただ悔しかった。

私に敗北感を植え付けたまま居なくなるのかと思いましたが。勝ち逃げをする気なのかと思いました。あの演習での勝ち負けだけで判断するならば私の勝ちですけど、あの時ほど勝って悔しい思いをした時はありませんでした。

勿論それは私が勝手にそう思っているものであつて、スチュワートさんは勝負に負けて悔しいと思っているんでしょう……それでも私は悔しかったです。

だからこそその後、再び私たちの提督が戻ってきて、資材が無いからと言う理由で出撃の自粛をお願いされた時に、ここぞとばかりに訓練に励んだ。

もう一度戦う時に今度こそ、こんな思いをしなくても済むように。

深海棲艦てんかいせい艦でもなく、戦艦せん艦や空母くうぼの皆みなでもなく、能力的に勝てる勝負の駆逐艦相手に、これ以上敗北感を味わわない為に。

そうして訓練を続けて、しかし打ち倒すうちくたすべき相手が居ないからどこか消化不良な日々

に聞こえて来た言葉は天啓に近いものだと思います。

「久しぶりの大本営での演習、楽しみですね。教官たちは凄く強いので勉強になります」
「またそれ？　少しは力抜いたらどうなの？」

気が付いたら声の許に近付いていました。

「その話、詳しく聴かせてもらえないかしら？」

……今思うと、朝潮ちゃんに大迷惑を掛けてしまっていますね……。勤勉なあの子のことです。きつと私よりも多くのことを学ぶ機会だったでしょう。

それを私は、個人的な理由で奪ってしまいました。

「……負けられなくなっちゃいましたね」

演習はとづくに始まっています。私以外、そして相手方も一人以外はすぐに散っていききました。

私は分かります。あの残っている影はスチュワートさんだと。

そして今回も――

ズン……

予想を超えて苦戦させられることを。



艦載機と駆逐艦

赤城さんに渡されたのは盾、時雨に渡されたのは手榴弾。そして香取さんに渡されていたのはレンタル艀装。既に手に持つ砲は返してあるけど、魚雷や腰に着ける艀装はそのまま借りている。流石に魚雷も何も無くしてはそれこそタツクルくらいしか有効打が無いことになって非常に拙い。

前回の演習では突っ込んだ進路上に格ゲーの設置技みたいに爆弾落とされて吹っ飛ばされたんだよね……。

あの時は何をトチ狂ったのか遠慮して魚雷を撃たなかったんだっけ？ ……格上相手に舐めプとか、殺されても文句言えないんだよね……

「ククク……だがあの時の俺は所詮最弱設定よ……」

教官に鍛えられたし、今回は魚雷も撃ち込むつもりだ。前回は赤城さんにダメージを与えられなかったけど、今回は沈めてしまっても構わんのだろう？ な心意気で行きたい。

それをするには艦載機を何とかしないと話が始まらない。俺の持つてる投擲物がマジで有効だったんだけど……きつと何かしらの対策はしてるだろうし、既に音響手榴弾

を海に沈めてるからその分数を減らすことは出来ない。

——チャプチャプ

聞いたことのない、戦場に似合わないコミカルな音が俺の背後から迫ってくる。気になつたから振り返る。

「……」

敵じゃない。

そう直感的に理解できた。

おそらくコレが神州丸さんの言つていたヤツだろう。確かに赤城さんと比べると数は少ないものの、あつちは本職だし仕方無いと思う。それでも何も無いよりはずっと心強い事は間違いない。

「だけど……だけど……ッ！」

これはあんまりじゃないか……お風呂に浮いてそうなアヒルのオモチャの飛行機バージョンと言えば分かりやすいんじゃないだろうか？ 緑色に塗られた飛行機がそれこそアヒルみたいに俺の後ろに並んでいた。

これを見て嘖き出さなかつた俺自身を褒めたい。

非常に気になるものの、いつまでも他所見をしている訳にもいかない。前を向いたら赤城さんの影が結構大きくなつていた。ゆっくり赤城さんの方に進んでいたが、それで

もまだ距離はある。

前に何度も見た、詰めようにも詰められない距離だ……

そう思った直後、赤城さんの方から大音量と共に大量の艦載機が飛来して来た！

前回からの反省を活かせオラア！ 序盤に艦載機を落とさなきゃジリ貧で詰みだ。

「んなろおー！」

まずは焼夷手榴弾ン！ 先頭から順番に出来れば全員、誘爆して散れ！

そして手榴弾を放った後は空のこ^{うえ}ことなんて気にしてられない。全速力で艦載機の雲を突っ切ろうと盾を上^うに構えて速度を上げる。

——ドドドドド——

そして盾越しに聞こえてくる硬いもの同士がぶつかり合う高い音と衝撃。神州丸さんから教えて貰った護身術の受けの一つ、関節を良い感じにクツションにする上手なやり方がまさかこんなところで発揮されることになるとは……。

「チツ！」

思わず舌打ちが出る。俺を中心に放たれる爆撃の雨あられで、弾けた海水が盾と言う名の傘の下から打ちつけてくるこの鬱陶しきと言ったら溜まったもんじゃない。

チラリと前方に視線を送ると、予想通り距離を取ってる赤城さんの影が見える。香取さんの講座では空母は足が遅いらしいが、足止めを喰らってる駆逐艦よりは全然早いらしく、ちつとも距離が縮まった気がしない。魚雷を撃とうにもこの距離で当たるとは思えないし……。

——ドオン！

突然大きな爆発音が聞こえたかと思うと、続いて何回も同じような爆発音が聞こえ始めた。

超良い感じに誘爆してくれたんだろうな。心なしか盾に掛かる圧が多少小さくなったように感じるし。

だけど良い事ばかりとは問屋が卸してはくれないらしい。降り注ぐ鉄のシャワーに燃えてる破片も追加されてしまった。いつ俺の足に着いてる魚雷に当たって誘爆するかしないか気が気ではない。

「……ええい、キリが無いわ！」

多少軽くなったとは言え全く止む気配のない攻撃はストレス的なアレで心臓に良くない。何時またあの超目の前に爆弾を落とすとしていた低空飛行する変態機動型艦載機が盾と水面の隙間からコンニチワしてくるか分からないのも大きなストレスだ。

ここは一旦、煙幕を展開して考える時間を作るべきか？

思い立ったがなんとやら。サツと取り出した紫色の缶を放る。前回と同じように気の抜けた音を出しながら辺りが紫色の煙で包まれた。

しばらく盾を構え続けていたら次第に盾に与えられる衝撃が少なくなっていく、やがて紫色の平穩が訪れた。

「フウ〜〜……」

一息つく。相変わらず赤城さんの遠距離からの攻撃力が頭おかしい。

前回と違って最初から全力で艦載機を飛ばしていたように見えたのに、煙幕張るまでずっと攻撃し続けられるとか、あの艦載機の中身は異次元にでも繋がってんのか？

風はちよつとあるけど、俺の近くにはまだ煙を吐いてる缶が転がっている。風下に立っているから俺は見つからないだろう。確か前回は、煙が晴れたら赤城さんのところに艦載機は戻っていて、俺の姿を確認したら一斉に飛んできたんだよね。

でも今回も同じようになるとは思えない。煙に隠れる……俺の現状までは前回と同じだが、赤城さんがその後も前回と同じようにしてくれるとは限らない。

「俺だったらどうするか……」

艦載機を休める、赤城さんと煙を結んだ線上に待機させる、他の戦場に配置する、大

大きく分けたらこの三つになるんじゃないか？

それで、俺が赤城さんだったら再戦の相手からターゲットを外すのは論外だ。仮にも噂が立つレベルの防御力を持つ俺を相手に攻撃力を下げる真似は出来ないだろう。そんな事したら容易に接近を許す。そうじゃなくても打ち倒す為なんて言つて自分から挑発したのに自分が先に矛先を逸らすなんて不義理は働きたくはないだろう。

そして次、艦載機を煙幕の範囲外に待機させて、煙幕が晴れるか、俺が飛び出して来たら斉射して潰す方はと言うと……艦載機を休めるかどうかの予想が難しい。

艦載機を待機させているんだったら、攻撃される前、煙幕の外に出る前にスタングレネードを投げて、多くの艦載機を落とせると踏んでいる。もし上手くいったらその後の展開が非常に楽になることは間違いない。

逆に艦載機を休めているなら、範囲外に出る前にスタングレネードを投げたら無駄になるし、艦載機は一切減らないと、非常に旨味が無い。

妥協案として煙幕の外に出てから多少の被弾覚悟で艦載機の有無を確認、艦載機が居るならスタングレネードで数を減らしてから突っ込む。居ないならそのまま突っ込む。

「よし、これで行くわう」

それじゃあ黄色の缶を抜きまして……いざ出陣！

勢いをつけて煙幕から飛び出す。を巻き込み靡かせながら参上した俺ってヒーローみたいじゃね? って思いながらも艦載機を確認して……艦載機、ナシ!

——ドオン!

「!?」

いきなり発砲音がしたと思ったらレンタル艀装に衝撃を受けた。上ばかりに注意が向いていたから気が付かなかったが、撃つて来た方を向いたら時雨が砲を構えて立っていた。

……それも結構至近距離で。

え? 時雨の相手誰? 負けたの?

「噂には聞いていたけど……本当に煙出すんだね」

ええい五月蠅いわ! 別に俺自身が煙出してる訳じゃねーんだからどうだっていいだろうが! 兎に角、俺は赤城さんと決着を付けないといけないんだよ!

「……通して貰えませんか?」

「……赤城さんの為に通してあげたいんだけど、黒星を付けて帰る訳にはいかないんだよね」

畜生! ここに来て中ボス追加とか聞いてないんだが!?

「御尤も!」

直後に盾に身を隠す。ガンツという音と衝撃から、艦載機から放たれるのとだいたい同じくらいの重たい一撃だということが分かった。

取り敢えず一度抜いちやつたスタングレネードをポイして、眩しいのを盾の陰でやり過ごして……。時雨の悲鳴は無視だ無視。どうせただ眩しいだけで殺傷力なんてほぼゼロなんだし。

「おっと」

なんか魚雷が来てる感じがするから横に避ける。すると目が治ったのか、また砲を構えて撃ってきた。

盾を構えて砲弾を弾いてそのまま——ラムアタックだコラア！ 通しやがれ！

ドンッ！

タツクル感覚で突っ込んだら重たい衝撃を盾に感じた。今度はそのまま盾を横に殴るように振りぬく。

開けた視界には、勢いよく壁にぶつかった人と同じように身体を丸め、顔を痛みによって歪めている時雨が居た。……めつちやダメージ入ってて逆に驚いたんだが？

だけど呆けてる暇なんてねえ！ そのまま魚雷を喰らええい！ ……避けられた。

「うう……随分と、荒っぽいね」

「……貴女は行儀が良すぎる」

ん……ちよつと言葉にトゲが出ちゃったな？

でも香取さんに扱かれた俺からすると、
“どんな手を使っても沈める”
って言う意志が弱いように感じる。

香取さんだったらきつと砲弾で盾を構えさせて視界を奪ってから偏差射撃で絶対に避けられないように魚雷を撃ってくるに違いない。

戦場なんて不意打ち上等、卑怯な手上等。殺ったもん勝ちつて香取さんに教えて貰ったらどう？

そんなやり取りの直後に、時雨の足元が爆ぜた。

「え？」

呆然言葉を放った時雨が海面に倒れてそのまま沈んで……行かなかった。

『スチュワートさん、遅くなりました！』

コイツ、頭の中に直接……？
じゃなくて、多分通信だろう。意識して使おうとしたことねえな。だって妖精さんが言うには独り言ダダ洩れなんでしょ？

『まるゆさん、伊26さんはどうになりましたか？』

『倒したよ。時雨さんはどうしようかな……このまま放置は拙いし……』

「……そうか、まるゆが居たんだった……スチュワートに気を取られ過ぎてた……降参だよ。僕はこのまま放置でも構わないよ。自力で戻れるから……」

「そう？　じゃあ遠慮なく。GG」グッドゲーム

なんだよ……倒れたと思つたら清々しい顔して降参しやがって……。スポーツマンか？　青春してるスポーツマンなのか？

「……という訳で時雨さんは大丈夫だそうです」

『時雨さんはスポーツマンじゃないと思います』

あ、全然関係ねえこと言つてたっぼい？

『時雨さんは自力で戻れるから大丈夫だそうです』

『そう？　じゃあ進もう！』

赤城さんは距離を取っていた。艦載機が煙幕の範囲外に無い事から、俺はまるゆが海中に居るものの数えるのも馬鹿らしくなる数の艦載機を相手にクソ真面目に立ち向かわないといけない訳で……嫌になつちやうね！

『スチュワートさん、ここでヒントです。艦載機から出てくる弾をよく見て下さい』

『……そんなことしてたら頭ブチ抜かれますよ』

まるゆは一体何を言ってるんだろうか。俺に死ねと申すか。

『航空機の攻撃だからってそこまで怯える必要はありません。艦は銃弾一発ではそうそう沈みませんから!』

……確かに余程の紙装甲か欠陥構造でもない限りは軍艦が砲弾ならまだしも、銃弾で大打撃なんてちよつと信じられない。

だけどさあ……やっぱり誘爆って怖いじゃん? いくら表面がガチガチでも、内部で爆発されたらどんな艦もイチコロだぜ? きつとそんなので沈んだ艦は数えきれない程あるんだろうし、警戒するのは当然と言うか何というか……。

『……』までは言いたく無かつたんですけど、艦載機の攻撃には強いものと弱いものがあります。強いものだけ避ければ、ちよつとの被害を妥協さえすれば行動の幅が広がりますよ』

あつ、そーゆーこと……。沈みさえしなければ中破だろうが大破だろうが元通りだもんね。……幸い艦娘に乗組員なんて数人、もしかしたら一人の妖精さんだけ。艀装がダメになる直前までは無茶が出来るってことで良いの?

『分かりました。アドバイスありがとうございます』

じゃあ次はまるゆのアドバイスに騙されたと思つてちよつと艦載機の観察でもしてみようかな?

『赤城さんを倒しに行きましよう！ 支援攻撃は任せてください！』
うん、じゃあ俺が攻撃引きつけるから、攻撃担当は任せた。

——ブウウウウン

赤城さんの方から艦載機が飛んでくる。俺の足元からポロポロになって数を減らし
てはいたけど、飛行機……神州丸さんの艦載機が飛んで行った。

それに合わせて、俺も前へ出る。

第二ラウンド、互いに一対一じゃなくなってるけど、決着を付けようか。

決着

「よっ、ほっ……へへっ」

横にステップをして、時には急ブレーキや急加速、身体を捻って大ダメージを避ける。俺はまるゆから言われた通り、艦載機から放たれる攻撃を観察していた。

まるゆの言っていた弱い攻撃が豆鉄砲みたいなミニマムサイズの弾。確か機銃？
だっけ……。

それらは密度は高いものの威力は大したこと無かった。全身が霰あられで叩かれてるみたい……地味に痛いけど、東北で生活してた経験があるんでね……舐めんよ？

でも目に入ったり、魚雷に当たると何が起こるか分からないから魚雷は盾で庇って、目は半開きで少しでも入らないようにしている。失明は怖いもんな。

そして強い攻撃が、艦載機から落とされる黒い玉。

ピンポン玉くらいの大サイズのソレは、弱攻撃より飛んでくる頻度は少ないし、速度も自由落下だから速いとは言えない。

盾で防いだ時に結構な衝撃があったからきつと爆弾か何かで、ずっと盾を構えていたときに盾が矢鱈と重たくなる原因の大半はコレだろう。そして盾にぶつかった時にガ

ンガンと喧しい音を出すのが弱攻撃だ。

「おっと」

避け切れそうに無い強攻撃を盾で防ぐ。

出来るだけ危険度の高い黒い爆弾は気合で避けて、もしダメそうな時に盾で防ぐ。しかもそれなりの高さから落とされてるから見てから回避が出来る。

「ヘッ……イージーだな！」

『スチュワートさん、ちよつと速いです……』

まるゆから通信が入る。ちよつと速いって文句を言うみたいなの言われた。

……まるゆから教えてもらったのが想像以上にいい感じだったから、きつと無意識的にスピードが出ちゃったんだろな。だから俺にアドバイスをした過去の自分を恨んでくれ。俺はアドバイスをくれたまるゆに感謝するけど。

『遅かったら置いてきますよ！ ……騙されて良かったです』

だつてお陰でこんなに楽できてる……クソ痛いけど。

『でも過信し過ぎないように気を付けてくださいね。いくら大したダメージじゃなくても、機装はどんどん傷ついていつちやいますよ』

『大丈夫大丈夫！ ……です』

まるゆにそう通信を叩きつけて後は無視する。どうせ緊急性のある内容ならしつこ

く通信してくるだろう。

それにその辺は妖精さんから教えてもらってたし。艦装が大破まで行ったらその後は艦じやなくて只の海に浮く人としてあの弾受けるんでしょ？ 普通に死ぬわそんなの。

死にたくないなら中破で引き返すのが良いって香取さんも言ってたし、俺も死にたくないけど……逆に言えば中破までは安全に無茶できるってことだろ？

「でも『艦これ』みたいに中破とかで服が破れるのはなあ……」

自分じゃなくて他人、そして現実リアルじゃなくて画面二次元の中ならまだしも、ガチ目の前でそんなこと起きたら気まず過ぎてヤバい。

相手がそう思っただけでも俺がそう思う。俺だつて自分が他の艦娘の前で服を破られるのは本意じゃないし、そんな変態チックなムーブはしたくない。

……こんなことを考えられるくらいには余裕ができています。

艦載機からの攻撃を避けながら進み続け、気が付けば赤城さんの影は随分と大きくなっていた。

「……………ん？」

よく見ると赤城さんの近くで水柱が上がっている。俺は魚雷を撃ってないし……ま
るゆか？

『もうこっちの攻撃も射程内ですよ！　どんどん撃つて大丈夫ですって！』

通信が飛んでくる。流石にこれは無視できないな。

『分かりました。ありがとうございます』

そう言うが早いから早速魚雷を発射させる。いつまでも投擲物ばかりで出番無くて鬱憤溜まってんだろ？　赤城さんに全力でぶつかって行け？　なんて心の中で言いながら。

随分と赤城さんの近くまで来た。後退する赤城さんを守るように展開されている艦載機が実に鬱陶しい。

赤城さんは俺たちに攻撃をするだけの元気がまだあるらしい。だが、まるゆと俺の魚雷攻撃によってとどころ服が破れたりしている。

同じように俺も、服の袖や裾が所々焦げたり破れたりし始めているものの、未だ軽傷……だと思っう。

魚雷は既に撃ち尽くしているし、投擲物もない。ここまで来たんだからと遠慮なく盾を構えている。

時雨にやってみたみたいラムアタックを仕掛けるしかないと考えている……つていう

か、そうやって赤城さんを大破まで追い込むか、赤城さんが降参する以外に決着が付かないというか……。

俺は降参するつもりは無いし、赤城さんも同じだろう。だからあとは俺が致命傷を負わないように赤城さんのところまで辿り着けば決着だ。

それなのにあとちよつと、あとちよつとが届かない。火事場の馬鹿力つてヤツだろう。ここに来て一段と厳しさを増した攻撃に、なかなか距離を詰められない。

——ドオン！

爆発音と共に赤城さんが水飛沫で隠される。

『スチュワートさん！ 今です！』

そして間髪入れずに送られてきた通信。

内容からして赤城さんに有効打を入れたんだろう。最高かよ。

『まるゆさんナイスウ！』

一瞬止んだ攻撃の隙間。いくら疲れていたとしてもこの隙を逃すほど馬鹿じゃない。

「うおおおおおおお……！」

赤城さん目掛けてアクセル全開。俺自身が一つの弾丸になることだ。

「ツ！ しまつ……！」

焦ったような顔の赤城さんが一瞬視界に映り、直後盾に感じる衝撃。手首、肘、肩ま

での衝撃は、神州丸さんからガチで投げられた時以上で、脱臼したんじゃないかと思うほど。あまりの衝撃から、ぶつかった瞬間に首が振られて盾に頭を勢いよくぶつける羽目になった。だけど――

――殺とった！

これらの感覚で確信してから惰性で進む。止まるまで相当な距離を進んだ。

「ハア……ハア……や、やったー！」

念願のリベンジを果たせたぞ！ 今日から俺はヴェンデッタだ！

滅茶苦茶盾が重たい。いつもなら不快に感じるコレも、勝った後には心地良いものに変わる。

「へへへ……」

息を整えて振り返る。赤城さんの影は無く、同じように飛んでいる艦載機も無かったからやっぱり俺の感じた手ごたえは間違いないやなかった。きつと赤城さんは通信の来ないまるゆが回収して運んでくれたんだろう。

「さて、他の人達は……」

――ズルズル……バシヤツ

前方から水音。

だがしかしそこに人影は無かった。

視線を下に降ろしていくと……

「ヒエツ」

真つ青な顔、海面に広がる髪、一緒に浮かぶ鉄の残骸。

これは忘れもしない……

「潜水力級……」

いやマズいどうすればいい？ 戦う……は武器無いし……逃げる？ っていうかな

んでここに深海棲艦が!? いつの間にか鎮守府の海域の外に出ちゃったか？ やっ

ぱり救援を……

『スチュワートさん！ 大丈夫ですか!?!』

まるゆ〜！ いいタイミングだありがとう愛してるッ！

『まるゆさん潜水力級が居ます！ 自分魚雷持ってないですどうすれば良いですか!?!』

hurry up! 魚雷の無い俺は一体どうすれば……。

『スチュワートさん、そういう冗談は良くないです』

……は？

「……ふはあつ！ ……ちゃんと見てください。これは潜水力級じゃなくて。赤城さ

んですよ」

「……」

ん、っん……よく聞こえなかったけど、改めて確認しようじゃないか。

気を失ってるのか、顔を真っ青にしてピクリとも動かない赤城さんと、艦載機の破片が俺の足元近くに漂っていた。

「……鎮守府に赤城さんを連れて戻りましょうか」

赤城さんを背負うように担いで、ゆつくりと動き始める。後ろには、艦載機の破片を拾って、落とさないように慎重に進むまるゆが見える。俺と赤城は勿論、まるゆの服装もボロボロで疲れ切っている様子を見せている。

俺も戦闘が終わって気が抜けたことと、すっかり真上まで昇っていた太陽と、雨ではないものの季節による湿っていて生暖かく、気持ち悪い風。そして早とちりの所為で感動が少なかったのもあって、一気に疲れてきた。

赤城さんにリベンジは果たせた。時雨の乱入、まるゆと神州丸さんの支援があったものの、それでやっと倒せるようなレイドボス染みた赤城さんは、やっぱりスゲーななんて考えていた。

試合後のひと時

まるゆの指示に従い、フラフラとした足取りながらも鎮守府に戻る。

……早く横になって休みたい。

身体の疲れと気の緩みから、大きな欠伸をしてまるゆに話しかける。

「赤城さん撃破したってことは、実質私たちの勝ちで良いんじゃないですかね？」

「赤城さんが最後だから、もう演習は終わってるよ」

「えっ」

……他のところ終わるの早くね？ っていうか何でそんな事知ってるんだよ。

それにいくら各個撃破重視の作戦を立てたからと言っても、一応チーム戦なのに俺の

ところに来たのがまるゆと神州丸さんの艦載機だけって……薄情過ぎない？ 赤城さ

んなんて強敵中の強敵、みんなで力を合わせるべきだと思っただけ……。

残念ながらどうやら教官の中にヒーローはまるゆだけだったみたいだ。神州丸さん

は謎のクソ強助っ人枠に違いない。

「まるゆは結果知ってるけど……聴く？」

うわめっちゃ気になる。終了時点で俺とまるゆは生存、そして伊26と時雨、赤城は

倒してるから……どんなに悪くても引き分けだろうってことは分かる。だけど時雨の相手が誰だったのか、夕立と神通さん、満潮はどうなったのかは訊きたくて仕方がない。仕方ないけど……

「……止めておきます。我慢できなくなったら訊きます」

こうする。今は楽しみを取っておきたい気分だ。

俺が地上に戻って最初に見たのが、一緒に演習した面子が敵味方問わず、いつの間に準備したのかテントの下に集まって談笑している光景だった。

……楽しそうなのは良いんだけどさあ……やっぱり救援に来て欲しかったなあ。なんて思う俺は決して悪くは無いだろう。

「あーっ！ 赤城さんがやられてるとか嘘でしょ!？」

戻った俺たちを真っ先に出迎えたのは大きな声。驚愕の感情が乗ってるソレに反応して、俺と俺の背中に担がれて気を失ってる赤城さんに視線が集中する。

「えつと……赤城さんはどうしたら？」

多くの視線に晒されてちよつと緊張してしまう。だけどずっと赤城さんを背負ってる訳にもいかない。本人には言えないけど、やっぱり重たいから降ろしたい。

俺の体が見た目通りの力の無さではなく、大人の女性を暫く担いで居られるパワーがあるんだとしても、流石に十分前後ともなるとね？ 腕がほら……プルプルしてヤバいんすよ。何度引き摺って行こうかと考えたことか。

「赤城さんはこちらに……スチュワートさん、お疲れ様でした♪」

そう声を掛けてくれたのは鹿島さん。指し示す場所にはシートが敷かれていて、そこには時雨が横になって休んでいた。

「よっ……と」

「あ……赤城さん……そっか……」

時雨の横に赤城さんを降ろす。その時の物音で起こしちやたんだろう、時雨が赤城さんを確認して何かを呟いた後にまたゆっくりと目を閉じた。

「し……死んでる……」 なんてふざけようとしてごめんなさい。

「ふう……」

深く息を吐きながら立ち上がる。直後に軽くなった背中や肩を叩かれたり、誰かに抱き着かれたりした。

「痛い!!」

「スチュワート……よくやった」

神州丸ししゅうまわさん!! 褒めるなんて珍しいっすね。脳みそにキチンと記憶したいからもう

一回言ってくれませんか？ え、嫌だ？ そんなあ……。

「赤城さんを倒すなんて凄いわね……でも、ちよつと遅かったんじゃないかしら？」

香取さんはちよつと厳し過ぎない？ 更に早く撃破しろと申すか……。普段の訓練から滅多に褒めてくれない神州丸さんでさえ褒めてくれたと言うのに……。

「スチュワートさん！ 赤城さんを倒すなんて凄いつぽい！ 今度は夕立と勝負しよう！」

あと夕立は……勘弁してくれ。『艦これ』の先入観から考えて、夕立の相手をするのに俺の経験値は圧倒的に足りない。瞬き一つの内に距離を詰められて、右ストレートの魚雷パンチで盾を粉碎されて、果てに飛び膝蹴りで10割くらいしてきそうなイメージがあるんだよなあ……。

絶対に心臓一つじゃ足りない。俺は間違いなく “素敵な” パーティーの役者に成れない。殺る気十分な夕立の威圧感だけで三回は軽く死ねるね。

「スチュワートさん、いきなり飛びつくのは止めなさい。スチュワートさんに迷惑でしょう——」

憐れあきつ丸さん……タイミンクの悪い星で生まれた宿命ってヤツだ。セリフ被りとかも甘んじて受け入れるべきそうすべき。

そして神通さんの言葉で背中にくつついていた夕立が離れる。リアクションが完全

に犬のソレだ。リードが相変わらず微妙に握り切れてないのが怖いんだけど……とにかく神通さんには感謝感謝。

「それに、夕立よりも指導に慣れてる私と演習した方が、スチュワートさんの為になると思いませんか？」

「……え？」

……感謝を撤回。この人も俺と演習する気満々じゃねーか！ 指導と言う名の皮を被ったナニカじゃん。バトルジャンキーっぽさを感じる夕立と言い、身に覚えのないリベンジマッチを仕掛けて来た赤城さんと言い、なんなのこの武闘派な人達は……。

「……」

あゝ良いねえ……ちよつと半目で睨みを利かせてくる満潮の顔に和むわ……。なんかこう……近所のノラ猫つて感じ？ がして今この場に於いて間違いなく俺の癒しになっている。微妙に心を許しきってない感じが溜まんねえぜ……。

「いやはや……流石は大本営で教官を務めている艦娘ですね、本当にお強い」

「作戦や戦い方次第ではいくらでも勝敗は変わっていただろう。今回は偶々ウチが勝っただけだろう」

「「!？」」

艦娘達の会話を、聞きながらボーつとしてたら、いきなり男性の声がして、俺を含む

ほぼ全員の肩が跳ねた。

「スチュワート。呼び出しの放送に応じないと思ったたらこんなところに居たのか」

「あ……も、申し訳ございません！ 私が連絡を怠った所為で……」

偉い人に謝る鹿島さん。……完全に忘れてた。そういえば俺、呼び出し喰らってたじゃん。午後までには終わるつしよ〜なんて軽い気持ちで夕立からの演習に乗って、香取さんに相談して海の上に居たけど、鹿島さんには大きな負担を掛けてたみたいだ。次があるならこうならないように心がけよう。

「いや、私たちも面白いモノを見れたからいいよ。それに、大したことじゃないからね」
「? ……ッ!?!」

おいおい……なんでこの人がここに居るんだよ……。

「提督……」

「やあ、スチュワート。久しぶりだね」

「再会の挨拶はまた今度にして欲しい。私も忙しいんだ」

……忙しい人は他人の感動を台無しにしても良いのか？ いや良くない！ でも呼び出し無視っていうことやっちゃってるからなあ……しょうがねえから話聞かか。

「スチュワートを今日呼び出した理由は……提督候補との連絡が付いたから、そのことを教えておこうと思っただ」

「……はい」

そいつああ目出度いな。俺が行くところの新しい提督はどんな人かな……

「それと、これを渡そうと思ってるね」

「……ありがとうございます」

そう言つて偉い人から封筒を受け取る。……これつて滅茶苦茶大事な物じゃない？

こんな他の艦娘見てるところで堂々と渡しても大丈夫なモンなの？

「あとはそれに従つて行動してほしい」

「……分かりました」

中身も見えないのにこう言うことしか出来ないとか辛い……。断れないとか……一

種のパワハラなのでは？

「それと、準備もあるだろうから、一旦、田代前提督と佐世保鎮守府所属の艦娘と共に、

佐世保鎮守府に行つて、支度を進めるように」

「……わ、分かりました！」

理解したと同時に元氣よく返事をする。だって嬉しいじゃん。

久々の佐世保鎮守府に、久しぶりに帰れる。俺の心はちよつと舞い上がっていた。

心の内①

演習終了後、佐世保鎮守府の教官と最後まで名前の分からなかった偉い人と別れ、長かったような短かったような……謹慎してたのかしてないのか微妙に分からなかった生活が終わった。

そして今は新幹線の中、後ろの方から聞こえてくる声から考えて、夕立と時雨と満潮はトランプ、列を挟んだ隣では伊26と神通さんが本を読んでいる。姿は見えないけど赤城さんは駅弁を食べている。腹が減ってくる良い匂いがその証拠だ。

——良いなあ……

そして俺の隣にはさつきからチラチラと俺の方を見てくる提督。偉い人からそんなことされてたらおちおち寝てらんねえんだよ。……言いたいことがあるならさつきと言つて欲しい。内容はだいたい予想付くけどさ。

「話は聴いている……済ま——」

「別にいいですよ。過ぎたことですし」

提督の言葉を遮る。謝罪するんだろうなとは思ってたし、この人は実際悪くない。無理矢理ダメだったところを上げるとするなら、アイツが来るまで鎮守府に残っていないな

かったことと、大本營の決定で決まった後任の提督を自分の目で判断しきれなかったところ……かなあ？ でもやっぱりこの人は悪くない。

だからこの人に謝罪される、謝罪させるのは違う気がするし、時間が巻き戻る訳でも無いからぶつちやけどうでもいい。

それに、今回は俺が我慢の限界を迎えるという形で殺つちやつて、だいたい俺とアイツの所為みたいな感じになったけど、タイミング次第では別の誰かが何かしてたかもしれないし……。

物事には割を食うヤツが絶対に居て、偶々それが俺だった。それだけだろう。

……だけど……

「……ただ、鎮守府に着いたら愚痴に付き合つて貰いますよ？」

これくらいはしても良いんじゃないだろうか。流石に何でもかんでも「許すよ」では提督も気が済まないだろうし。

「それくらいならお安い御用さ」

この人は優しいから、きつと快諾するだろうとは思っていた。

お安い御用なんて言つちやつて……だったら止めろつて言うほど事細かに……

良い事を思いついた。無意識的に口の端が上がっていく。

「楽しみにしてますね」

そう言つて、提督の目元がちよつと緩んだ隙に話は終わりだと言わんばかりに目を閉じて前を向く。腹の辺りに腕を置いて姿勢を楽にする。

五月蠅過ぎず全くの無音でもない、振動も少ないし、きつとよく寝られるだろう。

新幹線を降り、駅を出たら今度は電車——ではなく、近くの駐車場にあるデカイ車の所まで連れて来られた。

「……提督？　運転席に誰も座つてないように見えるんだけど？」

「おかしいな……事前には伝えてある筈なんだが……」

満潮の言葉に提督がそう呟いて時計を確認する。他の皆も周りを見渡し始めて……

「居ました」

赤城さんが見つけたようだ。

「Hey、提督うー！」

アツハイ　この声だけで誰か分かるわ。

「皆さんも到着する頃だと思つて　Present for everyone！」

そう言つてアイスクリームを皆に手渡してくる金剛さん。

俺の分が無いのは……イジメ？　いやいや、冗談だよ。

「Oh ……！ スチュワートさん！ お久しぶりデース！」

俺を見るなり抱き着いてきた。これが……ッ 英国式のご挨拶……？

ちよつと刺激が強すぎる。淑女はそうホイホイ抱き着いちゃいけないと思うんだ。

会いたかったデース なんて言つて尚俺を放す気配のない金剛さんには困つていたところに、救いの手が差し伸べられた。

「金剛、スチュワートが困つているだろう。放してあげなさい」

「Sorry ! ……大丈夫ですカ〜？」

大丈夫じゃない 問題だ。溜息を吐いてから金剛さんを見上げる。

「……早く鎮守府に居る皆にも会いたいですね〜」

うはははは！ こう言つておけば日本のアトモスフィアを感じ取つて 「よし戻ろう」 って感じになるだろ。語彙力のない俺にしてはなかなか良い感じの言葉だったんじゃないか？

「それもそうですネー！ さあ皆さん 乗って ride on だ please !」

「金剛さん、いくら出撃に制限掛けられてるからつて、羽目を外し過ぎないようにお願いしますね？」

赤城さんがこう言っている間にも車には人が乗り込んでいき……ああ、後ろの席が取られた……悲しいナリイ……。

車内で移動中、俺のことを訊いた。もし皆から嫌われてるようなら、出来るだけ人目を避けて行動する必要があるんじゃないかなあ〜なんて思ってたけど、意外とそんなことはなく、なんか……結構好意的な印象が多いらしい。

それだけ訊いて、なんか安心したから適当に話題を逸らしてから演習の話題にする。思いついたかのように伊26と時雨から文句を言われたりして、何故か赤城さんが「スチュワートさんですから」なんて悟ったようにフォローしきれてないフォローをして俺が逆に傷ついた。

その後も、金剛さんが「眠くなってきたネー……」なんて言っていてウトウトし始めた。りして、本人を除く全員が滅茶苦茶慌て始めたりして、アクション映画のカーチェイスとはベクトルの違うスリルが満点のドライブで鎮守府に辿り着いたとだけ言っておく。

一月……半月？ ぶりの鎮守府を歩いた。

工廠に立ち寄った時には夕張さんからこれでもかと頭を撫でまわされて

食堂に行った時は、恐らく即席だろうやけに赤いおにぎり火の玉ストレイト（中身は卵。美味しかった）が出て来たり

廊下を歩けばすれ違った艦娘からはほぼ必ず話しかけられた。

「……」

「?」 スチュワート、元氣無いけどどうしたんだぴよん?」

そりゃあ……一人二人なら兎に角、ほぼ全員が好意的な対応してくるなんて想定外だったんだよね。

アイツを排したつていう点ではヒロイックかもしれないけど、やっぱり殺人したヤツは嫌われると思ってたらこの反応だもん。過保護と言うかなんとか……めっちゃ怪しい。

「卯月が兎詐欺うさぎに見えるくらいにはね……」

「うーちゃんがかワイイって言ったぴよん!」

「……ソウデスネ」

いやホント……何があつたし。正直ここまで来るとドン引きなんスよ……。

「——なんてことがありまして……」

「ハハハ! あの子達も君には感謝してるということだよ。素直に喜んだらどうだい?」

対面に座る提督が笑う。

時間は夜。俺としては冗談半分だったんだけど、律義なことに俺の愚痴を聞くために

俺を呼び出した提督から、お酒を勧められていた。

今飲んでいるのは梅酒ソーダ。だんだん熱くなってきた季節になんか美味しく感じる。

頭も良い感じにフワフワしてきたところで……うん、まだ目的は忘れてない。

「……そういえば、今この部屋って他に誰も居ませんよね？」

「ああ、今頃は各自の部屋で休んでいるだろう」

「話し声って外まで漏れたりするんですか？」

「それは心配しなくても大丈夫だ。大声なら兎も角、今ぐらいの声なら外には聞こえないだろう」

よし、その言葉を聴いて安心した。

これで心置きなく提督を秘密の共有者……共犯に出来る。

「提督……私……自分が男だーなんて言ったら……信じますか？」

「……信じるよ」

長い沈黙の末、提督は答えてくれた。

「えつと……良いんですか？ 艦娘が男だなんて、おかしいと思いませんか!？」

ああダメだダメだ。これ以上この話題をしてはいけない気がする。なんか……後戻りできなくなりそう。

「うん。正直、あり得ないだろうし、作り話だとしても出来が悪いと思う」

「だったら何で……」

「私はね、君が何かを隠してるだろうって、気が付いていたよ」

「ッ!？」

え？ マジかこの人……ガチもんのエスパーじゃね？ 流石に元男の転生者なんて秘密中の秘密にしてたつもりなんだけど……。

「いつか隠してることを君から話してくれることを信じてたよ」

「……」

ヤベエ……泣きそう。きつとこの人なら全部吐き出しても受け止めてくれるんだろう。う。

……いつそお酒の所為ってことで本当に全部吐き出してしまおうかな……。

梅酒をグラスに零れそうになるまで注いで、薄めもしないで一気に飲む。
プラーシーボ効果果ってヤツか、意識に霧が掛かって何も考えられなくなっていく。

「……………どこにでもいる本当に普通の人だったんですよ……………」

とある妖精さんから死んだところを生き返らせられて、いきなり艦娘になって、
艦装も何も分からなくて……………一般市民だった自分が深海棲艦と戦わなくちゃいけなく
て……………

スラバヤも何処にあるのかも分からないのに日本まで移動して……………今までのこと
もないような泥棒みたいな汚い生活を続けて……………挙句駆逐棲姫に追いつめられて死に
かけて……………

気が付いたらここに居て……………貴方も……………艦娘のみんなも優しくしてくれて……………!!」

「うん」

「それなのに自分はそんないい人達にずっと隠し事をしたままのうのと生活してきて
……………! あのカソ野郎が来た時に、殺すなんてとんでもない方法でゴリ押しして、みんな
に迷惑を掛けて!」

人殺しになったのに処刑にはされなくて! そんなヤツがこんなところでやっばり
のうのとこんな風に喋ってる!」

「……」

「それなのに感謝してるだなんて……もう嫌です……もう嫌なんですう！」

あく……頭がクラクラして俺が自分で何言ってるかよく分かんねえな……。

「そうか……君はずっと悩んでいたんだね……」

いつの間にか隣に座っていた提督が俺の頭に手を伸ばしてくる……が

バシィッ

俺はその手を弾いた。

心の内②

バシィツ

俺の頭に伸びてくる提督の手を弾く。勿論下心を感じたとかさういったのでない。

この人がそんなことをしないっていうことは分かり切っている。だから手が頭に伸びてくる——頭を撫でようとしている意味が分からない。考えようにも酔ってるからまともな思考なんて出来やしねえんだけどな。

「触らないでください……」

口から出てくるのはそんな言葉。だつて気色悪いじゃん？ 艦娘の中に一人だけ艦娘の皮被つた男が混ざつてんだぜ？

「貴方だつて気持ち悪いって思ってるんでしょよ。女の振りをし続けてたヤツなんて……」

「……君は強い」

「……は？」

やっぱり提督も酔つてんのか？ 強い？ 俺が？ 何言つてんのこの人。そんな訳

ねえじゃん。自嘲気味の笑いが零れるぜそんなの。

「……私は超人でも何でも無い。だから君の内面までは分からない」

「貴方は、自分が何かを隠していることを知っていた」

だから気が付いていたなんて言っただろ？

「あんなもの只の勘だよ。それに、悩みや隠し事っていうのは隠してるつもりでも、存外隠せていないものだ。それに、私だって多くの艦娘と接してるから、そういつた心の機微には敏感なんだ」

……。

「……ゴホンッ！ ……私は勿論、知人にも女性になった人は居ない。だから君の経験がどのようなモノだったか想像しか出来ない」

お酒の所為か、ブレて揺れる視界の中で、しっかりと俺の目を見て話をする提督は「だが」と続ける。

「突然己を取り巻く環境が変わり、混乱したんじゃないか？」

その通りだ 頷く。

「その中で、誰にも頼らず一人で頑張っていた君は間違いなく強い」

そんなことはない。あの時は……妖精さんが居た。お喋り 食料調達 索敵 e t c

…… 俺は何にもしていない。そんな俺は……弱い。それに……

「そんなことは……現に今、貴方に打ち明けた」

「二人で頑張るのも強さだが、別に人を頼ってはいけないなんてことはない。頼ることだって強さだ」

「クツ……フッフ」

その理屈で言ったら弱い人なんて居なくなるな？　独りで頑張っても、二人以上で頑張っても強い事になるもんな。

あゝ……可笑しい。相変わらず提督は真面目な顔で俺の方見てるしき……。あ、俺が笑ったからかちよつと微笑んだ。なんか毒気抜かれちやつたなく。

溜息を吐く。

「……結局のところ、君は何に悩んでいたんだい？」

「……自分は、どうすれば良いんでしょうか？」

そう訊くと、手に持っていたお酒を飲んだ提督がのんきに答える。

「それは自分で考えるべきだと、私は思うけどね」

……御尤もだ。でも人生の先輩なんだから訊いても良いじゃないか。

「……どうするか、どうあるべきかで悩むより、どうしたいか、どうなりたいかを考える方が良いんじゃないかな？」

どうしたいか……

どうなりたいか……

「自由に……周りと同じように過ごしたい……」

一度死んだのに

「大きな隠し事もせず……」

望みすぎだろうか

「貴方の鎮守府のように、家族のように……」

それでも……

「楽しく過ごしたい」

驚くくらいスルッと口から出てくる言葉。それを聴いた提督が笑う。

「ハハハ！ そうか、あの子達の中に混まざりたいか！ なら自分から行動しなければいけないね」

「でも……自分は……」

それでもやっぱり、中身は中身で——

「まだ中身を気にするのかね？ 私から見たら、君は只の艦娘に見えるけどね。さつきも言ったように中身なんて見えないんだから」

そりゃあそうだ。でもずっと女の振りつてのはやっぱり疲れる訳よ。

「疲れる？ じゃあ手を抜いてしまっても良いんじゃないか？」

……提督の顔も随分と赤くなっている。気の所為ではなく話し始めた時よりも饒舌だ。

心なしか悪戯っぽい、ちよつとワルい笑顔を浮かべている。

「例えば口調だ。天龍を見て見なさい。そんなものはただの個性だよ」

なるほどと俺が納得してる間に提督が立ち上がり、「付いて来なさい」 って言つて部屋を出ていく。

建物の外に出て、ちよつと歩いたところにある木造建築。

「『居酒屋 鳳翔』……」

灯りに照らされた店……だろう。居酒屋の中からは結構な人数の話し声がある。

「入ろうか」

楽しそうに笑う提督の顔は、間違いなく下らない悪戯を楽しむ一人の男の顔だった。

ガラガラ——

「ギャハハ——」「良いねえ〜！」「——んですか、もうっ！」

「お待たせしました！」「ん、ありがとー」「Zzzz……」「追加あ〜！」

扉の先にあつたのは……混沌カオスだった。

上品にお酒を飲んでる人も居るけど、やっぱり目に入るのが、畳の上でバカ笑いしな

がら下品にお酒を飲む人達。……何アレ。海賊？

その他にもテーブルに突っ伏して寝ている人、食器類を積み上げている人、女性にあらゆるまじき座り方で椅子に座る人……。

居酒屋 鳳翔 っである位で、鳳翔さんは非常に忙しそうにしていて、入って来た俺と提督に気が付いてない。鳳翔さんが、騒ぐ彼女たちに忌避の視線を向けていないことから、これがデフォルトなのだと悟る。

「ほら、案外こんなものだよ」

「……参りました。……ただ、流石に一人称が俺は抵抗が大きすぎるので……私か自分で良いですか？」

「それを決めるのは私じゃない。君だよ「あーっ！ 提督じゃんー」君も楽しんでね」
そう言い残して連れ去られてしまった提督から取り残されて、入口で佇む俺。

「……」

目の前には、先ほどの光景に加えて、表面張力が仕事をしまくっているグラスを苦笑いしながら受け取っている提督の姿があった。

「……提督、大変申し訳ありません」

近くに寄ってってそう言う。それが聞こえたのか聞こえてない振りをしたのか、酒を口元に運んで周りに囁し立てられていた。

「プツ……アツハハハハハ！」

面白くて笑つてしまう。提督が艦娘に煽られてやがる！

お酒の席は完全に無礼講。覚えたぜ。

……ちよつとネガティブになってたかもしれない。酔いも醒めて来たかもしれない。

「私も混ぜてください！」

今くらいは、何もかもを忘れて楽しもうかな。

「あつという間だったな……」

佐世保鎮守府に戻ったと思つたら、ちよつとゆつくりしただけで、それ以外は専ら準備に追われていた。

これでも封筒の中身から考えると相当楽な分類だろう。

めつちや簡単に言うと、「引越し」だ。与えられた自室に殆ど物が無かつた俺は幸

運だろう。

そして、口にも出てたがあつという間だった。東京駅で迷わなければもうちよつと余裕を持って到着できたものを……おのれ日本のダンジョン……。

「それにしても……強引だなあ、君も」

肩に乗ってるのはいつも工場に行くときと偉そうに踏ん返り返っている妖精さん。どこから聞きつけたのか、付いていくつていう断固たる意志を持っていると確信できるレベルでくつついてきた。今回は鞆の中……ではなく服の中から出てきた。……もう何も言うまい。

そんなちよつとゲツソリした俺の見えるところに

【大湊警備府】

新しいスタートラインが 目の前に。

4章 〈幕間〉

・会議 黒幕と主人公

とある部屋には人が集まっていた。それなりに広い部屋で椅子の数も十分なのに「何故か」部屋の両側の人口密度が高く、逆に間の空間には誰も座っていない。

そんな二つの集団が睨み合っているような剣呑な空気の中、一人の男—— 司会役が口を開く。

「皆様、忙しい中お集まりいただき有難う御座います。失礼ながら、前置きは省略させて頂きます」

実に簡潔な挨拶と共に議題に入ろうとする司会役の男は、手元の資料を見たまま顔を上げずに話し続ける。

部屋の中に集まっていた人の中で彼の立場や地位は低く、彼自身も今の役割を誰かに押し付けられたのだろう、緊張からか額から冷や汗や脂汗を滲ませながら喋る彼の「出来るだけ早く終わらせてしまいたい」といった願いが感じられる実に素早く、どこか投げやりな進行に……ついに文句は飛んでこなかった。

「……皆様の耳にも既に入っていることでしょうが、今回の議題は、『佐世保鎮守府に配属された黒川提督が、艦娘の手によって殺害されたこと』となります。お手元の資料をご覧ください」

そう司会役が言う前、既に資料を捲る音が部屋に満ちていた。あちらこちらから感心するような呟きが漏れるのは、資料の準備もさせられていた司会役の男の資料が上手く纏められていたのか、それとも別の理由があるのか、司会役の男には分からなかった。だが、それだけでも彼の思考を乱すには十分過ぎたようで、

それでも男は司会をしなければいけない。それなりの室温だというのに震えが止まらない唇から、言葉を出し続ける。

「先日……」

「……以上です。質問や意見はございませんか？」

三十分くらい経ち、彼の手元の資料カンベが手汗でふやけて来た時、佐世保鎮守府に行った憲兵と不知火の話から纏めた情報が出尽くしたことで区切りのような雰囲気になった。

ここまで大きな失敗をしていなかった彼からは安堵している様子が窺える。既に殆どの人が彼への興味を失くし、反対側の集団へと穏やかではない視線を送りつけてい

る。

彼は「一区切りした時にはだいたい仲間割れし始める」という「心優しい」同僚からのヒントを信じ、必要最低限の質疑応答の資料しか用意していなかった。用意する時間が無く、これしか用意出来なかつただけかもしれないが。

「ふうむ……この艦娘、スチュワートと言ったな？」

一つの質問が司会役の男に飛んでくる。

「はい、アメリカの旧式の駆逐艦の艦娘であるようです。現在は、この大本営で謹慎しているとのことですよ」

「何だ?!今すぐ解体処分すべきだ!」

質問をした男が返答を聴いた瞬間、勢いよく椅子から立ち上がり、顔を赤くしながら反対側の集団に向かってそう怒鳴り散らした。

予想外の反応だったのだろう、司会役の彼は自分に向けられているものではないと感じながらも、怯んで動けなくなってしまうていた。

「……全く、司会進行の話や手元の資料を見たら黒川提督に問題があつたことなど一目瞭然でしょう。貴方は一体何を見てたんですか？寝てただけでも？」

反対側の集団からはこのような言葉が出てくる。非常に冷静にそう答える男からは、解体処分と言った茹蚰のように真つ赤な男とは対照的に、白イカのような涼やかな印象

を感じられる。

司会役の彼は、このやり取りが引き金となって口論が始まり、徐々にヒートアップしていくにつれて存在感が薄くなっていき、遂には誰の視界にも入っていないと確信できてしまっていた。

「どうしよう……」

確かに彼の目の前に広がる光景は、艦娘と黒川提督のどちらに今回の一件の責任があるかを、両陣営が互いに押し付け合っているように彼の目には映っていた。

それは正に彼が聴いていた「仲間割れ」という言葉にピッタリで、彼よりも遥かに偉い立場の人たちの矛先が、間違っても自分に向けられないよう、彼は艦娘を擁護する側の後ろの隅に移動し始めた。

「ふう……」

本来ならばやってはいけない司会進行の放棄。だが、忘れられているならば落ち着くまでは休めるだろうというのが彼の考えのようだ。

口論は終わりが見えないまま、両陣営の意見は平行線のまま続いていく。

「……君。司会進行だよね？」

「うわっ!?! ……は、はいそうです!」

彼に話しかける人が居た。

謝罪しようとした彼を手で制した男は、彼の隣まで椅子を引つ張り腰を下ろした。

「……見たところ君は研修生だね？」

「そ、その通りです」

「この話し合い、君はどちらに責任があると思う？」

一つの質問が彼に投げかけられた。

「……自分は、黒川提督のやり方に問題があつたと感じます」

「理由を訊かせてもらえないかな？」

返答する彼には迷いは見えず、理由を訊いてくる男。

「まだ研修中の身ですが……。ええと、今の艦娘は皆知らないだけで、艦娘、ひいては妖精と何かしらの条約のようなものがあつて、内容は提督に就いた人に知らされると聴きました。……これは自分の予想ですが、条約の内容は『人として扱うこと』だと思いません」

「どうしてそう思つたんだい？」

「えつと……深海棲艦と言う脅威が世界中にあつて、一刻も早くソレを取り除きたいならば、今頃艦娘と言う存在を最大限活用するマニュアルなどが作成され、それに則つた運用がされていてもおかしくはないと思ひました。」

ですが、実際には横須賀鎮守府の様子や、資料にもある以前の佐世保鎮守府の様子から、艦娘を機械のように扱うような様子は見られませんでした。

このことから、最も効率の良い深海棲艦撲滅をしようにも出来ない状況であると、以前から予想していました」

彼が自分の考えを男に話す。すると男は嬉しそうな顔をする。

「うん。……それに、黒川提督のやり方は、最大限活用するにしても杜撰すぎる。艦娘を道具だとしても、普段からの手入れを怠つたらまともに機能しないのは常識なのにね。今回は見事、手に持った銃が爆発したようなものだど私は思ってる」

「……」

黙る彼の手を取って男が立ち上がる。そのまま男は彼の腕を掴んだまま両陣営の間の通路に向かって歩き始めた。

「えっ!? あのこと……」

「全員、よく聞いて欲しい!」

大声で互いに口撃しているんがいないかと疑われるくらい白熱し騒がしくなった部屋に、更に大きな声と共に目立つ場所へと躍り出た二人組。

予想外のことに部屋は先程までの喧騒が?のように静まり返る。

「なっ……何ごと——」

「今私の隣に居る彼は、実に素晴らしい回答を私にくれた！ 艦娘反対派の皆様、忘れて
いるんじゃないですか？」

男は艦娘反対派と呼ばれた陣営の方を向く。

「艦娘というのは！ 元々妖精のモノで、我々は指示する権利を与えられているだけだ
ということを一！」

ちよつと偉そうな男からは、有無を言わせない気迫が発されていた。艦娘反対派の方
からも、親艦娘派の方からも、騒めき一つ聞こえてこない。

「……隣の彼は、まだ研修生だ。そんな彼でも分かっているのに……いいですか？ 艦
娘は、内容までは言えませんが、*“条約”* によつて守られています。そして今回の
一件、黒川提督の行いは条約に抵触している可能性が非常に高い。ほぼ百パーセントと
言つても良い」

「……だが殺すのは良くないだろう」

艦娘反対派の中心に座っていた男、リーダー格だと思われる男が口を開く。
司会役の男は、もう何が何だか分かっていなかった。所謂パニックだった。

「ええ確かに殺すのは問題があると思います。ですが、そもそも黒川提督を配属させた
我々にも問題があると考えませんか？」

「ふむ……確かにその通りだな。君達には——」

再びギスギスしてきた空気の中で、相変わらず話を続ける男に肩を持たれた彼は、混乱のあまり無に帰ろうとしていた。

そんな彼は「どうしてこうなった」と心の中で叫んでいた。

虚空へ消えようとしていた彼の意識が再び部屋に戻ってきたのは、再び腕を引かれたからだ。

「ほら、司会進行は君だろうか？」

「え……」

「大丈夫だ、件の艦娘を解体することに賛成の人らについて言っておけば何とかなる」
「え……」

それからは何も言われず、背中を押されて最初に居た位置まで戻ってくる。

「で、では……件の艦娘を解体することに賛成の方は、拳手をお願いします」

彼が、言われた通りに採決をとる。

手を上げる人は殆ど居なかった。

これで今回の艦娘の処分についての話し合いが終わった形になったと、確かに何とかなったと、彼は安堵した。

「それでは皆様、長時間の討論、お疲れ様でした」

彼がそう言うのと、忙しそうにそそくさと出ていくもの、悪態を吐きながら部屋を出ていくものと様々だったものの、そう時間が経たない内に人が居なくなつた。

「今から後片付けか……」

そんなことをを吹き、手際よく椅子と机を元通りに並べていく彼。元はと言えば直感に優れた同僚から押し付けられた仕事であり、本来彼は休日だったのだが。

「それでも偉い人相手にイライラした感情を向けるのは違うよね……」

そう彼落ち込みながら最後にスクリーンを片付けているときだ。

「君は中々見所があるね。もし良かったら、先日の会議で決定した大湊警備府に提督として配属されてみる気はないか？」


「……」

背後から突然声を掛けられた。

突然の事に驚いたからか、それとも内容が突飛過ぎて理解できなかったからか、それとも上手く聞き取れなかったからか、或いは全部かもしれない。彼の口からは呼吸さえも出ていなかった。

「ああ、今すぐ答えろとは言わない。それで聴いておきたいんだけど、君の名前は？」

「自分は——」



ここからは次の物語

未完成 file スチユワート

—— アクセスを確認しました。有意義に取り扱ってくださることを願います。

このページは『艦娘』のプロフィールとなっています。
元になる軍艦の情報、更に詳しい情報が欲しい場合は、直接本人に問う、若しくは各

自分で調べてください。

※この艦娘は不明な点が多く、未だこのページは編集集中です。

基礎情報

経歴

能力試験結果

関連

その他

基礎情報

名前 スチュワート

艦種 駆逐艦

出身 スラバヤ本人の記憶がハッキリしている場所がスラバヤだった為

所属 無所属 ↓ 佐世保鎮守府 ↓ 大湊警備府

就役 6月〇〇日佐世保鎮守府は非公式。正式に所属したのが大湊警備府の為

本人記入欄

身長 非公開希望

体重 非公開希望

好きな食べ物 冷たくて辛い物

嫌いな食べ物 熱くて冷め難いもの、脂っこいもの。

好きな事 面白いこと

嫌いな事 退屈、理不尽

特技 英語は通訳も可能だと思います。

特徴 盾は唯一無二？

閲覧者に一言 テキストが入力されていません♡—

経歴

5月??日 スラバヤにて建造される。日本へ向けて移動を開始。

5月??日 フイリピンに到着。

5月○○日 日本の排他的経済水域の僅か外で駆逐棲姫と交戦し敗北。偶然近くに居た佐世保鎮守府の艦娘に保護される。

6月○日 佐世保鎮守府で演習、夜戦、秘書艦業務を行っていたと分かっている。

6月○○日 黒川提督を殺害。大本営へ移送される。

6月○○日 謹慎中に、許可を得て練習巡洋艦（以下教官）と訓練などを繰り返す。

6月〇〇日 佐世保鎮守府を離れ、大湊警備府に初期艦として配属

能力試験結果

戦闘能力 執務能力 護衛能力 備考

戦闘能力

攻撃能力 可 まだまだ粗削りなものの光るものはあります。チャンス逃さず、思いきりも良い。但し、攻撃のことを考えるあまり特攻しやすい思考は要矯正です。

生存能力 優 機動力が高い駆逐艦らしく回避すること “当たらない” 立ち

回りに加え、それでも当たりそうな玉は器用に弾く等、生存能力は高いと判断出来ます。

継戦能力 可 長期間の戦闘続行による体力面は問題ありませんが、集中力の乱れが目立ちます。これから期待したいです。 対応力 可 最終的には様々な状況

に対応出来たのですが、少々時間が掛かるように感じます。実際に出撃を繰り返すことで対応力を身に付けて欲しいです。 その他 不明 演習の際、自分の出来ることか

ら作戦に案を出したことが評価出来ます。 総評 全体的に経験が浅い為、一般的な

艦娘との比較が難しく、下記の備考の内容も相まって、評価することが至難を極めます。

備考 後に分かった事ですが、盾やその他類を見ない装備をしているとのことで、

上記の評価があまり当てになりません……。

執務能力

執務速度 優 書類を捌く速度は文句無しです。 正確性 良 速度を気にし

過ぎている節があり、勿体ないミスが見受けられます。落ち着いて作業しましょう。

集中力 良 集中力も素晴らしいの一言です。但し、集中し過ぎる余り周りが見えなくなることは改善点です。 快適性 落第 必要最低限の会話もするか怪しく、機械

のように動き続ける様では、一緒に作業する人のストレスになります。もつと明るい職場を心がけてください。 総評 一人で作業をさせるのならば文句無しです。作業

時間にもつとゆとりを作ることで正確性の上昇が見込めます。ですが、複数人での作業の適性が絶望的に低いです……。 備考 要改善 作業中の会話や適度な気の抜き

方を誠心誠意 指導中です。

護衛能力

陸上戦闘能力 標準 素人だった為、一般成人男性は鎮圧出来るように教育済。

護衛適性 標準 特筆すべき点は無し 総評 本人に経験が無く、期間も短すぎた。今後に期待したい。 備考 初動が遅いと言った欠点があり、指摘済。改善するかは本人次第。

備考

艦娘訓練カリキュラムに則った訓練と能力試験を兼ねている。

戦闘能力試験官 香取

執務能力試験官 鹿島

護衛能力試験官 神州丸

その他協力 まるゆ あきつ丸 佐世保鎮守府の艦娘

本人がまだ経験不足の為、正確な評価が出来ない。

関連

佐世保鎮守府

・ 田代提督 …… 曰く「大本営から帰ってきて少し成長した」らしい。

・ ある妖精 …… スチュワートが来てから、提督からの接触到に感じなくなった。但し、悪意の類は一切ないことは他の妖精からの証言から分かる。

・ 夕張 …… 盾を作った後設計図が消え、その後は盾を作れなくなった。

・ 満潮 …… 軍艦時代通に因縁があったようだが、現在は折り合いが付いている。

・ 赤城 …… 演習で敗北し、スチュワート撃破に並々ならぬ熱意を込めている。

・ 黒川提督 …… 杜撰な鎮守府運営の末、スチュワートより殺害された。

大本営

・ 香取 …… 駆逐艦らしくない立ち回りの疑問が最近解けた。

- ・鹿島 … 曰く「絶望的」な愛想の悪さが、急に改善されて一安心している。
- ・神州丸 … スチュワートより師匠と呼ばれることを実は嫌がっていないらしい。

その他

- ・艦娘スチュワートの基となった軍艦は間違いなくDD-224。
 - 米軍の クレムソン級駆逐艦 スチュワート と見て間違いない。
 - ・しかしながら、アメリカに連絡をしても「知らない」の一点張りである。
 - このことから、スラバヤで彼女を建造した妖精について訊いたのだが、
「亡くなったので会えない」と言った回答が得られ、進展は無いと思われる。
 - ・何と言っても彼女の特徴は手に持つ盾、そして投擲物である。
- 砲の代わりに盾を持っている為攻撃力自体は低いものの、防御力のかの赤城に敗北感を植え付けるレベルである、と言ったらどれだけ突破が困難か分かるだろう。
- ・今のところの弱点は複数人で囲む、防ぎ辛い魚雷で攻撃する、等がある。
 - ・上記のことから、盾や投擲物に目が行きがちだが、香取の下した判断から察するに、
一般的な艦装の運用も標準かそれ以上のようなようだ。
 - ・投擲物は彼女専属と言っても良い上記の妖精しか作成出来ず、普及は難しそうである。

・効果が汎用性の高いものだったり、唯一無二の物であるばかりに、普及できないのは痛いところ。

・本人記入欄の辛い物好きは事実で、佐世保鎮守府では彼女の作った激辛カレーを曉が泣きながら食べている姿が目撃されている。

・現在、1年間の出撃禁止といった罰が下されているらしい。

新環境

着任！

〔大湊警備府〕

そう見える建物まで歩く。

心機一転、とは間違つても言えない心情だ。こう……やる気がイマイチ出てこない。どれもこれも佐世保鎮守府の居心地の良さが悪い。

今すぐ佐世保に引き返してえなあなんて囁く頭の中の悪魔は、罰はしっかり受けな
いといけないなんて言う別の悪魔天使から分の悪い戦いを強いられていた。

「あそこで一年間引きこもりの刑か……ハア」

溜息を吐く。俺は自称引きこもりなのであって、普通に散歩とかしてた所謂アクティ
ブ陰キャなのだ。そんな俺が一年間も鎮守府から出るな！ なんて言われたらどうな
るか……間違いないくゆで卵が破裂するように限界を迎えるだろうことは想像に難くな
い。

「どうにかして暇つぶしの方法を見つけなければ……！」

どんな人がここの提督になるかは分からないけど、どうも大本營の偉い人が決めたと

ぼいし、きつと「真面目」が服を着て歩いていような人なんだろうなあ……。

そうなると俺の退屈がマツハだ。つまり暇潰しを探すことは急務だ!

「でもそう都合よく転がってたりはしない……ん?」

恐らく入口だろう場所には人集りひとだかがあつた。前世ならまだしもこの世界には深海棲艦がガチで存在するんだし、まさか観光ツアーか何かな訳無いだろう。

近づいてみると、憲兵と……一般人だった。何やらちよつと揉めている様子。穏やかじゃないけど……青森県民の皆様は何故ここに?

「——船——!?!——ツ!——」

ちよつと耳を澄ませて聴いてみようとしたけど……分かんね! 波の音と風の音しか聞こえて来ねえ! 何かを言ってるのは分かるんだけど、何を言ってるかはさっぱりだ。

……でも、一応俺もこの住居者になるんだし、地域住民って言うお隣さんとは揉めたくないなあ……。仕方がないけど、接触するか。どう足掻いてもあの人達と憲兵を無視して入れそうにないし……。

「——!——なんだべが!?!」

うくん……揉めてるのは大体おじちゃんおばちゃん達か……あ、憲兵さんチーツス! くないしたん? まあ会釈は返すけど……あ、憲兵さんの会釈でみんなこつち向いた

!

えっ……まさかいきなりタゲが俺に移るとか想定外。モンスタートレインだけは勘弁して欲しかった……。話の内容全然分からないんだけど、どうしろと!?

「おおうっ! めんこい女おなんごの子だの。……まさか艦娘だべが!?

「ふえっ!?!」

ん〜ん!? 鈍りが強すぎて何言ってるか分からねえ……。多分前半は雰囲気からして容姿を褒められた……。筈。後半は「まさか艦娘ってヤツ!」って意味か?

「え、ええ……。新しく此処、大湊警備府に配属された艦娘ですが……」

そう返すと、一番俺に近かったジャージのおじいちゃんがニカツと笑う。

「ありがてえ……。こいで怯えるごどなく漁ができるなあ!」

そう言つて豪快に笑いだす集団。漁って言つてたし多分漁師だろう。……だけどどうせなら何言ってるか分かりやすい人が居たらと願わずにはいられない。

それに怯えることなく漁が出来る……つて言ったの? 俺一人が居たところで影響なんてこれっぽちも無いんだよね……。そもそも出撃出来ないし……。だから艦娘が建造で増えるまではもう少しの辛抱を続けて欲しい。

「いや〜すみませんねえ。こ此処に新しく艦娘たちが来つどわがつてがら、みんな舞い上がつちまつて……。深海棲艦は本当に怖えんで……。ありがとうございます」

一人のがっしりしたオジサンが話しかけてくる。……なんだよ! 訛りがそこまで強くない人居るじゃん! だったら最初からその人で良くない? いや、おじちゃん達は悪くないよ。

その後、集まっていた漁師の人達はお礼を言って去っていった。台風一過。後に残されたのは俺と二人の憲兵だけだった。

「えつと……新しく此処に配属になります、艦娘のスチュワートです。……入っても良いですか?」

「話は伺っています。念の為、事前に持たされている封筒を見せて貰えますか?」

まあセキュリティ的にフリーパスは拙いよね……。佐世保はこういう人居なかったけどセキュリティ大丈夫なの……?

「確認しました。それでは案内しますので、付いてきて下さい」

「はい、有難う御座います」

そう言って進んでいく憲兵の後ろに付いていき、警備所? の前を通過してとうとう大湊警備府の中に入ってしまった。さあ、これから一年間の引きこもり生活がスタートするぜ。

「あつ」

「どうしました?」

「あ、ああ……お気になさらず……」

ヤツベ……どうせなら入る前に欲しいものとか買っておくべきだったー！　これはやらかし案件だよ畜生！　……しようがないからその内誰かに買ってもらおう。きつと心優しい誰かが買ってってくれる筈だ。

「あつ」

「……今度は何ですか？」

「私に対してはそんな態度でなくて大丈夫です。貴方の方が人生経験のある先輩なんですから」

「……仕事なので」

「成る程。失礼しました」

それからは簡単な説明だけ受けてサラッと全体を見て回り、警備所に戻ってきた。

「これからよろしくお願いしますね」

「（ちらこそ）」

そう言つてから見た感じ無人だった警備府の中に改めて入っていく。建物の形は佐世保と大して変わらないように見えた。現実だったらそんなことは無いんだろうけど……まあ『艦これ』故致し方なしって感じだろうか。でも佐世保と違って「居酒屋鳳翔」が無かったり、倉庫の数や大きさが違ったりはしたなあ……これらはオプシジョンなの

か。

静かな鎮守府の中を歩く。人が居らず活気が感じられない。心なしか佐世保よりも肌寒い印象を受ける。

「提督も居ないとか……問題では？」

そもそもここら辺の海は今まで誰が防衛していたのか……。漁師の喜び方から考えて深海棲艦がほこじやか出てくるって程では無いけど、安全に漁をするには心許ない、若しくは最近になって深海棲艦が見られるようになったか……。

取り敢えず中身、部屋の配置は大体同じだった。

執務室まで歩いてノックする。

——コンコン

返事は無い。

「失礼しまゝす……」

扉を開けようと手を掛ける。——あっさりと開いた。

「……」

電気も点いてない部屋、普段なら一番偉い人が座ってる椅子は空白で机の上にも書類は無く、本棚も空っぽだ。

「……」

窓際まで歩いて外を見る。警備府の一部と海が良く見える。

特に思うことも無いから窓から離れて、改めて無人なのを確認してから提督が座る椅子に座る。

「う〜ん……」

革特有の感触が微妙に気に入らない。ガッツリ堪能しようと思つてたけど、これはちよつとなあ……。数回跳ねる様に動いたら興味が無くなつたから引き出しを漁る。

「目星技能は〜……七十五おー」

一番手に掛けやすい引き出しには封筒が入っていた。目星は成功したみたいだ。

出て来た封筒はご丁寧に付箋で「提督用」と「初期艦用」で分けられている。

「俺の動きは読まれている……?」

そうじゃなかったら態々引き出しに入れて机の上に置くとか、警備所に預けるとか……やっぱり盗難とかあつたらどうするつもりなんだろうねえ……。

初期艦用の封筒を取つて空ける。

「えっ、ええ〜……」

中に書いてあつたのは、明日の朝に提督がそちらに到着するつて情報。

「初ミッションはまさかのおもてなしか……」

だから俺がここに来るように言われたのが今日だったのか……。

更に読むと、今日から各鎮守府から数人ずつ手助けに来てくれるらしい。これは有り難い。

そして、提督が来てからは提督の指示に従うこととある。

「ハンツ、舐めんな。超絶イイ子ちゃんに徹してやるから見てろよ……なあ、妖精さん？」

佐世保から付いてきた妖精さんに向かってそう言う。すると「そうだそうだ」と言わんばかりに首を縦に振っている。

でも、『艦これ』的テンプレートに則って、やらなきやいけないことがある。

椅子から立ち上がって執務机の前へ移動する。

「駆逐艦スチュワート 着任しました。よろしくお願いします」

そう言って敬礼をする。

(それは陸軍の敬礼ですう……)

……何か聞こえた気がするけど、まさか霊的なナニカが出るとかは無いでしょ。

部屋も綺麗だし、今日はこれから来る艦娘の受け入れかなあ……。

応援到着！

今日はこれから来るだろう他所の艦娘の受け入れ。やることは決まっても俺がリアクション側だから待つ以外に出来ることが無く、汚れる原因が無いから廊下も綺麗で掃除は要らないし、食べ物買い出しで外出するのは論外だ。

「やることが……無いっ！」

そう叫びながら机に突っ伏していた顔を上げる。妖精^{ホモ}さんも机に大の字で倒れている。艦装の修理とか無くて暇だろう？　なあ？

因みに妖精さんの渾名の理由は簡単。俺の中身が男で、此処に来るときに無理矢理付いて来たから。まあ、妖精^{ホモ}さんの性別なんて分からないけど、なんか男っぽいし……男と男(?)がくつついたならそれはもうホモでは？　っていう死ぬ程どうでもいい理由だ。もっと良い感じの渾名を思いついたらそっちにしようと思ってる。頑張れ未来の俺。

「あ、そうだ」

工廠に妖精さん連れてけば良いじゃん。さつき見て回った時、工廠には妖精さんの姿あったし。持って来てた盾とかのメンテもついでにして貰えば暇も潰れて一石二鳥だ。

「じゃあ工廠に行こうか、妖精さん」

その言葉でゾンビが動き始めるように緩慢な動作で動き始める妖精さん。……もうちよつとシャキツとしてくれない？ 俺だつて今はやること無さ過ぎてやる気が出ないんだからさあ……。

「たのもー!」

工廠に柔道破りみたいな宣言をして入る。

明らかに佐世保よりも少ない妖精さんの数。執務室も物が無くて広いなくとは感じただけど、工廠は輪をかけて広く感じる。一番は修理中の艦装や、予備の艦装が置かれていないこと。一つ一つが大きい上に数があつたから……。正直工廠つてこんなに広かつたのかと最初は驚いた。

そんなことを思っていたら足元に妖精さんが集まってくる。少しでも視線の高さを合わせようと俺も屈む。

「は〜い。今日からここに来たスチュワートです〜。あ、コレは佐世保鎮守府から付いてきた妖精さんですね。これからよろしくお願いします」

そう言つて肩に居た妖精^ホさんを掴んで床に置く。そして持つて来ていた艦装を渡す。

「二年間は出撃禁止つて言われてるから、自分の艦装の修理の優先度は低めで大丈夫で

すよ」

……確かどつかの国では妖精にはミルクとか甘味とかをお供え……お礼になんかするんだっけ？　じゃ俺は暇があったらブラウニーでも作つかな。混ぜるとオーブンが面倒だけどそれ以外は割と簡単なんだよねアレ。

♪「スチュワートさん、お客様がお見えです」

「ぬ……」

呼び出しとか学生生活以来だなく……クツソ懐かしくて笑うわ。

それにお客様……十中八九どつかの艦娘だろうな。待たせる訳にはいかないから迅速且つ素早くスピーディーに行こう。

「お待ちせしました！」

ものの数分と経たずに警備所に到着した。警備所から見えないところでは全力疾走して時間短縮、見られそうなどころでは歩いて少しでも良い印象を与えられるように頑張った。

警備所で待っていたのは鮮やかな赤い髪が特徴的な人と、大人しそうな人。間違いない艦娘だろうけど、公共機関で移動してきたんだろう、目立つ服装ではなく私服だった。「そこまで待ってないから気にしないでいいわ。私は横須賀鎮守府から応援に来た伊一

68。イムヤで良いわ。それでこっちが——」

「同じく、横須賀鎮守府から応援に来た伊良湖です。よろしくお願いいたします。」

イムヤと伊良湖は横須賀から来た、覚えたぞ。

それで……近くにあるデカイ荷物は一体？

「ご丁寧ありがとうございます。それではご案内させて頂きますね？」

キャリーバッグなんて目じやないくらいデカイ荷物からは目を逸らす。気にしたら負けだ。俺だつて艀装とか持つてくるのに馬鹿みたいにデカイバッグを借りたんだ。……でも、俺の艀装よりも更にデカいとかどうなつてんだよコレ。手荷物つてレベルじゃねえぞ……。

「あ、待ちなさいよ。どうせ他の鎮守府の人も来るんだし、全員集まつてからの方が良くない？ 何回も繰り返すのはメンドクサイでしょ？」

「え？ 良いんですか？」

「大丈夫よ。伊良湖さんもそれで良い？」

「はい、大丈夫です」

警備所の前で待つこと十分。その間にイムヤと伊良湖から質問を受けていた。当たり触りの無い質問しかされなかつたから、もしかしたら俺のやらかしはお偉いさんに握

りつぶされた可能性があることが分かった。

「——そうなんですよ！……あ、来たみたいですよ！」

他の人が来たことに伊良湖が気付いて声を出す。視線を前に向けると、そこには視界一杯に広がる紺色。

「ぴよおおおおおおん！」

「え、ブツ！」

直後に全身に衝撃を受けて倒れこむ。体は痛くないけど尻餅ついてケツが痛い。地面がコンクリじゃなかったら服まで汚れていたと考えるとまだマシかもしれない。

「卯月、どけよ……どいてください」

何とも特徴的な言葉、タツクルをかますアクティブさ、前者の時点ではほぼ確定してるようなもんだけど、心当たりのあるのは卯月しかない。

「スチュワート！ 聴いて欲しいぴよん！ 佐世保から誰が応援に行くかで夕張が——
「そこまでよ。久しぶり！ スチュワートさん」

ヒョイト、卯月が持ち上げられて体に自由が戻ってくる。摘ままれて一段と小さくなっているように見えるのは気のせいかな？

そして卯月を持ち上げているのは長良さん。襟をガッチリと掴んでいて離す様子はない。青い顔をして藻掻いてるように見えるけど……ギャグ補正か何かでしれつと

戻ってきそうだし放っておこう。

「あの……私たちも挨拶させてもらっても良いでしょうか……?」

「あつどうぞお!」

聞こえて来た声に脊髄反射で応える。

「舞鶴鎮守府から応援に来ました。大鷹です」

「同じく舞鶴鎮守府から来ました五月雨です。よろしくお願いします!」

そう言つて深々とお辞儀をする二人。

バサバサバサツ

大量のファイルが降つて来た。

出所は……五月雨の背負つていたバッグと見て間違いないだろう。

「うわあああああつ! ごめんなさいっ!」

慌ててファイルを拾い集め始めた五月雨。ファイルは皆で集めたのですぐに集まつたが、最後の最後に風で一枚飛ばされていった。

「だ、ダメです!」

五月雨が駆けだして……何かに躓いて転んだ。

「……………」

大鷹さんが溜息を吐いて、他の人は優しい顔をしている。

俺も悟る。五月雨は……少しおっちょこちよいなところがあるらしい。見てて飽きないから退屈しないと言うか……心配で目が離せないと言うか……。

「私たちも挨拶させてもらえない?」

「巻雲ちゃんも、衣笠さんも待ちくたびれたよ」

それぞれが違う想いをしながら、飛んでる紙を追いかける五月雨を眺めていると、声を掛けられた。

「私たちは呉鎮守府からの応援だよ!」

これはまた……濃い人たちが来たなあ……あんまり興味ないけど呉鎮守府ってどこ? あとついでに舞鶴鎮守府もどこだよ。

「……ありがとうございます。……これで全員揃いましたか?」

でもそれはそれ、これはこれ。お礼を言ってから確認する。鹿島さんも四つの鎮守府以外の名前は出してなかったし、多分全員居るでしょ。

「全員居るみたいね」

「五月雨ちゃんが戻ってきたら、移動しましょうか」

一番大人な衣笠さんと長良さんが真っ先に何をするかを決定する。物凄く頼りになる。

「じゃあ取り敢えず食堂に移動しましょう」

お陰で後は乗つかかるだけで良い。……本当は俺が一からあれこれ指示しないといけないんだろうけど……艦娘の常識なんて相変わらず持ち合わせて無いんだ……許して欲しい。

「はあ……はあ……遅くなりました！ ごめんなさい！」

五月雨が戻つて来た。始まる前から既にポロポロだけど大丈夫なのコレは……。

兎に角、五月雨が物言わぬ紙と追い駆けっこをしている間に決めておいた移動先、食堂に向かう。

「スチュワートさん！ 私、舞鶴鎮守府で初期艦だったんです！ ……えへへ、初期艦の

先輩ですね。何か訊きたいことがあったら頼ってくださいいね！」

「分かりました」

移動中に五月雨が嬉しそうにそう言うて来るが……不安だ。本当に頼ってしまつて良いのか？

提督 見ゆ！

「応援で来てくださった皆さんは何をして来いとか、具体的に指示されてるんですか？」
時間は昼前、ちよつと早いけど食堂に集まつて昼食を食べている。

「そうね、私達は横須賀鎮守府……と言うよりは、大本営からの指示に近いわね。私は置
いというて、伊良湖さんは鎮守府の衣食住を支える為にここに来てる感じね」

それはまあ……何となくで分かった。佐世保でも間宮さんと一緒に厨房に立つてたし、今俺たちが食べている昼食だつて伊良湖さんが準備してくれた。

「それで、私達の持つてきた荷物は資材よ」

資材つてあの……臭くてドロドロしたアレとか、滅茶苦茶重たいアレとかでしょ？
「……スチュワートさんが考えてるのは集める時だよ？ それとは違うから大丈夫」

長良さんと遠征に行ったときのことを思い出して渋い顔をしてたらしい。長良さんが訂正してくれる。

どうやら遠征で集めた資材はそのまま妖精さんに預けられて、なんやかんやあつて精製されるんだとか。なんやかんやつて……滅茶苦茶フワツとしてるけど、妖精さんの多分企業秘密つてことだろう。

實際デカいバッグから出された弾薬は錆び付いてるソレではなく、ドラマとかに出てきそうな綺麗な金色になっていた。

「うーちゃんはスチュワートの見張りだびょん！」

綺麗なモンだなくなんて感心していると、横から卯月が聞き捨てならないことを言うてきた。

「は？」

おつと思わず素が。見張りって何だよ？

「スチュワートが変な無茶をしないようにするために見張ってるびょん！」

「勝手にこう言ってるだけだから気にしないで。私と一緒に遠征で資材集めよ」

じゃあ何時ものことだろうし放っておこう。あとはアレか、人数少ないから賑やかしても兼ねてそうだな……。

「大鷹さんは近海の見張り役で、私は初期艦としてのいろはを教える為に来ました！」

五月雨が言う。空母、軽空母の見張りは多分テンプレなんだろうな。実際範囲が広いだけあって効果的だし。それと五月雨は言葉で説明するだけで大丈夫だ……頼むから動かないでくれよ？ 伊良湖の料理手伝うって言って指切ったの知ってるからな？

「衣笠さんは基本暇かな。精々漁船の護衛か、みんなが相手するのキツイのが出て来た時に動くくらい」

「じい……ハッ!? 巻雲は……遠征か近海の哨戒をフレキシブルに対応します!」
虚空を見つめていた巻雲が衣笠さんに突かれて戻ってくる。アレだな。猫が何も無いところを見つめるアレ。

一通りの紹介が終わった。物凄く貧弱な配置だけど人数が少ないから仕方がない。でも近海での漁は比喩物にならないくらい安全になるだろうし、イムヤと長良、卯月が居るから資材の確保も大丈夫……だろう。でもこの辺は明日来る提督に任せよう。ド素人の俺が軽率に手を出しちゃいけないヤツだ。

「じゃあ五月雨さん。この後何をしたら良いか分かりますか?」

頼られたからか、五月雨が嬉しそうに答える。

「はい! まずは大淀さんと明石さんの建造からですね!」

「その前に食器の片付けをお願いします」

厨房から会話を聴いていたであろう伊良湖から声が掛かる。素早く五月雨の食器を回収した俺は、何食わぬ顔で食器を片付け始めた。

「ええと……どこ行っちゃったんだろう……あつた!」

工廠に移動してから、背負っていたバッグを漁り始めた五月雨。横須賀から来た二人

が持ってきたデカイ荷物は俺が運んできた。……まさか台車に乗っていたとは。気が付かなかつたなあ……。いや、あんなの持てる訳無いって常識的に考えたら分かるだろうに……。バカか俺は。

目的のものを見つけた五月雨が、ソレ——何かの紙を妖精さんに渡し、確認した妖精さんたちが大量の資材と共に工廠の奥へ消えていった。

工廠の奥にあったシャツターが閉まっていき、完全にシャツトダウンされてから五月雨が言う。

「……これで大丈夫です!」

本当か? 信用していいの?

「……ところで、今妖精さんに渡したのは何ですか?」

「大淀さんと明石さんの設計図です!」

「……」

スゲーよ……誰かの設計図なんてサラツと言えちやう辺りやっぱり違うわく……

あまりにもサイコな言動にドン引きしつつ、悟られないように適当なアクションとして咳き込んでおいた。

「……それで次は何をしたら良いんですか?」

「とりあえず食堂に戻りましょう。皆さんも待っている筈です」

布団の中で一日を振り返る。

「どうせ忙しくなるのは明日からだし、今日は早く休みましょう」という提案で割と早い時間からこうして俺を含め、各自適当な部屋で休んでもらっている。

……結局、佐世保鎮守府と舞鶴鎮守府から運ばれてきた資料の片付けは、五月雨と、長良さんが手伝ってくれた。その後は本当にやる事が無くなったので、大鷹さんと一緒に海を眺めていた。

話によると、今までは横須賀鎮守府が態々ここ、青森の辺りまでカバーしていたらしい。

素人の俺でも分かる通り、そんなアホくさい問題を偉い人達が見過ごし続ける筈が無く、大湊警備府をくって話らしい。

それでその時にこの辺のカバーをしていた艦娘達の休む場所が何故かここ、大湊警備府だったらしい。

「なんで岩手とかじゃなくて態々青森……」

偉い人達の崇高、且つ深慮極まる考えは俺には分からなかった。

「後は……日記でも書いてみるか?」

これは衣笠さんに言われたことだ。続けられると案外楽しいらしい。正直三日坊主になるのとは予想してるけど……今は時間があるから持つてきていらノートを開く。

——今日は初期艦として大湊警備府に配属された。特に書くことが思い浮かばない。これを読んでる未来の自分は初心とかを忘れていないだろうな?」

「フウー! 何だこれ……タイムマシンみてーだな……」

滅茶苦茶中二臭くて、見返して笑った。でも後で見ると恥ずかしさのあまり首吊りまであるから、このページを破ってからゴミ箱に入れた。

確かに暇潰しには良いかもしれない。

「……寝よう」

窓から見える夜空の星が綺麗だった、まる。

朝、目が覚めて、暫くの間、夢と現の間を揺蕩い、そういえば今日は提督が来るんだっ
たと思いい出して飛び起きた。

悲しいかな、すっかり着るのに慣れてしまった服を着て食堂へ向かう。

「おはようございます」

「おはようございます。スチュワートさん、早いですね」

「そうですか？」

そんなことを伊良湖から言われるけど、少なくとも俺より先に食堂に来ていた人には言われたくない。

呉鎮守府から持ち込まれた、それなりに保存の効く食べ物を調理している伊良湖さんの脇で、コーヒ―を淹れる。佐世保鎮守府から出発する前、田代提督から給料だと渡されたお金で買ったものだ。鹿島さんから教えて貰ったお洒落な淹れ方を試してみる。ミルクや砂糖の有無しか分からない貧乏舌だからそんな些細な違いが分かるとは思えないけど……。

そんなこんなで伊良湖ともお喋りをして時間を潰す。なんでも、ここで間宮さんや伊良湖が建造されたら帰るんだとか。まあ、自分とは会いたくは無えわな。

長良さんが食堂に入ってきて、それから卯月を除く全員が集まったところで朝食になった。わざわざこんな多い部屋数の中で卯月を探そうとは誰もしなかった。今日から忙しいって言われてたんだ。朝くらいはゆっくりしたい。

♪「艦娘の皆さん、提督がお見えです」

朝食後、卯月がやつと食堂に現れたときにアナウンスが響いた。時間は八時丁度。他人と待ち合わせるなら早過ぎるけど、業務開始だとすると丁度良いのかもしれない。

「行きましようか」

俺がそう言うのと卯月が急いで朝食を食べ始めた。ちよつとどころかかなり行儀が悪い上に、T^卵 K^{かけ} G^飯 じゃなかったら死んでたな。懲りたら寝坊や二度寝に気を付けてねって声を掛けておいた。直らなかつたら睦月に放り投げよう。

ゾロゾロと九人で警備所まで歩く。

そこに立っていたのは見たことのある白い服に身を包んだ、とても若い男だった。歳は三十も行つてないだろう。相当優秀で人が出来てる超人か、俺みたいなヤベーヤツの提督を押し付けられた可哀想な新人かのどっちかだろう。

だけど、しっかりと時間を守る辺り好感が持てる。

「おはよう」

「「おはよう(ぎんぎん)ますー」」

「……」

「……」

互いに挨拶をして……無言の時間が生まれた。

……滅茶苦茶気まずいんだが？　なんて思っていたら後ろから指で突かれる。恐らく俺が何かを言わなきゃいけないんだらうけど……何も思い浮かばねえ……。

「……提督、お待ちしておりました。どうぞ中へお入りください」

「あ、ああ……ありがとうございます」

え、何あの反応……俺何かやらかしたか？　日本語がおかしかったとか？　ヤベエ

……五月雨大先輩に提督お出迎えのデモンストレーションとかやってもらえば良かったなんて思うけど、時すでに時間切れだらうな……。

でも考えてたっつてしょうがないし……。

取り敢えず新しい提督の持ってた荷物を手に持って「こちらです」なんて言えたのは俺にしては上出来だと、自画自賛しておいた。

その駆逐艦、出撃禁止につき

執務室に提督を案内する。

本当にただそれだけなのに、なあんでこんなに緊張するかなあ……。建物に入ってから足音が二人分しか聞こえてこないのも心臓に悪い。

「……」

「……」

会話も無くて気まずい……。いやいや、ペラペラお喋りするなんて軽薄なヤツっていう第一印象は避けたい。

歩くスピードは速過ぎないだろうか？ ……ああそうだ、後ろには提督が居るんだつた……。護衛対象に気を割いておかないと神州丸師匠さんから叱られてしまう。

……ヤベエ、考えること多すぎてもう脳ミソのキャパシティ超えそう……。ただ歩いてるだけなのに！

助けて五月雨！

俺一人が勝手にあつぷあつぷしながら進み、辿り着いてしまった執務室。

やっぱり事前にどんな流れか一通り説明してもらえば良かった……まあ、五月雨が説明してないってことは、もしかしたらそんな格式張ったものは無いのかもしれない……アドリブで良いか！

「お入りください」

扉を開けて言う。中に入った提督が「おお……」なんて言ってるけど、そのうち入るのも嫌になるくらい入り浸ることになるだろう。なんて上から目線の感想を抱いた。

扉を閉めると提督が俺の方を向く。さあ……一番大事な最初の挨拶だ。

提督の目を見ながら敬礼する。

「改めまして……おはようございます。そしてようこそ大湊警備府へ。私はクレムソング級駆逐艦、スチュワートです。これからよろしくお願いします」

無事に嘯まずに自己紹介が出来て一安心しつつ、提督からは目を逸らさない。人との会話は目を見て行うって習ったからな。

提督は一瞬間固まってから、ビシイ！ と音が出るくらいの勢いで姿勢を正した。

「自分は今日から此処の提督を務めさせていただく松田 翔平と言います！ こちらこそ、よろしくお願いします！」

そう言つて深々と頭を下げる提督。

「違うでしょ……」

思わず突っ込んでしまった。

するとビクツツと肩を跳ねさせる提督。

これが提督……？ いやいや俺は認めないね！

「大変失礼ながら言わせて頂きますけど……」

提督は表情まで硬くして、まるで蛇に睨まれた蛙のように微動だにしなくなった。

……一体俺を何だと思ってるんだ？ これは泣いて良いのでは？

「貴方は提督で私達よりも偉いんです。威張れとは言いませんが、せめて威厳と言うか……舐められない態度と言うか……兎に角！ そんな下手に出る人を提督とは認めたくはありませんし、正直凄くやりにくいです」

「……」

言つてやつたぜ。言つちやつたぜ。後で何かしらの処罰がありそうだなあ……。

でも、後悔も反省もしてない。だつて考えても見ろよ提督よお。長門さんとかを筆頭に大人の艦娘相手ならそれで良いかもしれないけど、占守を始めとする海防艦、見た目小学生相手に敬語使うとか……正直ドン引きつてレベルじゃねえぞ。

……なんでその提督は目の前でポカンとしてるんだらうね？ まだ自己紹介終わつたばつかりなのに……疲れるなあ全く。

「……と、取り敢えず警備府内の案内を続けますね。荷物はここに置いておいて大丈夫です」

「は、はいっ……ッ！ ……助かる」

俺に睨まれて言葉遣いを変えた。後で叱られようが罰せられようが構うものか。

偉い上に年上から敬語で話しかけられるとか実際拷問だから……。早くそれをデフォルトにして欲しい。俺の精神が持たない。

「……が工廠です」

「おお……」

工廠の扉を開けると、妖精さんが沢山飛び出して来た。どこから嗅ぎつけたのか知らないけど出てくるのが速い。それに足元に陣取られると工廠内に入れないうだけだ……。

「……そう……か。分かった」

そう呟いて一人の妖精さんを手に乗せたまま工廠の中に入っていく提督。

ああそっか、提督って妖精さんの声が聞こえるんだっけ？ 便利なもんだなあ……。

中に入ると、昨日建造する為に閉められていたシャッターは開いていて、中には S

F に出てきそうな箱じゃねえし、一人用のポッドじゃねえし……中の見えないそんなヤツがあった。

提督が妖精さんからの指示を受けてだろう。慣れない手つきで近くにあった操作盤のボタンを弄っている。

プシューウー……

それこそ S F みたいに濛々と煙は出てこなかったけど、そんな音が響き、ガコン！ つて音がしたと思つたらその容れ物のうち二つの蓋？ が開いた。

中から出て来たのは……明石と大淀だった。

……マジであの資材から出来るのか……。『艦これ』の謎だ。どうしてそうなるのか滅茶苦茶気になるけど、深くまで知つたら絶対に S A N 値チェック入るタイプのヤツだ。

「軽巡、大淀です。艦隊指揮、運営はお任せください」

「工作艦、明石です。修理なら任せてください！」

ちよつとだけ早く状況を確認した大淀さんが先に自己紹介をする。佐世保の二人とはやつぱり別人か……。俺が二人を知っていても二人は俺を知らない。なんか無性に悲しいな……。つて違う違う。次に何をするか考えないと……。

「大湊警備府の提督、松田 正平……。これから宜しく」

「はい！」

二人の返事が工廠に響く。

「スチュワートさん」

提督が振り返って俺を呼ぶ。

「さんは要りませんよ……ご紹介に与かりました、スチュワートです。これからよろしくお願いします。……では、他の皆さんにも紹介するので、皆さん付いてきて下さい」
二人に挨拶をしてから食堂へ向かう。多分皆は食堂に居るだろう。五月雨先輩にも訊きたいことあるし……ベストアンサーだな。

再び食堂で自己紹介が始まり、その隙に五月雨からやることを聴いた。

……まさかキョトンとした顔で「もうありませんよ？ 提督の指示を待ちましょう」なんて言われるとは思わなんだ……。

確かに配属されるってことはそれなり以上に色々勉強してるってことだし、俺が仕事に関して口を挟むことは殆ど無いんだろうけど……。

「では提督、部隊を編成し、実際に運用してみましよう」

色々考えて結局、さてどうすつかなく。くらいしか出てこなかった俺の思考は、大淀さんの放った一言で吹き飛ばされた。

どこからともなく紙を持つてきた大淀さんが、提督の前にそれを置く。

提督は少し考えた素振りを見せた後、サラサラと文字を書き込んでいく。

……アレ？ 俺よりも大淀さんの方が秘書っぽいぞ？

「大丈夫ですよ、スチュワートさん。大淀さんはどちらかと言うと外部との連絡などの仕事に重点を置いてますから」

もしかして俺は要らない……？ なんて思ってたところに五月雨が話しかけてくる。かなり優秀みたいだけど、他の人の仕事を取ることはやらないらしく、俺の役割が死んでいないことに安心した。

それと、大淀さんは外部との連絡と聞いて、各鎮守府の大淀さんが集まって会議したり、ビデオ通話してるのが頭に浮かんで危うく嘔き出しそうになった。

「出来た」

提督の声で編成が終わったことが全員に伝わる。それまでは俺と五月雨のように会話していたりしたのがピタリと止む。編成されたらそこからは仕事。頭では分かっているんだけど、このメリハリは経験としか言えないと思う。

「では確認しますね……はい、問題なさそうです」

「では発表し……する。旗艦はスチュワート。以下、長良、大淀、五月雨、卷雲、伊168だ」

呼ばれた人が気合の入ったような返事をする。それを見たのか提督も何処か満足気だ。新しい警備府の栄えある最初の出撃に選ばれたんだから妥当だろう。

「だけどなあ……」

「提督。一つ良いでしょうか？」

「……なんだ？」

「私は諸事情により大本営から一年間の出撃を禁止されております」

「あつ……」

「ですのでその編成、見直してもらえないでしょうか？」

俺の言葉を聴いた瞬間提督がしまった！　と言う顔をして、長良と卯月が何かを察したのか言葉を漏らす。

俺だつて出撃して、久しぶりに深海棲艦を相手に活躍したいよ!?　香取さんとか赤城さんとかの相手はもう十分だつて！　だけど大本営に止められてるんだからしょうがないじゃん！

「困りましたね……衣笠さんと大鷹さんは人数と役割からそう簡単に出撃させられないでしょうし……」

「いや、衣笠さんが出撃するよ……つていいいたいところだけど、どうせまだこの辺の海は大本営がカバーしてるんだし、出撃するには艦娘を建造してからかな？」

衣笠さんの言葉を聴いた瞬間、何かを思い出したのかイムヤの目から光が消えた。何かが地雷だったっぽいけど……分からないなあ……。

「それよりだったら少人数で遠征した方が良いんじゃない？」

「それです！ 提督、もう一度編成を考え直しましょう」

「……皆さんにはご迷惑をお掛けします……」

謝罪をすると、じゃあしようがないねって感じて出撃するって言われた時の張り詰めた雰囲気霧散する。……本当に申し訳ねえ……。

遠征班の編成をサラサラつと書いた提督が立ち上がった。

「妖精さんと話をして建造を開始してもらった。それと、今からスチュワートと一緒に執務室へ来てくれ」

「分かりました」

呼ばれる心当たりが一つしかないんですが……。

提督 Ⅱ 主人公

「スチュワート、貴女に訊きたいことがある」

「呼び方。貴女はどうかと思えますけど……訊きたいことって何でしょうか？」

執務室に入つて扉が閉まつた直後に始まる会話。俺は貴女なんて呼ばれたく無いんだけどどなくなんて思つてそう返しつつ何が訊きたいのか尋ねる。他の人が居ないなら訊くことなんて決まつてるから考えなくても良い。楽で良いな。

「じぶ……私は、つい先日まで提督研修生の身だったんだ。それで君のことは大本營で知つた」

やっぱりね。大本營の偉い人からアレコレ聞いたんでしょ？ それで、俺が何時牙を剥くか分からないから先に情報収集して対策しておこうってことでしょ？ それなら

……

「それなら大丈夫ですよ。貴方は誰かさんと違つて善い人みたいですし」

「……え？」

ポカンとする提督。「え？」って顔は見るだけで謎の優越感と背徳感に駆られる。これだから止められねえ！ ああ、今日は誰かがポカンとする顔が沢山見られて幸せな

気分だ。

「だって当たり前じゃないですか。貴方は朝にちゃんと来ましたし、如何にも真面目そうですね。新人だなんて全く気になりませんね。誰にだってスタートはあるんですし」

俺だってこんなありふれた言葉は言いたくないんだけどなあ。

「貴方が黒川提督のようにしない限りは私は “あんなこと” はしませんよ」

「……」

「それで、他に何か訊きたいことはありますか？」

はい。面倒くさい話はお終い！ この手のやつはさつさと話題を変えるに限るね。まあ、ここから先、何か話題があったとしても想定してないから俺のコミュ力が試されるんだけど……。

「ある」

「!？」

あああああ！ もう！ 何でだよおおお！

そこは「もう話はない」って言う所でしょ!? これ以上何を話すんだよ!? メンドクサイ！

畜生！ こうなったらヤケだ！ ほら話題プリーズ！

「艦娘達を遠征に行かせる前に、この辺に住んでる漁師さんたちにご挨拶をと思ったん

「ただど……」

「あ……」

「そう来たか……確かにご近所付き合いは大事だ。ちよつと規模が大きいけど……」

「それなら、警備所に相談した方が速いかもしれませんが。ちよつと訊いてきますね」

「よろしくお願いします」

「だから敬語は止めて欲しいんだけどなあ……」

「何も言わずに扉を閉めた」

「はい、それなら問題ありません」

「分かりました。それでは提督に時間を確認してきますね」

警備所に行つて確認したところ、深海棲艦が近海に現れた時の為の連絡網があるらしい。それを使えばご近所さんに連絡は出来るらしいんだけど……正直使つて良いのかと問い詰めた。

「はい。……ではこちらを」

渡されたのは一枚の紙。書いてあつたのは内線番号。電話なんてあつたかなあ……」

「ご丁寧にもありがとうございます」

「いいえ〜」

なんて和やかな会話で確認は終わった。

「——という訳で問題ありませんでした」

「ありがとう……それじゃあ電話するから、他の艦娘達に声を掛けてきてくれないかな？ 警備所に居るように伝えてくれないか？」

「分かりました」

扉をそつと閉める。

「ハア……」

溜息を吐く。特に意味なんて無い、溜息よりは一息入れる感じに近い。

それにしたって提督、出来てる人だなあ……。俺だつたら言われるまでは漁師に挨拶なんて気が付かないかもしれないのに……。いや、これは俺がおかしいだけか。

それでも、俺の情報を聴いて尚提督をするなんてすげえ変わり者だぜ？ 押し付けられたなら俺を拒絶するような態度を取ったりしてもおかしくないのに……。

「優しい人なんだろうなあ〜」

佐世保鎮守府の提督と同じだ。自分のことだけじゃなくて他人のことまで……。普通の提督って皆こうなの？ 格好いいねえ……。普

「ハア……」

気色悪い思考になっちゃったじゃねーかよ。俺は男色の気はないんだけど……。それでも、つい引き寄せられちゃう魅力のようなものを感じたね。提督の言葉には何て言うの？ カリスマ？ を感じたね。

「多分提督っていうか、人を率いる人ってああいうタイプの人がなるんだろうな〜」

なんて考えていたら、いつの間にか食堂の前に居た。皆に伝えることを思い出して扉を開く。

「あ、戻って来た。提督と二人つきりで何話してたのか衣笠さんに教えてごらんよ〜」
「そういえば一回外に行ってましたよね？ 巻雲は見てましたよ〜」

食堂に入った刹那、瞬間移動と勘違いしそうになる速度で横に来た衣笠さんと巻雲。

ああ鬱陶しい！ 別に衣笠さんが望んでるであろう提督とのロマンスなんて欠片も存在してないし、巻雲が気になってることはこれから話すのに。むしろ落ち着いてくれないと話せない。おい、袖で叩くな。

「皆さんの遠征の前に、提督は近隣の漁師さんたちにご挨拶をするつもりですよ。ですので、皆さん警備所に行きましょう」

俺がそう言うと、納得したような巻雲を含むほぼ全員と、詰まらないって雰囲気を出している衣笠さん。……. っただけロマンスに飢えてるんだこの人は……。そんな口

もう苦笑いするしかねえ……。なんでテレビで見るようなデカイカメラと收音マイクっぽいのが見えるんだろうな？ 気が付いたら提督の前に足場とかセットされてるし……。どうしてこうなった。本当に近所の住人に声かけたただけなんだよね!!

「提督、なんかすごい事になってますけど……」

「……大丈夫……です。何とかします……」

滅茶苦茶声震えてんじゃねーか！ 絶対大丈夫じゃないだろ！

戦慄する俺たちの前で進められる準備。気が付いたら警官が人混みの整理までしている始末だ。

「提督……頑張ってください。私はしっかり護衛しているので安心してください」

俺がそう言うと、絶望したような顔を向けてくる。

……知らんわ！ 自分の言葉を伝えりゃいいんだよ！ この熱気だもん、勝手にマスコミとかも真実を捻じ曲げて都合のいい報道解してくれるって！

遂に提督にマイクが持たせられた。

「皆……付いてきてくれ」

あつ、提督コイツ一人じゃ寂しいからって俺たちを使いやがった。いや、護衛って意味では俺は付いていくんだけど……その言い方だと情けなく聞こえるから止めろよ……。

「ハア……皆さん、行きますよ」

残念ながらこの場で艦娘の皆を率いるのは初期艦である俺の役目だったらしい。思わず溜息が漏れる。まさか初のテレビデビューがこんなとはね……。

「ほら、提督が行かないと話が始まりませんか？ 皆さんを待たせてはいけません」
多少の無茶振りでやや強引に提督を台の上へ移動させる。俺を精神安定剤代わりに使おうとした報いだ。

台の上は下よりも涼しく、酸欠で倒れるような感じでは無かった。

……その代わりに見える人、人、人。吐きそうになつたね。

提督が先頭に立つ。

それだけで騒めきがピタリと止む。

カメラのフラッシュが提督、そして後ろの俺たちにも降り注ぐ。

デカイカメラが俺たちを吸い込まんと言わんばかりに向けられている。

集まった大勢の人の視線が提督と俺たちに突き刺さる。

そんな絶大と言う言葉すら生温いプレッシャーの中で、提督が声を出す――

「疲れた……」

提督のスピーチが終わり、集まった人が解散しても尚話を聴くために残ったマスコミの対応に、提督は追われていた。

全てが終わってから執務室で放たれた万感の思いが込められた一言に「明日の一面記事ですよ」なんて揶揄う気も失せた。

「お疲れ様です……」

俺も苦笑いするしかなかった。

まさか大衆、カメラを相手に「もう皆様に被害は出させません」なんて啖呵切るんだもんなあ……。

「とんでもない人ですね……。あ、コーヒー淹れましょうか?」

「お願いします……。あくあ……。どうしよう……」

あんなことを言った本人は今にも灰になりそうな雰囲気だけど、ああいった場面で全牌を取るんじゃないかと、クソ程度胸のあることを言ったこの人には付いて行っても良いと思えた。……。やっぱりこういうのがカリスマって呼ばれるんだらうか……。

「お陰で漁師さん達からの評価はうなぎ登り、遠征に行つた皆さんの士気も高かつたですよ?」

「言わないでください……」

なんて言つてるけど、やつてることは完全に主人公だもんなら。

「きつとこれから楽しくなりますよ。……。どうぞ、コーヒーです」

バランスが大事

提督が来てから早くも一週間が経とうとしていた。

提督が毎日のように工廠に行っては新しいメンバーを仲間に加えてくるので、早くも警備府に居る艦娘の数は倍近くに増えた。

それは嬉しいことなんだけど、提督が資源を建造につき込んでいく所為で毎日のように遠征に行かないといけなくなつたと言つてる人が居るのも事実。遠征に行つてる人達には本当に頭が上がりません。応援で来てもらつている人達には尚更だ。

それでも、流石に元一般人として週休一、二日くらいは用意したいところで、同じように考えていたらしい提督によつて昨日と今日は遠征は休んでもらつている。人が増えて来たからそろそろ班を増やしてみるのも良いかもしれない。後で提督に意見してみようか。

そのどれもが、 “一日で往復できるくらいの距離にある資源集めに向いてる島” を長良さんが見つけてくれたおかげだ。流石にこの提督のビギナーズラックが発動してそんな都合よく島があるんだと思うけど、今は兎に角人手が足りない。

「……ですの、申し訳ありませんが衣笠さんに暫く休みは無いです……」

休暇は取らせたいけど、警備府の最高戦力の衣笠さんと大鷹さんが休んで防衛が疎かになるのはちよつと……なんて考えたらしい提督から「ちよつと考えを聴いてきてくれない？」って言われたから、俺は衣笠さんが使っている部屋で衣笠さんに相談していた。「う〜ん……」

考えるような素振りをしてから、衣笠さんが口を開く。

「衣笠さんとしてはね？ 別にお休みは貰わなくても平気だよ。今のところ最高戦力で、ホイホイ出撃出来ないから今もこうして部屋に待機してゆつくりしてるんだし。これでお休みまで貰っちゃったら、他の子達から不公平だ〜って文句言われちゃうよ」
「……分かりました。提督に伝えておきます。……ありがとうございます」

良いの良いの〜なんて言ってくれる衣笠さんの優しさに感動しながら部屋を出る。

次は同じように代わりが居ないから休みを取らせられない大鷹さんに話をしに行かなければならない。

多分何時ものように海沿いで艦載機を飛ばしていると思っている。

漁に出る漁船の上にも艦載機を飛ばしているらしく、漁師さん達から物凄い感謝をさ
れているって聞いたが、無理はして欲しくない。

「あ、スチュワート！」

「曙ちゃん…… 〴〵さん 〴〵は付けよう……？」

廊下を歩いていたら呼ばれる。

振り返ると曙と潮が居た。二人とも建造で生まれた駆逐艦だ。日にちから考えて一、二回は遠征に行つたかも知れない。

「何ででしょうか？」

「あんにんに……いや、提督に言いたいことがあるんだけど！ 今大丈夫?！」

おおぅ……結構気が強いってことは知つてたけど随分グイグイ来るなあ……。

「ええと……今から大鷹さんに話を聴きに行くんですが……それが終わつてからでも良いですか?！」

「そうね……じゃああたしも付いてくわ！ ヒマだし!！」

付いて来ちゃうかあ……。自分が仕事してるところつてあんまり見られたくないんだよなあ……。授業参観が恥ずかしく感じるのと同じ理由で……。

それにしたつて暇だつてことを強調するとか……。曙は暇な事に不満があるらしい。

大鷹さんは予想通り、海が良く見える場所に立っていた。

「今日もお仕事、お疲れ様です」

驚かさないうように隣に立つてから声を掛ける。海を見ていた大鷹さんが俺の方を向く。

「……スチュワートさんもお疲れ様です。後ろの二人も、何か御用でしょうか？」

「あ、二人は関係ないです。……大鷹さん、まだ空母の人達が建造出来ない為、休みが取れないかもしれません」

そう話し始めてから、提督が心配していたことを話す。休みが取れないって言うのは最悪の場合で、大鷹さんが休みたいって言った時は、普通に休ませてもらえると思うんだけど……。

俺の言葉、提督の考えを聴いた大鷹さんは、にっこりと笑った。

「私は大丈夫です。……以前よりもやりがいを感じています。舞鶴鎮守府には空母の皆さんが居るので……」

「漁師さん達からも感謝されるので、嬉しいです」なんていい笑顔で言う大鷹さんは、毎日ここで見張りをしているとは思えないくらい生き生きとしていた。仕事に見合った報酬が漁師さん達からの感謝の言葉って……モチベーションにはなるだろうけど……聖人かな？

「そうですか……本当に休みは要らないんですね？」

「はい」

「分かりました……体調不良などには気を付けてくださいね？」

「大丈夫です！」

うくん……ここまで言われたら休んでくださいって言い難いよなあ……。衣笠さんはいつも休んでるみたいなんもって自分で言ってたからまだ分かるんだけど……。

まあ、しつこく言ってもウザがられるだけだし、提督に報告してお終いか。

「それじゃあ、無理はせずに頑張ってくださいね」

「提督、衣笠さんと大鷹さんから話を聴いて来ました」

「ありがとう。……後ろの二人は？」

「私の報告の後になります、曙が提督に用事があるそうです」

「分かった」

そういうえば曙は提督に用事って言ってたけど、何なんだろう？ 気になるけど、プラ

イベートな事なのかもしれないしあんまり踏み込んだりいけなないのかな……。

「えつと……衣笠さんと大鷹さんどちらも休みは必要ないそうです。ただ、大鷹さんは無茶をするかも知れないので、そこは注意が必要に感じました」

「分かった」

「……では、曙が用事あるそうなので、一回外に出ていきましょうか？」

「ああ」

執務室の外へ潮と一緒に出る。あくまで用事があるって言つてたのは曙で潮は関係ないと思つたからだ。

「曙の用事が何か分かりますか？」

「いえ、分かりません……今日は休みだつて聞いてからあの調子で……」

「そういうえげそうでしたね……」

執務室の扉の外で潮から、暇な事に何か不満があるらしい曙のことを訊く。が、大事な情報は出てこなかった。

それでも気になることは気になる……。

「ええっ!？」

「シッ!……」

しょうがないから、盗み聴きくらいは出来るかも知れないと扉に耳を当ててみる。

「このクソ提督! 今がどういふ時期か分からないの!？」

「……………?」

「だつたら何よ! 休んでる場合じゃないでしょ! 私達のことを考えるのは結構だけど、本当に考えなくちゃいけないことは市民の事でしょ!？」

「……………」

「だつたらさつさと艦隊運用の準備をしなさい!」

提督が曙に滅茶苦茶怒られてる……。

「怖……」

「え？」

でも曙の言うことも最もだし……俺も混ざってこようかな。どっかの誰かさんは昨日から遠征を休みにさせてるにもかかわらず、今日も工廠に入って建造してたからなあ……。

間違いなく提督は分かっててやってるんだろうけど、倉庫に資材が殆ど無い現状は拙い。この辺のバランスもどうしようかその内相談しようと思つてたら曙が爆発したって感じだな。

立ち上がって扉を開ける。

「提督、曙の言う通りですよ！」

「え？」

驚いた顔で俺を見てくる二人。……なんで曙まで驚いた顔で見えてくるかなあ？ 反対意見じゃないんだし、「ほら！ 他の人もこう言ってる！」って乗ってきてても良いと思っただけど……。

「皆の前で切った啖呵は嘘だったんですか!？」

「こう言えば大人しくなるよな。」

「ウツ……」

提督の意見が完全にひっくり返った瞬間だ。

休暇を与えられゆくりしていた人が遠征に行く準備を進めていた。

休んでいた面々は誰も警備府の外に出ていなかったのが幸いした。

時間も正午ちよつと過ぎたくらいだし、ちよつと遅くはなるけど今日中には戻ってこられると思う。

「曙、ありがとうございます」

今回の資材が底を付くかハラハラさせる行動をした提督に当たった曙にお礼を言う。

「別に、あなたの為にやったことじゃないから！ 私が不安になるのよ！ 何よあの資材の量！ あれで建造しようだなんてどうかしてるわ！」

「ですよね……ハハハ」

「あなたもあなたよ！ ダメだって分かってたならちゃんと言いなさいよ！」

「……ハイ」

非常に耳が痛い……。

「……提督はどこか抜けてたり、甘かったりするるので、曙みたいにしつかり怒ってくれる人が居ると助かりますね」

「あ ん た が！ し っ か り す る の！」

「……ハイ」

初期艦道は俺が思っていた以上に長いらしい。

通常業務

俺の朝は早い。

日の出の前に起きて風呂で軽く汗を流す。

前世だったら男オンリーの工場だったから、朝にそういうことをするっていう考え自体無かったけど、提督上司の近くで書類整理やその他雑事サービスマス業をやるなら清潔感は大切だという考えに至った。

そんな訳でもう見たところでも何とも思わなくなった己の裸体を風呂場の鏡越しに見る。

「おかしい……」

出撃しないからと運動不足を疑い、寝る前に腹筋運動を行うようにしてから暫く経つというのに一向に筋肉が付いた気がしない……。やはりプロテインか？ たんぱく質か？ それとも腹にあるなけなしの脂肪を落とせば腹筋が割れて見えるようになるのか？

「うゝむ……」

湯船に浸かりながら唸る。そして湯に入って五分と経たずに湯船の外へ。何せ季節

は夏真つ盛り。

例え東北の、それも明け方だとしても暑いもんは暑い。

最後に水のシャワーを浴びてサツパリし、髪を乾かしてから食堂へ向かう。こういった時に髪が比較的短いと楽でいい。

「おはようございます」

「おはようございます。相変わらず早いですね」

「あれ？ 今日是一人なんですか？」

俺が食堂に行くと、必ずいるのが伊良湖だ。「今日は一人です」なんて言ってるから分かる通り、食堂には主が二人居る。

一人は応援で来てくれた伊良湖。

そしてもう一人が……建造で来てくれた伊良湖。

伊良湖が二人……来るぞっ！ ってなりそうだけど、これには理由がある。

本来応援で来てくれた伊良湖は、間宮さんが建造出来た時にお役御免となつて帰る予定だったらしいんだけど、肝心の間宮さんが全く建造＊されれないのだ。

因みに元の鎮守府に帰ってないのは伊良湖だけで、他の面々は既に鎮守府に帰ってし

まっている。

帰る前にシユークリームを投げてきた佐世保の卯月は次会ったらボコボコにしてやる。

そして相変わらず間宮さんは現れず、そのまま他の艦娘が増えていくばかり……という訳で、現在食堂は驚愕のダブル伊良湖体制で回っている。

それでもいつまでも他の鎮守府から借りっぱなしは良くないと思うので、そろそろ伊良湖も横須賀に帰してあげたい……ということ。此処でまさかの俺に白羽の矢が立った。

人数が増えて来たとは言えまだまだ人手が足りない現状、相変わらず出撃禁止で秘書艦業務をやってる俺は、大淀さんが持つてくる割と少ない書類を大体午前中には片付け、後は食堂で伊良湖から料理の修行を受けていた。

お蔭様でレパートリーが矢鱈と多くなった。具体的には今日、深海棲艦が絶滅して艦娘の価値が一般市民と変わらなくなったとしても、適当な飲食店にお邪魔して即戦力になれるレベルと言ったら修行の成果が如何程か分かると思う。

そんな訳で提督の朝食を適当に漬物や白米、味噌汁、焼き魚にしようと計画を立てて、後は伊良湖とウン十人分の朝食を作っていく。

「あ、そろそろ時間ですね。ちよつと抜けますね」

「分かりました！」

伊良湖に簡単に断りを入れて厨房を抜ける。いつも通りならそろそろ時間だろう。

「お！ 来だの〜」

「おはようございます！」

警備所の前、だんだん明るくなってきた時間帯、何時ものように漁師さんが来ていた。

「今日もいつぱい捕つだがらよお、わつつりけよお！」

「はい、いつもありがとうございます」

「礼ば言うなはワイどの方だ。わーがだもいつつもどもの〜」

にこやかに、豪快に笑いながら漁師さん達が去っていく。

「は〜い！」

見えなくなるまで見届けて、それから警備所に差し入れを置いてから厨房へ台車を引いて戻る。

「戻りました！」

「お疲れ様です！ いつもありがとうございます。わたし、漁師さん達がなんて言ってるのか分からなくて……」

分かるわ。みたいな感じで楽し気な雰囲気になる。流石に数ヶ月も近くに居たら俺でも仲良くなれる。

「嘘……漁師さん達さままですね」

「ハハハ……いっぱい捕れたって言っても太っ腹が過ぎると言うか……」

いつも以上に重たい台車……ぶつちやけ押ししてるだけで腰やられるかと思つたソレの上に乗つてた木箱から出て来たのは……マグロだった。

嬉しいには嬉しいんだけど……。

「ちよつと気を遣いますよね……」

「朝に食べるものでもないですし……仕舞つておきましょう……」

伊良湖がマグロを冷蔵庫に仕舞い、引き続き朝食の用意をしていく。

デカイ鍋の蓋を開けると、しっかり蒸された白米が眩しく輝いた。

「流石伊良湖さん、完璧ですな」

「えへへ……照れますな」

朝食の用意もあらかた終わり、後は朝食を執務室に持つていくだけ。手伝いもここまですればあとは伊良湖が一人で十分対応出来ることは分かっている。

応援の言葉を掛けて厨房を後にする。

執務室への道のりを歩く。今まではやらかしてないけど、いつ五月雨をリスペクトして朝食をブチ撒けるか分からない以上、慎重にならざるを得ない。

早起きな艦娘は既に何かをしているようで、ゆっくり進む俺に挨拶をしてくれる。

だいたいランニング前の長良さんと大鳳さんだったり。

「ふわあぁ〜……あ、スチュワート。おはよ〜……」

こんな具合に眠そうな川内さんだったり……っておいイ!? 昨日出撃したの!? 静かに出撃しないで!? いや騒がしくされても迷惑なんだけどき。

「おはようございませ〜……出撃するならせめて一言お願いします」

「あ、そうだ! 提督には内緒にして! お願い!」

これは既に提督に報告案件だよ。諦めてくれ。

無言で笑顔を浮かべて執務室に歩く足を速める。俺はまだ執務室職場に遅刻したことが無えんだよ。夜戦狂いに付き合って遅刻なんて洒落にならん。

「おはようございませ〜」

「ん? ああ、おはよう」

執務室に入ると、提督が板についてきた提督が椅子に座って何かの資料を読んでい

た。

最初はアレだったんだけどね……今じゃコレだよ。すっかり提督らしくなっちゃつて……。

……まあ、海防艦^ロや駆逐艦^子相手に敬語なんて犯罪者めいたことはしたくなかったんだろうな。択捉辺りがアタックを仕掛けた時に何かの覚悟を決めたらしく、それから敬語は聞いて無い。いい傾向だ。

「午前六時、朝食の時間ですよ」

「いつもありがとう」

「仕事ですのぞ」

この会話も何回繰り返したか分からん。結構な頻度でお礼は言われるけど、提督^{野郎}の身の回りのお世話とか仕事じゃなかったらやる訳無いんだよなあ……。ま、女のお世話も気を遣うからやりたくは無いけど。

提督が朝食を食べていると大淀さんが書類を持って現れた。これもいつも通り。挨拶を済ませて書類を受け取る。

「今日は随分沢山ありますね？」

「他の鎮守府が夏季の慰労や暑気払いで休むみたいで、そのカバーの為でしょう。詳細は書類に書いてあります。何かあればお呼び下さい」

大淀が執務室から出ていった。

「……夏季夏休の慰勞休みか……私はどうしたら良いと思う？」

提督の意識はすっかり休みに向けられている。そんなに休みたいの？

バカな……いつも午前中には書類仕事を片付けているから提督の午後はフリーの筈では……？ トレーニングとか疲れることでもしてんのか？ それともまだ休み時間が足りないとても？

「まずは他の鎮守府が休んでいるときのカバーの事を考えましょう」

「やっぱりそうだよな……。ご馳走様」

「お粗末様です。片付けてきますので先に仕事を始めていてください」

「……なんてことがあつたんですよ」

「おお！ それはスクープですよ！ では不肖この青葉、皆さんに何がしたいか訊いて回りますね！」

「ありがとうございます」

これで慰勞の内容は考えなくても良くなったな。食器の片付けも終わったし、いつまでも食堂で油を売ってないで俺も書類仕事をせねばなるまい。

「それにしても……」

随分艦娘も増えたなあ……。最初は二桁も居なかったのに一月ちよつとの間に数十人にまで増えた。

遠征の班も交代制を確立したし、警備府近海は日中なら軽空母と空母、海防艦、夜間は重巡と軽巡、駆逐艦で哨戒。佐世保鎮守府と同じようなローテーションが出来上がった時は目標に近付いたと結構喜んだことは記憶に新しい。

最近の悩みは戦艦の建造の為に必要な資材のやりくりがあまり上手くいってないらしいことと、人が増えた故に騒がしくなってきた寮の統制。

特に資材の問題は結構深刻で、艦娘が増えたことで警備府が防衛しなきゃいけない範囲が拡大した。近海だけでは無くなったが為に危険度の高い深海棲艦が出てくるらしい。

そうなると頼りになる戦艦が望まれるんだけど……戦艦の建造にバカみたいに資材を消費する。だからと言って建造の為に資材を集めようとするとな今度は防衛が疎かになるという一種のスパイラルに突入してしまっている。

「ハア……」

考えることが多すぎる。

「大淀さんにも相談してみようかな……」

そう呟きながら執務室へ向かう。午前中の内にさっさと書類を片付けて、お疲れらし

い提督を休ませるのも仕事だ。

任務は殆ど未達成

「はあ……」

提督が手を止めて一息吐いた。時計をチラリと見るとまだ作業開始から一時間しか経ってない。

それにしても相当疲れた感じの息を吐くじゃん……最近何か悩みでもあるんか？ 俺はカウンセラーの能力なんて持ってないから雷でも呼んでこようか？

まあ。提督の悩みの内一つは現在進行形で目に見えるんだけどね。

ペラリと書類の山から一枚抜き取る。

【今週の資材運用状況】

明石さんと大淀さんをお願いして倉庫の資材を見てもらっている。忙しい時もあるのか所々抜けているが、基本的に一日二回チェックして纏めてもらっている。実に見やすい表とグラフの資料に大淀さんの凄さが分かる。

……資料の出来は最高なだけ……内容を見ると頭を抱えなくなる。

グラフの「収入」は日を重ねるにつれて伸びていき、書いてある数字も大きくなっていく。

これだけなら十分喜ぶべきことなただけ……問題は「使用状況」と「差」のグラフだ。

「……」

「使用状況」のグラフもやっぱり伸びている。しかし、最近大鳳さんが来た日に一気にグラフが伸びた感じがする……感じじゃなくて実際伸びてる。

「差」のグラフも、今週一週間の結果だけ見たらプラスなただけ……。あまりにも収入との差が無さ過ぎる。大鳳さんが来てからは本当に僅かだけど赤字が続いているのが現状だ。

……こんな時に戦艦を所望するのはやっぱりヤバいな。即戦力になるだろうから欲しがるのは分かるんだけど、ここはゆっくりと確実に戦力増強を目指すべきだ。

その為にはやっぱり資材をどうにかしないとイケない。これは頼れる頭脳、大淀さんと話し合いが必要だろう。

「……ちよつと大淀さんとお話してきますので、席を外しますね」
「分かった」

場所は工廠、大淀さんを探し回った末此処に辿り着いた。明石さんと何かを話し合っ

ている。

「すみませくん……今いいですか？」

「スチュワートじゃん！ まさかまた建造？」

声を掛けたら明石が真つ先に反応する。言われた通り、最近は建造関係でここに来る頻度はかなり高い。

「いいえ、ちよつと大淀さんに相談したいことがあります……」

だからと言つて工廠に足を運ぶ Ⅱ 建造なんて考え方は止めて欲しい。今回はちゃんとした理由があつてきたんだ。

「私に相談ですか？ どのような……明石さんも聞いても良い内容ですか？」

「はい、明石さんにも聴いてもらいたいですね」

「おつ、なにに？ もしかして今朝から出回つてる暑気払いのこと？」

……話が広がるの早くね？ だつて一時間くらい前だぞ？ もしかして俺がハブラれてるだけで艦娘全員S N Sで連絡とり合つてるんか？ つて疑いたくなるくらい広がつてる……。これで遠征から帰つて来た人達が知つてたらホラーだな。

でも今回はそんなのんびりした話題じゃない。

「違いますよ。……実は、二人が纏めてくれた資材の事なんですけど……」

「あ……」

「……」

俺が言いたいことを察したのか、明石さんが目を閉じて頭を指でトントンし始め、大淀さんは無言で眼鏡をクイツって動かして光らせた。

「私としては提督に戦艦の建造を中止して欲しいところなんですよ。あの資料を見る限り、もうちよつと資材の収入を増やさないと、せつかく戦艦や空母が来てくれたとしてもまともに出撃できませんよね？」

「……そうですね。最近の提督は戦艦ばかりに目が行って艦隊運用が少々杜撰になっているように感じますし……それに、提督はアレをお忘れになっているようです……」

ん？ アレってなんだ？ あ、大鳳さんにも自粛を促さなきゃいけないのか。大変だなあ……

「大淀、アレってなに？」

同じことを考えた明石さんが大淀さんに訊く。

「ええ、提督は任務をあまりやっていないんですよ」

「大淀さん……任務って何でしょう？」

「あ、スチュワートさんには説明してませんでしたね……ごめんなさい」

「え？ いや、謝らないでください」

「……それでは説明しますね？」

任務とは、提督が大本営から行うように指示されたもので、内容には編成を組んで出撃させる、遠征を規定回数成功させる、深海棲艦の潜水艦を撃破する等多くの種類があつて、終了したものを大本営に報告すると、大本営から資材が送られてくるらしい。話を聴いてて思った。デイリー、ウィークリークエストだコレ。

「……提督って任務やってないって言ってませんでした？」

「全くやってない訳ではないんです。実際毎日のように遠征には行つて貰つてるので……」

大本営から届く資材は大淀さんが受け取っていたらしい。それはありがたい、ありがたいんだけど……どうして俺が居る時に説明しなかったのか……こんな大事な事いくら何でも忘れたりほしくないぞ。

「ええつと……任務の内容とか書いてある紙とかつてありますか？」

ちよつと待つててくださいいって言つて工廠から出ていった大淀さん。

俺はあまりのバカらしさに深い溜息と共にこめかみを抑えた。

「ハア……」

アホだ。俺も提督も救い難いアホだ。

戦艦を夢見て資材のやりくり困つてる小学生みたいな提督は言わずもがな。

『艦これ』がゲームと知つて「デイリーって無いの？ へ……珍しいね」つて考

えの俺も相当なバカだ。

「ちよつと、大丈夫？」

「ダメかもしれない……」

明石さんにそう返す。不貞寝したい気分だ。毎日遠征に行つて貰つてるメンバーに袋叩きにされても文句は言えねえよコレは……。もつと負担が軽くなつてた筈なんですなんて打ち明けようものなら怒りの矛先は提督^{上司}……ではなく俺に向けられるのは明白。……逃げて良いかな？

暫く待つっていると、大淀さんが戻つて来た。手には紙束を持つている。

「お待たせしました」

俺と明石さんが机の上に広げられた紙を見る。

「うわ、マンスリーとかあるの……」

イヤーリーなんて初めて見たぞオイ。マンスリーも内容をチラツツと見ただけで無理だと分かる。○○艦隊とか組めるほど警備^チ府に艦娘は揃つてないからね。

でもウイークリーは結構達成できそうなのが結構ある。実際に遠征の回数系の任務には済マークが付いている。だけど深海棲艦を撃破するって感じの任務はサツパリ進行できていない。

「酷くない?」

明石さんが呟く。俺もそう思うし大淀さんは苦笑いしている。

「大淀さん」

「はい」

「今日から毎日、任務を提督にやらせますので、新しい任務が入り次第持ってきてください」

デイリー、ウィークリークエスト縛りとかいい加減にしろよお!?

さては提督おめーゲームしたこと無いだろ。ちゃんと現代に生きてるのか?

「わ、分かりました……」

「それと、今から早速提督のところに行って任務を始めさせようと思うんですけど、提督の相談に乗ってあげてください」

「はい」

「明石さん、大淀さん借りていきますね!」

「えっ? うん……」

「行きますよ大淀さん!」

あの提督バカに制裁を下しに!

「——確かに、遠征だと逃走が基本の為無駄な交戦はしないから怪我はしないでしよう。ドック入りによる資材の消費も無いので、安定して資材を溜めることが出来るように思うでしょう。ですが！ 見てくださいコレを！ どう考えても任務達成で支給される資材の方が集めやすいでしょう！」

執務室で提督相手に捲し立てる。考える程に “遠征だけ” の効率が悪くソだ。小學生でも四則演算習ったら任務やった方が余程良いつて答えが出せる筈だ。

「いや、出撃は……」

それなのに提督はまだ尻込みしている。まさか大の大人がこんな簡単な^算さんすう^数も分からないとは思えない。何かあるんだろうけど……。

「提督。遠征だけで出撃しないのは何故なのか、私に教えてください」

なんて聞き出そうか迷っていたら大淀さんからの援護射撃が飛んできた。大淀さんの言葉を聞いた提督が逃げ場を探すように泳ぎ始め、俺を捉えて停止した。

おつ、俺に目を付けるとは……なかなか見る目が無いな。

目を逸らす。残念だけど、俺も出撃しない理由知りたいんだよね。

「私は……艦娘達が傷付くのが怖い。ミス一つで誰かが居なくなってしまうのが怖い……」

「提督……」

「……」

は？ 呆れた……そんなことで出撃しなかったのこの人!! もっと別のなんかよく分かんない理由で出撃しなかったとかじやなかったの!?

そう考えると腹が立つてきたな……。

「提督、そんなことを恐れていたら艦娘の代わりに市民が傷付くだけですよ？ それが怖くないなら他に何が怖いんですか？ 無駄に死地に追い込む真似をしなきゃならない自分が怖いんですか？ 命のやり取りをさせるのが怖いんですか？」

「違う……」

「ちよつと、スチュワートさん!？」

「遠征を何度も成功させてる皆を信じられないんですか？ 誰も欠けることなく戻ってくるって信じられないんですか？」

「違う!？」

「だったら信じて出撃させれば良いじゃないですか！ 誰も欠けることなく戻せるように作戦を立てて指揮するのが提督、司令官の仕事でしょう？ 初めてだから無理？ 明らかにダメそうなら誰かは反対するし、ある程度の判断は現場で出来ませう！ 神様でも無いんだったら期待して待つてれば良いじゃないですか」

「……」

ヤツベ……イライラしてヤベエこと言っちゃまった……。。

任務遂行（始まってない）

ヤツベー……いやマジこれはヤベエ……

「えつと……いい、今警備府に残ってる人達に出撃するかもしれないって知らせてくるので、大淀さんとしつかり話をしてくださいいね！」

逃げよう。

大淀さんには悪いけど俺には艦隊運用の知識なんて無い。餅は餅屋って言うし、ビビってるだけであって提督だつてその道のプロ。大淀さんも居るからたつた二人でも文殊の知恵が出てくるに違いない。

だから俺は呼びかけをしに行く。考える人と行動する人、うまい具合に役割分担できるじゃないか。そう……これは戦略的撤退ってヤツだ。決してやつちまったことが怖くなつたとかそういうのじゃない。

……いや嘘。めつちや怖いから逃げるわ。

▼
ちよつと乱暴に閉められた扉を見る。

「……」

無言で扉を見つめる。普段はこんなことをしないスチュワートに驚いているのか、大淀も無言だ。

……スチュワートを怒らせちゃったな……。

申し訳ないと思う。

普段から無表情で、仕事だからと何かと気を遣っている彼女が、あそこまで声を荒げることは本当に珍しい。寝坊して遅れた時も、グリーンピースを残した時も、果てには深夜、浴場に入った時に彼女が居た時でさえ怒らなかつたのに……。

確か前回は曙と一緒にもっと遠征を増やせと言ってきた時だったような気がする。いや、あの時ですらどこか楽しんでいたような感じがあつたから、本当に怒つたのは今回が初めてなの？

……本当に情けなく思う。

自分が情けないことを言つたばかりに怒らせたこと。

そして、怒らせたと気づいた時に、黒川提督と同じ目に遭うんじゃないかって考えてしまったこと……。

「大淀」

「はい」

「任務について、もう一度説明してもらえないか？」

「はい、必要でしたら何度でもご説明いたしますよ？」

本当にありがたい。

自分みたいな新人にも期待してしつかり怒ってくれる艦娘艦がいる。知らないことをしつかり教えてくれる艦娘大艦がいる。前に進めるようにちよつと強引だけど背中を押ししてくれる艦娘ステュワートがいる。

とても頼りになる艦娘に囲まれている。

「……ありがとう」

自分がお礼を言うと、ちよつと照れた大淀が「では、説明しますね？」と前置きして、任務の説明をしてくれた。

前回説明を受けた時は何を考えながら説明を受けたんだろう……説明を受ければ受けるほど、今のやり方の効率の悪さが浮き彫りになる。

ステュワートの言っていた通り遠征だけでも資材は集められる。それに、余程のトラブルが無い限り艦娘は安全だ。

ただどそれは大本営が良しとしなかった。実際に間近の問題は深刻な資材不足。これも自分が出撃させなかった影響だ。//遠征だけ// を続けて来た結果、大湊ウチナの艦娘

は戦闘に慣れていないんじゃないかと思いは始めている。……あとで佐世保に居たこと

があるスチュワートに訊いてみよう。その前に謝らなきゃいけないな。

「——と、色々の良い事があるんですよ……って提督？ 聴いてましたか？」

大淀がちよつと怒ったように言ってくる。……全く聴いてなかった。だけど、任務の重要性和大体の内容は聴いてたから大丈夫だと思う。

「あ、ああ。しつかり聞いていたよ」

だから自分はそう返す。

「それでは、スチュワートさんが戻ってきたら、どういった編成が良いか一緒に考えてみましょう」

スチュワートが言っていたように「これなら大丈夫」って笑えるくらい策を練って帰りを待てばいい。

大淀も居るんだ。今までだって、今だっていろんなことを教えてくれてるじゃないか。時間を掛ければきつと納得のいく良い編成、良い作戦を立てられる筈だ。

艦娘を喪うのは怖い。自分の所為で傷付くかもしれないのが怖い。

だけどそれは市民を危険に晒しても良い理由にはならない。……スチュワートは、艦娘を無理やり出撃させて、半ば強制的に自分に指揮をさせるつもりだったのか……？

……この強引さには敵わないな。

自嘲気味に笑う。

「そうだね。でも、まずは誰が残ってるか確認してから……」

この直後、執務室に艦娘が一齐に集まって作戦を考えるどころではなくなった。

▲ 艦娘達の部屋を次々に開けては声を掛けていく。

ノックをしたら「待って！ 待って！」なんて言ってくる人も居望月たけど問答無用。

……ルームメイトが出来たらちゃんと言付片付けけるよ？ 居望月ない間は許す。
俺は優しいんだ。

「……それにしても」

部屋でのんびりしていた人たちに声を掛けたら、意外なことに殆どの人が「よっしゃ、やってやんよ！」みたいなノリになって漲り始めたのは意外としか言いようがなかった。

普段から遠征ばかりでストレス溜まってたから深海棲艦 “で” 発散するつもりなのかもしれない。対象が俺じゃなくて一安心だ。

大淀さんは提督と一緒に今頃作戦会議でもしてるだろう、明石さんには後で説明するから良いとして……。

「最後は大鳳さんか……」

大湊ウチで唯一の “軽” じゃない空母。かなり頼りになるんだけど……言うまでも

なく資材の消費が洒落にならない。現在の資材不足に深刻な打撃を与えたM V Pだ。

「これが空母の燃費？ ヤバない？」って考えたことは一度や二度ではない。あのレベルの消費を気にせず哨戒の為にバンバン配備できる佐世保って凄かったんだなんて現実逃し始めるレベルでヤバイ。

だからこれから、その大鳳さんには暫く出撃や哨戒を控えてもらうように話をしなくちゃいけない。

「………だったら仕方ないわね。私の我儘でご迷惑をかける訳にはいきません。………あ、そうだ！ スチュワートさんも一緒に訓練、体力づくりしませんか!？」

「えっ!? えっつと………」

すんなり了承されるのは想定内。いつも長良さんと走り込みしてる人だし、やる事が無いなんてことは無いっばいね。

「ただど訓練に誘われるのは想定外だ。どうしようかな……。」

「えつと………午後には都合の付く日には………」

「本当!?! 訓練も一人より沢山居る方が捗るからね! これからよろしくね、スチュワートさん」

……この人、
訓練の間に人生過ごしてない？

見送る人達

大鳳さんは嬉しそうにしてたし、俺としても今は大鳳さんは艦装に関わらせたくない。互いに利のある交渉になったと思う。俺が訓練に巻き込まれたことを除けばだが……大鳳さんが大体駆逐艦五人分の資材を吹き飛ばすことに比べたら安い物だ。

そんなこんなで執務室に向かうと、声を掛けた人が集まっっていて執務室の前で私！ 私！ って騒いでる。

……だからなんでそんなに漲ってんの？ 出撃一つでやる気スイッチO Nとか羨ましい……俺にもやる気スイッチくれよ。

え、初出撃だから張り切ってるだけ……う？ 冗談キツイぜ。出撃ならいつもしてるじゃないか。

……あ、違うわ。川内さんの無断出撃を除けば初出撃になるのか。そりゃあ自慢話になるからみんな行きたいよな。

「それじゃあ、メンバーを発表する」
提督の声が、廊下まで響いてきた。

「やっと終わりましたね……」

大淀さんが提督に労いの言葉を掛ける。やる気に満ち溢れた艦娘達の波が引いて静かになった執務室では、提督が打ち上げられたクラゲのように椅子の背もたれに体を預けていた。

「そうだね……これで良かったんだろう？ スチュワート」

「まだ編成を組んだだけじゃないですか。出撃して無事に戻ってくるまで気は抜けませんよ……」

出撃するのは旗艦を長良さんにした飛鷹さん、響、雷、曙、潮のA班。

A班は大淀さんに色々と言きながら考えたみたいで、素人の俺が無難じゃんって思うくらいにはそれっぽい編成だ。

……だが問題はB班は艦娘たちだ。

旗艦お頭を摩耶若さんにした、菊月若、村雨苦勞人さん、江風鉄砲玉A、長波B、朝霜CのB班。

艦娘たちの勢いに押されたらしく、適当に決めるとかふざけてんのか？ って言いたくなる面が集まった。……が、B班のメンツがあまりにもケンカ慣れしてそんな集団だったから放っておいた。あの人達だったら殺しても死なないと思うから大丈夫だろう。策が無い？ だったら死ぬまで殴れば相手は倒れるだろうを地で行きそうで怖い

んだよなあ……頼りにはなるけど。

「……何処の組のモンだ？　うちのシマ^本で何してんだ？　あ、？」って感じで撃ち合
いの前に睨み合いを始めそう……始めないよね？　とにかく、常識のありそうな村雨さ
んを咄嗟にチョイスした大淀さんにはナイスと言いたい。村雨さんには南無三してお
こう。生きて戻って来いよ……。

「……」

そういえば今日の分の書類つてもう処理終わってんの？　資材云々から出撃するつ
て流れにしちやったから忘れてたんだけど。

「提督、机の上に書類が見当たりませんが……あ、あるならいいです。後はやっておきま
すので……大事なもののだけ今の内に……」

俺、今日まだ書類仕事してないんだよ。全部提督にやってもらうっていうのは俺が楽
で良いけど、それだと提督^{上司}に仕事を押し付けたって感じがして嫌だ。だから残りの書類
は俺が頂く。

だからその間提督は『艦これ』の提督（形容詞）な提督（名詞）みたいに艦娘とイチャ
コラしてればええねん。俺のことは放っておいてくれ。

「……提督、もうちよつと艦娘の皆さんとコミュニケーションを取ったらどうですか？

それぞれの好き嫌い、得意不得意、のめり込む趣味、何が何処でどう繋がってくるか分かりませんよ？」

「……そうだな。善処しよう」

分かつてくれたようで何よりだ。

だから俺は適当且つなんかそれっぽい理由で提督を執務室から追い払う為に、大淀さんには尊い犠牲になって貰う。

「でしたら、今日はこれから大淀さんと一緒に外でゆつくりするなんて如何ですか？」

「ふえっ!？」

「こんな室内に引きこもってないで、偶には羽を伸ばして来たらどうですか？」

「……分かった」

「ええっ!？」

俺の提案に乗った提督と困惑する大淀さん。

おめでどう! 提督も了承してるし、実質デートじゃないか。

何だよちよつと赤くなってる……満更でもないんだろ? ……ってなんでそんなに

気を遣ってるような目を向けてくるん? 書類は俺が片付けておくから、二人は俺に構

わず先^{デート}に行け!

なんてやり取りをしてたら、外が俄かに騒がしくなっていることに気付いた。

「提督、出撃する艦隊を見送りに行きましよう」

大淀さんが提案してくる。

そういえば、佐世保の提督も出撃する艦隊は極力見送るようにしてたっけ……。やっぱりこういうことの積み重ねなんだろうな。俺たちは正式な初出撃する艦隊を見送る為に外に出た。

恐らく、遠征で居ない人を除けば全員集まったんじゃないだろうか。

「土産話、期待してるわ!」「いや〜……初出撃貰っちゃまって悪いね〜」「不甲斐ない結果を残さないですよ?」なんて言い合ってたが、提督(と俺と大淀さん)が出てきたらしっかりと整列した。

「旗艦長良。以下六名、出撃します!」

「行つてきまーす!」

「旗艦摩耶。以下六人、出撃する!」

「おおーっ!」

A班とB班の旗艦がそれぞれ宣言して、大勢から見送られて出撃していった。

出撃していったメンバーの影が小さくなるにつれて、見送りに来ていた艦娘達が一
人、二人と寮に戻っていった。

「……行つてしまったな」

隣に立っていた提督が呟く。

「行つてしまつたつて……何がです?」

「もう後戻りは出来ないよね?」

ええい、この期に及んでまだ言うかこの提督は!

「まさか無策で出撃させた?」

「そんなまさか! しつかり作戦も伝えたさ。初めてだから無理はせず、危なくなつた
ら撤退するように言つてある」

ふくん……。「いのちだいじに」かよ……。物凄く無難な選択じゃん。

「だつたらあとは待つだけ。違いますか?」

「いや……その通りだ」

なんか提督つて俺にあんまり反対しないな? せめてもうちよつと噛みつくつて言
うか……。従順なヤツつて面白くないから好きじゃない。

「だつたら、なんでそんなに不安そうに出撃してつた人達を見てるんですか?」

「それは……もし帰ってこなかったら、申し訳なくて……」

「……だそうですよ？ 大淀さん」

面倒くさくなってきたから大淀さんに振る。俺のクソ雑魚コミユ力じゃあこの提督の相手は厳しかったみたいだ。

なんだよもし帰ってこなかったら……その為の作戦だろーがよ。しかも安全第一って言ったなら相当運が無かったか、偶々耳が聞こえなくて指示が聞こえなかったくらいじゃないとしっかり引き際を考えて行動してくれるって。俺とは違って軍艦だったんだから。プロやぞ、プロ。

水平線に最早点も見えないくらい離れたメンバーを、見えないけど眺めてる。

「それにしても……歯痒いなあ……」

「スチュワートもそう考えていたのか。人の事言えないじゃないか」

ああん!? 誰にも聞こえないように言った独り言を拾うとか地獄耳かよテメーは
よお!

「私はその気になれば追い駆けることが出来るから尚更です……やりませんよ？ 大本

営命令ですから」

精々クロールが限界の提督とは違うのだよ。魚より速く泳げる変態だって言うなら話は変わるけど、仮にそうだとしても深海棲艦に手も足も出ないだろ？ どんなに頑

張ってもイ級の嘯みつきから一回底うが限界だ。

「そうか……見送るだけって、辛いな……」

「全く。だからこんな思いをしなくても良いように、提督はしっかりと編成を組んで、作戦を立てる必要があるんです。さ、もう大淀さんも帰って誰も居ませんし……戻りましょうか」

「……ああ」

——それは、一人の提督にとって大きな一歩になる。

大鳳 嵐と爆弾

「ハッ……ハッ……」

喉が張り付く。肺と脇腹が痛い。

俺は大鳳さんと訓練という名の走り込みをしていた。「体力は基本だけど最も大事！」と熱弁する大鳳さんを見て相当キツイだろうななんて思っては居たけど、想像をはるかに超えてキツイ走り込みに言葉の代わりに二酸化炭素しか出てこない。

「ふうっ、ふうっ……ふうう。一旦休憩にしましょう」

今まで隣を走っていた大鳳さんが止まる。

一旦？ 今一旦って言ったよね!?

「流石に……これ以上は……」

キツイなんてもんじゃない。学校の部活動が軽く思えるレベルだよ。

なんかもう走り込みのペースからしてヤバいもん。絶対にオリンピックに出るアスリートとかプロのスポーツマンがやるようなトレーニングでしょ。過度な運動は身を滅ぼすって。

一旦休憩って言った大鳳さんは汗を掻いて肩で息をしてるけどまだまだ元気そうだ

し……ホントになんなのさ。疲れると元気になるとか、追いつめられたら覚醒するゲームのボスか何かかよ。

それでもコレはマズイって……明日の仕事に支障をきたすって。でも訓練に付き合うつて言っちゃったし……。気軽にそんなこと言った過去の俺を助走を付けてぶん殴りたい気分だ。

毎日つき合つてたら確実に、冗談抜きで死ぬ。

だけど普段午後つて残った書類を提督から奪つて片付けたり、警備府内を見回りしたり、厨房に籠つて伊良湖から料理教えて貰つたりしてるから、時間はあるっちゃあるんだよね……。

「こんなものじゃ終わらないわ！　まだまだ行くわよ！」
嘘やん。

それからどれだけ時間が経ったか分からない。一時間かもしれないし、四時間くらいかもしれない。

日が傾く前には走り込みが終わり、それからは腹筋や体幹トレーニングをしていた。

「そろそろ晩飯ね！」

「あつ……」

「……どうかしたの？」

飯の支度の手伝いをするの忘れてた……。今から行っても遅いだろうしなあ……。伊良湖が怒ってたりしないと良いんだけど……。

「えつと……。食堂で伊良湖さんの手伝いをするの忘れてました……」

「ええつ!? ご、ごめんなさい！ 私、訓練に熱中しちゃって……。やだ……」

俺が答えると恥ずかしそうに謝ってくる大鳳さん。

「もしかして、無茶させてないかしら……?」

そのまま大鳳さんが無茶させて無いか質問してくる。

まず走るペースの時点で大多数の人が無理しなきゃいけない思うけど……。それを言っちゃ拙いだろう。

「大分疲れましたが、だからこそそのトレーニングでしょう?」

「っ！ ええ、ありがとう!」

何故か感激された。解せない。

「何も言わずに出なくて済みません……」

「い、いいえ！ 謝らないでください!」

俺は食堂で、伊良湖に謝っていた。

出撃させたお陰か、艦娘の人数自体がちよつと少なかった何とかなったらしい。本当に申し訳ない。

「そ、そうです！ 今日の夜は今朝いただいたマグロなんですよ！」

許してくれる上に露骨に話まで変えてくれた伊良湖には感謝しかない。

「あゝ……ありましたねえ。刺身ですか？」

「はい、シンプルが一番です！」

そう言つて厨房に消えていった伊良湖。

本当に済まんね。少ないとは言つてもいつもに比べたらつて話で、それでも十人は余裕で超えるから楽な訳ないのに……これは早く間宮さんを建造してもらわないと拙いな……。なんで大本営は明石と大淀のレシピしか持つてこさせなかったのか疑問に思うね。

「頂いたつて言つてなかったかしら？ マグロを？」

「はい。漁師さんたちからいつものお礼つてことで、魚介類は貰いものが多いんですよ。

大鳳さんのお陰ですね」

「……なつ……つ！」

大鳳さんは俺の言葉を聞いてポカンとしたような顔を浮かべた。

「け、軽空母の皆さんのお陰です……」

ちよつと間を開けてから赤くなって、照れ隠しからこんなことを言い始めた。可愛いなオイ。

「お待たせしました！」

伊良湖が二人分のお盆をカウンターに置いた。綺麗に光を反射する赤身が食欲をそそる。

「ありがとうございます。大鳳さん、食べましょうか」

「え？ ええ……」

「いただきます」

大鳳さんとマグロに舌鼓を打つ。ワサビを付けなくても特有の生臭さを感じないのは何度食べても凄い。

なんて考えていたら大鳳さんがお代わりに行つた。「沢山食べて沢山動く。それが一番です」なんて言つてた。

見た目が小柄な少女？ 女性がトレーニング大好きな男子高校生と同じこと言つてる……なんてドン引きしそうになつたのは秘密だ。

「大鳳さん……とスチュワートさん」

自分の名前を呼ぶ声が聞こえてきたから二人して箸を止める。

「あら、青葉さん。どうしたの？」

俺の後ろから現れたのは警備府の情報屋、青葉さんだった。

肩に手を置くのを止めないか！ 手を払って軽く睨む。それでもあらら……なんて言うばかりでこれっぽちも悪いと思つてない反応をしてくるからやり辛い。

「いや……今日の朝にですね、ここに居るスチュワートさんから特大のネタを提供されてまして……他の皆さんには色々取材したんですけど、大鳳さんが最後に残つてしまっています」

「特大ネタ……？ 気になるわね」

朝の特大ネタ？ 朝の特大ネタ……。 はて？

「実はですね……近いうちに夏季休暇があるそうなんですよ！ それで、大鳳さんは何をしたいですか？ 因みに他の人達に訊いて回った結果がこうなってます！」

一気に捲し立ててくる青葉さんが手帳を見せてくる。そこには海水浴、温泉旅行、山でキャンプ、とか実に “らしい” 回答の横に正の字が並んでいる。……一番多いのは温泉旅行か。

「そうね……私だけだったら山について言いたいけど、私が何を答えたところでこれだと結果は変わらないじゃない」

そう言つて苦笑いをする大鳳さん。……でも違うんだなあこれが。

「最終判断は提督ですし、どんな回答でも大丈夫ですよ。あ、青葉さん。私は 〃屋台とかやる〃 案を出しますね」

まあ、艦娘はまだ全然揃つてないからイマイチ盛り上がりには欠けるつてことで却下されるんだらうけど……俺としては地域密着型の警備府にしたいんだよね。

「なるほど……では大鳳さんは山で良いんですね？」

「はい」

山の隣の正の字に線が足されて、新しく警備府でお祭りつて選択肢が書き込まれた。そしてそのページを破つて俺に渡してくる。

「ささつ、提督にコレを渡してください。この青葉が集めたデータを活かしてくださいよ。それでは！」

突風のようにやってきて、掻き回してから去つていった……。

「……」

それからはしばらくの間、会話もせずに残つた料理を食べ続けた。

「……そういえばスチュワートさんつて皆さんに顔が利きますよね。何ですか？」

大鳳さんから一つの質問がされる。顔が利くつて言われてもなあ……そりゃあいつ

つも提督の近くで仕事してるし……強いて言うなら——

「初期艦だから……ですかね？」

「えっ」

「……えっ？」

何その反応。俺が「えっ？」なんだけど……。

「艦娘だったんですか!？」

「……えっ？」

Why? 大鳳さんが何言ってるか理解できないね？

「え？ 嘘!?! え、でも……」

「失礼な。提督でも憲兵でもなければ何だつて言うんですか」

消去法で行ったらどう考えても艦娘つて答えに辿り着くと思うんだけど……。

「ええと……提督のメ、メイドの方かと……」

「……」

なんで？

仮に、億分の一でそうだったとしても、セーラー服こんな服装のメイドなんて居ないだろうよ。それに艦娘でも無けりゃこんな常識はずれな髪の色なんてあり得ないって。

「ごめんさい！ でも、誰もスチュワートさんのこと分からなくて……」

「分からない？ いやいやそんな——」

「話は聴かせてもらいました！」

「ヒッ」

青葉さん!! 出ていった筈じゃ……。

艦隊帰還？

「いや〜……まさか謎に包まれていたスチュワートさんの素性はまさか艦娘だったなんて！ これは大スクープですよ！」

「……はい？」

俺を提督のメイドと勘違いしていた大鳳さんと言い、俺の素性を勝手に謎に包まれていたことにする青葉さんと言い……何なんだよ。頭が追いつかねえぞ。

俺は別に隠してたつもりは無いんだけどなあ……誰も直接訊きに来なかつただけじゃん。

「それでですけど！ 艦種とか、ついでに色々教えてくれませんか？ 好きな食べ物とか、提督との関係とか！」

「……」

これがマスコミの力……？ めっちゃグイグイ来るじゃん。

別にそれくらいなら答えるけど、初期艦の前は何をしてたかって訊かれた時は提督の力で情報を制限してもらおう。普段から提督には極力楽をさせてるつもりだし、こういった時くらいは何かしら俺も見返りを求めて良いんじゃないか？

「ええと……じゃあ、何から訊きたいですか？」

青葉さんと大鳳さんから色々々と訊かれた。

問答の音量自体はそこまで大きくなかったことと、「何だ、青葉さんの
か」って感じで他の人達が混ざってこなかったことは幸運だった。

〃^取いつもの〃^材

青葉さんの話では、俺の存在はマジで謎のボール過ぎて艦娘の間で様々な憶測が飛び交っていたらしい。

「メイド説」の他にも「妹説」「後輩説」「真の提督説」「実は居ない説」

……マジどういうことなの……？ 特に「実は居ない説」を提唱した人は一体何が見えてるのか疑問に思うレベルなんだけど……流石に冗談だよな？ でも面白いから許す。もっと突飛な説で楽しませてほしい。

出撃しないことについては、機密事項つてことで秘密にした。本当は隠し事なんて作りたくは無いからパーツと話しちやいたいけど、士気がダダ下がりしそうだし……話すタイミングは提督と要相談つて感じかな？

「あ、そうです。コレをバラされるのは本意じゃありません。出来るなら私の初出撃の時か、艦娘が揃ったときにお願ひしますね？」

「え？ 何ですか？」

「そつちの方が面白そうだからです」

「……この短い問答でも分かったけど、スチュワートさんって実は相当変わってるよね」
俺のお願いに対して大鳳さんがそう言うてくる。

……ああヤバイ。前世に言われたことと全く同じだ。クツソ懐かしくて思わずニヤけちやうね。

「隠してるつもりは無いんですよ？ 全く……こんなに面白い事が大好きなのに、なんで真面目って勘違いされちゃうんでしょうね？」

お道化^{どけ}たようにちよつと手振りをしながら言う。

「これは……スチュワートさんの謎に包まれた部分は触れてはいけない部分だったようです……青葉、一生の不覚っ！」

「残念でしたね。知られてしまったからには青葉さんには遠慮は……要りませんね？」
「勘弁してください……」

「大鳳さんも出来れば秘密でお願いしますね？」

「フフツ……私も共犯ってことですか。分かりました」

「実はこれよりもっと酷い部分はまだまだありますけど……楽しみにしておいてくださいね」

辺りはもう真つ暗だし、随分と話し込んでしまったことだけは間違いない。俺は楽しんでだけ二人には退屈な思いをさせなかったかが気になるけど、それは訊いちゃいけない

いからもう何もないと席を立とうとする。

「ツ!? グフツ……!」

立てなかった。

「ちよっ!? スチュワートさん、大丈夫ですか!」

「フフフ……筋肉痛で立てません……」

その言葉を聞いてまた謝ってくる大鳳さん。出来れば次からはもつと軽いメニューでとお願ひしておいた。訓練ガチ勢じゃあないからお手柔らかにお願ひします。

そのままヒヨコヒヨコと工場まで行つて、明石さんから呆れられた。

翌日

朝……と言うか深夜に目が覚めた。今日は出撃に行つてた面子が帰ってくる予定だからだ。

連絡が無いのが本当に心臓に悪くて悪くて……。どれくらいかと言うと、まさか在りもしない母性が目覚めたのかとパニックになりかけるくらい。

でも便りが無いのは元氣な証拠なんて言うし……ちゃんと揃つて戻ってくることを祈るしかない。

執務室で何時ものように提督に朝食を渡す。

提督が飯を食べている間、提督をただ眺めるなんて趣味を持ってない俺は、書類の枚数を数えながら提督に昨日のことをちよつとだけ話す。

「あく……言いたくなければ言わなくても良いんじゃない？」

「いいえ、隠し事をし続けるのつて大変なんですよ。それに、案外隠し通せないつてとある人にも言われたんですし、いつかは言わなきゃいけないんですつて」

「そう……じゃあタイミングは任せるよ。言いたくなつたら言えばいい」

何その「何食べたい？」「何でもいい」みたいな凄く反応に困るヤツ。そんな適当な具合だと俺以外にも悩んでる艦娘がいても碌に相談させられないじゃん。佐世保の提督を見習つて？

「……分かりました。ですが、それまでの間は黒川提督のことは提督元権限で秘密にしておいてくださいいね」

「流石にそれくらいはね。……いつも助けてもらつてるからね。ありがとう」

「!? ……いきなり何ですか気持ち悪い。仕事じゃなかったら御免ですよ」

「君は何時もそうだね……ハハハ……」

なんて言つて苦笑いする提督。

残念だったな。これがいわゆる提督 L O V E 勢つて言われる人達だったら俺のポジションは密かに奪い合いになる可能性も在つたんだろうが……ぶつちやけ出撃

できるならすぐにでも誰かに押し付けて出撃したい。面倒くさくてダメだ。やりたい人にやらせておけば問題ないでしょ。

でも俺の黒い秘密をしつかり秘密にしてくれることには感謝しないとイケない。つまりなんだ？俺は提督相手にツンデレムーブをしていることになるのか？

「うわキモッ……そう言えば、昨日は大淀さんとのデート、楽しかったですか？」

「ブツ!? ゴホッ、ゴホッ！」

うわ汚っ！ 噴きやがった。マジ止めてくれよ……ソレ片付けんの俺なんだけど……いや、床に散らばってねーし提督に片付けさせよう。うん、書類は俺が持ってたから無事だし一安心だ。

全く……今日の俺は随分紳士的だ。運が良かったな……。俺の方に飛ばしたら蹴りの一発でも入れてたかもしれない。……って言うかどこに噴き出す要素があったんだ？ 何してたかは全く分からんけど、大淀さんは一体提督にナニを……？

提督の食器を片付け、食堂から持ってきたタオルを投げるように渡す。

「今日はお撃した人たちが戻ってくるので、早めに書類を片付けてしましましょう。先程食堂で祥鳳さんに帰還を確認したら連絡をとってあるので、窓は開けておいてください。艦載機が飛んでくるらしいので」

「分かった。じゃあ早速書類を片付けようか」

そう言つて姿勢を正して書類に目を通し始める提督。

いや、早く書類を捌きたいってのは分かるけどね？　ちよつとは疑問を持つとうよ。連絡方法が余りにもアナログ過ぎない？

せめてさあ……軍のお金で防水のスマホみたいなのを全員とまではいなくても配ろうよ……。この時代に情報が時速何キロって表現できちやうのはヤバいって。スマホ使おう？　地球の裏まで一瞬やぞ。

——ブウウウウウン

「えっ」

おいおいマジか。今から始めようと思つたら艦載機来ちやつたよ。

ええ……早いなんてもんじゃない。まだ午前七時くらいだぞ？

提督と顔を見合わせる。

「……取り敢えず行きましようか」

「ああ……」

何かしらのハプニングの可能性も在るし、まだ手放しに喜べそうに無いな……。

帰還とその後

艦隊帰還の伝令？ を受けて慌ただしく外へ出る。時間も時間だからほとんど人にはすれ違わなかった。いつもランニングしてる長良さんは居ないし、川内さんは大鳳さんに抑えて貰っている。大鳳さんスゲエ……。

「おはようございませす……提督」

「おはよう祥鳳。出撃した艦隊が戻ってきたのか？」

「ええ。まだ離れてはいますが、直に到着するでしょう」

祥鳳さんの言葉で提督も俺も水平線を見る。

何かのトラブルでこんな時間に戻ってきたんじゃないと分かって一安心だ。提督も安堵の息を小さく吐いたの俺は見逃してねえからな？

それにしても、まだ人影すら見えないんだけど……。どうして戻ってきたなんて分かるんだろうね？ 空母の人達は艦載機と視界をリンクさせてる説が濃厚になるね……。

脳ミソへの負担ヤバそうだと思うんだけど、俺は空母じゃないから分からない。でも空母になって頭おかしくなって死にたくはないから今のままで良いや。

待つこと十数分。提督は祥鳳さんと雑談をして時間を潰し、暇を持て余した俺はだんだん明るくなる西の空を眺めつつゲッター線^{精神を空虚に溶かし}について考えていた。

「見えてきましたね」

「ああ……」

「そうか……ゲッター線とは……ゲッターとは……!? そ、そうですよねえ!」

「?」

危ねえ危ねえ、戻ってこれなくなるところだった。

「何コイツ……」みたいな顔で二人から見られたけど、確かに水平線には小さいながら点が並んでいる。十より少なそうだし、二つの内一つの班が戻ってきたってことか。

次第に点が大きくなってきた頃、提督がスツと姿勢を正して微動だにしなくなった。

「本当に提督が板について来ましたね」

「止めてくれ……」

ちよつと押揃ったつもりが、普通の反応が返って来たので面白くない。そこで祥鳳さんに話を振ろうとしたけど、結構近くまで艦隊が戻って来てたから俺もお出迎えの為に姿勢を直す……が

「……おおおおおおおおおっ!!」

気合のある声を上げながら隊列なんて無かったと言わんばかりにスピードを上げて突っ込んでくる影が　「二」　つ。

「クツツ……不意打ちだなんて卑怯だぞ！」

「キヒヒツ、戦場で気を抜く方が悪いのさ」

「くつ……お、憶えてろよな！　次は負けないからね！」

「そう来なくちゃ面白くないね！　おつ？　提督じゃん」

派手に水飛沫を上げながら陸に上がった二人……長波と江風は提督に「お帰り」の一言も言わせなかった。

「どーだい！　私達は完璧に作戦を遂行して見せたよ！」

「そーそー、褒めてくれても良いンだぜ……ツ痛ア！」

「このおバカ！　コホン……提督、ちよつとコレ江風借りていきますね♡」

良い音を立てて叩かれた頭を抑える江風がシヨ・ホー・ンな顔をしながら村雨からドナドナされていった。

「長波も、流石に提督の前でそんなに騒ぐこたあねーだろ。バカみてーじゃねーか」

「おいお前ら、戻ったら一番最初にやらなきやいけねえことがあるだろ……」

騒がしい駆逐艦の後ろから戻って来た摩耶さんが言う。

……滅茶苦茶威厳があるって言うか……親分、姉御気質と言うか……。ついつい従っ

ちやいたくなる雰囲気がヤバい。

摩耶さん改め摩耶様の一言で六人が整列した。

「只今帰投しました！」

「ああ、お帰り」

「お帰りなさい。お疲れ様です」

提督とついでに俺も言っておく。やっとお帰りと言えた……。いつも遠征に行つて
る人たちにも言つてるけど、出撃から戻つて来た人に言うのは初めてだ。ちよつと感
動。

「よし。じゃあお前ら……散つた散つた。あたしはこれから戦果報告しなきゃいけねえ
から、先に戻つてな」

そう言われた直後にダツシユで行動し始めた江風と、それを見て溜息を吐く村雨。楽
しそうに会話しながら工廠の方に向かう夕雲型の二人。

そして提督と一緒に寮の方に向かう摩耶様。そして俺は、一人でその場に残つた菊月
に声を掛けた。

「お疲れ様でした……つて随分眠そうですね……大丈夫ですか？」

菊月は提督も居なくなつて気が緩んでいたのか、ぶつちやけ言うと死にそうな目をし
ていた。隈がヤベエ……

「問題ない。……と言いたるところだが、正直に言うとなれた」

菊月の言葉を聞いて驚いた。普段から弱音は吐かないあの菊月が……珍しい事もあ
るものだ。明日は三式弾の雨が降ってくるに違いない。

「全く……本当にあの三人、特に江風と長波はなんなのさ……」

曰く「一番多く深海棲艦を撃破できるか競い合った」らしい。結果として深海棲艦は
あつという間に姿を消し、出撃の主な理由である深海棲艦の掃討は終わった。けれど休
める島が運悪く近くに無かったから、無理して夜間に警備府に戻ることになったと語る
菊月。その割には江風と長波がまだまだ元気すぎると思うんだけど……。

「だが菊月は放っておいて村雨を慰めに行つてやつてくれ。江風のお守りで相当疲れて
いる筈だ。あとで甘いものでも奢つてやると良い」

「じゃあその時は菊月もどうです？ 初出撃の感想も聞かせてくださいよ」

「フツ、良いだろう。楽しみにしておけ」

そう言つてちよつと上機嫌になった菊月も工廠に向かつていった。最後に祥鳳さん
に頑張つてと言つて俺も執務室に戻る為に足を動かした。

「お、スチュワートじゃねえか。報告なら終わつちまつたぞ」

執務室に向かう途中、摩耶様とすれ違った。

やはりと言うか眠そうに大きく伸びをしながら歩いていたが、俺を見つめるなり気さくに声を掛けて来た。報告が終わったって……早くね？

報告がそんなすぐに終わるようなものだったとか知らなかったわ……そうだと知ってたなら菊月に話しかけずに摩耶様と一緒に執務室に向かったと言うのに。次からは気を付けよう。

「フッフッフ……あたしらの戦果を見て驚くなよ？」

なんて言つてニヤツとした顔を向けてくる。

うんかつこいい……じゃなくて、戦果が凄いつてことはやっぱり菊月が言つてたように深海棲艦のキルマークの数で競つてたからか。きつと物凄い数の深海棲艦が海の藻屑と消えたんだろうなあ……。

「楽しみですね」

そう返すと、おう！なんて言つて歩いて行った。

服装に乱れも無さそうだから小破すらしてなさそうだ。喧嘩慣れしてそうつていう小学生並みの感想はあながち間違いじゃなかったことだな。

……もしかしたら艦娘としての能力に加えて、個人個人のモチベーションとか性格、得意不得意も実力の内に入ってくるってことか？

カタログスペックだけ見てベストな編成組んでも互いの相性が悪くて全然ダメでし

たなんてこともあり得そうだな。やつぱり提督に艦娘とのコミュニケーションを図れって言ったのは正解だったみたいだ。

……この『艦これ』難し過ぎない？

「これは……」

なんとというか物凄い数だ。摩耶様に言われた通りしつかりと驚かされた。

提督から渡された紙には手書きの文字、駆逐イ級を始めとする深海棲艦の名前が複数書いてあつてその脇には数字。パツと見ただけで五十超えてるって分かるんだけど……それをたつた六人で？

「凄いですね……」

「そうだな。しかも疑つてる訳じゃないが嘘では無いらしい。……それに、遠征で止む無く交戦したというケースはあつたけどこんなに沢山に沢山深海棲艦が居たなら、普段の遠征でももつと遭遇していてもおかしくは無い……のか？」

言われてみれば確かに……撃破した数が多すぎる。

佐世保で遠征に行つたときは俺たちは三日かけて往復したが今回の出撃した班は徹夜したとはいえ一日で戻つて来た。ということは間違いなく佐世保の遠征よりは遠洋

に出ていないことになるが、それなのにこんなに遭遇、撃破するのはおかしい。

例え遠征は逃げが基本で今回は掃討を目的としているから比較対象が違うにしてもだ。

もう一度渡された紙を見る。駆逐イロハ級、潜水艦、軽巡が多いけど、重巡と戦艦の名前が無い。

鬼や姫が居たとするなら摩耶様達がほぼ無傷で戻ってくるのは失礼だけであり得ないと思う。

佐世保の夜戦大好きな軽巡御一行が纏まって掛かる相手だ。俺も駆逐棲姫にサンドバッグにされたことがある。それに、そんな危険度の高い相手が居てたら真っ先に報告することは間違いない。

「なんか怪しいですね……」

俺と提督がよく分かんない違和感を感じていた時だ。

バン！

扉が勢いよく開けられた。

「艦隊が大破で帰還しました！ 深海棲艦も多数確認できます！」

深海棲艦注意報

「艦隊が大破で帰還しました！ 深海棲艦も多数確認できます！」

「……………え？」

突然開け放たれた扉から入って来た声に呆然とする。

突然こんな事言われたらビビるよなあ？ 窓の外を見る……が、海には何も見えな
い。むしろ艦娘以外が通りかかったらちよつと大問題だと思う。

「提督！ 早くご指示を！」

「まあまあ大淀さん、焦る気持ちはあると思いますが一回落ち着いてください」

こんなに切迫した雰囲気の大淀さんとかかなりレアだから珍しいなうなんて思っ
たけど、状況が状況らしいから訊きたいことを訊く。

「まず訊きたいことが幾つかあるんですけど、大破帰還したメンバーはどうなつていま
すか？ 深海棲艦の大まかな種類と、今どの辺に居るかは分かりますか？ それと、今
深海棲艦に対応している人は居ますか？」

取り敢えずこの辺は気になるかな。ただ敵が来たって言われても提督だって神様
じゃないだろうし「じゃあどうすりゃええねん」ってなるだろう。

敵と味方の数と種類をしつかり把握しておかないと対策もクソも無いからね。あとは状況に応じて局所局所に効率的に配置して戦わせればあとは流れで何とかなってくれるだろう。……これ何て名前のタワーディフェンス？

俺の言葉を訊いた大淀さんが一拍おいて落ち着いた。こういった時にすぐ落ち着けるって割と凄いなと思う。

これで後は話を聴いた提督がしつかり指揮を執ってくれるだろうと思つた俺は、断りを入れてから執務室を出た。

提督に知らせたのは多分一番最初。だったら次は一般市民の避難だろう。

万が一俺たちの防衛線が破られた時に全く避難してませんでしたでは話にならない。それと、大本営にも連絡を入れておかないといけないだろう。

……やっぱりこういつたときにすぐ連絡できるように文明の利器は必要だ。いくら『艦これ』の艦娘が大戦時代の軍艦がモチーフだったとしても、わざわざ現代で同じことを繰り返す必要は無い。使えるモンは使つて深海棲艦をブチ殺せば良いんだ。

「でもそれなら何で艦装とか艦載機は大戦時代のヤツなんだ？ 現代のヤツ使えば深海棲艦をパワープレイでポコポコに出来るだろうに……あつ、すみませくん！」

執務室から出て向かっていたのは警備所だ。

警備府内に一齐に放送出来るのは今のところ此処しかない。それに、民間に大規模に連絡を入れられる唯一の場所でもある。

「はい、何の御用でしょうか？」

畜生！ 呑気な対応しやがって……。まあ何も知らないなら仕方ないか……。

「深海棲艦が近海にやってきてきているとの報告がありました」

「ッ！ 分かりました。民間に避難を呼びかけます」

俺の一言ですぐにこの一言が出てくるのは流石の一言だ。お願いしますとだけ言つて、電話を掛ける警備員を見る。

……ん？ 今深海棲艦警報なんて言つてたけど、沿岸部はそんな注意報なんてあるのか……しかも避難訓練通りの対応をしてくださいって……マジで災害扱いじゃんか……。

まあ爆弾とか文字通り銃弾の雨なんて台風とかよりよっぽどヤバいからしようがないね。そんな俺も戦時中、空襲の怖さを理解してない一般人なのに……流されるままに守る側に立たされるなんてあんまりだ。

「次はどちらへ連絡をしますか？」

「警備府内の艦娘全体への呼びかけをします」

民間への連絡が終わったのか、真剣な表情で次を訊いてくる警備員に俺は電話を要求

する。すぐに分かりましたとだけ言ってマイクを渡してきた。有能。

「全体連絡です。深海棲艦が近海で多数見つかりました。対応の為に攻撃の準備を行ってください」

俺の口から “多数” って単語が出て来た時にギョツとした顔を向けてくる警備員。言わなかった俺が悪いんだけど、深海棲艦が多数つて市民に連絡して、変に不安を増幅されるよりは良いだろうっていう咄嗟の判断だ。

あえて真実を全て語らないとか俺にしては中々頭良さそうなロールプレイでは？
なんて思ったけど、満足している暇は残念ながら無い。次は大本営に連絡しなきゃいけないけど……これは俺がやっても良いのか？

まあ良いか……やっちゃえ

○産NISSON

言うて緊急事態だし……別に問題ないでしょ。さて電話番号はくつと……

—— ツー……ツー……ツー……

なんてこつた……タイミングが悪すぎない？ 訴訟も辞さないんだが？

だけどころしちゃ居られない、次だ次。

戦場は初速で決まるって学校の先輩も言ってたし、初期の対応として俺が出来ることは……思いつかねえな。執務室に戻るか。

寮の中は遠征に行つてない艦娘達が早足で移動していた。

「食堂だ！ 食堂に向かえ！」

摩耶様が部屋を開けて回り、声を掛けていた。

徹夜越しの連続出勤とかファンタジーもビックリなブラック労働環境だ。頼むから疲れからへまして居なくなるってことだけは止めて欲しい。

「済みません……先程出撃から戻つて来たばかりなのに……」

「あん!? こんな緊急事態に大人しく寝てろつて? 一日くらいの徹夜なんてどうつてこたあねえよ。スチュワート、お前はさつきと執務室に行つてこい。他の連中は食堂に集めといてやるよ」

「ありがとうございます」

何だこのイケメン!? 頼りになり過ぎる!

という訳で艦娘への呼びかけは問題が無さそうだから執務室へ

「それと、大鳳と川内はもう出撃させたぞ。朝霜と長波も付けておいた」

直行出来なかつた。

え? それつて摩耶様の独断? つばいなあ……。まあ、提督の指令がまだ出てないみたいだし、深海棲艦をフリーにしておく理由なんて無いから、戦場に戦力を届けるのは急務だろう。コレを独断でやった摩耶様は間違いなく超優秀な現場指揮官だ。

「分かりました。ありがとうございます」

お礼を言つて執務室へ急ぐ。

「只今戻りました」

「はい、はい……」

執務室では提督が誰かと電話をして、大淀さんが戻つて来た俺に向かつて

〃
静かに
シートツ

“ のジエスチャーをしていた。

「はい……りよ、了解しました！」

どうやらタイミングよく電話が終わつたらしい。提督が敬語で話してたし多分相手は大本営だろう。今までずっと話していたんだとすると、俺が電話かけた時に繋がらなかつた理由はコレか。

「ふう……スチュワート、連絡ありがとう。助かったよ」

「どういたしましてです。そんなことより、出撃はどうするんですか？ あ、もう既に大鳳さんと川内さん、長波と朝霜が出撃しているそうです。それと、摩耶さんが食堂に艦娘を集めています」

「そうか……大淀」

「はい」

「食堂に行つて、先程決めた編成で出撃させてくれ」

「分かりました!」

しつかり返事をして大淀さんは出ていった。班も決まつてるなら後は誰も欠けることが無いように祈るだけか。俺は大淀さんから聞いてないけど、戦艦とかいつぱい居るなら相当分が悪いんじゃないかな……。

一番最初に深海棲艦を発見した……警備府に連絡をしたのは祥鳳さんで間違いないだろう。その時すでにドンパチが始まつて無い事を祈ろう。摩耶様が出撃させた四人が祥鳳さんの生存率に直結すると考えても良いんだろうか？

やっぱりこういつたときの為に戦艦の人は居て欲しかったなあ……。精神的な安心感が桁違いなんだよね……って言うか提督はここで何してんのよ？ さっさと食堂に行つて皆に激励の言葉とか送りに行けよ。

「スチュワート」

「……はい」

いきなり呼ばれたから返事をしなくちゃいけない。ほら、俺に何の用事があるんだ？

「……今から好きにしなさい」

………?

「えつと……」

俺の頭がおかしくなったみたいだな？ 提督が何を言ってるかさっぱり理解出来ねえぞ……

「今は人手が足りないんだ。謹慎処分を受けてるのは知ってる。だから……自分は忙しさのあまりここでスチュワートに話掛けなかった。緊急事態だったから彼女は独断で行動した。監督不行き届きの責任は自分にある」

「……」

なんかソレ、どつかで見たり聞いたりしたことがある言葉回しだね？ 理解したら口角が吊り上がっちゃうじゃないかよ。提督もそんな中二溢れること言うんだねえ……。「へえ……面白いじゃないですか……」

久々の出撃 O K って事で良いんだよね？ しかも責任は取ってくれるとか……やりたい放題しても良いんでしょう？ 最高かよ……。

これは、夕立が言う “素敵なパーティー” になりそうだな？

その駆逐艦は「取扱注意」の者です

「今は緊急事態だから長い話はしない。ただ一つ……揃って戻ってきてくれ」

以上。と、食堂で艦娘の前に短く話を終わらせた提督と、既にやる気十分な艦娘たち。

因みに俺は一月くらい海の上をお預けされてたからほぼ無条件でやる気 M A

X だ。

海の上で気持ちいい風を感じるの癖になって止められないし、海の上は落ち着く

……。これは多分艦娘の本能的なナニカだと思うから、きつと俺は大分手遅れだな

……。

だけど、今まで “待て” をされていた分思いつきり暴れるくらいはしてもいいだ

ろう。そんな事出来るかどうかは置いて、責任を考えなくていいなら本当に好き勝

手にやらせてもらうからな？

だから……さ？ 早く「行ってこい」って言えばよ。今の俺はトラブルって火種に自由

というナパーム剤、ノリと呼ばれるガソリンを詰め込んだ動くテンション爆弾だぜ？

なあ……早くしてくれや。

「皆！ 大破になる前に引き返ってきてね！ 沈まなかったら修理できますからー！」

「それじゃあ皆、武運を祈る！」

明石さんと提督の声を最後にみんなが食堂を出ていく。既に艦装を着けてる人達は既に纏まって出撃まで秒読みな辺り流石だ。

それに、普段はダルいダルい言ってる望月も普通に行動してる辺りやっぱり優先順位は間違えないとか、艦娘って軍人なんだなあとつくづく思った。

……さて俺はどうしようかな？ 出撃しても良いって言われたからするんだけど、大淀さんと提督が既に編成組んじやつてるみたいなんだよね。となると俺の役目は遊撃？ それとも最終防衛ラインの死守？

「という訳で大淀さん、役割を教えてください」

「え？ ……ええ。遊撃として深海棲艦を倒してもらえると助かります。提督から駆逐艦と伺ってますから、最後の砦の役にはちよつと……」

なるほど。大淀さんは提督に俺のことを聴いたんだな？ だから俺が艦娘だつてことに驚いてくれなかったと。つまらん……つてまあいい。

……それにしても駆逐艦だから力不足だなんて何も分かってねえな？ あの盾の凄さを提督は一ミリも理解してないな？ きつと驚くだろう。

ちよつとキレそうになったけど、大淀さんは遊撃をご所望だったから反論せずに大人

しくガンガン攻めるスタイルで暴れることに決めた。そこで必要なのは何と言っても砲と砲と魚雷！

つて訳でやってまいりました工廠です。出撃前の艦娘で大変混雑しております。現在も次々と艦娘が入っついていき、艀装を着けて出てきている状態です……が、遠征に行っている人もそれなりに居るから実はそこまで数が多い訳じゃないんだよなあ……。

だから最後尾に並んでいた俺も工廠に直ぐに入ることが出来た。中には工廠の住人の妖精さんと、工廠二柱の片方である明石さん。夕張さんは来てないけど、おいでなすつたら佐世保のアレコレを考えて絶対にお姉ちゃん呼びをしておちよくると決めている。

「スチュワートさんじゃないですか。何の用です？」

「艀装を貸してください」

手が空いた明石さんと話をする。そこで俺は必要だと思っものを要求した。

残念ながら俺のメイン装備の火力はゴミだからね。いたって普通の装備品に攻撃的なオプシオンを付けていけば火力支援の遊撃として活躍出来るんじゃない？ つていう小学生みたいな足し算理論で俺は行くぜ。

「えっと……」

「艤装を貸してください。そう、あんな感じの駆逐艦のヤツで……って」

おいイ!? ちよつと妖精さん!? 「さみだれ」って書いてあるその砲はヤバいって!
! いつぞやクソ提督を撃った佐世保の五月雨からパクった悪名高き名誉ある殺人砲
じゃん! え、返してなかつたっけ!?

いや、貰うけど……。そうそう、あとはいつもの投擲物ね。助かるわ……。何故この
妖精さんは偉そうなのに俺の心を読んだかのような行動を取れるんだろう? 世界は
謎で満ちている……。

「どうぞ! あんな感じのって言われても詳しいのは分からないからこれで……。何とか
ならない?」

明石さんから渡されたのは睦月型の艤装の予備らしい。手に持つ砲が一つしか無
かったから、左手に五月雨の砲を持って腰には投擲物を着ける。

最近盾ばかり持ってたからちよつと耐久面に問題を感じる。何時弾が当たって爆
散するか全く分からないとか、スリルを感じてヤベエヤベエ。

「はい、ありがとうございます」

良いじゃくん。盛り上がって来たねえ!

二丁拳銃みたいで中二病してるから、せめてそれに見合った華々しい戦果を挙げに
行って来ようじゃないか。

「それと、さっき大破して戻って来た人達もそうですけど、あんまり艀装を壊されると大変なんですから大事に扱ってくださいね！」

「仕事がないよりは良いでしょう？ まあ、あまり良い仕事では無いと思いますが……」

明石さんに艀口を叩いて工廠を出る。

「……え？ スチュワートさんも出撃するの？ 言われるまま渡しちやっただけど大丈夫だよね……？」

海沿いには既に艦娘は殆ど残っていなかった。提督が見送り、艀装を着けた大淀さんが無線？ のような物を弄っていた。なるほど現場に於ける全体の指揮か。頼りになるね。

俺も激励を兼ねて残ってる人に声をかける。

「さあ、深海棲艦を叩き潰してやりましょう！ 残ってる皆さんも行きますよー！」

俺も行くんだからさ。

「「……」」

多少驚かれるとかは想定してたけど、提督と大淀さん以外からあり得ないものを見るような目で見られた。

そんなに俺って艦娘っぽくないの？ 仕草とかは結構意識してたつもりだったんだけどなあ……そんなに下手クソだったなんて流石に凹むんだけど……。

「ここでゆつくりなんてしていられませんよ！ 民間に被害が出るかどうかに直結するんですよ!!」

ほらあ……準備が整った大淀さんに怒られちゃったじゃくん。

残ってる人は行かないの？ だったら置いて先に行くけど。

「っし、やるか……」

「スチュワート」

あ、あ、ん?!

シユーズの紐を結ぶような感覚で砲をしっかりと握って気を引き締めようとしたらこれだよ。

「……何でしょうか？」

「無事に戻って来てくれ」

……は？ 何勝手に俺に死亡フラグ建ててくれちゃってんの？ そんなに俺に死んで欲しいの？ 艦娘全員コンプするまで死ぬつもりは無いんだが？ ポ○モンマス

ターの運命さだめだろ？

「やめてくれって言われても戻つて来ますよ。それに、もつとドツシリ構えてた方が他の人も安心できると思うのですけれど？」

「……そうだな。じゃあ、みんなが戻ってきた時の為に夏季慰勞の準備をしないと……」

俺がちよつとだけ刺のある口調と言ひ方で返したら、提督がそんなことを言つて戻つていった。若干声が震えてたから絶対にそんな準備なんてしないでろうな。俺なら緊張して出来ねえもん。深海棲艦が実は少ないことを神にでも祈つてな提督。

久々の海の上。風を感じたくてスピードを出す。

編成に組まれてない故に完全に単独行動が許されているのは、こういう風にアホみたいに飛ばしても良いから氣楽でいいね。

班で纏まって移動している人たちをどんどん抜かしていくのが最高に気持ちいい。

「誰？」が「マジ!?!」に変わるのをチラリと見るのが悦たのしい。

そうして突き進むこと数分。随分陸地から離れたと思うんだけど……。

「ッ!」

本当に始まったばかりなんだ。一月ぶりのリハビリにつき合ってくれよ。

ハプニングは続くよ何処までも

イ級を煽りながら砲を熱くすることしばらく。

大きなハプニングも無くイ級の死体が三つ出来上がったから肩の力を抜く。

「三匹揃って香取さん未満とか……」

拍子抜けの良いところだ。深海棲艦に軍艦時代があつたかは知らねーけど、もうちよつと誇りは無えのかよ!? 全力の香取さんが相手だったら今頃俺は出来の悪い挽肉になつて原型を留めているか怪しいのに。

移動のスピードが速いのは良いんだけど動きがあまりにも直線的だ。あんなんじや避けてくださいって言つてるようなものだろ。

口の中に砲があることは知ってるし、狙われてるって分かつてたら砲で弾くか避けるかのどっちかだ。単発の攻撃を俺に当てたかつたらもつとエイム力を着ける。もしくは三匹で偏差射撃をするとか、ノーモーションで撃つとかしてくれないとお前イらの攻撃には当たつてはやれないな。

久々に海の上に出て来たのは良いんだけど相手がこんなにお粗末だとあまりにも不完全燃焼だ。

痛いのは嫌だから攻撃力が高くなって、こっちの攻撃が通らないとイライラするからそれなりに柔らかくて、余裕で勝てちゃうとつまらないから良い死合いになるような素晴らしい敵は居ないかなあ……居ないんだろうなあ。

「ハア……」

「マジい？ 凄お……」

俺が溜息を吐いてたら望月が来ていた。穴だらけになったイ級を見てドン引きしている。

なあ望月さんや……今見てるソレより、隣のやつはどう？ お口に魚雷をポーンした時に良い感じな致命傷が付いた自信のある死体なんだけど興味な……さそうだな。

「艦娘だとは思わなかったよ……強いんだね」

「……大本營の香取さんに扱われましたから。望月もどうです？ これくらいはすぐに来れるようになりますよ？」

「ん……パスで。わざわざ一人で戦う意味が分からないよ」

艦娘であることを意外に思われ、驚かれなかった仕返しとばかりに怠け者の星に産まれた望月を香取さんの訓練地獄に叩きつけようとしたらパスされた。

一人で戦う意味？ そんなの男のロマンが二割で自己満足が三割。後は十四歳から発症する不治の病が四割で、ポツチ故の残り一割。マルチプレイ？ レイドバトル？

何それ美味しいの？

「あとその艤装……」

ヤベ……：そういえば望月って睦月型じゃん。そりゃ俺が睦月型の艤装付けてたら不審に思うか。

だけど追及されたらそれこそ面倒くさい事になるのは確定時に明らか。悪いがここは聴こえない振りをして逃げさせてもらおう。

「さー！ 最前線まで突き進みますよー！」

「えー……」

強引に望月の言葉を聞こえなかったことにして進み始める。

……までも無かった。

「ほら、新しい^お深海棲艦^わですよ。倒しちやいましょう」

「ええ……あれぐらいならスチュワートだけで大丈夫でしょ。やる気がある人は戦果を挙げる。無い人は英気を養う。適材適所ってヤツだねー」

も、望月コイツ……：出撃前にテキパキ行動してたのは何だったんだよ。

やって来たお代わりのイ級を血祭りに上げた後に望月に問い詰めたら「皆やる気なのに一人だけダラダラしてたらメンドいことになる」って言った。

「ホントは警備府で待機とかが良かったんだけど、大淀怖いし仕方ない仕方ない」
「だったら今から警備府に戻りますか？」

「それはそれでなんか嫌だなく。後から絶対に何か言われるでしょ」

その通り。よく分かっているじゃないか。

「それじゃあ、私はこの辺ですり抜けて来たのをやっちゃう担当だから」

そう言つて遠くを指差す望月。確かに左右どちらにも小さいながら影が確認できた。

「ゆっくりしたいからさく、この先で出会ったの全部ぶつ倒してきてよ」

宜しくねくなんて言つて手をヒラヒラさせる望月と別れる。

個性と言うか、キャラが立つてると言うか……ああまでされると流石としか言えない。
い。

世界滅亡のカウントダウンがあるとも我関せずのスタンスで寝て過ごすタイプだな望月は。

結局そんなことを考えるくらいには深海棲艦と遭遇しないんだけど……。

「ん……」

影……誰だ？ ……距離にしてはデカいから深海棲艦か。たった一匹なんて良いカ

モダゼ。

砲を構えて急接近。ウスノ口な駆逐八級はそれに気づいた様子はない。

「ハッハー！ ……は？」

砲を撃ちこんで笑ったのにピクリとも動かない。接近しても反応なかったときは察知能力がザルかと思ったけど、確認してみれば成る程ね。

「死んでるじゃねーか」

妖精さんが言うには、深海棲艦は死んだらそこらの生物とは比べ物にならないくらい早く腐敗していくんだそうだ。何故か肉は切り離したら普通？ の肉になるってのに

……やっぱり深海棲艦は不思議なことだらけだ。

それにしてもまだ死体が浮いてるってことは……

「さっきまでここで戦いがあった？」

今気づいたけど、少し離れたところに線を描くようにポツポツと肉片とか死体が浮いている。

視線の先には人影きはないし、戦闘音も聞こえてこない。だったとしたらこの肉片とかを作り上げた犯人は一体……。

でも、ヘンゼルとグレーテルみたいに千切れた破片が目印になってるから、これを辿っていけばすぐに追いつけるだろう。

—— シュオオオオオ……

「ん？」

何この……何回か聞いたことがあるガスバーナーみたいな、ガスコンロみたいな……周りにには誰も居ないし、空にも……

「っ!?! 痛っ!」

痛つてえ!?! 撃たれた!?!

二の腕を抑えながら振り返る。と同時に独特な音が頭上を越えていったからもう一回前を向く。

—— シュオオオオオ……

「アイツか……」

空に浮かぶ黒い点。羽ばたきが見えないから鳥ではない。そして鳥はあんなメカニツクな移動音は出ない。

赤城さんとか大鳳さんの艦載機はブロボロくってちゃんとプロペラの音がする飛行機型の艦載機だから、この奇妙な音が艦載機だって気が付けなかった。

俺に撃つて来たってことは深海棲艦の艦載機で間違いないだろう。そして俺が知ってる深海棲艦の空母は一種類。

「空母ヲ級……」

佐世保で夜戦の時に相手の中に居た筈だ。あの時は盾を持ってし、後ろに居た満潮に

攻撃は任せただけ、今回は盾は攻撃に役に立たないから置いてきたし、後ろにも誰も居ない。

どうする……一旦引き返すか、それとも艦載機を追いかけてヲ級本体を叩きに行くか……。

「おーい！」

「？ あつ、はーい！」

遠くに人影を発見！ 呼びかけて来たから味方！ 声からして……長波か？

「こつちに来んなー！ 逃げろー！」

その言葉に立ち止まる。俺が動かなくても味方——長波と朝霜がこつちに向かつて来る。

ちよっ!? 朝霜、氣い失ってない？ 大丈夫そうじゃないけど!?

「バツカお前！ ……お前……って違う！ 良いから逃げろ！ “アイツ” が来る！」

「いやいやいや！ どう考えても重傷者が優先！ それで、 “アイツ” って？ 大鳳さんと祥鳳さん、川内さんは!?”

「その三人も沈んじやいねえが重軽傷だ！ 二手に分かれて逃げ出たが “アイツ” はこつちに来た！ アンタも逃げろ！」

だから逃げるじゃないんだよ！ 長波も服ボロボロじゃん。朝霜連れてきつさと引き返すのはそっちだろうが。俺一人で食い止めるなりして二人が助かるなら単純計算二引く一でプラスになるじゃん。

「あぁーもう！ そんな事を考えてる間にも長波は我慢できなくなつてたみたいで……。」

「ああーもう！ どうなつても知らねえからな！ 私らは警備府に戻るからな！」
そう言い残して去つていった。

長波たちがあんなに焦つていたつてことは、空母ヲ級がきつとそれなりの距離に居る筈だ。

振り返つて長波たちが来た方を見る。

「♡」

良い笑顔の深海棲艦 —— 戦艦レ級が居た。目線が俺に固定されている。

……空母ヲ級じゃなかったの!?

超下級の問題児

戦艦レ級

『艦これ』未ブレイの俺も良〜く知ってる。

キチガイ染みた笑顔が特徴的な深海棲艦の一種類。

多くの「提督」^{ブレイヤー}曰く

「ボスより危険」「イベント出禁もやむなし」

「ぼくのかんがえたさいきょうのせんかん」

「飛ばない宇宙戦艦ヤマト」

なんて、どう考えてもそこらのマップに出てくるイベントボスでもないキャラには不釣り合いなとんでもない評価を受けていた。

そして人間っぽい見た目も合さり人気が高い。俺の目に入って「ちよつと調べてみるか」なんて思わせるくらいにはインパクトがあった。

だからちよつと調べてみたらたら、提督達がレ級に付けた評価が過剰なものじゃないと文字だけで分かれられる記事ばかり。そりゃあ一ターンに高火力の敵が複数回、しかもボスより多い回数行動してくる故に事故率が高いなんて嫌われるわ……。

そんなヤベー相手が今、目の前にいる。

「……」

「……♡」

ああ、これはダメだ……。レ級の目線が俺にガツチリ固定されてる。

まるで新しい玩具を発見した犬みたいな……

スクリーンニ越次しと目の前元にリいるレ級に違いがあんまり無いってのもおかしい話だと思ふ。可愛く描かれたイラストとは似ても似つかないマジキチな笑顔が滅茶苦茶怖い。

長波たちが相当頑張ったんだろう。レ級の合羽みたいな服も随分ボロボロだし、足っぽいところと顔も血で赤くなってるのも恐ろしさに拍車を掛けている。

「へへッ……へへへへ……」

怖すぎて苦笑いしか出てこない。

だけど、後ろには重症の二人が居るからレ級を通す訳にはいかない。

空母、軽空母、軽巡と駆逐艦二人の五人を撤退まで追い込んだレ級を相手に駆逐艦が単騎で挑むなんて自殺行為以外の何者でもないだろうけど、男にはやらなきゃいけない時がある。

「お前なんて……お前なんて恐くねえ！　ぶっ殺してやるるあー！」

「……♪」

提督達の間で蛇蝎の如く嫌われる強敵、戦艦レ級を駆逐艦の俺が相手をするにはやらなきやいけなことが沢山あるけど……まず最初に距離を取る！

「という訳で死ねえ！」

魚雷を一発発射、オマケに一本ブン投げてから後ろに全速力で移動。相手は戦艦だから香取さんの教えに従って移動速度で勝負する。移動速度が低いなら引き撃ちだよ引き撃ち。

水飛沫が晴れてレ級が現れた。

「チツ……」

こんなので倒せ訳が無いと分かっているも舌打ちが抑えられない。ケロツとしやがって……キチガイスマイルの所為でダメージが入ってるかどうかも分からない。

「く♥ ケヒヒツ」

一層凶悪な笑顔を浮かべてレ級の尻尾が口を開けて —— ヤバイ！

「うおっ……つぶねえ〜」

滑るように横に回避したから奇跡的に当たらなかつた。

「アレ？ おかしいな……」って顔をしてるレ級に砲を撃つが、みぞれ霏が鬱陶しいと言わん

ばかりに目の辺りを腕でカバーするレ級。その間にも尻尾は気持ち悪く蠢いている。シユオオオオオー

レ級の周りに黒い点が出て来たと思っただらさっき聞いたような音が聞こえてくる。

「あつ」

そういえば艦載機飛ばしてたのアイツじゃん！ 何で距離取ったんだ俺。

赤城さん程では無いにしても艦載機の中を近づくのは簡単じゃない。どうして盾を持つてこなかったんだ俺……。

「――？」

何か……来る？ つて違う！ コレ魚雷じゃねーか！

またしても横に回避。派手に水飛沫を上げた後、俺がさっきまで居た場所の海面が細かく波撃っている。

チラリと上を見て見れば艦載機が飛んでいる。波打つ範囲が徐々に俺の方に寄ってきて……

「クソッ！」

体勢を何とかして艦載機の攻撃範囲に入らないように左へ右へ動き続けながらレ級の周りを円を描くように移動し続ける。後ろに下がり続けたらこつちの攻撃も当たらないし、艦載機がある以上距離を開けるのは非常に宜しくない。

どうする……投擲物投げちやおうかな……。でもレ級が更に切り札とか持ってた時の為に取りっておきたいし……。

でもこのまま逃げ続けててもジリ貧だ。だって攻撃させてくれないんだもんレ級。

「腹立つう……」

俺が必死こいて艦載機から逃げてるのに忘れた頃に魚雷が襲ってくるこの厭らしさよ。

それで魚雷を避けたら艦載機からの銃弾に掠ったりしてして、少しづつダメージを受けているのが現状だ。少しでも余裕が出来たら砲は撃ってるんだけど……ダメージを与えてる気にならないのもストレスの原因になってる。

「ああああつ！ 腹立^{はら}だつうつ！」

それに加えて、上げっかりじや駄目ですよ？ って煽ってるのかと言いたくなるような笑顔なのが腹立つ。

しかもこれでまだ砲撃をしてこないどころかレ級本体は動いてすらない辺り完全に舐めプされてるのが分かるから尚更イライラする。だけど砲撃までされたら避けることすら碌に出来ないままボロ雑巾にされるのは間違いない。レ級が動いたら？ そんなの考えたくない。

「ああああつ！ おつ？」

視界に影が映った。

やったぜ。救援だ。助かった……。

「ん？ ……ハアツ!? 冗談じゃねえぞ!」

よく見て見たらカラーリングが黒と白。 ……深海棲艦だ!?

アレは……駆逐イ、ロ級と軽巡ホ……いや、へ級だな。あとは重巡り級と空母ヲ級も……?」

ただでさえ舐めプしてるレ級相手に逃げ回るのにいったばいいの追加とか無理。

「死んだわコレ」

時間稼ぎも出来ないと悟った。

「ガアアアアアッ！」

今まで艦載機、時々魚雷のレ級がいきなり吼えた。そして移動を始めた。やって来た深海棲艦たちの方に。

「えっ?」

え? 意味が分かんないんだけど……。

レ級の行動がサツパリ理解できない。それは俺だけじゃないみたいで、深海棲艦たちも完全にフリーズしてる。やっぱり俺は間違ってるやね。レ級がおかしいだけだよ
ね!?

レ級が出した艦載機も急旋回して深海棲艦の方に向かっていったみたいで、固まっていた深海棲艦たちにはばらく弾を浴びせたと思ったら、そのままレ級に突っ込んで爆発を起こした。余った艦載機が同じように口級に突っ込んで爆発した。

やだ、何アレ怖い……。

その間にも本体は深海棲艦たちに近づいていて、距離を離そうとしていたヲ級と、迫りくるレ級の間立ち塞がるへ級 & リ級という図が出来上がっていた。

そしてレ級がスピードを緩め……ない!? そのまま突っ込んで —— へ級がなんか爆発した。多分ゼロ距離で魚雷でもブツ放しんだと思う。

それにしてもワンパンとかヤベエよ……。軽巡でアレなら俺なんて木端微塵になるわ。

リ級の脇をすり抜けたレ級がヲ級に近付いて……尻尾で噛みついた。

そのまま空中まで持ち上げられたヲ級が爆発した。デカイ穴が開いた —— どころじゃない。胴体とか千切れるとかどんだけ火力あんの……?

目の前で爆発が多いスプラッターな仲間割れを見せられた俺の頬がピクピクと引き撃っているのが分かる。今も視線の先でリ級がレ級と撃ち合って……やっぱり負けた。

「ハハ……」

鎧袖一触、一騎当千。そんな言葉が頭に浮かぶ。そしてすぐに諦念に塗りつぶされた。

砲撃は強い、魚雷もヤバイ、それらを何とか掻い潜って近づいたとしても近距離だと尻尾に捕まる。そしてこれらの攻撃がほぼ全て即死級ときた。逃げようにも艦載機がある以上逃げ切れはしないだろう。

「……」

もう無理だと俯いた視怪にレ級の脚が入り込む。

「〜♪」

視線を上げると食後のデザートと言わんばかりの顔をしているレ級が居た。

「……………ふざけんなよ……………」

レ級の顔を見て、諦念の中に僅かに残った反骨心が燃え上がる。

誰がお前なんかのおやつになるか。

「お前のおやつ程度で終わってやるかよー」

腰に下げた投擲物 —— 赤い缶を叩きつける。

銃弾も、魚雷も今まで碌にガードをしてこなかったレ級は、果たして今回も真正面か

ら受けて燃え上がった。

「ガアアアッ!!」

苦し気に呻くような声を上げるレ級に、次は黄色い缶を投げつける。

投げた直後に振り返って全速力で移動を始める。耳を塞いでおくのも忘れない。

雷が落ちたかのように光って、耳を塞いでも分かる音が聞こえた。

チラリと後ろを見て見ると、火を消そうと滅茶苦茶に暴れるレ級の姿があった。

「もうやだ……………」

取り敢えず今は、味方の居る場所まで……………」

提督の憂慮

警備府に居た殆どの艦娘が居なくなつた。

自分が情けないが故に見放されたという訳ではない。

深海棲艦が現れ、その対処の為に戦場に向かわせたんだ。

自分が。

「……」

先程まで晴れていた空がいつの間にか雲で覆われている。まるで自分の心情を表したかのような陰鬱になる色だ。

艦娘を見送つた後、大淀と立てた作戦で艦娘の配置に問題が無いか紙に穴が開くように何度も確かめようとした。

だけど、出撃させた艦娘たちの事が心配で全く集中できなかつた。文字は見えてるけど、見てはいないことが自分でも分かる。

今は午前中。それなのに秘書艦用の机に座る彼女スチユワートが居ない。

毎日ここに通い、午前中に書類を片付けて午後には居なくなる彼女が。

居たら居たで、黒川提督のことが頭を過るから気を遣うけど、一月もこの部屋で書類整理をし続けた人が居ないとすると、どことなく寂しいように感じた。

……この部屋はこんなに広かったかな……？

自分が仕事以外で執務室を使うことは稀だ。午後はいつも警備府内を見て回り、彼女に言われた通り艦娘とのコミュニケーションを図っている。若しくは執務室とは違う、自分の部屋で勉強や趣味の時間を過ごしている。

だからだろう。執務室がとても広く見えた。

「休んでる場合じゃないでしょ!」

ふと、曙にそう怒られたことを思い出した。確かその後、彼女も自分に対して発破をかけて来たんだっけ……？

「……よしー!」

こうしてはいられない。

艦娘が出撃した今、作戦の概要を纏めた紙など既に価値を失っている。

だったら現在の警備府で艦娘が居る工廠に行つて、直接話を聴くしかない。

彼女から言われた通りどっしり構える……ただ待つなんて出来そうにもないんだ。

「あつ、提督！ どうしました？」

妖精と一緒に工具を手に艀装の修理をしていた明石が、自分に気が付くと声を掛けてきた。

「ああ、帰還した艦隊にも話を聴きたくてね」

「成る程。それなら今は……潮さんと飛鷹さんが起きてた筈ですから……確認してきますね！」

「あつ……ああ」

自分の要望を伝えたら、手を止めて話の出来る艦娘の確認に行ってしまった。忙しいだろうに……申し訳ない事をしたと思う。

……自分の声は震えていなかっただろうか？ 堂々と、人を率いる人物に相応しい態度で居られただろうか？

明石が確認に行つてから程なくして工廠の奥、白いベッドが沢山並んでいる医務室から声が聞こえてくる。

「え、提督が来てる？」

「あの……まだ起きていないってことには……」

なんて声が聞こえてきた。

意外そうに驚いている飛鷹の声と、逃げ場所を探すような潮の音が聴き取り辛いものの、しっかりと自分の耳に入ってきた。

もしかしたら自分は多くの艦娘から嫌われているんじゃないかと一瞬考えたが、大破帰還となった申し訳なさから顔を合わせ辛いようだった。

自分はそんなことで責めるつもりは無いんだけど……。

「————本当に数が多くって！……提督、後で祥鳳さんにしつかりお礼した方が良いでしょう。祥鳳さんが居なかつたら間違いなく深海棲艦はすぐそこまで来ていたんだから」

「……ああ」

大破帰還って聞いて不安だったけど、無事なようでホッとしている。

大本営で講義を受けたから知ってはいるけど、大破などと聞くと、やっぱり欠損とかの暗いイメージが浮かんでしまつて不安になる。

飛鷹と話をして分かった事は、もう一つの北東側に向かった摩耶達の艦隊は無事に戻つて来たので特に問題は無く、南南東に向かった長良たちよ艦隊が交戦したということ。

そして、その時に交戦した深海棲艦は、駆逐イ級や口級のような脅威度は低いのが大

半だったものの、兎に角数が多かったということ。

そして、後で祥鳳にしっかりとお礼をしなくてはいけないということ。

「……」

深海棲艦がイ級やロ級のようなものが大半だったと聴いて、少しだけ安心した。それならば大鳳や摩耶のような力のある艦娘が居れば何とかかなると思っただけだ。

長良達は、少人数だったから数に押されてしまっただけで、今回は警部府に居た艦娘は明石以外全員出撃したんだ。話を聴いた限りではちよつと過剰戦力に思ったけど……それぐらいが丁度いい。万が一があつたら大変だ。

「ちよつと〜? 聴いてる〜?」

「……ああ、聴いて「どうしたんですか!」」

明石の驚いたような声が工廠内に響き、医務室まで聞こえてくる。

「「……」」

飛鷹と顔を見合わせ、一緒に工廠へ行く。

後ろには飛鷹と話している間に起きたのか、長良達が全員付いてきていた。

医務室から出ると、工廠の入り口のところで艀装を外している明石。

そして……祥鳳、大鳳、川内が居た。

「えっ……っ？」

長良から困惑の声が漏れる。

当然だと思う。自分だって大鳳まで出たら過剰戦力だと思っていいたら……まさかの帰還。一体何があったんだらうか。

「ちよつと！ 何があつたのよ！」

雷が説明を要求すると、大鳳が事情を話し始めた……。

「そんな……」

警備府で単体の最高戦力である大鳳の大破帰還で騒がしかった工廠内は、嘘のように静かになっている。

正直に言くと、自分だって絶望的な気分だ。

「まさか戦艦レ級だなんて……」

この一言で全てに説明が付く。

講義でも、非常に脅威度の高い深海棲艦の一つとして教わった。姫や鬼とは違うらしいけど、非常に好戦的らしく、被害はそれらを上回る場合もあるらしい。

駆逐艦を処理していたら突然現れ、大鳳たちを相手に壊滅的な被害を与えたらしい。そして、その時一緒に居て、二手に分かれて撤退した長波と朝霜がまだ帰ってきていな

い。

「じ、じゃあまさか……」

雷の眩きはみんなの想像の代弁だろう。

最悪の想像が過る。まさか……まさかとは思うけど……

「悪い！ やつちまつた！」

「長波！ 朝霜!? 大丈夫なの!?!」

工廠に再び響いた大きな声。その主は長波と、長波に背負われている朝霜だった。

戻って来た！

喜びが一気に押し寄せて来た。安堵のあまりその場に座り込んでしまいそうだった。

朝霜が意識を失ってるのか、医務室の一番手前のベッドを響が急いで片付けに行っ

て、素早くそこに朝霜を横にした。

艤装が大破状態で、朝霜自身には大きな傷が無いようで何よりだった。

「スチュワートが一人でレ級の相手をしてる！ 何とかしろよ！」

一息ついた後に長波が放った一言はここに居た全員を驚かせた。

五人がかりでも撤退に追い込まれた戦艦レ級を相手に一人だけ!?

レ級から追われていた長波たちの様子から、時間稼ぎの為に相手をしたんだろうけど

……正気の沙汰ではない。自殺しに行くようなものだ。彼女がそんなことを分からな
いとも思えないし……。

どうにかして助きたい……助きたいが……どうすれば良いのか……

「高速建造材！」

「え？」

近くにいた妖精が叫ぶ。

堂々と腕を組み仁王立ちをする、とても頼りになりそうな妖精の言葉でピンと来た。

その手があったか！

「明石！ 急いで資材を用意してくれ。ありったけだ」

「提督?! 何を……」

「高速建造材を使う」

無力な自分は、これに賭けるしかない。



オーバーキル

レ級から逃げてから三十分くらい経った頃、ようやく遠くの方に人影が見えた。うん、凶悪そうな尻尾も奇妙な被り物もないから普通に艦娘だ。良かった良かった。これで追いつかれて即殺される心配はほぼゼロになっただろ。

「助かった〜……」

いや〜死んだと思っただね。やっぱり『艦これ』に於いて強敵扱いされて、実際に五人も退けた強さは本物だった。

果てには深海棲艦も攻撃し始める上に鎧袖一触ときた。しかもアレで舐めプな上に手負いなんだぜ？ 完全にヤムチャ視点つてやつだろ。

「おい！ 大丈夫か!?!」

遠くから声を掛けられた。この声は摩耶様？ ……だね！

「ここに摩耶さんが居て助かりました……」

これに尽きる。

悪く言うつもりは無いし、今は遠征で居ないけど、此処に居たのが暁だったら間違いなく一緒に逃げるように全力で説得ロールをしただろう。

そんなことは置いておいて……

レ級とかいうとびつきりヤベーのから逃げて来たんスよ。後ろから追いかけて来るかもしれないから気をつけてくださいね〜……つと。

長波から聴いてるかもしれないけど一応伝えておこう。

「やつぱり聞き間違いじゃなかったってことか。……にしても、レ級とか冗談キツイぜ……」

俺もそう思います。

そんな強敵はもつと強い鎮守府狙ってくれて感じなんだけど……どうして貧弱な警備府狙って来るの……？ 生物的直感で弱点を突いてきたって感じなん？

「なんだ？ 怖いのか？ だつたらあたしの後ろに居な！ ……そうだ。どうせなら、近くに居るヤツらと呼んで一気に叩こうぜ！」

か……カッケー！ もう……語彙力が死んだ。

「でも呼んできてもどうすつかな……。自慢じゃねーが、あたしは考えるのが苦手だね」
あ〜……なんかそれっぽいわー。口より先に手が出そうだもんね。

「摩耶さん、私に考えがあります！」

冗談半分に某ライダーの名台詞を言おうとしたら誰かから肩に手を置かれた。ぬう

……何奴!!

「一緒に」「一緒に戦いましょう」……」

あつ、セリフ取られた……。

「あんたらは……」

摩耶様が眩き、俺は振り返る。

「!？」

金剛さん!? と……日向さん? いや、声が違うから伊勢さんだろうか?

「……」

アイエエエ!? 戦艦!? 戦艦ナンデ!?

ゴウランガ! バカナー! オボボーツ!

確かウチには戦艦は居なかった筈……。だからこんな非常事態の中の非常事態に駆けつけてきてくれた人たちの所属先はしっかりと聴いておかないといけない……。けど、いつレ級が来るか分からないから、後でも良いか。

「あんたらは、何処所属の艦娘だ?」

……俺が遠慮したら摩耶様が訊いちやった。流石は直球勝負の摩耶様だと思う。確かに気になるし、後ろや隣は信頼できる仲間任せたいからね。

「私は大湊警備府所属の超弩級戦艦、伊勢型の一番艦、伊勢よ」

「Me too デース! 金剛型高速戦艦の金剛デース! ヨロシクネー!」

「えっ……よ、よろしくお願いします……」

嘘でしょ？ ウチの戦艦ン!? この土壇場に建造……しかも戦艦が二人とか、相当資材ブツ込んだんじゃないか？ 駆逐艦とか海防艦が来たら頼りなき過ぎて目も当てられない事態になるってのに……。ギャンブラーの素質あるぜ提督……。

「……あ、私も大湊警備府の駆逐艦、スチュワートです」

「あたしも同じとこの摩耶ってんだ、よろしくな。……それとスチュワート、アレがあんたの言つてた戦艦レ級で間違いないよな？」

自己紹介もそこそこに、摩耶様が指した先には黒い点。

輪郭も分からないのに特定は出来ないっスよ摩耶様……。

シユオオオオオオ……

……聞き覚えのあるめっちゃ強いガスバーナーみたいな音。

そしてグングン大きくなる点は輪郭が分かるくらい大きくなって……はい、レ級です本当にありがとうございますあ！

「レ級です！」

「よっし！ この摩耶様相手に艦載機を飛ばしたこと、後悔させてやるぜ！」

「良い感じの初陣にしないとね！」

「Yes! 私の実力、見せてあげるネー！」

めっちゃ頼もしい味方と共に第二ラウンドだ。

本当に俺が何をしたって言うんだ……。

何？ 一番体力H Pの無いヤツを狙うルーチンでも組まれてんの？ 違うってんなら

もつと他の人にも攻撃してくれよ……。何で俺ばかり狙うの？ クソゲーかな？

艦載機も摩耶様と伊勢さんが処理して、手の空いた金剛さんは……最初から殆ど何も出来なかった。

それも全部、レ級が異常なまでに俺を追い掛け回しているのが原因だ。レ級を狙ったら俺に当たるかもしれないってことで、今は三人とも手出しが出来ない状態になっている。

「ガアアアアッ！」

「待つ……！」

嘯みついてきた尻尾を寸での所で回避する。

凶悪過ぎる牙が恐ろし過ぎる……しかも嘯まれたら千切られるならまだマシってやつだろう。銜くわえられたらそのまま即死とか心臓にも悪すぎる。空中で汚ねえ花火になるのは……

「ゴメン、だねっ！　っと……」

方向を変え、スピードを変え、……急に止まって左に避けたら慣性の法則っぽい挙動でレ級が俺の前に飛び出した。回れ右をして魚雷を後ろにポイ捨てしてスピードを上げる。爆発音が響いた。

チラリと後ろを見れば両腕でガードをしたのか、レ級が止まっていた。

引き離した！

「やつと撃てますネー！　Fire〜！」

「沈みなさいっ！」

「どーだあ？　ぶつ殺されてえかあ!？」

ずっと待っていてくれたんだろう。レ級との距離が離れた瞬間に威勢のいい声と共に銃声が聞こえてきて……ハンパない数の砲弾がレ級の居た場所に突き刺さった。

……水飛沫でレ級が見えないんですけど……まだやるの？　戦艦二人と重巡からタコ殴りにされて生きてる訳ないだろ。既に海の藻屑になつてると思うんだけど……。

「……」

なんか三人が楽しそうだったから俺も砲撃に参加しようと思っただけ、きつと提督が資料をすつからかんにしてるだろうし……今は駆逐艦の弾一つでさえ貴重なんじゃないかと考えて止めた。

どうせ戦艦の背負ってるバカでかい艦装に比べたら、借り物のコレじゃあ豆鉄砲でしよ。あの人たちがあれだけ撃つて死なないなら、よっぽどの化け物か、あの三人のエイムが死んでるかのどっちかだろう。でもエイムの死んでる艦娘なんて考えられないから、多分レ級はもう死んでる。

それよりも……銃弾は大切にして欲しいなあ……

「……終わりましたか？」

銃声が鳴りやんでから三人に言う。

「[[[……]]」

何で黙るんだよ……目を逸らすんだよ……。

「えっと……まさかとは思いますが……」

意味もなく死体蹴りをしたと？ 戦艦と重巡が？ 意味もなく？ 三人で!?

「ちっ……違う！ それはアレだ！ ……………レ級は危険だから、しっかりと止めを刺しておかないと危険だろ？」

「そつ、そうよー！」

「その通りデース……」

いや、だいが苦しいよソレ……。

だつて見てみるよ、足元のコレ。

もう原型分かんねえじゃん。血も抜けてるから白い紙粘土と黒い布だったモノがバラバラに浮いてるみたいになつてんじゃん。オーバーキルもいいとこだつて……。

「……次はもう少し自重してくださいよ？」

伊勢さんと金剛さんは、初陣だったから燥はしやいだつてことにしておこう。摩耶様は……うん。見なかつたことにしよう。コレは戦艦が二人でやった。そうに違いない。

レ級が文字通り消えて、辺りを見渡すと遠くから影が沢山来たことに気が付いた。方角的に警備府の方だから……終わったのか。

「フゥ……疲れましたねえ……」

大きく息を吐いて独り言を呟く。

長いようで短い警備府の危機は去つた……と思う。

戦いの後に

「大丈夫ですか!？」

遠くから来た団体様の先頭に居て、声を掛けて来たのは大淀さんだった。

後ろにはしっかりと整列された艦隊を引き連れていた。ところどころ服が煤けてたりちよつと穴が空いてたりする人が混ざってることが、あつちでも激しい戦いになったことを想像させる。

「そつちも大丈夫だったんですか？」

こつちみたいに戦艦が援軍で……なんてね。

そうなると資材が……ウツ　頭が……。

俺の純粋に聞こえる質問に対して「ええ」と答えた大淀さんが続ける。

「数は多かったですけど、対処しきれない程ではありませんでした。そちらも……無事で良かったです」

言い方からして苦戦とかはしなかったらしい。

無限湧きする雑魚を○○体撃破せよ！　みたいな面倒くさい作業って感じだろうか？

それと、後ろに居る戦艦二人が来てくれたから大丈夫なだけであって、もし援軍が来なかったら

・艦載機の処理が遅れる

↓ 俺とレ級の追い駆けっつこで俺が捕まる

↓ 俺が死ぬまでにレ級に与えたダメージが足りない

↓ 暴れ足りないレ級のタゲが摩耶様に移る

つてなるのは確定的に明らか。そうなる前に逃げの一手を打つか、摩耶様が体を張って俺を逃がそうとするのは間違いない。そしてそのまま警備府のすぐそこまで追い込まれるところまではありありと想像できるぞ……。

……そう考えると相当危険な綱渡りだと思うんですが!?! あのレ級何故か俺ばっかり狙うし……何回危ない場面があった事か……「無事で良かった」じゃないんすよ大淀さん。

……そう言えば大淀さん。あの戦艦の二人、警備府ウチの所属なんですって。

「ややつ! 戦艦のお方じゃありませんか! ちよつとお話を聴かせていただけませんか!?! ささつ、こちらへ……」

「……青葉さんにインタビューを受けてるあの二人……伊勢さんと金剛さんが?」

そうだよ。

「驚きますよね？ 提督はこんな時に建造したらいいですよ？ 結果的に戦艦の人が来てくれたから助かったものの、そうじゃなかったら……」

「ま、まあまあスチュワートさん……助かったなら今は良いじゃないですか……」

「そうそう！ 終わったってんなら嬉しそうにすれば良いのさ！ イェーイ！」

いきなり後ろから肩を組まれて体勢が崩れた。オマケに耳元で大声を出されたから頭が痛くなった。

……ちよつとイラつとしたし、ひとつやり返してもいいだろう。

「……お風呂に入つてて出遅れたらしい江風さんじゃありませんかあ！」

「う………んなこと言うなよ！ 不可抗力じゃんかさ！ ……え？」

ちよつと江風を揶揄したら変な声を出してから言い返し、俺を三度見してから固まった。オモシロ挙動過ぎて噴き出しそうになったね。

「スチュワート!？」

「はいはいスチュワートさんですよ？」

驚かれるのは……もう飽きたわ。

人をビックリさせるのは本当に楽しいけど、普段はなかなかそういつた機会が無いからそう思うのであって、こんなにポンポン驚かれると有難みが無い……。

傍でアレコレ訊いてくる江風をまるっと無視してそのまま村雨さんに押し付けつつ、

大淀さんに話しかける。

「終わつたのならそろそろ戻りましょうか？ わざわざ戦艦まで建造までしてくれたせつかちで心配性な提督が待つてますよ」

「そうですね……皆さん、警備府へ帰投しましょう」

なんかの機械に向かつてそう言つた大淀さん。

すると大きな声でもないのにそれなりの数の艦娘たちが一齐に警備府の方へ進み始めた。ヘッドホンっぽいのにマイクが付いてて……なんかSFチックな機械に見えなくも無い。カッコいいぜ。

なるほど……アレを使って全体に指示を出してたつて訳だ。

大淀さんみたいな頭脳派にあんなものを持たせたヤツは誰だ？ 戦場の支配者つて感じで黒幕っぽさが半端じゃない。大淀さんが提督の椅子に座る日もきつと、遠くないかもしれない。——なんてね。

と、そんなことはどうでも良くて……。

初雪さんや、非番だったのにくなんて嘆かないでくれ……。そのうち埋め合わせつてことで何処かに休みの日を捻じ込んでやるから……。

「青葉さん？ インタビューも良いですけど、二人も困つてるみたいですし、戻りますよ」

「おや、いつの間にそんなことに……それではお二人とも、警備府に着いたら、またじつくりと話を聴かせてもらいますからね！」

このままでは梃子でも動かなそうな青葉さんに声を掛ける。

青葉さんはもう少し我慢してよ……警備府に着けば好きなだけインタビュー出来るんだから……。

「助かったわ……」

「デース……」

「……」

……ここに来た時にはやる気全開！ って感じだった戦艦の二人が短時間でこんなにゲツソリと……。やっぱり青葉さんの取材はグイグイ来るから体力がゴツソリ持つてかれるよね……分かるわ。

「—— 以上で報告を終わります」

警備府に戻って、場所は執務室。

提督の前に大淀さんが報告を終え、俺はその横で空気との同化を試みていた。

面倒だし、あたしよりスチュワートの方がしつかりやれそうだから……任せた！」な

なんていい笑顔の摩耶様から報告する義務をプレゼントされた。嬉しさのあまり涙が……。

そんな俺だって、今までの遠征や出撃が終わった時の報告に居合わせたことが殆ど無
いから実はどう言ったらいいか分からないんだよね。……という訳で、大淀さんに全部
任せた。任せて良かった……。

「なるほど……スチュワートは？」

「えっ? ……えっつと……?」

俺に振られた!? 大淀さんが全部報告してくれたんじゃないの!?

「戦艦レ級を倒したんじゃないんですか?」

そんなことは分かかってるんだけど……主に倒したのは戦艦の二人だし、逃げ回ってた
だけで貢献度の低い俺が報告するのは出しゃばりってるみたいでちよつと嫌だなくな
んて。

やっぱりダメ? ……ええい、ままよ!

「……戦艦レ級の撃破を確認しました。編成は金剛、伊勢、摩耶、スチュワートの四人で
す。レ級出現以前の報告は、最初期に対応をしていた祥鳳、その援護に向かった大鳳、川
内、長波、朝霜に確認してください」

「……分かった」

「それと、戦艦レ級が……交戦中に現れた駆逐イ級、口級、軽巡へ級、重巡り級、空母ヲ級に襲い掛かる場面を目撃しました」

「！……それは本当に？」

提督が再確認の為の言葉を漏らし、大淀さんも俺の方を見てきたから無言で頷く。

やっぱり疑うよなあ……マジで意味わかんねえもんなアレ。俺もポルナレフ状態だったしね。「レ級だけでヤバいの追加の深海棲艦が現れて、死を悟ったらレ級がそいつらを片付けた」……うん、やっぱりあのレ級がおかしいね！

……それはそうと、アドリブにしては割と上手くいったんじゃないだろうか？ 必要なことは多分全部言っただし……言っただよね？

「そうか……」

だから毎度毎度そんな反応だと分からねえんだよ！ もう少し詳しく、だとかさあ……ダメならダメって言って？ 言え。

「報告ご苦労様。ゆっくり休んでくれ」

ヨシ！ 報告終わり！ 今日にはもう良いや……燃え尽き症候群ナリ……

「はい、失礼します」

「失礼しまし」「スチュワートはちよつと残ってくれ」……はい」

ゆっくり休めって言ったじゃない！ 何が残ってくれなんだよ……ああつ、大淀さん置

いて行かないで！

「……何か用ですか？」

不機嫌なのが全く隠せてないって感じになったけど、まあええやろ。俺は悪くない筈だ。

それで提督、用事があるんだろう？ そうなら早くしてくれ。俺は精神的に死ぬかもしれない目に合って疲れたんだから寝させて？

「スチュワート……無事で良かった……」

何故か悲しそうな、それで居ながらどこことなく嬉しそうな顔をして提督が近づいて来て、頭に手を伸ばしてきた。

「えっ……」

触られたくなかったから横に動いて避けた。

頭を撫でられるような歳じゃ無いんだが？ しかも野郎から撫でられるホモ的趣味は無え。

「……」

手が空を切って驚くような顔をした提督。

まさかとは思うが、わざわざそのためだけに残したってんならキレても良いよな？

確かに艦娘とコミュニケーションを取っては言ったけどなんで俺まで対象にするかなあ……。

「そういうのは大破帰還した人にするべきでしょう？」

それに、無事云々つてのは間違つても俺にかける言葉じゃ無いと思うね。だって死ぬかどうかの綱渡りはしたけど、結果的に被弾は殆どしてないし、『艦これ』的に言ったら精々小破が良いところだろう。

「提督、コミュニケーションを取るのには良いですけど、状況と相手を弁えましょうよ……」

凄く残念そうな顔をされた。解せぬ……。

湯（ゆ）号作戦？

空は薄紫色に染まり薄暗くなってきた頃、俺たちは目的地に到着した。

すれ違う人たちが俺たちの方を見てはスマホを取り出して撮っているのが陰キヤの本能として判ってしまった為、敢えて少し離れた場所を歩かずに艦娘たちの輪の中に入ってカメラに写らないように隠れる。カメラは嫌いなんだよ……。

って言うかそこ、那珂ちゃんさん！ カメラにポーズ取らない！

うええ……金剛さんもお？ 勘弁してくれ……。

お土産屋コーナーに吸い寄せられた睦月を連れ戻すように三日月に指示を出し、ズキと痛む頭を抑える。

どうしてこうなったんだっけ……？

◆ 「そういえば、慰労の件だが……」

深海棲艦が警備府沖に現れた事件が一段落したある日。

書類仕事で互いに無言になっていた執務室で提督が呟いた。

「慰労？ ……そう言えばありましたね」

「ああ、この間持つてきた紙は青葉が調べたのか？」

……何のことだっけ？ 慰労で青葉さんが……あつ、アレか。

「そうですね……それは青葉さんがやってくれました」

「助かるな……艦娘のやりたいことはちよつと私には難しくてね……勝手に決めるよりは良いと思う。ありがとう」

おい、ありがとうじゃねえよ。少しは自分の意見を出せよ……。いや、大多数を満足させるって意味では多数決に頼るのは間違つてないけど……。

普段から艦娘とのコミュニケーションを大事にしろつて言つたじゃん。海にしろ温泉にしろ、どう考えたつてイベントが目白押しだろ？ 各艦娘覚の好きな事くらい把握して恋愛フラグ建てまくつてやるつて欲望に塗れた気合を見せて、『艦これ』の『艦これっぽい』提督らしく艦娘たちと節度を守りつつイチャイチャしてみれば？

まあ、俺の目が届くところでR指定年齢制限が付きそうなことはさせるつもりは無いし、俺をその対象に選ぶようだったら全力で逃げさせてもらうけど。

「……お礼なら青葉さんにどうぞ」

「それもそうか」

そりやそうでしょ。つていうか俺を通してお礼を伝えるなんて不誠実極まりない

……会うのに数日掛かる程離れてる訳でもないのに……探せば数分だろ。バカなの？
ワンチャン俺より常識無いんじゃないの？

アホなこと言った提督を白い目で見ていると、今度は何だ？ 何を言いたいのか提督は視線を彷徨わせていた。ホラ、何を隠してる？ ハケッ！^吐 ハクンダ！^吐

「……先日の件を大本営に報告したんだ。運営を始めて一月ちよつとなのに健闘したという事で、報酬として資材が届くことになってるんだけどね……その時に大本営の艦娘が派遣されて、一週間程度滞在するらしい」

あゝ……その一週間の間に慰労もやろうってことね。把握把握。

それにしたって、艦娘が来るなんて今初めて聞いたんだけど……？

……で、来るのはいつ？ それなりの人数なら来週くらい？ 受け取りとかの準備は大丈夫なの？

「それで……大本営の艦娘が来るのはいつですか？」

「えっと……明日……」

「……」

……書類仕事してる場合じゃねえ!?

「ちよつ!!? 何で言ってくれなかったんですか!?!」

「サプライズをと思って……」

畜生！ この提督はバカだ！ 悪意が無いから余計に性質が悪い！

そういうのはサプライズって言わないんだよ！ ハプニングって言うの！

「ああ〜っ！ チツ……提督はその書類の整理やつてて下さいね!!? 準備してきますっ
！」

◆
確かこんな感じだったかなあ……。

あの会話が午前中で本当に助かったんだよなあ……。

あの後、警備府全体に周知させた後に、警備府に残ってた少ない人数で警備府の大掃除を敢行して、誰とは言わないけど二人の駆逐艦の生活スペースが特に汚くて、苦戦して終わったのが真夜中で、泥のように眠ったのだけは覚えてる。

そして今日の朝には大本営から艦娘たちがやってきたんだよなあ……。

憎たらしい事に午前九時ピッタリに。しっかり時間を守る人は好感が持てるけど、今回ばかりは遅刻して欲しかった……。

やつて来た艦娘で見覚えがある顔としては不知火と鹿島だけだった。

他の人達は自分と同じ艦娘とドッペルゲンガーしてた人も居て面白かった。やつぱり場所が違うと個性も出てくるんだろなあ……。大本営の響ってなんかカッコよかったです……。

同じ艦の艦娘だからって共感してもらえると踏んだのか、川内さんが川内さんに夜戦を止められて〜とか言って騒ぎ始めて、大本営と警備府の両陣営からタコ殴りにされたのは面白かった。でも、実際夜は五月蠅いからしょうがないね。

俺の方とは言うのと、不知火と佐島さんが二人して俺の自室に入って、「クリア」だの「何でこんなに殺風景なんですか！ 信じられませんか！」だの……言いたい放題言ってくれた。しょうがないじゃん……休みはあつても警備府の外には出てないんだから……増える物が無いんだし。

その後にも別に運ばれてきた資材の整理、提督に細々とした説明、準備が終わってない人達の支度を待つて……それから移動を始めた。

俺は車酔いしやすいから、さっさと寝ようと思つて早々にバスに乗り込んだが、二台あるバスの内提督がどっちに乗るかで騒ぎ出した人達のあまりの段取りの悪さにイライラして眠ろうにも眠れず、乗ったら乗つたで騒がしくて寝れず……結局バス酔いして頭が痛い。

普段はしっかりと駆逐艦をを纏めてくれる長良さんや摩耶様も、どこかウキウキしているように見えるからこんなところでもわざわざ苦勞は掛けたくない。

……まあ、警備府の中に居る訳でも無いし、羽を伸ばしてリフレッシュできるならそれに越したことは無いか……。

どう考えても駆逐艦と海防艦の子が騒ぎまくるだろう。

「……?」

「一つ溜息を吐いて、提督に続いて旅館の中へ。」

「いらつしやいませ。大湊警備府の皆さままですね?」

「ああ、数日の間よろしく頼む」

提督の挨拶で始まった温泉旅館宿泊。

俺はしっかり休めるのかなあ……。

湯（ゆ）号作戦②

到着してから、俺は旅館の中をブラブラと歩き回っていた。

五人部屋の数が多いなあ。

でもこれが警備府の艦娘たちで埋め尽くされるのか。それでも部屋が余ってたり、他の利用者に影響が出そうにないとか流石だなあ。

警備府の艦娘だつて既に五十近く居ると言うのに……そんなに収容出来る大きさは素直に凄いと思つた。むしろここまで来ると温泉施設に旅館風のホテルが併設されるようにも感じる。

「大きな旅館だなあ……」

知能指数を溶かしたような陳腐な感想を呟く。

艦娘たちは部屋割りが始まるとアレコレ揉め始めて、面倒くさいことになる波動を感じ取つた俺は余つた部屋に入るとだけ言つてその場を離れた。俺だつていつも仲裁とかはしたくないしね。面倒くさいし……

それに、こういつた下らない揉め事はいい思い出になるだろうから、茶々は出来るだけ入れたくはない。

因みに提督は個室だった。本音を言うなら俺だって五人部屋なんて気まずいから個室が良かったんだけど、みんな楽しんでもうって感じの雰囲気同調圧力に負けて首を縦に振ってしまつた。何やってんだ数分前の俺……。

「……流石にそろそろ終わったよな」

意外と駄々っ子なところがあるレディー暁とか、海防艦の子が揉めてなきや良いんだけど……。小さい子供の涙はいつの時代も強いから、出来ることなら相手にしたくはない。

「あつ、スチュワートさん！　今までどこに居たんですか？」

「……ちよつと歩いてただけですよ」

元の場所に戻ると、そこには吹雪だけが居た。

無事に揉め事が決着したみたいで良かったと一安心したのも束の間、次の吹雪の一言で儚い安堵は打ち砕かれた。

「実は……まだ揉めてましてえ……アハハ……スチュワートさんに止めてもらおうかと

……」

「……」

揉めてるのは誰だ？ 吹雪で止められないとなると海防艦とかじゃないってこと

……………？

「まさか……………」

「その……………川内さんと那珂さんが……………」

やっぱり軽巡かあ……………重巡と空母と戦艦の人は人数も少ないし揉めそうな人は居な
いと思っただけど、やっぱりかあ……………。

広い旅館の中を吹雪に連れられて歩く。

「そう言えば、私の荷物はどこへ……………？」

「同じ部屋の人が持っていきました！ 確か……………」

俺が泊まる部屋の人たちを言おうとする吹雪を手で制する。そういうのはお楽しみ
にしておきたいんだ……………。

「楽しみにしてるので、ネタバラシだけはやめてくださいよ？」

「すつ、すみません！ ……あ、ここですね」

吹雪が止まったのは廊下の端の部屋。外には数人の駆逐艦が居た。主に吹雪型が中
心か……………相変わらず叢雲以外は見分けのつきにくい事で……………。

「スチュワートさんを連れてきましたよ！」

「でかした吹雪！ ささ、やっちまってください！」

「ちよつと、でかした！　じゃないでしょ！　私たちは頼む側なの！　……スチュワー
ト、悪いけど……片付けてくれないかしら？」

……俺はいつから便利屋にジョブチェンジしたんだ？　まあ……頼まれたからには
一応やるけど……。

「しようがないですねえ……」

それじゃあ……と、扉に手を掛けたら中から声が聞こえてきた。

「だーかーらー！　西側に窓があるこの部屋が一番良いんだって！」

「こーういつた時くらいは夜に拘らない方が良いと思うよ？　夜更かしは美容の天敵だ
よよ」

「よ……夜更かしなんてし、しないし……」

「……」

「「……」」

アホくさ……。川内さんの持病の発作じゃん。

那珂ちゃんさんとの喧嘩かと思っただらこれかよ……萎えたわ。

「……戻って良いですか？」

「待　ち　な　さ　い　よ　……一度領いたからには最後までやってもらおうよ！

私たちがじゃあ那珂さんや川内さんやせんを止められないの！」

「あつ……」

叢雲が川内さんの召喚魔法を唱えてしまった……壁一枚挟んだところに川内さんが居るから……間違いなく有効射程内聞こえてしまっただろう。

しまった！ つて顔で叢雲が口を抑えるけど……遅かったみたいだ。

「夜戦!?」今夜戦つて言つた!? うんうん分かるよ！ やつぱり常在夜戦場な心構えは大事だね！」

扉をぶち破るかのような勢いで現れて騒ぎ立てるのは……やつぱり川内さんだった。

ここは警備府じゃないから一般人居るつてことを完全に忘れてるな……。凄まじく五月蠅くて迷惑だ。ほら見ろ、後ろの親子が固まつてるじゃないか……。

こらボク！ 見ちやいけません！ 夜戦が感染するよ？

「すみません！ すみませんっ！」

白雪……川内さんの代わりに頭を下げるなんて……なんて良い子なのツ！

これ以上周りに迷惑をかける訳にはいかないと悟り、徐にスリツパを拾い上げて叢雲に詰め寄る川内さんの背後に移動した。

「メルへ〜ン……ゲットオ！」

スパアーン

「ハア……休む前から疲れた……」

あの後、吹雪たちと協力して川内さんをグルグル巻きにして押し入れに放り込んだ。黒い目隠しもしてあるから、今頃吹雪たちに謝ってるか、スリヌケ Ⅱ ジツで脱出してるか、勝手に夜戦気分になってエクスタシーしてるかのどれかだろう。

後者なら救いようが無いけど……流石にそこまで酷くは無いです。多分……きつと……恐らく……。

「松・虎の間ねえ……マツ〇の部屋？ ……ハッ」

隣は松・鶴の間と……松・鷹の間だった。鷹の方は面白が無くて、鶴の方は何か不幸なことが起こりそうな感じが……。

「虫っ!? ヤダッ……」

「うるさいにや。これで安心……ティッシュで包まってるから大丈夫にや。……どうして逃げるにや?」

「それを……それを近づけないで!」

嫌な……事件だったね……。

憐れ狭霧。多摩さんも何やってんのさ……。

「…………ん？」

手に掛けた取っ手が動かない。少し強く動かそうとしてもピクリともしない。

あつれく？ おかしいなく？ 吹雪が言うには俺の部屋はここであつてる筈なんだ

けどな……。なんで鍵掛かつてんの？ 嫌がらせか？

「……」

ちよつと!? ぶっちゃけ温泉とかどうでもいいから取り敢えず部屋に入れて！ マ

ジでキレるぞおい！

何回かノックしても返事が無かつたし、物音一つ聞こえてこないから仕方なく時間を潰す為にフロントに足を運ぶ。

提督が言つてたけど、夕食は食堂で摂るらしい。

つまりそれまでの間フロントで備え付けのテレビでも見て時間を潰していれば、確実に同じ部屋の人達と合流できる。食堂も一階だし、時計もあるから間違いは起こらない。完璧だ……。

喉が渴いてるのに水すら買えないってことを除けばなあ！ 同じ部屋の人が誰だか知らねえけど、マジでふざけんなよ……。

見たことがある番組をボケーッと眺める。

時間は……おつ、一時間経つてるじゃん。

あゝ……次にコイツは「美味しい〜」って言うな……。

『美味しい！ こう……口の中で溶けていくような……つい箸が伸びちやいますね！』

やっぱりな。宣伝の意味も込めてるだろうし、不味いなんて言えないんだろうけど

……毎回美味しいって繰り返してると、なんか馬鹿っぽく映るんだよね……。

「でも食べ物が悪くないからね」

「スチュワートさん」

「ホワイ!? ……松輪ちゃん? どうかしましたか?」

話しかけてきたのは松輪だった。ビックリして心停止したかと思った……。

温泉に入ってきたんだろう。いつもの服ではなく浴衣を着ている。よくそのサイズ

あつたね……。

「ごめんなさい! 松輪達が温泉に入ってる間、部屋に入れなかつたんですね?」

「……気にしてないので大丈夫ですよ」

いきなり謝られた。松輪たちが風呂に入っていると中に入れない……? 温泉は各部

屋にあるのか? 確か二階にあつた筈……。

と思つたけど、どうやら松輪は同じ部屋だったらしい。やっぱり海防艦が一緒か

……。

……くつ、海防艦相手に理不尽にキレ散らかすのはみつともないな……。実際に松輪は謝りに来たんだし……。大人しく引き下がろう。どうせもう飯だし……。

「す、すみません……。スチュワートさんを待つべきだったのに……」

「同じ部屋の人とは他に誰が居ますか？」

「えつと……。松輪と……。択捉ちゃんと、佐渡ちゃんと、青葉さんです！」

「なるほどなるほどお……。教えてくれてありがとうございます♪」

俺が部屋に入れなかったのは温泉に行つて留守だったからか……。

ちやんととごめんなさいが出来て、しっかりと受け答えをする松輪はうくん……。しつかり者。たしか択捉もかなりしつかりしてたような気がする。その代わりと言つてはアレだけど、佐渡は悪ガキつて言葉がピッタリなんだったか……。酷い偏りでバランスが取れてるな……。

松輪から話を聴いて、ついでにルームメイトを確認すると良い情報が出て来た。

どうせ海防艦三人を温泉に連れてつて部屋を閉めたのは青葉さんだろう。

おのれ青葉さん……。ゆるるるさんっ！

階段からゾロゾロと艦娘達が降りて来た。時間は夕食十分前。

みんなは既に温泉に入ったのか、同じような白い浴衣を着ている。俺だけが黒い服で滅茶苦茶目立つじゃないか……。

択捉の隣に居た青葉さんが何時セもの服ラの俺を見て顔を青くしたけど……良い勘をしてるじゃないか……。

青葉の夕食が惨劇に変わるまであと十分。

湯（ゆ）号作戦③

「死ぬかと思いました……。ヒドイじゃないですか！　いくらなんでもやり過ぎですよ スチュワートさん！」

「すみません……」

流石にこんな反応をされると申し訳なく思う。

でも流石に死ぬは言い過ぎだと思うんだ。唐揚げに付いてきたレモンを青葉さんの白米にぶっつけただけじゃないか。美味しくないだけで生命活動に支障をきたすようなことじゃないだろう。磯風とは違うのだよ。磯風とは！

「でもよー、全部食べたのは普通ににすげえって！」

そうなのだ。佐渡の言う通り、なんだかんだで罰ゲームみたいなノリで盛り上がったし……全部食べ切って場を盛り上げたのは芸人魂を感じたね。

「全然嬉しくないです……。ささっ！　良い子は寝る時間ですよー！　青葉はこれから、スチュワートさんと大人の時間を過ごしてきますので！　それじゃあ、後は頼みましたよ択捉さん！」

「えっ？！」

信じられない言葉が聞こえてきて、思わず青葉さんを見ると、人差し指を口に当てて「秘密」のジェスチャーをしてきた。……うおい!? そんなことされると青葉さんのお誘いを断りたくなっちゃうよ……。

「はい! お任せください!」

ビシツと敬礼をした挨拶を見て、満足そうな顔をした青葉さんに腕を引つ張られて部屋の外に連れ出された。

……ちよつと待って。

俺も駆逐艦で見た目は比較的チビだし、大人じゃないと思うんだけど……。青葉さんが言う良い子では無いけど、寝ちや駄目なの……?」

「それじゃあ……。枕投げしよーぜー!」

「佐渡ちゃん……。あんまり騒ぐと隣の部屋の迷惑になるからやめようよ……!」

予想通り佐渡が枕投げを提案して、他の人に止められるような声が扉越しに聞こえて来た。

そして今度は目の前から……。

「スチュワートさん、これから “お楽しみ” の時間ですよお!」

舌なめずりをした青葉さんが声を掛けて来た。

コワイ。

「……それで、何をしようって言うんですか？」

「ふっふっふー……それはこれから説明します」

悪い事企んでる顔だ……絶対碌でもないこと始めるつもりだろ……。

「戻って良いですか？」

「それは説明を聴いてからにしてもらいましょう！」

連れて来られたのは別の部屋。……靴がスゲエいっぱいあるんだけど。ナニコレ？

青葉さんがドアにノックをした。

「どちら様ですか？」

「ウルフです」

「どうぞ」

開けられた扉からは金剛さん、大鳳さん、大淀さん、祥鳳さん、酒匂さん、狭霧、雷がどこかピリピリした雰囲気を漂わせながら俺の方を見て……数舜の後、ホツとしたような雰囲気変わった。どう考えても大人じやないのも混ざってるし……何の集まりなんだよ……。

「Yes! 青葉く良くやったネー！」

「スチュワートさんですか……確かに、期待できますね……」

「これなら、作戦はより完璧なものになるわね」

「頼りにさせてもらうわ！」

「え？ 本当に何の集まりですか……？」

「よくぞ訊いてくれました！ これは、提督の寝顔を撮る作戦、ネ号作戦ですっ！」

ええ……。提督の寝顔とか……。物好き過ぎない？ 正直ちよつと引くんだけど……。

でも、集まってこうやってバカみたいなことするのは嫌いじゃない。むしろ面白そうだから混ぜてくれてお願いするね。なんでもつと早く教えてくれなかったのさ。

「乗った」

こう……。漫画とかでよくある男子が女子の風呂を覗きに行くってノリに近いかも知れない。対象は野郎男。つまり俺が行ったところでR指定年齢制限が付くようなことでもないか

ら、臆せずに参加できるのはチキンの俺には嬉しい。

「ありがとうございます。青葉さん、スチュワートさん以外に誘った人は居ませんか？」

大鳳さんが青葉さんに問いかけて、青葉さんが首を横に振る。

それを確認した大淀さんが立ち上がり、全員に向かつて言った。

「それでは皆さん。全体の指揮は私、大淀が執らせていただきます。作戦の概要は――」

提督の顔を撮りたいという謎の欲望を見せた艦娘たちによる、面白おかしい悪ふざけ

のような作戦が始まった。

『こちらエレクトレ、異常なしよ』

『こちらマグナム、異常無しです』

『こちらサツカー。異常ナ。びやあああああつ！』

グワーツ！ 頭が割れるう！

右耳に着けたイヤホンのような機械から酒匂さんの悲鳴が聞こえ、反射的に身体が左に傾いて壁に頭を打ちそうになった。

『こちらオペレーター、何がありましたか』

『後ろから伊勢さんに声を掛けられちゃって……ゴメンね……』

『っ！ ヒストルです！ 対象を発見しました。食堂に居ます！』

『分かりました。ダイアモンドと合流し、それとなくお酒を勧めてください。くれぐれも酔わないように、それと、耳の機械に気付かれないように気を付けてくださいね』

『了解だヨー』

なんかスパイごっこしてるみたいで楽しいじゃねーか……。大人数の中で俺たちだ

けが秘密作戦を共有する絶妙な背徳感、なんちゃってコードネームで呼び合う子供らしさ。良いじゃん……控えめに言って最高だぜ。

俺と狭霧と青葉さんは金剛秘さんの泊まる部屋地で待機していた。

目の前ではノートに何かのメモを取りながら指示をだす大淀さんが居る。

祥鳳さんが言うには提督は現在食堂に居るらしい。大淀さんの指示で祥鳳さんと金剛さんが提督とお酒をするらしいから、あの提督の事だ。断らない、もしくは断り切れないことは間違いない。つまりしばらくの間は食堂に釘付けに出来るだろう。

『こちらM i s tミス、食堂前に到着しました』

青葉さんの役割は言わずもがな、提督の寝顔をベストショットすること。狭霧は提督が部屋に居た時に部屋の外に連れ出すこと。提督が部屋に居ない今はパターンBで狭霧は補欠になったが、食堂前で金剛さんと祥鳳さんに代わって大淀さんに状況を報告する為に出ていった。

そして俺は提督の部屋に青葉さんを入れること……つまり鍵開けだった。

……出来ないんだけど!? 一般人がピッキングなんて出来る訳ないだろいい加減にしろ! つて怒鳴りたかったけど、大淀さんがこんなこともあるのかと明石さんに作らせたらしいピッキングツールを取り出したのを見てドン引き……勢いに押されて領いってしまった。便利屋じゃ無い筈なんだけどなあ……。

でも、今の状況からそんな犯罪者めいた道具を使わなくてもスマートに入れる方法も思いついたから、ピッキングツールは置いていくことにした。フツ……俺の提督に対する理解度は残念なことにかなり高い。部屋に入るだけならこんなものは必要ない筈だ。

「大淀さん、コレ借りていきますね」

「どうぞ……？」

「それじゃあ行きますか……青葉さん。」

「了解ですっ！」

大淀さんが持つて来ていたノートを持つて部屋から出る。

「こちらサブライズ、ウルフと行動を開始します」

さあ、楽しい時間の始まりだ。

湯（ゆ）号作戦④

「狭霧、お疲れ様です……が、これからの提督の動向のチェックはお願いしますよ？」
「お任せくださいー！」

青葉さんと食堂に向かい、食堂の前で外を眺める振りをして手鏡で食堂を観察するなんて器用なことをやっていた狭霧に声を掛ける。

「それで、これからどうするつもりなんですか？ 大淀さんからノートを借りていたようですけど……スチュワートさんがソレをどう使うのか青葉、気になります！」

「そうですね……そんなに凄い事はしませんよ。私一人で行きますので、青葉さんはここに残っていてください」

「了解ですっ！」

そして、青葉さんを狭霧の横に待機させたとところで提督の正面に座っていた祥鳳さんと目が合ったので、ジェスチャーをしてみる。

（自然な 感じで 頼む）

（回れ右 上品に お願い……？ 右？ ……お手洗いに行けっ……？）

俺が渾身のジェスチャーをしたら祥鳳さんが一瞬困惑したような顔をしてから席を

立った。どうやら上手く伝わったらしい。……さて、ここからが俺の演技力の見せ所だな。

「あつ……居ました。提督……ちよつと用事があるので、部屋の鍵をお借りしてもよろしいでしょうか……？」

そう言つて大淀さんから借りてあるノートを提督に見せると、いつもより赤い顔で「……ああ、分かった」と言つて鍵を渡して来た。

「二階、龍の部屋。……終わつたらちゃんと鍵返してください……」

「……はい」

結構お酒入つてるなこれは……口調が丁寧になつちやつて擬態が解けてるぞオイ。さては随分飲ませたな？ と呆れ交じりに金剛さんを軽く睨むと、いい笑顔でワインクを飛ばして来た。

……酒の所為で判断がおかしくなつてたことに関して言えば俺がやり易かつたから文句は無いけど、あんまり酔わせると提督が寝る為にさつさと戻つてしまう可能性がある。上に、だらしねえ寝顔を撮ることになるんだけど……それで良いのか？ 俺はそもそも提督の写真なんざ欲しくはないが、寝ゲロしてる写真なんかもつと要らない。

「Hey 提督う……私のお酒が飲めないですか？」

そう言いながらウイスキーを注文する金剛さんはまあ……ほろ酔いくらいで楽しそ

うだし……良いか。

「ああ、飲みますよ……」

提督は……急性アルコール中毒でぶっ倒れたりしないなら良いか……。そのまま金剛さんからのアルハラに応え続けてくれ。例え何があってもお前の介抱なんてしないからな！

「じゃあ……置いたら返しに来ますね？」

「はい……」

提督から鍵を受け取ったので、お手洗いの方からこっちの様子を伺っている祥鳳さんに首を細かく振ってダメだと合図をしてから、耳をトントンと叩いて無線機のジエスチャーをしてから食堂から出る。

「スチュワートさん、やりましたね！」

俺が鍵を持ってきたことに対して狭霧が褒めてくれた。

「ノートを翳しただけで提督から鍵を預かるなんて、一体どれほどの……」

青葉さんは勝手に戦慄してるし……意味わかんねえ。

「……いえ、こうしている場合ではありません。早く提督の部屋に行きましょう！」

「……歩きながらで良いですか？ それと、狭霧は引き続き見張りをよろしくお願いし

ますね？ 青葉さんはちよつと待つて下さいね……。祥鳳さんに伝えたいことがあるので……。こちらサプライズ、オペレーター。ピストルとの通信を許可して欲しいです」

『了解しました』

俺が言うとすぐに祥鳳さんとの個別回線に切り替わったようだ。大淀さんマジで有能過ぎる……。裏商人とか黒幕とかピツタリじやないかな？

『ス……。サプライズ。何を言いたいのでしょうか？』

「あく……。ダイヤモンドが結構いいペースで対象に飲ませているみたいなので、そのペースをコントロールしてもらおうと思ひまして……」

『了解よ。そつちも上手くやって頂戴ね？』

『任せてください』

そう言つたら大淀さんも聞いていたのか、個別通信が切れた。

『こちらエレキテル、二人が対象の部屋に入るときの見張りをするわ。安心してちょうだい！』

『有難いです』

いや……。大淀さんの指揮下で動いたら何？ コレ……。

俺はついさつきまで祥鳳さんと話していたら会話が終わった瞬間に個別通信が解け

て、次の瞬間には雷が支援するって内容の通信が飛んできた。マルチタスクとか、聖徳太子だとか、最早そのレベルだろ……。大淀さんが居れば提督不必要説が浮上するんだけど……。

「青葉さん、お待たせしました。……行きましようか」

「スチュワートさん……今は名前で呼ばないでください」

「良いじゃないですか。誰が聴いてるか分からない場所でそう呼ぶのはちよつと不自然過ぎると思うんですけど……」

「それもそうですね……木を隠すなら森の中……艦を隠すなら島にもなったこの青葉としたことが忘れていたようです。それは今は置いておいて、行きますよ〜！」

「……ハイ」

「来たわね！」

「お待たせしました……」

周りに人が居なくてよかった……。

提督の部屋の前で腕を組んで仁王立ちをしていた雷は俺たちを見つけると言ってきた。今はまだ寝るには早すぎる時間だけど……あんまり廊下で騒ぐと迷惑だからちよつと控えて欲しいな〜なんて。

そう思いながら提督から借りて来た鍵で戸を開けて、部屋の中に入った。俺たちに続いて、外をしつかり確認した雷が素早く入ってきて鍵を掛ける。……潜入成功だ。

「提督の部屋に潜入しました」

『それではウルフは準備に入ってください』

『りょーかいですつ！』

青葉さんはそう言ったものの、この部屋は流石宿泊施設。しかも隠れられる場所が押し入れくらいしかない。

……仕方がない。布団を敷いてやるか。

これは押し入れに青葉さんが隠れるスペースを用意する為の行為だ他意はない。と心を無にしながら布団を敷いていく。きつと金剛さんからベロベロになるまでお酒を飲まされるであろう提督なら、旅館のサービスか何かだと勘違いするか、そのそもそんな事を気にせず布団にダイブして眠りこけるかの二択だろう。流石にあの場で寝落ちとかはしないとと思うんだけど……。

何はともあれ、準備は終わった……！

「青葉さん、提督が戻ってきて、眠るまで押し入れに入ってジツとしてくださいよ？」

くれぐれも寝落ちにご注意ください」

「安心してください。レアな写真を撮る為ならこの青葉、例え火の中水の中です！」

「……」

「水の中って沈んでるじゃない……そんなんじゃないよ」

雷の言う通りだ。本物のプロならポリゴンとかデータの隙間を通って土の中とかなぞのぼしよ。くらいは行けるはずだ。死ぬ覚悟で写真は撮らなくても良いんだぜ？

「こちらウルフ。準備完了ですつー！」

あつ、青葉さんこの人大淀さんに報告しやがった！

『……了解しました。ミストはピストルを連れて撤収。その後、サブライズとエレキテルの撤収のサポートとして対象の部屋周辺の監視をお願いします。サツカーとマグナムは、各部屋から誰かが出てこないかの監視を厳にしてください。サブライズ、エレキテルも撤収してください。万が一の場合は、サブライズは自然を装ってカバーストリー「忘れ物」を実行してください。出来ませぬ？』

大淀さん、いくらなんでも無茶ですよそれ……出来ませぬ？　じゃないんだよ。

そもそも提督にバレさえしなければ割と何とかなるような気がするんだけど……そのためにカバーストリーなんて必要ないだろ……。

「勿論です。プロですから」

「そうね。青葉さん！　期待してるわ！」

そうやってサムズアップする俺たち三人。

……おつといけね。忘れ物 ノートを忘れるところだった……。

結局、撤収の時は何もハプニングは起こらず、金剛さんの泊まる部屋に青葉さん以外が集まってプチ打ち上げみたいな感じでジュースを飲んでお菓子を食べて、ちよつとダラダラして青葉さんが戻ってくるのを待ち、一時間半が過ぎた頃、青葉さんが戻ってきた。

「スチュワートさんも、どうぞー」

みんなに写真を配り、俺にも渡して来た。

……うん、フツーに提督が寝てる写真じゃん。要らないから後で扨捉の枕の下にでも突っ込んでおこう。

湯（ゆ）号作戦⑤

扱提の枕の下に提督の写真をブチ込んで、持つて来ていたデカいリュックから寝間着を取り出す。

「スチュワートさんはこれからお風呂ですか？」

見りやあ分かるだろうよ。青葉さん、貴女に邪魔されたから今まで風呂に入れなかつたんだよ。時計見てみるよ。もう日付変わってるんですけど？

まあ……提督の部屋に侵入したのは楽しかったから遅れても文句は言えない。

それに、俺は人が沢山居る風呂場なんて恥ずかしくて入れない。特に人が多い女湯なんて俺にとってには地獄そのものだからこんな時間になつたとしても結果オーライだ。

まったく……形ナリがこれじゃなかつたら男湯一直線……

「（電流）」 三〓

「ハッ……！」

閃いた！

「女湯に入りたくないなら混浴に入れればいいんだ！ 天ッオ！」

「えっ……スチュワートさんそんなことする気だつたんですか!? つて言うか女湯に入

りたくないってどういうことですか!？」

「あつ……」

ヤベエ……声に出ちゃつてたよ……。

これはマズイな……。傍から見たら完全に変態の発言じゃねーか。混浴したいだなんてクレイジーなことを言うに止まらず、女湯に入りたくないだなんて聞かれてしまった……それも青葉^{情報通}さんに。

仮にそれが青葉さんが偶に書いてる新聞っぽいのに掲載されたら、俺の心が死んだ後に社会的に死ぬといった死のダブルパックが強制的に俺に送り付けられること間違いない。流石に俺もそんなアホみたいな理由で死にたくはない。

「かくなる上は……」

殺すしかない。

手元から素早くシャーペンを抜き出してからゆっくりと立ち上がる。運が良い事に立ち上がる際に布擦れの音が全く立たなかった。少しでも威圧の足しになれば良いんだけど……。

出来る限り優しい笑顔を顔に浮かべ、目を閉じてから青葉さんをキツと睨む。今！今こそ視線で人を射ぬかんとする目力が必要だ！

「あ……ヒイツ……や、止め……」

「天誅——ツ!!」

「あああああああ!」

「うう〜ん……沈むのは、呉鎮守府で……」

覽されている青葉さんを布団に寝かせる。俺は記憶を消去する秘孔なんて知らないけど、多分青葉さんは今のやり取りを覚えてないだろう。大淀さんじゃないけど、カバーストーリー「寝落ち」「うたた寝の悪夢」を使うかもしれないな。

「……よし、風呂に行くか」

海防艦が誰も起きていないことを確認してから道具を持った。

女湯、男湯は時間外だったが、混浴は大丈夫そうだったから適当に髪と体を洗って風呂を出る。

多くの人が入る温泉だからしょうがないにしても、こんな温ぬるい風呂には入れない! 頭が痛くなるくらい熱い風呂を所望するッ! でも警備府の風呂もやっぱり温いのは

悲しい……俺がおかしいの？

でも、お湯の色が透明じゃなくて白く濁っていたのは　　“つばさ”　　があつていいと思つた。いや本物の温泉なんだけど……。

それにしても……人が居たら俺が恥ずかしくて気まずいし、時間も時間だったから誰も居なかつたのは嬉しかった。

流石にリアルじゃあ深夜に混浴に入つてエロ本みたいな展開になるなんてあり得ないだろ……。

「ん？」

あの女性は今から風呂……？　俺が上がるタイミングで比較的若い男とすれ違つただけど……まあ、うん。頑張れ。

音が殆どしない、人気がない旅館の温泉特有のスペースでマッサージチェアに揺られ、現実と夢を揺蕩うこと暫く。

暗くなつたお土産コーナを覗く。類を見ないご飯のお供とか、ちよつとキモいけど、何処か愛嬌のある小さい置物とか、万人受けしそうなご当地のお菓子とかが並んでゐる。

「おっ……」

アレ良いねえ……。奥の方で暗くて良く見えないけど、たぶん甚兵衛だろ？

着るのが楽で、動きやすくて涼しくて、浴衣とかと同じような雰囲気が出るから場違いになりにくい。完璧な服だ。問題点を挙げるなら着る人がそもそも殆ど居ないってことと、夏以外にはなかなか着づらいことと、ちよつと爺臭いつてことだけど……。まあ、こんな見た目だし、多分問題なく着られるんじゃないだろうか。

明日のうちにでも買ってしまおう。色とか模様は良く見えないけど、暗い色だから良し。薄桃色ピンクとかなら絶対に着てやるものか。俺はそんなカワイイ服なんて着たくは無いんだ。普段着セーラー服は制服だからしょうがないにしてもさ……。

「……ハッ！」

『艦これ』にも他のゲーム同様にスキンの概念がある……。つまり提督からの許しがあればセーラー服なんて着なくても良いのでは……？

こうなったら明日のうちにでも大淀さんと青葉さん、あとは……お洒落とか好きだつて言つてた村雨さんでも味方に付けて提督に話をしに行こう。今日の俺は随分冴えてるじゃねーか。やはり天才……。

明日……今日の朝にどうしようか考えながら部屋に戻ると、青葉さんが書いていたノートの中に、「スチュワートさんの大きな謎を発見!」なんて文章を発見したから、丁

寧に、それはもう念入りに消してから俺も布団に入った。

青葉さんから撮られないように姿勢とかいろいろを考えるのが案外大変だったとだけ言っておく。

「おはよう、スチュワートさん！」

「おはようございます」

朝。

深夜に寝たとは到底思えないほど早く起きた。

警備府だったら、これから伊良湖と一緒に朝食の準備をするルーチンワークがあるんだけど……流石に旅館ではそんなことは必要ないし、そもそも出来ない。

でも早くに起きちゃったし、習慣づいた生活リズムによって眠気はない。……完全な休日なのに惰眠を貪れないなんて勿体ない事してるなあ……なんて考えながら、兎に角外をちよつと散歩しようと思つてフロントに行つたら、同じような生活リズムを持つていたらしい大鳳さんと長良さんに鉢合させた。

「スチュワートさん、昨日はありがとうございました」

「？」

長良さんとは普通の挨拶を、大鳳さんには昨日の作戦のお礼を言われたから、長良さんにバレないように知らない振りをしておいた。

……大鳳さんを見て改めて思うけど、やっぱり艦娘の提督に対する好感度？ の上昇の仕方が並のソレではない。一目惚れとか、少女漫画とかのソレだ。

俺とか提督が警備府に来てからまだ半年どころか四半期三か月も経ってない。その中で提督が挙げた大きな戦果はつい先日の深海棲艦の処理だけ。その前となると戦果を挙げている新しい新米提督だろう。……どこに惚れる要素があるんだ？

艦娘とは積極的にコミュニケーションを図ってるらしいけど、昨日の作戦の参加者は全員提督に入れ込んでると考えて良いだろう。そうなるとやっぱり艦娘を落とすペーすが尋常ではない。あの性格だ。自分から落とそうと動いてる訳じゃなさそうだし、実は女を落とす凄いテクニクがあるなんてこともないだろう。タイムアタックの住人でも無いんだろうし……やっぱり艦娘の方に問題があるように思えるな……。

「スチュワートさんも走り込み、しますか？」
「あつ、いいです……」

考え事の途中に長良さんから声が掛けられ、コミュ障特有の「取り敢えず拒否」が発動してしまい、あとは流れで頑張つてねとだけ言ってしまった。

そしてそのまま二人で並んで走っていった……。

「朝食の時間までまだまだある……」

時間を持って余した。

……偶には二度寝しても罰は当たらないだろう。

湯（ゆ）号作戦く終

「起きてください……」

……

「スチュワートさん、起きてください」

……はっ!?

「ハイ起きましたアーツ!」

「うわあ!」

誰かに声を掛けられながら揺すられて意識が覚醒する。

どうやら寝ていたところを起こされたらしいことを瞬間的に悟り、起きてと呼びかけられたから脊髄反射で飛び起きる。起こされた時はこうやってちよつとふざけると驚かせることも出来るから素晴らしい!

……相手が海防艦こどもじゃなかったら。

「……ごめんなさい。択捉ちゃん」

「い、いいえ……それより! 提督の写真を択捉の枕下に入れたのがスチュワートさんだつて青葉さんに聞いたんですけど、本当ですか?」

「……本当ですよ」

俺がそう答えると択捉は笑顔になり「ありがとうございます！ ……でも、貰ってしまっても良いんでしょうか？」なんて訊いてきたから、ここぞとばかりに択捉が持つてた方がその写真も喜ぶって言って押し付けた。返品は止めてくれよ？

青葉さんが択捉に喋ったのは本当にそれだけかは後で確認するから良いとして……俺は二度寝を敢行して、今は誰かに起こされてるってことは……

「朝食ですか？」

「あつ、忘れてました！ 朝食です！ 皆さんが待つてますよ」

「……」

待たせてるう!? ……こんなことしてる場合じゃねえ！

「行きますよ択捉！」

「えっ？ うわあああ！」

何時までも呆けて突っ立っている択捉をお姫様抱っこして、出来る限り揺らさないように気を付けながら廊下を出来る限りのスピードを出しつつ走らないように移動した。

「「ちそうさまでした」」

律義に全員揃うまで待つててくれたみんなのお陰で一人で朝食を食わずに済んだ。

それはそれで嬉しいんだけど、人を待たせたっていう罪悪感が半端じゃないから先に食べていて欲しかったとも思う。

申し訳ない気分です席に付いたら目の前には和風な朝食。朝から焼き魚とか納豆とか味噌汁とか……金剛さんが納豆を平気な顔して食べてたのはちよつと意外だった。

……何？ 俺が箸を使って納豆を食べてる方が意外？ 何でや！ 納豆はジャパニーズの朝食の最適解だろ？ 俺は食べちゃダメなのかよ!?

一足先に食べ終わった提督が居なくなつてからそんなやり取りがあり、多くの人から驚かれた。

……俺が普段より相当取っつきやすいように感じるといふ理由で。

取っつきやすいって何だよ……そりゃあ俺だつて仕事の時は真面目にやるけど、普段から仕事の時みたいにしてたら凝り固まっちゃう。だけど普段からこんなに弾けてたら体力が持たないし……要するに、偶に爆発するからスッキリするんじゃないか。

「昨日も付き合ってくれたし、スチュワートさんって実は結構フランク？」

雷のこの一言は随分ダメージが大きかった。そんな親しみやすい性格だったとしたらボツチやつてないんだよ……。

ああ、ヨーグルトがしょっぱい……。

「スチュワートさん。朝食後、私と一緒に提督の部屋へ来てください。提督がお呼びです」

俺が変わった味のヨーグルトを食べていると大淀さんが話しかけて来た。

提督が呼んでる、ねえ……俺と大淀さんだけを呼ぶって時点でなんか怪しいけど、断るなんて選択肢は無いから行くしかない。

「……そうだ、村雨さんも連れて行っていいですか？　ちよつと用事があるので」

「構いませんが……何の用事ですか？」

「警備府の制服の事とかで提督に相談しようかと……村雨さんはお洒落に明るそうだったので参考人としてって感じですよ」

「……申し訳ありませんがそれはまた後日にして貰えませんか？　提督の様子を見る限り、結構深刻そうだったので……」

「……分かりました。村雨さん、やっぱり何でもありません……ごめんなさい」

さて、提督が深刻そうにすることって何だろうなあ……資材が大本営から届いたからまだマシだけど、この間の戦艦の建造で今だ資材が危機的状況にある。とかだったらカワイイんだけどそんなんじゃないんだろうなあ……。

「失礼します」

「……来てくれたか」

おう来てやったよ。慰労とか言っておきながら旅館で仕事する上に巻き込むとか、提督も相当なワルですなあ……。

「……単刀直入に済ませちゃいましょう。今度は何が起こりましたか？」

「……いや、まずはこれだ」

「これは……何ですか？」

提督が渡して来たものを大淀さんと俺が受け取った。

大淀さんがそれを触りながら疑問符を大量に出し、ついに分からなかったのか提督に説明を求めた。

だけど俺はこれが何なのか知っている。

「スマートフォン、スマホ、電話……通信機器ですよ、大淀さん」

「電話……こんな小きくなるなんて……！」

「……良く知ってたな、スチュワート」

まあ……俺は大戦時代に生きてないバリバリの現代人だから……。

「……他人の過去を探ろうとするのはちよつとどうかと思いますよ？」

「……済まない」

チヨロいな。

……にしてもあの事件の後に提督にスマホを寄越せって言ったんだけど……準備早いな。まさか大本営からの承認を待たずに自費で用意したとか言わないよな？

「えつと……コレを大淀さんは分かりますけど、私に渡すのはどうかと思いますよ？
出撃できませんし」

「あ……今はこれしか用意できなかったんだ」

そう言いながらバッグからもう三つくらいスマホを取り出し出した提督。

「おいおいおい、スマホ五台とか相当な出費じゃないの？ 言い方からして自費って感じするし……あんまり無理はすんなよ？」

隣でスマホをうんうん唸りながら弄っていた大淀さんが、画面が点いたところでスクリーンショットを撮りまくったり画面を点滅させたりしていた。大淀さん……それ画面触るんすよ。ちなみにそのボタンは音量調節ね。

「……スチュワートさんはコレを電話と言いましたが、やはり連絡用ですか？」

「ああ……先日の事件で思い知らされたからね」

「……そうですね」

情報の伝達速度でいくらでも初動が速くなる。無線と違ってLIEみみたいなものがあつたら素早く広く情報共有ができるだろう。一般には傍受出来ないように細工す

るのは大本営か明石さん、妖精さんにも任せよう。きつと何とかしてくれる筈だ。

「提督。先程、*「まず」* って言いましたけど……コレの他にも何かあるんですか？」

俺がそう提督に尋ねると、提督は辺りを見回して誰も居ないことを確認してから俺と大淀さんの近くまで来て小さな声で言った。

「実は……ハワイが深海棲艦に制圧されたらしい」

「……………」

は？

「いやいや……待ってくださいよ提督、今はエイプリルフルじゃないですよ!」

「ニュースでもやってなかったですよ! 説明をください!」

俺も大淀さんも、突然伝えられたヤバすぎるニュースを脳が拒み、一拍以上の間を開けてからようやく理解して提督に詰め寄る。

ハワイ落ちたって何? さつき食堂でやってたニュースではいつもと変わらない天気の話だとか、地元の小学校が地域のくとか、そんなニュースしかやって無かったじゃん!

「死人に口なし、だろうね……。私も朝食の後に伝えられたばかりなんだ。聞いた話だと、長距離遠征をしていた大本営の艦隊がハワイ近海の様子がおかしい事に気が付い

たことで、衛星を使って確認したところようやく判明したらしい」

「じゃあ、ハワイの人達は……」

「……」

提督が顔を背けた。嘘だろオイ……。

確かにハワイって海に囲まれた小さな島国？ だけどさ……十分過ぎる程には大きい島だと思っただけど、それが落ちたとか……。

「それで、大湊警備府がこの件に対応することになってね……勿論、大きな作戦になる以上色々^{べんぎ}と便宜を図ってもらえるんだけど……一週間の慰労の予定だったんだけど、明後日には警備府に戻ろうと考えていてね……」

「提督！ このスマートフォン？ を購入した理由は素早く物事を進める為でしょう!? でしたらここで時間を無駄にするべきではありません！ 今日……いいえ、今すぐにも戻りましょう！」

うんうん、大淀さんの言う通りだ。

「そんなにゆっくりしてたら “また” 艦隊が大破帰還することになるかもしれないね……それでも心が痛まないなら明後日までゆっくり観光を楽しみましょう。優先順位を間違える人じゃないと信じてますよ？」

「……全員に通達してきてくれ。今から警備府に戻る」

「了解しました！」

「Yes、sir! ……あつ」

ついついものノリで……しかも提督の前で……恥ずかしい……。

穴があつたら入りたい気分の俺は逃げるように提督の部屋を出ていった。

大型作戦

バスの中で

「これはスマートフォンと言って、こうやって……」

『もしもし……スチュワートか、どうした？』

「離れた場所の人と連絡を取ることが出来ます」

「つまり電話ってことね！」

「その通りです」

警備府に帰る大型バスの中。二台に分かれた片方に俺は乗り、同乗していた人たちに提督から伝えられたことをそのまま説明していた。マイクを持って前に立ちあれこれと喋る。気分はバスガイドだ。

……自称コミュ障にこんなことさせるなんて……なんで大淀さん提督と同じ車両に乗ってしまったん？ ……俺が提督と同じ車両に乗るの嫌だったからだ。何してんの過去の俺。

朝食後だったこともあって緩みきった雰囲気だった人達に「大変なことが起こりまし

た」って言つて全員を集め、帰り支度を進めさせた俺と大淀さん。

あーだこーだ文句を言つてきた人には本人にしか聞こえないようにハワイが落ちたことを伝え、言うことを聞かないなら……と色々と条件を付けて支度を進めるように願ねがひした。

『まあそういうことだ。今はまだ五つしかないから、各自大切に使つて欲しい』

前を走るバスに乗っている提督との電話が切れる。

「……はい、これが一つ目。スマートフォンでした。大戦中にもあつた電話が時間をかけて高性能になつた物で間違いありません。……そして二つあるニュースの二つ目。ここからが本題です」

一つ目のニュースであるスマホの紹介が終わつたから、二つ目のニュースのことに入ろうとしたら、もう一つのニュースを事前に知らされていた人たちがすごい俺の方を凝視してくる。怖い

「えく……提督が朝食後に伝えられたそうなんです……残念ながらハワイ諸島が深海棲艦に占拠されたそうで……」

「「……」」

おい、なんか反応してくれよ……皆して無言で圧を発さないで！ 喋り辛いんだけど。

「えっと……それで、その……大湊警備府が担当することになったらしく、皆さんには戻り次第至急遠征や演習など戦力の向上に繋がることをして頂きたく……」

「分かったわ……適当な理由だったらどうかしちやつてたかもだけど、そういう理由ならしょうがないわね。みんなもそれでいいでしょ？」

座席の一番奥から龍田さんがにこやかにそう言った。それに続いて駆逐艦の人達も「じゃあしょうがないか……」って感じで納得してくれた。……龍田さんが納得できなかったらどうするつもりだったのか……この人、底が知れない感じするから怖いんだよね……。

「……ありがとうございます。……戦力増強として間違いなく遠征の頻度は増えますが、よろしくお願いします」

「ええ……他の鎮守府ばかり、不平等でち！」

流石に水着でもない普通の服装をしている伊58が不満の声を漏らす。……すまんねゴージャ。君、深海棲艦との交戦をガン無視できるらしいじゃない？ それで提督に目を付けられたのが運の尽きだ。俺ではどうすることも出来ない。せめて休日にもこれでもかと怠けるといいさ。

「そうだそうだー！ 皆が遠征に行ってる間にスチュワートは座ってるだけじゃないですか！ 不平等ですよ！」

「む……」

……なんか無性にイラつときた。

「大潮さん？　そこまで言うなら一日だけとは言わずに、ずっと提督と書類仕事してくれませんか？　……私も出撃したいんですよ。菊月さん、貴女ならこの気持ち分かってくれますよね？」

「無論、分かっているさ……」

おお、武人氣質？　な菊月に話題振つて良かった！　やっぱりずっと戦う人を見てるだけってのは嫌だよなあ……。俺だつて下手クソだけど戦えるのに全く……。溜息を吐く。

ジリリリリリ——

座席の何処かでスマホが鳴った。スマホを触らせるために回して、今どこにあるのか分からなくなつてたけどアラーム設定を黒電話にしてたから大きな音で気づきやすくて良い。

電話を取つたのは山雲だった。

「はい。提督、何でしょうか？　はい……。スチュワートさん、提督が伝えたいことがあるそうです！」

「はいはい……。もしもし、替わりましたスチュワートです」

『スチュワート、言い忘れていた。大本営の決定で人員を遊ばせておくのは勿体ないぞうだから、スチュワートの謹慎処分は解除するぞうだ』

「それは……そういうことですか？」

『ああ。……安全第一で頼む』

「分かりました。……秘書艦についてこちらで話すので、決まったら折り返し電話しますね」

『ああ、分かつ——』

提督が分かったみたいだから電話を切る。

……

「ツしゃあつー！」

出撃解禁！

出撃解禁！

出撃解禁だよ！

コレを喜ばずしてどう表現しよう！ これで遠征に行ったり、出撃で深海棲艦を倒すのも自由だ。なんせ大本営から太鼓判をもらったんだからな！

だつたら戻ったら後回しにしていた俺の艦装を妖精さんに作ってもらわなくちゃいけない。普段使いをするなら普通ので良いんだよ。盾とか投擲物は決戦兵器っぽい感

じ……切り札として取っておこう。普通に戦えて、しかも変なものも使いこなすというスマートさも身に着けるときがきたな。

それに仮に時間が出来たら休日以外に出かけることだって出来る。ようやく俺の部屋にも彩りが出るってモンだ。

「ウへへへ……ヒヒツ……」

「うわあ……」

「酷い顔なのです……」

「スチュワートのそんな顔、初めて見たよ……」

……バスの昇降口に隠れて喜びを噛みしめてたら後ろから暁型の四人に覗き見されていたらしく、ドン引きされていた。……俺は素直に喜んじやいけないのか？

「……覗き見なんてレディーらしくありませんね……」

「ウツ……」

そう言つて暁を軽く睨むと目を逸らされた。おい、レディーを名乗るなら相手より先に目を逸らしちゃいけないだろ。自然界じゃあ先に目を逸らしたら敗北者だぞ？

「大潮さん？ 今の電話で……私の謹慎処分が解かれました。どうです？ 秘書艦の席に着いてみます？」

「うう……それはその……」

大潮が逃げ場が無くなって息が詰まってる感じの顔を始めた。……イラつときたからって、ちよつと虐めすぎたかな？

「あら、スチュワートさん。あんまり大潮姉さんを苛めてあげないで？ 謹慎処分じゃ秘書艦するしかないものね。仕方ないわ……それはそうと、スチュワートさんが出撃した時は、大潮が秘書艦の席に座つてもいいのかしら？」

「ええ！ 自由どうぞお？」

「そう？ それじゃあ遠慮なくそうさせてもらおうわ♪」

大潮がそう言った瞬間、バスの空気の温度が下がった気がした。

でも、水の中に居るみたいで居心地が悪かったから、運転手と天気の話とか世間話をして気分を紛らわせた。

結局、みんなは後ろの方で長時間、疲れて寝るまで揉めていた。勝手に決まるって信じてた俺は止める気はなかったけど、龍田さんも面白がって止めてくれなかったんだ……。静かになったから結果的にオツケーなんだけど。

「それにしても……」

一月そこらでよくそんな執務室の取り合いになるくらいにまでなったな……。やつ

ぱりゲームがベースだからか？ 好感度つてのがあるのか知らないけど、やつぱりそこから辺バグってんだろコレはよ……。

『艦これ』にはケツコン（仮）なんてシステムもあるらしいし、早く選んじまえよ。多分俺以外は断らないと思うぞ？ 艦娘をおちよくるネタにもなるし、早くしてくれると俺もうれしいなあ！

「……そろそろ着きますよ」

「あつ、有難う御座います」

運転手が到着が近い事を教えてくれた。

「それにしても、こうやって騒いだりして……艦娘だつて普通の女の子なんですね……」
「いや、提督なんて一人の男性を取り合う中学生っぽい年齢の女子供つて真面目に考えたら結構マズイと思うんですけど……」

「ハハハ！ こんな可愛い子供たちに親しくされるなんて、世の男がその席を奪い合つてもおかしくないですよ！」

「まあ、ちよつと派手な人もいますけど、見た目は完全に人間ですからね……それと、前のバスにはもつと女性に近い人が多く乗ってますよ」

「……」

運転手がハンドルの握る手に力が込められたのが分かる。ハンドルの革がギチッ

……つて音を立てたし、握る腕が五パーセントくらい太くなってる。怖い。
「み……皆さくん！ そろそろ着くそうなので、支度してくださいね〜？」

警備府に着いてバスから降り、警備所の前まで来た。

他の人はさっさと歩いて行ってしまったが、俺だけが立ち止まっているから「どうしたの？」なんて声を掛けられるけど「どうぞお構いなく」って言い続けて、最後尾になった。

「フウ〜〜……よし」

のんびり出来たは別として、のんびりするのはここまで。

心機一転、また頑張ろうじゃないか！

でもまずは……

「どうぞ、お土産です」

慰労にも行かずに警備所に詰めていた人にお土産を渡すことから。

いつもお世話になっておりますう……。

個性だらけの新人たち

「それでは各自、荷物を部屋に置いたら、そうだな……ヒトフタサンマルに食堂に集まってくれ」

「了解！」

警備府に戻って提督が全員に指示を出す。今が十二時前だから、一息入れるくらいは時間があるな。

寮の中でも入り口に近い俺の部屋に行きよりも体積の増えたバッグを放り投げ、最初から荷物なんて無かったと言わんばかりに提督の後ろを着いていった。どうせ食堂に行く前に呼ばれるのは分かりきってる。

「……えっ？ お、おはようございます！ 松田提督」

執務室には鹿島さんの姿があつた。秘書艦業務の教官としての矜持なのか、近くにはいつでもコーヒーを出せるようにポッドとコーヒーマーサーが置かれていて、手を止めた鹿島さんがカップを用意してコーヒーを淹れている。

「留守の間、私で処理できる書類は整理しておきましたので後でご確認ください。今、

「コーヒーを用意してしますので、もうしばらくお待ちください♪」

「ああ……ありがとう」

「流石は鹿島教官……」

俺が呟くと、提督からは見られない位置でキツと睨まれた。普段から笑顔を絶やさなただけに鹿島さんの笑ってない視線の攻撃力は高い。

「……引継ぎや、松田提督ともお話ししたいことがあるので、スチュワートさんは席を外して貰えませんか？」

「分かりました」

返事をするだけして執務室から出て聞き耳を立てる。

「こんなに早く戻ってきたのはやっぱリアルですか？ ハワイの……」

「はい。スチュワートと大淀からも急かされて……」

「えつと……ご愁傷様です？ ……ところで、スチュワートさんの普段の様子や仕事ぶりはどうですか？」

「……普段は謹慎処分で退屈なのか雑事を進んでやってるみたいで、これと言った問題は起こしてません。仕事はとても速く、お陰で午後は艦娘と交流する時間や、プライベートな時間が取れるくらいです」

「……全然聴こえねえ……」

この人達忍者かよ……

「仕事の速さは相変わらずみたいですけど……それは良い事ですね♪ 当然、その交流する艦娘の中にはスチュワートさんも居るんですよ？ 過去が過去だけに除け者なんてことは……」

「とんでもない！ ……ですが、いつも探しても居ないんですよ……避けられてるんでしょうか……」

「なんだなんだ？ 提督がとんでもないって……そんな意外なことを言われたのか？ ……気になるけど、曙とは違って小声で話してるのか、何かを言ってるのは分かるけど聴き取れない！ 畜生！」

「……………」 提督には慣れましたか？ 急に決まったものですけど……」

「はい。スチュワートや大淀が相談に乗ってくれているので……まだまだ慣れていとは言えませんが……付いてきてくれるのは嬉しいですね」

「それは良かったです♪」

「…………ツ！」

足音——！ 壁に寄りかかって知らんぷりだ！

「スチュワートさんは後でお話があります♪」

あつ、待つて！ 提督と何を話したのかは知らないけど、香取さんを思わせるその

Sっ気溢れる笑顔はやメテ!

コツテリと叱られた。内容は……提督とコミュニケーションをしろってことで、大本営で鹿島さんから耳に胼胝たごができるくらい言われたものだった。

「~~~~~」——「だったら提督と……聴いてますか?」

「はい……」

もういいよ……。提督とお喋りするくらいなら望月のパシリごっこしてた方がまだ有意義だ。少なくともちよつとは楽しめる。

チラリと時計を見たら……嘘やん。何で五分しか経ってないの……?」

「でも……」

ん? どうかしました?

「なんだかスチュワートさんは以前より他人行儀ではなくなった気がします」

「鹿島教官の特訓の成果と、アドバイスのお陰ですね」

「そうやって軽口を言うようになったところとかですよ……問題も起こしていないようなので、これからも頑張ってくださいね♪」

「善処します」

睨まれた。おかしいな……善処するって言ったのに……。

時間になり食堂。皆が集まり、時間だということもあつて料理が並ぶ。

「Oh……」

厨房からは料理を持って間宮さんが出て来た。……なんで？

「……貴女がスチュワートちゃんね？ 来るのが遅くなつてごめんなさい」

「いいえ！ 謝らないでください！」

「伊良湖ちゃんから聞いたわ。良く手伝つてくれたんでしょ？ コレ、ささやかなお礼

の気持ちなのだけれど……」

ちゃん付けされた……妖精さんパパにもされたこと無いのに！ ……つて冗談は置いておい

て、渡されたのは直方体で包みには達筆で ようかん羊羹 と書いてあつた。うん、普通に

好物だ……有難く貰います。

「でもこれからは安心して！ これからは補給艦間宮として食堂で面目躍如の仕事を果たすわ！」

間宮さんがそう宣言した瞬間、食堂が湧いた。拍手や指笛まで聞こえる始末だ。

「偶に滅茶苦茶辛いカレーに怯えなくて済む！」 って言つたヤツは後で特定しよう。

……一緒に “刺激的な”担々麵を食べようぜ？

「悪いニュースばかりでは無いということか……。皆、聞いて欲しい。」

提督がみんなが注目するように立ち上がって声を出す。

「皆、聴いていると思うけど、ハワイが深海棲艦に占拠された。ここ大湊警備府が対応に当たることになったが、警備府として——」

バン！

「ちよつと！ 遅おつっそい！ いつまで工廠で待たせる気!? 爆撃されたいの!?!」

「ちよつ!?!」

いきなり食堂の扉が開け放たれたと思つたら物騒な言葉が聞こえて来た。

すわテロリストかと思つたけど、佐世保で見たことがある。瑞鶴さんだ。……待たせられたのは分かるけど食堂で爆発物はマズイって！

結局、瑞鶴さん怒りの抗議は、後ろに般若を召喚した間宮さんによって止められた。

うん、食堂で暴れたらそうなるわな。間宮さん怖あ……。

そして、席に着いた瑞鶴さんが言うには工廠にはまだ何人か建造が終了した人新人が残っているらしく、どうせならと提督が迎えに行った。

「こんなに建造するなんて……先を読んでいたのか、それとも考えなしのバカか……」

どっちだと思えますか？ 明石さん」

「アハハ……馬鹿はちよつと言い過ぎかな……計画的に貯めるのも大事だけど、大本营から沢山貰ったんだしパーツと使っちゃうのも私はアリだと思うな」

「……そんなもんですか……」

……『艦これ』では資材が減った状態をグロ画像だなんて言うし、俺はコツコツ貯めた方が良いと思うんだけど……現場では案外こんなもんなのか……いや、曙とかは危機感持ってたつぽいし、明石さんが特別なのもかもしれない。

そしてそのまま明石さんと誰が来るんだろうね？ みたいな会話になった。工廠の住人たる明石さんも流石に戻ってきたばかりでは把握してないらしい。随分と珍しい場面に遭遇したと思う。

——タタタタツ バン！

「いっちばくん！」

瑞鶴さんに続いて食堂の扉に優しくない人が現れたと思ったら、食堂に響く声を出した。

右手の人差し指は天を指し、左手は腰に当てる謎ポーズを決めてフイーバーしているのは……白露か。

チラリと見ると、姉が来た喜びと、身内の恥を見せつけられた羞恥心から悶えて半泣

きの村雨さんが居た……もう泣いて良いよ。……でも、時雨が来るまでは色々と諦めて欲しい。

それから少ししたら、後ろに新人を連れた提督が現れた。

「……瑞鶴と白露は先に来てしまったようだけど、新しい仲間を紹介する」

そう言つて提督が横にズレて……つて多くない？

「水上機母艦、千歳です！」

「同じく、千代田です！」

「神風型駆逐艦の一番艦、神風です」

「初春じゃ。よろしく頼むぞ」

「陽炎型駆逐艦、陽炎よ。よろしくね！」

……。

「ハア……どれだけ建造につき込んだのか……」

「……スチュワートも大変ね……」

全くだよ。いきなり七人増えるとか想定外だつーの……。資材状況の報告書を見てたくねえ……。

昼食前なのにキリキリと痛む胃を押さえる羽目になった。

綺麗な新人、汚い先輩

「……みんな揃ったみたいね。忘れ物は無い？」

長良さんが班……艦隊のメンバーに確認を取る。

「はい、大丈夫です！」

「白雪も大丈夫です。また一緒だね、吹雪ちゃん、叢雲ちゃん」

「……神風、荷物の確認は済ませたのかしら？ 一度出撃したら終わるまで戻れないわよ」

「うん……よしっ！ いいわね。大丈夫よ！」

「……」

叢雲が神風に持ち物の確認をさせているのを見て、吹雪と白雪が優しい顔をしている。すっかりしているとは言え妹が、更に小さい子供神風にアレコレと世話を焼いているのは微笑ましいものかもしれない。

「あゝ、懐かしいね〜」なんて呟いた吹雪は確か……忘れ物をして叢雲から怒られたんだっけ？

「スチュワートさんが出撃するのは本当に違和感が凄いわ……」

長良さんが俺に話しかけて来た。

違和感が凄いだなんて酷い事言わないでよ……ボイコットすんぞ！ ……しないけど。

「……そんなに変ですかねえ？」

「……」

無言で目を逸らされた。

それつてさ、もう答え言ってるよね？ 泣いて良い？

だけど、よく考えたら引きこもりが突然外に出てハッスルし始めるようなモンだよな？ うん、俺なら眼科に直行するね。

「……酷い反応してくれますね。神風ちゃんと同じく、初めて遠征に出る只の駆逐艦ですよ？ ……ここでは、ですけど」

そう。大本営から謹慎が解かれた俺は、晴れて遠征に出ることが出来るという訳だ。運動不足の概念があるかは分からないけどずっと出撃しないと流石なまに鈍るだろうし、適度な運動は心の健康に繋がるらしいから健康志向の俺はジャンジャン外に出ていくつもりだ。

大湊警備府に来た当初は一年なんてあつという間だぜ！ なんて余裕こいてたけど、実際俺は一月でこんなに開放感を覚えるくらいには我慢していたらしい。

それなのに長良さんときたら……俺が何をしたって言うんだ。

よよよ……と大袈裟に泣くフリをする。

「長良さんが旗艦を務めるって提督に聞いたからここに居るのに……」

「えっ、そうなの!? ……どうして?」

そりゃあもう。佐世保に居た頃に俺が唯一遠征に行った時の旗艦が長良さんだったから。

あとは初雪と深雪を説得して、俺と神風をそこに入れて貰ったって訳だ。

「長良さんには安心して付いていけるからです」

「そう言っただけなのは嬉しいんだけど……過剰評価だと思うよ」

「……まあ、私が何回も出撃すれば違和感なんて無くなりますよ」

「そんなものかな……」

「そんなものです。……ほら、神風さんも準備出来てるみたいですし、行きませんか?」

「そうね。スチュワートさんの期待に応えられるように頑張らなくちゃね。みんな、出るよー。」

「「はー!」」

こうして俺の二度目、警備府では初めての遠征が始まった。

出撃直前では提督が見送りに来て、される側になったのが恥ずかしいってこともあって陰にコソコソ隠れたりした。俺に見送りなんて要らないから……。

いざ海に出てから、艦装が必要最低限の俺に対して叢雲がアレコレ口を出してきたけど、深海棲艦が居ても交戦せずに逃げ切るっていう方向性を伝えたら納得してくれた。

RPGじゃないだし、深海棲艦をわざわざ倒す意味なんて……無い事はないけど、そういうのはちゃんと装備の整った状態でしたほうが安定すると思うね。

今現在のルートは一日で戻ってこられるルートばかりらしい。いつも日を跨ぐ前にはみんな帰還してるしそうだろうとは思ってたけど、日を跨ぐような遠征が増えると警備府の守りが浅くなってしまおうっていう理由がある。

資材の量だけに気を取られないことが大切だつてよく分かる。

目的地に着いた頃には神風が疲労困憊になって、暫くの休憩となった。建造されたばかりの艦娘つてこんな感じなの？ つて訊いたところ、こんな感じらしい。

「思うように動かない時がある」「馴染んでない感じがある」と語ったのは吹雪と叢雲だ。

……俺は水に浮けるっていう人間としての感性でハイテンションになってたからよく分かんないな……。でも、靴下でフローリングの上を滑る感覚で動こうとしたら多

分転ぶ。……動きの最適化って言うの？ 自然に、無意識的に変わってたりするんだなあ……。

「スチュワートさん……これはその……本当に？」

「勿論です……非常に残念ですが」

神風が顔を青くしながら俺に尋ねてくる。うんうん、初々しい反応じゃないか……どんなに善い人でも直ぐに嫌になって押し付けるようになるんだよねコレ。

目の前には汚泥。曇り空をテロテロと乱反射させ、かつて黒潮と一緒に顔を歪めながらせつせとコレを掬い上げた記憶がある。俺ですら慣れていない燃料の材料。またコレを見ることになるとは……

妖精さんには是非ともバイオ燃料で稼働する艦装を開発して欲しい……切実に。みんなのは只の拷問だよ……。

長良さんは申し訳なさそうな顔をしつついち早く弾薬を入れる鞆を手に持っていたし、白雪も妙に庄のある微笑みで鋼材用の鞆を手を取っていた。

吹雪は露骨に燃料担当を嫌がって、叢雲は「初めてだから」という理由で俺と神風に燃料を入れる用の鞆を押し付けて来た。そんなチームプレーは要らないんだよ……。

「……いきなりコレをやらせるとか、酷い先輩たちですね?」

「全くよ……」

険のある表情を浮かべ、遠くで作業をしている人たちを見る神風。

……しようがねえなあ。神風は汚泥の中に入れたら服めっちゃ汚れそうだし、幸い、膝まである金属のブーツ? をしてる俺がいつちよやってやろうか。

「オエツ……やっぱ臭いなあ……」

「スチュワートさん!?!」

「まあまあ……先輩にも恰好つけさせてよ。次からは神風もやってね」

腕を巻くつて手袋を取り、汚泥がブーツの中に入らないようにしながら汚泥の中へ入っていく。

案の定酷い匂いに苛まれつつ、ネバつき、ところどころプルプルしてるんじゃないかと思う汚泥を掬っては、靴に入れていく。感触と臭いだけでも吐きそうなんだけど……流石に神風の前では吐きたくない。黒潮だったら一緒に吐いてくれそうだったんだけど……。

「あつ! ああ……」

ブーツの関節部。つまり足首のところから汚泥が侵入してきたのが分かってガン萎えした。

だけど、そろそろ鞆が一杯になってきたから汚泥から上がる。撥ねたりして上にも付いてるけど……元から黒いから臭い以外ではバレ……絶対にバレる。全部押し付けた人たちが悪い。

「やらせてしまつて御免なさい……次からはちゃんとやるわ」

「次からは燃料だけは絶対にやらないって言わないだけ全然マシですよ」

「……ところで、スコップを使わないのには理由があるの？」

「……あつ」

天才はここに居た。

ちよつと遅めの昼食となったが、あまりにも気持ち悪くなった俺に食欲なんてものは存在せず、恨みがましい目で神風以外を見ながら昼食を遠慮した。食べたら食べた分以上をリバースすること間違ひなしだと判断したからだ。

少し離れた場所で、中までガッツリ汚くなったブーツを脱いで海に入れて洗う。

つま先までは手が届かなかつたから、非常に残念なことに警備府に戻るまで我慢しなくちゃいけないことに気が付いてゲツソリした。

帰りは駆逐イ級が現れ、これ幸いにと吹雪と叢雲をサポートにつけて神風に相手をさ

せた。

午前中は旧型のくなんて言ってた割には全然動けてるし、やっぱり才能なのかねえ……俺なんて最初はイ級相手に大ダメージ喰らってたんだぞ。

警備府に戻った頃にはすっかり日が暮れて、辺りは真っ暗になっていた。

俺たちの戻りを知らされたのか、提督と、今日の秘書艦である大潮&荒潮が隣に立っている。

遠征が終了したことを長良さんが言って、解散になる。

汚泥で汚いからさっさと落としてしまおうと思い、一目散に風呂へ直行する。提督が話しかけていたような気がするけど、何か用があるなら食堂とか、俺の部屋にでも来るだろう。

「誰も居ない……ヨシー！」

珍しい事に風呂場には誰も居なかった。きつといい時間だからみんな食堂に行ったんだろう。長良さん達も警備府に着く前にお腹空いたくって言ってたし……僥倖だぜ。パパッと服を脱いで風呂場へ入る。

そんな脱衣所の目立たないところに、一台のデジカメがあったことをこの時の俺は知らない。

愉快な頭

「演習……ですか？」

聞き間違いじゃない？ 遠征じゃなくて？

「そうなの。他所から演習のお誘いがあったらしくてえ……話があるから提督が執務室に来てって言ってたわよ。うふふ……早く書類と睨めっこしてる大潮姉さんのところに行つて見ないと♪」

じゃあ宜しくね。なんて言つて去る荒潮の背を眺める。

バスの中でも秘書艦の席がどうたら言つたけど……心なしかツヤツヤしているように感じるし、何か楽しいことでもあつたのかな？

「……」

演習と聞いて思い出すのは、大本営に居た時に赤城さんがやってきたことだろう。

他所からお誘いつてことは、流石にそんな超大物で大湊の艦娘を叩きのめすなんて非人道的、スポーツマンシップに欠けることは無いだろう……。

問題はどこに行くかってことと、そのメンバーの事になりそうだなあ……。

大本営とか佐世保なら俺も行くことになるんだろうけど。……つていうかそういう

ことは今日の秘書艦と話し合ってくれないかなあ!?

何でもかんでも最初に俺を巻き込みやがって……俺は提督のママじゃねーんだぞ!?

「あーもう! 面倒だなあ……!」

苛立ちが募ってカレーの皿にスプーンを立てる。大きめのジャガイモがきれいに割れた。

暫く放置して冷ましてたし……猫舌の俺でもそろそろ食える筈だろう。

「……うん、美味しい!」

流石は間宮さんだ。これは、季節のイベントで出てくる様々な料理も期待できそう
だ。

夏……は今だからアイスとか、秋は秋刀魚に焼き芋、冬はクリスマスにはチキン……
いや、漫画とかにありがちな七面鳥とかもアリかも知れない。そして春には花見とか?
東北だし、自然に富んでるからちよつと山につてもいいな……。

「まあ、暫くはそんなことしてる暇は……何か御用で?」

「jee……な、何でもないわ!」

対面の暁が なんでもなさそうに こちらを みている。

「……分かった。これ^{カレー}食べたいんでしよう」

「い、嫌ねえ…… レディは他人の料理に手を伸ばしたりしないわ!」

そう言いながらも、カレーの隣に置いてあったアイスに視線が吸い寄せられている。何だよ……欲しいなら欲しいって言えば良いじゃないか。

「……食べますか？」

「えっ、いいの!？」ゴホン……施しなんて要らないわ!」

え〜？ ホントお？

アイスを暁の目の前に置くとピタリとフリーズした。アイスだけに……ハハハ

「いやあ……もうお腹いっぱいです、食べきれないんですよ……残すのも勿体ないですし、代わりに食べてくれる人は居ないでしょうか？」

露骨に暁をチラチラ見ながらそう言うと、期待の眼差しを向けてくる。素直じゃないなあ……お互いにさ。

暁が “何故か” 持っていたスプーンをアイスに突っ込み、一口サイズ掬った。

「暁、目を閉じて、口を開けてください」

すると指示通りに目を閉じて口を開ける暁。

バカめ……俺が暁の口に入れようとしているのはアイスではなく、俺用に辛く調整されたカレーだ。

間宮さんに絶対に残すなって言われたんだけど、こんなに美味しいイベントがあるならと一口残しておいて正解だったぜ。因みに主犯格は響だ。やるじゃないか。

近くで見えていた妹^暁三人を手招きで呼ぶ。電だけだよ心配してるのはさ……。

「あくん……ガフツ!? 辛っ……ゴホツ……み、水ッ!」

そこにアイスがあるじゃろ? 面白い物を見せて貰ったお札に置いておくよ。

あくお腹いっぱいだけ。

「スチュワートさんって実は二人いたりするのです?」

「仕事の時以外はこんなもんですよ。ねえ、雷?」

逆になんで常に真面目で居る必要があるんだ? 疲れるだけじゃん。

「……そうね!」

「あーあー……酷い顔だよ暁。ほら、アイス食べて落ち着こうか」

微笑ましい子供たちの騒ぎを背に受けながら、食器を片付ける。

暁にカプサイシンの魅力を伝えられる日は遠そうだ……。

執務室で、いきなり座れと言われて用意されていた椅子に座る。

机には荒潮が冷たい麦茶を出して、そのまま提督の隣に座った。……大潮が書類と睨

めっこをしてるから手伝ってやれよ……。

「佐世保から演習……というか、小規模な交流が申し込まれた」

「はい……どうして受けたんですか？」

「今回の交流は田代前提督のアイデアだ。消費する資材は全部彼方が持つてくれるそう
だ」

「……」

あの提督は相変わらずエスパー染みたことを……つまりは「持て余し気味の戦艦とか
を連れてきても構わない」ってことだろう。助かるなあ……。

「それと、佐世保の新提督は私の同期でね……私も彼方に行こうと思っているよ」

「そうですか……演習に行くのは誰でしょう？ それと、提督も行くことは緊急時
のマニュアルは既にあるんですね？」

「……」

無いのかよ……。

「出来れば今日中に私以外にも演習に行かせるメンバーには声を掛けてくださいね。そ
れと……マニユアルは後で大淀さんと話し合ってください」

提督の言葉を待たずに失礼しますとだけ言って席を立つ。

「あら、提督、フラれちゃったわね」

いいぞ荒潮、もつと言ってやれ。

「でも」

外に出ようとしたら腕を掴まれた。

「大潮姉さんだけじゃあ書類が片付きそうにないの。優しいスチュワートさんはモチロン、手伝ってくれるわよね？」

「……はい」

断れねえ……。

結局、いつもの十分の一くらいの量だったけど書類を処理することになった。

大潮が信じられないものを見るような目で俺を見て、荒潮が大潮を煽り、提督が苦笑いしていたことは覚えている。

それと、荒潮は提督の自室で寝ずの番をしたがっていた。その際、拒否する提督との攻防は見て面白かった。

遂に提督が折れたかと思ったら「冗談よく？ ま、さ、か、本気にしてた？ ウフフフフ……」なんて……イイ性格してるじゃん。

イカれたメンバー紹介するぜ！

「スチュワート」

「はい」

最近『艦これ』の声と、今日の前にいる艦娘の声が同一なのか考えて宇宙を見た俺！
昨日のうちに提督に行くつて言つといたから、まあ選ばれるだろうとは思っていた。
何せ俺の古巣？　なんだ。この提督だったら連れて行くだろうとは思つたよ。

そして今回は普通の艦装を持つていくことにした。盾に慣れ過ぎて、万が一盾がダメ
になった時に普通の艦装が使えませんかでは話にならないと思つたからだ！

「瑞鶴」

「はい」

爆撃魔の瑞鶴さん！

佐世保が色々と負担してくれるつて言うから、思い切つた提督が正規空母を動かした
ぜ！　これで赤城さんも怖くねえな！　でも最近来た新人だから戦力としてカウント
して良いかは微妙なところだ！

「高雄」

「はい」

今日の朝一で建造された新人、高雄さん！

いきなり演習だなんてツいてるのかツいてないのか分からない運の持ち主だ！　戦
艦を投入するかでチキつた提督が救いはここにあつたと言わんばかりに即決された可
哀想な人でもある！

「千歳、千代田」

「はい！」

その……何？ 水上機母艦とか言う微妙によく分かんない艦種の姉妹！

気が付いたら食堂でお酒を飲んでるから、俺の中でアル中の疑惑がある千歳さん！

そしてその姉にたいして誰が見てもベツタリなシスコン、千代田さん！

二人も一週間前には居なかつた新人だ！

「神風」

「はい！」

綺麗な新人、神風！

大正ロマン溢れる美しい服装が特徴的だ！ きつと懐には護身用の小刀を仕込んで

いるに違いない！

「以上六名に、私が付いていく」

最後に我らが提督！

新米提督として、佐世保に居る田代提督と色々と教わるという、向上心のある男だ！

……新人ばつかりじゃねえか!?

大丈夫かコレ……

演習前の時間

「本日はよろ……よろしくお願いします！」

久しぶりに佐世保に来た。

初めての演習がアウェーだということもあって、目の前で大ベテランの田代前提督に挨拶してる提督は緊張のあまりガチガチになって噛んでいた。

……分かるぜその気持ち。

俺は面白くて少しニヤついていた。

「ああ、こちらこそよろしく。……到着したばかりでいきなり演習を始めるのも忙しい、アイス……なんだっけ？」

田代前提督が俺の方に視線を投げかけてくる。

「アイスブレイクですね」

「そう。アイスブレイクを挟もうか。後ろの子達も随分緊張してるみたいだし、悪くは無いと思うんだが……どうかな？」

「……そうしていただけると助かります」

提督が俺たちの方を振り返ってから答えた。俺の隣には、提督と同じくらいかそれ以

上にカチカチになつて居る五人が居る。

田代前提督はエスパ―染みた能力は観察力がぐとか言つてたけど、隣の五人は俺が見ても丸わかりなくらい固まつて居る。千歳さんなんかは押したらそのまま倒れそうなんだけど……生きてる？

提督は緊張から、だけど、ここまで艦娘が固まるのは緊張……もあるだろうけど一番の理由は、田代前提督の背後に居る大量の艦娘。

遠征とか出撃で居ない面々も居るだろうにそれでも警備府よりもずっと多い。俺も前まで居たとはいえ。気圧されるなあ……特に先頭で凄まじい圧！ を発している長門さんには。

そんな険しい顔で俺をガン見しないで……。視線で死ぬ！ 視線で死んじゃうから！

「そうだな……一時間もあれば、緊張も良い感じに解れるだろう」

「何から何までありがとうございます……」

「なに、困つた時はお互い様だ。それでは、解散！ ヒトマルマルマル 午前十時に演習を始める！」

話が終わったらしい。提督達が神風と、旗風を連れて建物の中に入っていった。

残された艦娘達の方を向く。目があつたら小さく手を振ってくれる人も居るけど、今日は演習。胸を借りるつもりだし、挨拶はしっかりしておこう。

「今日はよろしくお願ひします」

「「よろしくお願ひします！」」

そう言つて頭を下げる俺と、続く後ろの四人。

——コツコツコツコツ

ん？ 誰かが凄く速さで俺の方に歩いてくる……？

誰だろうと顔を上げようとした。……その時。

ゴツ……

「いっつ!? ……あえ？」

頭に強い衝撃を受けてヤバめの痛みを感じてから、急に視界が歪んで傾き始めだんだん視界が狭くなつて……最後に視界が真っ暗になつて意識も失つた。



さつきからすつごい睨んでた佐世保の長門が、頭を下げたスチュワートの頭に握つた拳を振り下ろした。

「ちよっ……っ！」

「痛い！」

隣の高雄が目を閉じて顔を背ける。

鈍い音が私のところまで聞こえてくる。痛そく……思わず顔が歪む。

正面に居る佐世保の人達も、目を見開いて固まっていたり、目を背けたり、瞑ったりしている。

「いっつー！」

そんな断末魔を上げて、ドサリ……と地面に倒れたスチュワート。

……はい？

突然の事で、脳が理解を拒んでいたみたい。落ち着いてく……うん。

挨拶をしたスチュワートが、いきなり思いっきり殴られた。

……。

「ち、ちよつと！ アンタ何やって!？」

「こんの……馬鹿ものおおおお！」

「ヒッ……」

「お前があんな無茶をしたと聞いた時の私たちの気持ち分かるか!? 胸が潰れそんな思いだったんだぞ! それなのにお前ときたら……偶々出撃したりして、一度も顔を合わせられなかったのは出向して居ないのを除けば私だけなんだぞ!」

倒れたまま動かないスチュワートに向かって捲し立てる長門。

……しかもよく内容を聞いたら……ただの八つ当たりじゃない。

でも、ここまで言わせる何かをスチュワートは実際にやったことがある訳で……ちよつと気になるなあ。

それはそうと……

「ちよつと! いきなり殴るなんてことはないじゃない!」

長門の行動はあまりにも非常識だ。

「うるさい……つ! ……申し訳ない。取り乱した」

「全くよ……それに、スチュワートはアンタの言葉、多分聞こえてないわよ」

倒れた時から動いてないスチュワートの近くに寄って、揺すってみただけピクリともしない。

仕方が無いから医務室を借りなきや……ああ、重た……くない?

「私が運んでいこう!」

「あつ、ちよつと!」

長門がスチュワートをヒョイと担いで、凄い勢いで去っていった……。

「……なんなのよ」

「夕張さんを連れてきました!」

「大丈夫ですか!」

高雄と佐世保の大淀が、まだ状況に付いていけない集団を掻き分けてやってきた。

「ごんなさい! 通して〜! あれ!? スーちゃんが居ない!」

「……長門さんが持つて行ったよ!」

「ええっ!? すれ違いとか……もおっつ!」

そして、嵐のように去っていった……

「スチュワートさんは、夕張さんに任せておけば大丈夫でしょう。……先程は長門さんが申し訳ない事をしました……。お許してください」

「いや、それは本人に言いなさいよ……」

多分スチュワートは「大丈夫大丈夫」とか言つて笑つて許すんだろうなく。提督には厳しいけど、私達艦娘には優しいって噂を聞いたし。

「……改めまして……本日の演習、よろしく願います」
「あつ……こちらこそ、よろしく願います」

大淀に挨拶をすると、ずいっと赤城が前に出て来た。

「お待ちしておりました。さあ、緊張を解す為にも瑞鶴さん、一緒に弓道場に行きましよう」

そう言われて、背中を押される。

……なんて力なの!? 全然抵抗できない!

「ちよつとー 助け……」

このままではどうなるか分かったもんじやない。

助けを求めようと残った三人の方を見ると……高雄は高雄型とお話してるし、千歳と千代田は見つからない。

……助けがない!

そう直感したけど、ドンドンと押されるだけだった。

「うふふ……こんなに抵抗しない瑞鶴さんは新鮮ね♪」

抵抗してるんだけど効果が無いの! 無抵抗じゃ……

「え……?」

……ちよつと!? 本当に弓道場に向かつてるの!? 知らない場所で一人だけとか嫌

だ！ ちょっと!?

「さあ、加賀さんも待ってますよ」

「え!? 嫌ーっ!」



……ん?

あれ、俺はいつの間に横になって……。

「ヤバい!」

「うわあっ!」

何事!?

って夕張さんじゃん。久しぶりに見たあ……。

「スチュワート!」

「!? お久しぶりです……長門さん? 何してるんですか?」

なんで頭下げてんの? 俺が工廠の医務室にテレポートしたことに関係が?

「本っ当に申し訳ない!」

「……は?」

聞けば例の一件の後、長門さんに会わなかったことが原因で長門さんが心配やら何やら

らを拗らせたらしく、俺を見た時に爆発したらしい。

俺にも非はあるみたいだったから、互いに謝ってこの話題を終わらせる。

気絶して、長門さんと話してる間にも時計はサボったりしてないからだったので、演習に行くためにベッドから降りる。……うん、フラついたりはない。健康だ。

「……それじゃあ、演習あるので行きますね」

「ああ、頑張れよ」

「演習終わったらまた来て！ お喋りしよう！」

一応他所（仮想敵）の艦娘（敵）ののに応援してくれる長門さんと、妙にフレンドリーな夕張さんに頭を下げる。

「……」

……オモシレーこと思いついた。

「その時はその時で……こっちにも話のタネはありますよ。夕張お姉さん？」

「……!?! ツ……」

俺の姉呼（思）びの冗談（思）を受けた夕張さんがポカンとした後に、慌てて上を向いた。

多分鼻血か何かだろうけど……まあ、そんなこともあるだろう。

工廠から出ていく。

後ろから「待って！」とか「夕張、貴様ア！」とか聞こえるけど、俺は演習に行かな

きやいけないんだ！ 怒れる長門イカさんに付き合つてる場合じゃない！

「来たみたいよ、千歳お姉！」

「待つてたわ」

「お待たせしました……」

集合場所に向かうと、真つ先に千代田さんが気付いた。

警備府の面々が待つてたなんて言いながら出迎えてくれる。

瑞鶴さんは既にゲツソリしてるけど、大丈夫かよ……。

「……それで、お相手さんの方がどちらに？」

そう訊くと、気まずそうな顔をしながら全員が顔を逸らす。

……え？ 嫌な予感しかしないんだけど……。

「えつと……あの人達なんだけど……」

言われて、指された方を見ると……。

「旗風、島風、千歳さん、千代田さん、鳥海さん、……加賀さん!?!」

え？ 何この無理ゲー。

それと、旗風も俺の方めっちゃ見てるし怖いんだけど？

千歳型が三分の一を占める演習が始まろうとしていた。

盾の駆逐艦

「さてどうすつかな……」

目の前には旗風。

赤城さんや戦艦レ級も相手にした俺ならやれると思つてたけど……実際のところ、なかなか決着が付かないでいた。

たかが駆逐艦と心の何処かで侮り、油断してたことは認める。

そうじゃなくても、きつと俺よりも余程長い間艦娘をやつてる先輩で、俺とは違つて遠征や演習の回数も多いに違いない。間違つても油断なんてしていい相手じゃない。

「んじゃなくつて……」

演習で手を抜くなんて全力で相手をしている人に対する侮辱だ。

レ級みたいにしても舐めプし続けてくれよなんて思わせるような戦力差はきつくないだろう。

「面倒くさいことになつたなあ……」

時間は、演習開始直後まで巻き戻る。

俺と旗風はやつぱり、少し離れた場所まで来ていた。

「どうして……」

旗風が呟いたのを、俺の耳が捉えた。

「どうして」って……何が？

「持っていないのですか、盾を……」

「お、置いてきたモンはしょうがないじゃん！」

反射的にそう返す。今から盾を召喚なんて出来る訳ないだろファンタジーじゃあるまいし。

盾を持つてこいつって言われたら持つて行つたさ！

「盾の使い方を教えて頂こうとしたんですけれど……残念です……」

「ん？ ……は？」

なんかおかしいこと言わなかった？

「え？ 盾って何……」

俺がそう呟くと、緩やかに近づいていた旗風が「信じられない！」って顔をした。

「スチュワートさんが私に教えてくれたではありませんか。強くなるには——」

旗風が話し始める。内容は、いつぞや遠征に行った時に、俺が旗風に贈った言葉を旗風は真剣に捉えて、俺みたいに盾を扱い始めたってことらしい。

なるほどね。盾を使う先輩としての俺を期待してたのに実際は普通の艦装で来たから、演習前におこだつた訳ね。憧れ？ の先輩が長所を放り捨ててました〜では「は？」ってなるのも頷ける。

その旗風は、犬がとつておきの玩具を自慢するように大きな盾を持って来ていた。「えつと、目標にしてくれたことは嬉しいんですけど……その盾はどこから？」

まさか俺に付いてきた偉そうな妖精さんみたいな変態技術者のな妖精さんが他にも居るとは思えないし……それに旗風にはイメージ的にもミスマッチな可愛げのカケラも無いやたらと歪な盾。

だからこそ俺はその盾の出所が気になってしょうがなかった。

元々の形は “U” の字に近かったんだらうけど、上部を溶接でもしたのか “O” の字のイマイチ防御力があるかどうかかわからない盾だ。真ん中弱くね？

「これは戦艦ル級が持つてた艦装です。明石さんと夕張さんに頼んで、私に合わせてくださつたのです。……スチュワートさん、強くなる道を探すとは……こういったことですよね？」

そう、満足げに盾を構える旗風。

これは……やっちまったなあ……。

まさか俺の言葉で旗風が道を間違えてしまったらしい。

「……。ええ……」

でも、弱いと感じたら元に戻せば良いって言った記憶あるし……戻してないってことは、旗風自身も満足してるってことだろう。

だからちよつと後悔はしてるし、旗風には悪い事をしたとは思うけど……曖昧な返事で誤魔化すしかない。

……後で佐世保と警備府のダブル神風から怒られそうだ……。

——ブウウウン……

艦載機の音が遠くで響いている。

「演習の時間が勿体ないですね……」

「……ソウデスネ。……じゃあ旗風は旗風の課題を意識していきましょう。私は、防御の硬い相手に対する攻撃を意識してみすね」

「はい！　お願いしますー！」

……お願いしますはこつちのセリフなんだけど……まあ、香取さんを意識して、ちよつと余裕が出来たらあれやこれや変なことしてみても良いかもしれない。

「チツ……あゝ……ダリイ」

流石は高回避に高防御を足した変態構成^{ビルド}。俺が真正面からぶつかっても意味は無かったか……。

たつた今何発か撃った砲撃も全て有効打にはならなかったし……メタルス〇イム殴ってる気分だ。

——バン！

旗風からの砲撃。微妙に狙いが甘いつてもあつて避けやすかつた。

だけど、避けた先にはいつの間設置されたのか機雷があつて、水中で爆発したらしく足元が崩されたのには焦つた。こういうのは経験の差か？ 相当テクニカルだよコレ……

それと、旗風の盾は “〇” 字の盾の真ん中に砲を突つ込むことで隙間が埋まるようになっていた。それを両手で持つらしい。……やっぱり盾、大きすぎない？ もうちよつと削つてもらつたらどうか？

それと、盾がデカいだけあつて防御力がヤバイ。仮に俺もこんな感じだったとしたら、真正面から艦載機で力押ししてきた赤城さんはやっぱりヤバイ。制圧力つて正義な

んだね……。

「つと……そうじゃない……」

問題はこの防御を前にして、俺に有効打が存在しないことだ。
なにかいい案は……。

「……せやー！」

思いついた！　こういうった時に思いつけるとかやつぱり天才だな俺。

盾が意味を為さない程の至近距離で、盾の内側に砲身を捻じ込んでから発砲する。

赤城さんが俺の盾の内側ともいえる部分に艦載機を使って爆雷を捻じ込んできたときと同じようなことをする。

いかに外側が頑丈でも内側まで頑丈なものはそう多くはない。内側に弱い部分があるから、外を固めて守るのだ。

「……いや」

絵面が俺の倫理観的にアウトだからコレは止めておこう。

なんか……旗風の服とかに砲身を引っかけたりしたら俺が羞恥で隙だらけになるフリーズする。

……大分前にイ級相手にやった目隠し戦法。コレを使おう。

盾を構えて、攻撃を弾いた時に視界が悪いのは盾を使ったことがある俺が身をもって

知っている。あとは魚雷が微妙にホーミングすることを利用して、左右から攻める！

コレだ。

思いついたら即実践。いざあ……

「ハア……ハア……」

「ぎ、流石です……」

互いに肩で息をしながら睨み合う。

旗風をまだ K・O 出来ていないから、俺の作戦は失敗に終わったと言えるだろう。その代わりと言ってはアレだが、やはり盾持ちの宿命……攻撃力の不足が旗風にもあった。

俺は偶々の被弾があつて小破と言つた具合で、旗風の方も無理やり隙間にブチ込んだ魚雷で小破。つまり、互いに疲労はしているがまだまだ元気だということだ。

そして俺は、失敗したことを延々と繰り返すほど馬鹿ではないつもりだ。当然旗風だって、決着が付かないなんて嫌だろう。

俺はそろそろ仕掛けたいし、旗風も勝負に出るならあと少しつてところか？

「うーん……」

旗風の盾が砲身と合体するようになってるなら、分離させれば良いってことにさつき気が付いた。

多分砲身に魚雷を当て続けたら、砲身と盾の噛み合わせがズレて盾部分がモ〇ハンの部位破壊よろしくポロツ……と外れるだろう。

そうなたらあととはドーナツシールドのド真ん中を撃てば決着が付くんだらうけど……。

「故意に艤装は壊したくないなあ……」

勝ち負けと、旗風の盾を天秤に掛ける。

……

「負けてもいいか……」

「いえっ、駄目です！」

「!?!」

俺の眩きは聴こえなかつた筈では!?

まさかとは思うけど、読唇術を身に着けている……?!

「本当に流石、です……でも、負けません。大丈夫です！」

……微妙にかみ合っていないな？ 他の人と通信でもしてるのかな？
こうして待ってるのも詰まんないし、ちよつと屈伸でもして身体ほぐそうかな……

ガクツ

「ハアツ!?!」

視界が急に傾いて、同じくらい上半身も傾いた。伸ばしきれない左膝が曲がる。

……右足が無くなった!?!

そう思ったが、水中に入ったただけだったらしい。落とし穴に落ちた感じだ。

何これえ!?! 艀装の故障？ それとも何!?!

一瞬の間に様々な予想や考えが浮かんでくるが、左足一本では崩れたバランスを立て直すなんて到底不可能。

海面がどんどん近づいてきて……

派手に水飛沫が上がった。

取り敢えず、緊急でピンチなヤバさはないですって感じの間延びした返事をして
おいた。

「燃料切れ?」

「はい。よく加減を知らない新人……いえっ! スチュワートさんが新人だなんて
……」

なるほどなるほど……燃料は使い切ると動けなくなると。

燃料が尽きても動ける軍艦とかがあつたら燃料革命だし、流石に補給無しでは戦えな
いんだね……。

そしてそれをやらかすのは加減バを知らカない新人だけと。なんかシヨック……。

「まあ、間違っちゃ居ないですね……それっ!」

「あつ!」

——ポンッ ポンッ

「……」

最後に旗風に向かって砲を向けるもパスパスと、弱い空気砲しか出てこない。

仮に弾が数発撃てたところで大したダメージにはならないだろう。……ビツクリし

た？

「ハハハ……」

どうやら完全に弾切れ、燃料切れらしい。

「降参ですう〜」

「……」

仰向けのまま、両手を上げるジエスチャーと共に降参する。つていうか、降参せざるを得ない。

確か戦争中だったたら、動けないやつは死ぬ！ つて感じだったんだっけ？ 捕まる位なら……つて感じで。

……ちよつと旗風さん!? なんでそんなふくれっ面!? おこななの？ 俺、マジで動けない！ 全力でやった！ 舐めプしてない！ 止めはヤメテ！

必死の顔芸が通じたのか、小さく溜息を吐いてから手を差し伸べてくれた。

旗風の手を借りて立ち上がる。うん、手を引いてもらつてる間はすっかり海面上を動けるらしい。

「……スチュワートさんが最後らしいですよ」

「ありがとうございます。……そりゃあ、ねえ？」

他の人たちは建造から一週間と経つてないから、佐世保の人たちが良い感じに教材に

なったら終了。対して俺たちは互いに有効打が無い、遅延に遅延を重ねたんだ。それから最後になるわ。

「旗風は何か学べましたか？」

恐らく、旗風だけは “教える” のではなく “教わる” を意識していたんだろう。……盾を持つてこなくて本当に申し訳ない……。

「はい、とても有意義な時間になりました。ありがとうございます」

「どういたしまして？ ……それと機雷の使い方、凄いですね。是非とも教えて頂きたいです」

「いえっ！ あれは偶然で——」

演習の反省、課題、感想を言い合いながら鎮守府に戻った。

「お疲れ様！」

「あら、遅かったじゃない」

鎮守府に戻ったところを出迎えてくれたのは、神風と……加賀さんだった。

神風が旗風に話しかけ、俺の方には加賀さんが来た。

「加賀さん、初めましてです。スチュワートです」

「加賀よ。貴女の事は赤城さんから聴いているわ」

「……因みにどんなことを？」

「そうね……いつか、貴女とはやり合ってみたいわね」

それだけ言つて去つていった。

「……」

……赤城さんは加賀さんになんて言つたんだ？

「——～ですよね、スチュワートさん」

「えっ!? ハイ」

いつの間にか、後ろから肩に手を置かれていた。

勢いよく振り返ると、鳥海さんと高雄さんが居た。……で、適当に返事しちやつたけ

ど……

「なんて言つたんですか？ もう一度言つてくれませんか？」

「佐世保の、私達の危機を救つてくれた凄い人つて、高雄さんに説明を……」

ええ……何してんの……

「……詳細は言つてないですよね？」

「勿論です。でも、救つてくれたのは本当じゃないですか」

そりゃあ詳細なんて言わないよな。あと、照れるからそんなに広めないで欲しい。「本当ですか？」

「まあ……誇張はされてると思いますが……」

「なんとということ……！ 鎮守府を救うだなんて、凄いのね！」

「凄いことはしてないので……あと、この話は広めないようお願いします……。出来れば忘れていただきたいですね」

「……ダメよ」

「えっ」

「凄い事をした人は、それに合った評価を。もっと褒められて良いと思うわ」

「……褒められることはしてないんですよ」

なんか広めそうな雰囲気を出してたから、ボソツと聞こえるくらいの大きさで呟き、意識的にジツトリした眼で高雄さんを見る。

あんなものは知らない人は知るときまでは知らないままでいいんだ。

「……分かったわ」

雰囲気で察してくれたらしい。いい人だなあ。

「……こんな話題は置いておきましょう？ スチュワートさんはどうだった？

あの子、最近頑張ってるのよ」

「ええ。見事にやられちゃいましたね……」

それからは、戻ってきた千歳型も含めての感想の言い合いだった。

やっぱりベテラン、強い人からは色々と学べたらしい。

瑞鶴さんはもうちよつと素直になろうよ……尊敬はしてるけど、それとは別にライバル意識もあるなんて俺には難しくて分かんない。

……千代田さんは、相手の千代田さんの事にも触れてあげて？　なんで千歳さんの感想しか出てこないの？　流石に可哀想なんだけど……。

神風は……。何やっつてんだ島風エー！　鬼ごつことか……自由過ぎるわ！　健気にも乗ってしまったらしい神風は悔しそうで涙目だ。……全面的に相手が悪い。

千歳さんと高雄さんが俺的に一番普通まともだった。

……演習の内容自体は神風以外はみんな同じくらいだと思っただけ……話し方って大事だなあ……。

「みんなお疲れ様」

感想を言い合っていたら、田代前提督が声を掛けてきた。

その声を聞いて、佐世保の人たちの口元が若干緩む。好かれてんなあ……。そして、後ろには提督と……同年代くらいの男も居た。

「初めましてだ！ 俺は梅木 罌。新しい佐世保の提督だ。よろしく！」

「「よろしくお願ひします」」

「……」

ええ……ナニコレ？

大きくてハキハキした声、捲った服から見える腕は筋肉で太い。

身長も大きく、浅黒く焼けた肌と、相対的に真っ白に輝く歯。

……完全に陽の者ですね。近寄らないで貰えます？ 灰になる。

「とても……ユニークな提督ですね？」

「やっぱりそう思います？ でも悪い人ではないのよ？ ちよつと活発すぎるけど、仕事はしっかりしてるみたいだし」

「いいですね。それはそれで楽しそうで。ウチの提督なんて——」

それからは、みんなの前で喋る筋肉を完全に無視して鳥海さんとお喋りしてた。

（大湊の提督は、午前中で仕事を終わらせるの……？ 凄く優秀じゃない。スチュ

ワートさんは何が不満なのかしら？）

「お疲れ様。……各自、課題や目標は見つかったかい？」

昼食前。用意された一室で皆とのんびりしてたら提督が入って来た。皆はしっかりと目的を果たせたらしいけれど……そんな提督はどう？

ちゃんと田代前提督から色々教えて貰ったんだよね？ まさか涼しい部屋で茶をしばいてただけとか言わないよな？

おい、何故俺の方に視線を寄せさない。

「……午後にもう一回の予定だから、それまでしっかりと休んでくれ」

了解、と全員が答えて、それを聴いた提督が部屋から出ていった。

演習が終わったら工廠に来てって夕張さんに言われてたけど……昼食挟んで、ちょっと休んでまた演習。……全部終わってから行こう。

それはそうと、この前シークリームを投げて来た生意気なウサギ卯には、しっかりとお礼をしないといけないなあ……。

台風が目が一番騒がしい

食べ物で遊んだ卯月に、唐辛子をこれでもかと練りこんだ温麵ういめんで後悔させた。

ごめんなさいしたところで、普通のデザートを渡そうとしたら「チョロいびよん」とか言ってきたから、隣に居た如月にデザートを渡した。

プップー！ と騒ぐ卯月から残りの温麵を取り上げて顔色一つ変えずに残りを食べ切った弥生には同士の波動を感じたね。……山椒とか花椒って好き？ 普通？ そう……。

「午後にもう一度と言ったが、個人の自由らしい。瑞鶴たちには参加させるつもりだけど、スチュワートは参加しないならしないで大丈夫だ」

食堂を出たところには提督が待ち構えていた。

俺を確認すると、午後の演習に俺は参加しなくてもいいという旨を伝えられる。

「代わりに何をすれば良いんですか？」

「スチュワートにとってここは古巣だろう？ 交流とかで楽しむのも良いと——」

「お断りします」

どうせ午後の演習の後には多少の自由時間が生まれるだろうし、お喋りとかはその時間だけでも十分だ。それに……

「神風たちが演習してるのに私だけのんびりしてるなんて、人間性が疑われると思うんですよね」

「スチュワートがそれで良いなら……」

ちよつとだけ目を伏せた提督。

……これはアレだ。苛められてる生徒に「大丈夫」って言われた時の委員長タイプの人の反応に似てる。

誰がボツチじゃない！

「そんなことよりも、瑞鶴さんに声を掛けたほうが良いのでは？ 大分ゲツソリしてましたし」

「……分かった」

「はい、演習にはしっかり参加するので安心してください」

「！ 赤城さくん！」

「うわっ」

近くで聞き耳を立ててたんだろう。中腰で手を耳に当ててる姿勢の吹雪が、俺の参加する発言を聞いた途端に大声を出してビックリ……いや待て、誰呼んだ？

「スチュワートさんも参加するみたいですよー！」

ほらね？ 仮に嫌われ者ならこういったことにはならず、それこそボツチになるつての。

だから俺の事は放っておいてくれ。

それはそうと、吹雪は何やってくれたんだよ……赤城^{ラス}さん^{ホス}を呼ぶ^{召喚}とか冗談だよな？

何で食堂から赤城さんの他にも旗風、夕立……他にも出てくるの!?

「それじゃあ瑞鶴さんをお願いしますね！」

ここは三十六計逃げるに如かずッ！

盾も持っていないのに空母の相手なんてしてられるか！ 赤城さんの後ろに加賀さんが居たのを俺は見逃してないぞ！ なんてたかが一駆逐艦の為に一航戦が出てくるのか、コレガワカラナイ。

「……腕試しっ？」

「はい。赤城さんが随分とスチュワートさんにご執心なので、綾波も興味が出てしまいまして……」

場所は食堂の裏手。人目に付かない場所で休んでいたら綾波が話しかけて来た。何が恥ずかしいのか、俺の方をチラチラ見てくる様からは想像できないけど……聞いたことがある。

綾波って滅茶苦茶な戦果を叩き出した伝説の超スーパー駆逐艦なんだってね。そんなの相手にしてたら一般人B！みたいな俺は秒で死ねる。だから

「折角ですけど、ご遠慮させてもらいま……す」

遠慮の言葉を出した瞬間、綾波が笑顔のまま固まった。

「うふふ。こう見えて、狙った獲物は逃がさないんですよ♪」

「ヒエツ」

畜生、鬼が増えた！

ヌツと伸びて来た腕を咄嗟の判断で逸らす。……ありがとう神州丸センセイ師匠！ お陰でまだ捕まってない！

ギヤーギヤー騒ぎながら、佐世保鎮守府で鬼ごっこが再開される。

……俺って人気者だと思わない？ 何せいつの間にか俺を撃沈させたら間宮羊羹三本とか言われてるらしいぜ？ ……こんなの指名手配と何が違うってんだ。

なあ提督よ。俺はボツチじゃないぞ。だつて向こうから勝手に俺の方に来るんだもん。俺の意志に関係なかったとしても独り^{ボツチ}じゃないぞ。今はボツチになりたいくらいだ。

面白半分で眺めていた武蔵さんからパージされた清霜に捕まり、佐世保で繰り広げられた鬼ごっこが幕を閉じた。

俺の受難は終わっていないかった。むしろここからが本番だったと言つても過言ではない。

清霜に捕まって行動制限が発生してる間に囲まれ……そこからはもうただの演習地獄だった。

弾や魚雷の補給以外の休みが無く、延々と戦つてた。

割と序盤に旗風の盾を奪つたのは俺にしてはフアインプレーだったと思つてる。

旗風みたいに盾に砲を突っ込んで、わざと砲身を^{ひしゃ}拉げさせる為にそのまま谷風のゴツい艦装に突っ込んだ。

目論見通り砲身……どころか砲そのものが潰れ、盾の穴が良い感じに埋まったのは

ラッキーだったと言える。

そこまでは順調だったけど、相手の人数が人数だからなりふり構ってる場合じゃなかった。

盾でタツクルしてブツ飛ばすなんて当たり前。近寄られたら隙を見ては背負い投げしたり、わざと近寄って同士討ちを誘ったり……。

だけど、物量差の前に俺はあつけなく屈した。

四方八方から寄ってくる魚雷の衝撃で僅かながら宙に浮き、そんな隙を逃さない艦載機にやられたところで俺が動けなくなり演習が終了した。

相手の人数が多いから、多少の同士討ちもあつたかもしれないけど小破、中破合わせて十三人。大破が一人という成績を残すことが出来た。

派手にぶつ壊れたのは俺の艦装だけ。旗風の盾は、ある程度時間が経つても空母の人間が艦載機を飛ばしてこなかったから誰かに向かつてブン投げた。質量が質量だけに相応の破壊力はあつただろう。

そして俺自身は……疲労困憊で動けなかった。

今は横になっていて、立ち上がることさえ出来ない。

……どうしてこうなるまで演習をしないといけないんだろうね？

「——てなことがありましてえ……」

「大変だったね。よしよし……」

「あの……」

だが、俺の危機は終わっていないかった。

むしろ今が一番ヤバイまである

「これはどういうことですか？」

俺は今、工場で夕張さんに捕まっていた。

しかもなんと膝枕をされている。……膝枕なんて、小学生低学年の歯磨きなんかでされたのが最後。しかも、夕張さん……に限らず、モデル顔負けのビジュアルを誇る艦娘にしてもらうとなると、俺の童貞が悲鳴を上げて精神をゴリゴリと削ってくる。

更に頭を撫でられているこの現状。頭を撫でられる度に恥ずかしさのあまり頭が沸いて顔が爆発しそうになる。これがフォースの力？ 夕張さんはジェ○イだった……？

恥ずかしさと恥ずかしさと正気を疑うので精一杯で、頭の中は疑問符と感嘆符で埋め尽くされている。

一刻も早くこの状況から脱しようと、僅かな理性が訴えかけてくるけど……何故か両手両足を縛られているから、身動きが取れない。

「約束通り話したので……放してください」

「ダーメ♪ だつてスーちゃん、何もしなかつたら逃げそうだもん」

そら逃げるよ!?! 通報されたら俺が捕まっちゃうつてのに、のんびり出来るかあ!

「ハア、様子を見に来れば……夕張さん、何やってるの? スチュワートさん困ってるじゃない」

「ああー、いいところ熱っツ!」あ、由良も一緒にしない? ねっ♪」

誰かが来たことに対して脊髄反射で助けを求めるが、急にペースアップしたナデナデの摩擦熱で言葉を遮られる。ついでに頭が揺られて脳が……脳が震えるツ!

「? ……! ……! ……!」

現れた第三者に見られたことを碌に働かない頭でようやく理解し、羞恥のあまり俺は無意識のうちに、防衛本能として意識をトリップさせた。

来客

「もうちよつと！ もうちよつとだけ！」

「夕張さん？ あんまり聞き分けが悪いと佐世保の皆さんにご迷惑をおかけすることになりますよ。ね？」

「むう……しよがないかあ」

肩を揺すられて意識が覚醒する。

「ん……あつ！」

意識が落ちる直前まで何をされてたかを思い出して飛び起きる。いつの間にか手足の拘束は解かれていた。

「……夕張さん、ありがとうございます」

「不服そう!？」

「至極真つ当な反応だと思うよ……」

由良さんの言う通りだ。手足を縛られて自由を奪われるなんて、ネタじゃなくてガチでされたらドン引きするわ。俺はマゾじゃない筈だから「そういうプレイか！」って喜ばない。夕張さんが喜んでたとしてもだ。

身体の疲れは多少取れたが頭が頭痛でヤバいとしても、動機が微妙に不純だったとしても、決定打が俺の防衛本能だったとしても、寝かしつけてくれたことには変わりない訳で……お礼は言わなきゃいけない。

「また来てね！」

「機会があつたら是非」

「夕張さん、嬉しそうですけど……あれ社交辞令だと思えますよ」

うん……夕張さんを姉呼びして揶揄った俺も悪いとは思うけど、流石に拘束はNGだから出来れば御免したい。大湊で夕張さんが建造されたら、揶揄ってもこんな事にならないように祈ろう。

「戻ったみたいだね。スチュワートにしては随分ゆつくりだったんじゃないかな」

「すみません」

? 提督どしたん? そんな不機嫌そうな顔して言葉に棘を足して……ストレス溜

まってるのか？ ハゲるぞ？

「時間も時間だし、そろそろ警備府に戻ろうと思う」

「はっ」

今の時間は……ウツソだろ六時半!? 夏至は過ぎたとはいえ明るいから分からないかったぞ……。

じゃあ俺は気絶してから二時間くらい寝てたってこと？

「千歳と千代田がまだみたいだね。ここに来たら伝えて貰えないか？」

「分かりました」

伝えることを伝えた提督が俺たちの荷物が置いてある部屋から出ていく。

「……なんで提督があんなに不機嫌そうなのか分かりますか？ 神風」

「佐世保の新しい司令官がスチュワートさんを佐世保鎮守府の所属になるように……所謂スカウトして、それからかな？ 司令官の機嫌がちよつと悪いのは」

「ふうん……チツ」

あの筋肉陽キャめ余計なことを……。

提督も提督で俺のスカウトから機嫌悪いとか、変な思考回路しやがって……俺のやらかしを知ってるなら異動はあり得ないって考えられないのか？

「ふうん……つて！ 他の鎮守府からスカウトされるって凄い事なのよ？ もう少し興

味ありそうな返事しなさいよ！」

「え〜……そんな事言われましても……」

「やめて！ 私のために争わないで！」 って言うのは少女漫画のヒロインだけで十分だし、俺はそんな事をネタ以外で言いたくはないし、そもそも俺は男色^{ホモ}じゃないから対象が野郎^{オトコ}ってだけでゴメンだね。

それに……

「大湊で全員をお出迎^建え^造するまでは他所に移るつもりはないので」

俺は凶鑑コンプを目標にするというポケ○ンマスターとしての業^{カルマ}を背負^カってるからなあ……

「ちよつと！ それって全員揃^揃ったらスチュワートさんは居なくなるってことでしょ？

ダメよそんなの。スチュワートさんも居て 〃全員〃 なんだから！」

「……ありがとうございます」

俺、涙^{ナミ}い^いつ^つス^か？ なにこの子……眩^{くら}しい^いん^んだ^けど。

「ごめんなさい！ 遅^{おそ}くな^なった^わわ！」

「新しいアイデアがどんどん浮かんできて……」

千歳さんと千代田さんが戻^{かえ}って^きた。

「神風は瑞鶴さんを起こして。高雄さんは提督に伝えてください」

「分かったわ」

よし、じゃあ戻ろうか。

警備府よ、私は帰って来た！

「いつもお疲れ様です」

なんて言つて、警備所の人に会釈をする。

神風たちは他の艦娘たちにお土産とか買つてたから俺は警備所に渡す。

「どうぞ、お土産のロールケーキです」

「あつ、ご丁寧にどうも……」

報告も何も、今回は提督も現地に行つたから必要ない。代わりに今日の遠征とかの報告を提督が受けているだろう。

だからちよつと時間が出来た俺は、こうして警備所でお茶をすることが出来る。暇なときにちよくちよく顔を出しているから……ほら、猫舌の俺でも飲みやすい冷たいお茶が出てきた。

今日は特にハプニングは無かったみたいで安心した。半日単位で何かが起こってたらやっつけられないもんね。

「明石さくくん！ 機雷作ってください！」

「なんて？」

「……伊58のマネです。機雷を作って貰えませんか？」

旗風リスペクトで機雷設置技使ってみたくなった俺は明石さんに頭を下げていた。

旗風に比べて力でゴリ押ししてる感があつてスマートじゃないから、攻撃手段は沢山持ってた方が良いと思つて、こうして頭を下げている。俺だつて機雷を駆使したカツコイイ立ち回りをしてみたい！

「まあ良いですけど……さつき提督から千歳型の二人の艦装を改装して欲しいって言われました」

ありや。先約が入つてんのか。千代田さんが言つてたアイデアが関係するんだろうな。

「どうしてもつて言うなら……チラチラ」

「千歳型の次でいいので……これでどうでしょう？」

「間宮券！ ありがとうございます！」

俺がサツと取り出したソレは間宮券。全員に配られたみただけど使い切った人が多く、交渉の切り札になることを俺は知っている。これがホントの食券乱用ってね。

手もみしながらだらしなく口元を緩める明石さんを見て、苦笑せざるを得ない。

「スチュワート、ここに居たのかい」

「響……」

「提督が呼んでるから付いてきてもらおうよ」

つまりは提督が椅子から動けないレベルで酷いことになったと？ 面倒だなあ……。

「分かりました……じゃあお願いしますね、明石さん」

「はあ〜い！」

……不安だ。

「ついさつきだが、遠征に出ていた艦隊から連絡があつた」

「はい」

「見たこともない深海棲艦が現れたそうなんだが、どうも様子がおかしいらしい。……スチュワート、行ってくれないか？」

流石に一人で行きたくはない。

そんなことはさせないだろうけど、相手が何なのかも分からないのに突撃するのは嫌だなあ……。

「私にもソレスマホ見せてください」

「はい」

スマホを渡してくる提督。

早速スマホが役に立ってるようで何よりだ。やっぱり情報は早くなくっちゃね！
なにになに……

『明らかに普通ではない深海棲艦を発見』

『こちらから攻撃しても反撃をしてこない』

『攻撃の中止を決定。観察開始』

『艦隊の誰も見たことが無い。恐らく姫級。応援求ム』

……なるほど。確かに提督の言った通りだ。

おつ、スクショも貼ってあるやんけえ！

「えっ。あゝ……」

これ北方棲姫と港湾棲姫じゃん……。港湾水鬼の可能性も在るだろうけど……十中八九港湾棲姫だろう。

『艦これ』の二次創作で穏健派としての描写が多い二人だし、反撃してこないって文章を信じるならワンチャン有るんじゃないか？ 攻撃を中止させた人は有能。よくやった。

『そつちに行きます』とだけ連絡を入れる。大分雑だけどこんなもんでいいだろう。

「……響、一緒に行きましょうか。信頼してますからね」

「Спасибо。応えてみせるよ」

「何か分かったのかい!？」

俺が響と二人だけで行くと伝えると提督が焦ったように、まるで俺が焦らしているかのような反応で答えを求めてきた。

それに対して俺は、まあ落ち着け？ って言わんばかりに余裕綽々な態度で振り返る。

「瑞鶴さんから零式艦戦21型を無理矢理にでも貰ってきてください」

烈風があるともっと良いんだろうけど……そんな貴重なものは無いから零式艦戦で満足してもらうしかない。ウチは色々貧弱だからしょうがないね。

「あと、間宮さんに美味しいご飯と甘味を作らせておくことです」

俺の言った二つの言葉が結びつかなかったのか、提督が頭を傾げた。

第一印象は大事

「いや、助かりますう……」

薄暗くなってきた水平線に向かって灯りを点けては消してを繰り返し、俺を先導する響には頭が上がらない。響が居なかつたら見当違いの方向に向かって全力移動。クソ広い海で盛大に迷子になってたところだ。

「スチュワートは変なところで常識知らずだね」

呆れた顔を向けてくる響に返す言葉が無い。そらそうよ？ 一般人はモールス信号なんて言葉は知つても解読なんて出来ないんだから。

見た目からは想像も出来ないけど、大戦を経験してる生粋の軍人である艦娘と一緒にしないで欲しい。

「そろそろ通信が繋がるかもね」

「了解。『聞こえますか？』」

『聞……た……じゃ！ その声はスチュワートかの？』

おお、繋がった。そしてその声と話し方は初春で間違いないね。

『はいそうです。それで、そちらの状況は？』

『何とも言えんのう……向こうに敵意を感じぬから、互いに攻撃をせずに睨み合ってるだけじゃ。正直なところ、少しばかり飽きてきた』

『もう少しで着くので、待つててください』

『助かる。戦果を挙げようとする白露を押さえるのが骨じゃ。……これ！ 単独で敵に突撃するなど何事じゃ！ 今指示を仰いでおるから待つとれ！』

『初春……ありがとうございます。白露と他の人に発砲するなどだけ伝えてください。よろしくお願いします』

多摩が居る筈なんだけど……白露を押さえてたんだらうか？

『了解した。待つておるぞ』

初春との通信が切れた。

「スチュワート、何か秘策はあるのかい？」

「敵意は無いらしいので、コレで何とかかなりますよ」

冗談っぽく言いながら、持つて来ていた間宮羊羹を取り出して見せる。

「……」

響が胡乱な目を向けてくるが、北方露姫子供にはお菓子！ コレ世界の常識。……やつてることは完全に不審者だけど、平和の為だからしょうがないね。

まあ、俺自身も本気でコレで羊羹何とかなるなんて思つてない。

取り敢えず、北方棲姫を刺激しないようにしつつ港湾棲姫に話を聴かないといけないな。

「どうすればいいにや?!」

やっと艦隊が見えてきたと思つたら、多摩さんが飛びついてきた。

俺も分からん! つて脊髄反射で応えそうになつたけどグツと我慢する。脳を通さずに会話すると碌でもないことになるつて俺は学んだからな。

あと、爪を立てないで欲しい。
痛い。

「まずは敵意が無い事を……これはしばらく睨み合ってるならまあ置いといて良いでしょう。次に、一人であそこまで行つて、会話を試みる必要があるらうですねえ……」

「二人で行かせるなんて危険だにや!」

「駄目です。一人です。これは譲れません」

一人で行くことで相手よりも頭数を減らし、抵抗しない、出来ないつて意思表示することが必要だ。頭を下げて、首を晒すのと同じようなものだな。

「ならば! 先程から随分元気な白露に行かせたらどうかのう?」

片や危険だと言い、片や効果が薄いと言つて睨み合つたところに初春が割り込んできた。後ろには、右手を響に、左手を菊月に捕まつた白露が居て、初春の提案を聞いたのか勢いよく頭を上げた。

「ホントに!? だつたら任せて! ギツタンギツタンにしてやるんだから!」

うん

「ダメです♪」

それから暫く白露が騒ぐだけで時間が過ぎ、いくら敵とは言つても待たせるのが忍びなく感じて来た頃、多摩さんが折れた。但し、俺に何かあつた時は直ぐに行動に移せるように通信は入れておけと言われた。

「念には念をつて姿勢は嫌いじゃないけど……どうして分からないかなあ?」

だつて攻撃してこないんだぜ? 多少とは言え一方的に攻撃されたのに。

「私は貴女たちを信じているのに……ねえ?」

「……」

港湾棲姫のところまで辿り着いて声を掛ける。

宙に浮かんだタコ焼き亜種みたいな奇抜なオブジェクトのお陰で、それなりに離れて

いても場所は特定できた。

「こんばんは」

「……………」
「才前、怪シイ！ カエレ！」

「ええ……………」

「ホッポ……………」

挨拶をしたら、陰に隠れていた北方棲姫ほっぽちゃんから帰れって言われた。

その北方棲姫は、港湾棲姫の陰にまた隠れてしまった。

そんなに怪しいかなあ？ まだ “にこやかに” 挨拶しただけなんだけど……………。

流石に子供から出会い頭にそう言われたら悲しくて涙出そう。

すると今度は、どこか申し訳なさそうな顔をした港湾棲姫から話してきた。

「ホッポガ悪カッタ。……………一ツ訊キタインダガ、才前ハ何故攻撃シテコナイ？」

あつ、面倒くさい質問だ。

「そおですねえ……………戦う理由があんまりないから？ ですかねえ？」

「理由ダト？ ソンナモノ……………」

いくらでもあるだろう。

と続けた港湾棲姫の言葉に被せるように言葉を放つ。

「いや〜！ だって貴女たちの方こそ攻撃してないですし？ それとも、今背中を向け

たら攻撃するんですか？　しないでしよう？」

「……」

沈黙は肯定。古事記にも書いてある。

つていうか、奇抜なタコ焼き以外に艦装つぽいの無いやんけえ！　攻撃して来ないも何も……出来ないんじゃないの？

「ホラ。そつちが戦う気が無いならこつちも同じなんですよね。そもそも、人間に敵対的な深海棲艦が居なかつたら戦いなんて起こりませんし。……戦わないに越したことは無いですよ？　それに、痛いのはお互いに嫌ですよ？」

本音を言うと、姫級、所謂ボスなだから絶対に強いだろうこの二人とは戦いたくない。

今だって、ふざけてるからまだ平気だけど、真面目に会話なんてしてたら空気とかプレッシャーに飲まれて、蚤の心臓がパーンなるで。

「……私タチハ深海棲艦ダゾ？」

だからなんだよ

「それがどうかしましたか？　駆逐棲姫は一言だけ、何か言つたと思つたらボコつてきましたよ？　それなのにホラ……まだ生きてる！　本当に深海棲艦ですか？」

殺意足りてないんじゃないの？　つて言つたときに気が付いた。

港湾棲姫と北方棲姫からジツと見られている。

目を話したら死ぬ、その瞬間に殺されるんじゃないかって思う。今すぐに目を逸らしたいけど、目が離せない。心臓が握られてるような錯覚に陥って上手く呼吸が出来ない。

「フウー……フウー……」

「ソウカ……」

何を納得したのか、安堵の表情を浮かべた港湾棲姫が指……クソでかい爪を俺の方に向けてきた。

「フウーッ　フウーッ」

目の前までゆつくりと伸ばされた爪から目が離せない。

次は何をしてくる？

このまま俺の頭を握りつぶすのか？

目を突きさす気か？

首を刎ねる気か？

それとも……

集中しろ。死にたくなかったら百分の一秒の挙動を見逃すな。

「才前ヲ……」

俺を？ どうするんだ？ 殺すのか？

「フーッ！ フーッ！」

突然頭が痛くなつたと思つたら、視界が端の方から急に暗くなっていく。

なんか奥に落ちていくような感覚を味わって、鼻からドロドロした……鼻血？

……まあ、ヤバいなつてことを感じ取って、足に力が入らなくなつてもう……崩れた。

「信ジヨウ……オイ！」

なんか言つてやんの……頭回んなくて何言つてるか分かんないなあ……。

心配、不安、悪だくみ

「にやあ……」

「どうかしたの?」

通信機に耳を当てて、一人で深海棲艦のところに向かったスチュワートの様子を探っていた多摩さんが小さく唸った。

私たちの中で一番詮索、探索が得意だからハツキリと聞こえたみたい。私は雑音とか拾っちゃったから良く聞こえなかったんだけどなあ。

比較対象の多摩さんが軽巡つてことと、まだ新人つていう言い訳が出来るけど、そんな事ばかり言つてられないから、私も頑張らなきゃ!

「これは拙いじゃ……」

「む。何かあったのかのお?」

初春が、双眼鏡 双眼鏡を覗き込みながら多摩さんに質問した。初春の隣に居る響もそうだけど……ソレはどこから取り出したんだろう?」

「さつきからスチュワートの様子がおかしいじゃ」

「そうかい？ 見たところでは特に変わった様子は無さそうだよ」

「気のせいじゃないんだけどにやあ……」って言って、また通信機を耳に押し当ててる多摩さん。

う〜ん……多摩さんと響と初春が居るなら私、要らないよね？

辺りを見回すと、落ち込んでるようすの白露が居た。

すぐ後ろには菊月も居て、目が合うと「処置無し」と言わんばかりに腕を上げて首を振った。

「あたしが一番あたしが一番あたしが一番……」

近づいてみると不気味な眩きが聞こえる。心なしか、白露の周りに不知火……じゃないくて鬼火が見えるような……雰囲気も暗いし。

出発前から騒がしい印象だったけど、スチュワートから一言貰っただけでまるで別人みたいに……スチュワートは何者なの？

「ほら、シャキッと！ アンタそれでも長女ネームシツプなの？」

お尻を叩いて声を掛ける。

「痛つ……勿論よ。でも……」

振り返った白露は据わった目と下がった肩、まるで覇気のない声で全体的に萎しなびてて別人かと思った。……暗い！ 全然嘔みついてこないじゃない。

「はあくあ……張り合いが無いわね。アンタは同時期に建造された駆逐艦の長女だし、私のライバルだと思つてただけどなく」

「うん……そう。そうだよね！ あたしがいつちばん高いハードルとして立ち塞がつてやるんだから！」

うん、元気になった！ ちょっと煽つて正解だったかもね。暗いのは白露には似合わないよ。

急速に活力が宿り、肩をグルグル回している白露はもう大丈夫だと思ふ。

「済まない。それにしても、長女ネームシップとしての発破をかけるとはやるな」

「まあね。でも、元気になったらなつたで……」

また突撃するかも……なんて言葉は、様子を窺っていた三人が上げた声に掻き消された。

「あ」

「あつ……」

「何があつた!?!」

「みんな！ 深海棲艦のところに行くにや！」

不穏な眩きに菊月がいち早く反応する。三人の焦り方が普通じゃない。

「白露、行けい！ 一番槍であるそなたの出番じゃ！」

「え？ え?!」

「通信が繋がらなくなったにや!」

「我らが初期艦を倒すなんて……吊い合戦だよ」

倒されたって……「多分何とかありますよ」って言うから信じたのに、全然大丈夫じゃ無いじゃない! 信じた私たちが馬鹿みたいでしょ!

「わらわも見ておつたが、攻撃されたりして大破した訳ではなかったぞ? 勝手に吊うでない」

「それより良いのか? 白露がもう……」

「急ぐにや!」

こんなことなら、様子がおかしいからって様子見を提案するんじゃない!」



苦しい?

息が……出来ない?

「ッ!?　　くくッ!?」

「暴レルナ!」

顔、鼻と口が押えられて息が出来ず、押さえてるものを取っ払おうとしたら顔面を何か柔らかいもので殴られた。

こんな酷い寝覚めって無いよ……

「大丈夫ナノカ?」

「……そうだった。あくハイハイハイ……大丈夫ですう……」

上から声を掛けて来た港湾棲姫に覗き込まれて一瞬ギョツとしたけど、倒れる前には港湾棲姫と会話していたことを思い出したからヘコヘコしながら起き上がる。

流石に倒れた人の介護に海の上は良くないと判断したのか小さい島、岩礁? に移動してみたいで、さつきまでは装備してなかった艀装が鎮座していた。

何と言うか……デカイ。これももうMAP兵器でしょ。固定砲台型のめつちや強いヤツ。

「サツキノ続キダガ……オ前ヲ信ジテオ願イガアル」

さつきの続きと来たか……いや、真剣な話ってのは分かったからそんなに凝視しないで! プレッシャーがヤバいからまた倒れる!

……不誠実だろうけど、まともに目を合わせてたら心臓がいくらあっても足りない。だから目を微妙に逸らしながらの会話を提案したら受け入れて貰えた。

「色々と済みません……それで、お願いとは」

「アア、私達ハ深海棲艦ノ中デモ穩健派デナ。他ノ奴等ノ方針ニ合ワナカツタンダ……」
うん、知ってた。

「それで、抜けて来たから居場所が無いってことで良いでしょうか？」

「話ガ早イナ。匿ウ……マデハ行カナクテモ、深海棲艦ノ少ナイデアロウ鎮守府ノ近くニ身ヲ潜メタイ」

「なるほど」

「ソレト……恥ズカシイ話ダガ、私モホツポモ、腹ガ減ツテイテナ……」
「……分かりました」

俺がそう言うのと港湾棲姫は明らかにホツとして、陰に隠れていた北方棲姫が出て来た。

「オマエ、イイ奴ダナ」

「それ程でもない」

腹が減るのはしょうがないことだし、これはこれで割と重要な情報じゃないか？ 深海棲艦にも空腹の概念はあると……。

それはそうと、ちよつと持ち上げられて気分が良くなったからドヤつたら腹パンされた。痛い……。

「ム……」

空飛ぶたこ焼きがギヤアギヤア騒ぎ始めた。すると即座に北方棲姫が俺の服を掴んで、たこ焼きが見る方向の逆側に移動した。

何事かと思ったら何かが近くに落ちた音がした。

「肉盾にされた……」

「砲弾力？」

地面から煙出てる……砲弾ですねぇ！

「これマジ？」

なんで撃つて来たし。白露辺りが我慢の限界でも迎えたか？

取り敢えず連絡を……

「あつー！」

通信機機能死んでるしてないじゃん！

えっ？ つまり何？ 俺の通信機が壊れて連絡が取れなくなつて？ 仮に双眼鏡と

かで見えてたとしたら、俺が謎の方法で倒されたことになるの？

そりやあ俺が見てる人達の立場だったら助けに行くわ。

でも、俺は勝手に自爆しただけだから助けは要らない。

「……二人はここで待つててください。身内が混乱しているようです」

そう言つて、返事も聞かずに海へ出る。

顔から火が出そうだ。完全に自分のミスじゃんかさ。

「……という訳で、私は私です」

「じゃあ、操られてる訳じゃ……ない？」

深海棲艦、港湾棲姫のプレッシャーにやられて極度の緊張と興奮状態になって倒れたことと、その時に通信機が水没して前衛的なストラップに変わったことを説明しても、何故かまだ疑つてくる一行。

……アレか？ 鼻血出したことまで言わなきゃいけないのか？ そもそも操られるヤツがこんなに綺麗な目をしてる訳ねえだろ常識的に考えてくれない？

ついでに、二人が敵対的な意思を持っていないことを確認したことを伝えた。

そこまでやつちやつたなら隠し事もクソも無いから俺一人でアレコレ言う理由も無くなった。なんで港湾棲姫とかのことを知ってるかって言われたけど、初期艦だから

色々とは知ってることで言いくるめた。後で提督に訊かれないことを祈ろう。

「……という訳で、私はあくまで要求を理解したというだけです。何せ決定権は提督、もしくはもつと上の立場の人が決めることですから」

皆で港湾棲姫のところに向かつて話し合いの続きをする。

まずは、姫級の深海棲艦を事実上匿うとなると俺の一存では決められないからこれだけは伝えておいた。

そして今は提督と連絡を取っていた。

そこで活躍するのはスマートフォン。電話がこんな辺鄙な場所でも繋がるのは素晴らしいとしか言えない。

やはり文明の叡智はいいぞ。

『……流石に無条件は駄目だ。それに、深海棲艦を警備府に入れるのも駄目だ』

猫を拾ってきた子供に捨ててきなさいって言うオカンみたいなこと言ってるじゃねーよ。

でも、提督も提督でそこまで拒否感を抱いてないっぽい。なんか否定的なのは恐らく、体裁とかを気にしてるんだろう。

お政治のことは私、よく分かりませんわ〜？

「鹵獲したつてことにすれば……」

『いや、その場合は間違いなく大本営に回収されるだろうね』

「うくん……皆さんは何かアイデアがありますか？」

スピーカーモードにしてるから、向こうで遊んでる北方棲姫と、暇つぶしの相手をさせてる陽炎と多摩さん以外の全員が頭を捻る。スマホからも何も聞こえなくなり、提督も色々と考えていることが分かる。

「そう言えば、深海棲艦つて海中にも行けるんだよね？」

「……アア。潜水艦以外デモ水中ニ潜レル。好ンデ潜ル奴ハ居ナイダロウガ」

「じゃあさ……警備府から比較的近い島、あつたじゃん？ その地下に穴でも空けちゃえば良いんじゃないかな！」

「？ ……ああ。ビーバーの巣みたいになればつてことですか」

白露……こやつ天才か？ 俺が常識に囚われすぎただけか？

『確かにそれなら……うくん』

提督も唸ってるから、もう一押しつてところだな。

「じゃあ後は、深海棲艦の情報とかを尋問したつてことにして大本営に報告すれば良いんじゃないかな？」

響のナイスアシストで、提督も決心したらしい。

『分かった。その島に港湾棲姫と北方棲姫を連れて行つてくれ』

「了解！」

『それと港湾棲姫には、艦装をこちらに引き渡して貰いたい』

「当然だな」

おいおいおい……あの提督が随分強気に出るじゃねーかよ。

武器を捨てろつて言われて応じる港湾棲姫も港湾棲姫だしよお……実は艦装はオマケで、本体が暴れるだけでゴジラ顔負けの被害出せるとかは……無いよね？

『……私は、我々大湊警備府の艦娘には君達二人には危害を加えないように呼び掛けておこう』

「感謝スル……提督」

そう言った港湾棲姫はスマホ越しのただの電話にも関わらず、深く頭を下げた。

しんりに ちかづいた !

北方棲姫と港湾棲姫を警備府に近い島に連れて行く。

目的地は長良さんが発見した、比較的簡単に行ける距離にある上に資源まで取れたことから人気があつた島だが、今では資源も枯渇気味で、新人の初遠征やその他諸々の事にしか使われていない。

確か最後に使われたのは……遠征を面倒くさがつた望月が、わざと資源の代わりに艦装の大半を置いていったことだったか。翌日の朝イチで多摩さんに回収されててガン萎えしてたのを覚えてる。

因みに、空母と戦艦を除けば俺も含めた全員がこの島に一度は訪れている。まだ燃料燃料の素を触つてないヤツは触るべきだと思ふ。の素を触つてないヤツは触るべきだと思ふ。触つたヤツ一同で泥の中から歓迎しよう。

まあ、そんなちよつとした出来事が偶によく発生する場所に、とうとうトンデモ案件がブチ込まれようとしている訳だ。

現に俺たちは、港湾棲姫のクソデカ艦装を引っ張つて『艦』娘、深海棲『艦』にあるまじき遅さで移動していた。

「何引つ張ってんの!？」

辺りは真つ暗。こんな時間に警備府近海とは言えないこの辺まで来る人に心当たりは一つしかない。『艦これ』のこ小夜啼鳥きどりこと川内さんだ。

こんな時間まで外うに居る俺たちを夜戦仲間だと認識したのか、いつもの数倍はフレンドリーに話しかけてくる。

「……………」

だけど俺たちはそれどころじゃなかった。

港湾棲姫の艦装は当然俺のパワーではビクともしない。響が加わっても同じこと。多摩さんと陽炎、白露が加わってようやく動き始めるレベルだ。しかも港湾棲姫がコツソリ押していてコレだ。馬力が違い過ぎる……。

結果として手が空いているのは初春と菊月だけで、その二人は北方棲姫の艦装と五人分の資源を運ばなきゃいけない。

簡単に言うとおバーワークだ。

そんな俺たちの前に、身軽な装備で現れたらどうなるか。

「良いところに！ モチロン手伝ってくれるよにや?」

まあ、こうなるな。

「よ……………夜が私を呼んでるから！ 頑張つてね!」

そう言つて踵逃げ出すを返す川内さん。

あつ、ヤバい！ 期待と背骨と根気が砕けそう！

「今度夜戦付き合いますから！」

「本当!？」

「えつ、ええ……」

それなりに距離あつたのにはぼノータイムで俺の手を握る川内さん。魚類めいたスピードを実現するとか世界観壊れてない？ 夜にだけギャグ補正かかるようになってんのか？

川内さんが参加した直後に遠征艦隊の六人目である伊58と、呼ばれた助っ人の伊勢さんが来た。

一気に負担が減つたのは嬉しいばかりだけど、俺の夜が一日潰れる形になってしまったのは流石に残念だと言いたい。

「特にそれらしいものは無いでち！」

黒い海の中でも僅かな光と音波装置ソナーの力でしっかりと探索してくれた伊58が、海面

に戻ってきて言った。まあ、そんな都合よく海底洞窟なんてものがある筈もないよな。「なるほど。……続きは明日になりそうですね」

仮に俺たちが島を側面から削って海底洞窟っぽいことにしようと思つたら半月以上掛かることは間違いない。遠征終わりの多摩さんたちや、演習明けの俺は休んでも罰は当たらない筈だ。

それに、土木工事なんて妖精さんに任せておけば聖ヨゼフの螺旋階段だつて一晩だろう。今は岩と資源しかない殺風景な小さな島も、北方棲姫の要望に応えた地下スペースを有する秘密基地にビフォーアフターしてくれる筈だ。絶対に妖精さんにステイブって名前のヤツ混ざってるぞ。

「取り敢えず何も無いところですが……明日以降から色々と始めるように伝えますので」

「ソウカ」

「……」

港湾棲姫が頷く。だけど北方棲姫がまだ何か不満があるらしい。

「腹ガ、減ツタ」

……うん。

そうだね。俺たちもだよ。

今の時間は分からないけど、川内さんが警備府に居ないってことと、それから一時間は経ってるから確実に午後十時は過ぎていいるだろう。

先に港湾棲姫の艦装を一人で持って帰った伊勢さんと、夜戦食を補給してきただろう川内さん以外の、食に対する切実な欲望を零した北方棲姫にほぼ全員が和む。

「コラ、ホッポ……」

「あ〜……大丈夫ですよ」って言って、空腹に喘ぐ事態になることは無いと励ます。

「何故ダ」と訊いてくるが答えは簡単だ。

ウチの提督は変なところで気が利くから。

「皆さ〜ん！ お待たせしました〜！」

「」 やったー！ 「」

噂をすれば間宮さん。空腹も相まって全員のテンションは爆上がりだ。護衛に龍田さんを就けるなんて贅沢だなあ……。

「はい、どうぞ♪」

「アリ……アリガトウ」

「ふふ。はい、貴女も」

「感謝スル」

潮風に吹かれながら食うおにぎりが美味いなあ……。穏やかな顔の港湾棲姫も、笑っ

てる北方棲姫も、こうして見てると敵性の存在だって認知されてたのが信じられない。……何故戦争が起きるか？ それは美味しい物が食えていないからだ。満足できる食事は心を豊かにする。つまり美味しい飯は世界を平和に……

「ハッ!？」

俺は何を……。

「あっ!？」

呆け過ぎたのか、あと一口といったサイズのおにぎりが足元に落ちていた。

間宮さんがにこやかに、それでいて季節にそぐわない冷気を発しながら俺の方を見てくる。

飯が美味くて真理を見たって熱弁したら許ちよつと引ひかれ

きた。「マタコイヨ！」と見送られて数時間。日付が変わりそうになった頃、警備府に戻ってきた。

律義にも俺たちの帰りを待っていた提督に出迎えられて、俺の永い一日が終わったと実感した。

疲れたからすぐに寝たいけど、提督が起きていたんだから仕事は頼まないといけない。妖精さんと会話できるのは提督だけだからね。例の二人の隠れ家の準備ヨロ。

……これでヨシ。

……ねよう。あたまいたい。

演習の後にハプニングで日付が変わるまで海の上に居た俺は、多摩さん達と同じように休みになった。まあ、順当だと思ふ。

……それなのに

「執務室に來い？」

「そうなの。提督が昨日のことを詳しく知りたいらしいから、後で来てね？」

「……分かりました」

俺に逃げられないように龍田さんを今日の秘書艦にすると……提督め、俺の扱い方を理解してきやがった。龍田さん怖いから今回は行くけど、折角の休日を潰された俺がいつまでも大人しくしてると思ふなよ……！

そう心に決めて唐辛子で赤くなつた納豆を食べる。

悍ましいモノを見る目をしてきた暁のことは努めて無視をする。

暁は赤^{唐辛子}、黄色^{生姜}、緑^{ワサビ}の三色をしつかり食べるつて教わらなかつたみたいだな？

暁型の

オカンこと雷に進言してあげよう。これで腸内環境もバツチリの筈だ。

ホラ、美味そうだろ？ 間宮さんから食の真理を教わった俺の飯はよお？
……何故目を逸らす。

朝食後、突然の休日ということもあつて特にやりたいことが思い浮かばず、取り敢えずな感覚で執務室に向かう。

適当に三回ノックすると、いつものように部屋に入る。

「失礼しま……うおっ!？」

室内に入つて第一歩、いきなり浮遊感!？」

気が付いたら衝撃と共に床に張り付いていた。

神州丸師匠さんの特訓のお陰で無意識的に受け身を取れたから大したダメージが無いのが救いか。

「……」

視界には俺の今も右腕と襟を掴んだまま俺を観察するように見る龍田さん。

普段の様子からして龍田さんならまあ、不意打ちの投げ技こういつたことをしても不自然では……ない

? いやかなり不自然だわ。でもやられる心当たりがあるような無いような……。

「……やられちゃいましたね」

「……あらく。結構全力でやったのに殆ど無傷だなんて、傷付くわね」
「ええと……提督？ コレはどういうことなんですか？」

俺の危機管理能力のテスト？ 最近弛んでるって？

「提督は関係無いわよ？ コレはただ、私が勝手にしたことだから」

「……手合わせならいつでも歓迎しますよ？」

「あら嬉しい♪ でも違うのよ。スチュワートちゃん、貴女、何者？」

……
その言葉を聞いた瞬間、身体が硬直する。

……
チラリと見ると、提督も完全に固まってる。

♪
視線を正面に向けると、目だけが笑ってない満面の笑みを崩さない龍田さん。

……
頭のなか真っ白だよ……。

もつと話して (want you to talk more)?

「スチュワートちゃん、貴女、何者？」

「……」

龍田さんからの質問は、最高に答えにくいものだった。

「だんまりじゃあ分かんないわ〜」

えいえい♪ と襟を掴んだままの拳で、そのまま鳩尾辺りを圧迫してくる龍田さん。

反射的に咳き込み、直後になにもここまでしなくても良いんじゃないかと思って、龍田さんを睨む。

「私達が見たことのない深海棲艦の名前を呼び当てた。それだけならまだ分かるわ。大湊ウチの初期艦だものね。きっと私達の知らないことも沢山知ってるんでしょ？」

「……」

「でも、提督まで分からない深海棲艦の名前を言えるなんて流石に変だと思ふのよね？ 出撃前には提督にご飯を作らせるように言ってたそうじゃない。その後も交渉なんて手段を取るしい……正直、とっても怪しいわよ？」

……言われてみればだ。

提督を含めて誰も知らない敵を知ってる時点で大分オカシイ。更に好物甘味と戦機だと思われるものまで把握してるなんて知ったらそりゃあ怪しまれもするか。

しかも敵対的じゃないからといって疑いもせずに交渉を持ちかけるなんて、深海棲艦と繋がっているって思われても……しようがないだろうな。

「ハア……」

つまりまた俺のポカってことか……余計なことしちやつたかな？

いやいや、あそこで二人を倒そうとしても必死火の粉を振り払うくらいに抵抗だけはするだろう。

そうなったらこつちも損だし、何より両手を上げてるような人を的にするなんて俺には出来ない。敵対したなら容赦なくぶつ放すだろうけど……って違う違う。俺が二人のことを知ってることはどうやって説明したらいい？

どう誤魔化せば正解だ？

なんて考えていたら、今まで固まっていた提督が口を開いた。

「龍田、一回落ち着いてくれ」

「提督は黙っててね」

「いいや、黙らない」

「!?!」

龍田さんの言うことに従わないとか……自殺志願者かよ。

墓には『大いなる者龍田さんに逆らつた勇者、ここに眠る』つて刻んどいてやるよ。まだ二代だろうに……惜しい若者を亡くしてしまった。

「龍田と……この際だからスチュワートに言つておく」

おつ、なんだなんだ？

今まで勿体ぶつてたような言い方しやがつて。俺が納得できるようなそれはそれは素晴らしい演説モン聞かせてくれるんだらうな？

「まずはスチュワートだが、もう少し素直になつてくれ……」

「……はい？」

さつきまで龍田さんに突つかかるような雰囲気は何処へやら。どこか悲しそうに言う提督の予想してなかつた一言に俺も龍田さんも固まつた。

「君が沢山の秘密を抱えていることは知つて……つもりだったが、田代前提督との会話で君にはアレの他にも大きな秘密があることを知つた。……知つてしまった」

「……」

は？ え!?! ……何言つてくれちやつたのあの人!田代提督

「田代前提督も君の口から直接聞くように言つていたからそのうち聞けたら嬉しいが、それはそれ。今は置いておこう」

あつそう? ……去り行くであろう田代提督信頼できる人だからバラしたけど、まだまだ現役の提督には教えてやるかよ。どうしても訊きたいなら命令するか、どうにかして口を開かせて見せろよ。

「君に何が言いたいかと言うと、秘密を抱えすぎるのは良くないんじゃないかっていうことだ。話したくないことは分かっているんだが、そうだなあ……互いに相談し合える、世間一般が言う“親友”と壁を作つて接するから浅い付き合いしか出来ない人、どちらを信用する?」

「……前者ですね」

「そうだろう? 現に君は今、龍田に怪しまれている」

チラリと視線を提督から龍田さんに移すと、ニツコリとした笑みを浮かべられた。……笑ってるんだつたら解放して欲しい。すぐに視線を提督に戻す。「ちよつと!」押さえる力が一瞬強くなつて咳き込んだ。

「他人は自分を映す鏡だなんて言われる程だ。周りが君を信じてないってことは、君が周りを信じてないってことになるんじゃないか? 隠し事をいきなり全部話せと言うつもりは無いけど、少しくらい話しても良いんじゃないか? 仲間だろう? それなりに相手を信頼して迷惑をかけるくらいいいじゃないか」

「……」

コイツ誰!? 俺の知ってる提督と違う! こんなことを言うような男じゃなかったぞ! もつとこう、ヘタレと言うか波風を立てないと言うか……さては偽物だな!?

——コンコン

「そして龍田だが……真面目な話題で身内を疑うんじゃない。確かに今回の件では不審に思うような点がいくつかあったと思う。だけど彼女ステューワートは間違いなく味方なんだ。佐世保の田代前提督と大本營の折り紙付きだ」

「……提督がそこまで言うなら、仕方な「提督? 失礼しま……龍田さん!」」

龍田さんが少しも仕方ないって思つて無さそうに立ち上がろうとした時に執務室の扉が開いた。

大きな声を上げたのは大淀さんだった。

……大淀さんが驚くのも無理はない。客観的に見ると、倒れた俺を龍田さんが押さえつけてるんだもん。しかも提督がガン見してる。……提督が変態だつてことが分かるな?

「気にしないで」

龍田さんが立ち上がつてほんわかと言うが……。

「無理ですよ……」

だろうね。

龍田さんに手を差し伸べられて立ち上がる。

「スチュワートちゃん、ごめんね〜?」

「こちらこそ済みません……あつ、大淀さんは提督に何か用があるんでしよう? 私達
のことは気にせずどうぞ〜?」

「だから無理ですよ……」

「龍田さん、さつき提督が言った秘密、聞きた「Hey提督うー! 遊びに来たネー!」
チツ……」

「なんだよ! 折角ここまでやった龍田さんに秘密を教えようと思ったのに!

「丁度いい。大淀と金剛も聞いてくれ」

「? ……はい」

「What? ウン……」

「スチュワート、まずはこの三人だけにでも話してみたらどうだ? 勿論無理には言
わないが……」

「いいえ、やります」

龍田さんにだけ教えるつもりが三人に増えたのは想定外だったけど……こうなりや
ヤケだよ! 良いぜ! 教えてやんよお! 覚悟しな!

なんて思ってたけど……めっちゃウキウキしてる龍田さん見るとヤケクソの覚悟が

挫けそうになるう……。

「ええと、あまり気分の良い話では無いんですが……」

そんな言葉から始まり、様々な予防線を張つてる間に椅子を準備して鍵をかけ、全員が座る。

「佐世保鎮守府はちよつと前までとんでもないことになってた時期があつたんです」

「……」

提督は心配そうに三人を見る。俺のクソ雑魚コミユ力から放たれる怪文書めいた事件の顛末にアレコレ補足してくれたのは本当にありがたい。

金剛さんは俯いてるから表情が読めないし、龍田さんは俺と視線が合いそうになるとフィツと逸らすようになった。嫌われてる人、苛められてる人がされるような反応で付くなあ……。

「……」

そんな中、なんで大淀さんは目を逸らさないんだろう？

ジツと俺と目を合わせていた大淀さんが口を開く。

「成る程……佐世保の大淀わたしがスチュワートさんにたいして良い印象を持つてるのはそういうことだったんですか。納得しました」

「えっ、あち佐世保らの大淀さんは何て言っていました？」

「何故か人一倍負い目を感じてるからフォローしてあげて、と」

「……」

「でも……私自身はなんて言ったら良いか分からないんです」

「いつ……いいえい！ いざ話してみたら案外スッキリしましたよ！ ありがとうございます！
います！」

暗くなつた大淀さんを励ますようにお礼を言う。……言いたくないことを言うのに
気を遣つて、それが原因で落ち込んだから気を遣つて……疲れるなあ!? でも、スツキ
リしたのは本当。ちよつとだけど肩の荷が降りた感が凄い。

「私もこのことは知っていたが、内容が内容だけにスチュワート自身が話すことだと
思っているから自分からは話せなかった」

そう言つた提督の隣では、顔を俯かせていた金剛さんが震えて……

「その提督はとんでもないロクデナシデース！ 解体を迫つて言うこと聞かせるなん
て、酷いことされても文句は言えませーん！」

爆発した。

「お、落ち着いて……」

怒り狂う金剛さんを宥めるのに五分以上掛かった。

「……もう良いかしら〜」

そう俺を見る龍田さんの目には同情や怒りなどの感情が籠っていなかった。ゆつたりとした動作で椅子から立ち上がる。

「スチュワートちゃんがそんな子とは思わなかったわ〜」

友好的な感情の消えた目で路傍の石を見るように見られて、季節外れの薄ら寒さを背中を感じた。

「提督と金剛さんは同情してるみたいだけど、こんな話聞いたらもうスチュワートちゃんのこととはとてもじゃないけど信じられないわ〜」

「ツ〜」

やっぱりか……そりゃあ警戒するよな……。

「龍田、何もそこまで言うこと無いでシヨウ!？」

金剛さんが反応して立ち上がるが……

「提督は今まで考えなかったの？ 自分も気に触るようなことしたら殺されるかもつて」

「ツー… それは……」

提督もコレだからなあ……知ってたよ？

初期の頃は結構ビクビクしてたじゃん。……だからチラチラ見てくるの止めろ。そういうことするから俺でも簡単に分かっちゃうんだよ。

「あるんでしょう？　いくら他人が信じてたとしても、自分で判断しなきゃ信じられないところはあるものね。私い、実は深海棲艦かもって子の言うことなんて怖くて聞けないわ」

龍田さんの言葉は……ごもつともだよ……。

覚悟はしてたんだけどなあ……やっぱ面と向かって言われるのは……くるな……。

脂汗をダラダラ掻いてる不快感で倒れてしまいそうだった。誰も居ない所に逃げてしまいたい。

「「……」」

「……そうです！　大本営から今回の作戦の目標ターゲットの情報が届いたんです！」

場の雰囲気を変えようとした大淀さんの言葉が、静かな執務室に響いた。

残念だけどここの雰囲気は変わらないだろう。

「……ほら、お仕事ですよ提督？」

「ああ……」

ダメだ。提督のやる気が死んどる。

曲線、時々破線

今回の作戦の目標。ターゲット

大本営の優秀な偵察班が苦勞して手に入れてくれたらしいその情報を忘れないように頭の中で復唱しながら、金剛さんと一緒に物資と妖精さんを運搬していた。

目的地は例の島。金剛さんには戦艦のパワーで大量の荷物を持ってもらっている。俺も多少は持つてるけど、役割としては金剛さんの護衛に近い。

「うー……資材の消費が激しいから気軽に攻撃出来ないってことは理解出来るけど、だからってこんな扱荷物持ちいはあんまりデース！」

金剛さんは意識してるんだろう、俺が明るくなるように暗くない話題を出してくれている。

今の俺は完全に鬱な感じだからとてもありがたい。流石は頼れる戦艦四姉妹の長女だけある。

「……まあ、頼られてるってことで良いじゃないですか。それに確か今日が大鳳さんで、明日は伊勢さん、金剛さんは明後日じゃありませんでしたっけ？」

「That's right! 佐世保の提督は粋な計らいをするデース！」

金剛さんが言う粹な計らいとは佐世保から連日のように申し込まれる演習のことで、ソレの何処が粹な計らいかと言うと、消費した資材は全て佐世保が負担してくれるってこと。

そしてもう一つは、演習終わると荷物にヒツソリと資材を混ぜてくれること。

「こうなったら心行くまで全弾発射するネー！」

おいやめろ　って言いたくなるけど、これがまさか田代前提督の指示だとは思わなかった。

目の前で意気揚々と宣言する金剛さんを始め、資材の消費が激しくてなかなか出撃させられない空母や戦艦、重巡に心置きなく撃たせることによるストレス解消、先輩の同じ艦種による的確な指導、そして渡されるプレゼント……至れり尽くせりとはまさにこのこと。

提督達の間で何があつたかは分からないけど、ウチとしては大助かりだ。

これから本格的に準備やら何やらが始まるであろう作戦では資材をケチっては居られない。戦艦や空母の人達がヒイヒイ言つて動けなくなるくらい酷使しないといけない。

そんなときに資材が無いでは話にならないし、戦艦たちが「戦えません」でも同じことが言える。

「ついでにまだ見ぬ同型艦達も見ておきたいネ！」

……こうした交流も大事だしね。

「来タカ……」

「おはようございます」

例の島に到着すると港湾棲姫がポツンと座っていた。デカい艦装は伊勢警備府さんに差し押さえ持ち帰られ、錯覚に過ぎないんだろうけど凄く寒そうで小さく……弱弱しく見える。

「今日はいくつか用事があつて来ました。まずは昨日の約束で……この島の改造、それをやってくれる妖精さんを連れてきました」

金剛さんの艦装の小さなハッチ？ を開けて妖精さんが出てくる。

寝ている北方棲姫の周りのたこ焼きが妖精さんに向かって吠え始めた。……大型犬みたいだな。

「そしてソレ改造に使う資材と……朝食です」

「!!」

朝食を荷物から取り出した瞬間、北方棲姫が飛び起きて寄つて来た。

「イイニオイダ！ 速ク寄越セ！」

さつきまで寝てたのに偉そうな……まあ、手が掛かって面倒でクソ生意気で、それでも可愛いのが子供ってヤツで……まあ、近所のおじちゃんみたいな感じで朝食を渡せばいいだろう。

「はいはい。ほら、飴ちゃんもつけてあげよう……港湾棲姫さんもどうぞ」

「済マナイ……アリガトウ」

二人の朝食は普通の弁当箱に入った普通の弁当だ。問題は北方棲姫はドラ○もんハ
ンドでどうやって箸を持つかだな。個人的にも興味がある。

って持ち方ア！ 握るのか……らしいと言えらしいけどさあ……。

「……」

港湾棲姫も固まってるし……って北方棲姫の方じゃなくて配られた弁当を凝視して
……あっそうか。港湾棲姫は爪がデカくて箸が持てないのか。

スポッ

「!?!」

その爪着脱可能だったの!?

「ハム……美味イナ」

普通に食べ始めたし……。

「……食べながらで良いので、質問に答えてくれませんか？」

「ム……知ツテル範圍ナラ」

十分だ。

「空母水鬼と飛行場姫について知ってることを教えてください」

「アア、良イダロウ……」

時間が過ぎていく。

やることはやった筈だから、金剛さんと共に警備府に戻っている。

「金剛さん」

「What? 何かありましたか?」

「どうして、あんな話されたのに接し方が変わらないんですか?」

北方棲姫と港湾棲姫に敵意、そして艦装が無いって言っても多少なりとも警戒はするだろう。

なのに俺は普通に接していた。過去の話をされたんなら、「やっぱり繋がってるんじゃないか?」って多少は疑うところだと思っただけだ。

「では question! スチュワートは私たちが私たちの提督に危害を加えます

カー？」

そんなの決まつてる。

「二度と御免です」

「なら問題 nothing ねー！」

得意顔をこつちに向けてくる金剛さんが眩しい。問題ないって言い切る理由がさっぱり分からないけど、否定されなかつた。それだけで心が軽くなる。

「それに……温泉旅行の事を覚えてますか？」

「ええ」

「私と祥鳳は、酔った提督からスチユワート「貴女は大変だろうから、信じてあげて欲しい」ってお

願いされたんデース」

「そんなことが……」

つまり、提督に宜しくされたから信じてやるって感じなのね。オーケーオーケー。

「別に提督からお願いされたからってだけじゃないヨ」

そんな考えが顔に出てたんだろうか、金剛さんにそう言われてしまった。

「万が一提督に危害を加える様なら私たちが駆逐艦一隻程度、簡単に止めて見せる！」
似非外人みたいな語尾も無く、真剣な表情で拳を握って宣言する金剛さん。

本当に……艦娘って強いなあ。金剛さんカッコイイなあ……。

「じゃあ、その……方が一の時はお願いします」

「デースー！」

台無しだよ！　そこは「任せて！」　って言って欲しかったなあ……。

「それはそうと、あの二人の事を知ってたみたいなのにどうして今回の operation 作戦 target 目標のことはあの二人に訊いたんデスカー？」

金剛さんから質問が飛んでくる。

まあ、不思議に思うよな？　港湾棲姫と北方棲姫を知ってて空母水鬼と飛行場姫を知らないなんてちよつと不自然だよね。

「空母水鬼と飛行場姫……ええ、知っていますよ。名前だけは」

『艦これ』に出てくるキャラクターとして名前は知ってるし、見た目も……多分一致する。

駆逐棲姫を始めにちよつと詳しく知ってたのは気になって調べた奴で……。

「成る程ネ。つまりどんなのは知ってるケド、何をしてくるかは分からない、でOK？」

「OK。」

鬼級、そして姫級を同時に相手をするのは弱小の警備府ではとてもじゃないけど勤まらないと思う。実際、大淀さんから伝えられた時に提督も、直感的に敵の強さを感じた

のか頭を抱えていた。

「でも、あの話は信じていいと思いますか？」

金剛さんに質問する。先程の話の中で港湾棲姫から一つの申し出があったからだ。

『私達ノ艦装ヲ返シテ貫エタラ、空母水鬼ハ私達ガ抑エヨウ』

この提案は非常に魅力的だ。何せ本当に抑えてくれるならボスが半分になるようなもの。

どうしてそんな事をするのかと聴くと、二人は深海棲艦から追われていたらしい。

そして、追いかけていた一味を率いていたのが空母水鬼だったらしい。深海棲艦って言っても、レ級みたいにならぬ差別なヤツも居れば二人みたいに穏健派も居る……意外と一枚岩じゃないってことか？

まあ、この話が仮に嘘だった場合、強敵が半分になるところか倍になるんだけど……どう思う？

「サア？ 信じるだけならいくらでも出来マスから。それに……困った時は、頼れる提督にお任せヨ！」

やだ……意外と適当……。

緊張感

「——つて感じですよ」

「簡単な説明ありがとう。最後の言葉は気になるけど一回置いといて……」

警備府に戻ってきて執務室。

朝食後の話から龍田さんは戻ってきていないそうで、代わりに大淀さんが秘書艦の椅子に座っていた。どうやらこの後は金剛さんとチェンジするらしい。選り取り見取りだな提督？

……つとまずいまずい。意識を現実に戻す。

「——島のことだが、一応妖精さんと話をした結果見積もられた量の資材は持たせたつもりだったが」

「……それなら大丈夫でしょう。妖精さんは建造、建築のプロですから」

何せ無機物資材から人体錬成出来るような超次元生命体だ。小さな島の地下に空洞を作ってから居住できるようにするくらい朝飯前だろう。

万が一資材が足りなくなっても、あの島にはまだ資材の素が落ちてる。

「あ、そう言えば……北方棲姫からの要望で、あの島を『ナラスカ島』と呼んで欲しいと」

「うくん……勝手に名前を付けるのはちよつとねえ……警備府でだけ伝わるように周知させればセーフだと思ukai?」

「まあ……勝手にそう呼ぶくらいなら誰も怒らないんじゃないですか?」

最悪の場合「へえっ!? 知りませんでした!」って感じで良いんじゃないかな? 分かりやすくなるんだったら何だっけいいと思う。

ナラスカ島……鳴らすか? 慣らすか? アラスカ? ……駄目だ名前の由来がさっぱり分かんねえ。適当に決めたんだろう。

「次に港湾棲姫の提案だけど……受けようと思う」

「えっ」

提督コイツ正気か? 産婦人科に行って出生からやり直した方が良いんじゃないの?

「えっ……駄目なの?」

素ボロ、出てんぞ。

「いえそんなことは……ですが、あんまり深海棲艦の言うことを聞いてると距離が近いつて疑われますよ? ただでさえ怪しいって言われるのがここに居るのに」

提督が寝返った! そんな噂が流れ始めたら真っ先に疑われるのが俺なんだからな!
「提督が裏切る筈が無い!」「やっぱり深海棲艦のスパイだ!」提督を誑にあんなことやこんなことをかしたんだ

！」ってな!？」

「……うくん、そうだ！ 北方棲姫は警備府ウチの監視下に置いておいて、港湾棲姫に対処させよう！ 空母水鬼だから……瑞鶴辺りに協力兼、監視を頼めば何とかなるんじゃないかな？」

ワーオ。北方棲姫を人質にとると……

「……その条件をのんでくれたらいいですね」

多分のものでくれるとは思うけど……八対二8:2つとところか？

抑えるって言った手前やるけど、それとは別に北方棲姫を人質に取るのは許さんって感じになりそうなんだよなあ……もしそうなたらヤバボスいことが増えるになるが、そこは事前の交渉次第になりそうだなあ……。頑張れ提督。俺はそんな交渉はパスだ。

「最後に飛行場姫についてだね」

そう言った提督は、大本営で飛行場姫について結構多くのことを学んでいたらしく、口から出て来た言葉も港湾成果から聴いた話と大差ない物だった。

内容は名前の通り飛行場。つまり船ですらないとのこと。

港湾とか飛行場とかさあ……もう深海棲『艦』じゃないよね？

「やっぱり言葉だけだとイメージし辛いよね？ 百聞は一見に如かずって言うし……」

あつ、嫌な予感。

「ちよつと偵察、行つてみない？ 行つてきて」

急いで執務室から出ようとした俺の背中に声が掛かる。

ピクニツクじゃねーんだぞ?! そんな軽い気持ちで言うことじゃないと思うんだけど!?

「……………という訳です」

「[[……………]]」

あまりにも適当だったから流石に納得できなくて提督に質問した。

すると、龍田さんが話を広めてる可能性があるらしくて提督も結構余裕が無いらしいことが分かった。話の種出所である俺がハワイまで偵察に行つてる間に、警備府を纏めておく大仕事があるっていう割とまともな理由が出て来た。

だからと言つて「危険だと思つたら直ぐに撤退して良いから、取り敢えず行つてきて」なんて言われて、警備府から追い出されるように艦隊に捻じ込まれた俺と……

一緒に向かうのは摩耶様、叢雲、曙、満潮、荒潮と、まるで俺に対して監視してますっ

て言ってるような面子。

提督が何の理由もなくこんな嫌がらせ染みた人選をするとは思えないから、龍田さん辺りに対する疑ってますよってアピールみたいな感じの理由があるんだろう。

「ねえ、龍田さんから聞いた話って本当？」

違った。

これ包囲網ってヤツだ。

既に話広がつてんじやんやべエヤべエ……

「何ぞこの怪しい者め！ 成敗致す！」なんて闇討ちされないよね？

……そんなことは置いといて、だ。

広まっちゃったものはもう手に負えないだろうし、全員知ってるって考えた方が良いでしょうね？ 限られた空間の中ではどんな秘密であれ一度話題に出たら公然の秘密になるって言うし。

「ええ、本当ですよ……失望しましたか？」

だからそう、変に隠そうとしないで堂々と言っちゃえば良いんだ。

「失望って言うか……本当にアツサリ認めるのね。龍田さんと一緒に私たちを揶揄ってるって言われた方がまだ信じられるんだけど」

ところがどっこい！ ノンフィクションなんスよコレ。

よく言われるじゃん？ 事實は小説より奇なりつて。

「仮にそれが事實だったとしてスチュワート、あんたはどうするつもりだ？」

「どうするも何も……何もしませんよ」

何か出来るとも思えないし。

「ほう？」

腕組みした摩耶様怖い……。

「どこまで話を聴いてるかは分かりませんが……殺っちゃったやらかした結果、大本營にお世話まっされて今ここに居るんですし……」

「そういうことは相談しなさいよ！ この馬鹿！」

はい分かりました！ ……なんて言おうとしたけど、流星に空気読めてないから止めた。

叢雲といい摩耶様といい……なんか反応が薄いように感じる。俺の緊張感の無さも原因なのかもしれない。

「……あんまり大きな声出すから、敵に見つかったみたいね？」

「あつ……ごめんなさい」

……因みに今は警備府を出てから四日目だ。

会話の始まりは「どうしてこの面子なのか」を満潮が気にしたからで、会話が終わったのは荒潮が進行方向に深海棲艦を発見したから。

気のせいとかじゃなく、間違いなく深海棲艦との遭遇が増えた。目的地に近付いたって証拠だろうな。

「駄目そんな時だけ発砲しろよ、一気に突破するぞ、付いて来な！」

まあ、こうやって逃げるように行動して交戦は控える。ちよつと見てくるだけの偵察をするならこれで良いんだ。

「……撒いた？」

「そうみたいだな。ふう、全く、数が多くて嫌になるね」

満潮と摩耶様の声を聞いて、一行の間に張り詰めていた緊張感が消える。

今の場所はどこかな？ ……おっ？ 近くにハワイあんじゃん！

「アレが目的地のハワイですね」

「へえ。アレが……」

「……ん？ ハワイ……？」

「あつ」

正気じゃないね

けたたましいサイレンの音が聞こえてから程なくして、水平線が黒く染まり始めた。間違いなく数えるのも馬鹿らしくなる程の深海棲艦の軍勢だろう。

「うげえ……」

ただでさえハワイに近くなったら深海棲艦の数が増えたというのに、その比ではない数の深海棲艦を見て摩耶様が嫌そうに顔を歪めた。

「完全に気付かれてるわよね……?」

叢雲も半分くらいビビりながら訊いてくる。

そりやあもう、言うまでもないだろう。

「撤退しますか?」

「ああん? 馬鹿言うな。飛行場姫とやらの面^{ツツ}拜むまでは帰れねえだろうが」

「……だ、そうですよ」

摩耶様から実に漢らしい言葉を貰ったから、諦めろと言いつけさせるように叢雲に言葉をかけて他の面子を見る。

自然体のまま腕をプラプラさせる曙、精神を統一するかのような深呼吸をする満潮が

見えた。口元に手を当てて薄っすらと顔を赤らめている荒潮はスルーだ。

「ハア……バカなんじゃないの？ 深海棲艦の大群に突っ込むなんて正気じゃないわよ」

俺も流石におかしいとは思うけど、あんまり言っただけでやるなよ。

血の気が多いような面子だし、四日もまともに戦闘が無かったから不完全燃焼なんでしょ。

「まあ、偵察が目的ですし……摩耶様の言う通り飛行場姫の顔だけでも見てから帰りましょう」

「……アンタも馬鹿みたいね」

無理そうなら帰るって事前に周知してた筈なんだけども……

でも、摩耶様なら引き際も間違えないだろう。だから俺も魚雷をポンポン撃ちたい！

「私はいつだって馬鹿ですよ？ それより……付いてこないならここで食べられちゃいますよ？」

「……分かったわよ！」

分かってくれたようで何より。

意気込んで夥しい数の深海棲艦に突っ込んだは良いものの結局やることは変わらず、

適当にボコって怯ませて逃げるだけ。

全員が孤立しないように固まって移動しているが、他の人達の活躍ぶりが凄い。

特に先頭に居る摩耶様と荒潮が顕著で、沢山寄ってくる駆逐イロハ級を近寄せない。

……そんな雑魚モンスみたいに軽く追い払わないで？ 俺の攻撃力が足りないから
そう思うだけ？

最後尾の叢雲と満潮は後方と側面からくる追い抜いたヤツが後ろから突進してきた
時に牽制や妨害をする役割。

一匹でも処理を怠ったら全員纏めて吹き飛ばされるっていうプレッシャーの中、撃ち
漏らしが無い射撃精度には舌を巻く。

中央……俺の隣に居る曙は所謂補欠で、飛行場姫の発見の為に攻撃をしていないが、
誰かが疲れた時や何かあった時に交代する役割があるからそのまま温存させていき
たい。

残った俺はと言うと……こういった役割分担や陣形？ の形成を殆ど言葉を発する
ことなくやってのけた五人は流石、大戦時代の知識とかいろいろ持つてるんだなあ
なんて呑気な感想を持っていた。

そんな高度なやり取りは出来なかつたので、適当に飛行場姫が飛ばしてくるであらう

艦載機に備えている。

だからと言って何もしい訳にならないから、少しずつ進路が変わったりしたからその矯正とか、味方に当たらないように牽制の射撃をしてみたりした。

……深海棲艦の群れに突っ込んでからのくらしい経っただろうか？

隣に居た曙が満潮になって、俺が摩耶様と代わって、隣に居た荒潮が摩耶様になったから……？ ええい、集中してたから時間の感覚なんて無い。

まだ飛行場姫の元に辿り着かないのか!?

そんな具合で俺の我慢が限界になってきた頃、疲れるどころか不思議と体が軽くなつたような気がしてきた。

「ん、あれ？」

今も、駆逐口級の動きが若干遅く感じる。

が、それだけではない。魚雷を投げようとしてる俺の腕の動きも遅い……？

さっきまでは「疲れた」とか「まだかまだか」ってしか考えられなかったのに、どうして今はこんなに余裕があるんだろう？ 謎だ。

「スチュワート、どうしたあ!？」

何かを感じ取ったのか、摩耶様が呼びかけてくるのは分かったけどそこまで離れてないのにやけに聴き取り辛い。水飛沫とか銃声を考慮しても絶対に音量が小さい。良く聞こえない。

「ああ……」

これはアレだ。一種のトランス状態？ つてヤツ？

自分の視界の形をした窓から目の前の風景を見てるような……一歩引いた視点から、落ち着いて状況判断出来るというか……

魚雷が鼻っ先？ に当たった口級が怯むが、沈んでくれないと邪魔で進めない。

あとは目の辺りに三発くらい弾をくれてやれば良いんじゃないかな？

「バーン………つてね」

予想通り、三発撃ち込んだら口級から力が抜けた。

恐らく死体になった口級が横に倒れたから、そのままどかすようにもつと力を加えて進路を作る。

あく……これ絶対疲れと緊張のせいでアドレナリンがヤバい感じにキマっちゃってるヤツだ。口級を押し除けるとかどう考えても普通じゃない。

摩耶様に向かつていくイ級二体に牽制の射撃を、もう片方には魚雷を発射しておいたが、いつまでも残弾が減ってきたからそろそろ飛行場姫に辿り着かないと拙い。

「いつまでもこんなところに居られません！ 突き抜けますよー！」

適当な前方に焼夷手榴弾を投げる。恐らくこんなに沢山居るなら不発にはならず何かに当たってくれるだろう。

あとは投げた方向に居た駆逐イ級の顔面に両手で持てる分だけの魚雷をブチ込んで、速攻で沈めた。

すると視界が開けた、

「……ワオー」

遂に乗り越えたかと思つたがどうやら違ったみたいで、深海棲艦の外皮だか甲殻だか分からない破片が燃えて浮かんでいて、その破片がある場所を深海棲艦が避けた感じらしい。

「深海棲艦は火に弱い……？」

まあ、軍艦だろうが燃えたら爆発するし、生物なら火を恐れるのは道理か？ 悪霊の類ならどうかは分かんないけど、実際に火を避けてるのは間違いない。

——バンバン

「ええい！ 考え事してる時に無粋な奴らめ」

近寄りたくないからって撃つてくるのは違うでしょ……雑魚的扱いされたんだからさ、大人しく攻撃方法は嘯みつきと突進だけにして欲しいね。まあ、当たっても痛いだけだし、嘯みつき即死攻撃に比べたら全然マシだ。

「っ！ 見えた！」

「本当か!? でかした曙！」

後ろの方から、そんな言葉が聞こえてきた。と同時に謎のトランス状態が解けて視界と感覚が元に戻った。クツツソ疲れてるから今すぐ倒れたいが、どうやら曙が飛行場姫を見つけたらしいからしつかり見届けないと怒鳴られてしまう。それにここは寝るには深海棲艦危険が多過ぎる。

振り返って曙が指さした方向を見ると、かなり離れてるが確かに、白くて目立つ色合いの深海棲艦が……

「つて陸上に居る……」

本当に深海棲艦かあ？ アレじゃあまともに魚雷当てられる気しないんだけど……。ドッジボールの天才だったら話は違うと思うけど。

なんて考えていたら、またしてもサイレンが……さつきよりも近い分五月蠅さも倍増

していた。

そして、今までは単なる前哨戦だと言わんばかりに艦載機が飛んできた。

佐世保に演習しに行つた時に回収した高角砲を久しぶりに使つたけど、錆び付いてなくて良かった。

案外撃ち落とせるじゃん。

「よし、戻るぞー！」

飛行場姫の顔が見れたからか、摩耶様もご満悦だ。

撤退の号令を受けて、全員が方向転換する。

「絶対に振り返らないでくださいー！」

スタングレネード スモーグレネード
黄色の缶と紫の缶をそれぞれ投げる。

久しぶりに投げたそれらも劣化してるなんてことはなくて、大きな音を響かせてくれた。

ヤバめな攻撃をしたと勘違いしたのか、俺たちの方に目もくれず、飛行場姫の方にそれなりの数の深海棲艦が向かつていったのは嬉しい誤算だった。

そこからは、来た時と同じ……ではなく、俺の放つた得体のしれない攻撃を警戒したのか、積極的に攻撃して来なかつたお陰で撃たれたりはしたものの、駆逐イロハ級のアニメ張りのクソエイムに助けられて、誰も大破にならずに切り抜けられた。

行きに四日掛かったということは、帰りにも当然同じくらいの時間が掛かるという訳で……

キュルルル……

「……………」

飛行場姫を見て、ハワイから引き返すこと三日目。

俺たちは空腹に苦しんでいた。

荷物になるからと途中に寄った島に缶詰を置いておいたのだが、昨日立ち寄った二か所の島で何者かに缶詰が盗られていたのが原因^{誤算}で、二日間何も食べていない。

一刻も早く警備府に帰って間宮さんの料理を沢山食べたいというのは、最早六人全員の共通認識だった。

二日程度なら佐世保で経験済みだわくなんて余裕ぶっていた俺だが、あの時とは違って今回はジツとしていないから普通に腹が減った。

そして分かり切ったことだが、空腹によつて一種の極限状態まで追い込まれつつある者は常識や人間性をゴリゴリ削られていって、とんでもない手段を取ったりするのは歴

史が証明している。

つまりなんだ……「あと一日で着く」とゴールを見てしまったが故にあと一日が耐えられなくなったのは俺だけではなかったというだけだ。

「……………」

全員が無言だ。

俺の音響手榴弾を海中にブツ込んで魚を殺し、摩耶様の魚雷から火薬を取り出しては、来るときに置いておいた木材を燃やし、艦装の中に居た妖精さんに精密ドライバーを借りては砲のカバーを外して海水を沸かした。

馬鹿正直に釣りなんて言葉を出した叢雲は口を開けたまま固まってたけど、俺はそんな良い子ちゃんじゃないんでね。どうせこの世界だったら海で爆発があってもニュースにはならないだろうし。

文明的なんだかよく分からない粗末な焼き魚を提供する。多分鯖だから食える筈だ。……洗う用の真水なんて無いから絶対に腹壊しそうだけど「それでも！」って頼まれたし……。

艦娘が頑丈なことを祈ろう。一応内蔵は取ったし火も通ってるから寄生虫の類は無いだろう。やっぱり貧しくて余裕がなくなるとまともじゃいられないってことか……。……「……………」これからは作戦で遠方に行く場合は、補給地点を設営することを検討するように

提督に言っておきます」

全員が激しく頷いた。

佐世保くらい余裕があるなら、補給艦を複数の艦隊で護衛しながら進むなんてことも出来そうだが、ウチには居ないからなあ。

提督が補給艦……神威と速吸だったっけ？ その二人を建造してくれることを切に願うばかりだ。

未知との遭遇

「? ……?」

俺は困惑していた。原因は目の前の艦娘。

今まで見たことがないから間違いない新人なんだろうけど……佐世保で見た鈴谷さん、夕張さん、木曾さん、五十鈴さん、長月、山風、夕雲、その誰とも当てはまらない鮮やかな緑色の髪をしたこの人は一体……

時は遡ること二日前。

やつとの思いで警備府に辿り着いた俺たちは、空腹のあまり痛む腹を押さえるのを堪えながら提督に報告に行き「明日聴くから、ご飯を食べて休め」という嬉しい指示を貰って、遅い時間にも関わらず食堂に残っていた間宮さんにこれでもかと料理迷惑を頼かけたんだ。

次の日は摩耶様と一緒に報告をしに行つて、感想を聞かれた俺は艦載機がヤバめだから主力を惜しげもなく向かわせるように進言。摩耶様は、飛行場姫には魚雷が通用しない可能性があることを言った。

すると提督はノートに書き込みを始めて思考の海に沈んでいった。

何とも提督らしくなっちゃって……と、近所のおぼちやんみたいな感想を抱いてたら俺たちの存在を思い出した提督に「戻っていい」とだけ言われて自由になった。

暇になったから警備府をうろついていたら、やっぱり話は広がっていたのか俺に話しかけてくる人は一部を除いて殆ど居なくなつたことに気が付いて、すぐに部屋に引きこもつて枕を濡らして一日を潰した。

そして今日、一緒に飛行場姫の面を^{ツラ}押んできたカチコミ仲間と共に朝食を摂つていた。

主な話題はやはり俺のことで、叢雲と曙からの「本当？」っていう追及で心が痛くなつたが、摩耶様からの「深海棲艦をブツ飛ばしてあたしらを攻撃しない深海棲艦は居ねえ！」っていう言葉で全部すつ飛んで行った。

「舎弟にしてください！」

そう言つたら拳骨されて、さらにエッグトーストに砂糖をかけられたが「ほら食えよ」と悪戯つぽく笑う摩耶様も、砂糖の上から唐辛子で味を塗り替えた俺の行動には引かざるを得なかつたらしい。

「へへッ、焼きそばパンでも買つてきましようか？　10円だけ渡してくれば十分ですア！」

そう冗談を言つたらまた拳骨された。普通に痛かつた。

そして俺のことを意外にも疑つていなかったのが満潮と荒潮だったことは驚いた。

荒潮は考えが読めないからしようがないにしても、満潮は佐世保でも警備府でもツンツンしてたから正直嫌われてるかと思つてたけど……

「だつて佐世保の私はアンタを……」

「え、何て？」

「ッ！　何でもないわよ！」

「あらあく、素直じゃないわね〜♪」

佐世保でも満潮はツンツンしたような気がするが、俺……というか駆逐艦スチュワートは一体駆逐艦満潮に何をやったんだか。沈めたとかは気ままずくなりそうだからちよつとやめて欲しいなあ……。

その後、俺の投擲物を見ていないか軽く探りを入れ、誰も見ていないことに安堵して、いつまでも俺のことばかりだとつまらないだろうと叢雲の角？　とかを揶揄つていた頃、提督がやって来て俺たちが居なかつた十日近くの間に建造された艦の紹介を始め

た。

そして今に至る。

俺たちの前に居るのは人数が合わないが、今日も佐世保に演習に行っているらしい。

手元には合計十人の名前が書かれている名簿があり、目を通すと一番上に「榛名」と見える。金剛さんが上機嫌だった理由が分かったな。

そう思っている間に自己紹介が進み、最後に出て来たのがこの緑の艦娘。

「私は松！ よろしくお願ひします、先輩方！」

……誰？

「提督、この人は一体……？」

俺が知ってる『艦これ』にこんな人は出てきたっけ？ 佐世保でも見たこと無いし

……

「ああ、極最近になって妖精さんが設計図の復元に成功したらしい」

「なるほど？」

つまり、今まで未実装だった艦娘つてことでオーケー？

……となると、今後実装されていくであろうボスとか艦娘の情報を知らない俺は知識的なアドバンテージを失っていくつてことで。

元から軍艦だった記憶なんて砂粒程度しか持ち合わせてない俺は協調性に欠ける節がある。それに最近では警備府内に不和を齎した疫病神だ。このままだとただの役立たずに成り下がってしまう。

「それだけは嫌だなあ……」

「何か言ったかい？」

「いいえ!? 何にも」

まずは、近いうちに始まる作戦で有用だ使えるということを証明していかないといけない。そうすればきつと、誤解も解ける筈だから……。

「貴女がスチュワートさん？ 話は聞いているわ！ 大丈夫、護って見せるわ！」

「あつ……たつ、足りてますう……」

「……え？」

ヤベ。コミュ障発動した。

まずは艦娘と打ち解けないと駄目かあ……。

あまりの不甲斐なさに、再び部屋に引きこもって枕を濡らした。

陰鬱とし過ぎてて苔が生えてくる勢いだ。

「いよいよ作戦を始めようと思う」

ヒトハチマルマル。

演習が終わったばかりの私達を含めた全員を食堂に集めて提督が言葉を放つ。

「今回の作戦の目標はハワイを制圧した飛行場姫の撃破、同時に、ハワイの近くに出現した空母水鬼の撃破だ」

私は最近建造されたばかりだから知らなかったのだけれど、今はそれなりに大規模な作戦の準備期間だったということだったのね。

目標を聴いただけでは、今の警備府の現状から考えてとても厳しいものになると思うのだけれど……提督の指揮に期待しましょう。

「遂行するのは非常に難しい……が、最近捕虜として捕えていた港湾棲姫が協力を申し出た。そして私はそれを受けようと思う」

提督のその言葉は静かだった食堂に波紋を呼ぶには十分過ぎたみたいで、あちこちか

ら囁くような会話が聞こえてくる。

勿論私も驚いている。深海棲艦を撃破せずに捕虜とするのは珍しくも無いかもしれない。それでも、協力を申し出たからと言って簡単そうに承諾したような言い方には違和感があるわね。

「万が一に備えて北方棲姫を一時的に人質とすることを条件にした」

提督の言葉で更に騒めきが大きくなった。

深海棲艦を人質……これではまるで海賊だ。これではどちらが悪者か分からないじゃない。

「更に支援兼見張りとして瑞鶴を旗艦にする艦隊を付けるつもりだ。瑞鶴、頼めるか？」

「……はい」

む。

返事が遅い。三点減点。

でも、そんな大事な役目を任されるなんて……やるじゃない。

「よし！ 次に、先日偵察に行つた艦隊からの意見として、ハワイまでの道のりに中継地点の設営を計画した。深海棲艦に襲われて万が一振り出しに戻るなんてことがあると、今後の作戦に大きく響くから妥協はしない。艦隊は——」

私は主力として投入されるらしい。良い采配ね。

でも、華のある戦艦や空母の戦いよりもそれらが全力を出せるように整える仕事が一番大切だと思うから、やってみたくらいと思わないことも無かったのだけど。

それに補給地点の設営となると、必然的に敵主力とぶつかる直前までは最前線に居続けることになるから……ダメね。とても魅力的な役面白そうに思えて来たわ。

「……先日、我らが初期艦についてあまり良くない話が広まった」

そう……。

私も噂は聞いたことがあるのだけれど、初期艦……スチュワートは佐世保で提督を殺したのだとか。

どうやらそれは本当のことで、聞いた時はどうしてくれようかと思っただけど、それなら佐世保の艦娘達が、赤城さんが笑顔で彼女のことを語る筈が無いもの。

きつと以前の佐世保の提督が酷い人だったということでしょう。まあ、やったことはやったことで、簡単に許されて良い事では無いと思うけれど。

「話を聞いて、スチュワートを悪だ、敵の手先スパイだと言うのは結構だが、だからと言って本当に排斥しようとするのを私は良しとしない。無理に仲良くしろとは言わないが、敵対だけはしないで欲しい」

「榛名は、スチュワートを怒らせちゃダメデース！ 初期艦権限で休みが減らされるヨー！」

「ええっ!? そ、そうなんですかお姉様!」

「Yes! 彼女はso scarryネー!」

金剛さんが榛名さんと大袈裟に騒ぐなんて……警備府全体から嫌われてる訳じゃないのね。少しだけ安心したわ。

目の前の青い髪の子を見る。

艦隊が発表された時だけ真面目に話を聞いていて、今は自分のことを言われているのに我関せずと言わんばかりにスープに浮いてる油を箸でくつつけて遊んでいた。

……素でやってるのが演技なのかは分からないけれど、当の本人がコレじゃあ馬鹿らしくなってくるわね。……本当に赤城さんを追いつめたのかしら?

「最後に、私はみんなが出撃するまでの間にここで作戦を立てて、どれだけ作戦を遂行しやすく出来るか作戦を練るのが仕事で、その後は祈るしか出来ない只の人だ。だから……全員、無事に帰ってきてくれ」

あら、戦果を挙げるのではなく無事に帰れと言うのね。

少しだけ好感が持てるわ。

「提督はいつつもソレばかりですわねえ……」

恐らく独り言だったのでしよう。スチュワートが提督を舐めてるとしか思えない発言をする。

「……」

何故かしら？ 先程までの提督の話を台無しにされたような気がするわ。

「あ、加賀さん。食べます？」

視線が一瞬合い、空気を読まずに差し出されたのは間宮さんのアイスと……焼き鳥。チヨイスになかなか悪意と揶揄いを感じ取れるわ。

きつと本人としては軽い悪戯のつもりなんでしようけど……。

心の中で溜息を吐く。

いつの間にか、食堂全体が私達の方を向いているじゃない。

「……頭にきました」

「え？」

スチュワートに怒っているのではないわ。

視界の端で笑いを堪えてる瑞鶴。貴女によ。



〳 四日目

「さて、と……行きますかあ！」

「行きますかあ！　じゃねーだろ！　なんだよそれ!？」

あぁ、ン!?　文句あつかあ!?

偉ホそうモな妖精さんまで連れて完全武装の俺が背負ってるのはただの砲じゃない。見て分からののか!

「盾ですよ。盾」

「んなの見たら分かるってえ。真面目にやる気あんのか?」

「勿論」

大まじめだ。

隠そうともせずに盾コレを見せたことがその証拠だろう。一応今まで警備府では隠してたつもりなんだけど、まさか初めての作戦で使うことになるとは……。

これから始まる中継地点の設営には殺傷力も必要だろうから普通の艦装も持って行くとして、そのまま一度も警備府に戻らないで決戦のバトルフィールドに突撃するのなら、いかなる状況にも対応できるように様々な手札艦装を用意するのは当たり前だろう?

そう江風に熱弁しても「理解できねえ……」つて顔をするばかり。

「んなこと言われてもな。偵察に行つた限りだと強い敵やつこさんがわんさか居るつて訳じゃないんだろ〜？」

「スチュワートさんは強いつて佐世保の皆さんから聴いたのだけど……」

「出発の時間を調整すれば補給は出来るだろう？ 何がそこまで不安なんだ？」

「二つを同時に扱えるんですか？」

「うっ……」

江風、大鳳さん、那智さんから言葉を返される。俺が強いかどうかは置いておいて、偵察で見えてきた限りだと敵は大体がイロハザ級コだったし、那智さんの言う通り補給も予定に入ってる。

それに三日月の言う通りどつちかは使えないんだよ……俺の腕は二本だけだし二つを同時に、器用にに使うとしたら脳がオーバーヒートでおかしくなっちゃう！

「……艦装を二つも持つて行くつてことは、日中の分と夜戦の分つてことだよね!」

「「それは無い」」

「じゃあ……こつちですな」

砲を置いていくことに決めた。このまま欲張つて二つも持つて行つたところで毎晩後悔することになるつて直感が訴えてくるし、遅れて理性も警告してきたから。

それに、やっぱり妖精さん謹製の専用装備で活躍したいからねえ！ 男の子だもん。専用なんて単語には夢を持ってたいのよ。

最終目的地はハワイ。予定では五日目から六日目にかけて飛行場姫にアタックを仕掛けるらしい。それまでに中継地点設営班と名付けられた俺たちの艦隊がしなくてはいけないことは……

「まずは四日目までに偵察の時に寄った島まで移動、その後は輸送されてくる資材を守りつつハワイ近海にいる深海棲艦の数を減らすこと！」

OK？ といった感じで全員に顔を向ける。

若干一名は既にアイマスクまでして俺に引っ張られてるけど自他ともに認める夜のエキスパートだし、日中がポンコツでも夜の時間帯を強力にかバーしてくれるのはこういった時にメリツトに感じちやうから不思議なものだ。

今回の作戦をざっくり説明すると

二歩進んで一歩戻るのが輸送班。

一日に二回、二日間で合計四回出撃して目的の島に資材を運び、主力艦隊が全力を出せるようにするのが仕事で、今日の午前中担当の艦隊は既に出発している。恐らく島に

着いた頃に入れ違いになるだろう。

次に、二歩進んで立ち止まるのが俺たち設営班。

作戦終了まで警備府には戻らず、最前線で深海棲艦を狩るのが仕事だ。

偵察の時にハワイの前に立ち寄った島がゴールで、そこまで行ったら今度は運ばれてくる資材を深海棲艦から守りながら、ハワイ周辺の深海棲艦の大群を少しでも減らすのも仕事だ。

最後に主力艦隊。

明日から出発し、移動しながら明石さんを護衛して、他の班が用意した道を進んで全力で飛行場姫を叩くメンバー。

金剛さんに榛名さんに加賀さんに……普段なら過剰戦力な面子も、飛行場姫を相手にするならそんなことは無い……。資材は考えないものとする。

それらとは別に、港湾棲姫と一緒に空母水鬼を倒しに行く瑞鶴さん率いる別動隊がある。

「……まあ、今は午前の輸送班が通った後を通ってるからただ進むだけなんですけどね」
海の上には何も無いし、天気も眩し過ぎない程度に雲がかかってるし、眠くなる……。

「ZZZZ……」

でも川内さんは流石に 我が道 を 往 く 程 が あ る と 思 う。

「A mission complete! 後は宜しくネー!」

「お疲れ様です」

輸送班が通つた後にしては道中の深海棲艦がキレイに掃除されてると思つたら……なるほどね。そりやあ金剛さんが居るならイ級程度なら何匹居ようが鎧袖一触されるだろうよ。

島には資材が置かれている。駆逐艦四人と軽巡一人にしては随分多いな……これ多分、艦装を多少削つて資材にリソースつき込んだな？

そう考えながら川内さんと、持つて来ていた寝袋を地面に降ろす。

「昼頃ですし、取り敢えず休憩しましょう」

「応とも! ……つてそうは言つてられないねえ」

何かに気付いた江風がそう言つて、四人が振り返ると……

バン!

発砲音がして、遠くから発砲した深海棲艦の砲弾が、資材との直線状に立っていた那智さんに向かつて飛んできた。那智さんはソレを、

「フツ、甘い!」

手で弾いた……ヴオーツ！ カツケー！

ピシユーン

「痛ったあー！」

弾かれた弾は川内さんに当たったらしい。頭を押さえて飛び起きる川内さんだが……アイマスクが外れてないから全然大丈夫そうに見える。放っておこう。

こうして、俺たちの大型作戦は始まった。

「締まらねえ……」

「やっぱり数が増えてるよく！ スチュワートも攻撃に参加してくれないとちよ〜つと
敵しいかも！」

四日目の明け方。

まだまだ夜だと言うのに、川内さんが珍しく弱気な発言をする。その原因である深海棲艦の数はやっぱりハワイに近い場所まで来たからだろう。昨日とは比べ物にならない

いくらいに増えている。

今までは川内さんが一人でも十分に余裕があつたみたいだから俺は保険みたいな感じで資源を守つてただけど、そうも言つてられないみたいだな……。

「三日月……三日月……」

「すう……!? はいっ!? ……何ですか?」

「遅くに申し訳ありませんが、資材の見張りをお願い出来ませんか?」

「ええーつと……うん。大丈夫ですよ」

「じゃあ手早く準備をお願いしますね」

これでよし。めっちゃ眠そうな三日月には悪いけど無茶してもらうぜ。

「ちよっ! 危ない! スチュワートまだ?」

「今行きます!」

川内さんに再度呼ばれたから、三日月の準備が終わりそうになつたのを見て飛び出すように海に出る。

「せいっ!」

気合を入れて……カチリと探照灯を点ける。

「どうだ明るくなつたろう? ハハハぐえっ!」

横腹に衝撃を受けて蛙が潰れたような声が口から漏れる。今ので完全に飛び出た勢いが消された。いきなり撃つてくるなんて……敵キャラの面汚しよ。

『夜にコレを使うと、敵から狙われやすくなるのよ!』

警備府で探照灯を準備した時に、何故かドヤ顔でそう言ってきた暁の言う通りだ。

まさか点けた瞬間に撃たれるとは思わなかったけど。

盾を構えながら考える。

狙われやすくなるなら、盾を持つてる俺との相性は良いと思っただけ……敵が一方方向に固まっている訳じゃない。

「多くの方向を照らすなら、回すように探照灯で360°を照らす必要が有る?」

後は艦載機は飛んでないから極端に盾は上方向に構えなくて良いし魚雷は……イ、口級は撃つてこなかったし、八級と二級が居ないことを祈ろう。当たっても一発や二発なら耐えられるだろう。多分。

やることは決まった!

まずは俺を中心に円を描くように機雷を撒いていく。そして……

「ふう……ハッ!」

超信地旋回! 実際の軍艦では絶対に実現できない動きも人型の艦娘なら出来ちゃう! 気分はコンサート会場で首を振りまくるサーチライトだあ!

「眩しいか？ 眩しいかあ!？」

後は片手で盾を横にして構えて、もう片手に探照灯を持ってその場で回り続ける。

「ツッ！ 痛っ……うっ……ぐう……」

派手に周りを照らし過ぎたのか盾に伝わる衝撃は多く、同じくらい背中に背負ってる高角砲から受ける衝撃も多かった。ガードの甘い横腹にも何発か貫つたし、流石に被弾が多すぎる。

ヤバいと思った俺は回のを止めて、せめて攻撃を受ける方向を絞ろうと、早くも違和感が現れた艤装に無理をさせながら移動を開始した。

日が登り、予定通り大鳳さんが艦載機を飛ばしたことによってイロハ二級が海の藻屑になって、俺たちの夜戦が終わった。

這う這うの体で島に戻る。三日月が準備してくれていた寝袋に倒れこむ。

クツツツツ疲れた。具体的には寝袋を準備するのも面倒になるくらい。三日月の心配りがマジで有難い。

「凄い凄い！ みんなスチュワートに夢中だから攻撃し放題だったよ！」

どうやら俺は昨日の夜だけは深海棲艦に追いかけられるアイドルだったらしい。そ

ういうことは妹に言っただけよ……。俺はアイドルなんてしたくもないし、深海棲艦がフアンとかギャグかよ。

「またよろしくね！」

嘘やん。

直前のひと時

日中、一つ手前にある島から資材が輸送されてきた。

元から明るいことに加えて、大鳳さんが艦載機を飛ばす音と深海棲艦の鳴き声？ で俺と三日月はなかなか寝付けなかったが、そこに人が増えて話し声が追加されたらどうなるか？

答えは寝れない……なんてことはなく、輸送班が持つて来ていた物の中に遮光テントがあったこととお喋りなどを控えてくれたこともあって、俺と三日月はそんな気遣いに感動しつつ寝不足だった為まるで夜勤明けの労働者のように眠りについた。

昼過ぎに目が覚めた。

まだ寝てる三日月を起こさないよう静かにテントを出ると、能面のような顔で缶詰の空を潰しまくっている村雨さんが居た。艦娘の艦装パワーで潰された缶が煎餅みたいになってら……。

「時雨ちゃんか春雨、五月雨、海風が良かったのにどうして？ 嬉しいんだけど複雑……」

ボソッと呟かれた言葉から、先日の新人たちを思い浮かべると……ああ、なるほどね。

「確か涼風でしたっけ？ 災難？ ですね？」

「そう！ ……最近ちよつといいこと無いのよねえ」

甘い物が無いとやってられないわよ……なんて言う村雨さんに、以前した甘いものを奢る約束を作戦が終わったらやろうと伝えたら、本物の船が動きかねない量のカロリーを摂取するって言い始めた。

常人がやったら糖尿病RTAになりそうだけど……まさか艦娘はノーカンドとでも言うのか？

「閑話休題……それはさておきゴメン。やってみたかったんだよ」

「……」

「……予定通りだとこの島に艦隊が三つ、計十八人が居る筈ですよね？」

「そうね」

「そうなるのと既に此処は前線の拠点。誰かはちよつと離れた場所まで行って深海棲艦を倒してたりは……」

「それなら。龍田さーん！」

「はあっ!?!」

おまつ、龍田さん呼ぶなよお！ どんな顔して合えば良いのか分かんねえんだよお！

「え？ ……あつ」

今更気が付いたか！ だがもう既に時間切れだよ目が合ったもん。

ええいままよ！ ……龍田さんチーツス！ 高校で鍛えられた舎弟ムーブを見せてやるよオラア！

「どんな神経してたら私に話しかけて来られるのかしら？ 一回ここで解剖かいたいしてみようかしら？」

……すっげえピリピリしてらっしやる。

「……瑞鶴さん達が港湾棲姫と一緒に空母水鬼を撃破したそうよ」

「それは良い事なのでは？ どうしてそんなピリピリしてるのかが分からないんですけど」

「貴女の普段の行いを振り返ってみたらどお？」

普段の行い……？

誰も起きてない時間おきに活動を開始して、午前中は大事な書類書類を見て、午後には警備府を視察視察、偶に港湾棲姫のとこ秘密基地に行つて、自分の部屋部屋には誰も居れないようにして寛いで、最近最近は殺人犯であることが周知の事実になった。

「……完全に不審者ヤベですわねえ！」

「ええ……そうね。自覚してるならどうして直さないのかしら？ 頭から直したほうがいいかしら？」

「ヒエツ」

「それはそうと教えてあげるわ。今はここに一艦隊分が残っていて、他の人達は辺りの深海棲艦を倒しに行つたわ」

「おお……なんか普通に教えてくれたぞ？」

「さあ、提督の目の届かないところだし誰が沈もうとも深海棲艦の所為に出来るわ。貴女は何をするのかしらね？」

「何もしませんよ。夜に備えてまた仮眠を取るだけです」

「即答する。」

「面倒くさいしわざわざ面白くも無いトラブルを自分から起こしたくない。それに別に疚しい事はしてないから……俺は良くも悪くもクソ正直なんでね。」

「じゃあ寝てる時間をサクッと殺っちゃうわね？」

「勝手にしてくれ。」

「まあ……痛みを感じずに死ぬならそれはそれでハッピーかもしれない。怪我とか病気で寝たきりなんて嫌だぞ俺は。」

「それに、殺られたら殺られるように立ち回った俺が悪い。」

でも……

「龍田さんはそんな事しませんよ」

コレは俺の直感。本当に艦娘^{軍人}が殺しをしようと思っただら敵意を悟らせないと思うから。

「……」

村雨さんはさつきから、龍田さんまで黙ってしまわれた……。

あんまり眠くは無いけど……寝よう。寝溜めしよう。

……夜戦にお呼ばれされなかった。寝れない。

五日目。一同は騒然としていた。

「海が赤くなってる……」

「フツ」

誰かの呟きが聞こえるが俺は至って冷静だ。慌てるどころか余裕さえある。

赤い海はテレビで見たことがある。原因はプランクトンだったり藻だったりするら

しい。つまりこれは何も恐れることのない自然現象であると決めつけて、他の人が慌てる様子を微笑ましいものを見るように見ていた。

「こんな異常事態なのに随分ご機嫌じゃない？」

「……龍田さん」

昨日から……いや、例の話をされた時から目の敵みたいにして……。

「どうしてそんなに突っかかってくるんですか？」

満潮を見習ってくれよ。昨日お喋りした時に色々聞いたらどうやら俺、駆逐艦スチュワートは満潮を大破させたんだってさ。それなのに「戦争だから」って何でもないように割り切っちゃって……俺ア感動しちやったね。撫でようとしたら怒られたけど。

「それよりもどうしてそんなにご機嫌なのか答えて頂戴？」

強引だなあ……

「そうですねえ……赤い海は海水に混じった赤い物が原因です。例えば……プランクトンとか！」

そう言いながら海に出てバケツで海水を掬う。

中にあつたのは……赤い液体。

「……」

ええいまだだ！

「プランクトンじゃないなら藻です！」

全くハワイの海はヤンチャで困るぜ……。

これまた輸送班が持つて来ていた簡易的な濾過装置に、赤い液体を入れる。
暫く待つて出て来たのは……赤い液体

「……ナニコレ？」

藻じゃないなら錆か？ だつたら濾過装置で取れそうだけど……海水に溶けたの？

指に付けて舐めてみる。……俺の通つていた高校は古臭くてね。蛇口から偶に錆びが出てきていたのよ。ちよつとただけだけど飲んじやったこともある。だから指に付けたくらい平気だろう。

「……」

鉄の臭いが……しない……ッ!?

しかも海水独特の塩っぱさも無い。

……

「ナニコレナニコレエ!？」

え？ そもそもコレ海水じゃないの!?

そこからは、俺もみんなと一緒に半分くらいパニックになった。

誰かが宥めようとはしてくれるが、落ち着いてなんて居られるか!

本当だったら今すぐ青い海を見る為にここから離脱したいくらいだ。

「近づくとつれて海がだんだん赤くなってるのは気のせいじゃないんだ。へえ、雰囲気あるじゃない」

「あつー」

伊勢さんの一言で気が付いた。

赤い海は演出だ。言われてみれば成る程、確かに明らかにおかしい子の海の色が恐怖や緊張感を煽るのにピツタリ。

蒸留しても駄目だったみたいで、どうして赤いかの説明も全くつかないから『艦これ』の演出であることは確定的に明らか。

「ありがとうございますすー」

伊勢さんにお礼を……アレ？

「Hey! 皆サーン。くたばったりしてないデスカー？」

……マジか

主力艦隊来ちゃってんじゃん。

まだ結構朝早いんだけど、張り切り過ぎじゃない？

それから暫くすると、夜の哨戒に行つてた人達が戻つてきた。

その人達にはこのまま明石さんと間宮さんの護衛をしてもらうことになっている。

主力が来たからには後は雑魚を散らすことなんてしない。

最後の作戦確認を大淀さん達と進めていたら、拡声器を持つた青葉さんが来て俺に渡して来た。

「……コレで何をしたら?」

「気合の入るような言葉をお願いします」

「え? 嫌です」

当たり前だよなあ? だつて大淀さんとか金剛さんとか、もつと相應しい人は居るでしょ。

だつてアレやぞ? 俺みたいな変質者ヤベに音頭取らせても誰も付いてこないつて。

「そこを何とか!」

「……」

何か申し訳なくなってきたから受け取る。

いつの間にか周りには大勢が集められていて、俺と青葉さんのやり取りを見ていた。

「ねえこのやり取りどう思います?」

一番話しやすい場所に居た白露に問う。

「凄く仲が良いんだね！」

「……………ええ。それはもう」

こんな無茶振りをしてきた青葉さんには感謝のあまり地獄突きをしたくらいだ。

いつまでもここでグズグズして居るわけにもいかんしなあ……

「ハア…………。意味わからん…………。カンペは無いのか？ え…………。長い作戦と飛行場姫の命もそろそろ終わりの時が来たようです。目的は飛行場姫！ いざ！」

「抜錨！」

「… 抜錨！ …」

猫は気まぐれ

前方から砲の撃ち合う音と深海棲艦の雄叫びは絶え間なく聞こえてくる。

そんな中でまだ敵影すら見えない俺は、期待されてないからここに居るんじゃないかと不安になると同時に活躍しないといけないという義務感が胸の中に渦巻く。

「そんなにソワソワするものでは無いわ」

「加賀さん……」

「あちらの赤城さんも言っていたのだけれど、貴女はソレを持って突撃するのが好きみたいね？」

「恥ずかしながら。盾では攻撃を受けることは出来ても遠くから攻撃は出来ないの……」

隣を進む加賀さんに答える。

冷静に答えられたと思うが、実際は心の中で赤城さんに「何言っちゃってんのお!？」って言いたい気持ちでいっぱいだった。

「逸る気持ちは解るわ。だけど焦っていても仕方ないでしょう?」

「仰る通りです」

「……私もね、建造されて間もないのにこうして作戦に、それも主力として出撃している現状には些か疑問があるのだけど」

「どういうことかしら？」と言いたげに俺の方を見る加賀さんに対して俺は、ハハハと乾いた笑いを上げながら頬を書く仕草をするのが精いっぱいだった。

しようがないじゃん。警備府は今発展途上だからさ……。

「……提督の仕事は、作戦を成功に導きつつ皆さんを無事に帰還させることです。その為には頑張らないといけないですね？」

と無理矢理話題を逸らしつつ「一航戦の誇り、見せてくれますよね？」と言うと、加賀さんは目を閉じて前を向いた。

不敵に笑みを浮かべた横顔の、後ろに流れる髪の一房が無性に恰好良く見えた。

「愚問ね」

飛行場姫に負ける要素無えわコレ。

猫がフシャーッ！ と鳴いて威嚇するのと、今みんなが経験しているように飛行場姫がサイレンをクソデカい音量で響かせるのは同じことなんだろうか……。

島を出発してから暫く、浮かんだまま動かない深海棲艦を横目に進み続けた俺たちは

遂にと言うべきか、飛行場姫のサイレンを聞くことが出来た。

俺を含む偵察した面子は二回目だけど、やっぱり初見だと心停止するってこんな……どう考えても猫の威嚇と規模が違い過ぎる。ねこは心停止なんて引き起こさない。ねこはいます。

そしてこのサイレンが鳴り響いたということは、とうとう主力艦隊の出番が来たということである。そしてその主力艦隊は俺と加賀さん、金剛さんと榛名さん、伊勢さんと多摩さんの六人。

「戦争でもしようって言ってますかね……」

「何言ってるの？ 戦争でしょ？」

独り言を伊勢さんに聞かれた。

そりゃあ『艦これ』は軍艦がモチーフのゲームだから戦争で……

「戦争でしたね……何でもありません……」

ガチ震えてきやがった。これが武者震い……？

マジで普段からこんな編成を組もうものなら資材の消費が怖くて発案者の頭と正気度を疑うようなものなんだけど、今は大型作戦の真つ最中だから尚更失敗は許されな……
いっていうのも理由かもしれない。

「う〜ん……」

ヒヤツ……

「ヒィ、エア、ア、ア、ツ！」

突然、首筋に冷たい感触がした。

「に、やーっ！ うるっさいにやあ！」

バツと振り向くと、目を吊り上げた多摩さんが居た。

さっきの俺の絶叫で他の人達も全員こっち向いてるし……距離的にさつき首筋に
触って来たのは真後ろに居た多摩さんで間違いないだろう。

「……いや、仕掛けた本人が五月蠅いって言うのはちよつと違うと思います！
それは
そうと何してくれたんですか！」

緊張感のカケラも無えな!?

そんな多摩さんを咎めるように怒って見せると、全く悪い事をしたとも思っていないよ
うなキョトンとした顔をしていた。

それどころかそんな俺の様子を見て、フツと柔らかい表情になると

「さつきまでは緊張し過ぎだったように見えたにやあ。適度に気を抜かないと疲れちや
うにや〜？」

「……」

やだ……カッコイイ……。緊張を解してくれるとか意外とお姉さんだな？

これがギャップ萌え？ でも、語尾が無かったらただのイケメンだからそのままお願いします。

「ありがとうございます、球磨さん」

「にやつ!? 多摩は球磨姉じゃないにゃ!」

あ、艦載機……

「さあ! いつまでも騒いではいられませんよ!」

そう言いながら高角砲を構える。

後ろでニヤニヤ言ってる人は知らない。今はもう遊んでる場合じゃないんだ。

発射して……命中。良い感じだ。

飛んで行く艦載機、俺から見えるそれらは加賀さんがぶつ放すもので、空中では小規模の爆発が続いている。

俺たちの近くまで抜けて来た艦載機が居ないか目を凝らして、百を優に超える艦載機の群れが空を蠢く蟻に見えて来て気分が悪くなってきたが、提督が明石さんに用意させ

た “秘密兵器” を持つてる金剛さんと榛名さんに負担をかける訳にはいかなないと考え、再び空を睨む。

……良いニユースと悪いニユースがある。

良いニユースは提督の計画通り金剛さんと榛名さんはまだ最低限の砲撃しかしていないから余力はしっかり温存できているということと、先程大淀さんが寄越した通信で、無数に沸いた深海棲艦の処理の進行度合いが良い感じだから主力艦隊に大鳳さんが助太刀に来るということ。

そして悪いニユースは、金剛さんたちを温存させ続けられるか、大鳳さんの助太刀が何時になるか分からないことと……

「くっ……」

斜め後ろから小さいが、伝わる苦々しさはそんなもんじゃない声が聞こえてくる。

チラリと振り返り、声の主である加賀さんの隣につく。

「一時だけ戦艦の皆さんに対空を頑張ってもらいましょうか？」

「まだやれるわ」

そう言いながら、近付いたとはいえまだぼんやりと輪郭が見える程度には距離が離れたハワイをジッと睨み、弓を射る加賀さん。

応える口調は勇ましく、視線も射殺してやると言わんばかりに気迫が籠っているが、

額には玉のような汗を浮かべ、弓を構える時以外は肩で息をしていることから、相当疲弊しているのが分かる。

加賀さんが押されている。これがもう一つの悪いニュース。でも本人がまだやれるって言ってるんだし……

「無理そうだとこちらが判断したら介入します。頑張ってください！」

「そんなに心配しないで頂戴。私を誰だと思ってるの」

天下の一航戦。そう言おうと思っただけ

「ごめん！ そっち通した！」

「！」

叫ぶような伊勢さんの声に反応して大きく返事を返すと同時にそちらを見る。

「そうだよ。俺ばっかりお喋りしてサボって良い訳ないもんな。」

「ガアアアアアアア！」

何この……なに？ 駆逐ハ級を二つくつつけたのに御者みたいな α をくつつけたような深海棲艦は……初めて見るな。軽巡？ それともスペシャルな駆逐艦？ 分かるん……

ドンドンドンドン！

「ッ！」

咄嗟に盾を構えて受け止める。後ろには加賀さんが居るから避けるという選択肢は無い。

『助けは必要ですか?』

「榛名さんが狙う相手はコイツじゃありませんか?」

魚雷と同時に砲撃だ?!? ふざける畜生!

盾を海面に半分くらい突っ込んで、残りの海面から出てる部分に隠れるようにして身を屈め……ないで腕で顔を覆う。

ヤツの射線上に俺と加賀さんが居るからどっち狙ってるのか分かり辛いんだよクソが!

ビシビシと、顎から下に小さい石を投げられたような衝撃を数度受ける。痛い……が目に入らなかつただけ良しとしよう。加賀さんには集中して艦載機を飛ばし続けて貰いたいからね。俺も多少の無茶はするってモンよ。

『……ふふつ、金剛お姉様の言った通りですね。でも、無理はしないで』

「え? あ、はい」

榛名さんからの通信の直後に沈めていた盾にも衝撃が加わり、海面を支点とした挺子の原理で思わずつんのめる。

「おつとお……よし。Go! ……ん?」

海から盾を引き上げて魚雷を発射したところで、ヤツから艦載機が飛び出した。が、挙動がおかしい。こちらに向かつて来るでもなく、そのまま上にフワーツ……つて

「ええ……」

あんなの良いのですって言ってるようなモノじゃん。

高角砲で撃ち落とす。何しに出て来たんだあの艦載機。

「^{ガァァァァァァァァ}グワァァァァァァ!

おお、当たった当たった。

後は魚雷のおかわりで追撃しようかな、と思つたところで

相手が大きな水柱に包まれた。

「……は？」

薄くなる水煙から何が飛び出してくるか、盾を構えて警戒していると……

「間に合いました!」

水柱があつたところに大鳳さんが立っていた。

同時に、加賀さんが居た場所からパシヤリと、弱い水の音が聞こえた。

心恋（うらごい）しき戦の火

「加賀さん!？」

大鳳さんが凄まじいスピードで加賀さんの元へ駆けつける。

「大鳳さん……」

加賀さんは疲れから汗で滑ったのか、弓を落としてしまったらしい。

片膝に手を着いて、過呼吸になってるんじゃないかと心配になるくらい息を切らせている。

青葉さんがワンショットを取りそうな珍しい顔を加賀さんが大鳳さんに向けて、放つ

た言葉は……

「ごめんなさい……まだ、敵の艦載機が」

若干悔しそうに感じる謝罪だった。

加賀さんが感情を分かりやすく表面に出すことは珍しいから、きつと心の中では血涙を流す勢いだろう。

「大丈夫ですよ」

そんな加賀さんに落とした弓を拾いながら声を掛ける。

「何も加賀さん一人で飛行場姫を相手しろって言われてる訳じゃないんです。むしろ、加賀さんはやり過ぎました」

「もうのように、慰めるように言う。」

「この際、少しくらい誇張とか入れても良いだろう。」

「飛行場姫の手柄を加賀さんが独り占めする気だつて皆さん怒つてますよ？ それに、途中で一時撤退したとしても提督は正當に、平等に評価してくれまస్తుて！」

「今行きます！……加賀さん、ありがとうございます」

「通信を受けたのか、大鳳さんが伊勢さん達の方に向かい艦載機を飛ばし始めた。」

「ささ、加賀さんは後方に居る明石さんのところで休憩しましょう」

「……面目ないわ」

「戦場から離れ始めたとき、加賀さんがそれはもう申し訳なさそうに言った。」

「建造してから一月どころか一週間程度なら十分過ぎます」

「当初の予定ではここで金剛さんと榛名さんが攻撃、迎撃を始める筈だったんだけど……加賀さんヤベエ。」

「そんなに活躍した加賀さんがその態度だと、全員が大金星を挙げなきやいけないですね？ そうなると深海棲艦が足りませんよ」

「そう。じゃあ素直に喜んでおくわ」

うん。……個人的に加賀さんはMVPだと思うよ？

「あちやう……派手にやりましたねえ」

無事に明石さんと合流した。

加賀さんをパスしたら、艦装を見るなり苦笑いをした明石さんの口から出て来たのが今の言葉。

特に被弾したとも聞いてないし、加賀さんの飛行甲板もそこまでボロボロじゃないから俺としては特に問題ないように見えるんだけど……明石さんには何が見えてるんだろう？

やっぱり工作艦の能力的な何かがあるのか？

「加賀さんをよろしくお願いします」

「任せて！ さあ！ 艦装を渡してください！」

「ええ。出来るだけ手早くお願いね」

えっ。

「早く戦場に戻らないといけないもの」

ええ……。

少しくらいはゆっくりしてればいいじゃん。マジであんな活躍を何度もされたら手柄争奪戦になっちやうから。

「いやあ……これはすぐに戻るとか言えないと思うんだけどなくアハハ……」
拉ひしやげた矢を見せる明石さん。

アレ？ 何で射ったと思われる矢が入ってんねん。自動的に戻ってくるとか凄くない？

「そう……では、少し休憩させてもらうわ」

「でも加賀さんが休憩終わっても修理が終わってるとは限りませんよ？」

「その時はそうね……適当に砲でも貸して頂戴」

ウツソだろオイ。どんだけ戦場に飢えてんの!?

「戦艦や重巡が使つてるような大きなものが良いわね」

加賀さんは狂戦士バーサーカーだったか……

「ゆっくり休んでください！ いいですね!？」

「……。そろそろ疲れが取れて来たのだけど」

ええい駄々っ子か！ どんだけ戦いたいんだ！

「もう行きますからね！ 明石さん、修理が終わるまで加賀さんには絶対に艀装を渡さないでくださいね！」

そう言うなり回れ右して全速力で戦場へ向かう。

後ろの方から「ちよっとおおおお……！」なんて聞こえるけどまあ……頑張ってもらうしかない。

戻ってきて再び前線。

伊勢さんと大鳳さんを中心にした対空能力が高い面々で飛行場姫が飛ばしてくる艦載機を落としながらゆつくりと、しかし確実に進んでいた。

俺も高角砲あるし混ざろうかなくなんて思ったとき、祥鳳さんに見つかって、前に出ている金剛さんに合流するように言われた。

目には目をつけて言うし、艦載機には艦載機をぶつけるんだらう。ただ撃ち落とす俺が出しやばる場面ではないらしい。

そして少し進むと前を進む艦隊が見えて来た。更に前方の空では爆発が起きている。取り敢えずあの爆発してるラインの下あたりまでは突き進んでも良いってこと？

「あれっ!？」

榛名さんの艦装が火を噴いてるやん！ そんなに状況はマズイの？

「状況は!？」

『Oh〜! ……スチュワートうるさいデース』

「あ、済みません」

『でも心配Nothing! コレはただの練習だヨ』

練習つて……今はバリバリ本番だ作戦中と思うんだけど。

金剛さんに追いつくと、大分近づいたハワイの砂浜を指差した。

「飛行場姫……」

まだ米粒みたいなサイズだけど、既に肉眼でも見える程の距離であることを知った。

「提督から渡された大切な秘密兵器は私と榛名で一つずつだからネ! 万が一にも外せないんデース」

『お姉様! 練習はもう……』

「緊張で外すのはBadだヨ?」

『はい! 榛名は大丈夫です!』

榛名さんの練習が終わったらしい。後ろで腰に手を当ててまるで現場監督みたいに榛名さんを見てた金剛さんも大丈夫だろう。まさか今まで碌に発砲してないから冷えて動かないとかは無いだろうし……無いよね?

金剛さんがボソボソと何かを呟いたと思ったら、ザッと艦載機の雲が三つに割れた。

比較的俺たちの側にあつた艦載機が左右に分かれて、その場には俺たちの方に向かっ

てきている艦載機が残された。

誰が見ても状況が動いたと分かる。俺たちの間に緊張が走る。

「撃ちます！ Fire〜！」

「撃てーっ！ ……ああっ!？」

金剛さんと榛名さんが撃った弾。その内片方が飛行場姫を守るように射線に入つて来た艦載機にぶつかつて……無力化された。その艦載機は「何かしたのか？」と言わんばかりにそのままどこかへ飛んで行つてしまった。

一方で金剛さんが撃った秘密兵器は無事に当たつたらしい。艦載機の群れの先頭がパツと光つたと思つたら連鎖的に爆発が起こつた。

「うわあ……」

めつちや燃えてる……しかもこれで二つあるうちの一つだけつてのが恐ろしい。

艦載機が燃えて爆発が収まった頃には黒い雲は薄くなり、明らかに艦載機が数を減らしていることが分かつた。

「……その秘密兵器つてなんなんですか？」

戦場カメラマンが「ほほう。これがあの……」とか言いながらカメラ構えてたから史実に結構有名な何かなんだろうなあ。

「話は後！ 今がチャンス、行くデース！」

言うなりシユバツ！ と音がしそうなくらいの急発進で金剛さんが飛行場姫に向かつて移動を開始した。

「よっしやあ！ 行くぜ行くぜ〜！」

言葉の意味を理解して金剛さんについて行こうとしたら、後ろから江風と長波が飛び出してきた。……この二人は絶対に金剛さんの言葉を脊髄で聞いてた間違いない。

「……」

榛名さん落ち込んでたし後でフオローしておこうと決めて、俺も出遅れないように前進を開始した。

一番先頭にいるのが戦艦、しかも高速戦艦と言うのが大きいんだろう。

駆逐級が出てこようが鎧袖一触。軽巡も見敵^{サーチ&デストロイ}必殺。重巡もちよつと時間が掛かる

程度で然程問題にならない。

好戦的な駆逐艦二人も戦闘で暴れ、榛名さんも失態を取り返そうと頑張っている為、その後ろに居る大勢の負担は非常に小さかった。しかも移動のペースが遅くない。

『そろそろ私たちが飛行場姫に攻撃を開始するネー！』

『艦載機の対処をお願いします！』

金剛型の二人から通信が入る。

対空……ねえ。なんかいつつも艦載機相手してるような気がするけど……まあ、そんなこともあるだろう。

「お任せください。高角砲が火を吹きますよ」

金剛さんに通信を入れて、急加速。一気に先頭まで踊り出る。

飛行場姫の攻撃を飛行場姫が撃破されるまで捌き切れればいいんでしょ？ 余裕余裕。

だって俺は赤城さん相手にしても結構粘ったんだぜ？ しかも飛行場姫は手負いと来た。

「そらー！ ハッハアアー！」

ほら、赤城さんの攻撃よりも全然軽い。

それだけじゃ無い。一対一じゃないから大鳳さんたちの艦載機や後ろからの援護射撃がある。

だから俺が攻撃を引き受け続けられれば俺が無理に攻撃をする必要なんて無いんじゃないか？ 盾を上に乗せて縮こまってダメージを受けないようにしてれば勝てるんじゃないか？

……まあ、取らぬ狸の皮算用？ ってヤツだし俺は俺で頑張るんだけどさ。

油断大敵とも言うし、一つこころで盛り上げてみようか。

「この戦い……勝てる、勝てるぞ！ 最後まで気を抜くなよ！ 沈むのは論外！ 大破したヤツは指差して笑ってやるからな！」

通信を繋いで元気よくそう言うと、「舐めてんじやねーぞ！（意識）」な返信がいつばいきた。モチベーションが上がったみたいで良かった良かった。でも方法を間違えたらしい。ちよつと怖い。

俺も煽った手前、盾に隠れてるばかりでは居られない。

「へッ、やってやるってんだ」

不思議で怪しい初期艦様の力を見せてやるよ！

紅色 ハシバミ色

やると決めた。

まずは榛名さんのフォローとして艦載機を落とそうと思う。

赤城さん未満の飛行場姫ならそこまでの難易度では無いだろう。幸い、俺の腰には投擲物があつて、その中には焼夷手榴弾もある。榛名さんの秘密兵器が遅れて効果を発揮したつてことにしよう。

後は特に思いつかないから、怪しい上に使えないなら要らんわつて言われないうように活躍しようじゃないか。

その為には飛行場姫への攻撃での火力貢献がシンプルで良いんだけど……これは正直絶望的だ。

何せ砲なんて持ってない上にまともに火力が出る装備が魚雷だけときた。

そしてその魚雷は飛行場姫が陸上に居るから通用しない可能性が大きいから実質飾りで、残りの高角砲も飛んでる艦載機に当てるなら比較的簡単だけど、飛んでつた弾の落下地点の把握なんて到底出来ないからやつぱり使えない。

「うーん……まあええか」

悩んでいても状況は変わらない。それどころか、変に発破をかけちゃったから殺る気が凄いいことになって押せ押せムードになってしまった。飛行場姫の脅威なんて微塵も感じさせないみんなによって活躍の場の奪い合いが起きる始末。

一つ一つ片づけて行こうと思っていたんだけど……俺は活躍出来るのか不安になってきた……

貧弱な、それでもやはり飛行場の名を冠するだけあつて密度の高い攻撃を凌ぎつつチャンスを探う。

手の中には既に艦載機を爆散させる為の焼夷手榴弾。赤城さんの艦載機も誘爆してどンドン墮とせたから効果はあると思うんだけど、さっきから良い感じのチャンスが来ない。

舌打ちをしながら狙いどころを探していると、後ろの方から聞こえてくる喧噪……間違いなく最前線の金剛さんたちが後ろから迫ってきていることに気が付いた。

「ヤベツ」

せめて艦載機を火薬にした花火を作るまでは艦隊に合流したくない。

あつという間に俺の頭はそのことで埋め尽くされて、チャンスも糞も無いとすぐさま赤い缶を艦載機目掛けて投げる。艀装パワーで高く飛んで行ったソレは「早まったかな

？」なんて予想を裏切って、それはもう凄い爆発を起こした。

「ハア!？」

誘爆に次ぐ誘爆。夏の花火大会よろしく、身体の芯まで響くような衝撃波が何回か起こる。

……さつき金剛さんが秘密兵器を撃った時も、爆発の真下に居たならこんな感じだったんだらうか？

ちよつと妖精ホモさくくん？ 中身おかしくありませんか？ 核でも入ってたの？

降ってくるのが弾ではなく、燃える艦載機の残骸という名の火の雨の中、異常な爆発をした投擲物を用意したのであろう俺専属の偉そうな妖精さんに向かって心の中で語り掛ける。なんちゆうモン作ってんねん、と

いつも腰に下げてるけど、弾とか掠って爆発なんかかしてみろ。艦装の耐久性で庇い切れずにそのまま俺が即死すると思うんだけどそこんとこどう思う？

勿論返事は返ってこないことは分かっているけど……

「ハア……」

溜息を吐いて、呆けたように空を見上げる。

これも『艦これ』演出の一環だろうか？ 赤黒く染まった曇天という現実ではまずありえないような空が広がっていた。

金剛お姉様と共に最前線に立って、砲を熱くしながら前に進みます。

何処から出て来たのか不思議に思うくらいに深海棲艦と無数に飛び交う艦載機に対して私達……いいえ、多くの方々皆さんの海を侵すことに怒りが湧いてきます。でも今は

先程の砲撃での失敗が無ければ……

その考えが頭から離れません。

私の砲撃も当たっていたら、今飛んでいる敵性の艦載機の数ほど少なくなっていたのでしょうか。それによって私達が受ける被害も……

「たられば」の仮定。本来だったらあり得た話ですが、今はそのようなことを考えていても仕方ありません！

だからこそ、私は失敗認め、その分を取り返さなくてはいけません！

「グギャアアア！」

駆逐艦も

「オオオオオオ……」

軽巡も

「グワアッ！」

重巡も！

「……」

戦艦、だろうと……

「やああああつ！」

「！グッ……」

ドガン

「榛名！ 無茶しちや駄目デース！」

私の砲撃でも戦艦ル級は倒せず、結局お姉様が助太刀に入ってきてしまいました

……。

「戦艦を一人で相手するのはまだ早いデース」

「ですがお姉様……」

私は建造されたばかりだということを言い訳にたくありません。

聞いたところだとこの作戦は警備府の、提督の初めての作戦らしいので、敗北や失敗と言った言葉を残したくはありません。

それに戦艦としてこの身に寄られる期待、金剛型としての矜持、その為に不甲斐ない結果を残したくないのです！

そのことを伝えると、降参とばかりに両手を上げられました。

「……手のかかる妹も可愛いネー」

「！」

どこか呆れを含みながらも、その言葉に否定的な感情は乗っていません。

言葉にはしていませんでしたが、間違いなく「妹の尻拭いくらいならやってやる」って言うってます。

「頑張り屋な妹を持って私は鼻が高いデースー！」

「……ありがとうございます！」

「それと、さつきから砲^手が止まつてるヨー？ お喋りしながらでも敵を倒してしまうのが淑女ってスチュワートが言ってたヨー！」

「多分違います……」

何吹き込んでるんですかスチュワートさん……

私達が飛行場姫へ砲撃を開始した直後、スチュワートさんが凄いスピードで前方に進

み……まだまだ湧いて出てくる深海棲艦の波に隠れて見えなくなってしまうました。

たった一人で敵陣に突っ込むなんて心配どころでは無いんですが、どうしてお姉様はそんな素振りを見せないんでしょう？

「直ぐに分かるヨ」

『この戦い……勝てる、勝てるぞ！ 最後まで気を抜くなよ！ 沈むのは論外！ 大破したヤツは指差して笑ってやるからな！』

「え……」

通信が入って、威勢の良いスチュワートさんの声が聞こえてきた時には沈んで無かった！ と安堵したんですけど……こんな喋り方をする子だったでしょうか？ もう少し落ち着いた雰囲気だったような……。

ですが通信の効果は抜群だったみたいで、江風さんが八つ当たりするかのようになり魚雷を叩きつけました。相当お怒りみたいです……。

「スチュワートは落ち着きが無いからネー。防戦一方でプツツンしたんだと思うヨ」

「……お姉様はスチュワートさんのことを良く解ってるんですね」

「人を見る目は——」

お姉様がそこまで言った時、前方で物凄い音がしました。

音のした場所を見ると、音に遅れてやってきた衝撃波が髪を揺らします。

お姉様と私が提督から渡された三式弾。それよりも大規模な爆発が起こっていました。

今も誘爆が続いていて、深海棲艦はまるで飛行場姫を守りに行くかのように引き返してしまいました。

お姉様と私以外にも三式弾を渡された人が居るということ？ でも私たちより前に居るのはスチュワートさんだけで……？

「……一体何が」

ポツリと聞こえて来た言葉は全員の総意だったのかもしれない。

「ツッ…行きマスよ榛名！」

「！…はいっ！」

お姉様に続いて大爆発のあった場所へと急行します。このままではスチュワートさんが大量の深海棲艦から押し潰されて、最悪の場合沈んでしまうかもしれません。

お姉様曰く「最近では落ち込んで自棄になってるかも」とのことだったのでとても心配です。

実際に警備府では猜疑的な雰囲気にはなったものの、怪しいからと言って見捨てるなんて選択は誰もしないようで……

有象無象を蹴散らして現場に向かうと、無防備にも空を眺めたまま動かないスチュ

ワートさんが居ました。

「コノヤロー!」

「グツハア!」

「このすつとこどつこい! あんま心配せんなよ〜!」

「Yes! 長波の言う通りデース! あんまり無茶ばかりすると私も提督もS o a n g r y n e e!」

……スチュワートさんは愛されていますね。



毘

「コノヤロー！」

呆けていて気付かなかった。

気付いた時には長波の顔が結構近くにあつて……ド突かれた。痛い。

その後、長波と金剛さんが何か言ってきたけど耳がキーンつてなつてて良く聞こえなかった。

勝手に突つ走つたことに対して怒ってるか、一人で盛大に花火を上げたことに対して怒ってるか、艦載機落としまくつたことに対して嫉妬してるかのどれかだろう。

青葉さんと江風も合わせて俺を囲み、逃げ場が無くなったことに対して焦り始めた辺りで耳鳴りが治まつて、何を言ってるかが聞こえるようになってきた。

さつきの予想の全部に合わせて、青葉さんが大爆発の真相を熱心に訊いてきていた。……適当に「そうですね」とか「はい」とか「ごめんなさい」つて言つてたから絶対に噛み合つてない。

俺を円から一歩離れた場所で優しい目で見てる榛名さんが今の癒しだった。

「榛名さくらん……」

それはもうワザとらしく泣きつくように榛名さんのところへ行く。

この人達めっちゃ怖いっすよ……。

「うふふ……怒られる時はしつかり怒られてくださいね」

肩をしつかり押さえられて金剛さんに突き出された。

救いなんて無かった。

「……あ、それはそうと榛名さんが撃ち込んだ三式弾、良い感じに爆発してくれましたね。ソレが無かったら結構大変なことになってたかもしれないですね！」

「……」

「いや、不発弾のまま持ち去るなんて酷い艦載機でしたね、ハハハ……」

「……」

榛名さんの撃ちこんだ秘密兵器、聞いたところだと三式弾って言うらしい。それに上手い具合に高角砲が当たったってことにしてさつきから他の人達を説得してるんだけど……榛名さんだけが納得する素振りを見せない。何故？

結果的に艦載機は三式弾二つと投擲物、後は味方の艦載機によってかなり数を減らしたと思うんだけど

……。

顔には笑顔を浮かべたまま、だけど背中中は冷や汗で凄い事になつてゐる気がする。榛名さんから目をジツと見られて、逸らすまいと瞬きもせずに見つめ返すこと数瞬。榛名さんが溜息を吐いた。

折れた！

よつしやあ！　なんて心の中で喜んでいたら金剛さんが口を開いた。

「腰に下がつてる缶が一つ無くなってマース。関係ないとは言いませんよネ？」

やだ、凄^{この人怖い}い観察眼……

「えっとそれは……あ！　青葉さんどうしましたか!？」

「大淀さんから連絡です！」

グッド！　実に素晴らしいタイミングですよ青葉さくん。

「想定よりも被害が少ないのでハワイまで後退した深海棲艦に対して包囲網を敷いてそのまま一網打尽にするそうです」

「へえ。それはそれは」

俺は作戦の立案なんて出来っこないから適当に返事を返す。如何にも「分かっていますよ?」つて雰囲気を出してればそれで良いのだ。

腕を組んで目を瞑り、うんうんと軽く頷きながら耳を傾ける。

「じゃあさつきと行くこうぜ。ダメージを与える分には問題ないんだろ〜?」

「ヒヒツ、長波はバカだねえ。正面からアタシらだけ行っても横から逃げるに決まってるじゃん」

「あ、そつかあ……じゃあ後ろに居るのを待ってればいいのか?」

「いいえ——」

おーおー楽しそうに話すねえ。羨ましいなあ。

何々。正面と左右からの三方向で軽く抑えておけばいいの?

青葉さんと江風、金剛さんと長波が左右でえ〜……

「よろしくお願いします」

「イエッ!?! あつ、俺もなのね こちらこそ!?!」

背後から声を掛けられた。しかも耳元で。

榛名さんも結構お茶目なところあるね? それにしても音もなく近寄るなんて……

心臓止まるかと思っただぞ。

「ふふっ、お姉様の言った通りでした」

また金剛さんか!

バツと金剛さんの方を見るとニヤニヤしていた。

心臓止められかけたんだから文句の一つでも言おうかと思っただけど、榛名さんとのお

喋りの切つ掛けが生まれたと考えればまあ……

「それじゃあ行きましようか」

「はい」

深海棲艦を追いかける。追いつけそうで追いつけない絶妙な速さの軽巡ツ級に対して、短時間で何度「ケツに弾ブチ込んだら即死しそうだなあ〜」って考えたことか。

榛名さんが背中撃つたら海面とキスするから比較にならない。でも倒れたら倒れたで次の標的の背中が見えるからどんどん倒していける。……その度に俺は似たようなことを考えるんだけど。

榛名さんも張り切ってるから俺の絶望的な火力と平均して良い感じになっている。言われたように倒し過ぎない適度なラインは守れているだろう。

つまり順調……だったんだ。

「スチュワートさん」

「何でしようか？」

「これ、おかしくないですか？」

「え？」

今までは。

榛名さんの言葉を受けてやや減速。

前ではなく周りを見て見ると……囲まれている。

しかも駆逐艦が殆ど見当たらない。軽巡、重巡がメインで戦艦も多数居る。

どうしてこんなことに？

さつきまでは駆逐艦ばかりだったじゃないか。

再び前を見ると……

「ツ！・飛行場姫……」

もう目視できるとかそんなレベルじゃない。なんなら目が合った。それほど近くに飛行場姫が居た。

違う。飛行場姫は移動してないから……軽巡を追いかけてる内に深入りし過ぎたのか。

だったらさつきまでの周りの逃げるような深海棲艦はフェイク？ どうしてわざわざ榛名^{戦艦}さんを近寄らせてまで俺たちを隔離した？ どうやってこんな指示を出した？ 他の人達も同じような状況になってるのか？

頭の中を疑問がグルグルと渦巻いて……

「こちらスチュワート！ 敵の罠に嵌りましたアーツ！」

思いついたのは報告。若干事後報告っぽくなってるけど、しないよりはいいだろう。

『……!? い——何——!?』

あつ……通信出来てない! ジャミングとかコイツら本当に大戦時代の遺物がモデルなのか?

『せめて貴女達だけでも、沈んで行きなさい!』

「あつ」

そして飛行場姫は飛行場姫で……捨て身で俺たちだけに狙いを絞るとか正気の沙汰じゃねえ!?

俺たちを誘い込んだ基準は……新人の榛名さんと駆逐艦相手にも防戦一方の俺だから? そして俺たちが選ばれたのは偵察機を使って!?

やられた! 飛行場姫自信は相打ち覚悟で、しかもこれだけ戦艦とか重巡が取り巻きで居るなら厳しいなんてもんじゃない。

「そんなことは、榛名が! 許しません!」

勇ましい声と共に榛名さんが飛行場姫目掛けて斉射した。

それが引き金となって、今まで俺たちをただ見ていた深海棲艦が一斉に襲いかかってきた!

「ヤベエツ!」

咄嗟に黄色の缶を引き抜いて、榛名さんの背中側に放る。ついでに軽巡目掛けて魚雷

もプレゼントだ。

雷光のようなフラッシュが発生して、僅かながら深海棲艦の動きが止まった。

その隙を逃す榛名さんではなく、標的を飛行場姫から軽巡に移して既に何体か葬つていた。戦艦スゲエ。

「退きましようスチュワートさん！」

榛名さんが提案……にしては無理矢理言い聞かせるような、異論は無いよな？　と言わんばかりに強く言ってきた。

勿論撤退に関しては異論なんて無いけど……

「飛行場姫はどうなりましたか？」

早口で問う。逃げるにしても艦載機が飛んでたら非常に面倒だからこれは大事な質問だ。

「今は沈黙しています！」

マジ？　仕事早すぎない？　倒したって明言こそしてないけど動かなくなってるなら十分すぎる。最高かよ。

「それは良かった！　ではハワイ島に撤退しましょう。」

「……えっ？」

榛名さんが驚くのは尤もだけど、今俺たちがいるのは殆どハワイの近く。飛行場姫の指示で俺たちだけを沈めに来たという予想が正しいなら、きつとこの包圍網の厚さは結構ある。

そしてそれは俺たち二人で突破するのは多分厳しいと思う。駆逐艦^カが殆ど居ない上に戦艦がチラホラ居るのが嫌らしすぎる。

……だったら無理に突破せずにハワイに上陸しても良いんじゃないかね？　と言うのが俺の考えである。勿論深海棲艦に占拠されたからと言って人が全く居ないとは限らないからそこまで中心部までに行けないけれども。

それでも海の上には陸上生物っぽい足を持つてるヤツ以外は来れないだろうし、その時点で駆逐艦と軽巡の数種類は考えなくても良くなる。

と言うことを伝えたら納得してくれた。

榛名さんの主張である「機動力でブツチ切る」って言うのも良いんだけど、飛行場姫の側、つまり砂浜の近くには深海棲艦が少ないこと、ついでに沈黙してる飛行場姫に攻撃出来ることなど……いろいろメリットがあるように思うんだよね。

そして今は煙幕の中。紫色の未知なる煙を恐れて深海棲艦が凸って来ないのは良いことだ。

「準備は良いですか？」

「はい。真つすぐ飛行場姫目掛けて進んで、これでもかと言うほど砲弾を浴びせつつ上陸、そのまま後方に撃ちながらハワイ島内部に移動……ですよね？」

その通りでございます。

「自分から言っておいてなんですけど……本当にやる気ですか？ 沈むかもしれませんよ？」

「一人にはさせられません！ それに……勝機があるから提案したんでしょう？」

「さて、どうでしょう？」

作戦は伝えた。そんなときに煙が薄くなる。

覚悟が決まった顔をした榛名さんの顔が見える。きつと俺の顔は同じように覚悟をしている者の顔か、ニヤついているかのどっちかだろう。

「あ、煙が……」

察知能力が高いヤツが居たのか、早くも砲撃音が聞こえてきては俺たちの近くの海面に砲弾が突き刺さる。おつかね……

「合わせますよ？」

「では……行きます！」

榛名さんが宣言して煙から飛び出して、俺が続く。

俺たちの戦いはこれからだ！

不完全燃焼　　＼気分の緩みを添えて＼

砂浜目掛けて全力移動。

まさか俺たちがそつち側^{隣上}に向かうとは思ってなかったのか深海棲艦の不意を突いた形になり、スタートの時点でワントンポ早く、有利になることが出来た。

しかも嬉しい事に戦艦ルが結構遅い。これは実にグッドな想定外。

追ってこられるのは少ない駆逐級と軽巡、そして戦艦夕級だけ。その殆どを後ろに置き去りにした俺は遂に敵の射程外に逃げることに成功。後ろを振り向くくらいの余裕が出来た。

少し遅れてるけど榛名さんも夕級の射程外に移動できたみたいで明らかにホツとしていた。軽巡と駆逐艦から撃たれまくってるけど全然気にした様子が無い。

……やっぱり戦艦つてすごいなあ！

感心している場合じゃない。

「榛名さん次です！」

「はいっ！」

次が勝負所！　沈黙してるらしい飛行場姫に止めを刺す。その為には俺の貧弱な攻

撃力ではなく、戦艦様の超火力が必要だ。

発射しては効果が無いからと手に持った魚雷に力が籠る。頼むから汗で滑ったとかはナシで頼むよ。

大きく振りかぶって……掛け声はそうだなあ

「おはようございまあす！」

そう言つて魚雷を投擲。それなりに離れてるとは言え的が的だし、そう外れることは……微妙にズレたけど、艦装に命中したからヨシ！ どう？ 良い目覚ましになった？

『キヤア！』

あ、起きてたんじゃくん。死んだフリでもしてた？

「バカめ……」

動かなければ死んだと勘違いしてくれると思つた？ しつかり止めを刺すのは戦場での常識だろう？ 近年は小学生だつて履修死体に銃弾を放つしてゐる必修項目だぞ。

それに俺の攻撃なんてこれから攻撃する人に比べたら蚊が刺したようなモンだ！

この程度で痛がつて貰つては困るぜエッ！

さあ榛名さん！ やつちまつてくたせえ！

「はあっ！」

榛名さんが再び飛行場姫目掛けて斉射した。

榛名さんのデカイ艀装を以てして大きな反動を受ける程の砲撃。そんなのを二度も喰らえば流石の飛行場姫と言えど無事では居られない。

急いで僅かな艦載機を眼前に展開したのがチラツと見えたけど焼け石に水。艦載機を無駄にしただけでダメージを減らせた様子は無いようだった。ざまあねえぜ。

そうしてる間にもどんどん飛行場姫は近づいている。

そしてえく……三、二、一、今ッ！

「上陸ッ！」

跳ねるように、スキージャンプするみたいに体を動かして海から陸にエントリー！
……したのは良いんだけど、かなりスピード出たから綺麗に着地なんて出来る筈もなく……盛大にぶっ倒れた。

が、直ぐに起き上がって飛行場姫の方に駆ける。口の中と体中がジャリジャリするう……

何故かは知らないけど飛行場姫はさつきから殆ど艦載機を飛ばしてこない。

俺が爆発を起こしてから引き揚げた艦載機は最初に比べたら相当減つたとは言ってもまだそれなりに残ってた筈だ。

だからこそ分からない。

『ウウツ……壊れちゃう……』

すつげえダメーじ受けてるっぽいのに、どうして艦載機を飛ばしてこない？ さつき俺が転んだときなんて絶好の攻撃チャンスだっただろう。撃てば当たるような状態だったんだぞ？

まさかとは思うけど……さつきの防御で全部使い切った？

うや、それだと残りの艦載機は何処へ消えた？

ここ以外の戦闘地点に送り込んだか、まだ隠し持つてることもあるか？ 死んだフリするようなヤツだからなあ……

「分かん……」

ここまで歩数にして十歩足らず。

鈍色の脳細胞を活性化させて導き出した俺の答えは……

「攻撃すれば分かるだろう」

実に脳筋的なものだった。シンプルでいいじゃない。

距離が縮まってきたから盾を構える。多少前進の速度は落ちるけどこれで正面からいきなり艦載機が飛んできても致命傷にはならないだろう。

「ホイー！」

魚雷を投擲。

艦載機で防御は……しない!? 本当に艦載機が残ってないとも言うつもりか?

それはそれで俺たちにとつてはいいニュースでしかないんだけど。

艦載機飛ばすもののない飛行場姫など、ただの案山子ですなあ!?

「榛名さん! 斉射ア!」

そうなたたら案山子おやつと化した飛行場姫には反撃を恐れず、思う存分攻撃出来るというもの。でも俺じゃあ火力不足が著しいから榛名さんに任せる。

別に面倒だから攻撃しない訳じゃない。適材適所つてヤツだ。

「はいっ! 避けてくださーい!」

言われて進路を右へ。

飛行場姫は名前の通り飛行場だからかその場から動いていない。動く様子も無い。一人でそのクソデカイ艦装の持ち運びは流石に無理だろう……憐れ飛行場姫。

後方を見ると、榛名さんの艦装の主砲? がキラリを光ったかと思うと、僅かに遅れて砲を撃った爆発音。そして飛行場姫の居た場所からやってくる衝撃波。

『沢山の鉄が沈む……この海で。ワタシもその一つ……』

そんな言葉が飛行場姫の方から聞こえて来た。

見て見ると、ボロボロになった飛行場姫はまだ艦装に腰を下ろしていた。

随分余裕そうだな。と思つたら再び砲弾が突き刺さった。榛名さんマジ容赦ねえ

……

それからしばらく飛行場姫に砲弾が撃ち込まれて、その煙が晴れた時艀装の上に腰かけてる飛行場姫の姿はなく、代わりに艀装の前に投げ出されるように倒れ伏している飛行場姫の姿があった。

「……やりましたか？」

海から揚がった榛名さんがやってきた。

「……恐らくは」

俺はピクリとも動かない飛行場姫を爪先で突いて、反応を示さないことを確認して榛名さんに答える。

その時だ。

ザザーツ……

不自然なくらい高い波がやって来て、飛行場姫を攫って行ってしまった。

「……………」

突然の事に対する困惑、突然の高波超常的な現象によって意識に空白を作られた俺たちはただ茫然としていた。波に攫われて溶けるように綺麗サツパリ消えた飛行場姫と、対照的にその場に残ったポロポロの艀装。

間違いない強敵だった筈なのに最後が締まらないと言うか、あつけないと言うか

……。達成感なんて殆ど無く、無性に淋しく感じた。

『——スト……。あつ！？がりました!？』

呆然としたまま艤装を眺めていた俺と榛名さんの元に、傍受と言う言葉を思い出した通信機が大淀さんの声を届けてくれた。

「繋がってます……」

そう言ってから無事を伝えると、怒られてしまった。

……罨に嵌ったってノイズ混じりの通信が来たと思っただら音信不通とかそりゃあ心配で胃がねじ切れるね。本当に申し訳ない。

味方の艦載機で俺たちの居るであろう場所を偵察しようにも、飛行場姫の艦載機が邪魔で難航していたらしいが、突如として殆どの艦載機が制御を失って墜落したらしい。その連絡を受けてる間に、味方の緑に日の丸が描かれた艦載機が空に見えた。

今は深海棲艦が逃走を開始した為、ここぞとばかりに張っていた包囲網から逃がさないようにしつつ掃討してる最中らしい。

「……二人ともお疲れでしょうけど、掃討に協力していただけませんか？」

「はいっ！ まだやれます！」

「是非もないです」

せつかく深海棲艦が逃げる為に背中とケツを向けてるんだ。多少の疲れはあったとしても、楽に深海棲艦を倒せるならそのチャンス逃さないに越したことはないだろう。

でも……

「折角陸に上がったんだからあの森でゲリラ戦とかやりたかったなあ……」

機動力とかを活かして各個撃破。楽しそうじゃない？

「えっ!?!」

俺の呟きに対して榛名さんが「そんなこと考えてたんですか!?!」みたいな反応をするが、俺なんかそんな軍人めいた動きが出来る訳がない。〃やりたい〃と〃やれる〃の間違いだ。

「冗談ですから忘れてください。……さあ、背中を向けてる深海棲艦に思う存分攻撃するチャンスですよ?」

俺は飛行場姫の最期がなんか味気なく感じたからスッキリするまで魚雷をブチ込むつもりだけど……。

「榛名さんはかなり主砲酷使撃ちまくったししましたし、大丈夫ですか?」

「はい! 榛名は大丈夫です!」

かあくっ！ 頼りになるねえ。

再び海に出る。

他の人の砲撃に当たらないようにしながら逃げる駆逐イ級に魚雷を二発投げたら、艦装から偉そうな妖精^ホさんが現れて首を振った。

「……補給しろってこと？」

供給されない魚雷を不審に思い、確認するように問うと何度も頷かれた。

「マジか……。あ、大淀さん？ 補給しに戻りたいので、榛名さんを一人にしないように誰か寄越してください」

『分かりました。あら、そう？ ……近くに荒潮さんが居るみたいなので向かわせませぬ。直ぐに着くと思いますよ』

警備府ではない場所での指揮はすっかり大淀さんの役目になってるなあ……。なんて思ってたら深海棲艦の隙間にチラリと茶色が見えた。多分荒潮だろうが……。来るの早すぎない？

「ありがとうございます。……。あ、榛名さん？ スッキリしたので戻りますね。代わりに荒潮が来るみたいなのでお願いします」

「分かりました。……。それと、まだスチュワートさんに訊きたいことがいくつか残って

ますので、警備府に戻ったらしつかりお話して貰いますよ?」

「お、お手柔らかに……ではお気をつけて!」

返信の代わりに砲の音が聞こえて来たから、置き土産とばかりに音響手榴弾をポイ。

「ふう〜……」

手札は使い切ったし、後は噛みつかれないように避けながら戻るだけか……

「あゝ眠……」

終わりが見えてきたことで緊張は完全に緩み、最後のやる気を振り絞って移動を開始した。

今日も警備府は平和です

「作戦の成功を祝つて！」

「乾杯！」「乾杯！」

グラスや陶器がぶつかる小気味のよい音がそこかしこで響き、直後に談笑や食器同士のぶつかる音が耳に流れ込んでくる。

乾杯の合図より前まではかなり静かだったから余計に音が大きく聞こえる。

それもさつきまで提督が

- ・ 作戦は成功。轟沈もナシで良く戦った！ ありがとう
- ・ MVPは加賀さんと榛名さん。他の人達も頑張った！
- ・ 昨日は報告で忙しかったから今日は騒いで。乾杯！

の三行で終わるような内容をわざわざ三十分くらいに希釈して演説してたからだ。

しかもみんなは真面目に聞くモンだから食堂内がそれはもう学校の朝礼みたいなワールドに早変わりして、長くなるヤツだと判断してからは話半分で聞いてた俺に特効の睡眠魔法を垂れ流してくれた。

早いうちに人が少ない窓際に陣取つてて良かったとつくづく思うね。舟漕いでても

バレないんだもん。

それにしても……

「随分増えたな〜」

加賀さんと榛名さんがMVPの何かを貰って嬉しそうにして、それぞれが瑞鶴さんや大鳳さん、金剛さんに絡まれて嬉しそうにしている。加賀さんの方はちよつと分かり辛いくけど……あ、瑞鶴さんが煽られてキレた。

駆逐艦は基本的に同型艦が集まって、好きな食べ物を奪い合ったりしながら今回の作戦の感想や武勇伝を言い合ってた。

その近くに居た提督は男性ということもあって一般的な量の料理を艦娘より素早く胃に収め、何点か常識的な注意だけをして食堂から出て行った。

その後は軽巡や重巡はお酒を飲み始めてゆっくりと語り合い、空母が多く座つてるところは早くも皿が積み上がり始めていた。

厨房で忙しそうにしてる間宮さんと伊良湖さんもどことなく楽しそうだ。

「……」

この賑やかな光景は『艦これ』のもので、これから艦娘が増えて行くともっと賑やか

になつていくんだらうなあ……。

今はまだ五十人前後で学校のークラスよりも少し多いくらいだけど、大体二百人くらい居るから一学年つてところ？ 多過ぎる……

でも、その輪この中に俺は必要存ないんだよね。

一歩引いた場所から見てる俺は何とも言えない、強いて言うなら鬱鬱な気分になつてきた。

周りはお祝いムードなのに俺だけ勝手に鬱鬱つてたら迷惑だろう。

サツと並べられてる料理を食べて、気配を消してはそつと食堂から出て行こうと決めた。

どうせこの空気の中では誰も気がつかないだろう。

そう甘く考えていたのが悪かったと思う。

「スチュワートさん！ 何処へ行くんですか？」

扉に手を掛けたタイミングで吹雪に捕まった。その所為で食堂の少くない視線が俺の方に向けられ、誰にも知られずに居なくなることが失敗したと悟る。

「ええと、少し体調が悪くてト……お花摘みに」

どう？ 誤魔化せる？

「ごめんなさいっ！ ……あつ！ 後で金剛さんがお話ししたいって言つてました！」

仮病は使えないらしい。

「……回復しました」

「えっ？ ……よくありますよね！」

吹雪は納得したように苦笑いしてから離れて行った。

ああ……吹雪は誤魔化せたけど食堂から逃げられない！

「裏切者を捕まえたネー！」

「え？」

金剛さんからの話とは何ぞや？ と思つてからテーブルに向かうと、いきなりこんなことを言うもんだからビックリだ。

「……裏切者つて誰のことです？」

深海棲艦のスパイ疑惑が掛かった俺じゃないの？

「Hey雷〜！ 裏切者を吊るすデース！」

そんな言葉と共に吊る……しはされてないけどいつの間に準備したのか分からない紐を手を持った雷が誰かを引っ張つて来ていた。

「……龍田さん？」

どういうことだ……？

なんで龍田さんが後ろ手縛りをされてるんだ？

「この女は提督へ好意を寄せすぎる余りに、最も近いと思われるスチュワートを貶すような噂を広めましたー！ 恋する乙女の風上にも置けないデース！」

金剛さんがそう言うのと、近くで肯定するような声が聞こえる。

「え？」

どういことだ……？

「何か弁明はありますかー？」

「え？」

「しようがないじゃない……スチュワートちゃんはあまりにも高い壁で……提督が少しでも貴女から目を逸らすようになれば良いと思つて……」

「え？」

「それを乗り越えてこそその愛でシヨウ！ もしかして……その程度だったんデスカ？」

「ツ！ そんな訳無いじゃない！」

「ええ……」

……なんか始まったんだけど。

それにしてもおかしいね？

龍田さんって天龍さんLOVEだったような気がする

るんだけど……会話から察するに提督に対する好感度かなり高くね？

高いハードルってことになってる俺を蹴落とそうとするとか、まるでヤンデレみたいだあ……まさか天龍さんが居ないことよっておかしくなったとか？

その後も何故か茶番は続いた。話があるって呼ばれた俺は殆ど喋ってないにも関わらず。

始めは少人数で龍田さんと「愛とは、恋とは」みたいな難しい話をしてたのに、何の騒ぎか気になったのか大勢が集まってきた。

最終的に何故か俺が越え^ラるべき壁^スに認定された。どうしてそうなったかじっくりと話を聞かせて欲しいところだけど……これかなり拙くね？ このまま行ったら何かを勘違いした提督に恋愛的な告白をされるかもしれない。

そうなたら一大事だ。精神的シヨックから一週間は寝込む自信があるね。

だから俺はそんな危険なゲームから降りさせて貰おう。

「私は提督好きじゃないので……誰でも良いから早く提督とくっついて欲しいですね」俺がそう言ったら茶番の主役達とギャラリーが凍った。

「……え？」

周りの反応に逆に俺が固まっていると、青葉さんが俺の前にやってきた。

「それでは、スチュワートさんはこの戦いに参加しないってことですか!？」

どの戦いだよ……つてツツコミたいけど、どんな戦いかも知らない俺に参加資格は無いだろう。薄々どんなものかは察せるけど……そんな戦いの参加資格なんて欲しくない。

「まあ、そうなりますね」

そう答えると、青葉さんが「なるほどなるほど……」と呟いた。

物凄く悪い顔してますぜ青葉さんよ。

「スチュワートさん……流れた噂の内容にしてはそこまで邪険にされなかったのは不思議に思いませんでしたか？」

……いきなり何の話だ？

「まあ……提督が何かしら手を回したんだろうなとは思いましたけど……」

「フフフ……それは半分不正解ですっ！ 不肖この青葉が、提督と共に我々が初期艦の為にそれはもう奔走しました！」

聞くと「殺るならもうしておかないとおかしい」「スチュワート^他を信じてる提督を裏切る行為」とか言つて説得して回つたらしい。

「成る程……迷惑をおかけしました。……ありがとうございます」

自分の為じゃなくて他人の為に色々と行動出来るのは素直に凄いなと思うし、実際に助けられた。

「借りが出来てしまいましたね……出来る事なら——」

「では提督の好みなどを後でじっくりと教えて欲しいです！」

俺が言うが早いのか、食い気味にそう言ってきた青葉さんに「まさか」と思う。

話しかけて来たタイミングからして……まさか最初から提督の情報が目的だった!?
幻滅した。やっぱりキレイな青葉さんなんて居なかつたんだなって……

「ハア……」

でも、いくら幻滅しても受けた借りは借りなんだよね……

「それくらいだったら……」

と言うと

「青葉ー！ 抜け駆けは良くないネー！」

「そうです！ ズルいですよ！」

「そういうのは私達にも教えなさいよ！」

周りが青葉さんにブーイングの嵐をぶつけるが、当の青葉さんはどこ吹く風。

「青葉の行動に対する正当な報酬です！」

なんて言う始末。

流石にこれだと青葉さんのメモ帳を盗むべく刀傷沙汰になるか、俺に貸しを作ろうとする人たちに追い掛け回される……そんな未来が見えた。

借りに対しての返しがこれだけ、しかも俺にとって価値が無いから借りを返した気にならないのも困る。

「……それだけだと少ないのもう一つどうぞ。それと、情報はしつかり欲しい人に分けてあげてください」

「むう。仕方ないですね」と言った青葉さんがどこからともなく袋を取り出した渡して来た。

「では明日一日だけで良いですからコレを！」

コレって何だ？

袋を開けてみると出て来たのは……メイド服

「……は？」

何処でこんなの中に入れたんだよ……でもやるって言っちゃたしなあ……そう言っちゃた俺にドロップキックをかましたい。

「いいものが撮れそうですねえ」

カメラを構えて笑ってる顔の青葉さんに手が動いたけどグツと堪える。

「フウ~~~~~……」

怒りを吐き出すかのように長く深呼吸をする。

借りを受けたのは俺、借りを受けたのは俺、借りを受けたのは俺……

「……」
助けて漣！

6章 〈幕間〉

・普通アブノリマルじゃない演習

司令官……演習に私を連れて来たのは間違いだと思うわ……

先頭には佐世保の司令官かしら？ 柔らかい表情を崩さないで私たちを見て「緊張しないで」って言ってるみたい。対照的に私たちの司令官はぎこちない笑顔だから頼りなく見えちゃう……まあ、それはそれで支え甲斐が有るって意味だけど。

そして司令官の後ろにはざっと見て百を超える艦娘。あ、佐世保の私神風だ。……きつと多くの経験を積んだんでしょうね。とても立派に見えるわ。……私もあなれるように頑張らないと！

「そうだな……一時間もあれば、緊張も良い感じに解れるだろう」

「何から何までありますがどうぞございます……」

一時間も時間があるなら、佐世保のわたしに色々と話を聴きたいなあ。

「神風、付いてきて」

「はい……」

そう思っていたけど……司令官に呼ばれたなら仕方ないわ。また後で聴くことにしましょう。

「ふむ……旗風、おいで」

「はい……」

あれ？ 指名された途端にどこか浮ついていた空気が霧散した……まさか司令官との仲がそれほど良くないの!?

「……旗風？ 何か嫌キなことかされてない？」

「そういう訳じゃなくて、もつと個人的なことで。……ふふつ。やっぱり神姉さんはどこでも神姉さんなんですわ」

「？」

司令官の後ろを歩きながら旗風と小声で話し合う。

「神姉さん」かあ……。ちよつと嬉しいような、恥ずかしいような、懐かしいような……自然と頬が緩んじやう。

「着いたよ」

佐世保の司令官の声でハツと我に返って、緩んだ顔が見られていないかが心配になる。

私のその様子すらもおかしいのか、旗風にクスクスと笑われた。

「ああ旗風、大湊の神風を部屋まで連れて行ってあげなさい」

「分かりました」

「これから私たちは執務室で話をするから、そうだね……昼頃までは自由に過ごしてもいい。いつもと違う姉とお喋りしても良いだろう。……勝手に決めてしまったが、大湊の神風も構わないかね？」

「嘘っ！ 私に振るの!？」

「あ、はい……」

「反射的に返事しちゃったわ……提案自体に異論は無いんだけど、どこか釈然としないわね……」

「神姉さん！ 行きましょう！」

「え？ うわっ!？」

手首をしつかり掴まれて、かなりの早歩きで廊下をグイグイ引っ張られる。

「ちよ、ちよつと！ 目的地は逃げないでしょ！」

「このままでは間に合わなくなってしまうす！ ……着きました」

「ぶえっ！ ……ちよつと！」

急に止まったから今度は止まれずに旗風の背中にぶつかる。

一つくらい注意しても良いわよね？」

「姉さん、大湊の姉姉さんを連れてきました」

……ああもう！ 初対面で怒ってるような怒りっぽい姉ひとに見られるじゃない！

扉の向こうから「入って入って〜！」って聞こえて来たと思つたら、畳を踏むような足音が聞こえてきて……あれ？ よく見たら警備府チのと全然違う扉じゃない。

和風な引き戸になつてとつてもお洒落！ 帰つたら司令官とかスチュワートさんに相談してみようかな。

音を立てずにスーツと開いた戸から出て来たのは、やっぱり見知らぬ艦娘。初めて見る筈なのにそれが春風だと分かる。

「ご機嫌よう、そして初めまして神風お姉様。ふふっ……さあ、上がってください」

「は、初めまして？ 春風……」

足元には上がり框かまちがあつてそこから上は畳張り。部屋の真ん中には大きなちゃぶ台があつて、既に二人が座つていた。急須やお茶請けも用意されてるから、お茶をするんでしょうけど……既に食べかすが乗つてるお皿があるのは気の所為かしら？

「あつはは！ 僕こんなにしおらしい姉貴初めて見たよ！」

「松風！ 否定はしないけど、言い方つてもものがあるでしょ！」

……私神風型駆逐艦の妹たちは随分賑やかなのね。警備府でも早く妹たちに会いたいな……

「神風わたしが居ないように見えるんだけど……良いの？」

「本人の居ないときに他所の本人を前に姉妹が愚痴を言うのは恒例行事のようなものよ」

「本人が居ないときに他所の本人に色々喋るのが楽しいんじゃないか！」

……そんなもののかなあ？

それから「取り敢えず一杯どうぞ」ということで冷えた緑茶を飲んで、佐世保の妹たちが私の知らない神風のことを話し始めた。

最近「オカンみたい」って言われたことを結構気にして、休日に最近流行りの服を探しに行つたは良いものの、それが不格好ダサイだったことを話してくれた。

むう。オカンだなんて……気にしてなんかないもん……。ずっと頑張ってきたつてことだもん……。でも、私は佐世保の神風とは違つて「懐古主義」なんて印刷されたシャツに手を伸ばしたりなんて……。し、しないわ！

「……」

お洒落な人に今度何処かに連れて行つて貰おうかな……

「あ、旗風は演習に行きたいんでしょ？ 憧れのスチュワートさんに練習の成果を見せに行つたらどうだい？ そろそろ一時間経つけど」

「!……そうでした! 姉姉さん、申し訳ありませんが私はここで抜けさせて貰います……」

暫くお喋りに花を咲かせてると、松風が演習の話題を。弾かれたように部屋から出ていった。

「はあ……旗風も、気持ちは解るんだけど……」

「何があつたの?」

秘書艦当番を遅刻しそうになった人みたいな焦り方してたけど。

「以前スチュワートさんからアドバイスを頂いたらしくて……その成果を見せに行つたんだと思います。大湊警備府との演習にも相当乗り気でしたし。……ですが、折角神風お姉様がいらしてるのだし、もう少しお喋りして欲しかったとも思います」

「まあ、本人たちがそれで良いなら良いんじゃない?」

「ここからなら演習もよく見えるよ。双眼鏡は要るかい?」

朝風と春風が演習に行つた旗風のことをいろいろ言つてるけど、私も演習に来たからずつとここでお茶をしてる訳にも行かないのよね……

何個も双眼鏡を用意してる松風は元からここで演習を観戦する気だったのね。

現地で見えるのも勉強だけど、私よりも経験を積んだ艦娘に解説してもらうものまた違つた勉強になるかもしれない。

「ええ。借りるわ」

そこで私は、常識から外れた光景を目にすることになった。

「長いなあ……いつまで続くんだろ」

隣から松風の感想が聞こえてくる。

一緒に来てた瑞鶴さんや高雄さんはとくに演習を二度行い、終わったつて言うのに旗風とスチュワートさんの決着はまだついてなくて、飽きてくるのはしようがないんでしようけど……

「そんな事言っていないで……応援しないの？ 妹でしょ？」

「じゃあ姉貴はどっちを応援するんだい？ 他所ウチの旗風と初期艦のスチュワート」

「そんなの……どっちも応援するに決まってるわ」

スチュワートさんには勝って欲しいけど、同じくらい旗風には負けないで欲しい。だったら片方を最良なんてしないつもり。

「ふーん……」

「それよりも、旗風はどうやって相手にダメージを負わせるつもりなの？」

最初に旗風の盾みたいな艀装には凄く驚いたけど、その切っ掛けがスチュワートさ

んだと聞いてもつと驚いた。

移動速度が下がって、駆逐艦の良さを潰しちやつてるところはダメっていう判定を朝風はしてたけど……旗風に勝てるイメージが出来ないのよね……。

今では「そういう戦い方もアリ」って考えて、参考に出来そうなところを見つけようとしつかり観察してるし、色々と気になったことは訊いてるんだけど……

「機雷のこと勉強してたからやつぱり機雷じゃないかしら？ 詳しい事は知らないけど」

「本人に尋ねるのが一番ですよ」

「姉貴もああいう戦い方するつもり？ 強い事は分かるんだけど、何が楽しくてあんな戦い方をするのか、僕にはさっぱり理解できないよ」

具体的な意見があんまり出てこないのよね。……やつぱり見てるだけじゃ駄目かもしれないわ。

「私も演習に行ってくるわ！」

そう言うと、三人から激励の言葉を貰った。

今の私は、誰が相手でも簡単には負けない！

そう思ってたのに……

「ねえねえ神風！ 演習駆けっしようよ〜」

島風さんに声を掛けられたのが運の尽きだったみたい。

「お手本のような引き撃ちだったね。艀装もちやんと調整してたみたいだし、あれじゃあ分が悪いなんて話じゃないよ」

お昼に、観戦してた松風にそう評価された。

……納得いかない！



6章 幕間②

・魔改造！ 劇的ビフォーアフター

今回リフォームするのは絶海の孤島！

依頼者は我らが提督。

港湾棲姫と北方棲姫の二人が新しくこの島に入居することになったんだとか。

……正直言つて正気の沙汰とは思えないけど、特別手当として間宮さんのおやつ食券を渡されたからには折れるしかない。我々だってタダで仕事をしている訳じゃないんだ。

島の面積は小さいものの艦娘の暮らす部屋よりは余程大きく、むしろ食堂四つ分くらいはあるかもしれない。

だけど、島のそれぞれの場所には弾薬や鋼材に加工できそうな鋼片が落ちてたり、燃料になりそうな油の沼がある。

そしてこの島一番の問題は……我々工廠妖精が出向いた時に発覚した。

「居住スペースが無ぁい！」

「どうなってるんだ！」

最近は艦娘の建造を繰り返し流石に飽きて来た、と言ったところに舞い込んできたこの仕事に飛びついたらこの結果だ。しかし既に我々の腹の中には間宮アイスが収まっています。

早くも提督の甘い罠に嵌ってしまったことに後悔しながらも、現地で島の地盤を調査していたら入居希望者の一人である北方棲姫のタコ焼きみたいな艀装が我々を食べようとしてきた！

バカな!? あり得ない! どうして入居希望者が既に居ると言うんだ! しかも本当に港湾棲姫と北方棲姫!

「契約違反でしょコレ！」

見てないで助けてくれ潮! 曙!

「ちよつと! 大人しくしてなさい!」

『暇だ!』

「新しく住む場所が必要なんですよね? 連れて来た妖精さん達がお家を作ってくれま

すから……邪魔しないでね?」

「ギャアギャア！」

『北方……大人しくしてて……』

入居希望者の港湾棲姫は穏やかに過ごしたいらしい。

つまり見つからないように海面より下に居住スペースを用意する必要があるみたいだ。腕が鳴るね。

それは置いておいて……

「これから作業を始める！」

「今日も安全作業で行きましょう！」

「了解！」

「でもどうやって地面に居住スペースなんて作る？ チマチマやってたら日が暮れる！」

「こんな時の為に“アレ”を持って来ていたんだぞ！ さあやろう！」

我々、工廠の匠は秘密兵器を持って来ていたんだ。

「創造の前には破壊がある」の精神って大事だよね！

「まさか『アレ』を!? ……分かったよ」

「ヘルメット、周りに我々以外居ない……ヨシ！」

テキパキと作業を進める仲間にも緊張が走る。

「爆発するぞおーッ！」

「いいか!? 近づくなよ! 絶対に近付くなよ!?!」

「……近づいちゃ駄目みたいです」

「確かに、何となく分かるわ」

『あれ、面白そう!』

『あれは玩具じゃないよ』

「点火します!」

K a b o o o o o o o n !

「[[ビューティホー…… [[」

形の良いキノコ雲! 肌伝わる振動! そして見事に抉り取られた地面! これ
は限りなく満点に近いダイナマイトだったね! 技術班の奴等もやるじゃん。

それから、我々の血と汗の滲むような努力の結果……

「なんと!」
「どうしたらこうなるのよ……」

のっぺりとしていて面白みのない島の上にはカモフラージュの為の灯台！
その中にある階段から地下へ進むと……まるで別世界ではありませんか！

穏やかな港湾棲姫と活発な北方棲姫が共に過ごすということで、広々とした地下空間にも区画を用意して、プライベートの確保もバッチリだ！

敵だのなんだの言っても、仕事には手を抜かない我々匠の心意気を感じて欲しい。

「勿論です。プロですから」

『おお……ありがとう』

『ありがとう！』

「よ、妖精さんも喜んでると思いますよ？」

「ちよつとした報酬とお客さんの笑顔で我々は働いてるからね」

「でも時間外労働は勘弁く。追加で間宮を要求しに帰ろう」

「私達は引き上げるけど……変な気でも起こすんじゃないわよ！」

『勿論だ』

『むう……ツンツンしたお前は帰れ！』

「ええっ!? あ、曙ちゃんが残るなら私も残ります！」

何だって!? 我々が帰れないじゃないか!

『そうだ、少しくらいゆつくりしていけ。この……妖精? さん? が用意した茶と、ス

チュワートが持ってきた甘味の残りがあつた。持て成そう』
前言撤回！ 我々はもう少しここでゆっくりする！

・演習の裏側

田代提督から案内されて佐世保の執務室に入……らない。

神風と旗風が見えなくなると、執務室をそのまま通り過ぎていつて別の部屋まで移動した。

「おっ！ 久しぶりだな松田！」

部屋に入って聞こえてきた第一声がコレだった。

姿が見えないと思つたら……。

「……。久しぶり」

どうして梅木君が外に出て挨拶をせずに田代提督が挨拶をしたのか、どうしてトレーニング用のマットの上で汗だくになってるのかを質問したかったけど、田代提督の前でいきなりそんなことを言うわけにはいかないからグツと堪えた。

「ああ、私のことは気にしなくても良いよ。さあ座って座って。……それに、私たちしか居ないから好きな話題を広げても良いんじゃないかな？」

椅子に座るように促された。梅木君も素早く汗を拭いて着替えてから席についた。その間に置いてあつた冷蔵庫から麦茶を淹れた田代提督が戻ってきて

その後自分たちを一瞥した田代提督は、悪戯を思いついたように微笑んで……

「例えば、艦娘の子たちが居るところでは話せないような好きな艦娘の話題とかどうだい？　ちなみに私は最上だよ」

爆弾発言をした。

「えっ？　本^{マジ}当でスカ田代提督！」

「ああ、嫁さんの若い頃にそっくりつてことと、いつもパワフルで元気を貰えるから好きでね。勿論、みんな大事に思つてるけど誰か一人を挙げるとするなら、ね」

確かに、長い付き合ひになるから良い関係は築いて行きたいし、自分たち『提督』に見える通称『妖精さん』の為に艦娘を粗末に扱うわけにはいかない。

それを粗末にした良い例^悪はつい最近、しかも身近で発生している。

黒川元提督は命をもつてして、決して艦娘や妖精さんが言うことを何でも聞く人形ではないことを証明してくれた。

そしてその問題の話題の中心に居た当事者のことを自分はよく知ってる。

「あの……田代提督。一つ、良いでしょうか？」

「なんだい？」

「その関係は、言うところのビジネスライクではダメなんでしょうか？」

私の中で一人の艦娘が思い浮かべられる。

私と居る時—— 仕事中は決して仲良くはしないと云わんばかりに、実際「仕事じゃなかったら御免」だと言われた。そして書類仕事が終わるとすぐに執務室から消えて、一部で流れた幽霊説を信じそうになるくらい会うことはない。

艦娘たちと一緒にいる時は穏やかだと聞いているから、誰に対しても素っ気ないなんてことでは無いみたいだし、本人に聞いても決して何か拙いことでもしたと言うわけは無いみたいけど……。

「お前は相変わらずジメジメしてんなあ！ 田代提督が艦娘を払って俺たちだけでそう言う話をしたならそうゆうことだろ!？」

思考の海に沈んでいったところを、梅木君の言葉で引き揚げられる。

そして彼が何を言ったかを理解するのに少し時間がかかって、ほんの少しの想像をし

て顔が熱くなる。

「いやいやいや！　ま、まさかそんなことは……」

「う、うむ……まあ、梅木くんの言った通りだ。君たちも若いし、ちよつとした冗談のつもりでね」

「なら俺は……鬼怒かな？　いつもトレニングに付き合ってくれるし。待てよ？

だったら大鳳とかでも良いんじゃないかねえか？」

「梅木くんはもう少し大淀の負担を減らすように努力してくれ……」

梅木君の回答を聞いて少しだけ焦る。

次は自分の答える番だ。誰が好きかと言われたときに最初に頭に浮かんだのもやっぱり彼女で……

恥ずかしいから小さくなったけど、一応答えることは出来た。

「自分は……スチュワートです」

梅木君が「誰だ？」と言うと、田代提督の方から声が聞こえてきた。

「ああ……なるほど。ちよつと待ってくれ」

そして立ち上がって部屋から出ていき、そう間を空けずに戻ってきた。

田代提督は手に持っていた数枚の紙を梅木君に見せると、目が大きく見開かれて表情が面白いように変わっていく。

そして最後にはニヤリと笑った。

「……面白れえじゃねーか」

書類をヒラヒラさせながら自分に向かってニヤニヤした顔を浮かべる梅木君。

彼女が笑われてるみたいと感じてちよつとムツとしたけど、その程度で一々怒っていは梅木君の面倒を見切れなかつた同期と同じだ。

「コイツが黒川を殺つたつてのを見た時はギョツとしたけど、お陰で俺がここに居るんだし感謝しないとな！ ホラ、見てみるよ」

そういつて紙を渡してきた。

目を通すと……うん。自分が作つた書類だ。

「……？」

それとは別に見たことも無い紙が混ざつてるみたいだ。

「あの……コレは一体？」

紙には『能力測定結果』と書いてあつた。

「それはスチュワートが大本営で謹慎してた時に練習艦の香取と鹿島、神州丸から指導を受けた時の評価……分かりやすく言うなら学校の成績表つてところかな？」

「ありがとうございます」

彼女の成績表……どんなことが書かれているか気になって読んでみようと思つた直

後、梅木君が声を出した。

「なあ、そのスチュワートつて艦娘つて前までウチに居たんだろ？ どうして謹慎が終
わつたら大湊に行くことになつたんだ？」

「私より上の人達の考えだから、そこら辺は何とも言えないね。ただ、大湊警備府を離れ
たとするなら佐世保ではなくてアメリカへ行くと思うよ」

「えっ」

彼女が大湊を離れる？

この時に感じたものは何だったのか、自分では良く解らなかつた。



6章 〔幕間③〕

・夜の風物詩（夏）

「今日は夜戦やらないよ！」

「!?!」

ハワイに向かう途中で、休む為に寄った島。

夜になってさあ休もうと思ったときに、川内さんが驚きの一言を放った。

バカな……あり得ん！

「なんでさ川内さん！ 行きましようよお！」

俺たちが川内さんの異常に戦慄してると江風が声を上げた。

……いや、一緒に行くも何も江風はそもそも夜戦担当じゃないよね？

「うん……私も行きたいんだけどね。流石にこんな時にはやりたくないかな……なんて」

確かに今はクソって言葉が付くくらい暑い……というか風が無い。しかも日中は雨が降ってたから湿度もヤバイ。

やる気と言うやる気を削がれるような環境だから、川内さんの言葉に共感できる。

「ただ、あの〃川内さんが暑くてジメジメしてるといっただけで夜戦をしないなんて到底考えられない！ニセモノの可能性もある。」

小石を拾って背後から投げる。

「うわっ!? なにするのさー!」

避けられた……本物だ。

「(めんなさい)」

川内さん曰く「夜は長い」らしい。

そんな「長い夜」が川内さんですら夜戦を浴^つびたるような暑さだったらどうなるか。

答えは簡単。暑くて寝るに寝れないのだ。

そんな俺たちは川内さんの「怖い話でもする?」という提案に乗っかって、全員が灯りを中心に円を描くように座り込んでいる。

怖い話——つまり怪談を始める為だが——万が一深海棲艦が来ても対処できるように全員が艦装を着けたままだから微妙に怖くない。幽霊もビビって逃げ出すだろこれ……

実際にやったことは無いから初体験だけど、ホラー番組で突如現れた霊とかにビビりまくるチキンハートを持つ俺に耐えられるかどうか……。

始まる前から既に戦々恐々している俺をよそに、言い出しつぺの法則に則りつて一番手の川内さんが口を開いた。

「なんか付き合わせちゃつたみたいでゴメンね。でも、やるからにはうんと怖がつて涼もう！　じゃあ行くよ！」

そう明るく宣言した川内さんはスツ……と急に落ち着いてから灯りを消した。
「終わらない丑三つ時」

うくん……正直微妙。

怖いっつちや怖いけど……ベタだから展開が見えちゃうものだったり、なんか聞いたことあるようなモノだったり、戦時中特有の価値観の違いから怖がる要素が分からなかったり……背筋が冷えたり冷えなかつたりした。別の言い方をするとピンキリ。

一番怖かつたのが意外にも三日目で、放置された祠に憑く怨霊の話はしつかり練られててそれなりに恐かつた。

それと江風と大鳳さんは正直向いてないと思った。怪談なのに語り手が澆刺としてちやあ怖さ半減だ。特に大鳳さんはネタは良い感じの怖さだっただけに勿体ない……。フツと灯りが付いて全員の顔が照らされる。

那智さんの怖い話の感想を言い合ったらいいよトリである俺の番。

俺の話すヤツには元ネタがあるけど、艦娘は誰も分かるまい。

温泉旅館に移動する際中のバスで改造したし。

「皆さんは大戦中、敵国の軍艦の乗組員が何処からやってくるか知ってましたか？」
「D^eeP^pOn^es
「ディープ・ワン号の乗組員」

灯りを消した。



・納期間近の修羅場

「三式弾が必要かもしれない」

提督から放たれたその言葉が、私から休息という二文字を奪い取った。

「ああ〜……もう寝たい……」

それなりの規模の作戦があるから忙しくなるかもつては思ってたけど……ここまでとは聞いてないよ！

糸の切れた操り人形みたいに椅子に座つて、乾いてシパシパする目を押さえる。

「はあ〜…… やりがいはあるんだけどなあ……」

そのままぐつたりと机に伏せて独り言を漏らすけど……誰も居ないよね？

最近はず〜つと工廠に居るかもしれない。こんな時に修理が終わった時、被験者役になつてくれるらしい兵装実験軽巡の夕張が居たらどれだけ楽になれるかなあ……？

「ふああ〜……あふ」

とても人前では出来ないような大欠伸をして脱力。机の上に置いた腕に頭を預ける。疲れ切った目が程よい力加減で押さえられるから気持ちいい……

……仮眠しても良いかな？

私頑張ったから！ 提督に言われてから二日間、限りある時間と資材を使いながら三式弾の失敗作を作り続けて、その度に妖精さんが「見せられないよ！」と言わんばかりに失敗作をペンギンとか綿ゴミみたいな包みに入れては持ち去ってしまう様子を眺めて、回数を重ねるごとに次こそは成功しなくちゃいけないって意気込んで……ちよつと疲れちゃったんだよね。

……この時間帯なら工廠に誰かが来るなんてことは無いだろうし。

高窓から入ってくる日光が背中当たって気持ちいいし、妖精さん達が修理とかで発する音が耳に馴染むから眠気がどんどん強くなっていく。

……ちよつとくらいなら良いよね。

ウトウトしながら作業するのは危険だから仕方ないよね。

そう自分に言い訳しながら完全に脱力した。

……香ばしい匂いを察知して、意識が覚醒する。

「うっ……ん……よしー」

思いきり伸びをして間を開く。うん、瞼の重さも取れてる！

これなら一休みする前より三式弾の開発が捗るかも。

「お腹空いたな」

そう呟いて工廠に併設されてる医務室を出ると、私が仮眠を取った机の上には様々な食べ物や並んでいて妖精さんが群がっているのが見えた。

「わあ！ 豪華〜！」

妖精さんが群がってる場所には最中が並べられていて、私が座つた椅子の前にはが豪華な定食が置かれていた。まさか間宮定食？ ……夢じゃないよね？

頬を抓つてみてもしつかり痛いから……現実!?

ドツキリとかじゃないか不安になつてくる。

「起きたみたいだね」

「えっ?」

工廠内に私以外の声が響いて、入口を見ると両手いっぱいにお菓子を持った提督が居た。

「ええっ!? 提督!？」

「うふふ……」

「間宮さんまで!」

「妖精さんから話は聞いてるよ。随分無茶……頑張つたんだね」

だから、今私の前に並べられてるのは差し入れと言うか、報酬と言うか、ご褒美と言

うか……そんな感じらしい。三式弾の開発を急に命じられた時は何なんだと思っただけ、ご褒美に間宮定食が食べられるなら悪くはないかも……。

現金だなあって自分でも思う。これで後はしつかりと休める環境なら文句は無いいだけだなあ……。

あ、この小鉢美味しい。

「美味しいです間宮さん！」

「気に入ったみたいね。でもソレ提督が作った物なのよ」

「えっ」

提督ってこんなに料理上手だったの!? 知らなかったな。

「喜んでもらえて嬉しいよ。……それで、今頼んでる開発のことだけ」

「うっ」

忘れてた……。

それからは、舌鼓を打ちながら開発の話をしてたんだけど……

「……まあ、今日はもう遅いから、明日一日だけ頑張ってくれないかな？」

この一言で急に現実を見せられた気が……現実を叩きつけられた。

「ほえ? ……あーっ!」

言われて気が付いたけど外真っ暗じゃない!? どうしてちよつとだけのつもりがこ

んなに寝ちやったのよ私〜!

提督には今日は休めって言われたけど、そんなことしてる場合じゃなくない!?
……提督たちが居なくなったらコッソリ作業再開しちやおうつと……。

「あつ! もしかして……こう?」

なんか冴えてる!

今までとは使う資材をちよつとだけ変えたら急に閃いた。

そうして出来上がったものは……やっぱペンギンの包みに入れて持ち去られたけど、今までで一番三式弾つぽかったかも!

「今なら、なんだって作れるような気がする!」

「あんまり騒がしくはしないでね?」

「はい……」

見回りに来た伊勢さんに注意された。

結果として、^{資料}予算を使ってなんとか三式弾を二つ作ることに成功した。

朝イチで結果報告に行ったら「休むように言ったよね?」って感じでお説教をされ

ちやった……。けどご褒美として間宮食券を貰えたて美味しい思いをしたからプラマイゼロ！

それからというもの、開発に行き詰った時は験担ぎとして提督にご飯を作って貰うようになったのは別の話。



6章 〳幕間④〳

・一方その頃……

『このまま進んだところに島があつた筈だから、そこで艦装を展開させて欲しい』

アンタの意見や要望なんて聞くわけないでしょ！

そう言おうとしたけれど、提督に「出来る限り協力して（意識）」って言われてることを思い出した。

……ま、まあ確かに？ 聞いた話だと相当な量の艦載機飛ばせるらしいし……悔しいけど今いる艦隊の中じゃ最高戦力だろうし、素直に言うこと聞いておいた方がいいかな？ 歯向かわれても困るし。

「そう……ま、頼りにしてるわ」

一航戦の二人とか大湊^{ウツチ}の大鳳さんに比べたらまだまだ頼りないことは間違いないけどね！

「ではその……潮たちが空母水鬼をその島まで引き連れてくれば良いんでしょうか……？」

あくそつかあ……港湾棲姫つて陸上に艦装を展開するからこっちから仕掛けられなくなるのかあ。そうなると必然的に港湾棲姫の近くまで引き寄せないといけなくなるのかあ……。

「そう……ね。悪いけどお願いできる？ 飛鷹と摩耶もお願い」

「任せろー！」

やつぱり先に建造された人たちは頼もしいな。

……翔鶴姉が建造された時に「私のお姉さんだー」なんて言ってみたりして……
「えへへ……はっ!? ほ、ほら！ こんなことさせるんだからそれ相応の、しっかりとした成果を出してもらわよ！」

『? ああ。勿論分かっているさ……だが相手は空母水鬼。生半可な相手では無いぞ』

「はあっ!? 始まる前から言い訳とか、程度が知れるんだけど!? 笑わせないで！」

二航戦の二人なら良い特訓の的だつて言いながら倒しそうなのにこの深海棲艦は言い訳みたくないな甘つちよろいこと言つてんのよ！

「仲いいなくお前ら」

『摩耶……だったか? そう見えるなら一度眼を診てもらった方が良いぞ』

「ちよっ!?」

こっちのセリフなんだけど!?

「ねえ、那珂ちゃんのこと忘れてない!？」

「あ」

「緊張を解すため♪」とか言つて五月蠅かったから意識の外に置いておいてたわ。

川内の妹かわうちつてこともあつて色々騒がしいから、煽るにはピッタリでしょ。

「頑張つてね」

作り笑いで投げやりにそう声を掛けると

「まっかせて〜! 最高のライブにしてくるから!」

流石は自称アイドル。完璧な笑顔だよ……。

私からしたらアイドルは癒しのひと時を与えてくれる間宮と私の翔鶴姉だけで十分
 なんだけど……流石にそれを言っちゃマズいかな。

「……」

『……』

潮たちが空母水鬼を引きつける為に島で別れてから数十分。

駆逐級は時々寄ってくるけど、簡単に倒せちゃうから基本的に暇。……つていけない
 いいけない。ポーっとしてる間に不意を突かれるかもしれないからね! それに今は

潮たちも頑張ってる頃だろうし、私だけが呆けてる場合じゃないよね。

「……ねえ」

『なんだ』

「不埒なこと、考えてないでしょうね？」

『そんなことは無いぞ』

「本当かどうかも怪しいところね。まあ、いざとなったらアンタが何かする前に頭撃ち抜いてあげるだけだけどね」

『あんまり怖い事を言うな』

監視してるってことをアピールする為に港湾棲姫に話しかけるけど……なんか私が悪者みたいじゃない！ 面白くない！

『む。来たな』

港湾棲姫の声が聞こえた直後に『掛かったぞ！ 今向かってる！』って通信が入った。目を凝らすと、水平線に点が見えるような見えなような……。

「……アウトレンジで決めたいわね」

『同感だな』

ギョツと弓を持つ手に力を込める。

港湾棲姫も見慣れた艦載機を沢山召喚した。……両脇の口から。

「その滑走路は飾りなの？」

『こうした方が早い』

「そう……」

この艦載機が近くに、それも味方として存在するのは違和感が凄まじいけど……これからはそんなことも言ってられないか。

「艦載機飛ばすよ！ ……姫級の実力、見せてもらおうわよ！ まさか日和って戦えませんとか言わないよね？」

『抜かせ。私には帰りを待ってるのが居るんだ。やられはしない』
そう言つて港湾棲姫の艦装から大量の艦載機が飛び出していった。

……裏切る心配も無さそうだし、私も全力で行かなくちやね！

・恋は盲目

『……最初の失敗は何だったのかしら？』

「やっぱりスチュワートちゃんを疑ってかかったことかしらね〜」

そこが違えば、もっと別の現在になってたと思うもの。

私は建造されてからずっと、まだ建造されてない天龍ちゃんのことばかり考えていたわ。

駆逐艦や海防艦の子達は可愛いから元々好きだったし、後から建造される天龍ちゃんはきつと、もっと好きになることは間違いないわ。

そんな「好き」に囲まれながら一緒に戦う。辛いけれど楽しい、そんな毎日が続いていくと思つてのだけれど……。

「いつからだつたかしら？」

提督のことを気がつけば目で追っていたのは……。

最初は気の迷いだつて思つて忘れようとしたけれど、二度、三度と続いてからはだんだん意識しちやつてく……次第にいつも提督を、提督の痕跡を探してるようになって……。

“提督を見るんじゃないやなくて、提督に見て貰いたい”

そう思うようになるまで時間は掛かったものの、なんとも私らしくない考えに辿り着いてしまったとつくづく思うわ。

所謂一目惚れってやつね。

どうして私がいかに提督を見ているのに、提督はあまり私を見てくれないのか。

……勿論、提督だって何十と居る私達艦娘の面倒を見なくちゃいけないから、ずっと私だけを見るなんてことは出来無いつてことは分かるわ。

でも“誰か”を見るなら、出来る限り自分だけを見て欲しくて……

どうしたら振り向いてもらえるかしら？

そう考えた結果、いつも提督の目に居座ってる彼女の評価を下げるといったとんでもない行動に移ってしまった。

その効果は絶大だった。……艦娘に対して。

とても驚いたわ。

だって提督もスチュワートから話は直接聞いたのだし、内容が内容なだけにもつと距離を置くと思っただけれど……ちつともそんな事ないんだもの。妬けちやつたわ。

それからは遠征、日常、作戦の時さえ微妙に距離を置かれるようになって……そこ

で『私は失敗した』って気が付いたわ。

普通に考えたら不和を齎す人は、煙たがられて当然だものね。私だったら提督を貶すような子が居たら刃を向ける衝動に駆られるもの。

でも、作戦が終わった後に金剛さんを始めとした少なくとも人達から叱られたことは悪くないと思っているわ。私のやり方は相当捻じ曲がっていたことに気が付いたから。

……まあ、そこで初めて私以外にも提督を慕ってる子がいることに気が付いた時は正直とても焦ったけれど、相手を下げることでの足の引つ張り合いをするのではなくて全員が高め合う、切磋琢磨出来る環境がそこにあつたことを知ることが出来た上に、その輪に入ることが出来たのは大きな前進よね。』

「まあ、私のしたことはしつかりと怒られたんだけどね〜」

そして今居るのが通称『お仕置き部屋』ってところ。

空き部屋に椅子と机、〃反省文書〃って書かれたノートだけが持ち込まれた、提督も知らない私達艦娘だけの部屋。

ノートをパラパラと捲ると、『暁を苛めてしまった。反省はしているが後悔はしていない』といった響ちゃんの反省文や『夜に騒いで迷惑をかけたけど、だったら全員夜に起きるようにすれば良いと思う』というあまり反省の色が見えない川内ちゃんの文まで

ある。

クスリと笑って今まで書いた長つたらしい文章を消してペンを執る。

この部屋に来た先人に従って簡単にエピソードを纏めて、書くのは短い文章だけ。アプローチの仕方を変えて、いつか必ず提督の隣に居座って見せる。

この戦いに関して言えば、天龍ちゃんが相手になろうとも引く気は無いわ。

『首を洗って待つてなさい♡』

「ふう……暇になっちゃったわ〜」

明日の朝になったら明日の秘書艦の子が鍵を開けてくれるらしいんだけど。せめて簡素で良いからベッドが欲しくなるわね。

「また読み返そうかしら……」

カチリ……バン！

「龍田さん！」

噂をすれば何とやら。スチュワートちゃんがこの部屋に来たわ。

私に折檻でもしに来たのかしら〜？

「私を笑いに来たなら〜回れ右し——」

「龍田さんの所為でメイド服着せられるんですけど!? どうしてくれるんですか!」

……え？

「あ、あら〜……可愛いじゃない♪」

聞いたところ、青葉さんが「良い一枚」の為に貸しを消費したらしい。

変なところに拘るスチュワートちゃんのことだから、きつと陰で練習してたりとかするんでしょうけど……見れないのが残念ね〜。

面白いとは思うけど、わざわざ既に高いハードルを更に高くする必要はあるのかしら？

青葉さんの行動に疑問を感じている内に、ひとしきり文句を言い終えて語彙力が無くなってきたスチュワートちゃんが出ていった。

書き終わった私の文章の後ろに、一文を加える。

『壁は高いけれど、私は絶対に諦めないわ』



故郷へ

圧縮

「やつぱり深夜から明け方はまだ冷えますねえ」

「そうだね。でも、刺すような痛みは無いだけ良いんじゃないかな？」

深夜の哨戒で深海棲艦も見えず、暇を持て余した俺は悴かじかんだ手に息を吹いて擦っては僅かな熱を握り締めながら独り言のように呟く。

すると、隣に居る時雨が相槌を打ってくる。

しかもわざわざ聞こえるようにマフラーを少し下げた。無視しても良いだろうに……律義なヤツめ。

季節は春。

とは言ったものの流石は東北といったところで、三月下旬なんて道路脇に雪が残ったりするんだから寒いったらない。

普通の女子も中高生になる頃には特殊な訓練を受けてるらしく、冬でもスカートだから艦娘もそうだったとしてもまあ分かる。めっちゃ寒い……というか痛いけど。

それなのに半袖だったり、人によつては夏や秋から変わらず腹が見えてたりする服装

なのは一体何なんだろうか。葛城さんとか長門さんは冬に死ぬんじゃないかと思ってただけど……体調すら崩して無いらしい。どーなってるんだ。

そんな長袖とか懐炉カイロとかがまだまだまだ恋しい季節に差し掛かると途端に姫、鬼級の目撃例が不自然なくらい減った。

比較的平和でいいじゃんって思っても、迷い込んだかはぐれたのか、時々駆逐艦とか軽巡が現れたりするから地元の漁師さん達からしたら溜まった物ではない。だからこんなクソ寒い夜に深海棲艦の影すら見えなくても哨戒は必要らしい。許さん。

「漁船に二、三人同伴すれば哨戒なんて今は要らないと思うんですけど……」

「どうだろう？ 未然に危険を察知するための哨戒だから、必要無いなんてことは無いと思うよ」

「そこなんですよねえ……」

「今日も深海棲艦が現れてないことが分かる」ってヤツ？ ちゃんとした意味があるから断れない。

しかも最近現れた深海棲艦が殆ど単独、或いは戦力に乏しかったって統計から今までの五人体制じゃなくてツーマンセルにして、代わりに一人当たりの哨戒の回数を減らして貰ったから断れない。

まあ

「そろそろ時間ですし戻りましょうか」

「そうだね」

後は警備府に戻るだけだし今日は哨戒担当の最終日。

一巡するには暫く掛かるからもう冷え込む夜に海に出なくても済むだろう。

朝食を食べつつ、今日の休みを如何に過ごすかを考える。

夜中の哨戒が終わって今は朝。睡眠欲に身を任せて昼まで寝るか、夜まで起きて自由時間を確保するか。

「何回経験しても究極の二択だな」

どちらにもメリットとデメリット両方が備わってるから選ぶに選べない。

……結局どちらにするか決めることが出来ずにぐぬぬと唸ってる間に朝食を食べ終えてしまった。

背中に朝日を浴びてたからウトウトしてしまい、このままでは寝落ちすると最後の理性が訴えかけて来たから半分寝たままの頭で立ち上がり、意思を持たない動く屍のような足取りで自室に戻る。

この半年の間に自室も随分と様変わりした。

俺一人しかいないにしては広すぎて、それでいながら机と椅子と布団以外何も無かったから独房みたいな雰囲気だった部屋は、今では元々の半分くらいのスペースになって、カラーボックスとか日用品が置かれていて生活感が出る。家具の大半を木目を意識してるから目に優しい。

半分になったスペースの残り半分は何かと言うと、水道を引いてもらった。自室に洗面台、W・C^{トイレ}、ビジネスホテルみたいな小さな風呂を作つて貰つた。

風呂やシャワーの際に人目を気にしなくても良くなったのは嬉しい。

だけど、一番嬉しいのは引き籠もる為のシステムが整つたことだ。

『日常が死んでる！ 何だコレは!? 折角の休みなのに楽しいこと一つすら無いじゃないか!』

休暇に暇を持て余し、魂の叫びを上げた去年の秋の俺よ。見ているか？

長期的なお菓子ローンは組まれたものの、完全に俺だけのフィールドを作り上げることに成功したんだ!

小物は俺が休みの日に買ってきたから良いとして、その半日の間に工事を終わらせる妖精さんたちは一体何者なんだろうね？

何度見ても満足できる自室に満足した俺は、力尽きるようにベッドへ倒れこんだ。

「墮落つて最高〜」

そう独り言を呟いてからゆっくりと起き上がって机に向かい、日記帳を捲る。

……ハワイで飛行場姫を倒した日付が半年くらい前に付いてた。そりやあ記憶も大分曖昧になる訳だ。

確かあの後に大本営に港湾棲姫と北方棲姫の引き渡し要求があつて、当の港湾棲姫がそれを断固拒否。『無理に連れて行こうとするなら今この場で自爆する』つて言つて引き下からせたんだっけ？ 覚悟キマつてんなあ〜つて思つたけど、自爆するさせるのはたこ焼きのことだつたらしい。

秋の頃には地元の漁業のお手伝いをしたつて書いてある。

まさか『秋刀魚を食べたい』つて駄々をこねる北方棲姫を相手にすることになるとは……港湾棲姫も止めるに止められなかつたらしいし……。

それと、漁師さん達に港湾棲姫と北方棲姫の存在がバレてさあ大変つて感じで超焦つた。変な灯台の所為で漁師さん達が例の島に立ち寄つてたから初見じゃないつて聞いた時はビビつたなあ……。

年末はクリスマスとか大掃除とか、いつの間にか溜まっていた書類の処理で忙しかったりした。……空気を読んだのか寒いのは嫌なのか、深海棲艦の侵攻も無かったし。

そんな感じでイベントは盛り沢山。

飛行場姫以来そこまで激しい戦いが無く、比較的平和に過ごした半年の間に資材の備蓄を増やしたり建造したりしたから、艦娘の数は順調に増えていってる。

開発とかにも手を回し始めたから最初期よりもペースは落ちたけど、それでも数日、一週間おきに新人が建造されるのはヤバイ。そろそろ顔と名前が一致しなくなってきた人が居る。陽炎型と夕雲型の人とか。

『今日から陰キャの魂が復活する』

そう日記に書いてフツと笑ったところで、部屋のドアがノックされたことに気が付いた。

「何でしょう？ ……提督」

やけに不安そうな提督がドアの前に立っていた。

正直に言えば、提督が俺に話しかけて来た時つてのはだいたい面倒なことがあった場合である。しかも今回は不安そうな顔。

嫌だなく嫌だなく……無視して部屋に籠りたいなあ……。

でも、上司だから従わないといけない。面倒ごとからは真っ先に逃げる駆逐艦も居るってのに……。

執務室に向かう途中、隠れるように溜息を吐く。

そして言われた言葉は……

「アメリカへの出向？」

代り映えしない日常に、新しい刺激が齎された。

二度目は嫌

「アメリカへの出向？」

「うん。大本営から声がかかってね」

「そうですか」

口ではそう答えながら、心の中では盛大にブーイングをする。

「夜の哨戒勤が終わった後だから寝させて」くらいは言っても良いと思っただけど、露骨に嫌そうな顔になってないか自分でも心配になったから取り敢えず話だけは聴いておこなうかな。

出向。

艦娘は世界中に居る。

同じように世界中に深海棲艦は居る。

アメリカを始めとする世界中に艦娘、妖精さん、提督候補は居るが不思議なことに日本よりも少ないらしく、つまり深海棲艦に対する戦力が日本よりも少ない。

突如現れた深海棲艦という危険に対して各国の政府がなんやかんやあって、日本は艦

娘って言う対深海棲艦に特化した戦力を世界に派遣するように要請。代わりに日本は色々融通してもらっているらしい。

つまり「防衛手段貸して？ タダでは言わないから」ってことなんだとか。そんなことを掻い摘んで鹿島さんに聞いた。

政治の世界って怖えなあ……。

そんなおつかない話を改めて提督に聞いた俺は

「確か六人でしたよね？ 明後日までに行きたい人集めておきますね」

そう答える。海外なんて行きたくない！

水もまともに飲めないのは修学旅行で懲りてるから、行きたい奴に行かせときゃ良いでしょ。

「残念なことにスチュワートは名指しで指名されてるから断れないよ」

「……」

なん で ？

あー……：そういうえばまだ大湊に来てから一年経ってないし、当初受ける罰則の期間は終わって無いんだっけ？ あまりにも普通に他の人と同じように過ごしてたから忘れてた。でもさあ……：指名ってどうなの？

「それに、もうメンバーは決めてあるんだ」

「はあ……」

だつたらもつと早く言ってくれねえかなあ紛らわしい。

「他のメンバーは長門、加賀、神通、初風、陽炎だ」

「……声を掛けてきます」

まだ朝だし、どうせ俺が声かけてきてくれって言うんだろ？　ダルいけどやらなきゃいけないのが辛いところ。

「それはもう朝潮が済ませている」

「えっ!？」

バツと振り返る。

朝潮……「？」じゃねえよ。俺の仕事減らしてくれるなんて良いヤツだなあ。後で取っておいたお茶請けをあげよう。

感動のあまり朝潮の頭を撫でながら考える。

「……休みのところ済まなかった。話は終わりだから、ゆっくり休んでくれ」

本当だつたら今頃ぐっすり寝てる筈なんだけどなあ！　せめて夜に連絡寄越してくれや！

「朝潮、どう思います？　コレ」

「？ 話の内容に問題は無かったと思います！」

そうだね。でもそうじゃない。

少しは気を使えよって感じのことを言っただけで、朝潮の提督に対する忠誠心が高すぎる。

朝潮を使つて負の感情愚痴をガードするなんて卑怯だぞ！

「……では失礼します」

提督め、勝つたと思うなよ……

再び自室に戻つて、眠気が我慢できないからそのままベッドに倒れこむようにして寝る。

シャワーすら浴びてないけど……起きてからで良いか。どうせ部屋には鍵掛かってるし誰も入つてこれないだろう。

「はやくやつと寝れる。うおお……」

「出向？ あー……………そう言えばそんな事言われたような」

「ちよつとく？ 大事な話を半日で忘れるとか心配になるんだけど!」

「うーん……………妙高姉さんに言われたことならどんな些細なことでも三カ月は覚えてられるんだけどな」

「初風。私の話を覚えてくれるのは嬉しいのだけど、大事な話は私の言葉よりもしっかり覚えておきなさい」

「はい！ しつかり覚ええました!」

「……………」

初風の後ろに左右に振れる尻尾が見える見える……………懐かれまくって困惑気味の妙高さんも新鮮だけど……………盗ったりしないから睨まないでよ初風。

「……………スチュワートはどう思う?」

夜。食堂で陽炎を見つけたから声を掛けて、近くに居た妙高さんから初風を借りようとしたときの会話がこれである。どう思うってそりゃあ……………

「初風は実は妙高型だったってことにおけばいいんじゃないですかね」

「ダメよ！ 初風も私の大事な妹なんだから!」

「でもあれは……………陽炎は泣いて良いのでは?」

初風って妙高さんが来てからはずっと妙高さんと一緒に居るような気がする。史実

で何か関わってるのか？

艦娘が増えて来たから色々なやり取りを見るのは楽しいけど、流石に本当の姉なのに全く構われない陽炎は泣いて良いと思う。

お喋りしてる間にいい感じに冷めたカレーに幸せの赤い辛さ調節の粉末をかけて混ぜる。うん、辛い。

「……よくそんなモノが食べられるな」

「うえっ!? ……長門さんもどうです?」

急に声が掛けられてビックリしたから、仕返しとばかりにスプーンでカレーを掬って話しかけてきた長門さんに向ける。確か辛いのが苦手だった筈だから食べたりはしないだろう。

「……遠慮しておこう」

やっぱりな。

「では私がいただきますね」

「!?!」

長門さんが案の定遠慮したから差し出したスプーンを引っ込めようとしたら、横から出て来た加賀さんに食べられた。

「ゴホッ これは……想像以上ね」

「そんなにか……それはさて置き陽炎と初風、加賀まで居るとは丁度いい。出向の話をしようと思つてスチュワートに声を誘^掛帙^け? 纏^よ医^う≧纏^とイ纏^し励^た◆纏^ん薙^だ□纏^が、
 纏^どウ纏^う? @纏^ん滂^んシ」

「菴^な募^に鞏^固纏^まセ纏^つ」 纏^んヲ纏^の纏^ま薙^ん? 纏^よ

「よ く き こ え な い で す」

やつべえ……混乱のあまりなんて言つてるのか全然理解できないぞお?

カレーが髪に付かないように手で押さえる加賀さんが滅茶苦茶セクシーだった……つて違う違う。

冗談半分で差し出した俺のスプーンに加賀さんが口をつけたつてことは、このスプーンを俺が使うと間接キスに該当するんじゃないだろうか!?

それはヤバイ。なんかヤバイ。何がヤバいか分からないけどヤバイ。

なんとしてでも回避しないといけない。

考えろ考えろ……何か方法は……あつた!

「本当に大丈夫なの? さつきから顔が真っ赤よ?」

「何でもないです! ……ああスプーンが!」

スプーンを落とす。これで洗いに行つて離脱出来る。

天才!

「洗ってきますね！」

「そうした方が良いだろう」

逃げるようにその場を後にする。

「様子が変ね……」

「疲れてるんだろう……妙高、席を借りても良いか？」

「いいえ、きつとここにもう一人来るんですよね？ でしたら私は席を外します」

「だったら私も！」

「アンタは残ってないとダメでしょうが！」

「お待たせしました……」

スプーンを洗い終わって席に戻ると、神通さんも来ていた。

「大丈夫なのか？」

「まあ、はい」

流石に不自然過ぎたか？ まあ、加賀さんの顔を見ないようにすれば問題は無いか。

思い出すだけでも恥ずかしい……

そんな俺の思考を知る筈の無い他のメンバーは、出向について佐世保で演習ついでの話を聞いてきたらしい神通さんから説明を受けて色々なことを決めていった。途中で意見を聞かれたりとかしたけど、相変わらず俺は生返事しか出来なかつた。

「——では出発は明後日、貨物船の護衛と移動を兼ねる、期間はアメリカに到着してから約一ヶ月。各自私物は旅行鞆二つまで。ここまでで何か質問はあるか？ ……無いみたいだな」

長門さんが仕切つて、そのままスルスル話が進む。

特に目立った内容が無いから、俺はそのまま「アメリカの艦娘つて誰が居たっけ……」と別のことを考え始めていた。

「では準備を進めておいてくれ」

その言葉で現実に取り戻されて、さて何が必要なんだつたかと思ひ出すと。旅行鞆を持つてないことに気が付いた。借りものの鞆は返しちやつたしなあ……

明日一日の予定が買い物で潰れるだろうと思つて、溜息を吐いた。

コンテナ船

出向に持つて行く旅行鞆の買い物を終え、忘れ物を取りに佐世保鎮守府に寄つたその帰り。

「まさか本当に買い物で一日が潰れるとは……」

同じく休日だった綾波と狭霧に付き合つたのが間違いだつたかもしれない。

シヨッピングモールに入つたら服屋ばかり入つていくんだからさあ……考える時間なげーよ。まあ、二人は楽しそうで良かったから、そこまで後悔はしてない。どっちにしろ駅で電車を待つ時間が変わるだけだつただろうし。

そんなこんなで大湊に帰つてきたのは夜。

「ハア〜……」

人の居ないバスで溜息を吐く。

これから鞆に必要な物を詰めていかないといけないと思うと面倒で仕方ない。

「しかも乗り物酔いだよ……死ぬわ俺」

次の日の早朝。

都合よく体調不良になってたりしねえかななんて考えとは真逆で、殆ど寝てないにもかかわらずスッキリ目が覚めてしまった俺はパンパンになった鞆から要らない物を出す作業をしていた。

モサモサしたものを引つ張り出すと、なんと冬に雪かきをした時に着た防寒着が出て来た。

「……」

出向の目的地はロサンゼルス天の近くらしい。調べた限りだと一年を通して暖かいってことが書いてあったのに……昨日の俺は何を想定してコレを入れたんだろうか？

その他にも耳かき天に付いてるフサフサ、養生テープ、単三電池と意味不明なラインナップが出るわ出るわ……。

全部出してから最初から詰めると三分の二くらいの重さになった。

そんな無駄極まる取捨選択の間にも時間は流れていて、結局遅刻スレスレになった頃に長門さんが部屋にやってきた。散らかってる部屋に入れる訳にはいかないと、大事な物と鞆だけを持って部屋を出た。

「帰ってきてくれ」

「今生の別れって訳でも無いでしょうに……」

見送りに来た艦娘を代表した提督の言葉に対して空気も読まずにそう答える。

この提督はいつもそうだ。「勝利」とか「戦果」なんて言葉は使わずに、毎回毎回「帰ってきて」とばかり言う。いざとなったら逃げてもいいから沈んで欲しくないって意思を感じる。

「金剛さんたちと上手くヤツてくさいね？」

そんなに寂しいなら慰めてもらえよ。きつと楽になるぜ？

「あ、ああ……」

「そっだぞ提督。我々は少しの間ここから離れるが、それでも頼もしい仲間は沢山居るだろう？」

「……そっだね。私もしつかりしなくては」

そっだぞ。いつまでも俺に構ってんじやねえぞしつかりしろ。

綺麗な人は沢山居るんだし、好かれてるみたいなんだからそろそろ期待に伝えてやったらどうだ？ 恋する乙女をあんまり焦らすと病んで取り返しのつかないことになるぞ俺は詳しいんだ。

「よし、行くぞー！」

長門さんの号令に従って出発する。「お土産よろしくー！」……アメリカの甘ったる

いお菓子でも買つてこようか？

皆から見送られながら警備所の前に停まつてた大型車ハイエースに乗り込む。運転は長門さん。
……いつの間にも免許取つたの？

……自動車の運転ならやったことあるし「代わりますか？」つて訊いたら「無茶するな」つて頭ポンポンしたの忘れねえからな？

あつ、自室に鍵かけたかなあ……

「大湊警備府の艦娘の皆様。今回はよろしくお願いします」

「こちらこそ、よろしく頼む」

警備府から少し離れたところには、貨物船が泊まつていた。

今回の出向のリーダーである長門さんが挨拶をして、簡単な日程を話したらそのまま乗組員の部屋まで案内される。

意外と快適そうな部屋に驚いてると、荷物だけを降ろして長門さんの部屋に集合するよう言われた。移動中のコンテナ船護衛の班分けをするんだとか。

「夜、昼の当番は……丁度六人だから半分の三人ずつでどうだろうか？」

「異議あり！ 長門さんと加賀さんは二人で十分だと思います！」

「バランスを考えろバランスを！」

「私もそうした方が良いかと……」

「実際神通さんを夜に回すのは確定として、私たち駆逐艦の誰かを昼に回しても過剰戦力だと思う」

「私だけでは不十分と？」

「む……いや、確かに私と加賀でどうとでもなるが……」

「そら見たことか！ 誰も長門さんの案に賛成しないじゃないか！」

「それに、二人でどうとでもなるって言っちゃってるんだし任せていいでしょ。」

「長門さんか加賀さんの片方だけでも良いんじゃない？」

「あら、海の上で油断は大敵よ？」

「初風さん？」

「ヒッ」

軽口を叩いた初風が神通さんに笑顔を向けられたことで震えあがり、陽炎を盾にして視線を遮ろうとしていた。

……神通さんの訓練は相当厳しいからなあ。夜戦に関しちや川内さんとはベクトルの違う厳しさがある。既に陽炎と初風を含めた数人は苦手意識持つてみたい

だし。……俺は参加したこと無いけど。

「いや、何時になったら出発すんねん」

案外こんなもんだったりするのかなあ。

やっぱり点検とかに時間が掛かってるんだらうなあ。

護衛についても話し合いが終わって暇になった俺は、時々すれ違う作業員に会釈をしながら船内をウロウロしていた。

……関係者以外立ち入り禁止の部屋多くなあい？ まあ、俺とかがボイラー室とかに入って「ポチツとな」して取り返しをつかないことになったら全く笑えないからしょうがない。

少々退屈を感じたままに甲板に上がると見えたのはコンテナの山。……そりやあコンテナ船だから当然か。

そんな感じで感心していると突然揺れた。もしかしたらと思つて淵まで行くと、陸地が段々と離れて行くのが見えた。

……普段から出撃とかしてる時にも艀装付けてるから実質同じような事してるのに、自分で動かないのに海の上を移動できるということになんか特別な気分になった。

「深海棲艦が出たぞー！」

「!? あのさあ……」

あまり襲われることは無いって最初の説明で言っただけ？ それにしては動き出してから深海棲艦が発見されるまでの時間が短すぎると思うんだけど……

「フツ、この長門が居るんだ。この船に傷一つ付けさせはしないさ」

さつきから艦装を着けて海の上に立っていた長門さんが自信ありげに宣言した。

「戦いぶり、しつかり見させてもらいますからね〜!」

「……尚更頑張らないといけないな! 掛かって来い深海棲艦共!」

「見てるぞ」って感じでプレッシャー掛けるつもりが、何故か長門さんが逆に張り切り始めたぞ?

……空回っても加賀さん居るし別に良いか。やる気がある分には何の問題も無いだろう。

「お手並み拝見といこうかしら」

「……? 加賀さん!」

何故甲板に……長門さんと一緒に深海棲艦への対処の筈では……?

「そんなに驚かないで頂戴。乗組員に訊いたらはぐれた駆逐級ばかりの様だったわ。そこまで脅威はないみたいだから、甲板から艦載機飛ばすだけで充分だと判断したわ」

本当? 思いつきり油断してるけど大丈夫なの? 加賀さんに限ってサボりたいと

かは無いだろうけど……

「あ」

「どうかしたの？」

俺、気付いちやいましたあゝ

「なるほどなるほど……加賀さんはいつ来るか分からない深海棲艦に備えて資材を無駄遣いするつもりは無いと。つまりそういうことですね！」

うん、そう考えるところ以外俺には考えられない。

分かってますよと言わんばかりに加賀さんを褒めちぎると

「そこに気が付くとは流石ね」

って言われた。

如何にも実力を隠してますよって感じるセリフだけど……本当はサボリたかったの
ね。

意外だけど……分かるよ？ 移動の時くらいはゆっくりしてたいよね。

目が泳いでるから気が付いたけど。

目は口程について本当だったんだなあ。

鬼と灸

「流石は長門さん！ 頼りになりますね！」

駆逐級だろうが容赦なく全力でフツ飛ばすのは格好良かったぜ！ みたいなことを言つてここぞとばかりに持ち上げる。頼りになるのは本当だし。

艦載機で偵察と言うような恒常的な仕事が無く、大きな作戦以外で出撃することが殆ど無い戦艦。「他の人に行かせた方が効率がいい」みたいな感じで演習に行かずに遠征を繰り返してる俺は戦艦の活躍は拝めてない。

だからこうして好感度……と言つたら失礼か。まあ、友好的に物事を進める為に柄にもなく色々としてたりする。長門さんの反応からして喜んでもらえたようだ。

「フフフ……悪いな加賀、手柄は貰ったぞ」

「……今日だけならそれで問題無いと思うわ。だけど、到着まで補給が無いことを考えると手を抜くときに手を抜くのも大事だと思うわ」

長門さんに答える加賀さんは尤もらしい事言ってるけど、自分が何もせずに見物サボッしてゐることを正当化しようとしてるだけでは？ 俺は訝しんだ。

「辺りに深海棲艦は居ないみたいだし、乗組員に伝えてくるわ」

……サボってるなんて思ってますみませんでしたーッ！

「それでは行きましょう」

「はいー！」

「二人とも気合は十分ですね。頼もしいです」

夜。艦載機によつて視界が確保出来ないから俺たちの出番だ。

これから死刑宣告でも受けた受刑者みたいにビビりまくつてる陽炎と初風と、とんでもない圧を撒き散らしながら微笑みを浮かべる神通さんの対比がヤバい。ニヤけるのを我慢してたら腹筋割れそう。

神通さんから深海棲艦を見つけた時の対応について簡単に説明を受け終わると、二人が息を揃えて「見回りに行つてきます！」と散つていった。

……確か二人は神通さんの門下生だっけ？ そんなに神通さんが恐ろしいのか？
「スチュワートさんに見て貰いたい物があるのですが」

じゃあ俺も予定通りにコンテナ船の後ろ側に移動しようとしたときに、神通さんから一枚の紙を渡された。

神通さんの探照灯で照らされて中身を読む。うわ達筆う！

「結局私は貴女を指導出来ませんでした、大湊にも『神通』が建造されたことを知ったので、演習に来た神通私に、貴女の訓練をするようにお願いしました。余計なお世話ではないことを願います」

「Oh……」

まさかの訓練のお誘いだった。

アカン……超逃げたい。

でもコレ多分……いや間違いなく好意からなる提案なんだよなあ……そんなの断れないじゃないか。

地獄有難への片道いお切符手紙を握り潰したい衝動を抑えて神通さんを見ると、神通さんは既に知ってたのか、獲物を見つけたような目で俺を見てくる。

『何故か私が訓練のお誘いをしても皆さん逃げてしまうのです……』と佐世保の神通私は言っていました。日頃の訓練は大切だというのに……私も訓練のお誘いをしようとしても逃げられることが多くて……」

悲しそうに目を伏せる神通さんだけど可哀想だなんてこれっぽっちも思わない。何故なら訓練のお誘いの時に『狩る側』の目をしてたら初見の人だつて逃げるに決まってるからだ。そして一度でも経験すれば次からは逃げるだろうね!?

「スチュワートさんはそのようなことはしないと信じてます」

そんな信頼は要らないかなあ！

「……次からはもう少し眼をどうにかすると良いですよ。無意識かもしれませんが、凄いい目をしてますから……」

「えっ？ ……忠言ありがとうございます。後で鏡を見に行かないと……」

無意識かあ……そっかあ……なんて思いながら、佐世保で神通さんに訓練のお誘いを受けた時のことを思い出す。……穏やかに微笑んでたっけ？ 疑似餌かな？

「……コレをどうぞ」

「はい？ あの」

いきなり探照灯を渡された。

「今持つてる砲を渡してくれませんか？」

「え？ ……どうぞ」

変なことを言うなと思いつつながら神通さんに砲を渡す。

「ありがとうございます。少し気になることが出来たので船内に戻りますね」

「えっ」

その砲を持つて!?

今回は盾には留守番をして貰っている。投擲物なんて奇妙な物を外国に持ち込むのは抵抗があったから、珍しい事に完全にノーマルな装備となっている。

そんな状態で砲が無くなるのは心細いって言うか何と言うか……

「ちよつと、え？ 返してくださいよソレ」

「……何のことでしょう？」

それでは訓練になりませんよね？ と言いながら船内に戻っていった神通さんと、ポツンと残された俺。無情にもコンテナ船は動き続け、予定通りコンテナ船の後ろに就くことが出来た。

「……」

『説明がまだでしたね。ごめんなさい。私は船上から見ているので、私が担当する筈だったところもスチュワートさんが守ってください』

「あの……砲……」

それが無いと防衛もクソも無いんだけど!? 盾も無いんだぞ!

『深海棲艦が近くに居たら探照灯を向けて注意を引き、船に被害が及ばないようにしてください』

ひたすらに避けるってこと!? 無茶振りが過ぎる! 鬼かこの人は!

……頼むよ。片手で数えられるくらいの数の駆逐級だけが来てくれよ。オマケも強敵も要らないからさ! いやマジで。

夜は更けていく。

一週間の楽しい船旅の始まりはきつかったなあ……

日中は波が伝わってガクガク揺れる部屋で十分に寝れなかった俺は、日記帳に神通さんの訓練の内容を書いておこうと思つて昨日の夜を思い出す。

『確かに、逸れた弾などが船に当たつては大変ですね』

安全第一だから！ 訓練に熱を入れ過ぎる余り護衛つてこと忘れてるんじゃないのこの人!?

『と、いう訳で加賀さんに待機していただいていますので安心してください』

「え？ ご、ご迷惑をおかけします……」

『気にしないで頂戴。私だつて、暗くなると戦力外つて扱われるのは気に入らないの』

『つまりこれは私の訓練でもあるの』と語るのは加賀さん。空母の事情は分からないけどまあ、戦力外通告つて結構心にダメージ来るからねえ……

俺が失敗したとしても加賀さんがカバーしてくれるつてことは分かった。加賀さんが居るからにはコンテナ船が沈むなんてあり得ないだろう。

だとしてもコンテナ船が無事でも俺が無事で済まない事に変わりはないと思うんだ

が？

『大丈夫です』

……絶対に大丈夫じゃ無いぞ。

『スチュワートさんならそんな危機に陥ることは無いですよね？』

だから言い方！ 「いや無理っス」とか「普通にやらかします」なんて言えないようなこと言わないで！

『因みに、深海棲艦が現れないようでしたら私がお相手致します』

「……ファツ!？」

嘘だろオイ。

「い、いや……それだと深海棲艦が攻めてきたらどうするつもりですか？ 万全の状態
で迎え撃つのは当たり前だと思うんですけど……」

『万全の状態を迎え撃つ、ですか……甘いですよ』

その言葉と共に、通信機越しに聞こえる神通さんの声から穏やかさが消えた。

『遠征ばかりで少々弛んでるのではないですか？ 実際の作戦の時にこちらが疲弊して
いたとしても深海棲艦は待つてくれないんですよ?』

「……」

それは香取さんにも言われたから分かってるんだけどさあ……心構えとかそういう

ことじゃ無くて本当に実行しようとするのは流石にちよつとどうかと思う。

『アメリカの方々にそのような痴態を晒さぬよう、少し灸を据える必要が有ると思いませんか?』

「え? あゝ……それもそ……いや結構でホワイ!？」

『神通さんは鬼』

夜の訓練を振り返ってたら、無意識的に日記帳に一文だけ書き込んでいた。

「いやゝ……マジで不意打ちしてくるとは思わなかったなあ」

いきなり甲板から魚雷投げてくるんだもん。音出ないから探照灯で光が反射して無かったらそのまま沈んで深海棲艦にジョブチェンジしてたと思う。

香取さんも不意打ちとか騙し討ちは多用したし、俺だつて奇抜な方法でダメージを与えるくらいはするけどさあ……溜息を吐く。

「……良い事思いついた」

『次からは陽炎と初風も巻き込む』

俺一人だけだなんてなんか納得できない。

仲間を作って一緒に神通さんを打倒しようと思った。

初めてではないらしい

「畜生……」

甲板で缶コーヒーを啜りながら呟く。

頭の中に浮かんでくるのは昨日までの出来事だ。

『イヤよ！ ……私じゃなくて陽炎でも誘ってみたら？』

初風からは素気無く断られて

『え……ちよつと遠慮しておこうかな……アハハ』

陽炎からは普通に断られて

『困っているようだな？ どれ、この長門に任せるがいい！』

『申戦N』

『も？ もうせん……なんだって？』

『申し訳ありませんが戦艦はNGです』

『クソツ！ 何故私は戦艦なのだ!? どうすれば良い!?』

『その艤装を清霜にあげたらどうですか？』

『それだ!』

『それだ! じゃないよ……』

ポンコツと化した長門さんを断って

『……応援してるわ』

『はい……ありがとうございます……』

加賀さんからの応援を受けて

『来ましたね。途中で逃げ出さないことは良い事です』

『お、押忍!』

『——今日はここまでにしましょう』

『お……押忍……』

神通さんから扱かれた。

今日が到着予定日じゃなかったら今頃過労死してたんじゃないやねえかななんて考えながら、進行方向で仁王立ちしてる長門さんを眺める。

一週間に渡って夜に行動してた上に、疲れからか日中は死体の如く寝てた。しかも時差と呼ばれるものが世界に存在しやがるお陰で体内時計は滅茶苦茶になってる。

「長門さんはいいなあ……」

探照灯一つで神通さんの猛攻を避け続ける訓練を受けた俺は、自らが動くまでもなく、艦装をぶつ放してくれるであろう長門さんをイメージして視線に羨望を乗せた。

「はあく……あふ……太陽が憎いぜえ」

「意外ね」

「ホワアアイ!」

絶対に心臓止まった! どうしてくれんの!?

加賀さんはすぐそうやって俺の背後に音も無く忍び寄る!

「驚かせて悪いわね。スチュワートの言葉が意外で」

「あく……まあ、普段は色々と相談されることが多いので……こういったときくらいはゆつくりしてもいいかなって思いました」

そこでまた欠伸が出そうになったから手で隠す。加賀さんも夜に行動してる筈なのに全然眠そうじゃない。どうなってるんだ。

「本当は江風とか涼風辺りと一緒に騒ぎたいんですけどね。何故か真面目とかいうイメージ出来ちゃって……どれもこれもあのバカ提督が悪いんすよ。もつと頼りになる人はいっぱい居るでしょうに」

普段からの鬱憤をブチ撒けるかのようにぶつきらぼうに言ってから缶を空にして、手

摺りに叩きつける。

最高におっさん臭いけど、それはそれ。

「そう……苦労してるのね」

「誰かが提督の一番になってくれれば大分楽になるんですけどね」

折角俺自身は仕事日常や私事以外では提督に関わらないようにしてるのに、未だに提督は特定の

誰かを近くに置きたがるうとしない。

……やっぱり提督はホモなのでは？

他愛のない話を続けていたら、加賀さんが遠くの空に艦載機が飛んでいるのを発見して艦載機を飛ばした。

いよいよ加賀さんの出番かと思って茶化したらどうやら敵性の艦載機では無いと答えた。

どうして分かるのかと訊いたらところ「アメリカの戦闘機」らしい。

つまりアメリカの空母の防衛圏内に入ったってことで間違いないだろう。

「長門さん、船内に戻って支度を済ませてください」

『了解した』

「私も戻るわ」

「はい」

長門さんと加賀さんが船内に戻っていった。

すると、しばらくコンテナ船上空を大きく旋回していた艦載機が俺の近くまで高度を下げてきたので蜻蛉を止めるように掌を上にして腕を出したら、そこに艦載機が停まった。

「はえ〜……やっぱ日本の艦載機とは全然違うねえ」

なんか近代的！ メタリックなボディが格好いいね！

『艦載機の綺麗な着陸に10点をプレゼント！ もしもしく？ 聞こえますか？

……ンン、ッ！ 私たちの仕事はアメリカの制圧。素敵なお友達を連れてそっちにいくので降伏の準備でもしておいてください』

一通り観察してから艦載機に英語で冗談を言つて、再び空に帰した。

「アメリカよ、私は帰つて来た……なんてね」

水平線にぼんやりと映っていた島の輪郭は随分大きくなっていった。
アメリカ大陸

「予想よりも暑いわね……」

加賀さんの一言は恐らく全員の総意だろう。夜間は息が白くなるような環境から、

たった一週間で最高気温が二十度を超えるような環境に移動すればそんな感想は当然だと思う。

アメリカに近付くにつれて徐々に暖かくなってたのは感じてたけど、アスファルトの上立つと反射で厚さ倍増って感じがする。

「でも日本よりもカラッとしてますから、蒸し暑さは感じませんね」

神通さんの言う通りで、暑いのは照り付ける太陽光だけで、空気は乾燥してるから日本の水の中に居るかのような息苦しさは無い。やっぱり日本の夏ってヤバイよな……

「そんな事よりアメリカよアメリカ！ ほら、カメラ持ってきたの！ 上陸記念に一枚撮りましょう！」

「陽炎、準備良いね。まあ、折角だから撮っちゃおうよ」

あ………陽炎の反応が正に初めて海外に来た子供と同じで和むわ……。陰キヤの俺は通貨や言語、文化と常識が違い過ぎてもう二度と行きたくないって思ったけど、陽炎は何時まで持つかな？

「燥ぐ気持ちも分かるが大人しくしろ。旅行で遊びに来た訳じゃないんだぞ」

コンテナ船が泊まり、俺たちが降ろされたのはアメリカの鎮守府の隣。

長門さんが陽炎を鎮めていると、一人の男が近寄ってきた。

「日本の艦娘の皆さん、ようこそ」

「！　！」

およ？　日本語じゃん。

ちよつと片言だけどかなり流暢な日本語で話しかけて来たのは金髪の若い男性。

そして隣に立って無言で俺たちを見つめる明らかに一般人を逸脱したレベルの美人さん。

直感で分かったけどこの二人はアレだ。アメリカの提督と艦娘だ。

ピンポイントで俺たちに話しかけて来たし間違いないだろう。

「……」

「？」

金髪の如何にも仕事が出来そうな艦娘から不思議そうな目で見られたことでハツと気づく。神通さんからの特訓の所為でつい隙を窺うように見てしまった……ヤバイヤバイ。……つて神通さんも同じようなことしてるし！

ああ……第一印象がどんどん悪くなる……。燥ぐ駆逐艦二人ならまだしも野生動物のような目で相手を観察する二人とか無いわ。不気味過ぎて俺じゃなくても関わらんとこつてなるし。

『済まん、代表として挨拶をしてくれないだろうか……』

ちよつと長門さん!?　わざわざ通信を使ってまで無茶振_{選手交代}りは酷いって！　周りの文

字が英語だらけだからって尻込みしないで！ 相手は日本語喋ってるんだから落ち着いて対処して!?

「……お出迎えありがとうございます。ございます。私達は大湊警備府から出向された艦娘です」

苦笑いしながら提督と思われる男に挨拶をする。

俺に続いて他のメンバーも礼をする。

「はい。私はアメリカのロサンゼルス基地の提督をしてるアレックスです。移動しましょう。付いてきてください」

早速移動するようだ。

さつき長門さんが言ってたけど、観光しに来た訳じゃないから気を引き締めていかないと……

緊張六割、楽しみ三割、義務感二割の合計十一割、全力で頑張ろうじゃないか。

そんなことを考えていたら、アメリカの艦娘が話しかけてきた。

「ねえ、アメリカを制圧しに来たって冗談でしょう?」

勿論冗談だよ。

「……金属探知機に引っかからない武器だってあるんですよ。例えば拳とか」

「あら怖い。……フツッ。これからよろしくね」

……言語が通じるってだけで安心するなあ。

楽しみになってきたかも。

フアーストコンタクト

「そろそろ到着だ」

そう言われたけど……建物的に殆ど隣だし、なんならコンテナ船から降りる前から既に丸見えだったからアツハイくらいの感想しか出てこない。

アメリカの基地と言う名の鎮守府の入り口には当然、日本では見たことが無い艦娘が並んでいた。その数は十人ちよつと。

緊張を一回落ち着かせたいから人目の無いところに行つて休んで良い？ なんて言いたいけど、先導するアレックスさんが止まらないから俺たちも止まる訳にはいかない訳で。

そのままスタスタと並んでいた艦娘の列の前まで移動したアレックスさんがクルリと振り返つた。

「改めて、ようこそ大湊警備府の皆さん」

その一言の後に、後ろに控えていた艦娘達が頭を下げた。

アメリカかって頭を下げずに握手とかハグのイメージあつただけど、そんなことはなかったのかな。

どうでもいいところにトリップした思考を一瞬で引き戻しつつ、今回も演習と同じようなもんだからお客様だから挨拶をしようと決める。

「ご挨拶ありがとうございます。私達は大湊警備府より派遣されました」

一言だけ言つて脇にズレる。

「こちらから長門、加賀、神通、陽炎、初風。そして私がスチュワートです。これから一月の間、よろしくお願いします」

そう言つて俺たちも頭を下げる。

……おお！ 引つかかることなく挨拶出来たぞ！ 海外でもそこまで酷い失敗をせずに挨拶が出来るようになるなんて、俺つて相当成長したのでは？ 偉い！

「こちらも自己紹介をしないとイケないみたいだ。だけど長距離の移動で疲れてるよね？ 中に入って一休みしようか」

「こつちよ。付いてきて。『サムは飲み物の準備をお願い』」

アレックスさんの提案で建物内へ行くことが決定した。隣に居る空母の人が案内してくれるらしい。隣に居た俺には聞こえたけど簡単にパシられたサムつて人は可哀想だなあ。

「皆さんも行きましようか」

「——よろしくね！」

アメリカの艦娘計13人の自己紹介、駆逐艦最後のジョンストンが紹介を終えた。

本当に自分の名前を名乗るだけの簡素なものじゃなくて、好きな物とかも交えながらの自己紹介だったから俺たちもすんなりと覚えることが出来た。人数が少ないってことと、やはり艦娘。特徴的で覚えやすいってこともあって人の顔と名前を覚えるのが苦手な俺でも覚えることができた。

俺たちも再び名前を言ってから好きなこととかその他諸々を互いに言い合っていた。

『随分流暢な日本語ですね。お陰でこちらでも緊張せずに会話が出来てます』

正面に座っていたアレックスさんに英語で話しかける。

『そりゃあ一年を通して日本から出向してもらってるからな。慣れるってこった』

日本語のときと随分口調が違うように聞こえるんだけど！ 日本語で相当まろやか(?)な雰囲気になってたんだね!?

それに慣れるって言ってもなあ。俺みたいに相当特殊なことになって無ければ母国語ともう一つの言語を習得するなんて相当な努力が必要になるか、相当頭が良いかのどっちかだと思っただけだ。

『それにしても助かるぜ。実にグッドだ。やっぱり日本語って難しくくてよく。やってら

れなくなるよな!』

『? 私には日本育ちですのぞでなんと……』

まあ、身体は置いといて、精神は完全に日本男児よ。

そんな俺でも“日本語”は平仮名、片仮名、漢字の三つに音読みだの活用法だの……完全に暗号だよねコレって考えた回数は数えきれないんだから外国人は尚更だろう。倒置法なんて英語に存在するのか?

『マジか……あ! 君のことは叔父さんから聞いてるぞ』

『おじさん?』

急に話題が変わって付いていけないぞ? おじさんってなんだ? ゲーム^{R P G}に出てくる情報収集のキャラじゃないよね? ちゃんとした人間だよな?

『あれ? 君じゃないの? アランって人知ってる?』

『? ……! アラン!?!』

え? 嘘だろオイ。

談笑してた全員が驚いて大声を出した俺の方を見るけど気にならない。気にしてられない。

アラン

その名前はよく知ってる。忘れてもすぐに思い出せる。

スラバヤから日本へ移動するときには釣り竿をくれた優しい人だ。頭の中で恰幅の良
いおじさんがチャーミングなウイंकを飛ばしてくる。

まさかこんなところに過去との繋がりがあつたなんて。

『ええ知ってます。それと、アランさんに頂いた釣り竿を持ってきてるんですよ』

『こりや間違いないな。そう、今回スチュワートが此処に来たのは偶然じゃない。俺が
指名したのさ』

『……だからかあ！』

凄く納得した。俺が出向のメンバーに組み込まれてたのは不思議に思ってたんだよ
ね。まさか海を越えたこんなところにその原因があるとは思わなかったわ。

『電話でもするか？』

『いいえ。今は遠慮しておきます』

スマホを出して見せてくるアレックスさんにきっぱりと断りを入れる。理由は、話し
たくないというよりは話す内容が纏まっていないから。

アランさんが居なければ俺は日本への旅路の途中で力尽きていただろう。つまりア
ランさんは恩人で、故に電話をするときははっきりとしたい。こんないきなり振ら
れて、滅茶苦茶な会話はしたくなかった。

電話をするなら自分から、言いたいことをしっかりと纏めてからだ。

『そうか。じゃあそのうちここに呼ぶから、その時は思い出話の一つや二つを聞かせてくれよ』

『!?!』

マンツーマンでの会話じゃないの？ 他の人も聞く感じなの!?!

アメリカの歓迎は非常に丁寧だった。

「サンドイッチを用意しています。少し待っていてくださいいね」

昼に近付いてきた頃そう言ったのはフレッチャーだったかな？ 底の見えない懐の広さを感じる……ついつい頼ってしまいそうで、包容力があって……でも、手に持つてる皿には最早殺意すら滲ませているようなものが乗っていた。

それはフードファイターが裸足で逃げだすレベルの大きさのサンドイッチ。目の錯覚とかじゃなくてマジなの？ どう考えても顎外しても食べられないよね？

「ソレ、どうやって食べるんですか？」

「ナイフで切り取って食べるんです」

手を汚さずに簡単に食べられるサンドイッチは何処へ行ってしまったんだ？

「[.....]」

食事中、食堂内は不気味なほどに静かだった。

嘘だろ？ 滅茶苦茶フランクな正に「陽の者^{キヤ}」の集う自由の国では無かったのか!? 全然そんな事無いじゃないか。身構えに身構えまくった挙句、トチ狂って「壁の染みになつてれば問題ない」って考えに辿り着いて損したぜ。

正直なところ俺は普通に緊張してるだけなのは分かるんだけどさ。スタートラインで躓いた感じがある。流石に無言でただサンドウィッチを食すだけなのは寂し過ぎるしな!

『プッ……もう我慢の限界よ。アイオワ、貴女似合つて無ぎ過ぎ!』

『しょうがないじゃない! 今までやったこと無かつたんだから!』

『やっぱりアイオワに猫かぶりは無理だつたわね』

『ちよつと! 私語は謹んで! 大湊^{オオミナト}の人達の前よ!』

突然前方が騒がしくなった。

耳を澄ますと互いに煽り煽られることばの応酬。あ、想像通りのフリーダムさだ。これこそアメリカかつて感じするよな。

『化けの皮剥がれるの早いっスね……』

そうツツコミを入れるのを堪えた。見てるだけで面白いアメリカの人達のやり取り

に水は刺さない方が楽しめるだろう。

「緊張してられないですよ、長門さん。適当に戦艦の人呼んできますから、場を盛り上げてくださいね？」

「なんだとっ!? いきなり無茶を言うな！」

「最初の挨拶」

「クツ……」

そんなやりとりを長門さんとしていたら、後ろの方から誰かが歩いてきていた。

「私はコロラド。貴女が大湊の長門？ ビッグセブン同士、仲良くしましょう？」

「ああ。よろしく頼む」

長門さんは同じく「ビッグセブン」を名乗るコロラドさんに声を掛けられて、俺は二人の時間を邪魔するまいと席を外した、

加賀さんは空母のホーネットさん、サラトガさん、イントレピッドさんに連れてかれて、神通さんはヘレナさんと談笑している。

陽炎型の二人はいつも近くに居る提督以外の提督が、それもアメリカの提督が珍しいのかアレックスさんに絡みに行った。

さつきまで静かだったのに……君達コミュカお化けかよお!?

恐るべき仲間たちのコミュニケーション能力に戦慄していると、アメリカの駆逐艦が

二人、俺のところに来た。

『貴女がスチュワート？ 大先輩よね？ よろしく！』

『こちらこそ』

『色々と質問しても良い？』

『勿論いいですよ。応えられる範囲に限りはありますけど』

そりゃあ「駆逐艦スチュワート」については調べたさ。少しでもロールプレイの役に立てればと思ったんだ。

ファーストコンタクトは良い感触に感じた。

他所は他所

『ところで不思議なんですけど、自己紹介は本当に全員がしたんですか？』

『そう、ここに居るのが全員だよ！ 何か変なことでもあった？』

コテリと可愛く首を倒したサミュエル・B・ロバーツことサムと、それに追従してフレッチャャー級の二人も「どういうこと？」と目で訴えてくる。

どういふことも何も、俺はお喋りを始める前から引つかかってたんだ。一緒に日本から来た人は変に思わないのか、コレガワカラナイ。

『その、ここに居る全員が自己紹介をしたなら……誰が深海棲艦に備えてるんですか？』
アメリカに来るまではホーネットさんが艦載機飛ばしてみたんだけど、今はそのホーネットさんを含めた全員が室内に居る。簡単に言うと哨戒も見張りもない状態に見えるんだよね。

セキユリティガバガバか？ 潜水艦とか艦載機が来たら一発でアウトだと思っただけど。

『バカねえ。常時艦娘を動員して深海棲艦に対応するのは日本くらいよ』

『えっ、そうなんですか？』

「予想してなかった言葉に驚くとともに本当かどうか質問する。いやね、疑ってる訳じゃないけどにわかには信じられないって言うアレよ。」

『そうだよー。アメリカここは日本ほど艦娘も提督も妖精さんも多くないし、どういうわけか深海棲艦はみーんな日本に向かっていくからね』

『普段はソナー装置やミサイル観測装置を応用して使用しています。私たち艦娘は深海棲艦が現れた時の防衛手段として機能する為に、普段はあまり海には出ないようにして
るんです』

『なるほど』

アメリカの賢いやり方に舌を巻く。

確かに提督と艦娘にしか妖精さんは見えないにしても深海棲艦や艦載機は一般の人にも見えるし、これは知らなかったがカメラにも映るし一般的なソナーで場所を特定も出来るらしい。

艦娘の少ない環境だからこそ艦娘の力を温存させるようになってるもんなんだなあ
と思いつつ話を聞いた。日本にも導入して休みを増やしてほしいなあ。

現代の技術である数観測装置を使ってるなら深海棲艦の艦載機がステルスを搭載しても大丈夫だろう。

だけど、普通の兵器だと小さい艦載機を撃ち落とすことも容易ではないってイントピ

レッドさんが言つてたんだとか。やっぱり艦娘と深海棲艦ってスゲーわ。

ソナーは基地を中心に点々と沈められてるんだとか。壊されたりしないのかと思つて訊いたら『壊されたらその近くに深海棲艦が居るつて分かるよ』つていう当たり前な答えが返つてきた。

『むしろいつも深海棲艦と戦つてる日本の艦娘はシユラよ！ アツキラセツよ！』

ジョンストンは……言いたいことは分かるけど絶対に意味が違う。特に悪鬼羅刹はどちらかと言うと深海棲艦を指す言葉だと俺は思うね。

『では普段は何を？』

日本ほど海に出て無いならきつと普段の過ごし方も随分違うんだろうと思つて、普段は何をしているかを訊いてみた。

『日本なら遠征、と答えるんでしょう。ですが駆逐艦が私達三人だけで、軽巡もヘレナさんとアトランタさんの二人しか居ませんし、潜水艦も居ないので……』

『あつ』

そつかあ。そもそもこつち^{日本}みたい^本に六人で行動出来ない上に、軽巡含めた五人で遠征に行つたら行つたで基地に残る面子が八人しか居なくなる。

日中なら戦艦と空母が殆どだから心配は無いだろうけど、夜に攻めて来られた時は遠

征に行った人たちの疲労がMAXでピンチになるんだな。

俺だって遠征帰りに深海棲艦が攻めてきた、なんてことになったら嫌な顔を隠すことも忘れそうだし。だからと言って二人で遠征に行くのも現実的じゃないんだよなあ。ままならねえもんだ。

『しかも軽巡二人は資材の消費が凄いからね。それだけを考えてとガンビーの方が良いんだけど、スピードを考えると難しいのよね〜』

『フレッチャーもなかなか大喰らい燃費悪だもんね』

『ちよつとジョンストン！ 否定はしないけど貴女もサムと比べたら人のこと言えないでしょう？』

『ぐう……サムは良いのよ！ ちっこいから消費が少ない。道理よ、道理！』

『なあっ!? 言ったなく!』

そのままサムとジョンストンが言い合いになった。大変微笑ましいです。はい。

『ま、まあ。私たちの燃費は置いておきましょう。ええと、日本からの出向の理由は一时的な戦力や人員の補填、あとは交流つてところでしょうか?』

『ちなみに普段は資材を無駄にしないように、普通にトレーニングとかしてるわ』

『でもそんなつまらないトレーニングも出向で人が増えたらお終い！ 出向で人が増えたら演習とか遠征とか、シヨッピングとか！ 色々出来るもんね!』

サムの口から実に共感できる理由が出てきて少しホツとした。

海に出ないなら体力づくりを始めとした本当につまらないトレーニングだろうに……アメリカは出向で人が増えた時以外はそれをやって過ごすとか地獄だろう。そんなのを熱心に続けるのなんて日本ですら大鳳さんを始めとした極少数なんだぞ。

でも、艦娘が海に出ないってのは平和で良いってことなんだから何とも言えない。遠征だって基本的に逃げの方針だからそうそう被害は出ないけど、危険なことに変わりはないからなあ。

『という訳で早速お買い物に行きましょう！　ボス！　良い？』

「ボス……」

『別に構わないが、他のメンバーと相談してから行つてくれよ？』

あつさりOKが出た。

到着して最初にしたのが自己紹介。その次が各自でお喋りで、その次がお買い物とか、ノリが完全に友達の家遊びにきた女子みたいじゃねーか！

『だって。私アイオワたちに許可貰って来るわ』

『じゃあ私たちは着替えてくるから上手に説得、お願いね？』

『任せなさい！』

「陽炎と初風も一緒に行つてきたらどうかな？　『ジョンストン！　ガンビーとヒュー

ストーンも連れていけ』

『了解』

「だそです。準備しましょう」

説得してるジョンストンとガンビーガンビア・ベイ、ヒューストンを待つことになると思うけど、だからと言って俺たちがモタモタして良い理由にはならない。

「ちよつとスチュワート！ 何の準備!? 私たちにも分かる言葉で話してよ！」

「さつきサミュエル？ とジョンストンだっけ？ 騒いでたけど何かあった？」

「サム。サミュエルとフレッチャー級の二人、ガンビア・ベイさんとヒューストーンさんと一緒に買い物に行くらしいです。陽炎と初風もどうですか？」

人を待たせるのは良くないってナスカの地上絵にも書いてあったから早く行動に移ろうと、説明をせずに自分の都合で行動する悪い癖が出てしまった。アメリカに来て浮かれてんのかな？

「あく……遠慮しておくわ。旧友との交流でしょ？ 邪魔しちや悪いわ。初風もいいでしょ？」

「そう言われたら遠慮するしかないじゃない。頑張つてね。あと、お土産よろしく！」

え、断るの!?

しかも旧友って……ほぼ初対面なんですけど!?　せめて大湊の誰かは一緒に来て欲しかったけど、陽炎の気の使いが上手すぎて「来てください」なんて言えなくなっちゃったじゃん。

「……ありがとうございます。でも初風。一月もあるんだから二人も買い物に行く機会は沢山あると思うのでお土産は無しで」

「ええ〜」

「ねえスチュワート、それでさっき二人が騒いでたのは何だったの?」

「ゆで卵は固ゆでと半熟、どちらが良いかという終わりなき戦争です。気にしなくていいです」

まあゆで卵なんて完全に嘘だけど、艦装の燃費事情は気にしなくて良いのは事実だ。

二人から応援されちゃったから出かける準備を……

「あ、私服持ってきてないや」

「えっ」

『どうしたの?』

ジョンストンが戻ってきた。あまりにも最悪のタイミングで。

『へえ〜、ふう〜ん?』

バッグを持ったまま固まってる俺を見て何かを察したジョンストンの顔が、玩具を見

つけた子供のソレへと変わっていく。コワイ！

異文化交流は大体地雷

基地を出る前にジョンストンが見せた笑みは所謂本物だったらしい。

穏やかさが消えて純粹な、感情の根源である恐怖を湧き上がらせるような凶暴な笑みに移り変わっていくのを見て、ホラー映画みたいだあ……と、危機感を忘れて小学生並みの感想を抱いたくらいだ。

日本ではいつもどんな感じの私服を着てたのか訊かれた時に

『……ああ、あそこの男性居ますよね。そう、あの黒い服の。あんな感じのやつです』
なんて答えたのが決定打運の尽きだったらしい。

『真つ黒のメンズなんてあり得ない！ もつと！ こんな感じの可愛いのを着るべきよ！』

『因みに最近の流行りはコレです！ 一度着てみてください』

ジョンストンを止めるだろうと思つてたフレッチャーもジョンストンと一緒になつて俺を着せ替え人形にしてきた時は助からないと悟つた。

俺に肌面積の少ない服だったり、ゆつたりしてたり、カワイイ色をした服を持つてきたときはきつと目が死んでただろう。妹が持つてたり○ちゃん人形の気分を味わつた

ね。

それでも断固として露出を拒否したのが功を奏したのか、二人は渋々ながら諦めてくれた。

しかし、言いくるめる途中で『黒は女を美しく見せる』というどつかで聞いたことのある謎理論を展開したせいで、適当に灰色のシャツと青のデニムジャケット？ と黒のジーンズとスニーカーを選ぶことになった。

『なるほど、センスが……』

『センスのカケラも無いわね』

と二人から言われ、他にも精一杯のお世辞を貰って流石に傷ついた。

後から知った事だが、フレッチャーは雑誌のモデルとして何度か掲載されたことがあるらしい。

『機密とかって無いの？』

『日本にはナカIIチャンが居るんでしょ？ 同じようなものよ』

そう言われた時は凄く納得した。

が、そんな会話だけで楽しみは終わらない。

その後もアメリカをこれでもかと言うほど体験することになった。

スイーツを食べるとなるとおやつの概念を壊すようなカロリーテロに眩暈を起こし、直後にゲーセンに寄ってはダンスゲームを始めて死にかけ、アメリカの一般市民からのナンパにしつかりと対応するフレッチャーに尊敬した。

因みにガンビーさんとヒューストンさんは服屋を後にした時点で別行動をして、ゆつくりと本屋とカフェに居たらしい。

そんなこんなで地獄ツアー買い物を終えて基地に到着したが、すぐに打ち合わせがあるって適当に嘘をついて逃げた。

だけど、この後に夕食が控えてるとなると一度胃袋身体を休めないと命に係わると本能が告げてるから仕方ない。

まだ腹に残ってるであろうクリームをさっさと吐き出してしまおうと考えながら日本の艦娘の為に用意された部屋にフラフラとした足取りで向かうと、すれ違った長門さんに捕まった。

「おい、大丈夫か？」

「大丈夫じゃないです……」

そのまま長門さんに肩を借りて部屋に入る。畳の香りがするがそれどころではない。即座に備え付けのトイレに入って自主規制した。

「私は茶の用意をしていたので何も聞いていないぞ」と言う長門さんからお茶を受け

取って飲み干す。長門さんはこういつた時には本当に頼りになる。

「助かりました」

「ああ。ゆっくり休んでろ」

そう言ってお茶を片付け始めた長門さんに見られないように自主規制の所為で汚れたかもしれない制服を着替える。

インナーがあるとは言え、例えこの先うん年経とうが人前で着替えるのには慣れないだろう。

素早く他の制服……ではなく買い物で買った私服に着替えたら、丁度よく戻ってきた長門さんからスマホで連写された。そういうところなんだよね。

「おかえり〜ってどうしたの？ すっごくい顔色悪いよ？」

「スチュワートさん!? 大丈夫ですか？」

初風と神通さんが何処かから戻ってきた。

ヘレナさんと三人で軽い運動がてら哨戒をしたんだとか。深海棲艦は影も形もなかったらしい。

「なんか私だけ遊び歩いてて申し訳ないです」

「気にするな」

「艀装の調整を含めた軽い撃ち合いだけでしたので」

「見かたによつてはこつちも遊、んんっ！ ゆっくりしてたようなものだし」

コンテナ船の貨物の一部は燃料を始めとした資材だったらしく、「久しぶりに演習が出来る！」と騒いだアメリカの戦艦と空母たちがドンパチ賑やかにやっていたらしい。

そう言えば普段の遠征で「海外への輸出」なんて項目があったような無かったような。「そういえば、スチュワートさんって英語を話せたんですね」

「ええ、まあ」

俺自身は英語なんてサツパリだけど、あの妖精さんから頭に何か細工でもされたのか現地人との会話も問題ない。

「日本語が自然過ぎて時々忘れちゃうよね」

「……」

それは駄目だぞ初風。

だけど、俺も艦娘がそれぞれ軍艦の時にどこで建造されたかなんて知らないからお互いさまつてことにしよう。

「それで、スチュワートは楽しかったか？」

「バイタリティの違いってヤツを痛感しました」

「本当に面白い物してきたのよね？」

勿論だ。

規模とテンポが俺の処理能力を大幅に超えて、常識と文化の違いが合わさって一杯一杯だっただけで。

「初風も体験すれば分かりますよ。ところで、明日の予定とかって誰か聞いてます?」「加賀が言うには明日は駆逐艦は遠征、私と神通は今日と同じで空母が自由行動になるらしい」

「わかりました」

遠征かあ。

結局アメリカに来てやることは変わらないのね。まあ、仕事だし仕方ないか。海外の大学に留学した学生と同じようなものだど割り切ろう。

「みんなく晩御飯だよ！ 随分豪華だよ！」

部屋の戸を開けて陽炎が入ってきた。晩ご飯とか言ってるけどもうお腹いっぱいなんだよね……。

でも出席しないと俺の具合に気付いてたサムとヒューズさんに悪いし、取り敢えず出るだけ出るか。

が、その判断が間違っていたのか、立て続けに俺の胃に入ってくる動物性油の暴力に負けて、その日はもうダウンした。

「陽炎、初風！ 遅れてるわよ！」

若干の非難混じりに声をかけたのはジョンストン。言葉のチョイスとイントネーションのせいか言葉の節々に棘を感じるけど、悪気は無いんだろうなあ。

天津風と似た雰囲気を感じる。髪型とかも似てるしこれはもう天津風なのでは無いかと思えてくる。つまり姉を心配する不器用な妹だな！

そんなバカな考えをしてる俺と、他の五人は遠征の最中で海の上に居た。

「嘘、速過ぎる……」

「ちよつとタンマア！」

陽炎と初風の言葉が後ろの方で聞こえてくる。

確かに、いつもトレーニングしてるって言うだけあってアメリカの三人のペースはかなり速い。本当に昨日俺と同じもの食ったんだよな？ 胃袋鋼鉄すぎるだろ……。

「ちよつとペースを落としましょう」

「構いませんが……スチュワートは付いてこられるんですね。陽炎型駆逐艦よりも随分

旧いのこ」

『割と限界に近いです』

クソ正直にそう答える。昨日のことが無かったら『キツいけどまだ行ける』って感じだったのに……山盛りのパフェは強敵過ぎた。

それでも、秘書艦をみんなで担当し始めてから朝に時間が出来て、大鳳さんと長良さんと一緒になって早朝の走り込みを再開したからまだついていける。再開してなかったら今頃は死んでる。

『艦娘は艦と違って意思を持っていますから』

軍艦としての新旧は戦場では言い訳にならないから。疲労の度合いで深海棲艦は待ってくれないから。

そんなハンデを無くす為にトレーニングで補う。

艦装としての優劣があるならテクニクや立ち回りで誤魔化す。

俺みたいなヤツは奇抜な道具を使ったりもするだろう。

それでも足りないなら^{精神論}根性だ。

『この程度で無様を晒す訳にはいきません』

知ってたか？ 俺ってかなりの負けず嫌いなんだよ。

昨日は休日みたいなものだったから死んでたけど、仕事となったら絶対に弱音なんて吐いてやらねえからな？

行き当たりばったり

「今日の相手は日本の艦娘じゃないです」

まあ当然だよな。 出向して今はアメリカに居るんだし。

俺たち以外の日本の艦娘は長期休暇でバカンスに来てない限り近場には居ないだろう。

「今の倒すべき相手が深海棲艦とは言え、アメリカに負けるのは嫌ですよな?」

「愚問だな。 負けを良しとして臨むヤツは居ないだろうな?」

俺の言葉に長門さんが乗ってきた。

うんうんと全員が頷く。

皆のやる気が漲っていくのが分かった。

「丁度いい機会です。 戦争の続きといきましょう。 勝ちますよ」

「「……」」

何故か引かれた。 解せない。

遠征から二日後の今日、演習のお誘いを受けた俺たちは負け筋を無くすべくミーティングをしていた。

やるからには負けたくないのは俺を含めた全員の総意だろうけど、俺は特にその思いが強いだろうと自負している。

理由は簡単。単純に負けたくないのと先日の買い物で酷い目に遭ったこと、そして先日の遠征で敗北感を感じたから。つまり今回の演習に臨む俺の心内は半分以上が八つ当たりだったりする。

加賀さん、長門さん、神通さんの話を元にアメリカの戦艦、空母、軽巡の能力を纏めていったら問題にぶち当たった。

「ヘレナさんとアトランタさんが特に曲者って感じがしますね」

「そうね。彼女の防空能力はちよつと相手にしたくないわね。彼女さえどうにかなれば後は空母の一人や二人くらいは振じ伏せるのだけ」

振じ伏せるって……空母を？ 頼もし過ぎやしないか？ 良い事だけ。

でも加賀さんに相手したくないって言わせるアトランタさんも大概だよなあ。

「つてことはまずはアトランタさんを何とかしないとイケないってこと？」

「きつとアメリカもそう考えて護衛の一人くらいは付けてると思う。そもそもアトランタさんが選出されるって決まった訳じゃないでしょ」

「あ、そつかあ……」

初風の質問に陽炎が答えたことで、再び初風が頭を捻る。

こっちは六人が固定なのに対してアメリカは十二人の内から五人が選出される。だから様々なパターンに対して対策を練らないといけない。因みに長門さん曰くコロラドさんは確定らしい。

まるでゲームみたいな読みや考察は楽しいけど、勝敗によって俺以外に迷惑が掛かるとなると責任感が発生してプレッシャーがヤバい。だから楽しむのも程々にして真剣に考えなくちゃいけない。

提督が居ない中での作戦立案。コレが大問題だったりする。

頭脳労働は提督の仕事だろうに……運が悪いことに今日は大本营に用事があるらしく電話が繋がらないらしい。しかも大淀さんや霧島さんなら！ と思ってL I O Eで作戦を求めたら他の人達が俺たちの勝敗で賭けを始める始末。

「アトランタさんが居る限り加賀さんが最大限活躍できる場面は無いと考えて良いでしょう。そしてアメリカは今までの出向の経験から加賀さんの実力を警戒していてもおかしくはありません」

「じゃあスチュワートはアトランタさんが選ばれると思ってるんですか？」

「選ばれるとは思ってまずけど……アトランタさんの代わりに空母が二人なんて可能性もあるかなあ、と思ひまして」

そう言って加賀さんの方をチラ見すると微妙に眉を寄せている。一人は振じ伏せられても二人は中々厳しいところがあるらしい。

「その時は私も対空に……あつ」

「どうしました？」

「対空機銃持つてきてなくて。今は砲と魚雷だけなの」

「あ……マズイですね」

陽炎の言葉で勝てる見込みが薄くなった。

固定メンバーでの挑戦だけじゃなくてまさか装備もほぼ固定で挑むことになるとは思わなかった。

「演習始まる前の移動の際に相手を見てから装備を交換するのはどうでしょうか？」

「そうですね。相手を見てからでは間に合わないこともありそうなので、ある程度はヤマ張るしか無さそうです」

「確実性に欠けるのではないか？」

神通さんの言葉に返すと長門さんがそう言ってきた。

「何にでも対応できるようにするには自由度が足りないので仕方ないんです。天に祈りましょう」

余裕が無い事に焦ってちよつと酷い返し方しちゃったけど、許してほしいね。

まさかアトランタさんをどうするかについていう最初の話題でここまで条件が厳しくなるとは思わなかった。

「もう一度確認しますけど、空母は一人までなら加賀さんに、コロラドさんは長門さんにお任せしても良いんですよね？」

「勿論だ。相手がコロラドだろうとこの長門、やられはしないさ」

「二人同時が厳しいだけであって負けるとは言って無いわ」

「頼もしいです。では一旦アトランタさんは置いておきましょう」

「次はヘレナさんですね」

俺が曲者だと判断した二人の内もう一人、ヘレナさんに話題をソフトさせる。

神通さんをして「砲撃戦での非常に高い攻撃力は相手にすると脅威だと思いました」と言わせるんだからその攻撃力は本物なんだろう。

「ゲーム的思考」
「だけどちよつとメタ読みを試してみよう。」

ヘレナさんの特徴は「火力が高い」だ。多くのゲームにおいてそう言ったキャラクターの性能は攻撃特化型で大体が紙耐久だったりする。

神通さんは攻撃力のことしか触れて無いから耐久力の方は分からないけど多分普通。俺としてはそれ以下であって欲しい。

「だけど慢心は事故の元だから神通さん並の耐久力と想定すると……あれ？ 強すぎ

ない？

「いやいや、そんな「ナーフして♡」って言われそうなバランスブレイカーはあり得ないからきつと何かの能力が低かったり、コストが重かったりの代償があるんだろうけどそれが何なのかが分からない。」

「う〜ん……」

戦艦はコロラドさんで確定。長門さんが責任を持って抑えてくれるそうだから話合ってる。

空母は加賀さんが所感を述べ、加賀さんは空母の一人なら問題にならないって言うから問題ないってことでやっぱり話し合ってる。

そして神通さんの感想がこの有り様。アメリカにまともな軽巡って居ないの？

駆逐艦は「他二人は何とかなるかな？　って感じだけどフレッチャーはバケモノだから無理」ってことを言っておいた。

あんな到底駆逐艦とは思えないスペックのフレッチャーに加えて想定では軽巡辞めてるヘレナさんも出てくるとなると始まる前から敗色濃厚なんだけど……

コンコン　スパァン！

「日本の皆！　演習始まる時間よ！」

ノックが聞こえたと思ったら戸が開かれてジョンストンが現れた。

思い出したように時計を見ると確かに時間が近づいていた。

『作戦会議中だから出ていってくれない？ もうちよつとで終わらせるからさ！』

『分かったわ』……遅刻しないでね！』

「……」

「で、どうするんだ？ まともな案すら出て無いぞ」

「ヤバいじゃん！ どうすんのさ！」

「ヘレナさんかアトランタさんが居たら神通さん、最優先でよろしくお願いします。護

衛に駆逐艦が居たら陽炎か初風がフォローです」

「分かったわ！分かりました」

もうヤケクソだよ。こんなの作戦じゃなくて彼我の戦力差を確認した上でどう動くか確認しただけだよ。

「両方居たらヘレナさんは受け持つので、大破する前に来てください。アトランタさんが居なくて空母が二人ならそのまま防空に回ります」

「その時はお願いね」

「長門さんは……大丈夫でしょまあいいか」

「良くないぞ！」

良くないの!？」

「え、そこをなんとか……お願いします」

「うむ」

うむじゃないよ！　なんだこの茶番!?!　こんな事してる暇ないだろ！

忙しなく最後の確認と準備をした俺たちは弾かれるように飛び出した。

海の良く見える場所にはパラソルスタンドやビーチチェアが用意されていて、そこには既にサングラスを掛けたアイオワさんや、双眼鏡を持ったサム、他の人たちも「何にも観客です」と言わんばかりにリラックスしてた。

アレックスさんはバーベキューの用意とか言っただけでもない謎の調理器具を取り出して、他の人もコーラとポップコーンまで用意してある辺り、完全にエンターテインメント扱いらしい。

その中でホーネットさんだけが何かの機材を用意していた。

「記録用の艦載機を飛ばしているわ。真つ赤な艦載機は撃ち落とさないようお願いするわね」

ホーネットさんの言葉に頷く。真つ赤とか、三倍速いだろうから誰も落とせないな。

周りを見てもコロラドさん、サラトガさん、ヒューストンさん、ヘレナさん、アトラ

ンタさん、ジョンストンの六人だけが居なかつたから彼女たちが相手なんだろう。

「さあ！ 勝ちに行きますよ！」

「おう！」

「グッドゲームを期待してるわ！ Good luck！」

「頑張れ〜！」

イントレピッドさんを始めにアメリカの面々から応援されて、いざ海へ。

揺り揺られ

『いつもより楽かも。ねえサラ、あたしが出る必要あった？ ガンビーに代わっていい？』

『一番新しい鎮守府だから練度が低いのかもね。だからと言って侮って良いわけじゃないわ。あと、途中交代なんてダメよ』

『はあ、マジめんどくさ……ま、いいけど。代わりに何か奢ってよね』

『ええっ!? ……最近できたレストランで手を打ってくれない?』

『オツケー。その分はしつかりと働かないとね』

『アンタたちは楽しそうで良いわね！ 私は陽炎と初風を抑えてるのよ!? アトランタに一人分けてあげようかしら!?』

『……あたしは加賀の相手で忙しいから遠慮しておく。手が空いたら砲撃するから、頑張つてね。日本の駆逐艦なんて相手したくないし……』

『あ！ あの初風凄いわ！ また私の艦載機落としたわ!』

『やられて喜ぶなんて変態!?! もっつ!』

アトランタさんとサラトガさん滅茶苦茶楽しそうにしてるやんけ!

一人だけやたらと負担の大きいジョンストンが流石に可哀想に思えてくる。

けど、防空巡洋艦の名に恥じぬ対空能力だなあ。まさか加賀さんがほぼ完封状態にされるとは思ってなかったんだけど？ アトランタさんはイージス艦の艦娘か何かで？

「まあこんな感じですかね」

結構近くで騒いでるアメリカの三人のお喋りを翻訳して通信する。

『……頭に来ました。アトランタのあの眠そうな眼を見開かせてやらないと気が済みません』

「じゃあやつぱりアトランタさんをどうにかするしかないんで危なっ！」

『戦いで余所見は厳禁よ』

チラリとアトランタさんの方を見た瞬間に頬に砲弾が掠めた。当たってから避けたけど、まあ仕方ないだろう。

ヒューストンさんからのありがたいお言葉に気を引き締める。

『ありがとうございます。でもまだ頭はくっついてますよ！』

『ゾンビみたいなこと言わないで！』

ゾンビだつて？　なんて失礼な。

頭を吹き飛ばされても動くヤツとか、頭だけになっても戦闘意欲が衰えないヤツなんてファンタジーの世界には沢山居るだろ。俺がその仲間だとは限らないだけで。

あ、また砲弾が弾かれた。魚雷は……反応なし。効いてんのか分からねえな。

「これ勝ち目無いわ」

少なくとも普通に撃ち合ってるだけじゃ絶対に俺はヒューストンさんに勝てないってことが分かった。直撃さえしなければそうそう負けることも無いだろうけど……

「さあ、どうすつかね」

加賀の艦載機が尽く撃墜され、代わりに飛んでいるのはサラトガの飛ばした艦載機。

そうなった原因であるアトランタを倒すべく前進した陽炎と初風の前に立ちはだかったのはジョンストンだった。

「他の鎮守府の人が「スチュワートは強い」って言うってたわ。私も戦ってみたんだけど貴女達をどうにかしないとそれも叶わなそうなのよね！」

機銃で牽制しつつ主砲で攻撃しながら「だから倒されてくれない？」と話しかけるジョンストンと陽炎と初風の間合いは広い。

「何よそれ……私たちは眼中に無いって訳!?!」

「陽炎落ち着いて！ 見え透いた挑発じゃない！」

「そんなこと分かってるわよ。でも実際どうやって近づけばいいのよ！ ジョーンストンは相当腕が立つのかあんな遠距離から撃ってくるし、回り込んで挟み撃ちにしようものなら各個撃破されそうだし。そもそもサラトガさんの艦載機が邪魔で近づけない！」

「分かったから落ち着いてよ。……それにしても本っ当に厄介ね。まさかあそこまで防空能力が高いとは思わなかったわ」

二人の頭上からは今も爆弾が降ってくる。他の場所にも飛ばしているのか密度はそこまで高くないが、決して無視しても良いようなものでは無かった。

「近寄れないことと加賀さんが何も出来ない現状が問題なのよね。こういう時にスチュワートならどう思うと思う？」

「うくん……スチュワートって意外と脳筋だから「サラトガさんの艦載機を撃ち落とすと同じ土俵に立たせる」って言いそうじゃない？」

「確かに」

二人は笑う。

「でも、私はそれをしたくないわ」

怒り心頭といった具合に陽炎が言う。

陽炎は目の前にいる陽炎と初風を無視してスチュワートと戦いたいと発言したジョーンストンにプライドを傷つけられたように感じていた。

確かにスチュワートは強いと思っている。

何度か演習でMVPを取って天狗になった時に演習で鼻を折られたことがある。作戦が始まると、目立たないながらも毎回しつかりと結果を残す。

最近も、神通との訓練から逃げずに継続する姿を見せた。

スチュワートは強い。それは事実だろう。

「ふうん……じゃあ何するの?」

「勿論、ジョンストンに目に物見せてあげるのよ! 私たちをオマケ扱いしたこと後悔させてやるんだから!」

「だけど、だからと言って自分から目を離しても脅威と思われないのは納得できない!

“私は私のやり方でやる”。同じことをしてはいつまでも越えられない。自分たちよりよっぽど旧型のスチュワートがあそこまで出来るんだから自分たちがもつと上手く出来ない理由はない。

「ジョンストンを倒してアトランタさんに対空出来ないようプレッシャーを掛けに行くのね?」

「そうよ! 加賀さん、聞いた!」

『ええ。本当はアトランタも正面から叩き潰したかったのだけれど、やっぱリスクが大きすぎるわ。だからお願いね。期待してるわ』

「任せて！」

二人が全速力で動き出した。

「ねえ神通、スチュワートって凄いと知らない？」

淡々と攻撃を繰り返す神通にヘレナが語り掛ける。

「シッ！」

「あら怖い。……もう、釣れないわね。でも勝手に喋らせてもらうわ」

攻撃を続ける神通と回避や防御を繰り返すヘレナ。この凶は神通が有利に見えるが、当の神通の内心は穏やかでは無かった。

演習が始まってからそれなりに時間が経ち、互いに殆ど無傷。自身は攻撃を受けていないから無傷なのは当然として、何度か被弾しているヘレナにダメージが無いように見えることが一番の原因であった。

「絶対に終わりだと思つて処分された筈なのに、平然と戦場に戻ってくるんだもの。想定なんてする訳無いじゃない。幽霊船っていうオカルトチックな話題に何度上がった事か」

「……」

しかも、お喋りをする余裕がヘレナにはあり、その余裕を無くすことが出来ていない事実が拍車をかけていた。

最初の数分や数十分なら「余計なことに頭を使うなんて」と馬鹿に出来ただろう。だがそれも、長期化することで「あとどれだけの余力があるのか」というプレッシャーへと変わっていく。

我慢強い方だと自認している神通も、一向に焦りを見せない相手に我慢の限界を迎えるのは必然だった。

「そこですー」

そして、余裕綽綽なヘレナの体制をちよつと崩し、全身全霊の一撃を叩きこんだ。

焦らせられていたことに気が付いたのは、奇しくも手ごたえを感じなかった直後だった。

それでもと、大きく上がった水飛沫に隠れたヘレナに追撃しようとして飛沫の中に飛び込んだ神通が目にしたものは、長い銃身を自信に向けて構えるヘレナの姿。

「残念でした♪」

「あ……」

銃の中が一瞬光ったと思ったら最近提督に貰った鉢巻に大きな衝撃が加わった。

「ヘレナを倒したいなら艦載機で徹底的に爆撃するか夜戦で、ね。……ま、アトランタが居るから艦載機は怖くないし、そもそも夜の演習は遠慮するんだけどね」

「ま、待つて……」

「どうしたの？ 基地まで戻れる？」

「まだ、戦えます！」

頭に衝撃を受けたのがマズかったのか、激しく揺れる視界に苦戦しながらも神通が闘続行を申し出る。

「お断りよ。サムライソウルは立派だけど、ヘレナは新しい仲間の实力を見に行きたいんだから、また後でね。グッドゲーム」

悠々と、とまでは行かなくても、普通の範疇に入る速度でその場を去るヘレナを神通は止めることが出来なかった。

砲を撃ち合い、互いに有効打が無い事に気が付いたビッグセブンの二人は「資材が勿体ない」という理由で互いに攻撃を止めていた。

時折サラトガの艦載機が咎めるように二人に攻撃するが、長門は「何かしたのか？」と言った具合に無視をして、コロラドは煩わしいとばかりに威嚇射撃して艦載機を追い

払った。

「待て。その話は本当か？」

コロラドの砲撃も、サラトガの艦載機も、流れ弾と魚雷も全て受け止めた長門を一番揺さぶった攻撃は物理的なものではなかった。

「Yes! Admiral が近いうちにスチュワートはアメリカへ配属される予定だっって言ってたわ！」

それはとてもグダグダな

艦装を吹っ飛ばされて脱落した俺と、艦装を吹き飛ばした張本人のヒューストンさんとダメ押しに来るにはちよつと遅かったヘレナさんも一緒に基地に戻っていた。

久しぶりに艦装が大破まで持つてかれたことにちよつとショックを受けている。

最近は大湊翔鶴の第五航空戦隊瑞鶴と演習した時は盾を持つてたことに加えて味方が加賀さんだったとは言え中破で粘ったのに、今回は実質ヒューストンさん一人から良いようにやられてしまった。

正直かなり悔しい。

そして、基地に戻ると最初に伝えられた演習の結果が俺たちの負け。

撃破したのがジョンストンとアトランタさんの二人で、撃破されたのが長門さん以外の全員。海外の初演習で黒星を喫することになった。

演習前にアイオワさんたちがゆつくりしてた所には機材に繋がれたスクリーンが用意されていて、その前には長門さんとコロラドさん以外の全員が居た。これから記録用の艦載機で撮影した映像を見ながら反省会を始めるらしい。

因みに演習に出てない人はさつき生中継されてた映像のリプレイを見ながら茶々を

入れるのが恒例なんだとか。アメリカの人達娯楽に飢え過ぎでしょ……

長門さんとコロラドさんがまだ来てないことを指摘すると、なんと砲撃戦ではなくお喋りをしているらしい。「放っておいてもその内戻ってくるでしょ」と呆れた半分に分言ったホーネットさんがそのまま機材を弄り始めて、スクリーンに映像が流れ始めた。

「ヘレナさんのペースに飲まれないように一意専心攻撃を続けるべきでした。反省です……」

最初は神通さんとヘレナさんが映され、すぐに神通さんが呟いた。

最初に見せられた神通さんとヘレナさんの演習風景は、神通さんがどれだけ攻撃をしなくても一向にヘレナさんが減速しないという異常な光景が映されている。

「あの苛烈な攻撃を……いったいどういったトリックなんですか?」

俺の疑問に日本の皆が注目する。

「ヘレナはシールドとブースターを使ってるの。砲戦なら負け無しよ」

「わざわざその為に長期休暇取って明石に会いに二ホンまで行ったんだよ、笑えるだろ? しかもヘレナはああ言ってたけど、「高耐久、高火力、高速、三つ揃えば最強よ」なんて言って、まるでゴリラみた痛あ!」

ヘレナさんの言葉に茶々を入れたサウスダコタさんが椅子から転げ落ちた。

「失礼ね。武器は愛銃一つで充分なのよ」

「ヒュ〜♪ 凄い早撃ち。ヘレナ、カッコいいじゃない!」

「ありがとう」

誰だよヘレナさんのこと紙耐久だなんて言ったヤツ! 神通さんの攻撃を凌ぎ切る

能力あるじゃん!

通常攻撃以外使えないけど基礎ステータスが高すぎて強敵になっちゃう感じのシンブルに厄介なパターンじゃねえか!

「実際のところ初見殺しだし、どれだけ煽っても自分のペースを曲げない……神通みたいな人には二回勝つのは難しいのよ。ま、深海棲艦相手には二回目は無いから良いんだけどね」

初見殺し特化ねえ……確かにこんなの想定外だよ。

でも、別に初見じゃなかったら初っ端から撃ちまくってくると思うと、それはそれで滅茶苦茶強いと思う。ヘレナさんの攻撃で殆どダメージを受けないような人しか安定して勝てないんじゃないの?

初風と陽炎がジョンストンを撃破して、その後に重い腰を上げたアトランタさんと相

討ち。そして舐めプを止めたサラトガさんと加賀さんが空母同士の一騎打ちになつてこつちも引き分け。

こうして見ると序盤は完全にアメリカカペースだったのに、陽炎と初風の一転攻勢から一気に盛り返したなあ。すごいナイスプレーだ。

「こうして見ると勝ちの目は幾らでもありましたね。ごめんなさい」

「いやいや！ 加賀さんが謝らないですよ！ むしろ艦載機の数にあれだけ差があつてあそこまで巻き返したのは凄すぎだつて！」

「そーそー、アンタはあたし相手によくやつたよ。素直に感心した。まあ、副砲とかあると方が一の時に活躍出来ないってことは無くなるかもね」

「…………どうも」

陽炎と初風の活躍に埋もれてしまった加賀さんが不機嫌そうにアトランタさんに答えた。

まあ、自分にメタ張つてきた相手勝者に声を掛けられてイラッと来る気持ちは解るけど…… 加賀さんから不快そうな雰囲気を通り越して殺気が漏れたのは流石にヤバそう
だ。

「にしてもホント、日本の駆逐艦は怖いね。二人以上になつた時の爆発力はマジヤバイ。サラの艦載機怖くなかつたの？」

「あの時はね。今の映像だと相当無茶してる、よく無事だったなあ」

「アトランタさんを何とかすれば後は加賀さんがなんとかしてくれるって思ってたから！ それに」

陽炎がジョンストーンと俺を見る。俺が何かしたか？

「舐められたままでは終われないしね。次は一人でも勝つわ！」

「別に舐めてた訳じゃないのよ。ごめんなさい」

ジョンストーンが陽炎に謝る。なんか陽炎つて少年漫画の主人公みたいだよなあと思う。負けても腐らずに上昇志向なところとか。

そして俺は陽炎に舐めてるって思われてたのはかなり意外だった。そんなつもりは無かったのに……ちよつと悲しい。でも陽炎の得意なこととかは知ってるからまだ一対一で負けるつもりはない。

「そもそも、あれだけ有利なのに辛勝しか出来なかったサラはさあ……最初から全力で潰しに掛かってたらもつと楽に勝てたと思うんだけど？」

「うう……」

「サラは優し過ぎるんだって。相手だって全力なんだから全力で相手しないと失礼でしょ」

アトランタさんがサラトガさんも小言を言い始めた。

サラトガさんはシユンとして言われるがまだけど、ホーネットさんが言うにはサラトガさんは相当強いらしい。深海棲艦には加減無しなのに演習ではああなるらしい。

アレか？ 本気出して間違いが起ると悪いから手を抜きますってヤツ？ サラトガさん自身は優しいのに艦装の殺意が高いなんて苦労してそうだと思った。

次に俺の勝負が映された。必死こいて戦ってるのが映されて凄く恥ずかしいんだけど……この後普通に負けるんだよね。これなんて罰ゲーム？

深海棲艦の重巡ですらなかなか厳しいのに……艦娘の重巡は普通の深海棲艦とは比べ物にならない賢く立ち回るから勝ち目なんて無いに決まってるだろ！ チワワが熊に威嚇するようなモンだぞオイ。

「有効な攻撃が無いと判断したら直ぐに模索に入る切り替えの早さ、流石ね」

慰めが心に痛い。砲弾の的になって弾酒け飛えびたい気分だ。

「手を変え品を変え、とは言うけど距離、武装種、狙いを少しずつ変えてくるから一瞬も気を抜けなかったわ」

ヒューストンさんはこう言ってるけど、経験や技術的なアレコレとか艦種によるパワーの差とかの前に、戦い方が上手なんだよね。試合の運び方というか、気が付いたら勝てなくなってた感じ。

せめて投擲物があれば不意を突いて一矢報いるくらいは出来たんだろうけど、やるとしたら次の出向からになるだろうな。それでも勝てるビジョンが見えないのは流石としか言いようがない。

「ねえスチュワート、お昼の後に私と演習しない？」

「良いですけど、ヘレナさんが先です」

「ジョンストンごめんね」

陽炎と初風の二人掛かりで撃破したジョンストンも神通さんで倒せなかったヘレナさんも俺を演習に誘うなんて一体何を考えているんだ。俺では完全に役不足だろうに。

でも挑まれた演習は予定が無い限りは受けるようにするのが今までのスタンスだったし、今更ビビって棄権なんてしない。それに俺はバカだから考えるよりも身体で覚える方がやり易い。

そんな感じでグダグダな反省会が終わり、戻って来ない戦艦の二人が待ちきれない俺たちはアレックスさんの準備していた調理器具が開かれたことで昼食を始めた。

イントレピッドさん自慢だと言う肉の塊が中から出てきた。アメリカに来てからはや見慣れたと言つて良いけど、やっぱり色々サイズがおかしい。

日本の焼肉って感じのバーベキューとは随分違うけど、ステーキだ厚切りの肉だから良いんだろ

う。

肉は美味しかったんだけど……米が欲しい。

換装

『食後の運動も兼ねて演習しましょう?』

「ボリユーム満点の昼食を終えて30分くらい経ってからヘレナさんから演習に誘われた。」

「艦装を装備して海に出ようとしたらヘレナさんと一緒にジョンストンもやってきた。もしや休憩を挟まず連戦になるのかと身構えたけど、俺の予想とは違って二人からそれぞれプレゼントを渡された。」

『あの、これは?』

『533mm五連装魚雷をちよつと改良した物よ! 大事にしてよね!』

「ジョンストンから渡されたのは軽巡が使う物と見間違うレベルで大きな魚雷。まさかとは思つてもう一度装填数を確認するとその数1、2、3、4……5!? ジョンストンの五連装つて聴き間違いじゃなかったのかよ!」

「ちよつ!? 『こんな貴重な物は貰えません!』」

『予備の一つだから、遠慮なく持つてって良いわよ!』

「予備!? 大湊じゃまだ五連装の魚雷なんて無いのに、そんな喉から手が出そうなくら

い欲しいものに予備があるって？

『そういう事なら遠慮なく……後で返してって言われても返しませんよ?』

ワザとらしく身体で魚雷を隠すようにしながらそう言うと言われた。ウケを狙ったから成功して良かったと思う。本音を言うならもう二つくらい欲しいかったけど、流石に欲張りが過ぎると思って口に止めた。

魚雷を射出機構から外して手に取ってみる。

「うん」

魚雷自体は今までのやつよりも若干小さくて軽いから、投げる分にはこっちの方が良いと思う。

『どうして日本の一部駆逐艦は魚雷を投げようとするのよ』

『ジョンストン、あれはセン川内流ダイスタイル魚雷投擲術よ。バスケットボールみたいに手首のスナツ

プを利かせることで後方にも魚雷を飛ばせたり出来るらしいわ』

『だけど五連装の良さが消えるのでこれは投げるよりは普通に使ってた方が良さそうです。すね』

『道具には機能を全うするための設計がされてるんだから、想定外の使い方はどうかと思っただけ』

俺もその通りだと思っよ。

『ジョンストンに随分ハードル上げられちゃったけど……私からはコレ、SGレーダーよ。私はもう艦装に詰め込むだけ詰め込んだから扱いきれないのよ』

ヘレナさんから渡されたのは、日本で使われてるスカスカの鉄筋みたいなレーダーとは違ってちゃんと一枚のプレートがあつて近代的に見えるレーダーだった。レーダーのイメージがパラボラアンテナな俺としてはこっちの方が馴染みやすい。

まあ今まで電探とかレーダーの類は装備したこと無いんだけど。そこまで遠距離から砲撃とかしないし、あれこれ詰め込み過ぎても重くなつて動き回れなくなるし。

でもこれも何かの機会だし、効果を実感してみるのもアリだな。

「そういうことだから妖精さん。着けて貰えないかな?」

『随分妖精使いが荒いのね』

『この妖精さんはちよつと変わってますので大丈夫です』

妖精さんにも意思はある。中破した艦装が山のように積みあがつた時には「やつてられるか!」と言わんばかりに大勢の妖精さんが工^ホ廠^イから姿^コを消^トした^タこともあつた。

ただ今俺の艦装に乗ってる妖精さんは違う。どういふ訳か俺以外お断りな^ホ変^モわり者^疑だからだ。大分無茶言つた時も投げ出さずにやり遂げた凄^恐いけど変なヤツだ

からだ。

そんな妖精^ホさんがビシツと敬礼を決め、いそいそと作業をし始めた。するとどうだろう。

「……おお！ 凄い凄い！」

まるで眼鏡をかけた時みたいにより遠くまでしつかりと見える！

原理はさっぱり分からないけどなんか狙いやすい。しつかり微調整してるのが自分でよく分かるから照準が定めやすい感じがする。

なるほど確かにこれを装備してれば、演習の時のジョンストーンがしてたような長距離砲撃も可能になるだろう。

『ちよつと、気持ち悪い顔してるけど大丈夫？』

気持ち悪いとは失礼な。

俺だつて元が付くとは言え男。しかも一般市民とは違って戦う職業？ に就いてる以上強くなることは大歓迎だ。

しかもそれが微々たる物じゃなくてとても汎用性が高くて色々と可能性があるものだからついニヤニヤしちゃうのもしようがないと言うもの。

『コレが有ればより長距離に砲弾を……これは良いものだ』

『喜んでもらえたようで何よりだわ。早速使いこなせるように練習しましょう？』

『あく、演習つてそういう……』

てつきり一対一で勝負するかと思つてたんだけど、早とちりだったかな？ 全く、野菜の戦士でも無いのに……いつの間にこんなに戦闘意欲が旺盛になつたんだか。

魚雷や砲を当てる為の的が用意されて、準備されたそれらを魚雷で沈めていく。

最初は随分遠いのだと思つたけど実際は静止してる状態で当てることはとても簡単だった。これがレーダーの効果だとすると、使い続けている内に S Gレーダー 無しの出撃なんて考えられない身体になつてしまうかもしれない。汎用性が高すぎるのも困りものだ。

レーダーにばかり気を取られてたけど、魚雷の方も凄いの一言に尽きた。

やはり連装数が5なのが大きいんだろう。下手な鉄砲も数撃ちや当たる理論で、雑に撃つても単純計算で四連装の1.25倍の命中率が期待できる。

魚雷本体は比較的小さい癖に、サイズに合わない破壊力があつたのは驚いた。

今まで近距離戦闘ばかりだったけど S Gレーダーを知つたら遠距離から攻撃するのも楽しそうに思えてくる。やっぱり射程が長くなるといった言葉は単純な字面からは考えられない程に強力だ。

準備された的を全部沈めた俺が次に手を出すのはやはり動局的。深海棲艦も案山子じゃないからやっぱり動局的は欲しい。

そこでジョンストンとヘレナさんに相手をしてくれないか頼んだら、ジョンストンからは『見ててあげる』と、ヘレナさんからは『手加減できないけど良い?』と言われた。流石にこの装備で初めての相手にヘレナさんはハードルが高すぎるから『ダメです』って断った。

じゃあ相手はフレッチャーかサム、陽炎か初風かな。神通さんは今ちよつと話しかけ辛いし。

「という訳で演習一戦しませんか?」

「何がと言う訳なのよ。アメリカの人達と演習するって言つて無かつたっけ?」

「それはもう終わりました」

サムは他のメンバーと一緒にバイオ○ザードをして楽しそうだったから声が掛けれなかった。初風はフレッチャーと一緒に買い物へ行ったらしく基地に居ない。

「早くない? 相手はヘレナさんだっけ……もしかして負けたの?」

「いいえ? 艦装をプレゼントされました。さっきまでは艦装に慣れる為に的を相手にしてました。実戦で使えるか確認したかったので演習相手に陽炎を選んだんです」

「そうなの？ 相手になるのは良いんだけど、私もさっきの演習で気になったところを調整中なんだよね」

そう言う陽炎はスマホで明石さんと連絡を取ってアドバイスを貰いつつ魚雷をバラして妖精さんと何かの作業をしていた。

「今は何をしてるんですか？」

「魚雷に仕込む爆薬の量をちよつと増やそうとしてるところよ」

「破壊力すげえそう。……明石さん？ 陽炎はこう言ってますが」

陽炎はどうやら魚雷の威力を上げる為に改造をしていたらしい。確か陽炎の魚雷はかなり高性能だつははずだけどまだ威力を求めつつもりらしい。しかも爆薬を増量するだけなんて意外と脳筋だと思う。

『アメリカは遠征が日本ほどなく暇な日が多いと聞きました。だったら色々試して貰おうと思ひまして！ 今回の魚雷の件は本人の意思もあつてスムーズに実験段階まで事を運べました！』

実験段階で……完全に悪役が出す言葉だと思ふんだけど。

「因みに、このことで提督に申請や許可は出しましたか？」

『……』

オイ なぜ黙る。

「出来た！ 待たせたわねスチュワート！ 相手になるわよ！」

「陽炎、悪魔に魂を売ってしまったんですか？ その先にあるのは破滅だけですよ？」

「今ならまだ引き返せます。その魔改造してしまった魚雷を元に戻しましょう。日本には初風以外の妹たちが居るでしょう？」

『酷い言われよう?! 誰が悪魔ですか!』

「だつたらせめて安心材料をくれませんかね?!」

明石さん

「悪の手先になった陽炎を救う為にも負ける訳にはいかなくなってしまった。ただ実用性を確認する為に声を掛けただけなのにどうしてこうなるんだ。」

明石さんは艤装の保守、点検ではしっかりしてるんだけどなあ……。

当たらなければ

陽炎と演習。

それ自体は大湊に居た頃から何回もやっている。

陽炎が姉妹たちよりも負けず嫌いだから比較的演習の回数も多く、陽炎の手の内は分かっているから挑まれるたびに高確率で勝ってきた。

今回は強力な艦装を貰ったから、陽炎の魚雷がちよつと変わったからと言ってそう簡単に負けることは無いと思っていた。

「んだけどなあつ！ ……チツ」

思わず舌打ちをする。

今回の陽炎は一味違う。今もギリギリで魚雷を回避してなかったら相当なダメージを負っていたに違いないと内心では相当焦っていた。ちよつとは加減してくれても良いんじゃないかね？ もう背中は冷や汗でベトベトなんだが？

普段はある程度距離を取って同航戦をして、そこに緩急を付けることで攻撃を避けてただけど今はそんな余裕が全く無い。

こうなってしまった原因は、俺がヘレナさんから貰ったSGレーダーの強みを活かそ

うと思つて距離を取ろうとしたことだったから自業自得なんだろうけど。

突然だが。

陽炎型の使う魚雷は当たらない。

かなり遠い場所まで魚雷を泳がせられる上に速度も速い。

だが当たらない。

それは何故か？

『艦この世界これ』の魚雷には誘導機能ホーミングするがあるからだ。

流石に当たるまで延々と追いかけてくるなんてことは無いけど、普通に発射してから暫くは目標に向かうように軌道を調整するような挙動をする。

数度の角度を調整するだけなんて甘い誘導ではない。目標に向かって緩いS字を描くことだつてある。

これだけ言われても「ホーミングするなら何故当たらないのか？」と思うかもしれないがそんなことは無い。むしろ軍艦サイズでこれだけ誘導するなら誤爆とかしない限りは百発百中は間違い無いだろう。

だが目標艦娘は人間大で魚雷はテレビのリモコンよりちよつと大きいくらいのサイズだ。

それこそ百発百中なんて魚雷がUターンとかしない限りはあり得ないだろう。

艦装の不思議パワーで甲子園のピッチャー並の速さで簡単に魚雷を投げれると言っても相手だって普通に車並みのスピードで動いてるから百発百中の川内さんは尊敬できただけ。

……一度川内さんは置いておいてだ。

そんな魚雷の命中率事情の中で今触れてる陽炎型の魚雷が何故当たらないかと言うと、長い射程に対してこの誘導が甘いからだ。

発射した後の誘導時間が短くて、目標が少し動いただけでまともに当たらなくなる。誘導が甘いから距離が離れば離れるほどその傾向は顕著だった。

では、当たらない魚雷を当てるには？

川内さんから魚雷の投げ方を指導してもらえばそれまでだけど、陽炎は普通に発射する派だからその線は無しで。

一つ目は当たるように誘導性能を強くする。

魚雷の誘導は艦装に搭乗してる妖精さんが行つてると言うのが明石さんの見解で、それだけじゃなく艦娘自身の精神状態とかも関係してくるらしく、あまり現実的ではないという意見で一致している。

二つ目は避けられない状況を作る。これは展開の運び方が上手な人が採る方法だ。本命の一撃を確実に当てる為の準備とも言える。弥生や夕雲、巻雲辺りが抜群に上手いんだなこれが。

でも陽炎は素直に一球入魂の精神でぶつかってくるからこの手は取らないだろう。

三つ目は今まさに陽炎が実践してる。

「さつきから……近い！」

「誘導なんて関係ない近距離から撃てば当たるよね？」

そりゃあそうだけど。そうだけど！

いつも通り距離を取ろうとした俺を見逃さなかった陽炎が猛追撃してきた時には超
ビビった。

まさか陽炎がこんな方法を採用とは思わず背を向けて逃げたのが運の尽き。今は回避してるとは言え反撃もままならずやられたい放題だ。

「あまりにも脳筋過ぎやしませんかあ!？」

「スチュワートに言われたくない！」

なんだと？ 俺ならそんな近距離から発射なんてしないでもつとこう……何か……

「……」

俺ならもつと近くで直接魚雷を叩きつけるね！ 自傷ダメージはあるだろうけどま

ず回避されないから与えるダメージの期待値は陽炎以上になること間違いナシ！ つまり俺に避けられてる時点で詰めが甘いんだよお！ 反撃できないから手加減して♡ まさかここまで一方的にやられるとは思わなかった。さつき一発喰らったけど威力が俺の知ってる魚雷の威力のソレじゃない。もう一発喰らったら自力で基地に戻るのが辛くなりそうだ。

1 本当たれば中破は必至、2 本当たれば二度と浮かべず3 本当たれば……おお、怖い。怖い。

それにしたってどれだけ爆薬増量したのさ。絶対に1.5 倍くらいに増えてるだろういい加減にしろ！

いつもみたいな明石さんの思いつきクオリティだと思ってたら全然そんな事無かった。

実際に陽炎が改造した魚雷はとんでもなく強力だ。運用する距離が今までより近くなったことが大きな要因だろうけど、甘い誘導能力を補って余りある威力と速さは脅威以外の何者でもない。

「St r o n g !
 だけど爆薬の増量 強 い！ なんて脳筋が増えそうなのが心配だ。」

「これならもつと炸薬増やしても良いかも！」

実際に陽炎が破壊力信者になりかけてる。

「恨みますよ明石さん」

魚雷自体の改良に成功してても使う人がダメになつてちや世話が無い。

良いものを持つてても使用者が甘いと結局勝てないつてことを教えてあげるのが今の俺の役割だろう。

せめて盾があつたら反転して轢ラムアタックき逃げ出来ただけど……無いものはしょうがない。

反撃できない現状を打破するのが先だ。

「ちよこまかと……動かないで！」

「言われて止まるヤツなんて！」

居るんだよなあ。

すぐ後ろから爆発音が3回聞こえてくる。音からして水柱の規模も相当なものだろう。

「グフツ!?!」

だけど直後に背中に受けた衝撃がヤバイ。艦装が無ければ背骨がクラッシュして即死だったに違いない。肺の空気が無理矢理押し出されてクソ苦しい。背骨本当に大丈

夫？ 折れてない？

「やった!？」

陽炎の喜びと不安が混じったような声が聞こえてくる。

その言葉はフラグなんだよなあ……。

痛すぎて逆に笑えてくる。

だけど残念！ 満身創痍だけど俺はまだ戦えるぜ！

水柱が収まった頃には俺と陽炎は離れていた。

「ヒヒッ！ 残念でしたあー！」

俺だつて負けず嫌いなもの！ 良いようにやられて喜ぶ趣味なんて無い！

「嘘っ！ なんで!？」

どうして沈んでないか気になる？

「砲がやられちゃいましたよ！ どうしてくれるんですか!？」

「何で砲がやられるのよ!？」

そりゃあ、避けながら砲を外して海に沈めたからだよ。

陽炎がほぼ真後ろに居るなら魚雷だつてそこから来るし、そこに何か沈めておけば一発はそれで防げるじゃんと思つたのが功を奏した。魚雷発射管を外した方が楽だったんだけどジョンストンに大事にしてつて言われちゃつたし。

砲なら大湊の汎用品使ってるから問題は……陽炎が火力厨になるよかマシだ。

「常識外れじゃない!？」

「勝てば良い。それが全てですよね?」

まさか2本も誘爆して3本防いだのはいい意味で想定外だったけど。まさか爆薬詰めすぎた所為で誘爆しやすくなったとか言わないよね?

まあ、普通に撃ち合うつもりだったけどもう付き合わんぞ。何で陽炎の土俵で戦わなくてはいけないんだ。

陽炎は魚雷の装填が間に合わないのか一本だけ発射してくる。

しかし距離が近距離から少し離れればどうだろう、スピードが速いだけで軌道がユルユルの魚雷だ。当たればヤバいけど当たらなければどうということは無い。

距離を縮められないように魚雷を一本ずつ、装填が間に合い次第2本以上を発射して少しづつ距離を取っていく。

後はさっきの演習でジョンストーンがやってたみたいに引き撃ちを繰り返せば陽炎はジリ貧だろう。

分かったことがある。ジョンストーンに貫った533mm五連装魚雷とやはら誘導性

がかなり高い。

SGレーダーの効果で遠くまで狙いやすいとなると本当に良い組み合わせだと痛感した。

遠距離から陽炎を一方的にチクチク攻撃し続けた結果、なんとか勝利をもぎ取ることが出来た。

そして今は、陽炎に小言を垂れていた。

「陽炎はソレを使い続けるなら大人しく神通さんから訓練してもらうことを強くお勧めします」

陽炎の改造魚雷は威力マシマシだから止めを刺すのに向いてそうだし。神通さんもきつと「やつと陽炎が逃げずに私の訓練を受けてくれました」みたいに感動しながら地獄に突き落としてくれる筈だ。

アメリカに来る途中に訓練から逃げて神通さんとマンツーマンする羽目になったこと、まだ根に持つてるからなあ？

「ええ〜……でもしようがないかあ。分かった！ やるわ！」

うん。強さに貪欲な姿勢は良いね。でも手段を選ぼうか。

古今東西マッドサイエンティストの栄えた試しは多分無い。つまり明石さんが提督の許可無しに色々し始めても関わってはいけない。

「じゃあすぐに魚雷を元に戻してください。そして帰るまでは勝手に改造しないでください。帰ったら明石さんにちゃんと改造して貰ってください」

『それは勿論です！ 良いデータも取れましたし！』

なんか明石さんすっごいウキウキしてるから余計な改造しそうだなあ。帰ったらまたしつこく釘を刺しておこう。

「あ、明石さんは帰ったら私の艦装をちゃんとセンチ規格に修正してくださいね」

『えっ?!』

「当然です！」

明石さんの思いつきで大変な目にあつたんだからこれくらいはして貰わないと割に合わない。

手元に

「ふあ〜……っふ」

今日もやはりと言うか脅威となるような深海棲艦が現れないアメリカでは暇を持て余す。

普段はトレーニングとかをして過ごしているアメリカの面々も、日本から出向で人が来るとここぞとばかりに演習や娯楽に精を出し始める。

それでもやっぱり休みは必要な訳で、俺はゆっくりと釣りをしていた。

しかし悲しいかな、既に3時間は釣り竿を海に向けてるけど小魚すらまともに釣れない。

途中で待つのに飽きてガンビーさんから適当に借りた小説を読んだのもあるだろうけどアメリカの魚は釣り針に耐性でも持つてんのか？

残念なことに俺の周りには俺と同じようにゆっくりと釣りをする人が居ない。

「そういった釣りもあるかもな……オレはそんな釣りはしねえけどよ」と不思議なモノを見る目で天龍さんから言われた。

「ただ待つてるだけなんて詰まらないよ！ 何が楽しいの？」と時津風に純粹な眼を向けられた。

「釣りは待つもんじゃねえ！ 仕掛けに行くモンだあ！」と地元の漁師さんと釣り人たちにも言われた。

「釣りよりも、網で一網打尽にした方が速くて楽ですよ」とフレツチャーにちよつとズレたことを言われた。

「ダイナマイト漁とか楽しそうじゃない？」とアイオワさんも言つてた。確かに一回はやつてみたいと思う。怒られるのは間違いないだろうけど。

同土は居ないけど、俺はやつぱり待つ釣りをする。

「一人でのんびり過ぐすのも乙なモンだよ」

母なる海の音を聴き、穏やかな時と風の流れを感じ、温かい日差しと奇異の視線を浴び、そして釣りあげるものの大半が有機物ですらないものだったとしてもだ。

……凄まじい寂寥感と敗北感を感じる。何でだろうなあ？

「おっ」

遠くに放つた浮きに違和感があった。

小説を閉じて竿を手に持つ。

「せやつ！……」

勢いよく引き上げると、俺の目の前にぶら下がるパンパンに膨れた白い球状のナニカ。

針が掛かった場所から水を吐き出し、徐々に小さくなっていくに従って中に入っていた食べ物の容器のような物がうつすらと見えてきた。新種の魚を釣り上げたという可能性は完全になくなったらしい。

「やっぱり呪われてるんじゃないかな」

本日3個目のゴミ袋を釣り上げた俺の率直な感想だった。

残念なことに俺は魚を釣ることが出来ないらしい。

俺が釣りをしようとする、天気や場所に関わらずゴミが釣れるからだ。

初めてこの釣り竿で釣りをした時も、佐世保でも、大湊でも、此処でも、艀装を装備して遠洋で釣りをした時にも魚よりゴミの方が良く釣れた。

深海棲艦は艦娘と共に近年現れたらしいからこれから海洋ゴミを棄てる輩が減って、地上に溢れ返ったゴミを解決するために技術が発展して、海洋ゴミの問題は解決に向かつて……

「もしかして深海棲艦は地球の自浄作用なのでは？」

地球から見た人間って完全に惑星を殺すウイルスか寄生虫だって前世の友人が言っていた。そりゃあ海洋ゴミとか温暖化とか有害物質とかを何とかする為に深海棲艦くら

い生み出すわな。

「つまり『艦これ』は地球がちよつとだけ過激な世界線だった？」

そこに気が付くとはやはり俺は名探偵スチュワート。

いや絶対に違うわ。身体は子供で頭脳はお花畑だもんね。

「お、ヒットした」

錆びてる缶詰の空き缶が釣れた。中から海藻が生えてるオマケ付きだった。

嬉しくない。

『ハツハツハ！ 元気なように何よりだよ！』

「!？」

再び針に餌を引っかけて遠くに放り、小説の続きを読もうと手に取ったら後ろから声を掛けられた。

『ふうむ……【一味違う釣りの時間を貴方に！】というキヤツチコピー付きで格安販売されてたんだが、君の釣果を見るからにその釣り竿もまだまだ現役のようだね』

このポンコツが現役？ いつもとは一味違うって言っても限度があると思う。キヤツチコピー考えたヤツの感性狂ってんじゃねーか？ そして格安販売とか絶対に

騙されて……ないのか。安いんだもんな。

あとゴミ釣りがデフォルトの仕様だとしたらこれは釣りの出来るゴミ収集アイテムってことになる。

どうしてここまでゴミが釣れるのかを科学で証明できないから間違はなくオーパーツだ。この釣り竿を作ったヤツの感性もぶつちぎりでイカレてるに違いない。

ああ、でもまずは

『お久しぶりです、アランさん』

やっぱり挨拶だよな。挨拶は大事だって古事記に書いてあるし。

『久しぶりだね！ スチュワート嬢』

『スチュワート嬢は勘弁してください』

嬢なんて呼ばれるタマじゃやない。中身はまともじゃなくてゲテモノなんスよ俺。

前にあつた時よりもちよつとだけ恰幅の良くなったアランさんは、変わらず陽気な様子で手を挙げていた。チャーミングなスマイルも相変わらずだ。

『ああ、気を悪くしないでくれ。……スチュワートも、ここに居るということは無事に日本まで帰れたようだね』

『アランさんのお陰です。コレが無かつたら飢えてたかもしれないません』

あの時は釣った小魚で海鳥をおびき寄せて食べたんだっけ？ 市販の鶏肉とは比べ

るのが鳥澁がましいレベルで違った。やはり食用以外のものはダメだっことを学んだ。

そう言えばイ級も食べたことあるなあ。全く美味しくなかったけど、ボリユーム満点だから非常食としての性能が高いということを学んだ。全く美味しくないゲテモノだったけど。

『そうかそうか、それは良かった』『あーっ！ アラン叔父さんだ！』 おお！ サム、今日も可愛いねえ』

サムがアランさんにタツクルめいたハグをかました。

それを難なく受け止めたアランさんは可愛い可愛いって言いながらサムの頭を撫でている。

……ぶつかった時に結構いい音出てたけど、大丈夫なのかね。

そうして突撃してきたサムの後ろには他の艦娘たちも来ていた。

日本の人たちが俺に「誰？」と尋ねるような視線を向けてきていた。

「命の恩人です」

「ええっ!？」

意外だったんだろう。神通さんですら素っ頓狂な声を上げる。

加賀さんも目を見開いて驚いているのが丸わかりだ。随分レアな顔だぜ。明日は電

でも降ってきそうだな。

「仲良く話してみたいんだけど、本当のところどうなの？」

『アラン叔父さん、本当？』

サムもちよつとムツとした顔で俺に問いかけてくる。うんうん可愛いねえ。

まあ言ってることは本当なんだけど……日頃から適当な冗談を言いすぎてたからか信じて貰えないだろうな。狼少年は辛いぜ。

『本当だとも。……そうだ！ スチュワートは元々アメリカの艦ふねなんだろう？ これからもここに残ってはどうかだろう？』

『それは名案よ！ ねえスチュワート、ここでずっと過ごきなさい？』

『あく、確かにここは楽しそうですし良いですね〜』

イントレピッドさんも来た。

それにしてもアメリカに残る、かあ……

ちよつと陽の者の割合が多いような気もするけど、慣れてしまえば日本以上にアットホームな環境は楽しそうだ。

深海棲艦は少ないから楽で良い。代わりに出向の無い間はトレーニングが多いみたいだけど、反復作業は好きだからぶつちやけ俺にはそこまで大きなデメリットは無い。

そもそも駆逐艦スチュワートってアメリカの艦だからアメリカに居るのが自然なのは？　と思えてくる。

まあ残らずに日本に帰るんだけど。

「ねえスチュワート、この人たちはなんて言っているの？」

そう言えばみんな英語だったわ。アランさんは日本語ダメみたいだし、必然的に英語で会話することになってるから何言ってるのかよく分からないだろう。

妖精さんは早く自動翻訳システムみたいな作って導入してくれないかな。

「出向が終わってもアメリカに残らないかって言ってますね」

「……そういうことだったか」

「ん？　長門さんは何か知ってるんですか？」

「ああ。この前の演習の時にコロラドが教えてくれたぞ」

「なん……だと……？」

コロラドさんは予知能力を持ってたのか!?

違う捉え方 戯れ (Play Out)

「コロラドさんも言ってたって……」

俺がアメリカに異動することは既に決まってたということか？ 初めて聞いたんだけど。

「私の聞き間違いではないだろう。それでだが、アメリカに残るなんて言わないよな？」
「え？ ……勿論、残りま「ちよつとスチュワート借りてくわね！」は？」

「残らない」って答えようとしたらイントレピッドさんから掴まれてすごいスピードで日本の皆と引き離された。おお、一瞬足浮いたぞ。

そのまま宿舎に突入して、向かった先は……

『へい！ 皆居る〜!?!』

『ちよつと邪魔しない……あつ』

『ウワアアア……』

—— you died ——

『『あ……』』

アイオワさんの部屋だった。ゲームオーバーっぽい画面と周りの反応から今日もゾ

ンビを撃ちまくっていたらしい。済まねえな、ゲームのあるあるだと思って許してくれや。

『ん？ そんなことは言つて無いぞ』

アイオワさんの部屋にはアレックスさんも居た。

どうやらアレックスさんは日本の皆の前では物凄い猫を被ってるらしく、俺がこの前サウスダコタさんと格ゲーやってたら部屋に乱入してきて、あまりのフランクさにビビりまくった。その後、『内緒にしといてくれ』ってホーネットさん込みの三人で説得されたからまだ日本の人は誰も知らない……筈。多分、きつと M a y b e ……

今も艦娘たちのゲーム風景をホーネットさんのアップルパイを皆の分まで食べながら鑑賞しつつ一の間にか輪に混ざってた。

『ちよつとコロ！ まさか冗談で言つたの!?!』

「ち、違うわ！ アレックスが日本に『スチュワートはアメリカの艦だから貰つていいかな?』って電話してたじゃない!』

『俺はそんな欲張りだと思われてたのか。泣けてくるぜ。俺が言つたのは『スチュワートはアメリカの艦だから長期間借りて良いかな?』だ。そもそもなくただの電話一本のやり取りで異動の決定なんて普通しないだろう?』

そりやそうだ。その電話が何時かは知らないけど今頃偉い人たちは揉めてそうだなあ。異動先がここ？ だったら楽しそうだし全然OKよ。

『サムから連絡来た。日本の皆、すごい焦ってるんだって……どうするの？』
『どうするって言われても。なあ、どうせ帰るんだろ？』

『まあ……そうですね』

提督からも『帰ってきてくれ』なんて言われて皆で約束しちやっただから、それを破らない為にも一度帰ることは確定だ。

いや、それだとまるで彼氏と約束した彼女みたいだな……俺がそれをやっているとするとキモいな。

『出向の報告とか色々あるので』

うん、こう言っておけば問題は無いだろう。

『ところで半月以上経ったけど、スチュワートのにはアレックスはどう？ 好きになれそう？』

『Yes』

いきなり何？ 今その質問する意味ある？

う〜んでもアレックスさんかあ……まあ俺ってホモじゃないし、好きにはなれないよね。

普通の女性から見たらイケメンそのものだろうけど俺からしたら野郎っただけで範
囲外だ。済まねえ、俺には男のケツを追いかける趣味も男に迫られてときめく心も無い
んだ。

『恋愛的にはNGです。これからも大湊警備府ともどもよろしくお願いしますね』
『Oh……振られちゃったぜ』

まあ、ホーネットさんの左手を見ればね？俺だつて言っちゃいけないことくらい分
かってるわ。

『因みに好きになれそうって答えたらどうなります？』

『目を付けられることは確実だ。最悪呼び出される』

怖過ぎいー！

『まあ、日本のヤツらも落ち着いたらスチュワートも報告の為に帰るってことにはすぐ
気が付くだろう。だからこのまま眺めてるのも良いと思うんだが……どう思う？』

『楽しそうだから賛成です』

『あ、コロラドは今日の内に謝っておけよ』

▼
「スチュワートどうすんのよ！ すっごいキリッ！ つて感じの目で答えてたけどあれ

絶対に残るって言おうとしてた！」

「別れは唐突と言いますが、まさかそんな……」

走り去っていったイントレピッドといつぞ笑えるくらい抵抗の出来ていなかったスチュワートが消え、後には日本から来ていた5人とアランと彼に抱き着いたままのサミュエルだけが残された。あとスチュワートの釣果である多くのゴミ。

日本の5人は焦っていた。

まさかいきなりアメリカから非公式であるとは言えスカウト紛いの言葉を掛けられたスチュワートがそれに対して前向きであるかのような態度を取ったことが原因だった。

「ダメね……長門さん、提督に電話が繋がらないわ」

「なんだと？ こんな時に一体何をしているんだ提督は!? 加賀、大湊に連絡を入れろ」

「止めておきましょう。無闇にこの情報を広めたら混乱を招くかもしれないわ」

「クソっ、何か手は……」

『イントレピッドもタイミング悪いなく。ガンビーに連絡だけ入れておこ』

少し離れた場所にはまだアランとサミュエルが残っていた。

しかし、日本の5人はこうなった原因の言葉を発したと言っても過言ではないアラン

と、アメリカの艦娘であるサミュエルに問い詰めるといった簡単なことに気が付かないくらい、混乱していた。

『サム、私は彼女たちがなんて言ってるか分からない。なんて言ってたんだい？』
『えつとね』

『ふむふむ。スチュワートは愛されているんだね』

『でも前に訊いたら大湊の提督は好きじゃないって言ってたよ』

『いや違くてね、皆から大事にされてるっていう意味だよ』

『……そうだね』

そんな会話をする二人の前には「緊急対策室を設立する！ 場所は私たちの部屋だ、行くぞー」と言って5人が居なくなることによって存在感を大きくしたゴミの小山があつた。

『アラン叔父さん、スチュワートが命の恩人って言ってたけど何したの？』

『秘密だよ』

『むう。教えてくれても良いのに……スチュワートって釣りの才能無いんじゃない？』

大量のゴミと、バケツに入った小魚を見ながらそう言ったサミュエルが釣り竿を引き上げる。

それなりに大きな魚が食いついていた。

「いきなりここに対策室を設置したのはいいが……何から手を着けたら良いんだ？」

「やっぱりもう一度本人にアメリカに残る意思があるのかを確認するべきではないでしょうか」

「私もそう思うわ。嫌がる本人を引きずってでも帰らせる趣味は無いもの」

ちなみに今の会話は一足早く部屋に通話中のスマホを仕込んだスチュワートによって盗み聞きされている。

それに気づかず話を進める日本側の会話は、今までテレビゲームに夢中だったアメリカの面々も『面白そうなことになってるじゃん』と次々に興味を示すには十分だった。

「よし！ ではスチュワートを無事に日本に帰す為にス号作戦を開始する！ まずは本意を聞き出すためにスチュワートと接触するぞ。加賀、誰の部屋に人が集まっているか分かるか？」

「カーテンが閉まつてるのはガンビア・ベイとアイオワさんの部屋ね。恐らくアイオワさんの部屋に皆居ると思うわ」

「よし、では行くぞ！ 加賀と初風はここに残って提督と連絡を引き続き試みてくれ」
「分了解かつたわよ」

だが、相手は悪ふざけを始めたアメリカの面々。

ここまで日本側も焦るとなると本当のリアクションではなく、面白半分の演技でやっているのだと勘違いしていた。

「スチュワートに用がある。通してくれないだろうか？」

『ダメよ！ スチュワートは渡さないわ！』

「そつちが立やるっもりて籠もるなら、こちらもやってしまつて……良いのか？」

『望むところよ！ 行きなさいサウスタダコタ！』

アイオワの部屋の扉が開かれ、中から出て来たのはサウスタダコタだった。

黒い特攻服に天上天下と書かれた服を着て、手にはボクシングバンテージを着けてい
る。

「よお、待つてたぜ。囚われのお姫サマが欲しけりやこの私に え。違う？……付いて
来な！」

騒いで、騒いで　　Let's do more　　

サウスダコタさんの後ろを全員で付いていく。勿論日本の皆も一緒だ。

しかし日本の皆は俺と会話が出来ていない。アメリカの艦娘たちがボディーガードよろしく俺の周りを囲んでいるからだ。

まあ、皆も馬鹿じゃないだろうから俺が日本に戻るってことに気が付いてるだろうし、アメリカの面々の悪ふざけに付き合ってる形だろう。

「ねえ、スチュワートは本当に「そこまでよ!」……」

陽炎が人の壁を無視して俺に話しかけようとしてもコロラドさんが迫真のインターセプト。

「スチュワート、スマホだ」

「すいません。今手元に無いので」

「どうしてこんな時に持っていないんだ!」

どうして……みんなの部屋から盗聴する為にだ!

なんかアメリカの人たちとバカやって騒いでるって高揚感と「ちよつと悪い事してるかな?」って背徳感でゾクゾクした。すごく楽しかった。

「せめて艤装さえ着けていれば通信出来るのに……」

「神通、無駄よ！ 傍受はともかく妨害なんて朝飯前なんだから！」

「そんな……」

アイオワさんの言葉で神通さんがショックを受けたように言葉を零す。

『皆さんノリノリですね』

『こんな楽しそうなことを見過ごすなんて勿体ないじゃない！』

まあね。

『ホーネットさんは止めなくて良かったんですか？』

『本当なら止めなくちゃいけないでしょうけど、止めても止まらないから……』

苦労の色が滲み出た溜息を吐いたホーネットさんがちよつと哀想に思えてきた。

確かにアメリカの面々……特にアイオワさんとサウスダコタさんはちよつと我が強い

感じあるかも。

アレックスさんも蓋を開けてみたら自由人な感じだし、これは相当苦勞してそうだ

なあ。

『ご愁傷様です』

『貴方もそつち側だったとは思わなかったけど』

ジツトリした目で見られた。済まねえ、日本人は祭楽しい事りが好きなんでね。

「よし、そろそろ着くぞー！」

サウスタコタさんの言葉でホーネットさんと秘書事情のお喋りを中断して前を見ると、柵が見えた。その先には体育館が見える。

向かう先には他にそれらしい建物は無さそうに思える。

『もしかして、あの建物も基地のもですか？』

『勿論よ。出向が終わると大半があそこに籠ってトレーニングとか色々やるのよ』

『はえ〜……規模大きいですね』

普通に市民体育館っぽいのが偶々基地の隣の敷地に建設されてるんだと思ってたんだけど、まさか基地の一部だったとは。

それにしても、弓道場みたいな感覚で射撃場があるのはアメリカらしいな。

建物の中に入るとバスケットコートも見えた。出しっぱなしのボールと得点板が見える。本当にトレーニングしてるのか怪しくなってくるんだが？

「到着だー！」

着いたのは体育館の隣の部屋で、トレーニングルームっぽいところだった。

ランニングマシンとかベンチプレスとかのトレーニング用品が並んでいる。バラン

スポールとかのダイエット用品にしか見えないような物もあるから筋トレだけの場所ではないかもしれない。

でも一番目を惹くのはそれらではない。

「どうしてこんなものがあるんですか？」

そう突っ込まざるを得ない物、それはリングだった。

ボクシングとかでもやるつもりなのかよ……深海棲艦が少ないからって今度はどんな相手を想定したトレーニングしようとしてるんだよ。

「スチュワートを返してほしかったらまずこのサウスタコタを倒してからにしてもらおう！」

「馬鹿を言うな。味方同士でわざわざ演習でもない只の喧嘩の延長線をやるつもりは無いぞ」

長門さんの言葉に日本の皆がうんうんと首を縦に振る。まあ、アホくさくてやってられんわな。

俺としてもバスケットボールの方が平和で良いような気がするけど。

「サウスタコタ、いくら負けたくないからって自分に有利なルールで勝負するのは感心しないな」

「そうよサウスダコタ！ 相手の出したルールに乗った上で振じ伏せるのよ！」
『違う、違うわ……そうじゃない』

アレックスさんがサウスダコタさんに微妙に違う注意をした。ホーネットさんが眉間と目頭を指圧して呟いている。

わざわざ日本語で注意したのは挑発も兼ねてるんだろう。

「なんだと!？」

「長門さん乗らないでください。これは明らかかな挑発です」

結果として長門さんがピクリと反応し、頭を切り替えた神通さんに止められた。

神通さんを戦闘モードに切り替えさせちゃったなあ。こうなった神通さんは手ごわ

いぞ。

「長門^{ナガト}！ Big 7の癖にこの程度にビビってるの?」

「コロラド、いやビッグセブンはサウスダコタをこの程度扱い出来るとは、随分自信があるみたいだな。どうした? 速くリングに上がって来たらどうだ。なんなら二人同時に相手してやってもいいぞ。んん?」

コロラドさんに止めの一撃を、サウスダコタさんにダメ押しとばかりにこう言われてしまえば……

「貴様……!」

「え？ 私ほちよつと……」

まあ、こうなるな。

長門さんは誇りであるビッグセブンを軽く見られたことに激怒し我慢の限界。コロラドさんは自分の発言がブーメランとなって突き刺さっていた。

『ほら、コロもBig7なんだから行きなさい！』

『『『そうだそうだー！』』』

『ああもう！ 後で覚えておきなさいよ！ そしてこの腐れ《自主規制》！ なんて私まで煽るのよ！』長門^{ナガト}！ 貴女が上がってこないなら私が一人で勝ってしまうわ！』

コロラドさんがリングに上がってへっぴり腰になりながらファイティングポーズを取って、チラチラ長門さんに視線を送っている。なんだあの仕草かわいいかよ。

でも長門さんは……おお、陽炎と神通さんが押さえてくれたお陰で「勝手にやつてろ」って視線を向けてるに留まってる。

「ふうん……これじゃあまたコロラド相手の連勝数が伸びちやうかもなく。でもその意気込みは気に入った！ レフェリー！」

「はい。レフェリーはサラが務めますね」

そう言つてリングに上がっていったサラトガさん。

結構抵抗なくリングに上がっていったけど、こういった殴り合いに忌避感があまり無

い？ でもコロラドさんの為にグローブとかその他道具を持って行くのは最早慣れを感じてる。つまりそういうことか。

「フレッチャーはBGMの、ガンビーはポップコーンとコーラの用意をして！」

「^分かり^かつ^た」

いよいよアメリカの観戦に必須のポップコーンとコーラの用意をするように声が掛けられて、今までもテンションの高かったアメリカの人たちのテンションがまた一段階上がった気がする。

『大盛り上がりですね』

『日本の子を見習って欲しいわ全く……』

『ハハハ……因みにサウスタダコタさんの強さはどれくらいですか？』

『^{リング}あそこの覇者よ。次に強いアイオワでも7：3くらいで負けるわ』

『それはまた……』

強すぎやしませんかね？

因みにコロラドさんは3番目に弱いらしい。実際にリングの中では2回目のワンパンチでノックアウトされた。おいおいおい瞬殺だよ。

^{師匠}神州丸から教えを受けたから分かる。あれ、コロラドさんが弱いんじゃないかってサウス

ダコタさんのパンチの威力がヤバすぎるだけだ。

ルールのに負けてしまったコロラドさんはサウスダコタさんの前から運ばれ、高速修復剤の原液を塗られて飛び起きてアトランタさんに文句を言っていた。

「頑丈な艦娘ならでは、か」

盛り上がりには欠けるからってブーイングの嵐を受けていたサウスダコタさんが居るリングが、急に探照灯で照らされる。

そして急に変わったBGMと共にフラッシュが強くなつて、それが収まった頃には「コロラドなんて必要ない。私一人で十分だ」

リングに長門さんが立っていた。

エンターテインメント至上主義達の騒ぎ

「よく来たな。怖気づいたのかと思ってたぞ」

「抜かせ。ルールはなんだ？」

挑発するように薄く笑うサウスダコタさんと、キレ気味の長門さんがリングの上で対峙している。

その後によく言葉の応酬も凄く凄く。やっぱり他の鎮守府の“長門”を知ってるんだらうな。怒らせて戦うように仕向けるまでの煽り方の上手いのなんの。

「ああ、スポーツマンシップに則つてりや特に反則は無いぞ。SUMOUだろうがカラテだろうが振じ伏せてきたんだ」

「ほう？ 私は並の艦娘とは訳が違うぞ」

「面白い」

やだ……サウスダコタさん男らしい。

実況と解説のフレツチャー曰く、戦艦サウスダコタの愛称「ブラックプリンス」に因んで黒の特攻服なんだとか。

愛称が格好良過ぎるけどやってることは王子プリンスつてよりかチンピラなんだよなあ。い

つもは適切に気を配ることも出来るらしいのに、日本から出向して人が増えるのと闘争を求めて理性が蒸発することが偶にあるらしいのは残念過ぎる……折角の美人がどうしてこんなことに。

サウスタダコタの猛烈なラツシユが長門さんを襲っている。風切り音が聞こえてきそうなのソレは上手く表現できないけど……ビッグバンを彷彿とさせる圧倒的な破壊力を持つパンチは正に流星の如し。流星の長門さんもそろそろ限界なのでは？

「その程度か？」

まだまだ余裕そうだって！

驚いたのは俺だけではないようで、アメリカの面々も啞然としている。

確かに長門さんは拳をまともに受けないように立ち回ってたけど、それでもここまで長時間粘るのは凄くない？ コロラドさんが一撃でダウンするレベルだぞ？

「まだまだあー！ ギアを上げるぜ！」

「なに？ ぐっ!？」

サウスタダコタさんは今までは手加減をしていたらしい。ジャブとストレートとフックだけだった攻撃にアッパーが追加された。

今までは左右を守っていれば致命傷は防げていた長門さんもいきなり下から攻撃が来るようになったから危機感を覚えたのか今まで以上に距離を取って警戒し始めた。

それから本当に濃密な時間だった。

誰もが一瞬で勝敗が決まるだろうと思つて呼吸と瞬きをするのを忘れたように見入り、それが数分と続く内に騒がしかったギャラリーも解説のフレッチャーも一言も話さなくなつた。

そして、声を上げたのはサラトガさんだった。

「タイムオーバーです！」

『スチュワート。次のラウンドはお前がやれよ』

『はい?』

『ラウンド始まつたら早々にリタイアするからさ』

『はい!』

リングの上からにししと笑うサウスダコタさんの言葉にビツクリした。

完全に観客気分だったんだけどお!? 折角の良い試合なんだからやるなら最後までやってくれよ勿体ない。

『久々に満足しちゃつてさ、偶にはギャラリーに回ろうかなつて。長門もきつと消耗してるだろうから良い試合出来るんじゃないか?』

殴り合いガチ勢のサウスタダコタさんが言うならきつとワンチャンあるんだろう。俺がアレコレしても勝てないんじゃないかと思つて断ろうとしたけど、やってみるとにした。

予定通りにサウスタダコタさんがリタイアして、リングの上から降りてくる。俺の出番が来た。緊張する。

『無理に勝とうとしなくてもいいぜ』

ハイタッチの瞬間にそう言われた。どうせ遊び半分だからガチにやらなくても良いって解釈で良いのかな？

リングの反対側には神通さんと陽炎の驚いた顔が見える。

そしてリングの上には滅茶苦茶悲しそうで不安そうな顔をしてる長門さん。

「サウスタダコタさんとの殴り合いの続行がお望みでしたか？」

「そんな訳あるか。……お前は、私たちと争つてまで日本に戻りたくないのか？」
「はっ？」

何言つてんのこの人お!? 演技か? 演技なのか!? でも長門さんは大根役者っぽいかからもしかすると一連のバカ騒ぎをガチだと認識してる可能性が?

「長門さん本気でそう思つてます?」

「何? まさか……」

「嘘だろオイ……日本には戻りますよ。出向は一応仕事なので最後まではやりますよ」
報告とかもありますしと言うと、長門さんのさっきまでの悲しそうな顔が思案、驚きと移り変わって最後に怒りを表現した。

「一発殴らせろ」

「へえっ!?!」

和解！ 和解を求める！ アメリカの皆と悪ふざけし過ぎたのは謝るから命だけはお許しください……タスケテ……タスケテ……

「あゝ、そろそろ始めても?」

「いや、ちよつと待つ「勿論だ」ああ、終わった……!」

「いつまでも逃げてちや面白くないぞ」

「ちやんと戦え臆病者!」

「長門も早く倒しちやえ」

俺に向けてブーイングが、長門さんに向けて激励が飛んでいる。

神州丸師匠さんに格闘術の触りの部分は教えて貰ったけど、サウスダコタさんの攻撃でもノックダウンしない長門さんには通用しないだろう。

だからリングの中で猛威を振るう長門さんの腕を躲しながら時間切れを狙ってるんだけど……良い感じに時間が無くなってるじゃん。待望のタイムアップまであと少し。心の中でガッツポーズをする。

「そうだ。ウチでは消極的な試合は時間切れのルールを適用しないぞ。なあサウスダクタ？」

「勿論だ！ 娯エンターテインメント 楽も兼ねてるからな。」

絶望のアナウンスが聞こえてきた。

いや、客観的に見て面白くは無いんだろうけどさあ……元々こうなったのってアメリカ側が悪ノリし過ぎたからじゃね？ いや、俺も乗ったから人のことは言えないけどさあ。

だからちよつと申し訳ないかなあなんて思って長門さんに攻撃はしてないんだけど。このまま逃げるの止めて大人しくやられるって？ あんまりじゃねえかな。

「ん？」

ピタリと長門さんからの攻撃が止まった。

「スチュワートがこのまま逃げ続けるならば、帰還時にスチュワートを置いて帰還して、提督には『スチュワートは日本に帰りたくなかったようだ』と報告しなければいけないな」

待つて。何それは。

「それだけは困ります！」

「ならば来るがいい！ 臆病者と言われて何も感じないのか？ 私は悔しいぞ！」

「大湊警備府の初期艦がこのような不甲斐ない方とは……悔しいです」

「そうよ！ 私のライバルは臆病者だなんて言わせないでね！」

長門さんと神通さんの言葉が胸に刺さる。陽炎は俺のことをライバルつて……マジかあ。

申し訳無さと一抹の嬉しきで目頭熱くなっちゃったじゃないか。

「なら………行きますよ！」

低い姿勢で懐にダイブする。そしてそのまま首元と腕を掴んで背負い投げの要領で

……

「重っ！」

投げられない！ 咄嗟の判断で手を離して距離を取る。

ボクシングの漫画でやってたように小刻みに跳ねながら近寄られないように移動するが、長門さんはその場から動かない。やりにくいなあもう。

「………」

視線が合うけど長門さんは動かないし。

「サウスタコタさん、ルールは何でも良いんですよね？」

「ああ」

その返答を聴くなり再び近寄って宙返りしながら蹴りを、所謂サマーソルトキックを入れる。

『Fooo! ガールの技よ! 信じられない!』

着地するなり、仰け反ってバランスを崩している長門さんの顔……は止めておこう。流石に気が引けるしそもそも届かない。代わりに心臓をダルマ落としするつもりで後ろ回し蹴り! 死神の鎌みたいに命を刈り取る型かたちをしてるだろ?

「ぐうっ!」

身体が柔らかいって素晴らしいなあ! いい感じの手応え有り!

「調子に乗るなよ」

「え? あっ!」

足を掴まれたあ!?

「こりや駄目だね。うええ!」

遠心力ツ!? 頭に血があ! 頭割れる! 割れる! 破裂するヤバいつて! あ、浮いた。

急速に迫る壁か床のどっちかを見て直感的に受け身は出来ないと悟った。
瞬間、意識が途絶えた。

「あ、繋がった」

初風が何度目かも分からない通話をかける。

今までは聞こえすらしなかった呼び出し音に逆に少し驚いていた。

「そう。連絡はしつかりとお願いなね」

「任せてよ……もしもし？」

『どうかしました？ 着信履歴すごいことになってビックリしたんだけど』

「残念だけどそんなこと言ってる場合じゃないわ。もつと大変なことがあるんだけど

……スチュワートがアメリカに残るかもしれないわ」

『……少なくとも報告の為に一度帰還する筈だけど』

「えっ？ ……それもそうね。き、切るわね！忙しいところ悪かったわね！」

言うなりスマホの電源を切って部屋の外に向かおうとする初風。

「何を言われたのか説明してもらえないかしら？」

それを加賀が引き止めようとする。

「報告あるから日本には戻るって！」

そう言う初風の表情はどことなく嬉しそうだ。

「そう……なら、不毛な争いを止めに行きましよう」

加賀は初風と移動を開始した。

そうして辿り着いた総合体育館の一室では、リングの上に倒れたまま動かないスチュワートの姿があった。

「どうしてこうなったのよ……」



寂

「ウチののも良い感じにガス抜き出来たし、資材の備蓄も増やせた。深海棲艦は来なかったけどまあ、いつものことだからそこは気にしないでくれ。最後になるけど一月の出向ご苦労様。助かったよ」

「我々も大湊では経験できないことが多くて充実した時間になった。」

「それがいい意味かどうかは訊かないでおくよ」

短く感じた出向の一月も終わり、来た時と同じように先頭に立ったアレックスさんと長門さんが互いに代表として挨拶をしている。

「他のは挨拶しなくても良いのか？」というアレックスさんの言葉で各々が最後のお別れとついでにお喋りを始めた。

「また来てくれるなら大歓迎だよ！ また色々楽しもうね！」

「言われなくてもウチの提督は^{大湊}お人好しだから要請したらすぐに誰か寄越すわよ」

「貴女の妹はまだ全員知らないんです。次があるなら積極的に参加させてくださいね」

「手のかかるのばかりよ。後悔しても知らないからね」

「期待しています」

『スチュワートさん！ この前作ってくれたオムライスの作り方をまだ教えて貰って無いですよー』

『焦らなくても連絡先一つで万事OKです』

『アメリカの料理のレシピもどんどん送りますね』

「次は“殴り愛”の出来そうなヤツ連れてきてくれよ。……やはり霧島だろう」

「悪いな。霧島はまだ建造されたばかりで出向は無理だ」

「なんだと?! じゃあ長門！ 次も来てくれ！」

「戦艦加賀なんでしょう!? 主砲の一つや二つくらい積みなさいよ！」

「貴女は出来るの？」

「私は純粋な正規空母だから無理よ！」

「……」

「今度は負けません」

「そもそも川内型って夜戦なんでしょう？ 土俵が違うと思わない？」

「……話を逸らさないでください」

みんな楽しそうで何よりだ。

俺の相手はサラトガさん。この前俺が夕食に作ったオムライスの作り方を教えて貰って嬉しい。だがあれには伊良湖さんから教えて貰った秘伝の知恵と技術が詰まって

いる。どれだけせがまれても伊良湖さんが領かない限り教える訳にはいかぬ。

『君の……君達のこれからの活躍を祈ってるよ』

『ありがとうございます。アランさんが祈ってくれたので大湊の将来は安泰ですね』

『それは良い。神父にでもなるうかな?』

『互いに帰ったらまた色々と苦労しそうですね』

『自分だけじゃない』って良いですよね』

『全くよ』

そんなやり取りがあつたりした。そしてそれすらも懐かしい。

今はもう既に海の上。今度はアメリカから日本への貿易船の護衛も兼ねている。

「楽しかったな〜……」

「そうですね……」

「あくあ、帰ったらまた遠征に演習に……忙しくなりそう」

甲板の手摺りに捕まって憂鬱に沈む俺たち駆逐艦組。まだ正午くらいなのに全員が黄昏ているのは修学旅行の帰りを彷彿とさせる。

「うむ。深海棲艦の居ない日常はある意味貴重な体験だったかもしれないな。だがいつ

までもものんびりしては居られないぞ。神通と加賀を見習え」

「あの二人はもう流石って感じしない？」

せやね。

アメリカではどつちかと言うと艦装を使わない活動が多かったように感じるし、娯楽の為に全力を尽くす感じで努力のベクトルが違う人が多かったから真面目な神通さんは退屈だったんだろう。

加賀さんは帰還前日にサラトガさんから砲撃の指導受けてたから多分その練習も兼ねてるんだと思う。

神通さんから副砲を借りて今もマンツーマンで指導を受けている。上を目指す姿勢は流石一航戦って感じだ。

まあ理由はどうであれ俺が知ってることはだ。

二人は詳報レポートを書く為のネタとしてアメリカでの生活よりも移動中の深海棲艦との戦いを取り上げたってことだ。

俺は貰ったレーダーと魚雷の分析、陽炎は改造した魚雷。

初風は買物とか満喫してたし多分アメリカの日常みたいな感じに纏めたんだろう。長門さんは全体の記録とその他諸々があるらしいから免除なんだとか。

「スチュワートはどうだ？」

明後日の方向にぶっ飛んでった思考を目の前に戻す。出向がどうだったかって？
「あつという間でしたね」

そりやあもうね。演習から休暇から……全部満喫できた。

エンターテイナーいっぱい居るから退屈はしないし、俺も仲間に加わってアレコレ悪戯三昧して正に全力で羽を伸ばせたって感じた。ノリが高校生の男子みたいな楽しければ良いってスタンスの人が多くて最高……また行きたいね。

日本の外は水道水もまともに飲めないヤベーところって言ったの誰だよ？ 俺だよ。

「アンタは良いわね。アメリカの人たちと散々振り回してくれちゃって全くもう……世話が焼けるわ」

「これからもよろしくね陽炎お姉ちゃん！」

いい笑顔でそう言ってやった。「うわ……」って顔されたけど、その顔をするだろうって思ったからこんなことをしたんだって言ったら怒られるんだろう。

でもなんだかんだ言いながら面倒見のいい陽炎は好きだぜ。

「同郷の艦ふねと会えて嬉しかったんだろう？ アメリカでは笑顔が多かったからな。私はそっちの方が良いと思うぞ」

なんだよクツソ恥ずかしいこと言うなよ。

こういっただことに耐性の無い俺ならキリつとした顔で「笑顔が良い」なんて言われた

ら恥ずかしくなつて顔が爆発するかもしれないだろ？ ギャグ補正とか掛からないからアフロでは済まずに首から上が吹き飛ぶ可能性があるから気を付けて欲しい。もう既に顔が！ 顔が熱い！

「……別人みたいだったしね」

「結局深海棲艦も両手で足りるくらいしか見てませんし完全にオフって感じでしたしね。仕事じゃないならこんなモンです」

ヤレヤレって感じで溜息混じりに言う。

ちなみに人が居ない場所だともっと酷くなる。

まあ最後の一線は越えてないからセーフ。

「ああいう雰囲気苦手だと思つた。可愛いところあるじゃん」
「……止めてください」

初風に頭を撫でられる。

流石に中身がコレで頭を撫でられるのはキツいんですわ。サウスタコタさんとか摩耶様みたいに大雑把にワシヤワシヤされるのは全然気にならないんだけど……

「すぐそうやって照れ隠しするのは時津風みたいね。やって欲しいなら素直になつた方が良いでしょう？」

違う。陽炎はボッチの習性を分かつてない。

・ 輪に混ざりたいけど和が崩れることを危惧している。

・ 輪の一步外から眺めるのが好き。

・ 自分本とか夢の中の世界を持つてから輪に入らなくても問題ない。

・ イジメとかを受けてるから輪に近寄りたくない。

・ 恥ずかしいだけ。

大体このうちのどれかに当てはまると思う。ポツチの俺が言うんだから間違いない。

時津風みたいに恥ずかしがってるだけとは思わないで貰いたい。

そもそも俺は見た目はアレでも中身がコレだからボディタッチ含むスキンシップは倫理的にダメだろう。セクハラで訴えられたら勝ち目無いんだぞ。

だから俺のは照れ隠しでは無くて自己防衛の一種だ。決して恥ずかしいとかではないんだ。

「でも早く皆の顔見たいかも……」

「ああ。連絡は取れると言ってもやはり実際に顔を見られないのはもの悲しさがあるな」

「陸奥さんは問題も起こさず待つてくれるから良いでしょ。私は帰って早々怒ることになるかもしれないのよ……」

「そう言えば初風は出向の序盤で『妙高成分ミョウウコウブが足りない……』とか言ってませんでしたか

「？」

「思いつきさせないで！」

「初風？」

「ああ、あああ……」

初風の様子がおかしくなった。

この世の終わりを見たのかと言いたくなるくらいに声から力が失われていき、目の焦点が次第に合わなくなって次第に大きくブレ始めた。手摺りを掴む手が震えて……最後には足に力が入らなくなったのかその場に崩れ落ちてしまった。

「初風!？」

「はあく……悪いけど、夜の哨戒は神通さんと二人でお願い。妙高さんの写真どこにあつたかな……」

虚ろな目をしたまま「妙高さん……」と繰り返す初風は陽炎に回収されていった。「もしかして新手の深海棲艦の攻撃か？」

多分病気だと思う。

「放つておいても陽炎が何とかしますよ」

「そうか……神通は夜もだったな。代わって来よう」

「頑張ってくださいね」

この時の俺は知らなかったのだ。

もし知っていれば色々準備と対策をして回避できた筈の未来を。

「あああああつ！——つ！」

一人ベッドの中で枕に向かって激情をぶつけるなんてことはしなくて済んだんだろう。

想定外は、予想や予測を超えてくるから想定外なんだ。

闇に一点

「腹が減っては戦は出来ぬ……という訳で厨房からおにぎりを貰ってきました。適度な休息も必要ですよ？」

夜になり、俺が加賀さんと交代する時になっても船内に戻らずに深海棲艦を警戒していた神通さんにおにぎりを渡す。一食くらいは抜いても大丈夫なのは分かっているけど二食抜くのは戦う仕事やっける以上ちよつと見過ごせないかな……。

「……ありがたく頂きますね」

「こちらこそずっと出て貰っちゃって申し訳ないです」

「体調不良なら仕方ないです。悪化されても困りますし」

初風のアレはもう末期症状だから放置でも良いような気がするけど。

いくら提督とは言え艦娘全員のプライベートを細かいところまでは把握なんてしてないに決まっている。

陽炎も妹が心配なのは分かるけど、それなら最初から初風を妙高さんから離さないように提督に陳述をだね？ いや、妹がストーリーカー予備軍なんですつては言いたくないか。

「人って難しいですよね」

「はー？」

ちよつと心配そうな目で見られた。解せぬ。

夜が深くなつてからは深海棲艦が出てこなかった。この海域の深海棲艦は生活リズムが整つてて実に良いヤツらだ。そのまま永久に海底に引き籠もつて勝手に自滅してくれたら良いんだけどなあ。

そんなこんなで平和だったから自然とお喋りが続き、話題は帰つたらやりたいこと、^{レポート} 詳細の中身について、出向で散々やった陸上戦闘の必要性について、そして格闘戦で俺が使つた奇抜な戦い方についてソフトしていった。

「あのような動きを何処で学ばれたんですか？」

「那珂ちゃんに仕込まれました」

特に秘密にするようなことじゃないから素直に答える。

仕込まれたつて言つたもののその名目はなんと戦闘訓練の一環では無くなんとバツクダンサーの練習。

何も無いような日に突然駆逐艦を集めたと思つたらまさかのまさかだったね。

しかも何人が乗つたから止められなくなつて結局プチャライブにまで発展した。行動

力の化身かよ。

そんな那珂ちゃんの熱意は金剛さんの恋心に匹敵するレベルの熱量で、バックダンサーとして見出されてしまった俺を含む数人は夜になると呼び出されて特別練習^{レッスン}を受けた。

要求されるレベルは一般にテレビで見られるようなアイドルとかのダンスの振り付けだったんだけど、それをクリアしてる間にいつの間にか振り付けが難しくなっていて、終いにはバク宙を含むアクロバティックな練習をさせられた。目標が高いのは良いんだけど高すぎるのは問題だと思う。

どこで役に立つんだと思いつつながら練習してたけど、思いがけないところで役に立つな。

「妹がご迷惑を……」

「い、いえいえ……神通さんも大変ですね」

「分かってくれますか？ ふふ……ふふふ……」

暗い目をしながらドス黒いオーラを放つ神通さんの笑顔が怖い。俺じゃなくても後ろに般若が見えるのは間違いない。

提督にねだりにねだって防音室の用意までしてもらった妹と夜になる度に大量の苦情を集める姉。

これは神通さんの胃がストレスがマツハになること間違いなし。流石の神通さんと言えどこの二人に挟まれて生活するのは中々に難しいものがあるらしい。他所の神通さんと情報共有会でも開くことを提案しておこう。

取り敢えず川内さんと那珂ちゃんは神通さんに泣いて感謝するべきだと思う。

楽しいお喋りはその後も続いたけど、全く何もないなんて優しい現実は無かった。

日付けが変わってからしばらくした頃、神通さんが急に話を止めて手を上げて静かにするようにジエスチャーをした。

「スチュワートさん、気が付きましたか？」

「? ……アレですか?」

さつきからリーダーに一つだけ反応がある方向を指差す。

「そうです」

合つてた。頓珍漢なことと言って失望されることにはならなさそうで取り敢えず一安心だ。

でも多分はぐれ駆逐級じゃないかなあ?

「神通さんも居ますし大した脅威になるとは考え辛いんですが……アレ一隻だけですよ

ね？」

もう一度確認してもやっぱり反応は一つだけ。

はぐれ駆逐級一匹程度だったらどうとでもできるから無視して良いと思うんだけど。

「本当にただ逸れただけの深海棲艦だったら良かったんですけど……」

え、違うの？

確認しても反応は一つだけ……あつそういうこと？

さつきから全然距離変わってないじゃん。

件の反応は一定の距離を保ちつつ何かしてくる訳でも無い。威嚇射撃で数発撃つても反応が無いのが不気味だ。これがイ級とかなら頭悪いから突っ込んでくるんだけどなあ。

「偵察つてことですか？」

「その可能性もあります」

「ちよつと見てきましようか？」

「いいえ、待つて下さい」

神通さんが探照灯でモールス信号を始めた。『貴艦 一時停止されたし』かな？ 打ち込みが速すぎてよく分からない。

「通信にも反応なし……お願ひします」

「お願いされました」

そう言つて一気にスピードを上げた。

かなり速いぞコイツ！

感想はそれだけ。

ある程度近づいたら逃げるように距離を開けられた。

『深追いは危険です！ 船まで戻つてきてください！』

「……了解です」

結局神通さんから止められるまで全力で追いかけても追いつけなかった。

イ級の全速力もかなり速いことは知ってるけど、逃げる Ⅱ 捕まりたくない Ⅱ
疾しいことがある の図式で遠慮は要らないだろうと思つて魚雷で攻撃した。

真後ろに付けていたからほぼ間違いなく5発全弾命中させた自信があるにも関わらず、相手は止まってくれないどころか減速すらしなかった。駆逐級なら大体はなんとかなりそうなんだけど……もしかして駆逐級じゃ無かつたのか？

「まああとは神通さんと相談かな」

船から結構離れちやつたし。

今居る場所も神通さんの索敵範囲ギリギリのラインだろうし。

「帰ろう……次はその顔拜んでやるからな？」

暗闇に向かって話しかける。やっぱり返答は無かった。

その後、神通さんが休んでいた四人と乗組員に説明をしに船内に戻っていった。

代わりに引つ張り出された陽炎に説明していたら船が進路を緩やかに変えた。大陸をなぞるようなルートに変更したらしい。最短距離を進むんじゃなくて安全を取ったと神通さんから説明され、半日の遅れで済むと良いねって言い合った。

「あの子の反応はどうでしたか？」

「反応は明るくなってきた頃にレーダーから消えてしまいました」

陽炎も同じように判断してるから間違いない。

偵察かもしれないけど今のところ実害は無いし、こつちから出来る手段も無いからと「もしかするとガチの幽霊の類かもしれない」と陽炎と密かに盛り上がったのは秘密だ。

長門さんには一応提督に謎の反応の報告をしてもらった。

加賀さんも日中に艦載機を使ってかなり広範囲に渡って偵察してくれたらしいけど、怪しい影は見つからなかったらしい。

なにより嫌らしいのは謎の影は夜にだけ現れることだ。

一度神通さんと初風の2人で追跡しようとした時もあったという間に逃げられた上に反応も消えてしまったから追いつけないことが分かった。

けど夜には艦載機がまともに機能しないから加賀さんはダメ、長距離から砲撃しようにも俺の砲じゃ貧弱過ぎてダメ、ワンチャンに賭けて長門さんに砲撃してもらったけど長門さんが出てきたら逃げられてしまった。

一度気が付いてしまった以上、無視し続けるのは部屋の天井の明かりに羽虫が群がっているのを見たような感じのなんとも言えない不快感がある。

でもどうしようもないから何もしてこないなら取り敢えず不干渉にしようという形に落ち着いた。

そして更に三日後……

「来ます」

神通さんにそう言われて、警戒を強めて砲を闇に向ける。

遙か前方から凄いスピードで何か突っ込んでくるのが分かる。とうとう来たか。

「警備府に近付いて私たちの気が緩まるのを待ってたの？」

「最後まで大人しくして欲しかったわ」

だよねえ……うつすらと日本の施設の光とか見え始めたのにさ、今まで見てただけなんだつたら最後まで手を出さずにいて欲しかったね。

お………

「何か聞こえました?」

「わざわざ鳴くなんてバカみたい。隠密って知らないのかしらね」

「……」

言うねえ。

でも神通さんも砲を構えてやる気十分、俺だつて最後の最後までコケにされたままでは終われない。クソ正直に真正面から突っ込んでくるんだ、盛大に歓迎してやろう。

「か……え……りいっ! つて危ない!」

現れたのは川内さんだった。

レーダーの謎の反応は相変わらず遠くにポツンと存在していた。

ただいまシヨック

俺たちの放った大量の魚雷をスルリと躲した川内さんが、お帰りという挨拶と共に神通さんに突っ込んできた。

「……」

「えっ？　ちよぶ」

しかし残念ながら一月ぶりの再開を祝う感動ののハグは避けられ、川内さんは海面にヘッドスライディングを決めることになった。これで少しも沈まないで浮いてられる辺り艀装つてスゲーよな。

「受け止めてあげても良かったんじゃないの？」

「常識のある速度でしたら勿論」

「……それもそうね」

「じゃあもう一回だね！　おかえり！　私の事を思つて夜に帰ってくるなんてお姉ちゃん嬉しいよ」

「「……」」

起き上がった川内さんが神通さんに抱き着いた。困惑しながらも何処か嬉しそう

だった神通さんも、川内さんの言葉を聞いた瞬間に視線に冷たいものが混ざった。

川内さんの為に夜に帰って来た訳じゃないんだけど……さては日中に寝てたせいで連絡事項を全く聞いてないな？

『出向からの戻り？ いや～お疲れさん。いきなりだけどさあ……そつちに川内さん行つた？』

通信だ。この声は嵐か？ 随分懐かしく感じるな。

ここは俺が出しゃばルート場面じゃ無いね。ほら陽炎、愛しの妹からの通信だぞ良かったな。

そんな目で見ると「また大変になりそう……」とか言つて面倒くさそうな態度で二言三言通信した。でも態度とは裏腹に口の端が持ち上がったのを俺は見逃さなかったね。

それからしばらくすると前方から5つの反応、もとい今日の夜戦メンバーがやつてきた。

みんな口々に再会を喜びあっている。何とも微笑ましい光景だ。

川内さん以外がみんな陽炎型という事実には姉妹愛を感じる。秋雲が出てくるなんて珍しいね。

「怪しい反応があるって話だけど、どれのことかな？」

「……消えますね」

舞風に言われて例の反応を探したら忽然と姿を消していた。夜戦メンバーはここに全員居るから誰かが追いかけて逃げられたってことは無いだろう。

でも居なくなった理由が艦娘の数が多くなったからなのか、大湊に近づいたからかそれとも……まあいいや。俺が考えても仕方ないし提督にぶん投げとけばいいでしょ。

「アメリカはどうだったの？ 話聞かせてよ」

「せっかくだし、アメリカで教わった本場の料理を食べさせてあげようか？ 教えて貰ったの」

「良いの!？」

「[[……]]」

初風の提案に無邪気に喜ぶるって良いよな……ほら見ろ、神通さんでさえ生暖かい目をしてらっしやる。

実物を見てあり得ないサイズに興奮して、一度口に運べばとんでもない美味さに感動して二度、三度と口に運んで舌鼓を打って、その頃になつて分かる「重さ」に言葉が詰まり、胸焼けすると思ひ始めても半分くらい残ってる目の前の料理に絶望する。

出汗なんてモノは無いから味付けの種類が基本的に塩かソースかチーズ、砂糖かク

リームしかないのがヤバイ。そしてそれらを美味しくなるまで足すのがもつとヤバイ。引き算的思考はねえのかよ。

やはり加賀さんにおかわりを躊躇させたアメリカの実力は伊達ではない。

よく初風に料理を教えていたイントレピッドさんが作るものと同じのが出てきた場合は、近いうちに陽炎型の座るテーブルがカロリーテロの舞台と化し萩風が卒倒することとは間違いない。

まあ、間宮さんがストップをかけて日本サイズに縮小されたものが出てくることを祈ろう。

その後は神通さんの計らいで陽炎型の全員が船の中に入っていく、静かになった海上で川内さんと神通さんが話を咲かせ始めた。

……俺は氣を利かせて船の反対側で見張りでもしてようかな。

俺一人だけ話し相手が居なくて寂しいなんてことはない。

何故なら陽炎型が船内に消えたら例の反応が現れたから。

警戒だけとは言えやる必要があるって素晴らしいねえ！

憂さ晴らし……もといお喋りしたいからこつち来てくれないかなあ……こつち来いやオラ。

「お帰りなさい！」

早朝どころかまだ薄暗いと言うのにはほぼ全員が起きて出迎えてくれた。まだ目が寝てる人も居るから嬉しいって思うより申し訳ない気持ちになる。

久しぶりに見た面々の顔がやけに懐かしく感じたと同時に、新しく建造された人も数人居ることに気が付いた。時間の流れを感じる。

「旗艦長門、以下6名只今帰還した」

長門さんの言葉に続いて敬礼。流石にもう手慣れたわ。

「一月の出向お疲れ様。全員が帰ってきたことを嬉しく思う。……スチュワート、前へ」
「っ！ はい」

このままあととは解散だろうと思ってたら突然呼ばれた。言われた通りに前に出る。俺アメリカで何か怒られるようなことしたっけ？

……正直心当たりしかないけど。

挨拶の為に前に出ていた長門さんの脇まで移動してももつと前へと視線と雰囲気促され、とうとう遂に提督の前まで移動してきた。

MVPの知らせならまだ名誉ある呼び出しだから良いんだけど、今回のコレは全く嫌な予感があるから良い知らせではないような気がする。

いやマジで、お叱りなら後で個人的に呼び出して貰って構いませんのでこんな注目を受ける仕打ちはどうか勘弁してください。

「……」

「スチュワート、これを……」

そう言つて提督が何かを差し出してきた。

早くこの状況から抜け出そうと、脳死で差し出されたそれを受け取ろうと手を伸ばし、ピタリと動きを止めた。

……なんで指輪が出てくるんですかねえ!?

いやアレでしょ? 知ってる知ってる。『艦これ』に出てくるケツコンカッコカリ(仮)システム
のケツコン指輪でしょ?

ガチの結婚指輪じゃ無いってことは知ってるんだけどさ「これを……」じゃねえんだよ朝っぱらから一体何考えてやがる。珍しいものだから食べて欲しいのか!?

しかもやるにしてもこんなに注目を浴びてる環境でやるか!?! お帰りなさいの次にいきなりそれを出してくるとかどんな思考回路してんだよああん!?!

「え、え〜つとお〜……」

考える考える……どうすれば穏便に終わる？ 間違いなく嫌がらせとかドツキリでは無い。この提督はそんなことはしない。つまり本気でこんな事をしてるって事だ。正気じゃないとは思うけどね。

でも無理ですって断ったら提督の後ろで「まあ仕方ないか」みたいな顔してる人たちと悔しそうな金剛さんから怒られそうだし、カメラ構えてる青葉さんからは瓦版に有る事無い事書かれることは間違いない。

無言で逃げて問題の先送りな上に余計に興味引くだけだろうし、俺は俺で何も考えずに^{指輪}ブツを受け取るうとして中途半端に腕伸ばしちやつてるんだよなあ……

「……」

「……」

マジかよ……もう^{引き下}受け取るしか^が無い^な感じなの？

「受け取ってほしい」

キリッ！ じゃねえよ。

俺だつて渡された以上しつかりと受け取らないと逆に申し訳無く感じちゃうんだけど？

受け取るよ？ 受け取っちゃおうよ!! 考え直さなくて良いんだな!! やっぱりダ

メって引つ込めるなら今しかないぞ!?

「……」

目だけを動かして誰かが『ドツキリ成功!』の看板を持ってないかを探るが、誰も持っていないように見える。

心の中で溜息を吐く。

「……………はい」

諦め半分に呆れ半分。観念するってこんな気持ちなのか……

あくあやつちまつたなあとか思いながらも、最後の最後までドツキリである可能性を捨てずにおおずおおずと受け取る。

結局差し出された指輪が引つ込められることはなく、ゆっくり手を伸ばしても触れてしまった。

すると周りから拍手とか聞こえてきた。

口笛、指笛、シャッター音、どれもが冷やかすと揶揄いにしか聞こえなくてイラっとする。

あくあ、勿体ねえなあオイ。初めてのケツコン（仮）の相手がこんなじゃあダメだろ。もつとさあ、金剛さんを筆頭に相応しい人は居るでしょうよ。

「ありがとう」

何が「ありがとう」だオイ。

いや待て、第三者から見た時の提督と俺の様子ってまるでプロポーズそのものじゃね？

え、めつちや恥ずかしいんだが？

照れてるんじやなくて羞恥で。提督がケツコン指輪を出したときからポカンと半開きになっていた口が呼吸を忘れてることに気が付いた。

「……」

これは過剰に意識し過ぎちやってるってことでオーケー？ 頭真つ白でまともに働かないんだけど……取り敢えずお礼は言っておいた方が良い感じ？

「どっ……どういたしまして！」

その一言を叩きつけるように残して逃げるように列に戻る。

「おめでとう」

「思い出させないで！」

列に戻ると陽炎が声を掛けて来た。

ただけど今は務めて冷静になろうとしてるところで余裕が無いの！

くっ……殺せえ！ 一思いに殺れえっ！

……これは一週間くらい時間を空けて向き合う方が良いかもしれない。

こんな夢であつて欲しいような最後で出向の全日程が終わつた。

7章 〔幕間①〕

・その心の内は……？

大本営へ呼ばれた理由は一体なんだろう？

自分の靴音が良く響く廊下を歩きながら考える。

年に何回か開かれる大本営主催の料理講習は最近受けたばかりだからそれが理由で呼び出されたとは思えない。

去年から食欲秋刀魚漁の秋、ハロウィン、クリスマス、年末年始、節分、バレンタインと、季節のイベントがある度に騒々しくなる北方棲姫。

港湾棲姫と共に大本営に隠している自分の……大湊の大きな秘密だ。

遂にバレたのかと思っただけど監査があつた記憶は無いし、見つかったのなら本人や艦娘達から自分に連絡が来るはずだ。

でももし本当にあの2人が原因だったら……その時は『捕獲に成功し、艦装を奪い観察していた』って言っても良いのかな？

誰が言い始めたのかこの案にはみんな乗り気で、青葉を中心に北方棲姫の観察日記の

ようなものを作つてたりしてたし。

その他には他所の鎮守府が大規模な深海棲艦の軍勢を発見したとかがあるのかなと思つたけど、自分を呼び出すより先に艦娘を現場に向かわせるように指示が来ると思う。

「となると、書類の不備が一番可能性が高そうかな……？」

自分で呟いておきながらそれは無いだろうとすぐに否定する。

提督の椅子に座ることになって半年以上。通常業務にも随分と慣れてきたから書類の不備は減っている。

そもそも、最近はそのままで大切な書類を取り扱った記憶が無い上に、書類の不備を疑うのは手伝つて貰つてる艦娘達と最終チェックを行っている大淀に対して失礼だろう。

キーンコーンカーンコーン

歩いていたら休憩時間になつてしまった。まだ時間には余裕があるけど、もう少し早く着くようにしても良かったかなと思う。

そんな風に呆けていたところで自分のすぐ横の扉が開かれ、中から二人の人影が現れた。

「きやつ、すみません」

「いえいえこちらこそ……」

ぶつかるかと思つたけど寸でのところで立ち止まることが出来た。

それにしてもこの人は何処かで見えたことがある、どころではない。

「鹿島さん!？」

「あら? 松田さ……松田提督?! お久しぶりです」

「お久しぶりです。鹿島さんに提督と呼ばれると、むず痒く感じますね」

「さん付けなんて止めてくださいよ〜! 松田提督は今はもう提督なんですから艦娘である私に遠慮なんてしないでください。それにしても、偉くなりましたね〜?」

「勘弁してください……」

普段は優しくに微笑んでるのに、今は悪戯の標的が見つかったみたいな顔を向けてくる自分の元指導者の鹿島さん。

二人で近況を話し合つてたりすると、鹿島さんが「そうです!」と言つて後ろに居た人を紹介してきた。

今年採用になった新人で竹下君と言うらしく、あろうことか自分も目標の内に入れてくれているらしい。自分なんかよりもっとベテランの提督たちを目標にしたほうが良いのではないだろうか?

「自分もまだまだ新米だから、仲良くしようね」

軽く挨拶をしたら鹿島さんからアドバイスを求められたので、妖精さんは甘い物が好きだから調理実習は真面目に受けた方が良いという事と、女性に対する免疫を着けておいた方が良いとだけ言っておいた。

少なくとも自分の最近の悩みはそれだから間違いないと思う。

いつまでも話し込んでいては佐藤元帥との約束の時間に遅れてしまうので、話を終わらせて指定の部屋へ向かわせてもらうことにした。

ノックをすると中から返事が返ってきたので、もう一度身なりを確認して入室する。

「失礼します」

「久しぶりだね。元気にしてたかい？」

部屋に入ると佐藤元帥は一人掛けのソファに身を預け、*“寛ぎ”*を体現していた。驚きのあまり身体が強張って、ただでさえ緊張していたのが更に酷くなった気がした。

「は、はい！ 自分は何事も無く——」

「そういう堅い事は会議中だけで頼むよ。会話する相手がみんなそうだと疲れちゃうからね」

「……失礼しました」

元帥とは思えない態度に硬くなるもの一瞬、敬礼をすると止めるように言われてしまった。

「そういうところなんだけど……」

佐藤元帥の眩きが耳に入ってくるけど、上司からそう「お願い」されたところで、普通の人はいきなり態度を軟化させることは出来ないと思う。

ちよつと複雑な心境のまま椅子に座らせて貰い、呼び出した理由について尋ねる。

「この度自分が呼ばれたのは、どのような要件でしょうか？」

「随分と忙しいみたいだね。まあいい、私もこの後に用事があつてね。手早く終わらせよう。……要件は二つあつてね。まずはコレを渡しておこう」

そう言つて渡されたのは小さな袋と封筒。袋の方は中身は見えないけど非常に小さくて軽い。封筒にも何も書いてないから中身が分からない。だけどこれを渡す為に分を呼んだとするなら中には余程大切な物が入っているのだろうと察せた。

「これは何でしょうか？」

「それは帰つてからのお楽しみだよ。まあ、これで君を呼んだ要件の半分が片付いた訳だ」

どうやら中身は教えてくれないらしい。帰るまでお預けされては気になってしまう。

「残りの一つはオマケみたいなものでね。……今は大湊警備府の一艦隊がアメリカへ出向しているね?」

「はい」

「その中にスチュワートが入っている筈だ」

「!・ はい」

「スチュワート」と、彼女の名前が出てきたことに反応してしまう。

佐藤元帥にこつちへ来いと手招きをされ、近くに寄ると辺りを確認して耳元に口を近づけた。

「スチュワートがアメリカへ異動するかもしれない」

「……え」

言葉が上手く呑み込めない。

スチュワートがアメリカへ?

「どうしてそんなことに!?!」

「まあ落ち着いてくれ。まだ決定ではないんだ。あと声大きい」

「失礼しました……でもどうしてそんな」

先程渡された袋と封筒を放り出すように机の上に乗せ、佐藤元帥の言葉を逃さないように今まで以上に身を入れて話を聞く体勢を整える。

「ほら、アメリカつて艦娘が少ないだろう？ 幾つか基地はあつて、日本から出向してるとは言つても一時的な物だからね。アメリカから『一人でも艦娘を常駐させられないか』つてお願いは前からあつたんだよ。こつち日本の方でも話し合はしてただけどね、ピツタリな人員が見つかるじやないか」

「それが彼女ですか」

「そう。やつぱり彼女の現状に納得してない連中が騒ぐんだよ。『あんなのを手元に置くんなんて考えられない！』つてね。ここぞとばかりにアメリカへ押し付けようとしてたよ」

佐藤元帥の言葉を聞いていて頭が熱くなってくる。

騒いでる人達は彼女の何を知っているんだろうか？ 今まで彼女が半年以上かけて築いた艦娘同士の信頼関係や大湊で挙げてきた戦果は意味の無いものだとも言つてもりなんだろうか。

一年近く経つた今でも昔のことを掘り返すのか、過去の話し合いで決まったことにまだ文句を言うつもりなんだろうか。

思考がだんだんヒートアップしてきたところで佐藤元帥が口を開いた。一瞬で落ちて着いて次の言葉に耳を傾ける。

「伝えたいことはそれだけだよ。もう一度言っておくけどまだ予定だからね？」

話は終わりらしい。

「秘密にしてくれよ」と笑う佐藤元帥。態々伝えてくれたことに感謝が尽きない。

「教えて頂きありがとうございます」

「今の話での一連の反応を見て確信したよ。随分入れ込んでるみたいじゃないか」

「それは……」

凶星だ。恥ずかしいやら何やらで顔が熱くなつたような気がする。

簡単に看破されてしまう辺り、そんなにわかりやすかつたのか……

「おや、そろそろ会議の時間だ。急に呼び出して悪かつたね」

「こちらこそ、ありがとうございます」

佐藤元帥が部屋から出ていこうとした時に動きが止まった。

「そうそう、欲しい物があるなら自分から掴み取りに行かないと。流れに身を任せるの

は楽で良いけど、勇気を持って行動した方が後悔は少ないとだけ言っておくよ」

今度こそ止まる事なく部屋から出ていった。

その後、部屋に残された自分は佐藤元帥の言葉を反芻して、溜息と唸り声を一時間近

く出し続けた。

「お帰りなさい司令……司令?」

今日の秘書艦当番の浜波が出迎えてくれたが、生憎今日はもう書類仕事をやる気にはなれそうになかった。幸い今日の朝の時点では書類はあまりなかったし、最悪明日に持ち越しても全然問題は無い。

「済まない、少し一人にさせてくれないか?」

「はい……分かりました……」

そのまま執務室ではなく、自室に向かう。

「……」

部屋に入ってから、まるで吸い込まれるようにベッドに倒れ込む。

佐藤元帥から話をされてから調子が悪い。

いや、調子が悪いのではなく……頭の片隅から離れない彼女のことを気になって仕方ない。

「はあ」

溜息が出てしまう。

色々な感情が混ざり合って上手く表現出来そうにない。

これはきつと……

自分はきつと、彼女のことを好きなんだろう。

「……そうだ」

ふと、佐藤元帥の言葉を思い出して起き上がる。

何か現状を打開出来るものが入ってないかなあと、僅かな希望を持って佐藤元帥に貰った袋を開ける。

中には小さな箱が入っていた。

何処かで見えたことのあるような箱にまさかとは思って封筒も開ける。

結婚届（仮）

佐藤元帥には全てお見通しだったらしい。

7章 　　く幕間②く

・その心の内は……？ ②

佐藤元帥からとんでもないプレゼントを貰ってからというものの、気もそぞろな状態に書類仕事にすら集中出来ない日々が続いてしまっていた。

すっかりと叱ってくれる存在は本当に有り難い。でも本当に良い事ばかりかと訊かれると何とも言えないと答えると思う。

別に優しくしてくれたりそっとしてくれたりする大多数にも不満がある訳では無いのだけれども……駄目なものにはしっかりと指摘して欲しいという想いはある。

前者は『ダメになっても何とかしくなる』という甘えを。

後者は『ダメになっても許してくれる』という甘えを。

……今は本当に頼もしく思う。

「でももう少し手加減しても良かったんじゃない……あ、鍵……」
廊下に放り出された自分はどうすれば良いのだろうか。

『まったく見てらんないわ！ 残りの書類は片付けておくから明日までにそのバカみたいな顔を何とかしてよね！』

『何か嬉しい事でもあったのかは知らないけど、シャキツとしてよこのクソ提督！』
『私たちのことを全滅させたいって言うならずっとそのままでも良いんじゃない？』

……嫌ならさっさと頭でも冷やしてきてよね！ ふんっ！』

あまりにも自分が情けなかったのか「見てられない」という言葉と共に椅子を立たされ、背中を叩かれ、お尻を蹴られてしまい、拳句には執務室を追い出されてしまったのが現状だ。鍵まで掛けられてしまったからしばらく入ることは出来ないだろう。

蹴り上げられたお尻と叩かれた背中が痛い。

「提督さん、もし、お時間があるようでしたら一緒にお茶でもどうですか？ 今日長良型が全員揃ってるんですよ！」

宿舎内を歩いていると、今日は全員非番だという長良型のお茶に誘われた。

ふと想像してみるとお茶会の光景がありありと浮かんでくる。とても楽しい時間になると思う。

「気持ち嬉しいけど……また今度で良いかな？」

でも今は仕事に集中出来ていないという理由で追い出されて3人に仕事をさせている。自分ばかりゆつくりしている場合では無いと思つて断腸の思いで断る。

「分かりました。また機会があつたら声をお掛けしますね」

「ああ」

名取とその後少し会話をしてから現状の相談を出来そうな艦娘について考える。

だけど候補に挙がる艦娘が尽く遠征や出向、演習などで時間が取れるかが怪しい。大淀は忙しそうにしていたし、今日が非番の艦娘も、わざわざ休日を邪魔されたくはないだろう。

結局最後に残つた候補が鳳翔だった。

思い立ったが吉日とばかりに最近妖精さんが建てた居酒屋に向かう。

『私は戦力としては……』と戦うことに遠慮がちな彼女が、こういった方面から艦隊を支えていきたいと申し出て、この居酒屋の営業の申請を承認したことは覚えてる。

まだ自分は利用したことが無いけど、お酒を飲むような人たちが夜な夜な通つて楽しんでたり寛いだりしていることを知っている。

「おや？ 買い出し中につき留守にしています……そんな」

しかしながら夜に賑やかになるその居酒屋は、日中はとても静からしい。普段から顔

を見せないから分からなかった。

今度時間があつたら警備府全体を見て回るのも良いかも知れないと思い、居ないものは仕方ないと工廠に向かうことにした。

「あれ？ 提督、お疲れ様です！ ここに来るのは珍しいですね」
「ちよつとね……」

工廠ではいつも通り明石が作業していた。

最近建造の頻度が下がっていたし、確かに工廠に来る頻度も減ったからここに来るのは珍しいのかもしれない。

「今日は書類仕事は無いのですか？ 知つてるとは思いますが、スチュワートさんは納期に厳しいですよ？」

「今回はちよつとした相談で来てね」

「なるほど……私で良ければ聞きますよ！」

「ありがとう。まずは——」

明石が自分の相談に乗ってくれたので、最近仕事に集中出来ないという旨を伝えた。

その話を聞いた明石が心当たりについて尋ねたので正直に答えた。

すると目を輝かせて色々と訊いてきた。

自分はそれらにも素直に答えた。

スチユート

彼女、女のどんなどころが好きなのか、何がきっかけだったのか、どうして突然悩み始めたのか等を嘘偽りなく答えた。

「はあく、聞いてるだけで疲れました。提督は乙女心を解ってません！　そう言うことは本人に直接ぶつけてください！　私は仕事を思い出しましたので！」

そして最終的には呆れたような、怒ったような明石に工廠から追い出されてしまった。

本人に直接ぶつける……？　それはつまり告白をしろということか、間違いないのだろうか。

悶々とした気持ちを抑えつつ鍵の開いていた執務室の扉を開ける。

流石に書類仕事を全部任せるのは論外だ。彼女たちの負担にもなってしまうし……。

「「頭を冷やすのが遅い！」」

むしろ悪化しましたとは口が裂けても言えなかつた。

アメリカへ出向していた面々が戻って来た。

朝早く、まだ日の出よりも早い時間にも拘らず警備府内はそのニュースで持ち切りだった。

多少遅くなるかもという連絡は受けていたものの、予定通りの時間に戻ってきてくれたのは何事も無くて良かったと思う反面、いざスチュワートに告白すると決心したのがつい昨日である手前、もう少し心の準備をさせて欲しいとも思う。

「旗艦長門、以下6名只今帰還した」

その言葉をしっかりと聞き声を掛ける。そうしたら一拍の間が出来た。

警備府の全艦娘が見ている中だけど今のタイミングがベストだと感じた。息が詰まりそうだけど……やるなら今しかない。

「スチュワート、前へ」

そう言つて……言つた。言つてしまった。

もう後戻りは出来ないぞ。

心臓が早鐘を打っているのが分かる。

「スチュワート、これを……」

指輪を差し出す。

多分受け取つてはくれないんだろうけどそれはそれで彼女らしいと思う。でも、自分としてはどうか受け取つて欲しい。

「え、え〜つとお〜……」

……手を指輪に伸ばしかけた彼女がピタリと動きを止め、顔を赤くして目を泳がせている。

しかし、差し出された指輪は受け取ってくれなかった。

だから、いつものように拒否の言葉が出てこないことに最後の希望を託して、もう一押ししてみることにした。

「受け取ってほしい」

やはりダメかと思いい、指輪を引っ込めようと思った時、いつもの彼女の遠慮とは違ってたおずおずと、といった様子で指輪に手を伸ばして来た。

「……………はい」

間が空き過ぎた返事も弱弱しく、自分の前だと表情の乏しい彼女が顔を真っ赤にしている。

あまりにも現実離れしているから一瞬夢を視ているのかと思っただけだ。

そして彼女が指輪を受け取った瞬間、拍手や口笛などが聞こえてきた。

そこから先は自分でもよく憶えていない。
でも、幸せな気分だったことは覚えている。

▼
出向から戻ってきて一週間が経った。

俺は相変わらず部屋に引き籠っていた。

アメリカの面々から渡された食べ物はまだ残ってるからもう少し籠城できるだろう。

暫くは外に出たくないって一週間前も言ってたし、一週間後もそう言うんだろうなあ
……

チラリと机の上に置かれた小さい箱に目をやる。

「……」

相変わらず影も形もあるソレ指輪は、俺を盛大に苦しめていた。

「あああああつ！——つ！」

枕に顔を埋めて叫ぶ。滅茶苦茶ノドが痛いけどそれよりも頭と心が痛い。今でも思い出して顔が熱くなる。

まさかコレが……恋？

「あああつ！」

クツソ恥ずかしいんだよこのヤロー！

なんだよあの時の俺の反応。第三者にはまるで恋する乙女に見えた可能性がワンチャンあるんじゃないか？

俺だったら「墜ちたな（確信）」とか言うだろう。

「くそう……くそう……ふざけやがって」

そう悪態を吐きながら再度テーブルの上に乗ってる箱を見る。

視線でアレを消してしまえたらどれだけ良いか。

でも貰っちゃった限りは頑張らないといけないし、残念なことに返品とかも受け付けてなさそうだし、あれだけの目があったんだから知らぬ存ぜぬは無理がある。

しかも多分貴重なものだから海に捨てるのは論外。誰かにあげようとしてもダメだろうし、明石さんに内緒で鋳潰そうとしても妖精さんから止められるんだろなあ……

「呪いの装備かな？」

頑張らなきゃって思わせることが多分プラス効果。

残りは全部マイナス効果だから呪いの装備だな。

着けたら外せないのは嫌だから着けるのは止めとこ。

「……よしー」

これでも一週間引き籠もってねえ。外聞は悪すぎるけど時間はこれでもかと言うほどあつたんだ。

結論は出た。綺麗サツパリ忘れよう！

「指輪なんて最初から無かった。良いね？」

そう自分に言い聞かせて *what* 今 *time* な *is* ん *it* じい? *now?*

「さてー！ 今の時間は……午前3時だと……？」

体内時計ガバガバかよ！ まあ、シャワー浴びてから朝食の支度でもしようかね。

「この時期だとシジミかな？ あく日本食たべた〜い」

この指輪はきつと以前この部屋を使ってた誰かの忘れ物だ。

さつさと引き出しの奥にしまつちやおうね。



7章 〱幕間③〱

・空白の後には

早朝、朝食の用意をしようとしたら何故か厨房に提督が居た。

不意打ちみたいな形で遭遇してしまったことに間の悪さを感じる。正直逃げたいけど残念なことに間宮さん、伊良湖さんと目が合ってしまった。

その瞬間に悟った。もう逃げられないと……

「おはようございます」

「!? おはよう」

何はともあれ、何事も無かったかのように挨拶をする。

しかし提督はちよつと驚いたような反応をするだけで、普通に挨拶を返してくれた。

顔を見せた瞬間には怒られるか文句の10や20くらい言われるかと予想してビビってたけど、何も言われないのはなんで？ もしかして意識してるのは俺だけ？

いや、穏やかな眼を崩さない提督が気持ち悪い……を通り越して不気味さを感じさせ

るレベルだ。むしろ一週間もサボってたのにお叱りの言葉が飛んでこないのはあまりにも不自然だと思う。

「今日の秘書艦はどなたですか？ あ、こっち側のスペース借りても？」

でも無言だと俺が雰囲気能耐えられないから話を振る。

幸いなことに提督がわざわざ厨房に居るなんて珍しいといった話題がある。

「ああ。今日の秘書艦は大井だよ」

「なるほど。あ、ありがとうございます」

提督が答えながらもスペースを開けてくれた。

それにしても大井さんねえ……：そりや厨こんなところ房に居せんわ。

まだ北上さんの愛の巣に居るだろうな。

二人の部屋は一回入ったことあるけどヤベエもん。キッチンからシャワールームまで生活に必要なもの全部揃ってんだもん。だから今頃は提督より北上さんの為に料理を作ってるな間違いない。

海防艦と一部の人は長門さんから『観見てはダメだ！』制限されてるけど、いちやついてる姿は目の保養になるからもつとやって欲しい。

でも仕事を放つぽり出すのは良くないね。仕事しながらだったら幾らでもやって構わないけどね！

そんなことを考えながら朝食を用意していく。

あつ、グリル使ってるの？

じゃああととは味噌汁は間宮さんから貰って、おかずは適当に漬物でも用意して終わりで良いか。

「スチュワートも執務室に来るかい？」

「…。……はい」

その言い方を止めろオ！

間宮さんも「あら」じゃないよ！ でもそうだよねえ！ 提督からそう言われたらお誘いと同義だもんね！ 伊良湖さん代わりに行ってくれない？ 朝食の支度あるから結果を教えて？ 何言ってるの……いや待って結果って何？

このままではマズイ……何か打てる手は……

「大湊の現状を把握するには書類を見ないといけませんからね」

あくダメだ。全然言葉が浮かんでこない。

自分で言ってるんでなんだけど、照れ隠しの為に仕事を理由にしてるようにしか思われな
いんじゃないか？ つまりツンデレと同じじゃないか。男のツンデレとか誰得だよ？
「そうだね」

提督の目が優しくなった。

そうじゃない。死にたい。

結局、間宮さんと伊良湖さんから優しい目で見送られて執務室。

提督からのアレやコレといった質問に答えつつ、朝食を食べる。

「やっぱり美味しいですよねえ」

「そうだね」

久しぶりに食べた味噌汁に感動しながら箸を進める。あっさりした味の中にもしっかり風味があつて……美味しい！

それにしても、何気に執務室で朝食を食べたの初めてかもしれない。おかげでいつもみたいに掻つ込むように食べることが出来ない。

食堂で食べる時以上にお上品に食べないといけないとかやつぱり気を遣つてダメだ。本来だったらとつくに食べ終わつてるんだぞなあ……俺が飯を食う様を見て楽しいか？

こうなったのも全部提督が厨房に居るタイミングが悪いよ。

そんな時、執務室の扉がノックされた。

時間はラジオ体操のちよつと前。大湊の秘書艦は6時からなんだけど、ちよつとルー

ズじゃない？

「提督、ただいま……ってスチュワートが居るじゃない！ だったら私、部屋に戻っても良いわよね？ 良いわよね？ 良いわよねえ！」

おお……大井さんの目がマジだ。

「えっウン」

提督もこの有様。

大井さんの北上さんに対する好感度に上限は無いのか？ 頼むから「北上さんの為なら！」とか言って世界征服とか始めないでくれよ？

提督の生返事っぽい相槌を聞いた大井さんが手品のように消えた。愛のちからってスゲー。

北上さんはいつもあの大井さんから溢れて迸る愛を受け止めているのか。ちよつと重いような気がするけど……やっぱり北上さんは凄えや。痺れるねえ。

食べ終わったら溜まってた報告書や申請書を手に取る。

様々な艷装の開発報告に、各艦娘の娯楽含む備品の申請。へえ……鳳翔さんが居酒屋を正式に開いたのか。後で覗いてみよう。

あとは陳情ばっかりだし、作戦も無かったみたいだ。

「花見もしてる……随分と平和だったんですね」

「それはお互い様じゃないかな」

「ずっとこんな感じだったら良いんですけどね」

「そうなるの良いね」

「さあ、午前7時マルナナマルマルです。仕事をしましょう」

執務室の窓を開ける。

涼しい風が入り込んできた。

・イタズラに手間暇をかけて

カチ　カチ　カチ

壁掛け時計の音

カチカチ……

ペンが紙に走る音

カサカサ……

紙の擦れる音。

「どうぞ」

「ああ、ありがとう」

提督の机に判子を捺した書類束を乗せる。

いつもの書類整理の光景だ。

それにしても、忙しかったのは知ってるけどまさかこんなに書類が溜まっていたとは……。

机の上にまだ沢山残っている書類を見てげんなりする。

まあ、このペースで行けば夕食前には処理が終わるだろう。

しかしそうは問屋が卸してくれない。早速執務室の扉がノックされてお客さんが入ってきた。……第六駆逐隊 暁型の4人か。

そんな四人はいつもの制服を着ていない。

暁が魔女、響は吸血鬼、雷は幽霊で電は狼人間。

普段なら浮くような服装もこの数日間には許される。

なぜなら

「トリックオアトリート！」

世はまさに、大ハロウィン時代！

ああ……こんな見ちやつたらロリコンになっちまうよ。

でも今は仕事中。トリートおもてなししないとトリックイタズラされちゃうから、定番のお菓子で訪問者を撃退するに限る。

それらのお菓子を提督が戦艦や空母、重巡たちと用意してたのは公然の秘密だ。

「提督、お菓子をくれないと酷い目に遭うよ」

「わあ怖い」

なんだその感想は！ 大根役者にも程があるぞ！

実際全然怖くないにしてもその反応は良くない。雰囲気と言うものがあつてだな？

「ちよつと提督！」

「あ、ああそうだった……ハッピーハロウィン」

この4人にはカボチャのマフィンが渡された。

恥ずかしがった暁と遠慮した電以外の二人が提督に抱き着くといった可愛いイタズラをした後、他の個包されたお菓子を渡されて帰っていった。

「残りの書類は一人で大丈夫だからスチュワートも楽しんでください」

「良いんですか？」

残りの量、絶対に一人じゃ終わらないと思うんだけど……

「優先度の高いものは終わってるからね」

……そう言われたなら遠慮はするまい。

イタズラとお菓子配りに色々賭けてもらおう！ 現代人らしく盛大にハロウインを楽しませてもらおうじゃないか。

そう決めて提督の机に置いてあるお菓子の入った籠からマカロンを2つ取って口に運ぶ。片方はイチゴ風味。もう片方の緑色は……俺がビスマン作ったヤツだ。

まあいいや。苦いだけでマズくはないし。

マカロンを飲み込む。

「分かりました。トリックです」

用意していた飴の1つを提督に渡す。

舐めた提督が噎せた。

「ゲホッ……これは何の飴だい？」

「トマトですが、南部鉄器から採取した錆によって血液フレーバーにしました。健康に害はありませんのでご安心を。それでは提督も良きハロウィーンを。……失礼します」

そう言いながら執務室を出る。

廊下は紫とオレンジのハロウィンカラーに彩られ、電気は若干光量を落とすし、チラホラとジャックランタンが置かれている。

「涼月さんが頑張ってたもんなあ」

今年を買ってきたカボチャで作ったお菓子にジャックランタンだったけど、来年こそはこれだけに留まらず普段の料理でもカボチャを使えるように、なんと自分で栽培するつもりなんだとか。

しかも既に宿舎の裏に菜園を用意してもらおうように申請を出しているらしい。そこまでカボチャにかける熱い想いとは一体……？

『既にカボチャの幽霊に憑りつかれてるかもよ？』

と言うのは照月さんの言葉。好物つて言うのは行き過ぎてるような気もするし……実際あり得なく無いのが笑えない。

それはそうと、予定の場所に早く行かないと。

「今日はハロウィンです」

『それは何だ？』

「この服を着て、この籠を持って「トリックオアトリート」と言うとお菓子を貰えるイベ

ントです」

場所は秘密の孤島。

当然と言うか人間の文化を知らなかった北方棲姫と港湾棲姫に、秋刀魚の美味さに引き続き俺が日本の文化ハロウインについて色々教えていた。

精神年齢が見た目相応に幼い北方棲姫がお菓子が貰えるイベントに食いつかない筈が無く。

『行つてくる!』

退屈無邪気な悪魔を持って余した北方棲姫を大湊に誘導した。

秋刀魚の時に厳しく港湾棲姫にしつけ躰られたみたいだし、艀装を持ち出した大騒ぎには発展しないだろう。

「さあて、楽しくなってきましたよ」

『お前は本当に……ハア。分かっているな?』

「バツチリ写真に撮つて後で渡しますよ」

『それなら良いんだ』

保護者の同意もゲット。後は俺も思うままに騒げば良いか。

コスプレは……ジェイソンで良いか。

問題はチエーンソーが有るかどうかな……



7章 〔幕間④〕

・クリスマススの地雷

クリスマススの食卓に並ぶ食べ物とは？

買い物に出かけたら目に入る広告は何処を向いてもケーキばかり。おやつとデザートは主食にならない。別腹として主食以上にお腹に入るだろうけれども。

しかしそうなると次に目に入るクリスマススに消費が増える食べ物。

それが間宮さんを困らせるとは思いもしなかった。

「冗談じゃないわ……」

「さつきからずっと……みつともない真似は止して頂戴。場の雰囲気に対応しないわ」

ここで言外に「そんな良識も無いのかしら？」って煽るような加賀さん！

表情は殆どいつも通りだけど俺を含め数人は知ってるぞ。目つきが微妙に鋭くなってるから加賀さんもなかなかに機嫌が悪いということに。

「ま、まあまあ瑞鶴……加賀さんもそのくらいで……」

「貴女の妹でしよう？ 何とも思わないの？」

「翔鶴姉は七面鳥レに何とも思わないの？」

「……」

おおつと!? あの翔鶴さんが黙ってしまいフオロー出来ない！ 翔鶴さん自身の表情もなかなか渋いから誰も瑞鶴さんを止めることが出来なくい！

頼れる赤城さんは建造されてない。蒼龍さんはお酒を飲んで出来上がってるし、大鳳さんはこのやり取りを観察している。

戦艦も重巡も「いつもの2人か」みたいな雰囲気だし、長門さんはプレゼントの準備に忙しい。提督も一緒に各部屋にプレゼントを配りに行っている。雲龍さんと葛城さんはチビが部屋に戻らないように見張ってたり忙しそうだ。

これはまさか止める人が居ないパターンか？

……盛り上がってまいりましたア！

事の発端は、間宮さんが有名チェーン店のチキンに負けじとローストターキーを用意したことだった。

多くの人が珍しさと圧倒的なボリュームから感動する中、不満を抱く人が出てくるなんて調理中は俺も間宮さんも伊良湖さんも気付けなかった。予想さえしていなかったと思う。

最初は和やかな雰囲気が進んでいたクリスマスパーティーだったが、お酒が回つてくと愚痴や不満を零してしまう人は出てしまうもので……

「七面鳥を用意したのは間違いだったかしら？」

それが偶々、瑞鶴の零した不満が配膳をしていた間宮さんの耳に入ってしまったのが今回の事件だ。

まさか自分の用意した食べ物の原因で問題が発生したとなると給糧艦の沽券に関わるのだろうか。

気合を入れて作ったローストターキーの内、空母が集まっていた席のソレに殆ど手が付いていないこともあってか、落ち込みようが見たこと無いレベルだ。

「いえいえいえ！ 滅多に食べられないものですし、絶対に美味しいことは分かるので！」

「そ、そうですよ！ あの七面鳥は後で食べてしましましょう！ そして瑞鶴さんにはもっと別の物を提供すれば良いんです！」

「でも食材が……」

「あつ」

既に厨房にはまともな食材が残されていない。野菜とかは余ってるけどサラダだけなんて響燈もいいところだろう。肉は既にローストビーフとかに変身しているし、魚は飲兵衛の為に刺身になっている。

瑞鶴さんも瑞鶴さんだ。「焼いてるじゃなくて揚げてるから……」みたいなことは伝えただけ、焼き鳥に関することで余程酷い記憶でも持つているのか話を聞いてくれなかった。

しかし、打つ手なしかと思われていた現状にも救世主は現れる。

「よつ達だって、苦手な食べ物は残したりしないよ?……空母のみんなはくもうちよつと大人なたいお」をしたらどお?」

目と目を合わせて火花を散らす二人と成り行きを見守る翔鶴さんの間にニユつと生えて来た第四号海防艦の上目遣いと純粋な心から放たれた言葉が空母たちの心にクリティカルヒットした。全員が沈黙する。

やはり子供の純粋さは何時だって強いな!

「松の姉御。これで良い?」

「よつ、ありがとね。もうあつちで他の子達と遊んでて良いよ」

よつが松の肩から降りて他の海防艦のところに行つた。

よつを連れて来たのは実にグツジヨブだ松。

「松さん、ありがとうございました」

「いえいえ！ 楽しいパーティーですもの！ いがみ合ってちや面白くないです！」

「うっ」

あ、二人に追撃のダメージ入った。

なるほどね。翔鶴さんが松にヘルプを出してたのか。

「ナイスですよ松さん。お礼に特別なショートケーキをあげましょう」

「え!? 何この色…… ち、ちよくつと遠慮させて貰いますね、アハハ……」

会心の出来である瑞雲カラーのショートケーキを上げようとしたらドン引きされた。

只の抹茶チョコをゼラチンで表面テカテカにしただけなのに……ほら見ろ！ 日向さんが既に俺の手からケーキを皿ごと持ってったぞ！

「ほう、コレは良い瑞雲だ。……香りも良い」

「食べ物ですから」

「ずっと飾っていたいくらいだ」

「腐りますよ」

「……でもそうなるなら瑞鶴さんには何を出したら良いでしょうか」

厨房、加賀さんと瑞鶴さんの間に翔鶴さんを挟んで不干渉協定（仮）を結ばせたので、後は瑞鶴さんに何を食べさせるかが問題だ。

メインの七面鳥に忌避感を示された以上は代替案が必要になってくる。

「比叡と一緒に脱法カレーでも作って食わせたらどうや？ 食の有難みを痛感するやろ」

酒瓶を持った龍驤さんが厨房に入り込んできた。まだ始まってすらないのにもう一升瓶3本も空けたの？

それよりも……

「もしかしてバカにしています？」

なんだよ脱法カレーって。

俺が作るカレーにトべる白い粉なんて入って無いから脱法もクソも無いだろうが！

市販品と市販品を混ぜただけで法に触れるようなモノが出来る筈が無いだろいい加減にしろ！

俺のカレーはちゃんと食べれるし！ 比叡さんのは……誰かが見てたらちゃんと美

味しくなるから！

「こんなことをしている場合ではありません。どうかして皆さんに満足してもらわないと……」

「時にはお菓子に」

「「!？」」

突然、厨房に不敵な声が聞こえて来た。

「時には主食に」

「腹持ちも良い」

「育てるのも簡単で」

「しかも美味しい！」

「涼月さん。ビックリさせないでくださいよ」

ハロウインは三か月前なただけ。

「料理の材料にお困りの様子だったので助けに来ました。というのは建前でして………実はカボチャがまだ余ってるので、使ってくれませんか？」

「恥ずかしそうにそう言った涼月さんの後ろには秋月型がカボチャを持って立っていました。」

「ありがとうございます！ 伊良湖さん、私はグラタン作りますね！」

「だったら私はきんぴら作ります！」

「涼月さんは何か作りますか？」

「でしたらマツシユパンプキンを」

他の人たちレパートリー多いな!?

「じゃあ私は素焼きで」

シャンパンとかワインには合わないだろうけど、酒飲みたちには摘まめるものがあればそれでいいって節がある。文句は言われないうら。

ついでにカボチャジュースも作っちゃおうか。

ワガママを言う悪い子にはハロウインをプレゼントだ!

涼月さんが愛を込めて作ったカボチャ、全部消費してくれよな!

・年末年始は忙しい

年末。

それは一年の締め括りと同時に新しい年を迎える準備で忙しい時期。

こういったなんらかのイベントや節目を迎えるような時期の提督の忙しさは尋常ではなく、今も大本営に行つて泊まり込みで用事をしている。

この前は警備府に稀にやつてくるマスコミの対応をしたし、一年間色々とお世話になった地元の漁師さんたちに挨拶に行つたりもした。

クリスマスモードが抜けてない警備府の中で一番リラックスできてない人は誰かと訊かれたらほぼ全員が提督だと答えるだろう。

一年の各艦娘の出撃記録とかを纏めて内容を吟味して、評価、課題の書かれた成績表みたいなものを渡すといったとんでもないことまでやっていた。そしてそれが正式な仕事ではないことを俺は知っている。……因みに俺だけ成績表を貰ってない。

そんなことする暇があるなら実家に帰つて家族サービスくらいしろつて意識して伝えたところ、両親から「皆を放つておいて帰ってきたら許さない」と言われたらしい。悲し過ぎるだろ……。

そんな提督は置いておいて、俺たちがしているのは大掃除だ。

ランダムに選ばれた人同士が固まって、自分たちの部屋を片付けるように指示されている。

俺は三日月と初雪と同じ班だった。

5分前に集合した三日月と、遅刻したとはいえ顔を出した初雪を連れて三日月の部屋へ向かう。

しかしあの初雪が動いても動かない者が居る。

「もつち、まだ居たの!?! 大掃除だよ!?!」

三日月の部屋のもう一人の主、望月がソレだ。

今も三日月に声を掛けられてるけどまるで動かない。一人、もしくは姉妹同士同型艦で部屋を片付けないようにされてる理由の一つでもある。サボリ ダメ 絶対。

「こんだけ人居るんだし一人くらいサボってもすぐに終わる終わる。同士初雪もきつとコタツで休んでるって」

きつと初雪も休んでいるから自分が休んでも問題ないという謎理論を展開した望月だったが、今回ばかりはタイミングが悪かったようだ。

「私も居るんだけど……誰が休んでるって?」

「嘘お……あくもう、分かったから蹴らないでよ……メガネどこ?」

観念したようにのそのそとコタツから這い出て来た。

そしてそのまま「ダリ〜」とか言いながら部屋から居なくなつた。

「みつともないとお見せしました」

「気にしてないよ。でもやっぱり望月はこっち側の人間だったね」

「……掃除しましょうか」

そうして俺たちの班の大掃除が始まった。

望月の居住スペース周辺は三日月が掃除して、遠慮なくゴミ袋に物を放り込んでいた。

俺と初雪でコタツを一時的に退かして、床を掃いて、畳は水拭きと乾拭き、タンスの上も窓も綺麗に拭いていく。要るかどうかよく分からないものは三日月に訊いて捨てるか判断して貰った。

一時間ちよつとで見違えるようにキレイになった。

なのに三日月の表情が暗い。

「望月が汚した部屋は三日月が片付けないといけないのが日常だったので……綺麗な部屋は逆に落ち着かないです……」

「ええ……」

これ望月のお世話中毒じゃね？ 大丈夫？ 明石さんに診てもらおう？

次に初雪の部屋。

こつちは比較的マシだった。少なくとも下着の類が落ちてるなんてことは無かった。そうだよ、コレが普通なんだよ。

ただ、深雪は初雪のお世話はあまりしないらしく、ペットボトルの空が沢山転がっていた。でもカップ麺の空とかは無かったから、不潔と言うまでではない……かな？

案の定、ペットボトルを棄ててちよつと整理整頓をしただけで随分綺麗になった。

「直ぐに物が手が届くって良いと思わない？」

「気持ちは分かりますけど……」

「それは掃除しなくても良い理由にはなりませんよね？」

三日月、厳しい！

でも一回経験すると中々抜け出せないのよコレが。俺には分かるよ？

まあ、キレイに整ってる上でその状態になると自ずと機能美を感じさせる良い部屋になっていくんだけどね。

やれば出来るって言ってんだし初雪なら出来る。

「最後はスチュワートの部屋だね」

「初めて入ります」

最後に俺の部屋。

一人部屋なのを良い事に大井さん並に好き勝手やった部屋。

俺が知る限りでは今まで妖精さんくらいしか入れたことが無い。大湊ウチの秘密の部屋

とは正に俺の部屋のことよお！

「まあ詰まらない部屋ですが……アレエ？」

鍵を開ける振りをしてガチャガチャと音だけ鳴らす。

何か隠さなきやいけないモノってあったかなあ？ 大体引き出しに入れた筈だし、そこは俺が掃除するって言えば良いから無問題。あとは特に無い……かな？

大掃除をするって告知された段階で綺麗にしておいた筈だから入られてもオーケー。じゃあ開けるか。

「ウーン開かない……あ、開きましたね。どうぞ」

二人を部屋に招く。

「どう？ 普通の感性から言って俺の部屋は合格？」

「掃除の必要、無くない？」

「ずっと掃除では疲れますし、ちょっとお茶休みにしませんか？」

「あ、そっちの棚に各種入ってるので好きなものをどうぞ。今お茶請け用意しますね」

初めての来客の2人にはとっておきの間宮羊羹をあげよう。

ハハハ羨ましいだろう！ え？ ずっとここで過ごしたい？



元旦の日の出のちよつと前。

灯りが点いてない静かで暗い廊下を歩く。

本当は徹夜したかったんだけど、年越し蕎麦を食べて食堂で暫く談笑してたら無性に眠くなった。

っていうか一回食堂で寝落ちした。

「どうして用意されてる飲み物が甘酒か酒の二択だったのか」

『今日くらいは』と言う那智さんや伊ヨ伊14さんに押されて、間宮さんにオーケーを出したのがマズかった。自分の部屋に戻って布団に入りラジオを付けたら記憶が無いから多分寝落ちしたんだろう。

変な酔い方してドン引かれてないことを祈ろう。

「寒………」

悴かしむ指を擦りながら廊下を歩く。やっぱり東北北海道の冬は寒すぎるだろ常識的に考えて………これよりヤバい地域北海道があるとか頭おかしくなるぞ。

「お？ 早い」

執務室のある区画の辺りには灯りが点いていた。

そう、なんと提督は大湊に戻って来ていた。

マジで実家に帰らないのか……とか、こんな早くに起きてるとかヤベエとか、色々と言いたいことはあるけど、やっぱり提督って大変過ぎないか？

あまりにも早い大本営との行き来はやはり忙しかったんだろう。

提督のお供として選ばれた古鷹さんもハードなスケジュールに振り回されたようであり疲れていた。まともに観光とかも出来なかつたんだろう、ちよつと不機嫌そうにして加古さんに甘えていた。

お供と言つたらアレだ。

俺が早々に「ゆついでいきたくないつくりしたい」って辞退したことでその椅子の奪い合いが起きるとは思わなかつた。

奪い合うほどだつたらさつさと俺をこの謎過ぎるポジションから蹴落として欲しい。提督の隣にはちゃんとした艦娘こそが相応しい。

古鷹さんとかは良いと思つただけだなあ……真面目だし、常識外れなレベルで美人なのを除けば常識的だし性格も良い。だから提督のお供に選んだんだけど……浮ついた話題の一つすら聞こえてこない。

「もしや提督には既に心に決めた人が居るのでは？」

なるほど、確かに提督は艦娘としか恋愛をしてはいけないなんてルールは無い。

提督はまだ若いだろうし、彼女が居るなら学生時代からの付き合いとかだろう。

「チツ……リア充め、もげろ」

「なんで……」

おっと、誰も居ないからって油断してたぞ。

そう言えば今日は元旦。俺は寝落ちしたけど徹夜した人は結構居そう。廊下が静かだからって油断しきってちゃ駄目だな。

誰が居るかななんて考えながら廊下を曲がると鈴谷さんが居た。なんか落ち込んでるような気がする。

「明けましておめでとうございます。鈴谷さん、どうかしましたか?」

「あ、あけおめく! ……ちよつと聞いて? お年玉なんだけどさ……3万円だったの」

「はい」

「え? ちよい反応薄くない?」

「はい?」

え、お年玉が3万円だったんでしょ? 良かったじゃん。

俺はてつきり貰えなかったんだと思ってたんだけど? だって俺たちが普段使って

るお金って多分税金から捻出されてるんだし、貰ったからにはパーツと使って経済回しちゃえよ。

お年玉もそうだけど、艦娘にも給料と言うものがある。金額自体はお給料と言うよりは小遣いの延長線って感じだけど、各種ローンも車も嗜好品以外の食費も経費だしで……まあいいや。

大体の人はお洒落の為に洋服店に行ったり趣味で本を買ったり、プチパーティーの為に大量のお菓子を買ったり宴会の酒や着を買ったりと使い道は様々だ。

逆に貯金してる人は少ない。理由は「何時沈むか分からないから」が多かったのをいっただったか青葉さんが調査していたのを覚えている。

100人近く居る艦娘達が思い思いに買い物をする。一人一人の金額が小さくても数が多い。なるほど確かに、漁師の人達も「最近街も活発になった」って言う訳だ。

……そんな事より鈴谷さんだ。3万円でなにやらご不満の様子。

「少なかったんですか？」

「そんなことはないケド……あくやっぱ何でも無い！ 気にしないで！」

そう言つて鈴谷さんは去つていった。

「変なの」

3万ねえ……特別な意味を持つ数字だったりするのか？

まあいいや。

執務室の扉をノックする。すると中から声が聞こえて来た。扉を開けて、部屋の主に挨拶をする。

「スチュワートか。明けましておめでとう」

「提督、May this year become a great one。」



アレコレ

揃わない

「なあ提督よ、大和の建造には何時着手するんだ？」

7月もそろそろ終わりそうになったある日。

執務室に乗り込んだ武蔵さんが言った。

「あゝ……もう少し待ってもらえないかな？」

「昨日明石が言っていたが、戦艦大和の建造に必要な資材は一昨日の段階で集まったらしいじゃないか」

書類整理の手を止めた提督が武蔵さんと会話を始めた。

話題は大和さんの建造について、か？

戦艦大和

日本そのものを表す言葉を冠する超弩級の戦艦。

最大最強の戦艦にして大艦巨砲主義の極致。

本人は「大した活躍はしていません」なんて謙遜してたけど、そのネームバリユーは最早言うまでもない。

何せアメリカの面々が皆揃って尊敬していたくらいだ。

『日本の技術者はマジで変態だ』ってアレックスさんも言ってたし。

軍艦なんて知らねえよって人でも戦艦大和だけは知ってるって人は多いんじゃないだろうか。俺もそうだし。

そんな戦艦大和、もとい艦娘の大和さんの建造となるとそれは……もう眩暈がしそうなくらい大量の資材を消費する。

武蔵さんの時も凄かったからなあ……。

資材でいっぱいになってた倉庫が一晩ですっからかんになったのは多くの人のトラウマになったんだよ。明石さんが居なかつたら何人か発狂してたね。

だから提督がゴーサインを出したとしても、俺や明石さんまで軽々しく首を縦に振る訳にはいかない。

「え〜つとどこだったかな……あった。はいコレ！」

資料から月別、週別の資材状況のグラフを武蔵さんと、ついでに提督にも見せる。

「ココの部分！ 必要最低限のラインをギリギリ維持してるのが一週間近く続いているのが武蔵さんを建造した時の資材状況です」

「なんだ、悪かったなあ！ なあに、その分はしっかりと働かせ」

豪快に笑いながら頭をガシガシとシェイクしてくる武蔵さんを睨む。全く効果が無

いけど、せめてもの抵抗だ。

だって資材が無いと深海棲艦に対応出来ないんだよ！武蔵さん建造中に深海棲艦が大挙して押し寄せて来なかったのは本当に運が良かったんだからね！？」

「提督もです。戦艦大和の建造をしたいならまずは資材倉庫の拡張をしてからにしてください。もしくは深海棲艦の活動が鈍くなる冬にお願いします……」

「ははっ提督よ、今の2択でまさか後者は選ぶまい？」

「そうだね。資材置き場の拡張を検討しておくよ」

その回答に満足そうに頷いた武蔵さんが執務室から出ていく。

やっぱり男気があると言っても姉妹、しかも他所には居て、大湊に居ないのが自分の姉だけとなると恋しくもなるのか。

いつもイタズラに集中してる卯月とか全方位にツンツンしてる時津風だって、同型艦が中大破したなんて連絡を受けた時は迎えに行くくらいだ。誰だって姉妹は大事なんだろう。

姉妹愛……やはり良いものだな。

相変わらず、何故かエアコンが導入されない執務室で書類を捌いていく。

しかし今日は何かがおかしい。

具体的には、今日の提督は仕事中に何故か俺のことチラチラ見てた。

絶対に何か隠してそうなんだよなあ。

「ん?!?!」

ホラあつた! 怪し……くは無いけどそれなりに大事だと思われる書類!

「何かあつたのかい?」

「コレ、どういうことですか?」

一枚の紙を提督に見せながら言葉を待つ。

確かにこれからもっと暑くなる季節だけど……なんでこんな、まるで隠すように優先度の低い書類に紛れさせてあるのかねえ? 疚しい事でもあるのか?

「……夏季の慰労のお知らせだよ。ほら、去年もやっただろう?」

「そうですねえ」

確か温泉旅館に行つて、青葉さんたちと一緒に提督の寝顔を撮影するつてミッシヨンスバインポツシブルして遊んだっけ? 憶えてる憶えてる。

「去年と随分内容が違うように思うんですけど」

何で東南アジアの観光なんだよ!

暑いからか? 暑いからか海に行こうつてか!?

いつも海は隣にあるじゃねえかよ！　なんでわざわざ海外に行つてまで海なんだよ
信じられねえ！

「いくつか候補は示されたんだけど、何故か他の提督達が選ばなくて……」
残り物には福があるつてか？　これは厄だろ。

もしかしなくても偵察任務も兼ねてると思うんだけどなあ……。他の提督たちも選
ばない貧乏くじだつてことを察せなかつたかあ。

艦娘を大事に思つてるなら互いに押し付け合うくらいしろ。性格が良くて戦争に勝
てるか！　譲れないラインつてもものは無いのか？

でもまあ……スラバヤから日本までのルートを通つた時も、遠洋に出ることは少な
かつたとは言え深海棲艦はあまり見なかつたような気はする。

深海棲艦がどういう分布してるかは知らないけど、東南アジアの海つて大戦中の激戦
区だつたみたいじゃん。『艦^ここれ』をメタ的^{世界}に考えたら絶対に強い^{ゲーム}の居るだろ。

確かに海の色は綺麗だつたし、こんな世界だから海に対して無警戒つてことはないだ
ろうから観光が出来ないこともないだろうけど……素直に喜べないなあ。

「まさかとは思いますが、この慰労の企画はもう既に？」

「ああ、提出済みだ」

「……」

終わった……。

いやでも、もしかしたら本当に何にも無い観光になる可能性が……ダメだイメージ出来ない。どうせ仕事^{作戦}漬けで休めない未来が見えるぞ？

「他の人達もすっかり納得させてくださいね？ 多分コレ、観光^{パカンス}の皮を被った偵察^{お仕事}任務ですよ？」

「え？ ……そういうことか。道理で誰も選ばない訳だ」

気付くのが遅すぎるんだよなあ……。

「「海!」」

その日の夜、人数が多くなってきた食堂で提督が告知した。

その結果、殆ど全員のテンションが信じられないくらい上がった。

「嘘だろ……」

皆いつつも海の上に立ってるじゃん。青い海と青い空、そして水平線なんて飽きるくらい見てる筈じゃん。

それなのに頭の中が完全に観光 ∨ 任務になってるの面白すぎか？

誰かが言い出した「水着を買いに行こう」という言葉に釣られた人たちが、互いに休

日の日程を確認し始める始末。

若いつて良いねえ。俺には到底真似できないぞ？

俺は精々砂浜でビーチパラソルを広げて読書か昼寝か、皆の昼食の用意か……つて違
う！ 一瞬忘れてたけど多分コレお仕事だからね!? ただ遊びに行くんじゃないんだ
よ！

準備するものは艤装と通貨とその他諸々だけで良い筈だ。あとは宿泊施設の下調べ
とか、妖精さんの管理とか。持って行く艤装の管理とか……

「うへえ」

考えただけで頭が痛くなってくるね！

でも頭脳労働は提督に放り投げよう。何せ俺は只の駒。駒は将棋とかチェスを指さ
ない。

それにしても……一応提督は仕事の一環つてこと伝えたよね？ なんで観光の二文
字に浮かされない人が少数派な訳？

いやでも「休める時にしっかりと休むのも仕事の内」つて言つてたよ？ そんなにスト
レスが溜まつてたのか？

まあいいや。水着なんて俺には縁の無い物だし、明日の遠征に支障が出ないように早
く休もう。

「ねえスーちゃん！」

「スーちゃんって何!？」

食堂から出ようとしたら、両肩に手が置かれた。

でも聞こえてきたのは俺を呼ぶような名前じや無かったから、つい反射的に答えてしまった。

「佐世保の私夕張が『そう言う」と照れてカワイイ』って言つてたから！」

なに吹き込んでくださりやがった佐世保の夕張さん!？」

確かに渾名っぽくてなんか仲良くなれた感じがするから嫌では無いけど……これが照れてるってこと?」

「それと明後日休みだつて言つてたよね? 一緒に買い物に行かない!？」

そう言う夕張さんの後ろには明後日が休みの他の人達も居た。

やっぱり断れない感じ?」

「……」

水着を買う為に買い物には行きたく無いんだけどなあ。

でも待てよ? 買い物に行くつては言つてたけど、水着を買うなんて一言も言つてないね?」

なんだ、ただの早とちりか。

それに方が一そんなことになっても既に持つてゐるつて言えば何とかなるでしょ。

「良いですよ、行きましようか」

この時、俺は忘れていたんだ。

綾波たちとショッピングモールへ買い物に行つたときにみんな服屋を梯子して、大半の時間を過ごしたことを。

アメリカでフレッチャー級の二人が見せたファツションへの熱意を。

と言うよりも、女性がお洒落の為に使う気力や神経、その他諸々を舐めていた。

つまりなんだ。

俺は後悔することになつたんだよ。

各自準備

夕張さんを始めとした数人と休日に買い物に行くことになった。

それ自体は悪い事ではなくて、むしろ予定が無かったから丁度良いくらいだ。

「でも欲しい物無いんですよね〜」

そんな贅沢な悩みを同じ遠征のメンバーに零す。

自分の部屋も自信を持って誰かを招けるレベルに整ったからインテリアの類はもう必要ないし、食べ物を経費で落ちるか、自分で作るから安上がりだ。

本が読みたくなったら伊^{ハチ}8さん、または夕張さんの部屋に行けば大体あるから買わないし、ゲームは熱中し過ぎちやうから自^{見る}制してる。

お洒落？　今でも普段着数着と寝間着さえあれば後はどうでもいいと思ってますが？　それにアメリカでジョンストンからしこたまプレゼントされたし……そろそろ袖を通さねば失礼だな。

そもそも、大体の娯楽よりもアメリカの面々と連絡した方が面白いから娯楽が要らない。ついつい夜更かしして通話とかしちやうからね。

話題は様々で料理に世間話、互いの愚痴だったりする。自分の部屋を防音仕様にして

貰って良かった……

そんな感じで俺は既に衣食住と娯楽が満たされている状態にある。

だから欲しい物が無い。あるとしたらお金で手に入らないものだ。休みとか、自由とか。

「ホントに欲しい物無いっばい？　夕立は……数えきれないくらい欲しい物あるっばいー！」

「お金余ってんのかい？　だったらあたにくれたっていいんだぜ？　スチュワートより上手に使ってやるって」

「涼風、卑しいと思われるわよ？」

「てやんでい！　冗談に決まってるんだろお!?」

明らかに節約の二字とは無縁そうな夕立と涼風。

村雨さんも化粧品と洋服の消費が多いって時雨が言ってた。

「あんまりさっぱりし過ぎてて、まるで男の人みたいですよ」

「「えっ」」

男の人って言われた!?　バレた!?　いや、まるでって言うてるからあくまで「男の人っばいね」だけであって「男の人だね？」ではないからセーフ。

それよりも！ 何で春雨は男の買物を知っているんだ？

まさか彼氏か？ だとしたら相手は誰だ？ 兎に角、春雨を貰っていくのなら白露型の全員と俺……じゃ足りないな。大湊の全員を認めさせてからにするんだな。

それが出来なきや大人しく引き下がってもらおう。それも出来ないなら……

「沈めましよう」

「沈めるって何をですか!? あつ、男の人って司令官です！ この前たまたま買物先で一緒になりました……はい」

俺と村雨さんの眩きを聞き取った春雨が真つ赤になりながら弁解している。うん、可愛いね。

提督も買物に行ったら春雨と出くわすなんてラッキーじゃん。もげろ。

「なあんだ びっくりしちゃった。あと、何処で会ったのか教えてくれる?」

『みなさん！ しつかり付いて来てください!』

阿武隈さんから通信が入った。

ふと見渡すと、離れた場所に黄色い点が見える。

「怒らせちゃったっばい?」

「駆逐艦が言うこと聞かねえってしよげてたもんなあ……悪い事したかな?」

「ですねえ」

阿武隈さんは頑張るほど空回りしがちなんだよね……能力は低くないのにどうしてだろう？

「……」

はい。

俺だ。

遠征の終わった次の日に、やって来てますショッピングモール。

艦娘の皆が『比較的近い、大きい』という理由で休日に通い詰める場所だ。

ショッピングモール裏の商店街とかも降りてるシャッターが目立ってたのに「あれ？前までシャッター閉まってたのに呉服屋出来てら」なんてこともあるから、間違いなく一年前よりも活気付いてる。

残念なのは、ターゲットを艦娘に向けてる店がある為、服や化粧品、アクセサリーの店が比較的多いことだ。あとは本屋、家具屋、カフェとか洋菓子店とかかな。

でも和菓子店は少ない。何故なら艦娘が和菓子を外で食べないからだ。和菓子店に参入の余地を残さない間宮さんすげえ……

そんなショッピングモールの中、海や山でのレジャー用品が売られているコーナーの

一角で俺はハンモックセットで横になっていた。

比較的近くでワイワイと楽しんでいる艦娘御一行の声を聞く。

「皆は浮かれ切っておるようじゃな！ 全く情けないのお……あ！ アレは筑摩に似合
うと思うのじゃ！」

「あら、利根姉さん？ ……ふふつ。クーラーが効いてるからってあんなに元気に」

「私たちにとつてさ、水着って逆に普段着に近いよね」

「ちよつとイムヤ！ 悲しくなるから言わないで」

「さつき喉渴いたのが響いて80円足りない・もうだめぼお」

「仕方ない。後で返してね？」

「ト」

「もう少しウチにも有れば、ブイブイ言わしたるのになあ……不公平や！」
「？」

みんな楽しそうだなあ。

「平和くくあふ。眠……」

まだまだ時間かかるだろうし、一休みくらいしても良いですよ。

「パンパカパン」

「お、うっ!？」

愛宕さんに起こされた。

耳元のパンパカパンで頭。パーンしそう……ッ!

「気持ちよさそうに寝てるところゴメンね〜」

「何でこんなところまで来て寝てるのよ。ほら、スーちゃんも水着を買いましょう?」

「あつ、もう水着は持つてるので。安心してください」

これは事実だ。

俺が水着をかう上で基準にしたのは露出面積だ。変態扱いは嫌だからね。

という訳で俺が事前を買ってある水着と言うのはダイビングする時に着るようなウエットスーツだ。水辺で着る服だから水着だと屁理屈も捏ねておこう。シユノーケルも買ってあるからツツコミを入れられても問題は無い。

そんなウエットスーツは、目の前の愛宕さんみたいなダイナマイトボディなら体のラインがアレやコレ逆にとんでもなくエロくなりそうだけど、今の俺みたいなちんちくりんなら着ても性的には見られる心配はない。完璧だ。

「へえ〜……どんなの?」

「如何にも普通のヤツです」

だからこれは嘘。

「ふくん。てつきり囚人服みたいな全身タイツかと」

何故バレた。

「私を何だと思ってるんですか」

「露出を嫌う恥ずかしがり屋つてところ？　まあ、もう持つてるなんて言わずにもう一

着くらい買っちゃいなよ」

そう言われて夕張に引つ張られる。

諦めに似た感情のままズルズルと女の園？　に引き摺り込まれて行った。

「コレなんて良いんじゃない？」

夕張さんの手には臍が買ったのにソックリなスポブラみたいなの水着があった。制服

でいつも着けてるインナーと合わせればまだセーフか？

「あく良いですねえ」

もはや開き直った俺は、相槌を打ちながら同じタイプの子を青いヤツを籠に放り込んだ。

そして女物の水着のショートパンツ、水着のレギンス、最後にラッシュガードとやら

を籠にブチ込む。

「……もしかして、入れ墨とか入れてるの？」

「実は胸に7つの傷があります」

「馬鹿なこと言っていないの」

「まあ、春風も最近の水着はちょっと破廉恥だと言ってましたし、ちよつと遠慮したいですね」

「ホントにアメリカの艦ふねなのよね？」

心は生粋の日本人、しかも女性ですらない。

それくらい多めに見て欲しいぜ。

あとは欲しいもの特に無いからとレジに並ぶ。

「え？ 今度は夕張さんの分を？ 選んで欲しい……？」

俺の苦難は自分の水着を買うだけでは終わらなかつた。

「……は？」

その日の夜。

俺の部屋では妖精ホモさんが部屋を散らかしていた。

怒鳴り散らしてやろうかと思つたけど、分かりやすい図を見せられたことでいくつかの物品を回収しに来たらしいことが分かつた。

探し物はUSBメモリと冊子。

「あ〜……」

なるほど確かに、部屋中のありとあらゆる引き出しが漁られている。

でも確かに、隠しておきたい物の引き出しには鍵が掛かっている。そして鍵は俺が持ち歩いている。

冊子の方は、恐らくあの妖精さんが残したなんだかんだでお世話になったヤツだろう。

鍵を開けて冊子を引っ張り出して提出する。

回収されて困るなんてことは無い。俺にはもう必要ないものだし、なんだかんだで事情を知ってそうなこの妖精さんホモなら悪い事には使わないだろう。

「でもUSBなんてあったかな……」

正直記憶に無い。

というより、使った記憶が無い。

でも火のない所に煙は立たぬの考え方で、俺の部屋に探しに来たつてことは俺が持つてる可能性が高いってことだろう。

引き出しを漁る。すると消費期限の切れた羊羹、極小サイズのドライバー、ジョンストンとお揃いのネックレス、極小サイズのペンチ、ケツコン指輪、極小サイズのスパナ、秋雲先生から没収したマンガ、見たこと無い蟲の死骸が入った袋、その他諸々が出て来

た。

「ん、あった……」

前の日記帳の下にUSBメモリはあった。

相変わらず何のヤツだったか記憶にすらない。

「欲しいの？」

妖精^ホさんは頷く。

「じゃあいいよ、あげる。変なことには使わないでね」

そう言うと、散々散らかした部屋を片付けないまま妖精^ホさんは出ていった。

許さん。

現地到着

「「いつてらっしや〜い!」」

そう見送りされたのは夏真つ盛り。

他の鎮守府の倍以上にもなる2週間という長期休暇、しかもその間に大湊から離れても大丈夫なように各鎮守府からだいたい20人、合計で80くらいの艦娘がやってくるという手厚いサービスまで付いている。

だから、今回の夏季休暇、慰労でのバカンスの間は大湊のことを気にしなくても良いらしい。

しかも資材関係のアレコレは既に準備が済んでいるから全く気にしなくて良い上に、これから俺たちが向かう場所では一般観光客の立ち入り制限までしてくれるらしい。

俺たち大湊のメンバーだけで楽しんでくれと言う大本営の粋な心遣いを感じる。

まさに至れり尽くせりだ。

しかし、こんな美味しい話が転がり込んでくる筈もなく……

「まあ、知ってたよ?」

【妖精の同行、艦娘の艤装携行の義務】

手元の一枚の紙に目を通して呟く。

全員に渡されたその紙は、高まっていた大湊のムードをどん底に突き落とすには充分だった。

まあ、こんな書き方されたら如何にも「何かあるよ」って言ってるようなモンだからなあ……どんなに察しの悪い人でも「万が一に備えろってことじゃないよね」って澀んだ目をして苦笑いをしていた。

しかもなんだよ、一連の休暇さびせんが2週間で終わらなかつた場合の休暇延長さびせんって。そんなの要らないよ。隠す気無いなら正直に作戦さくせんって書けよ。

そんな騙し討ちのような休暇（爆笑）に於ける皆の希望はそもそも深海棲艦が殆ど居ない場合だ。そうなつたら素直に休めるってことになるから。

去年の夏、温泉旅館に向かったときの倍以上の人数が相応の数のバスに揺られていく。

車内のムードは例の紙のせいでもかなり悪い。やたらと涼しく感じるのは間違いない。冷房の影響だけではないだろう。

嘘みたいだろ？ こんな雰囲気だけど一応、長期休暇で皆揃って東南アジアにバカンスに行くことになってんだぜ？

でも大本営からは正式に任務やれって言われてない。

・留守番は任せろ。資材の面倒も見てやるよ

・人払いはしておく。人が多いと面倒だろう？

・みんな艤装持つてけ。何があるか分からんからな

・妖精さんも連れて行け。まあ一応ね、一応

・長引きそうなら仕方ない。ゆっくりしてこい

この5つしか言われてない。つまりガチで遊ぼうと思ったたら一応普通に遊べる辺り意地が悪いと思う。

いくらなんでもあんまりじゃねえかな……こんな書き方するくらいなら最初から作戦やれって言われた方がモチベーション的によっぽど良いんですけど。

しかも休暇の中に振じ込んでくるのがムードの低下に拍車を掛ける。休みとは、慰労とは一体……ウゴゴゴゴ

「2週間以内で終わらせたらあとは遊び放題にやしい！」

睦月が妹たちに向かつて発破をかけていた。袖をパタパタしながら必死に盛り上げようとするのは流石ムードメーカーである卯月の姉だけはある。

そしてそれを聞いた睦月型と他の人も「それもそうだな」みたいな感じで多少の熱気を取り戻した。

睦月の言ってることは間違っていないけど、深海棲艦が居なかったりしたらそもそもこ

んな作戦は実行されないんだよね……きつと事前偵察か何かをしてあるんだろう。

まあ、陰鬱な雰囲気ですつと過ごすよりは万倍マシなだけど。

そう言えば海外に行くのにパスポートとかは？

ふと、そう思った。

アメリカに向かうときはコンテナ船の護衛で海路、しかし今回は普通に飛行機だ。

機装なんてものを空港に持ち込んだ暁には色々ヤバいのでは？ 金属探知機なん

て反応しまくって壊れちまうだろ。

しかし実際はどうだ？

提督が事前アレコレ手続きをしていたらしい。

だから艦娘一向は金属探知もパスポートも全部スルーだと言う。しかも一機の飛行機を貸し切り。こんな出鱈目なことがあるのか……

待ち時間に簡単に空路を調べると最短距離を進まない謎のルートを通ることに気がついた。

どうやら今回に限らず、この世界の飛行機はあまり海の上を飛びたがらないらしい。

まさか高度1万メートルよりも上に艦載機が飛んでは思えないけど、高角砲とかで撃ち落とされる可能性を考えると妥当なのかもしれない。

最近の飛行機は凄いなあ……古い飛行機にも乗ったことは無いけど。椅子に色々詰め込みすぎでしょ。つい夢中になってテトリスで遊んでしまった。

そして気がついたら飛行機は着陸、そこから乗り換えて現地に到着した。

なんかあつという間だったなあ……あつさりすぎてて実感無いんだけど。

そう思いながらゾロゾロと空港から出る。うくん、嗅ぎ慣れた磯の香り。場所が違うだけでやることはいつもと同じだからイマイチ盛り上がらない。

「K a l i a n s i a p a ? D a r i m a n a k a m u b e r a s a l ?

」

うん？

第一村人、もとい現地人の言葉に提督含めてほぼ全員が困惑していた。

英語はヌルつと頭に入って来たけどこれ何語だ？ インドネシア語？ そもそもそ

んな言葉は存在するのか？

アメリカ語なら俺が分かるし、イギリス語なら金剛さんが、ロシア語なら研修に行つた響が、ドイツ語なら伊8とか神鷹さんとかが分かるんだろうけど……これはちよつとカバ―しきれないでしょ。

と思っていた瞬間が俺にもありました。

隼鷹さんと飛鷹さんが一言二言その人と言葉を交わしたら、あっさり引き下がっていった。

「佐藤元帥から話は聞いてたけど、まさか本当に分かるのか」

「いやあく、昔取った杵柄ってヤツ？」

「本当は欧州の方がメインなんだけど……あつて困るものではないし」

そう答えた二人もなんか訳アリな一生を送つてそうだな。

「ありがとう、助かったよ」

「また絡まれても面倒だからよくさっさと海行こうぜ！」

「その前に荷物を置きにホテルでしょ」

実は語学に明るい飛鷹さんと隼鷹さんに道案内されてかなり大きなホテルに到着した。海にかなり近い如何にも観光客をターゲットにしてますって感じのホテルだ。

しかし駐車場らしい駐車場に車が無い。まさかここも貸し切り？ 大本営はどれだけの影響力を持っていると言うんだ……

広いフロントで飛鷹型2人の話が終わるのを待つ。

飛鷹さんは受付で話をしていて、紙に色々と記入していた。

隼鷹さんは話の途中で額に手を当てて難しい顔をした。

「提督、ホテルの各種サービスを纏めました。確認してね」

「ありがとう」

そう言つて飛鷹さんは、恐らく現地の言葉を翻訳したものを提督に渡していた。

飛鷹さんのこのデキる感じ、良いね。

「~~~~? あゝ、マジか」

「どうかしましたか?」

「いや……ここに日本酒は置いてないんだとよ」

「そうですか」

どうでもいい事だった。もう少し飛鷹さんを見習つてよ。

「ちよつと冷たくない!? あたしらにとつちや死活問題なんだよ」

そう言いながら肩を組んできた。

凄い距離が近い。お酒の臭いはしないけど雰囲気的に酔つてるように見えるから

こつちが恥ずかしいわ!

「つつーのは冗談で、深海棲艦の目撃情報が最近増えてるんだと」

ボソツと聞こえた言葉に頭がスウーッと冷えていく。

なるほどなるほど、穏やかじゃないね。

「Oh……でもそれって提督に言った方が良いんじゃないですか？　ちよつと近いですよー！」

「寂しいこと言うなよお、ドーセ海に着いたら一通り哨戒とかはするだろうからな。」

「初日くらいはパーツとしたいじゃん！」

「じゃあ最後は二人で良いよね？」

突然現れた飛鷹さんに鍵を渡された。

「はい？」

「部屋割りだよ？　肩まで組んで仲良さそうだったからさ、隼鷹とスチュワート、その鍵の番号で相部屋ね」

スチュワートはしつかりしてるし、これで羽を伸ばせるわね〜と何処か上機嫌に飛鷹さんが去っていき、呆然とした俺と隼鷹さんが残された。

他の人達から突き刺さる視線が痛い。いきなり肩組むのは常識としてどうなんだって？　よく分からないなあ……隼鷹さんがルールだ。

「……」

「お酌しましょうか？」

「お〜、頼むよ〜」

まあ、言うほど俺はしつかりしてないんだけど。

束の間

「なあ、お金貸して……なんでも無いわ」

部屋で隼鷹さんと時間を潰していたら、巻物の整理をしていた隼鷹さんに話しかけられた。

「いや、でもなあ……流石にヤベーか？」みたいに百面相をしている。

でも何でもないって言うてるんだよなあ……言葉に出てる時点で何でも無い訳ないじゃん。

何か言いかけて途中で止めるとか一番気になるやつ。

「流石に人の金で飲む酒は……でもなあ……」

「何でもないんですか？ 吐いたらスツキリしますよ？」

「まだ飲んでねーよ」

茶化したらデコピンされた。

なんでも、現地のお酒がべらぼうに高かったらしく、多少の換金ではあつという間に素間貧になってしまいうらしい。

「偶には素面でゆっくりしろってことじゃないですか？」

「バツキヤロー！ お酒を無くしたらあたしどーやって生きてけってんだよ」

「別に死にはしませんって」

「肝臓なんて虐めてナンボだろ〜？」

「お身体に障りますよ」

「かあーっ！ 真面目ちゃんだねえ」

ノーアルコール、ノーライフ！ と騒ぐ隼鷹さんは想像以上だった。

嘘みたいだろ？ 素面なんだぜ、コレ。

そもそも俺だってお酒は飲めるんだけどね……普通に飲んだこともあるし。でも流石に毎日のように瓶を空にする人とは比べないで欲しい。

程々が一番よ。

『皆さん聞いてください、川内さんが深海棲艦を多数発見しました』

コンビニで買ったスナックとコーラを隼鷹さんに分けていた頃、大淀さんから通信が入って来た。

内容は穏やかじゃない。

けど、緊張とかいう雰囲気になれない。

「はあ……」

「そーかそーか、頑張ってくださいな！」

「まったく川内さんときたら」

溜息を禁じ得ない。

らしいと言えばらしいんだけど……観光よりも、休暇よりも夜戦かよ。

どうせ夜戦に行くならいつもみたいは大騒ぎしながら行って欲しい。窓開けてたのに何も聞こえなかつただけけど？

品性を疑われる？ 近所迷惑？ どうせ日本語通じないから「ヤセンヤセン！」って鳴き声の野生動物と勘違いしてくれるでしょ。

深海棲艦見つけるのは別にどうだって良いんだよ。むしろ見つけてくれるなら万々歳だ。でも多数発見って絶対に面倒じゃん。

どうせ好きでやってるなら全部処理してくれよ。自分の趣味の後始末にみんなを巻き込まないで欲しい。

だってもう外真つ暗じゃん？ となると駆逐艦の出番になるじゃん？ 俺も行かなくちやいけないんだろうなあ……

突然だが、俺の中での駆逐艦の扱いは鉄砲玉、あるいは先鋒といったところだ。

明石さんは「修理が大型艦の皆さんに比べて簡単」って言ってるし、戦艦や空母と比べるとコストだって安上がりだろう。

だから他の艦種より雑に運用出来る感じがある。悪く言うなら使い潰してオツケーな艦種。

まあ実際に提督から「使い潰すよ」なんて伝えられたら無言で中指立てるくらいはするかもしれないけど。

そんな感じで割と雑に運用できる駆逐艦……軽巡洋艦もだけど。でもちよつと安売りし過ぎじゃないかね？

見た目小中学生とかの子供も居るのにさあ……夜まで仕事つてどういふことだよ。戦艦の方が規則正しい生活を送ってるのはなんか納得いかないだけ。

まあ艦種的に仕方ないにしても、間違いなく仕事を増やしてくる人には白い視線を向けざるを得ない。

俺以外のほぼ全員からも、思い思いに休んでいたところに水を差されて不機嫌そうな視線が正座させられている6人に突き刺さる。

「何か弁明はありますか？ 川内姉さん？」

「無いっ！ 私たちはしつかり夜戦してきたよ！」

「……………」

「……数が予想以上に多くてね、ちよつと皆に力を貸して欲しいなんて……」

「また海に出るんですか？ お気をつけて」

「薄情者！」

川内さんが喚いている。

薄情者って言ったってなあ……艦娘程確実じゃ無いにしろ簡単な監視くらいは設備さえ整ってたら出来るんだし、そもそも観光地として売り出せるくらいにはそれが整ってるってこと。

だからせめて初日くらいは全員でのんびりしても良かったと思うんだけどなあ。

「それで、川内姉さんが力を貸してほしいと言う程に数が多かつたんですか？」

「そりゃあもう、数が多いのなんの！」

「遅れて済まない。神通？ 流石に正座は「何か問題ですか？」……」

ホテルの従業員が「Oh……ハラキーン」とか言ってたけど気にしないでおう。

ヤクザめいた儀式じゃないから問題ないのだ。

「続けようか」

そう言った提督は夜戦に参加した川内さんと朝潮と荒潮、時雨と夕立と萩風にいくつかの質問をした。

そして問答が終わり、暫くうんうん考えた後に口を開いた。

「うん……集積地棲姫かな」

そんなヤツが居るのか。少なくとも俺は相手にしたこと無いからどんな奴かよく分からない。

周りも知ってる人居る？　って反応だから少なくとも駆逐艦と軽巡は知らない感じなんだろう。つまり未知の相手になる訳だ。

提督の問答で出て来た情報から想像すると蜂の巣って感じなのかな？

少数の駆逐級を殲滅したら何処からともなく大量の深海棲艦が現れたんだとか。おつかねえ……

でも何で提督は知ってるんだろうね？

「深海棲艦にとつての補給地点、仮拠点といった具合のあんまり放置したくはない相手だね。幸い本体の機動力は殆ど無いと聞いているし、今晚は様子見して明日の日に叩いてしまおう。他の提督達にも話を聞いて、作戦を立てておくよ」

成る程ね。大本營で習ったのか。

それにしても、深海棲艦側の資材置き場ねえ……早急に潰した方が良くない？　兵糧攻めは基本。歴史もそう物語ってるんだし。

「他の皆さんにも連絡してきますね」

大淀さんがグループから抜けていった。お疲れ様です、とだけ声を掛けておいた。

「でも夜のうちに行動を起こすかもしれないじゃん？　だったら私たちの出番だよ

「！」

「「……」」

川内さん全然懲りてねえ。神通さんの超怖い笑顔を向けられても尚夜戦つて言い続けられるのは流石としか言えないけど、方向がちよつと変だから全く尊敬出来ない。

「姉さん？」

「うぐつ……提督、神通に何とか言つてよ〜」

「じゃあ、川内を旗艦にした監視任務を与える。敵を刺激しないようにこちらからの不要な攻撃はしないこと。あとは探照灯の仕様も禁止。これで良いかな？」

「……分かりました。でも、あまり川内姉さんを甘やかさないでくださいね？」

翌朝、ホテルで朝食を摂っている時に大淀さんから聞いた話だと、川内さんたちが一晩中監視した限りでは特に大きな動きは無かつたらしい。

明るくなったことで、いつものように空母の皆さんが艦載機を飛ばして哨戒を始めるのと、川内さんたちのお仕事は終わり……なのだが、なんとその時に深海棲艦の群れに大量の魚雷をプレゼントしてきたんだとか。

堂々と提督の言いつけを破つたのか！　と思うと困惑を通り越して笑えてくる。

でも先制攻撃としては何も間違っていないだよね……。

撤収する川内さんたちと入れ替わるように海に出た人達と、まんまと先制攻撃を喰らった深海棲艦には堪らない置き土産だろう。フリーダム過ぎるわ。

「提督！ 空母棲鬼を見つけたよ！」

食堂に入って来たのは蒼龍さん。内容がこれまた面倒な内容だった。

空母棲鬼を見つけたってマジ？

「しかも集積地棲姫が居ると思われる場所とは方角が違う、と」

「分断ですか……」

当然と言えば当然なんだけど、提督は海には出れない。

武蔵さんとかにお姫様だっこされるなら大丈夫だろうけど現実的じゃない。

そうなるも当然提督はここに残らなくちゃならない。

他にも間宮さん、伊良湖さん、明石さんと夕張さんもかな？ あとは普段工廠で働い

てる妖精さんもか。その護衛に何人かは残らなくちゃならない。

するとそうだろう？

ある程度は予備戦力としてここで待機になるにしても、集積地棲姫と空母棲鬼の撃破にそれぞれ人数を割かなきゃいけない。

対面の大淀さんと一緒に溜息を吐く。

初日からこの調子では……果たして平穏な休暇は得られるのだろうか……

だが悪いニュースは立て続けに来るものだ。

「提督、見たことない潜水艦見つけたよ。どうする？」

伊^ヨ47^ナが提督に話しかけて。

「戦艦棲姫が出たぞーっ！」

蒼龍さんのお知らせで俄かにざわつくレストランエリアに大声を上げて谷風が突っ込んできた。

「謎の潜水艦に戦艦棲姫……フヘッ、フヘヘ」

もうどうにでもなくれ！

変わった子供たち

「はあ……」

もう溜息しか出てこない。

どうして朝一で哨戒に出た人たちが悉くこごと深海棲艦を見つけてくるのか。

しかも駆逐級の単艦！　みたいないな『取り敢えず艦隊を編成すれば良いでしょ』程度の意識の低さでも十分に勝ちの目があるような小規模なものじゃなくて、そんな相手を束ねて率いるような鬼級や姫級を、しかもそれぞれ方向が微妙に違う場所で見つけてくるのか。

「面倒くさく…… やつてらんないでスよ」

「どーかしたん？」

部屋に戻ってベッドに倒れこむ。

そのまま、朝食の席に着いてなかつた隼鷹さんに事情を説明した。

夜戦で川内さんたちの見つけた集積地棲姫が居ると推定されるエリア、空母棲鬼、謎の潜水艦、戦艦棲姫の発見地点。

不思議なことにこれらの点は俺たちが居るホテルを中心にほぼ等距離にある。

完全に包囲網を布かれてるとしか思えない。誰かが深海棲艦に繋がってるって言われてもすんなり信じられるレベルで綺麗に囲まれちゃってる。もしこれが只の偶然だとしたら俺たちは相当運が悪いと思う。

まあ敵性の深海棲艦に繋がってる人は居ないけどね。みんな善良だし。

だからこれは偶然、とんでもない不幸だ。

「休日労働反対！ ビバ長期休暇！」

「休日労働はんたーい！ びば長期休暇！ アツハハ！」

だからこう言っちゃうのも仕方ない。

ゆっくり休みたかったのに……クソ深海棲艦め。

建前上とは言え、一応バカンス中だから邪魔しないで貰いたかった。

「まあ、提督は『提督』^{プレイヤー}だから何とかしてくれるでしょう……うん」

自分で言っておきながら樂觀視にも程があるとは思うけど、大湊警備府が立ち上がったからそう思わせるだけのことを提督はやってきたと思う。

確かに提督は弱気な発言が目立つし、戦う上で勝利を第一に考えないチキンだけど、

だからこそ今までの作戦では大きな失敗はしてこなかった。

そんな提督の積み上げて来た1年間。

たかが1年、されど1年。

人の認識なんて1年もあれば多少なりとも書き換わるもので。

『提督の指示に従っていれば作戦は成功する』

大多数の人に無意識下でそう思わせることが出来れば、それはもう提督は指揮官として一人前だという証拠では無いだろうか。

かく言う俺ですら『何とかなる』って感じちやつてるあたり、大分毒されてるなあなんて思つてつい苦笑いをしてしまう。

「信頼が厚いねえ……もしかして惚気かい？」

「違いますって」

隼鷹さんの言葉にムツとしてベッドから起き上がる。

どうしてこう、もう3ヶ月以上経つのに未だに俺と提督の関係を掘り返してくる人が居るのか……。

「ほら、そんなことよりも隼鷹さんだつて多分出撃するんですから朝食でも摂った方が良いですよ。ほら行った行った」

「ええ？ 食べさせてくれないの？ 「あーん♡」って」

「飛鷹さんだつてそんな事しないでしよう！」

隼鷹さんを部屋から叩きだした。

「さて、何を持って行くのかな」

他の人達は艀装以外の荷物が多かったけど俺は逆。取捨選択が出来る程度に沢山の艀装が目の前に並んでいる。出発前の俺はまるでこうなることを予測していたかのようだ。

まあ、色々とメタ読みすれば何かあるかも、強敵が居るかもって思ってもおかしくは無かったんだけど、まさか姫級や鬼級がポンポン出てくるとは思わないじゃん？

つまり強敵との戦いは避けられないということで、俺が持つてる中で群を抜いて優秀な艀装である533mm五連装魚雷とSGレーダーをチョイス。

「やっぱりこれは外せないよね」

この2つの汎用性が高すぎる。

そのせいで、俺の専用装備である筈の盾と投擲物の出番が無くなってしまっている。せつかく佐世保の明石さんと妖精さんに作って貰ったのにも関わらずだ。

「でも、作って貰った以上は使うのが礼儀か……やっぱり砲は要らないんだなあ」

他の人に聞かれたら怒られそうだけど、駆逐艦は母数が大きいから変わり種の1人や2人は居ても良いと思うんだ。

例えば……

・何故か対地攻撃の波動に目覚めてしまった文月

上陸用舟艇、内火艇に特化して

インベーター

- ・ どういう訳かバルジを積みまくった若葉タンク
- ・ 過剰気味な程の食糧と妖精修理要員さんを連れていく峯雲ヒール
- ・ 他の装備を犠牲に46cmの砲を搭載した清霜スナイパー
- ・ 攻撃力を犠牲に別次元メタルスライムと化したトリックスターの挙動をする島風

なんだこのイロモノたち!?

そう考えると砲戦火力を犠牲に手札が多いだけの俺ってマシな方では？

「うん、盾の装備は何らおかしい事じゃないね」

普通の駆逐艦は盾なんて使わないけどな！俺だって最近は全然使っていないこともあつて、俺が盾を持つてることすら知らないような人まで居るんじゃないかって思えるくらいだ。

でも比較対象が色々つぶつ飛び過ぎてるのもあるから、大湊が立ち上がった頃に比べたら盾を持つて出撃し易いと言ったらそうなんだろう。

若干悩みながらも盾と投擲物をチョイス。

腰の艤装には高角砲が標準装備で……ちよつと重たいかな？ ちゃんと動けるかな。安だ。

でも、陸上型深海棲艦魚雷機艦が出て来なさそうなところに配備されれば一通りの仕事はしてみせよう。

そんな訳で砲戦に期待できない俺が配備されたのは未知の潜水艦の対応を目標とする艦隊。

他のメンバーは大鷹さん、北上さん、風雲、沖波、岸波だ。提督の潜水艦を決して逃がさないと言う強い意思を感じる。

俺の役割は大鷹さんの護衛だけ……これまたイロモノ枠の潜水艦絶対沈めるウーマンである沖波が居るから護衛するまでも無いかもしれない。

だって見ろよ、沖波だって砲を持ってないんだ。その代わりに葡萄でもくつつけてんのかってくらい大量の爆雷持って来てる。潜水艦に何の恨みがあるってんだ。

ただし未知の敵と言うこともあって、こんなバランスの悪い上にたった6人での攻略にはならない。

相手に戦艦とか万が一水上型の姫級とかが居た時に備えて、後方には真つ当な編成がされてある艦隊が居る。これで撤退も視野に入れられるから気兼ねなく撃ち合いができる。

因みに戦艦と空母の多くは戦艦棲姫とか空母棲鬼の撃破に向かっている。

俺もそっちの方に向かいたかったんだけど……潜水艦にトラウマ持つてる人が結構

多くて、人気が無かったこっちに移された。

それと集積地棲姫だけど、提督が持つてきた情報からすると飛行場姫みたいに対地兵器の効果が抜群なんだとか。

そしてその情報を聞いた途端に文月が大喜びで志願してたのが印象的だったと言っておこう。多分集積地棲姫に明日は来ない。

まあ他の艦隊は気にしても意味無いし、俺たちのところに集中しようか。相手を見ながら高度な柔軟性を維持しつつ臨機応変に対応していくしかないだろう。

「と、待って！ みんな避けて！」

「「え？」」

突然風雲の声が聞こえたと思ったら横に引つ張られた。

急展開!? 何が何だか分からない。

「大丈夫ですか？」

「岸波? ……ありがとうございます」

横を見ると大鷹さんと北上さんも突き飛ばされてたり引つ張られている。俺と同じようにポカンとしている。

「まさか敵の攻撃ですか？」

頷く岸波。

……マジで？ 予想されてた場所より随分近い場所なんだけど。

そう思ったのも束の間、前方の海面から深海棲艦フェイスの子供たちがワラワラと浮かび上がって来た。

「ん〜……ちよつと多くない？ 後ろの人達にも援護してもらおうよ」

「同感ですねえ」

北上さんの言う通り、ちよつと数が多すぎるように思う。面倒なんてもものじゃない。そしてその黒い頭の中に一つだけ、真つ白なヤツが居る。

どう考えてもアレがボスですって言わんばかりだ。

ちよつと目を凝らすと全体像がよく見える。

やだ、カワイイ……あんな子に攻撃なんて……しなくちやいけないんだよなあ……。

悲しいけど、これ戦争なのよね。子供だろうと戦場に敵として立つたらぶつ飛ばすだけだから。

『通してよ……魚雷、いっぱいあるからさあ！』

『『キャハハハハ！』』

『『ウエエーイー！』』

そんな声が聞こえたと思ったら、周りの子供たちが手に持った魚雷を天に掲げて「沢山あるぞ」とアピールしてきた。どうやらやるつもりらしい。

「皆さん、攻撃準備をお願いします」

「大鷹さんの一言で全員が攻撃準備に入る。俺も遅れないように構える。魚雷発射準備ヨシ！」

すると、白いヤツは水中に消え、黒い子供たちが一斉にこつちに群がって来た！

「まずは後方の艦隊の到着まで持ち堪えて、数の利を多少とは言え打ち消すのを優先しましょう」

「了解！」「」

過不足あり

完全に持つてくる装備間違えたなあ……

それが、さつきから魚雷を全く当てられない癖に被弾しまくっている俺の率直な感想だった。

敵の水上艦には戦艦や空母や重巡はおろか、軽巡も居なくて艦載機とかも無いし、Sグレーダーがあまり仕事をしてない。しかも敵の攻撃手段の殆どが魚雷だから盾も実質機能してないに等しい。

無数に居る子供たち……もうクソ餓鬼でいいや。そいつらの攻撃を大鷹さんに通さないように被弾しなくちゃいけない。白い潜水艦の魚雷は明らかにヤバそうだから一緒に避けてるけど。

クソ餓鬼1人1人の攻撃力自体は貧弱だからコラテラルダメージとして受け入れられるんだけど、当然それも積み重なれば無視できないダメージになる。しかも数が多いから総合的な攻撃力が地味に高くて馬鹿にできない。

だったらさつきと倒せよって感じになるんだけど、魚雷がサツパリ当たらないから実質俺は大鷹さんの前に立ってるカラーコーンと大差ない状態にある。

あのクソ餓鬼の数を減らすのは風雲と岸波が頑張ってくれているけど、2人の負担が激しすぎる。

でも2人の様子を見ると対空機銃が効果アリな感じにみえる。あとは風雲が熟練見張り員の妖精さんを連れてきてるって言ってたから、多分それも重要なんだろう。

う〜ん……何にでも対応出来る様になって言うのはやっぱり傲慢なのかねえ。

積みば積むほど動けなくなるし。

それはそうと機銃の攻撃で倒れるってさてはクソ餓鬼相当脆いな？

逃げない上に経験値を貰えないメタルスラ○ムかな？

「すみません……もう少し耐えてください」

駆逐艦2人を観察していた俺に大鷹さんが申し訳なさそうに声を掛けてくる。

「焦らないでください。まだ大丈夫ですのぞ」

大鷹さんが焦るのも分かる。

クソ餓鬼に対して自分の攻撃が殆ど当たってないから相手の手数が一向に減らず、護衛である俺に攻撃が集中している様を目の前で見せられたら責任も感じるというもの。

でも艦載機に集中して欲しいから、大鷹さんを引っ張って避けるなんてことはしない。多分まだ中破くらいで済んでる筈だからもう少し無理が出来る。

『ウザくない？ 何か良いモノ持ってないの？』

ほぼ同時に北上さんから通信が入る。

声の様子から相当ウンザリしてるのが分かる。でも俺なんて既にイライラが4周して落ち着いてるくらいだから、北上さんも一回クールダウンしよう？

このクソ餓鬼の嫌らしいところは笑いながら素早く移動することと、数が多い癖して攻撃が全然当たらないことだ。多分北上さんは自慢の魚雷を尽く避けられたんだろう。

そして、何か持っていないかと聞かれたら――

「ありますよ」

こう答えるしかない。嘘を吐くTPOくらいは弁えている。

普通の砲撃戦ではまずありえないような『攻撃が当たらない』というニツチな需要を満たす物を俺は持っている。

それは投擲物。クソ餓鬼の数がやたらと多いから、多分どれを投げてても効果はあると思う。

但し今のシチュエーションだったら、味方に艦載機大を使う人が居るから艦載機轟が飛んでる以上はフラッシュバンはナシ、陸上型深海棲艦に効果抜群の焼夷手榴弾は文月に貸したし……

そうなると、使えるのは発煙筒か音響手榴弾の2択か。

発煙筒はいざという時の撤退用に残しておきたいから……音響手榴弾か？ 水中に

ブチ込めば潜水艦に特効だけど、潜水艦キラの沖波が居る上に曰く潜水艦は1隻らしいから使っても良いのかな？

でも明らかに雑魚ですって感じのクソ餓鬼に対して、例え効果抜群だと分かっても投擲物は投げたくない。でも今の状態が続くと、クソ餓鬼の全滅より先に俺がやられて、大鷹さんに魚雷を通してしまおう。

なんか負けた気がするけど、背に腹は代えられない。

他の人に耳を塞ぐように通信しようと思った矢先、俺の横を一陣の風が通り過ぎていった。

「君たちに足りない物は、それは！」

『『ウワアーーーーッ！』』

その風の主の声と共に、今まで笑い声ばかり上げていたクソ餓鬼たちの悲鳴が聞こえて来た。

「情熱、思想、理念、馬力、初速度、加速度、運動量！」

『『キヤーーーーーッ！』』

一つの単語が聞こえてくると共にクソ餓鬼が一人、また一人と海面に倒れて沈んでい

く。

「その意味するところは！ 速さが足りない！」

『アッー！』

クソ餓鬼の群れに穴を開けた犯人、島風から最後に飛び蹴りを放たれたクソ餓鬼が吹き飛び、複数のクソ餓鬼を巻き込んで沈んでいった。そして島風は決め台詞と共に動きを止めた。

「支援艦隊、到着したよ！」

支援艦隊……艦隊？ 一人しか居ないじゃん。

どうせ持ち前のスピードでぶっちぎってきたんだらうけど……うん、少なくとも艦隊ではないよね。助かったから文句は言えないんだけどさ。

「ありがとうございます。見ての通り水上の深海棲艦、そして潜水艦は未知の相手です。気を付けてくださいね」

「当たらなければどうということはないよ！ 当てられるとも思っていないしね。だって私、早いもん！」

そう言つてまた凄いスピードで突っ込んでいった。

自分のスピードに自信を持つてるからこそ言える言葉だからか説得力がある。でも死亡フラグにしか聞こえないのは俺がおかしいからか？

そもそも、元から快速なのに更に速度強化機構タービンとボイラーを積むとか暴挙以外の何だっけ言うんだ。控えめに言っただけおかし。

そのせいで火力は控えめになったけど、今の相手のクソ餓鬼は攻撃が当たりさえすれば大した耐久力じゃないらしく、そんな速度全振りの島風の攻撃で次々と沈められていく。

やってることは単純。ちょこまかと動き回るクソ餓鬼にそれよりも早いスピードで距離を詰めてはゼロ距離射撃。

距離を詰めれば誰だっけ砲撃を当てられる。問題はクソ餓鬼が矢鱈と素早く距離が詰められないことだったんだけど、こんなに丁寧にゴリ押すようなヤツがあるか!?

多分『艦これ』的には風雲と岸波がやってるように上級見張り員の妖精さんと機銃で弾幕を張るように攻撃するのが正解だと思うんだけど……

「納得いかねえ」

まさか速度全振りなんて一見してクソビルドに見える装備群に需要があるとは思わなかった。

『潜水艦が逃げて行きます!』

『『『キヤー!』』』

突然、沖波から通信が入ったと思ったらクソ餓鬼が蜘蛛の子を散らすように逃げ始め

た。生物的本能なのか、潜水艦リीडァー格が逃げたから後に続いたのか、只ひたすらに超速の島風が不気味なのかそれとも……

「どーも！ 支援艦隊到着です！ ……1人フライングしてますけど」
支援艦隊が来たことで数の利が消えたからか。

青葉さんがカメラで早速沈みかけのクソ餓鬼を写真に収めている。あわよくば未知の潜水艦も沈めてから引つ張り上げて写真に収められるように、支援艦隊には伊168イムヤも編成されている。

『ちよつと何よコレ！ この辺、爆雷多すぎてまともに動けないわ！』
……相当ご立腹らしい。

沖波と大鷹さんの艦載機がばら撒いた爆雷で海中がマインスイーパーみたいになってるらしい。逃げた潜水艦も潜水艦だよ。よくそんな状態で逃げたよ。

「ご、ごめんなさい。妖精さんに言っただけで何とかしてもらいますね！」
「みんな、お願いしますね」

なんと、妖精さんの手に掛ければ不発弾のように思える爆雷も海底資源、もとい資材に早変わりらしい。原理は知らない。

でもそうやって資材として生まれ変わった物をまた俺たちが調達することになるの

は面倒だけど、結果的には自給自足みたいになつてから……凄くクリーン！ 艦娘と深海棲艦は地球に優しい戦争してるぜ。

「どうするの？ 追う？」

「そうですね……情報は持ち帰りたいですよねえ。被害状況はどうですか？」

青葉さんが訊いてくる。

他の人たちは小破や中破で済んでるみたいだし、俺も大破寄りの中破くらいで留まつてるように思う。

ここで誰か一人でも大破ですつて答えたら多分撤退になるんだよね……

殆どを島風と風雲と岸波が対処したクソ餓鬼の情報だけでも持ち帰ることは出来るけど、肝心の潜水艦を逃がしたくはない。

それに実際に消耗してるのは駆逐艦4人と北上さんだけで、大鷹さんはまだ余力どころかほぼ全力残してる感じだし……進んだ方が良さげな感じがする。

「私も精々中破よりの小破くらいですよえ」

だから嘘を吐いた。

『如何にも余裕です』つてアピールも忘れない。

でも支援艦隊に峯雲は居ないから艀装の応急処置も出来そうにないし、大人しく支援艦隊の誰かと交代させて貰って補欠になろう。

「天龍さん、よろしくお願ひします」

「おうよ。後は任せとけ」

やっぱり頼れるイケメンの天龍さんだよね。

方向音痴

「スチュワートさんがこんなポロポロになるとは珍しい。一枚よろしいですか？」
「はっ倒しますよ」

とは言ったものの今は作戦中だからそんなことは出来ないし……しかし良いように撮られるのかと言われたらそんなことは無いんだよ。

カメラを構えてきた青葉さんとの間に北上さんを挟んで写真を撮られるのをガードする。どうだ！ 北上さんを無断撮影したと知った大井さんが怖くて撮れないだろう。

「ちよつと邪魔しないでくれるかな」

『遊ぶために支援艦隊こっに来たなら前線ちに帰りなさいよ』

おう……伊168が手厳しい。

でも違うぞ。これは人が中大破してるつてのに写真に収めようとするデリカシーの無い青葉さんが悪いんだからな。

俺と天龍さんが、北上さんと大井さんが交代して今は支援艦隊に居る。

天龍さんなら大鷹さんの護衛も完璧にこなしてくれるだろう……クソ餓鬼にイライラして突撃さえしななければ。

ああ、そう考えた途端心配になってきたぞ。何か様子見出来る物は無いのか？ 有ったわ。

「北上さん、ちよつとその双眼鏡貸してくれませんか？」

「駄目」

そう答えた北上さんは大井さんから渡されたという双眼鏡を覗き続けている。

「いや、大井つちから『私の勇姿を見てて♡』なんて言われたら断れないっしょ」
「そうですか……」

律儀に見続けている北上さんも北上さんだけど、これは大井さんとの愛の確認作業。だからまだ死にたくない俺は邪魔をしない。

例え双眼鏡に「ぜかきゆ」って書いてあったような気がしても質問なんてしない。きつと気のせいだ。

まあ大井さんを見る ⇨ 艦隊を見ることであつて、クソ餓鬼を見つける役割も担つてるから本当に邪魔はしちやいけないんだけど。

そしてクソ餓鬼がまた出現したらまた島風が真っ先に向かつてくれるらしい。

なら天龍さんじゃなくて島風と代われば良いのでは？ って青葉さんにも言われた

けど、島風なら支援艦隊から前線に向かうのにも大して時間もかからないし、そもそもクソ餓鬼を薙ぎ倒しながら大鷹さんの護衛は無理だ。

得意なことやらせたら随一なんだけどなあ……代わりに普通のことが出来なくなるってそれはそれでどうなの？

これが俺を含めた大湊のピーキー集団の実態だよ。

「……」

「……」

支援艦隊の最後の1人はアラレちゃん、もとい靄。平均的に平均以上とか言うぱつと見パツとしない成績だけど、どんな運用をしようとも腐らないヤバい子だったりする。大湊ウチの朝潮型の中で多分1番強いんじゃないかな？ 目立ってないから気づいてない人多そうだけど。

「？」

けど強さと引き換えに声を失ったらしい。何か喋ってよ……寡黙にも程があるぞ。

活発、明るい人が多い朝潮型の中で一人だけひっそりと、本当にひっそりとしてるから本当に存在感が薄い。別にシンパシーは感じてないけど……ちよつと心配になる。まさか、これが親心？

「……ん」

納得したように頷いてから後方を指さす霞。

その方向には青い水平線と黒い点。

「アレはなんですか？」

「ん」

訊ねると砲を構えて交戦姿勢をとる霞。

成る程、どうやら前線の後方の支援艦隊の更に後方に深海棲艦が現れたらしい。

このやり取りを見てた青葉さんが通信を入れるような素振りを見せたから、俺のやる

ことは……

「北上さん、あのウザいのは居ますか？」

「んく……居ないね。殆どが駆逐級で、他の艦種がチラホラ見えるくらい」

「島風、前線の駆逐艦の誰かと交代です」

「おうっ！」

クソ餓鬼キラアの島風を状況に合わせて動かす事だ。

こつちにクソ餓鬼が居ないならバツチリ活躍出来る前線に動かした方が良いだろう。

『潜水艦も確認したわ。足元水面下にも気を付けてね！』

伊168の通信によると潜水艦も居るらしい。

正直言っただけならいい。やっとならぬに砲撃してくれるのが相手であろうやく盾に出番が来たと思つたらコレか。クソ餓鬼による魚雷の飽和攻撃でお腹一杯なんだけど。

「北上さん、敵の駆逐艦の射程圏外から叩きますよ」

「合点。今度はちゃんと魚雷当たりそうだね」

北上さん結構怒つてる。やっぱりクソ餓鬼相手に自慢の魚雷が殆ど当たって無かつたの氣にしてたのかな？ 北上さんも重雷装巡洋艦と云うことでそれなりに艤装のチヨイス偏つてる節あるからなあ……つまり俺たちはあのクソ餓鬼に対して相性が悪かつた。

でも今の敵にはちゃんと当たりそうって言ってるから霰とか伊168が撃ち合いを始める頃には敵の数が半分くらいになつてそうだな。

じゃあ霰に付いていつてサポートしようかな。盾と投擲物のリハビリも兼ねてね。

「まだ行ける？」

「!？」

キエエエエアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!

まだイケるって何？ びっくりして心臓飛び出て逝きそうだよ？

「マダイケル」

「うん」

言葉が少ないけど、多分『まだ大丈夫なら戦ってもらおう』って意味だと思う。そう思いたい……けど、流石に分からねえよ。

でも心配してくれるなんて優しい。

「あたしや今ちよ〜つと虫の居所が悪いのよね」

お、北上さんが双眼鏡を外して青葉さんにパスした。完全に殺る気だ。

眉を寄せながら不機嫌ですという態度を隠そうともしない北上さんは腕の艤装から、足の艤装から大量の魚雷を発射した。

なんだよアレ。滅茶苦茶スタイリッシュに魚雷発射するじゃん。ロボットアニメとかのミサイルだろあんなの。

「これが北上さんの20射線の酸素魚雷……壮観ですね」

青葉さんの言葉には同感だけど、シャッター切ってるだけで攻撃しないの？

でもあれか？ 北上さんだけでオーバーキルになるかもしれないから様子見でもしてるだけか？

「もう一発あるよ〜……それっ」

「おお〜」

北上さんがまさかまさかの2回目の魚雷斉射だ！ 青葉さん程興奮しないにしてもここまでされると語彙力が消えるね。何で海の上でS T Gシューティングゲームしてんのこの人。

見ろ、撃ち込まれた場所に空間出来てら。やつぱりあの密度の魚雷をスルスル避けたクソ餓鬼はヤバかったんだなあって思うね。あの乱戦みたいになつてた中で味方も当たらないように北上さんも配慮してたのかもしれない。

これを後ろから見る事が出来て良かった。これからは北上さんと大井さんが全力で攻撃できるように二人が居た時は前に出ないように気を付けないと……

「うわ、何本か潜水艦に当たったかも」

『残りの潜水艦を片付けるわ！』

「あとはお任せくださいー！」

伊168と青葉さんが残りの深海棲艦相手に攻撃を始めたようで、俺の手元には青葉さんに渡された双眼鏡がある。あ、やつぱりコレ雪風のじゃん……

どれどれと思いつつ覗いてみると普通に双眼鏡だった。良く見える。

北上さんは敵の駆逐級の中に他の艦種がチラホラ居るって言ってたけど、北上さんと青葉さんの先制攻撃で消し飛んだ先には何が居るのかな？

「うげ……」

「？」

漏れた眩きを霰に聞かれてどうかしたのかと目を向けられる。

冗談じゃない。あんなの居たら前線に支援に行く余裕なんて無いぞ。北上さんがア
レらを見つけてるとは思えない。見つけてたら俺たちに一言二言あっていい筈だから
ね。

「あー……大鷹さん？ そつちに支援は無理そうですね」

『今度は何があつたんですか？ 例えば姫級が出たとか……』

「そのまさかです。こつちには誰が向かつてますか？」

『風雲ちゃんが島風ちゃんと交代しました。そうですね、そちらにも姫級が……こちら
もそろそろ接敵しますが、ご武運を』

通信が終わる。

島風は無事に前線に着いたらしい。あとは風雲が無事にこつちに到着できれば良い
んだけど……それまで待つかな？

「霰、敵の艦載機に注意してください」

「うん」

「空母ヲ級と戦艦レ級、駆逐棲姫を発見しました！」

北上さんの超火力が頼みの綱だ。

今度は北上さんの護衛になりそうだ。

待つ者

「では失礼する」

「ああ、ゆっくり休んでくれ」

長門が部屋から出て行った。

戦闘の詳細を聞いてちよつと喉が渴いたと思つたら阿武隈がコーヒを淹れてくれたので、それを啜りながら思考に耽る。

やはり戦艦棲姫は強敵だったんだろう。一体ではなく複数出現したことから、かなり力を入れた編成にしてて尚長丁場になったことも理解できる。

提督同士の勉強会などでも『戦艦棲姫が同時に複数出現したら最悪の場合も覚悟した方が良い』なんて脅されたこともあるくらいだ。現場から複数出現したと連絡が入った時は生きた心地がしなかった。

戦艦棲姫との戦いでは大破するまで攻撃を引きつけ続けた若葉と、一時的撤退する時に殿を務めた際に大破してしまつた神通がMVPに値する働きぶりだったと判断して、明石から優先的に処置してもらおうように言っておいた。

何にせよ、空母棲鬼、戦艦棲姫、集積地棲姫との戦闘で全員が無事に帰還したことに胸を撫で下ろす。

まだ帰還していない艦隊は潜水艦の討伐に向かっている艦隊で、他の艦隊が戻って来たからそろそろ戻ってくるだろう。

「早く帰って来て欲しいね」

「そうですね。全部終わったら皆さんでパーツと観光とか楽しむのもOKだと思います！」

しかしただ待っている訳にもいかなないので、一仕事終わった艦娘達に労いの言葉をかけて、各々から武勇伝を聞いて回った。

どうやら文月が陸上型深海棲艦を相手に相当な活躍をしたことが多少の誇張はあれども広まっていた。自分は報告で聞いたけど、本当に個人が挙げる戦果ではない様に思えて仕方がない。

秘書艦の阿武隈と同じこと戦果を出来るか訊いたら怒られた。どうやら戦艦でも出来るかどうかというレベルらしい。これは他の提督に自慢するしかない。

しかしそうこうしている一時間、艦隊は戻って来なかった。

部屋に籠って戦艦棲姫、空母棲鬼、集積地棲姫との戦闘の詳細を纏めること3時間。空母棲鬼と交戦した際、こちらの艦載機も大量にスクラップにされて修理不能の状態にされたことが分かり頭が痛くなった。

それは勝利の代価なのだから仕方ないと受け入れるしかないが、このまま手を打たないでいると艦載機の補充に手一杯でいつまで経っても大和武蔵との約束の建造を實行出来ない。

弾薬や燃料は本当に仕方がないにしても、艦載機は無限に存在する訳ではない。少なくとも艦載機の準備には時間が掛かる。

艦載機の消耗を少しでも減らすべく、一度空母達には集中特訓を実施、参加させるべきかもしれない。その場合の教官役は……赤城航と加賀航は忙しいみたいだし、飛龍航と蒼龍航に任せようかな？

考えることは無くならない。

更に頭の痛い事に、予め大本営によって用意されていた資材の半分以上が無くなったことに気がついた。伊58と龍田を呼んで現地での遠征の必要性を確認してる間に更に2時間経つても、一向に扉は開かなかつた。

「……こんな遅いと、流石に天龍ちゃんが心配ね〜」

「イムヤ、大丈夫かな……」

その言葉に、ああ、そういうえば天龍と伊^イ168^ムもそのメンバーに居たのかと思いつた。

大きく4つに分けられた内、1つだけが他よりも6時間以上遅くなるのは、やっぱり誰だつて心配らしい。

ふと、最悪の想定が頭を過^よるが、そんな訳ないと考えを改める。

「きつと大丈夫だ」

速さ自慢の島風も居るんだ。本当に全滅しそうなら誰かが最も逃げ切れる可能性の高い島風だけでも撤退する様に言うだろう。

長門の報告から7時間以上経過し、その時には昼頃だった空は暗くなってしまった。

それでも一向に、潜水艦の居る方向に向かわせた艦隊のメンバーによって開かれない扉に、自分の我慢が限界に達しようとしていた。

「遅い……」

自分が短気な訳ではないと思いたい。だけど信じて待つにしても限度というものはある。

それに、さつきから頻繁に艦娘が部屋を出入りしては自分の顔色を伺っているのも不安に拍車をかける。

「そろそろ搜索に艦隊を出そうと思うんだけど、どう思う？」

「はいっ!! あ、阿武隈的には、必要ないかなうってお、思います! あそ、そうだ! 件の潜水艦も撃破したって連絡がありましたよ!」

まさか遭難したのではないだろうかと思つて阿武隈に訊いたら、驚いたことに自分の欲しい情報が出て来た。

「本当かい? 良かった……」

どうやら自分には連絡がなかっただけで、しつかりと連絡自体はされていたのか。

ひとまずは朝方に出撃して行つたまま、夜戦をすることにならなくて良かったと思ふ。

日中からそのまま夜戦に突入するのは疲労が嵩みパフォーマンスの低下を招く上、各種探知機や電探が無いと視界が悪いのも相まって各種事故が起こりやすくて非常に危険だと教えられている。……川内のせいで感覚が麻痺したのかもしれない。

潜水艦の方面に向かった支援艦隊は誰も探照灯を持つてないことが手元の紙に控えてあり、自分も日中に方が付くと思つて軽空母の大鷹にも夜偵の類は無いし……と不安になつていたので潜水艦の撃破という事実は非常に安心した。

しかし、そういった連絡が直ぐに自分の元に来ないのは不思議だ。

「合計6人が大破して移動に支障が出てるらしくて、遅くなつてるのはそれが原因みた

い。……。ああ！ 搜索とか護衛が必要なのは、三水戦が護衛のために既に出て行ったっぽいからで……」

「6人も？」

「えつと……はい。青葉さんが直接報告しなければいけないって……ごめんなさい」

「いや、こちらこそ八つ当たりみたいになってしまった。そうか、無事なら良いんだ」

そうは言うものの、6人も大破とは只事ではない。

でも、自主的^{勝手}に三水戦が護衛に行ってくれたから無事に戻ってくる事が確定したことで、少なくともさっきまでであった『実は全滅している可能性』は無くなった。

あとは戻ってきたら詳細を訊かないといけない。

待つている間に冷たくなった夕食を阿武隈に温め直してもらおう。

夕食を食べ終えてから30分程待つと艦隊が帰還したと知らされ、報告の為にやってくるであろう青葉を今か今かと待っていた。

「失礼します」

いつもよりだいぶ控えめなノックと、不気味なほどしおらしくなった青葉が入ってきた。

6人も大破させてしまったことを気にしているのか目が合ってもすぐに逸らされて

しまう。顔色が悪いのは青葉本人もボロボロなこととは別の原因があるのかもしれない。

「まずは」

そこまで言うのとビクリと肩を跳ねさせて息を呑んだ。余程自分に怒られると思つていたのか冷や汗もかいているように見える。

……大破した情報に驚きはしたけど怒つてはいない。青葉の思うような事にはならない筈だ。

「お疲れ様、だね。報告を聞かせてもらえるかな？」

努めて柔和な雰囲気ですら怒っていないとアピールする。

効果はあつたようで、まだ緊張を解かないまでも目に力が戻つてきた。

「りよ、了解です。まずは——」

それから青葉の報告が始まった。

午前中に例の潜水艦とその取り巻きの深海棲艦と交戦したらしく、逃がしはしたものの特に問題は無かつたらしい。

だったら問題は午後だ。どうしてそんな状態から6人も大破状態にまで追い込まれたのか、その原因をハッキリさせておかないと何度でも同じ目に遭うだろう。

「それで午後ですが……」

「青葉さん！ 2人が目え覚ましたって！」

「待つて今は！ ……あ」

青葉が午後の報告を始めた直後、部屋に風雲が入つて来た。

風雲も青葉に負けず劣らずボロボロだけど、それすら気にならないこと言つていた。

「目が覚めた？ 青葉、どういふことだい？」

「えつとお……し、島風さんとスチュワートさんが意識不明と言いますか轟沈しかけたと言いますか……むしろスチュワートさんに至つては一度沈んだと言いますか……」

緊急で明石さんに診せていたんですと言う青葉の言葉が上手く呑み込めない。

轟沈？ どういふことだい？

誰が沈んだ？ 何があつたんだ？

一度様子見に行くべき？ でも邪魔になるか？

診て貰つて大丈夫だつて？ 本当に？

でも誰もこんな質の悪い嘘は吐かないだろう。

「……」

風雲と青葉、阿武隈が自分をジツと見たまま動かない。

自分は驚きと混乱のあまり絶句して動けない。

嫌な沈黙が部屋を支配していた。

「……報告を続けてくれ」

取り敢えず何があつたかだけでも聞いておこう。



不意打ち

「いや冗談キツいて」

Q. 両手の指では数えきれないくらいの駆逐級の群れが片付いたと思っただら後ろに面倒くさい強敵が複数居た時の一般的な感想を答えよ。

ただし後方で別の艦隊が接敵、交戦している為撤退はできないものとする。

A. ふざけやがって。

控えめに言つてクソでしょコレ。この世界にセーブ&ロードの機能は無いんだぞ？

「装填中だからちよつと待つてね。次で全部ブツ飛ばすから」

「流石北上様！ 期待してます」

挨拶代わりの魚雷斉射で敵を半壊させるような人の言う言葉には力がある。

敵とはまだ離れてるから付かず離れずを維持しつつ北上さんの魚雷を撃ち込んで行けば殆ど被害を出さずに勝てそうだな。

もっとも、相手の空母ヲ級と戦艦レ級の艦載機をどうにか出来ればって前提条件があるけど、味方こっちに空母が居ないんだよなあ……一応俺も敵も対空攻撃は出来るんだけど、風雲はまだ来ないし……問題は空母ヲ級をどうするかってところか。

「あ、ダメっぽい。もう撃つね」

そう言うなり魚雷を撃ち始めた北上さんに驚く。気が付いたらレ級がこちらに向かつてきていた。

ちよつと待つてくれよ。脳内作戦会議中に襲つてくるなんて敵キャラの風上にも置けないぞ恥ずかしくないのかよ。

『嘘つ、ヤバッ！……早くアレ何とかして！』

どうやら魚雷のオマケ付きらしく、伊168イムヤからヘルプが来た。そう言えば潜水艦も居るんだっけ？ だとすると伊168の負担が大きすぎるな。

「霰。伊168と敵潜水艦、駆逐艦の対処をお願いします」

「ん」

霰は通信を受けた時から既に準備をしたのか、声を掛けた時には魚雷を発射していた。

とにかく、これで敵潜水艦の事は考えなくて済む。

『♪』

でも潜水艦が片付くまでの間だけでもレ級には海の上に集中してもらわないと困るな。

レ級の尻尾から放たれた強烈な一撃が北上さんに直接当たらないように庇いつつ

引つ張つて避ける。

「うむ。苦しゆうない」

「……余裕そうですね？」

「ゴメンつて、冗談だよ」

まあ北上さんも中破してるし、余裕は無いよね。

でも余裕そうに振る舞つてるつてことは自分が被弾しないつて言う自信からか、それとも俺を和ませようとしてるか……気を遣わせちゃったかな？

「じゃあ青葉さんと一緒にレ級とやり合つててください。あの笑顔を歪めるくらい楽勝ですよね？」

別に沈めてくれても構いませんよ？　と言うと、楽勝楽勝と言いながら左手をヒラヒラさせて応えた。

同時に右手の砲から放たれた牽制も何気に精度高いのよね。今も動き回るレ級の顔面に砲弾が吸い込まれていったし。

「近付いてきたつて事は、大量の魚雷を喰らう覚悟があるつて事でしょ？　後悔させてあげるよ。んじゃ青葉さん、一緒に大物狩り始めますか」

『えっ、私ですかあ?!　レ級を相手に?!』

青葉さんの言葉は弱気だけど、何だかんだで器用に何でもこなす人だからレ級相手に

一方的にやられるなんてことはないだろう。今も軽巡複数から囲まれてもピンピンしてるみたいだし。魚雷避けるの上手いんだよねあの入。

それにレ級と言えど砲撃戦メインに調整された艦装群の青葉さんを相手をしながら北上様の猛攻を凌げるとは思えないし。

「北上さんをしっかり守ってくださいね。ではポジション交代です。3、2、1、ハイッ！」

俺は俺でやらなきゃいけないことがあるんでね。

悪いけど、有無を言わずにレ級を押し付けさせてもらおう！

「あーっ！　もう、恨みますよ！」

存分に恨んでくれて構わない。ただし全部終わってからで頼むと心の中で呟きながら、軽巡ト級を尻尾で持ち上げ肉盾にして北上さんの魚雷を凌ぎながら接近している^{モンスター}レ級から視線を外す。

そして遠くで艦載機を展開し始めたヲ級に目を向ける。

俺の相手はアイツだ。

「霞、潜水艦が終わったらこつちを手伝ってください」

『ん。もう少し』

よし。

他の人も頑張ってるんだし、俺も頑張らないと。

艦載機から鉄の雨が降ってくるので盾を上にも構える。

やっぱり空母は個人点じゃなくて複数面を攻撃してくる癖にやろうと思えば集中砲火してくるのが嫌らしい。

だけど空母ヲ級は艦娘程賢く無いから、1人で相手にするだけでこうやって集中砲火してくれる。

攻撃力自体も一航戦の2人と比べればまだまだだつて感じだし、落ち着いて対処すれば問題なく倒せそうかな？

「んじゃあまは分断つと」

後方に向けて紫色の缶をポイッと投げる。すると途端に煙幕が広がっていくけど……ちよつと風があるか？ なら100%の効果は望めないかな。

でも後ろのレ級は既にヲ級の視線が通らないし、青葉さんだつてきつと俺の意図を汲んで、煙幕の向こう側でレ級を処理してくれるだろう。

あとは煙幕が晴れるまで全ての艦載機のターゲットを俺に集中させ続けていけば問題なし！

投擲物の種類と数量を調整しておけばこんな時の為に追い煙幕出来たのに……スタ

ンダードに各種一本ずつだからなあ。残りが二つ。黄色閃光と緑音響か。

「もう少し引き付けてから……何っ!？」

突然足元に特大の爆雷が現れた。

盾を構えつつだから全速力では無いとはいえ、いきなりそんなのが現れて避けられる筈もない。

直後に足に伝わる衝撃からやつちまったと思いつつ、衝動的に黄色の缶を上に向けて後退する。

「やられた。……でも魚雷は無事か」

舌打ちしながら確認する。

艦装は無事だった。滅多な事では誘爆しないとは言え魚雷着けてて爆雷踏むとか心臓に悪い。

「……アレか」

ヲ級が展開した艦載機に見慣れないモノが見つかった。

メカニックなデザインとタコ焼きみたいな球状とはまた違う、鳥みみたいな艦載機が飛んでいた。

普通のヲ級の艦載機には混ざって無いし、間違いなくさっきの爆雷の犯人だろうが……残念なことに堕とせていない。

「……」

「普段だったらまた近づいて攻撃を仕掛けるんだけどなあ……流石に大破しちゃつてるしどうしようかなあ。」

取り敢えず魚雷を発射する。1. 2. 3. 4. 5と発射して、半分くらいが途中で爆雷に引つかかかって爆発した。ちゃんとヲ級のところまで進んでいった魚雷も流石に距離が空きすぎたのかあつさり回避された。

『……』

そしてヲ級引はそのまま特に動きの無いままスウーつと後退していった。

後ろのレ級からも、前線の艦隊の方からも離れていく。

動きが不審過ぎるけど離れてくれるなら大歓迎だ。追撃はしないようにしよう。返り討ちに遭う可能性も高いし。

『潜水艦は片付いたわ！ 私はレ級の方に向かう』

「おっ？」

不穏過ぎる戦場でこれは良いニュース。

霰が来るならやつぱり2人で一気にヲ級を叩くのもありか？ いや、既に大破状態だから突撃は流石に無茶か？ でも霰に全部任せちゃうのはちよつと申し訳ないなあ。

取り敢えず今は待つだけで霰が来て状況が有利になるから、遠く離れた場所に陣取つ

たヲ級に最低限警戒しておけばいいかな？

「伊168、レ級はどうです？」

『知ってたけどバケモノね。ま、こっちは気にしなくて良いわ』

『ん。……ッ！』

その言葉に安心する。

なんか俺だけが乱戦の外でポツンとしてサボってる疑惑出そう。やっぱり霰と一緒にヲ級を叩くべきか？

魚雷でヲ級の方向にまだ沈んでいるであろう爆雷を爆発させながら考えていると、後ろから音がした。

霰が来たらしい。

「霰。あの辺に爆雷が沢山あるので気をつけてください。それで、ヲ級をどうしましょう……」

『どうしましょう……♪』

「え？」

振り返ると霰の頭に砲が突きつけられてる。

犯人は微笑みを浮かべて俺の方を見る。駆逐棲姫。

レ級とヲ級だけでキツかったからサツパリ忘れてた。

『通信したら撃つよ』

「逃げて……」

やべえ。

鈍色の執着心

ヤバい。

実にヤバい。

これは所謂アレだ。

14歳くらいに発症する病に罹った男子がつまらない授業中に妄想する『絶対にカッコイイワンシーン』だ。
役に立たない

正に今、授業中の教室に突然不審者が現れてクラスの誰かが捕まって人質になるんだ。

そして何故か自分は筆箱に入っていたカッターとかボールペンで不審者に立ち向かうんだ。

そして何故か不審者は銃を持っていて、それを自分は偶々避けることが出来て、その上人質も無事で不審者は不殺。

一気にクラスのヒーローだ。そんなの自分の気質じゃないのに……ってヤツだ。

「はあ……」

どうでもいい事に頭を使うことだけは一級品だな。

そんなクソな妄想と比べて、実際はどうだ？

不審者は超強敵駆逐棲姫で知り合いは絶体絶命敵。ついでに俺が誰かに助けを求めたら撃ち抜きますと宣言された。

何か変な行動を起こしても撃ち抜かれるのは間違いない。

俺の鈍色の脳細胞によって導き出された行動とは？

ハンズアップからの対話だ。

「……は、ハアイ駆逐棲姫さん。そんな物騒なモノ仕舞って、お話……しよ？」

『……』

俺たちは知的生命体なんだ。殺したり殺されたりなんて虫でもできる。なんならプラスマイナスの記号だつて殺し合うくらいだ。

へ、ハイ！ 春雨ちゃんにソツクリだねくあなた。

彼女の愛嬌はどこに行っちゃったの力ナク？

「あ、敵もソレは今ナシです。捨てて捨てて」

「……ん」

敵の足元から魚雷が沈んでいく。間を開けずに俺も装填が終わった魚雷を沈めていく。

こんな不自然な挙動の魚雷があつたら伊^イ168^ムも気付いてくれる……気付いて欲しい。

「さあ、お話ししましょうっ?」

『……』

全然目線が俺から離れない。

あつもしかして残りの投擲物^{黄色い缶}? やだなあこれは品種改良されたマンゴーだよ。

うっかり起爆しないようにぶら下げてるチェーンごと外して沈める。

まだ足りないの? いやいや盾は捨てないよ。殺傷力無いし。

人質取ってるってことは何か要求があるということ……だと思ふ。先制攻撃しちゃったのはこつちだからワンチャン見逃してくれて可能性もあるな。

いやでも、港湾棲姫と北方棲姫は反撃してこなかったけど今回はレ級の突撃を皮切りに普通に交戦したからそれは無いかな? 魚雷捨てたのは流石に早まったかもしれない。

まあまずは話し合いだ話し合ひ。

「……何が望みで?」

『貴女の身柄』

「……………ええ?」

ちよつと何言ってるか分からない。

だつて俺の身柄なんてあつてもどうするよ？

俺が深海棲艦に捕まったと皆んなに知られても精々が「じゃあ助けに行くか！」くらのモノだろうし……あつても提督なんかは変に拗らせてるっぽいし、結構混乱しそうじゃないか？

でもなんでそれを深海棲艦が知っているのか。

これが分からない。

まさか港湾棲姫と北方棲姫か？

実はやっぱり敵性の深海棲艦と繋がつてましたつてオチ……は無さそうなんだよなあ。

都会から戻つて来た漁師の息子さんの性癖をガツツリ歪めてオロオロするのはスパイのやる事とは思えないし……つて違う違う。

どういう訳か駆逐棲姫が俺を欲しがつてゐることだ。

趣味が悪いつてレベルじゃないけど、俺としては断る理由なんてほとんど無い。

死にぞこないの俺と多分まだ碌に被弾してない霰。

変な事して両方撃たれて両方沈むのはアホ過ぎる。せめて片方だけでも……つてなつたらもうダメそうなのを切り捨てるしかならないんだよなあ。

まあ立場が逆でも切り捨てるのは俺なだけだ。

「霰、ポジションチェンジします?」

取り敢えず霰に声をかけるだけかけておこう。

「ダメ。私はいいから皆で戻って……」

お? 良いのかそんな事言つて。自分のことを柵に上げてでも怒るぞ。

俺よりも有能な霰のことだから俺の思い浮かばないアイデア出せそう、と言うかもう思いついてそうだから取り敢えず霰を解放しようもアレコレ考えた結果だと言うのに……まさか構わず逃げろと言われるとは思わなかつた。

「駆逐棲姫、トレード成立ですので霰を渡してください」

『え? ……そつちが来るのが先。貴女が私のところまで来たら解放する』

「信用できない」

『……どうなつてもいいの?』

見せつけるかのように霰に砲を突きつけ直す駆逐棲姫。

やっぱりするんなら霰を解放してくれないか。

じゃあ仕方ないと、言われた通りに俺から駆逐棲姫に近づいていくと、近づくに連れて嬉しそうな雰囲気を漂わせていた。

……しつかり駆逐棲姫の要求に応えてる形になるな?

「待つて。それ以上は進まないで」

『黙ってて!』

うわ。砲を押し付けられた時にゴリッて聞こえた。めっちゃ痛そう。

そんなことを考えていたその時、視界の端でヲ級が動いた。

「なあく〜にやっつてんのよあなたたちはあく〜っ!」

『!?!』

突然聞こえてきた怒声の直後、駆逐棲姫が霰を盾にするかのように前に突き出した。

そして霰はと言うと、駆逐棲姫の砲が頭から離れた一瞬の隙を突いて拘束を振り解いて、俺の方に向かって来ていた。

『あっ………』

駆逐棲姫も呆然。映画のワンシーンみたいだ。

「すごい格好良かったです」

『『格好良かったです』じゃ無いわよもうっ! はあ……ま、待たせたわね!』

「待ってた」

「風雲、ナイスです」

なるほど霰は風雲の到着を知っていたのか。

やっぱり凄えよ。そりゃあ俺がわざわざ駆逐棲姫の要求に応えようとしたら止める

わな。

まあ通信出来なかった以上、霰の意図を察することが出来なかったんだから許して欲しい。

ああ、でも思い返すと霰が不自然な程多く瞬きしてたような気がする。

「……まさか瞬きでモールス信号を？」

「もつと自分を大事にして」

「返す言葉もございませぬ」

観察力の不足。いや、あの状況で気付くのは大分無理があると思う。

霰も霰で咄嗟の出来事に対しての対応力が高すぎる。

「それでどうするの？ 私たちだけでヲ級と駆逐棲姫の相手なんて正気の沙汰じゃない

ように思うんだけど」

「ですね。霰の判断に従いますよ」

どうせ俺よりも現実的かつ有効な手段を思いついてるに違いない。

本当に、霰みたくない有能と一緒に居ると自信無くすわ。

「じゃあ青葉さんたちと合流。ヲ級たちに追撃される前にレ級を片付ける」

「了解」

俺ならヲ級も駆逐棲姫もどうにか倒して一休みつて答えたね。……だから「意外と脳筋思考だよな」とか言われるようになったのか。

俺の高角砲は空っぽにしてたから装填中、霰と風雲がヲ級の艦載機をどうにかしてる間は盾に隠れてるしかないか。

守つて貰うということに無力感と情けなさを感じながらレ級との交戦地点に向かう。

しかし油断していた。

というよりは想定外だ。

なんでレ級みたいな戦闘狂の代名詞みたいなヤツじゃなくてさつきまで脅迫^{交渉}とかしてたような駆逐棲姫が風雲の放った魚雷に突っ込んでくるのか。

その消耗を覚悟してでも駆逐棲姫が向かう先には俺。

『逃がさない!』

狂気すら感じるその声に息を呑む。あつという間に俺の下に辿り着いた凄まじい形相の駆逐棲姫が魚雷を振りかぶっていた。ちよつと速すぎるんじゃない?

しかも魚雷を器用に4本も持つちゃってまあ……一本だけでも沈めるつてのに追加がヤバイ。まあ避けられないのが一番ヤバいんだけどね!

せめてもの抵抗で頭と顔は守ったけど、目を閉じてやって来たのはそこそこの衝撃と、直後にやってくる圧倒的な重さ。

「あつ……」

まるで水の中から何かに引っ張られてるような感覚と、水に入って冷たくなる足と体。

「ま、待って！」

咄嗟に跪もがくように上に向けて伸ばした手が何かを掴む事はなかった。

風雲（ふううん）ではない

ああ、どうして。

そんな思いばかりが頭の中で渦巻く。

『逃がさない！』

駆逐棲姫の執念としか思えない行動力。

私の砲撃と魚雷が全部命中したのに全く止まらずスチユワート目掛けて突っ込んでくる様子は、鬼気迫ると言うよりも最早絶望そのものだった。

目を背けたくなる現実を飲み込めない。

結果として、沈んでいく彼女をただ眺めていることしか出来なかった。

もつと速く合流していればこの結果は変わったのか。

もつと優秀な艦装で攻撃していたら駆逐棲姫を止める事は出来たのか。

あの時伸ばされた手を掴めていたら。

もし——

「風雲、手が止まってる！」

「つー…ごめんなさい！ ……てえつ！」

私の後悔は珍しく声を荒げた霰に止められた。

スチュワートが沈んだ直後に霰はイムヤに回収するように通信を入れたみただけで、イムヤが言うにはスチュワートが交戦地点を完璧過ぎるほど綺麗に分断してた所為で私たちの場所まで時間がかかるらしい。

少しでも早く助けたい今に限って、その完璧さを恨めしく思う。

「砲撃では艦載機狙って」

「分かったわ」

それに、スチュワートを助けるにあたって警戒するべきは駆逐棲姫だけじゃない。

ヲ級だって十分以上に脅威になる。飛ばしてる艦載機には爆雷を投下してくるものが多いので、それらを少しでも減らさないとイムヤがスチュワートを回収出来なくなってしまう。私たちだってそこらじゅうに爆雷をばら撒かれたら動き辛くて仕方ない。

でもやっぱり一番の問題は、スチュワートが沈んだ地点から殆ど動かずに回避行動に専念している駆逐棲姫。

しかもイムヤの存在を感知しているのか魚雷を放つてこない。

私の魚雷は回避に徹した駆逐棲姫にスルスルと避けられ、出来て当然だと言わんばかりに時間を稼がれる。

結局、イムヤから私たちの下に到着したと通信を貰うまで一回も魚雷を撃たせることは出来なかった。

ただ移動していただけ。

何の活躍も出来ていない。

良いところナシだなあ……なんて思いながら、胸の中に溜まったモヤモヤを振り払うように自分に喝を入れる。

『う……やっぱり気づかれてるわね』

「！ イムヤ、私が隙を作るわ」

イムヤの発言に対して、食い気味に言ってしまった。

隙を作る？ ……どうしよう。

やっぱり心の何処かで功績を上げようと焦ってたのかも。

「風雲？」

もう正直になろう。私は「お前のせいだ」と指を差されたくない。勿論そんなことは誰もやらないって分かってるけど、このままだと後悔で私が私を許せない。

それに、私は私の言葉を嘘にしたくない。

だからもうやるしかない。

「お返しよ駆逐棲姫。イムヤ、私に合わせて！」

絶対に魚雷を撃たせて見せる！

「はああああっ！」

『！』

私の突撃に気づいた駆逐棲姫が砲の照準を霰から私に向ける。霰が強いのは知ってるけど、私だって無視したら痛い目に合わせるくらいは出来るんだから！

砲撃なんて甘んじて受けてあげる。でも絶対に私に魚雷を撃ってもらおう。イムヤに對して魚雷は撃たせない！

「うあああああっ！」

どんどん近づいていく駆逐棲姫の顔。

1, 2回と撃ち込まれる砲に身体が揺れる。でも止まる訳にはいかない。

怖い。私も沈んだらどうしようかって今になって思い始めた。

でも次に見えたのは、魚雷を私目掛けて発射しようとする駆逐棲姫の姿。

『右に避ける！』

その通信を受けて反射的に右に曲がる。

左側の艦装が大きく破損したのが分かった。

『スチュワートを回収したわ！』

イムヤは無事にスチュワートを回収したみたい。ただ私は大破……でも沈んだりする様子はない。

つまり——私の勝ち。

「ふう……諦めなさい。彼女にはもう居場所があるのよ。貴女たち亡霊とは違うの」

『ッ……』

私の言葉に硬直した駆逐棲姫に砲撃を叩きこむと、先程まで路傍の石でも見るかのような視線にこれでもかかと殺意が込められた。

何かの琴線にでも触れちゃったのかなと思いつつ、流石にこれ以上こんな近距離で攻撃されたらマズいと思つて距離を取る。

「……え？」

何故か距離が取れた。攻撃もされなかった。

どういふことだと振り返ると、駆逐棲姫が霰の魚雷を避けている所だった。

「助けられちゃった……」

「すいません、遅くなりました！」

「あたしらの筆頭サマを沈めたのはアイツ？ ふくん……確かに生意気な顔してるじゃん」

そしてこのタイミングで青葉さんと北上さんが来た。

青葉さんはレ級の相手してみたいでボロボロになってるし、北上さんも私も大破。それでも流石に不利だと思ったのか、ヲ級と駆逐棲姫が逃げていく。

「結局逃げるくらいなら、最初から逃げてれば良いのに」

「追撃する」

「霰、気持ちは分かりますけど追撃は止めましょう。最優先はスチュワートさんの安否です」

「……ん」

「イムヤさん。まずはスチュワートさんを海から引き上げましょう」

『了解よ。艦装が重たくなってから気をつけてね』

青葉さんが指示を出して、イムヤがスチュワートを海中から引き上げた。

その他にも貰いものらしく大事にしていたレーダーと魚雷発射管、盾も回収したけど他の艦装は仕方がないからその場で破棄することになった。

艦装が外れて一番軽くなったスチュワートを受け取る。

ぐったりして力が入って無いから重たく感じる。徹夜明けで力尽きた秋雲で慣れるからそこまで苦では無いけど……違うのは目を覚まさない可能性があるということ。

すっかり冷たくなったスチュワートに触れていると、私から熱が奪われていくみたい

で……もしこのまま目が覚めなかったらどうしようという不安に押し潰されそうだった。

「前線の方は未だ交戦中ですか……」

「加勢できるのなんて霰くらいでしょ。あたしらはみんなボロボロだし、お先に戻らせてもらおうよ。ただでさえ時間が惜しい状況なのに大破でちよつと航行に影響出てる。その上荷物機装とか持ってるんだし」

『私も戻った方が良いと思うわ。これ以上何かあっても絶対に対応出来ないもの』
私もそう思う。

「私も駆逐棲姫が気分を変えて戻ってくる前に撤退した方が良いと思うわ」

窮鼠猫を囓むとも言うし、どうもスチュワートに執着して居るらしい駆逐棲姫が再び執念を宿して戻ってくる前に私たちもここから離れた方が良いと思い、撤退を提案した北上さんに賛成する。

それからはボロボロの艦装に鞭を撃ってホテルの方向に急いだ。

まともな速度が出ないから時間が掛かって、ホテルに到着する頃には真っ暗になっちゃったけど、スチュワートがベッドの上で明石さんに診て貰っているのを見て私は安

心した。

目が覚めたら提督に報告に行った青葉さんに真っ先に伝えに行こう。
青葉さんも物凄く心配してたし。

……何かを忘れているような？

「まあいいか」

σ スタート (かがみうつし)

「なあ、良いだろ?」

「良いだろって、何が?」

薄暗い部屋の中で男2人が会話をしている。

「何がってそりゃあ……俺が何の為に憲兵になったか分からねえのか?」

「提督は向いてないからって言ってなかった?」

会話の内容からしてそこそこ親しい間柄のようだ。

「その通り。お前も知ってると思うが俺は俺たちの同期の中で最も成績が良かった。当然、鹿島教官からは提督になりませんかって訊かれたよ」

「鹿島教官に薦められるくらいなら向いてないってことは無いと思うんだけど」

「ああ、多分俺はお前より上手に艦隊運用出来ると思う。だがそれじゃあダメなんだよ。……艦娘はみんな美人って言われているのは周知の事実だろう?」

憲兵と提督の、研修生時代の思い出についての会話が何の脈絡もなく別の話題にシフトした。

「まあ、そうだな」

「実際に艦娘を目当てに提督を志すヤツも居る。まあ不純な動機だけで提督になろうとしてるヤツはだいたい選考で落とされるらしいが……つとこんなことを言いたかったんじゃない。俺は艦娘なんてこれっぽっちも興味無いことだ」

そう言つて2人が腰掛けていた大きなベッドに聞き手側の男を優しく押し倒す男。雲行きがおかしくなってきた。

よく見たら押し倒された男は大湊の、我らが松田提督に似ているように見える。……如何にも乙女ゲームに出てきそうなレベルのイケメンに美化されているように見えるが。

「俺はお前のことを考えてたんだよ。ずっと前から」

「!? 冗談にしてはタチが悪いぞ」

何かを察して慌てる提督の上に、興奮した様子を隠そうともせずに男が跨り身動きを封じた。

「無駄な抵抗は止せ。 監査を拒否したなんて大本営に報告されたくは無いだろ? ……まあ、提督相手にこうやって強気に出られるって知った時から俺は憲兵になるって決めたんだよ」

そしてその男は徐に服を脱ぎ始めて鍛え抜かれた身体を露わにする。そしてそのまま……ああ、なんてことだ。

「……俺は一体何を見せられているんだ?」

これは夢に違いない。

「う〜ん…」

なんて悍^{おぞま}しい夢だったんだ……。

体調の悪い時に見る抽象的な悪夢よりよっぽど酷い。

前世で多少の心得を付けてなければ即死だった……。

微睡む意識の中でそんなことを考えていても触覚や聴覚等はバツチリ機能していて、様々な情報を俺にお届けしてくれる。

まずは横になっていること。感じる重さからして多分布団の中にいる。汗でじつとりしてる上にかなり暑い。

そして割と静かなこと。明石さんがアレコレ指示を飛ばしている声は聞こえるけど、なんか遠くに聞こえる。

瞼に遮られた暗さの中でアレコレ考える。

まだ夢の中なのかと思っただけど、身体を動かそうとする度に全身から肉離れのような強烈な痛みを感じて夢じゃないってことをなんとなく理解した。

ん？ おかしいな。

何故俺は海の底に居ない？

沈められた後に助けられたのはこの状況からして事実だと思っけど……どうして無事な人たちだけで撤退しなかったのか、コレガワカラナイ。いや、助かったんだから文句は言えないんだけど。

霰辺りは正確に状況を認識してすぐに撤退するように動きそうなんだけど……まさかそれを無理やり俺を助けるって方向に捻じ曲げたヤツが居るのか？ だとしたら酔狂過ぎないか？

そう思いながらも目を開けようと奮闘するも、瞼が重すぎて目を開けられず、なんかダメそうだったから助けを求めることにした。

「お。ん。っ、おっくい……」

「起きた!? 起きたー!!」

声を上げた瞬間、誰かが反応した。

そして俺の上に飛び乗って来た。

「あ。あ。あ。あ。あ。っ。!!」

超痛い！

喉から絶叫、意識も覚醒、痛みで開眼。今死にかけてた。

重さと痛みに負けず、ズルズルと緩慢に身体を起こすと胸元に時津風が居た。

夕立相手に鍛えたテクニックで頭を撫でると「わふ〜」とか言つて目を細めて満足気にしている。完全にワンコじゃん。

あとは『監視カメラの外で』というタイトルの明らかに腐敗の進んだ本が枕の近くに置かれていた。そりゃ悪夢も見るわ。

表紙にはやたら美化された提督？　ともう一人の男が互いに薄着で汗ばんでいる上に密着してる絵が。そしてオータムクラウドの文字。ふーん。

誰がコレをここに置いたのか分からないけど、取り敢えず大湊には人でなしが居るらしい。

「起きましたね。どこか変な所はありませんか？」

時津風タツクルで上がった絶叫を聞いたのか、明石さんとその他数人が部屋に入ってきた。

心配をかけたみたいで申し訳ない……そう思ったのも束の間だった。

「はい。〴〵心配を……ッ!？」

みんなの顔がおかしい。

心配そうな顔、嬉しそうな顔、安心したような顔、怒ってるような顔。

その顔を俺は知っている。だけど、何かが違う”。

具体的に何が違うと表現出来ない。だけどぼっと見で分かるくらいには違和感があつた。纏つてる雰囲気や表情には特におかしいところは無いのに……。

ただ、言いようがなく気持ち悪く感じた。

直後、何かが腹の底から迫り上がってくる感覚。

時津風を振り払い、明石さんを押し除け、痛む身体も気にせずトイレに駆け込んで嘔吐する。

「うろう……ヒツ!？」

吐瀉物が混ざつてカオスになったトイレの水の中に、何か蠢くものを見たような気がする。

アレは何なのかを確認しようと思つた頃には今まで感じたことが無い程の拒絶感からレバーを引いて流してしまつていた。

「ちよつと、大丈夫?」

「矢矧さん」

個室に鍵をかけてなかったせいで吐いてるところを見られてた。滅茶苦茶恥ずかしい。くつ、殺せ!

「ほら、早く戻つて明石に診て貰いなさい」

「済みません……」

キリっとした目の中に心配そうな雰囲気を滲ませた矢矧さんは全くの何時も通りだった。さつき感じた謎の違和感は悪夢のせいで頭が混乱してたからに違いない。

「その言葉をかける相手は私じゃないでしょう？」

スツと差し出された水で口を濯ぐ。

優しさが申し訳なくて心が痛かった。

その後は何事も無かったかのようにベッドに戻って明石さんから問診や触診を受け、取り敢えず経過観察と言われた。

ナニカサレルかと思っただけ、特に何もなく病院の様に淡々と進んでいった。公私はしっかり分けるみたいで安心した。

何があるか分からないから、大湊でしっかり調べるまで出撃は禁止の処置を受けた。

「まあ当然と言えば当然よね」

ベッドに横で林檎を切っている夕張さんに言われる。

俺もその判断は間違っていないと思う。

と言うか今気づいたけど外暗くね？

「そう言えば……同じ艦隊のメンバーは今どちらに？」

青葉さんを始めとして誰も見てない。

まさかとは思うけど、俺を助ける為に犠牲になったとかだけは止めて欲しい。

「なくんで他人の心配なんてしてるのよ。一番の、重！ 傷！ 者！ でしょうが！」

「でもんぐうつ!？」

目を三角にした夕張さんから林檎を口に突っ込まれた！ 喉こわれる！

「でもじゃない。まあ島風以外は無事みたいだから安心していいんじゃない？」

え、島風もやらかしたの？

「島風は何を？」

「魚雷に当たってノックアウトだって。当たらなければどうということはないなんて言ってるから……フラグは建てちゃ駄目ってお約束なのにね」

ちなみに目が覚めた途端にベッドから脱走したらしい。止まったら死ぬ病にでも罹ってそうだな。

サメかマグロに親戚居そう。

「青葉さんは提督に報告。北上さんは大井さんに攫われてつたし……風雲とイムヤは今頃ご飯かな？ 霰は寝てるよ」

みんな元気そうで安心した。

俺だつて身体は痛いけどもう元気だからジツと横になつてるなんて嫌だね。

そうだ、脱走しよう。

止まると死ぬ

夜中。

俺はベッドから抜け出していた。

明石さんからは『絶対安静です！』なんて言われたみたいで、見張り兼世話焼き担当の夕張さんが常時隣に居る状態からどうやって抜け出したかと言うと……

まずは明石さんが休む時間、深夜帯になるまで待つ。

幸いにして一般に売られてる湿布とは別物の高速修復剤入り湿布なるものを沢山貼られたお陰で異常な程スースーして全く眠れない。

これから寝ると言う明石さんにお休みの投げキッスをしてげんなりさせた後は、夕張さんとの会話で今期アニメの話題に触れて会話を盛り上げる。

公然の秘密と化した隠れオタクの夕張さん VS 前世の知識を持つ俺。この勝負（？）で俺が負けるなどあり得ん。

夕張さんの^{に同士アヒールを}テンションを上げて自主的に前期アニメの資料を取りに自室に戻らせる。こうすれば見張りは誰も居なくなる。

ね、簡単でしょ？

そして今は部屋から脱走する直前。

それまでの会話で今居る部屋の階層と夕張さんの部屋の階層は違うことを確認してある。

案の定廊下には誰も居なかった。

「……」

謎の達成感で言葉が出てこない。

脱走までの流れがあまりにも完璧だと自画自賛する。

「あら〜？ どこに行こうとしてるの？」

「ふえっ!？」

廊下の角から現れた陸奥さんに呼び止められてマヌケな声上がる。

そう言えば日本のホテルとは全然違う内部構造じゃん。

内心舌打ちしながら、陸奥さんの質問の答えを用意する為に頭を働かせる。

よく見たら手にお酒持つてる。もしかして酔ってる？

陸奥さんの進行方向に階段やエレベーターは無い。つまり部屋に戻る途中の可能性が高い。

目がとろんとしている。かなり眠そうだ。

長門さんの妹だから駆逐艦には甘い可能性。

なら——唸れ俺の演技力ウ!

「その、眠れなくって……提督のところに行こうかと」

微妙に恥ずかしそうに言う。顔がほんのり赤くなつてたら完璧だ。

「あらあら。悪い事聞いちゃったわね……それじゃあごゆっくり♪」

うん。俺の望んだ方向に勘違いしてくれたぞ。

でもやっぱり陸奥さん酔つてたのか。こんな深夜に提督が起きてると思うか？

まあ提督に用事が無いわけではないけど。

というわけで提督の部屋に向かっている。

勿論寂しいとかそんなのではない。

「レッツ猛抗議ってね」

夕張さん曰くみんなの雰囲気がびりびりしてて大分ヤバいらしい。だいたい俺のせい
なんだけれども。

だから思いっきり遊ばせてリフレッシュしてもらおうと考えている訳で、その為に
ち早く提督を説得して休みを勝ち取つてその知らせをもつて雰囲気や和らげる必要が
ある。決して世話を焼くことに執心の夕張さんから逃げて来た訳ではない。

提督の部屋の扉をノックしたら深夜なのに提督が出てきた。

マジかよ。ノックから出てくるまでの時間的に寝てないんじゃないか？

「……」

「……」

人を見てフリーズした失礼な提督をそのまま押し部屋の中に入る。

備え付けの机にはノートと紙が散乱していた。ベッドは全く乱れていない。なんだコイツ……仕事中毒か？

「絶対安静って言われなかった？」

その言葉を聞いて、今までズルズルと押していた提督をベッドに向かって突き飛ばす。あっけなくバランスを崩してポフツと音を立てて倒れ込んだ。

そして俺は提督が座つてた椅子に座る。

「大袈裟ですね」

身体がちよつとボロボロなだけだ。しかも実際に抜け出したくらいには元気だし頭も無事だ。頭はおかしいかもしれないけどデフォルトだからこれはセーフ。

「そう言われる人が大人しくしているとでも？」

川内さんに夜戦しろって誰も言わないのと同じだ。

「——とりあえず脅威は去ったんですし、ローテーションを組んで観光とか休暇を取らせないとダメだと思います」

その後、適当に世間話をした後に本題をブツ込んだ。

「その前に今回の反省会をした方が……」

まだ言うか。

机の上のノートを見る限り、俺たちのところ以外は特に被害出てないっぽいし、反省会なんて開いて時間を潰すなんて勿体ない。せつかくの海外旅行なのにホテルに閉じこもる必要なんてないしね。

「そんなのは大湊に戻ってからでも出来ます。他の皆に大湊でバカンスしろと？」

駆逐艦を筆頭にウキウキで旅行鞆をパンパンに膨らませてたのは知ってるだろうに……提督だつてちゃっかりそれっぽいシャツとか持つて来てるのは俺の洞察力の前ではバレバレだからな？

「昨日今日の出遅れを取り戻すように遊び尽くすのが一番です」

問題はローテーションで揉めそうなことと寝不足や食べすぎの人が出ること、財布の紐が緩んで素寒貧になる人が確実に現れること。

「でも君は」

「ん？」

俺の頭の中が既に遊ぶ気満々で、既に提督の説得に成功した場合の事ばかり考えてるのに目の前の提督はまだ気を遣う気にいるらしい。

流石にそこまでされてちよつとイライラしたから少し威圧して返答する。

考えてもみる。青い海、青い空、白い砂浜——そしてキャツキャウフする艦娘。うん……何とも思わないね。残念なことに目が肥えすぎてしまったらしい。

でも、海防艦とかが遊んでるのは見てて和むかもしれない。

絶対に誰かは砂浜を走って体を鍛えようとするだろうけど、それはそれだ。

「まあ、一回寝たらどうです？ きつと疲れてるんですよ」

「一番気疲れさせてくれたのによく言うよ」

「それは……」

それを言われちゃ俺に勝ち目はない。本当に済みませんでしたと平謝りするしかない。

何が何でも明日はみんなを遊ばせるよう、ついでに自分も楽しむように釘を刺してから提督の部屋を後にした。

「すみません。ナメツ〇星での激闘を見届けに行つたので……」

これが部屋に戻ってから、怒り心頭の夕張さんに放った言い訳である。

いやあく宇宙の冷蔵庫は強敵でしたね……流星に敵しいか？

「ふくん……感想は？」

「やはり龍ドラゴン○ボール龍ドラゴン○ボールは全てを解決する」

「やつぱり？」

さつすが夕張さん、話チヨが分ロイかるウゼ！

多少の制限があつたとしても3回は凄いやねって話だ。

「まあぶっちゃけると提督のところに行つてたんですけど……見せた方が早いですね」

スマホの大湊の艦娘専用のLINEのようなモノに明日からの休暇のローテーションを各自で話し合うようにつてメッセージを入れると、すぐに既読が沢山ついてメッセージが爆速で流れていく。

夕張さんも画面を食い入るように見ている。

だいたいこの反応は好意的なもので、それらの反応を見てしてやつたりつて感じになつた。

『で、絶対安静つて言われてたアンタは何やってんのよ』

「あつ」

痛いところを突いてくるメッセージが見えた。

これに便乗して俺を叩くメッセージが一気に増えた。けど、そのどれもが思いやりを

含んだものであることを俺は知っている。

『明日は一日中私が責任を持って甘やかすから安心して!』

「えっ……すぐ目の前に居るのになんで宣言をする必要があるんです?」

「もう逃げられないでしょ?」

ベッドに入って不貞寝した。

見える終わり

時間は昼前。

場所はビーチ。

天気は晴れ。痛いぐらいの日差しの下でも元気に燥ぐ艦娘の姿が目映る。

今日だけは潜らない潜水艦と化した伊400型の2人。

砂に身体を埋めて眠る加古さんと不知火と黒潮。

ビーチバレーを楽しむ人達。

浅瀬で水遊びをしている海防艦たち。

ガチ泳ぎしてるトレーニング中毒の人たち。

「おらーっ、提督！ 早くしろ〜！」

遠くから大東が提督を呼んでいる。

「うわ。あんな小さい子達を待たせるとか最低ですね」

「ああ……分かってるよ」

ビーチパラソルから提督が出ていった。提督の指定服と思われる白い服ではなく、
場所に合わせた格好をしている。

しかし待ちかねていた海防艦から即座にロックオンされ、お馴染み佐渡サマを筆頭の水鉄砲の集中砲水を受けて既にびしょびしょになっている。南無。

提督も空いた時間にちよくちよく鍛えているのは知ってるけど、遊びたい盛り of 海防艦と駆逐艦を複数相手にし続けるのは厳しい、というか子供の体力は無尽蔵だし艦娘なら尚更だろう。

しかも夜には戦艦や空母、重巡たちと街へ観光……そして甘い夜。

そんな感じの日程が数日続く。らしい。

「人気者は大変だねえ」

明後日くらいには過労で死んでるかもしれない。

散々連れ回されて振り回されて過労でぶっ倒れて、みんなに心配されて介護生活を送つたらもう2度とオーバーワークしなくなるに違いない。ソースは昨日今日で理解させられた俺。

そういう意味でなら一度ぶっ倒れてしまえと思う。

そうなたらもうそうなたで短期間とはいえ提督が居なくなるから色々やり易くなりそうだし。

そう考えながら昼食の準備を進めていく。

間宮さんと伊良湖さんが哨戒している人たちに弁当を届けて回ってるから、俺がサボ

ると昼食を食べられない人が出てくるからサボるにサボれない。考えたな畜生め。

「ちよつと、この葉っぱは何？」

「ただのシソです」

分けてもらった紫蘇^{シソ}を指さして夕張さんが言う。

何だよ、大麻やケシなんて持つてる訳ないじゃん。

「……その白い粉は？」

「高級砂糖です。食べると幸せになれると評判でした」

現地の専門店でおすすめされた逸品だ。

水に溶かして渡すとその場で棄てられた。

「ああ、勿体ない！」

高かったのに！ と悲痛な叫びを上げると、騙されてるんじゃないの!? と肩を揺すられた。

その場で紫蘇を噛んで砂糖を舐めてウケケなんて言ったらビンタされた。冗談が通じない。

それはさておき。

準備が終わったBBQをみんなに振る舞う。

焼き鳥に変なコンプレックスを抱いてる人が居ないから思いつき焼き鳥も焼いた。肉類の提供はなんと間宮さん。四次元ポケットよろしく、明らかに間宮さんの荷物より体積のある食材を譲ってくれた。どこに仕舞われてたのかはやはり謎のままだ。

各々が育てた肉を取り合い不人気の野菜類を押し付け合う面々にほっこりしていると、提督の視線に気がついた。

目が合ったのは一瞬だけとは言えまるで神通さんに睨まれた川内さんのような目、つまり爆発直前の爆弾を見るような目で俺を見ていたのが分かった。

そんな目で見られなきやいけない理由が分からない。

それにチラ見するくらいならガン見しやがれ気持ち悪い、と思う。

仕返しとばかりに俺が提督をガン見してから視線を全く合わせようとしなくなった。

どうでもいい特技の一つである『長時間瞬きをしない』を披露しながら提督に視線を送り続けたら根負けしたのか目を合わせてくれた。

「……」

しかし眉を八の字にして苦笑いをするだけの提督にプツンときた。

こんなにキレやすい性格だったかなあ？　なんて激情を渦巻かせつつもどこか冷静な部分で思考する。

まあなんだ……

全部曖昧な反応をする提督が悪い。

「うわっ!」

「ちよつとコレ借りていきますね」

提督の腕を掴んで強引に引っ張る。

楽しい昼食中に水を差した上にストレスをブチ撒けるようにキツイ口調になったのは申し訳ないと思った。あとで謝らないといけない。

「どこに向かうかだけ教えてくれないかな!？」

大分疲れたのか、殆ど抵抗もせずに腕を引かれる提督はそう言っていたけど、

「……」

どうせ着いたら分かるんだし、別に答えなくても良いやと言う精神に基づいて無視する。

ああ駄目だ。スツキリしない。

結局提督が色々と話しかけて来たけど全部無視して提督の部屋まで連行した。

何事かと、面白そうなものを見つけたような人は後ろに付いてきたけど、部屋に入つてこないようにさっさと鍵も閉めた。

「何か隠してますよね？」

そして開口一番、気になることを訊いた。

「……なんのことかな？」

間が空いた。これは絶対に何か隠してるね。

「なら、さっきの視線は何なんですか？ 人に向けるような視線じゃないと思いますが

？」

「……」

「艀装も見せて貰えないのは何ですか？ 被害状況だけ説明されても実物視ないと分からないんですけど。あとは夕張さん。夕張さんだつてゆつくり遊びたいでしょうに、なんでわざわざずっと見張りに付けてるんでしょうね？ 島風も同じくらいの被害を受けてるのに普通に過ごしてますよね？」

提督の緊張した視線。

艀装に触れらせて貰えない現状。

常に見張りが居る現状。

同程度の被害を受けた島風は普段通り。

俺だけが特別扱いだ。

今回の戦闘で沈んだ俺 // だけ// が。

そこから導き出される結論は——

「貴方は私を恐れている」

「そんなことは無い！」

語尾が荒くなつた。凶星だな。

「詳しく分かりませんが、私に知られると不都合なことですか？」

「不都合では、ない。だけどシヨックを受けるかもしれない」

「そうですか。じゃあ大丈夫ですね」

ほら話せと視線と雰囲気と態度で催促する。

俺、かなり凶太いからそうそうシヨックなんて受けんよ。今は苛立つてるから脳内麻

薬もキマってるし。

しばらく悩んだ提督が視線を合わせて口を開いた。

「沈んだ如月が鎮守府に帰って来たという記録がある」

提督の口から出た内容は確かに衝撃的な物だった。

『艦これ』^{キヤラロスト}って轟沈したら終わりじゃなかったのかよ。なんだよ深海棲艦になる可能

性って、オセロじゃねーんだぞ？

でも納得した。そりゃあ艤装には触らせないようにするし見張りも付ける訳だ。無意識的に味方を攻撃するとか恐ろし過ぎる。

でもそんなことはどうでもいい。いや、どうでも良くはないけど。

結論から言うと、一度沈んだ艦娘は深海棲艦になる可能性がある為、過去の事件を鑑みた結果雷撃処分になるらしい。

「では、私が皆さんと一緒に帰ることは無いんですね？」

出来れば知りたくなかった。

こんな確認もしたくなかった。

「……」

そりゃあ提督だって帰る直前までは言いたくなかっただろうよ。

末期癌で助からないから死ねって言うてるようなもんだ。俺が言わせただ。

「はつきり伝えてください。提督の口から」

喉から上手く言葉が出てこない。

申し訳なさと、終わりが見えてしまった悲しさで意外にも参ってたらしい。このまま今まで通り過ごせると思ってたんだけどなあ……。

「スチュワート。君を……雷撃処分とする。日本に帰るまでの間に行うから、そのつもりでいてくれ」

「了解しました」

はは、提督がみつともなく泣いてやがる。

頬を伝う涙の感覚から、俺も泣いてるんだけど。

「誰もやりたがらないでしょうね」

「当然だ」

「提督……ごめんなさい」

恐らく今までで一番素直に提督に謝れた。

どちらが何を言うでもなく、しばらく時間が流れた。

大分落ち着いてきたので、鼻を啜り声を出す。

「さあ、皆さんのところに戻りましょうか。遊べるうちに遊んでおかないと」

空元気のまま立ち上がり扉を開けると、何故か多くの人が居た。先頭にはいつもの記者然とした青葉さんの姿。

「司令官と2人きり……何をしていたのか青葉、気になりますっ！」

「離婚リコン（仮）カッコガチしました。ケツコン指輪は誰の手に移るのでしょうか!？」

「え？」

「「え？」」

部屋の中から提督のマヌケな声上がる。

目の前の艦娘たちも同じだ。

「沈むような船に提督は乗せられません！　そう判断しました。未練ですか？　ないです」

そう言うと、何人かの目がギラついた。

ふはは！　コレがたった一つの冴えたやり方。

既成事実ケツコン指輪を捨てる手放す。なんで気がつかなかったんだろう。

しばらくはこの発言にみんなでバタバタしてもらいたい。そんな狙いもある。

兎に角、提督には雷撃処分から意識を逸らしてもらいたい。お通夜みたいな雰囲気だけはゴメンだ。

……全部俺のせいなんだけどね！

光無き囁き

衝撃的な発表が私たちの間を駆け抜けてから数時間。

提督の部屋から出てきたスーちゃんと言葉に対する私たちの反応は3つ。

まずは提督に好意を持つてる人——金剛さん辺りを筆頭に『提督がフリーになつた』と内心喜んでる人たち。

きつと今夜辺りから熱烈なアタックを仕掛け始めるだろうけど、ラブコメなら私たちの見えないところでやって欲しい。私は今色事なんて気分じゃないし、提督も暫く引きずりそうだし……

それに、ドロドロの愛憎劇に巻き込まれるのはちよつと嫌かな。

次に無関心な人たち。青葉さんが面白おかしく広めたこともあって『また変なことしてる』くらいにしか思つてないと思う。

ある意味では1番幸せなのかもしれない。

そして私と明石、大淀さんの3人。

所謂『事情を知らされてる』メンバー。

本人に知られてしまった……って感じかな。本当に変な所で勤が良いんだから。

そんな私たちは昨日、提督から1つの指令を下された。

『秘密裏に雷撃処分を執り行うこと』

一つ言いたい。

私たちは黒い仕事担当の暗殺者集団じゃないんだけど！

勿論、聞かされた時はものすごく反対した。

私がデータを取って、大淀さんが分析して、明石がなんとかする。絶対にそうしてやるんだって提督に談判したけど、暗い顔で規則だって言われてからそうしようとする気も無くなった。

一番長く付き合ってた提督がそう言うのは、私たちが思ってる以上に苦渋の決断だったと直感で分かっちゃったからかもしれない。

私は雷撃処分の時までスーちゃんの監視。提督が言うには深海棲艦のような特徴が出るように変質していくらしい。今はまだ何か異常があるように感じないけど、いざとなったら止めなきやいけない。

明石はこの前の作戦の時に被害を受けたみんなの艦装の修理と並行してスーちゃんの艦装も修理してた。沈める為には海に出ないといけないから『沈める為に直すのは

なあ……』なんてボヤいてた。武装は無いから修理はすぐに終わってたけど、虚しいって言ってた。

大淀さんは雷撃処分についての調整をしていて、誰が雷撃処分をするかどうかで頭を悩ませてた。私は絶対にやりたくないって言ったけど、誰だってやりたくないに決まってるよね……。

もしかしたら轟沈したら雷撃処分という処置について、他所の鎮守府の子から話を聞いて知ってる人も居るかもしれないと思ったけど、明らかに近くで監視してる私と艦装との隔離をしてる明石に接触は無いから誰も知らないってことで良いのかな？

雷撃処分も、秘密裏に実行したとしても居なくなつた事実は変わらないから絶対にバレル。だから本当は雷撃処分するってみんなに周知した方が良いんじゃないのかって相談された。

言い方は凄く悪いけど、『沈んだ艦娘の末路』として反面教師にすればみんなが深海棲艦の攻撃に注意するようになるし……でもこんなのは方便だ。

「はあ」

スーちゃんもスーちゃんだよ。微妙に腫れた目であんなこと言っても、全然面白くないよ……。

ねえ、本当に雷撃処分の話はされたんだよね？

それなのになんで

「ナイスアタック加古さくん。Yeah！」

「お？ ……イエーイ！」

笑ってられるの？

自暴自棄になつてるとしか思えない。

見えて辛い。

「なんで沈んちゃったのよ……バカ」



あと一週間で地球が滅亡するなら何をしますか？

そんな問題があつたら

- ・ 家族と穏やかに過ごす
- ・ 好きな物を食べて好きなことをやる
- ・ 今まで出来なかつたことに挑戦してみる
- ・ なんかデカイ犯罪を犯してみる
- ・ 財団法人に全財産を寄付する

・どうせ滅亡なんてしないから寝る

こんな答えは出てくると思う。

だけど実際滅亡するのは俺一人だから後に残るような迷惑はかけられない。何かに挑戦するにも体がポンコツになってるから出来そうにないわ、大湊に居ないから色々融通が利かないわ、そもそも艤装に触らせてもらえないわで選択肢がほとんど無い。

「ナイスアタック加古さくん。Yeah!」

だから今は、砂浜で練り広げられてるビーチバレーを何となく眺めてるだけに留まっている。

やらなきやいけないことは色々あると思うけど、夕張さんからのマークが外れないから行動に移せない。

ケツコン（仮）はリコン（仮）ガチしましたっちは伝えだし、青葉さんが良い感じに広めてくれたから俺の口から出た出まかせは既成事実になった。

あとは誰かが提督への愛を迸らせて『夜戦（意味深）自主規制』するだろうから安心だ。俺のケツは守られた。

すると残った問題は、俺が抜けた後の各種お仕事のローテーション表の作成とか、ジョンストンとヘレナさんから貰った艤装のこととか、俺の自室のこととか。

遺書は一度書いてみたかったって興味もあつたけど……書き方とか形式とか分から

ないけど多分こういうことを書けばいいと思う。

夕張さんが寝てる間、深夜帯くらいしか時間が無いのが辛いところ。いくら全然眠くならないって言っても寝ないのはヤバイ。

兎に角、飛ぶ鳥跡を濁さずの精神で綺麗さっぱりさせてから雷撃処分を受けたいと俺は思ってる。

まあそれは それとして、雷撃処分までに遺書のようなメッセージを書き終わったらあとはただ沈められるだけ……いや待てよ？

1つ気になったから夕張さんに訊こうとしたら、不貞腐れたような顔のまま目を向けて来た。

凄く不機嫌そう。俺がビーチバレーの応援を始めてからずっとこんな感じだ。

「そもそも雷撃処分をする必要性はあるんですか？」

「待って。何を思いついたの!？」

「いえ別に」

わざわざ艦娘から沈められるくらいなら俺が沈むまで戦い続けた方がお得かなあつて思っただけだし。

別に普通に銃殺とかの人間的な殺し方をした時にどうなるか気になったとかじゃな

い。

「ちよつと、気になるじゃない」

「いえいえ、大したことじゃないので「務めを忘れるな」……は？ え、何か言いましたか？」

なんか聞こえたような気がする。

しかも頭の中に直接。電波でも受信したかな？ いやでも、あんな話されたばかりだからもしかするともしかするかもしれない。

「え？ いや大したことじゃなくても気になるものは気になるから。ほら、さつさと吐きなさい」

「いやそんな吐くだなんて……あつ」

待って。

なんか、意識が――



「あつ」

「え?」

今まで喋つてたスーちゃんが突然、虚空を見つめたまま動かなくなった。瞬きすらしてない。手を振つても反応しない。声を掛けても反応しない。

明らかに様子がおかしい。まさかこれがと思うと口元が引き締まる。

誰かに見られてたらどうしようかと思つて周りを見渡して、誰も見て無さそうだと判断してすぐに視線を戻す。

「星が、自由が呼んでる……」

「え?」

うわ言のように何かを呟いたと思つたらバキバキだつて言つてた体でスツと立ち上がった。

このまま何処かに行かせるとマズい。

そう思つた時には腕を引っ張つて転ばせていた。無意識のうちによくやつたぞ私つて褒めてあげたい。

動けないようにスーちゃんに跨り、周囲に対してのカモフラージュも兼ねて近くにあつた日焼け止めクリームを手繰り寄せる。

「……夕張さん」

ほっと一息ついているとスーちゃんが声を出した。砂に埋もれて聞き取り辛いけど、さっきの謎の眩きと違ってちゃんとした声だ。

「重たいです」

全力で頭を叩いた私は絶対に悪くない。



あと少し、あと少し待てばいい。そしたら……うふふ

波は治まる

あつという間だった。

あれからは意識を失うなんてことはなく、謎の幻聴も聞こえなかった。

深海棲艦も群を成して現れたりもしなかったから、つまるところ平和だった。

そんな中で何をしていたかつて？

大淀さんに『大湊で港湾棲姫とか鹵獲したことになつてるからそこに深海棲艦が1人増えても問題ないのでは？』って屁理屈を捏ねたりした。

明石さんに貰い物の艦装のネジ規格を日本のものに変えても良いか訊かれてダメと答えて涙目にした。

呆れる夕張さんの隣で提督と艦娘のランデブーを雪風の望遠鏡で覗き見て実況したりもしたし、深夜帯には少しづつ遺書のようなナニカを書き進めたりもした。

あとは日替わりで変わる面々をビーチパラソルの下から眺めてたり、連日のBBQに腹を壊したり、武勇伝を聞いて回ったりした。

まあ、忙しくも充実した時間を過ごしてた。

でも楽しい時間はいつだってあつという間だ。

雷撃処分当日の早朝、つまり今。

穏やかな時の流れを感じさせる風。

哀愁を感じさせる心地良い波の音。

最後の景色には勿体ないくらいだ。

薄い雲に隠れて柔らかい光を湛える朝日から目を離して振り返る。

そこには最後の最後まで見張りを続けた職務に忠実な夕張さんと、その隣には雷撃処分担当に選ばれたらしい長門さん。

……なんで？

アナタ雷撃なんて出来ないじやろがいつ！

しかも後ろにはその他大勢が見える。野次馬が多すぎないか？

てつきり雷撃処分担当に選ばれた誰かと海に出て、ひっそりと速やかに誰に知られるでもなく終わるものだと思っただけ？ 見た感じだとほぼ全員居るじゃないか

……

しかも、しかもだ。

駆逐艦と軽巡は分かる。

潜水艦と重巡も分かる。

でも長門さん含め戦艦と空母系と海防艦。これが分からない。

雷撃処分ならぬ砲撃処分にでもするつもりか？ そんなのただの標的艦じゃないか。流石にこの人数から一斉射撃されたら沈む云々の前に粉微塵になる自信があるね。

「お前はいつだつてそうだ」

そんなに俺を沈めたかったのかと、みんなの殺意の高さに戦慄してたら長門さんが口を開いたから目線を後ろの大勢から長門さんに移す。

「大事な事はすぐ隠して……私たちがこの件を聞いたのはついさっきだぞ？」
どういふことだと目線で訴えてくる。

「それはその……沈んだら雷撃処分という処置が存在するなんてことは知らないに越したことは無いでしょうし、雷撃処分ということは誰かに沈めてもらうってことになりません。すると沈めることになる誰が必要になりますけど、その人の心の傷になりたくなかつたから……ですかね」

ちよつと答えにくい質問だったけど、この場に及んで口が回る回る。

「馬鹿者ッ！」

だけど、喝を飛ばしてきた長門さん回答に納得しなかつたらしい。

「私たちは戦っているんだ。そして全く犠牲の無い戦いなんてものは存在しない。当然、苦しい時もあるだろうが……スチュワート、私たちは相談するに値しない程頼りな

かったのか？」

「うっ」

これはそんなことないって答えなきやいけない感じのヤツだし、実際そんな風に思ったことは一度もない。

だけど言われてみれば確かに、大事なことは自分で解決するか相談するとしても大淀さんくらいだった気がする。不満は専ら悪戯するか川内さん主催の夜戦に参加して駆逐級を叩いて解消してたし……あれ、俺って意外と薄情者？

「何も言わずに居なくなるなんてひどいじゃない！」

そんな声が聞こえた。

それに便乗して俺がダメなヤツだと言う声があちこちから聞こえてくる。

そんなにダメだダメだって言わなくても良いんじゃないかな？ いやでも、しみみりした空気から一転して『どきなさい！ 止めを刺すのはアタシよ！』とか言ってる人も出てきた。

なんかお祭り騒ぎっぽくなってきたな……流石にこれよりだったらしんみりした空気が良いかな。

「二つ。提督に伝えておいて欲しいことがあります」

この一週間で考えていた宣言を始めると騒がしくなってた外野が黙る。

「これから行われるのは雷撃処分……それが終われば私は深海棲艦の仲間入りです。しかし、海の上で再び出会うこともあるかもしれません。そうなった時は——勝負しましょう」

「「は？」」

爽やかな笑顔を意識して宣戦布告？ をしたら周りがポカンとした。

何かを言われる前に畳み掛けよう。

「深海棲艦の私にあっさり負けるほど弱いようなら、許しませんからね！」

これでよし。

あとは俺が深海棲艦になっても艦娘からは敵じゃなくて好敵手ライバルとして扱ってもらえるだろう。

「提督にもしつかりと伝えておこう。それと、その時が来ても私たちは負けんさ……絶対に。そうだろう!？」

「「お——っ！」」

「よし！ 戻ったら反省会だ。良いな!？」

「「お——っ！」」

そうだ。それで良い。

暗くならず、前向きに勝利の為に頑張る艦娘たち、と提督。

俺の知ってる『艦これ』もこんな感じだったな……。

そこに俺スチユワートは要らない。あるべき形に戻るんだ。

「最後になりますけど、メッセージを紙に残してあるので後で読んでおいてください。仕事の上で必要な事とかは大体書いてある筈です」

「分かった」

「……言いたいことは言いました。では、どうぞ」

長々としても嫌われそうだしそろそろ終わらせよう。ちょうど良い感じに「終わるんだな」って雰囲気になってるから今しかない。

「ふう〜っ……………スチユワート」

「はい」

長門さんの巨大な砲がゆっくりと向けられる。

不思議と怖くない。心が凄く穏やかだ。

無意識的に笑みが浮かぶ。

「また会おう」

結局コレ、砲撃処分じゃねーか！

視界が真っ白に染まり、暗転した。

「……終わったんだね」

「はい」

「何か言い残してたりしてなかったかい？」

「ええ、沢山残していききました」

まずは伝言です。と言う言葉がやけに遠くに聞こえる。

だけど、彼女からの伝言まで聞き逃すつもりは無かった。

「もし深海棲艦になって私たちの前に現れた時は勝負しましょう。と」

「それは……負けられないね」

負けず嫌いな彼女の事だ。軽く勝負だ、なんて言っておきながら簡単には勝ちを譲ってくれる筈もないだろう。少なくとも、今までの中で最も厳しい『演習』になりそうだ。

続きを聞けば、負け無様は許さないとまで言ってたんだとか。本当に厳しい。

「それと、提督にはこちらを……」

渡されたのは複数の封筒。

その中の一つは準備が良いのか蠟封までされている。何を想定していたのかイマイチ分からないけど、彼女のことなので変わってるなあくらいの感想しか出てこない。

「提督へ——

- ① コレを読むときは1人で読んでください。
- ② 誰にも言いふらさない
- ③ 上記が守れるなら読んでも良い。

書き方が分からないから簡潔に書こうと思う。

まずは、ごめんなさいってこと。

沈んだのは完全に油断だった。だから自分がこうなったことに提督の責任は無い。

でも、提督が幾ら完璧な指示を出したとしても、艦娘が油断や慢心をしていたら計画は破綻するということを覚えてもらえたら、沈んだ事実にも多少の意味が生まれるから自分としては嬉しい。

慢心は敵。良いね？

次に、スチュワートの秘密について。

一番気になってることじゃないかと予想してる。

前提条件として駆逐艦娘スチュワートは存在しない。

じゃあ大湊に一年以上居たスチュワートは何者だと思いかもしれない。
答えは 何者でもない。

おかしいかもしれないけど、適切な表現だと自分では思ってる。

強いて言うなら、コレを書いているスチュワートの中身は外見とは全く別。 ついでに言うなら今まで猫を被ってたから本性も全く別。

もつとガツツリカミングアウトするなら、自分は別の世界の人間だ。

・・・冗談だと思おう？ そんなことは無い。

まあ、簡単に説明するなら、違法建造された艦娘が何かの手違いで前世の記憶を持ちちゃったって感じがイメージとして近いと思う。

生まれはスラバヤ。 初期の所属は無し。

この辺は大本営とかが情報持つてるだろうから、調べたら分かると思う。
残念だったな。 提督の最初のケツコン指輪は台無しだよ。

最後に、これからについて

自分の部屋は好きにして、どうぞ。

でも艀装は貰い物だから出来るだけ返品した方が良いと思う。

盾とかは専属の妖精さんが管理しちゃってるから、ノータッチで。

最後の最後に一言：楽しかったぜ。
名前の無い誰かより
『

8章 〈幕間①〉

・ Vacation Memories

「榛名さんが名残惜しそうに提督と別れました。僅かに伸ばされた手から伺えるは想いの大きさ、と言ったところでしようか？」

「確かに、あそこまで司令を慕ってたのは意外だったわね。何時も金剛お姉様を立ててるから気が付かなかったわ」

「それはそれは……名優ですなぁ」

双眼鏡の先では離れて行く提督の背中を見つめ続ける榛名さん。

大和撫子然とした雰囲気からはちよつと想像でできない積極的なアプローチが見所だった。いつの間にか隣に居た霧島さんも困惑している。

「では私はこれで。良い土産話になりました」

「お姉様にヨロシク伝えておいてください」

霧島さんが去る。

土産話って言っても十中八九金剛さんにだらうな。なんか金剛さんを応援してる風

だったし。いやでも榛名さんを弄るネタになったという線もある。

まあ俺としては金剛さんだろうが榛名さんだろうが他の誰かだろうが、提督が俺以外の誰かとくっつけば良いなので霧島さんが金剛さんと榛名さんのどちらかを応援しようが構わない。

それはそれとして、提督が動いたのなら移動しないといけない。

提督だつて艦娘と買い物や観光であつちへ行つたりこつちへ行つたり。それをバれないように距離を保つたまま追い駆けるスリルはやっぱ堪らないね。

それにさっきの榛名さんもそうだったけど、浮かれて普段とかけ離れた様子の人を見られるのは最高だ。青葉さんじゃないけど、見ちゃいましたあつて感じ。

「ねえ、まだやるの?」

監視の夕張さんもしっかり隣に居る。始めた時より微妙に寡やっれてるようにも見えな
いでもない。おかしいな? 女性にとって恋の話題は必須栄養素だと思つてただけ
ど。

「勿論。提督のスケジュールはデートに次ぐデートでギツチギチなのは確認済みなの
で」

「うわあ……」

夕張さんがドン引きしている。俺だつてあそこまでギリギリのスケジュールは見たことが無い。例えるならゲームのとかの好感度稼ぎで一分一秒が惜しいとかそんなレベル。

あまりにも可哀想だったから10秒でチャージ出来るゼリーを机の上にくつつか置いておいた。

寝起きのコーヒープレイクのあとは連続デート……言葉にするとヤバいな？

実際に朝早くから阿賀野さんと観光スポットへ行き、蒼龍さんとシヨツピングモールで買い物、榛名さんとレストランで昼食と、とんでもないスケジュールをこなしている。それでいながら良い感じの雰囲気を作りつつ時間の管理も完璧ときた。提督はバケモノか？

「ああつ、マズい！」

提督がタクシーを捕まえた。

流石にこうなったらガイドブックも意味を為さない。名所は知ってても何処に行くかなんて書かれてないのだ。

「ねえ、もう良いんじゃない？」

「まだです！」

折角ここまでやったんだ。諦めて溜まるか。

「そら、タクシーゲツトだぜ！」

『Chasing that taxi!』

『OK』

目の前に止まったタクシーに転がりこむように乗車しめ叫ぶように言う。

運転手のノリが良くて助かった。

あとアメリカ語が通じて助かった。

「ふう……よしー！」

俺たちの覗き見はこれからだ！

引き摺り込まれるように車に乗せられた夕張さんの目からみるみるうちに光が失われていくのを俺は知らない。

・徒に刃を立てる

長門さんの前に居た彼女が居なくなつてから、あちこちから鼻を噉るような音が聞こえてくる。

でも不思議ね。私の心は自分でもビツクリするくらい落ち着いてるのよ。

特段ショックを受けるでもなく、海面を見つめて涙する駆逐艦や海防艦の子達を宥めながら、浮かぶ思いはただ一つ。

絶対に許さないから♪

1番の理由は天龍ちゃんを傷付けたこと。

正確には、天龍ちゃんの心を傷付けたことかしら。

戻つてから「オレが交代したばかりに……」なんて落ち込む天龍ちゃんは珍しくて、いつも通りに揶揄ってみたりしたけどずっとウジウジしてるから何があつたのか詳しく聞いたの。

戻つてから謝つた時に「天龍さんは悪くないですよ」って呑気に言われたらしくて、その時の顔が引き攣つてたのが気にかかつてしようがないって言つてたのよ。

聞いた時はあくあつて思つたわね。

普段だつたらオカルト染みた勘の良さで「そうですよ。何で止めてくれなかつたんですか？」って軽口を叩いた後に適当に挑発して天龍ちゃんと下らない勝負で決着を付け

て終わるんでしようけど……

あと、顔が引き攣つてたのは天龍ちゃんの謝り方があまりにも迫真過ぎてちよつと引いてるだけだと思うのよねえ。若しくは肩を揺すられた時に激痛が走ったのかしら？ 怒鳴りつけたいのに我慢してるって感じじゃないと思うのよね。

それに、真面目な話題で彼女が提督以外に対して怒ってるのを見たことが無いもの。ちよつと彼女のことを知らなかったわね。

いずれにしても、冗談だろうと責められたかった天龍ちゃんと全く怒る気の無い彼女が噛み合わなかったわね。

でもその時に限って察しの悪かった彼女が悪いわ。

怒ってる理由の2番目は勝手に居なくなつたこと。

恋敵としては勝手に居なくなつてくれたこの状況は願ったり叶ったりって感じなのだけれど、自分から土俵から降りて行ったように感じるのが気に入らないわね。

余裕な態度が崩れないのもあつて勝ち逃げされたみたいでちよつとだけ、そうちよつとだけイライラしちゃう。

あとは単純に、1番張り合いのある子が居なくなつちよつたらつまらないじゃない？ 私だって提督に一目惚れしちゃつてる手前、他のライバルたちみたいに彼女という最

大の障害が居なくなつたことには喜んでたりするのよ？

でもそれは違うんじゃないかなあつても思つちゃうの。

譲られた。そう思うだけで提督の隣という場所の価値が下がるように感じちゃうから不思議よねえ。

最大の障害を越えたかつたのであつて、避けて進みたかつた訳じゃないもの。

どうせ振り向かせるなら、私が提督を自分の物にしたつていう達成感とか支配感だつてついでに味わいたいじゃない？

あとはそうねえ……負け犬の遠吠えみたいに啼いて貰えばちよつとは面白いかしら
ゝ。

そう言えば。

「深海棲艦になつたら勝負しましょう。だつたかしら？ それはそれは面白いこと言うわよねえ」

周りがギョツとする。

いけない。言葉に出てみたいね。

「あらゝ。そんなに驚かなくても良いんじゃない？ あの子に思う存分お仕置きする良い機会だと思わないのかしら？」

「……確かにそうね。あの言葉は提督へのメッセージだったんだし、私たち艦娘は私刑を執行しても問題ないわよね」

「深海棲艦になると噂で聞いたのだけれど、それなら咎められる理由が無くなるのでむしろ好都合ではないかしら？」

私の一言から波紋が広がるように意気消沈していた雰囲気霧散していく。長門さんの発破での空元氣と違うところは、それぞれが自分の為に頑張ろうとしてるってことかしら？

「二」 確かに 「二」

みんなが頷く。

愛されてるわね。

「二」 絶対にはっ倒す 「二」

皆の心が1つになったわ。感動的じゃない？

今から既に魚雷がウズウズしちやってるし、また会った時は全弾発射するつもり。

当然、他の子たちからも下される愛と怒りと正義の鉄槌も甘んじて受け止めてくれるわよね？

「づいづい……」



8章 〔幕間②〕

・小さな大戦艦

空母棲鬼率いる深海棲艦の大群は謎の潜水艦、集積地棲姫、戦艦棲姫と比べて拠点ホテルから近い場所に位置していた。

その為早くから主に空母同士の艦載機大戦が始まった。

敵艦隊の首領は空母棲鬼。紛れもない強敵だ。

「……もう決着か？ 呆気ないな」

しかし大湊の空母たちは熟練だった。

他所の鎮守府よりも建造からの日数が経っていないので経験は浅いが、繰り返される演習によって艦載機を操る技量は引けを取らないレベルにまで成長していた。

つまり、空母棲鬼を警戒して多くの空母を投入した提督は過剰なまでに空母を編成してしまったことになる。そしてその分早く山場が過ぎ去り、あつという間に敵性の艦載機は姿を消した。

そして、艦隊の後方では――

「敵の艦載機は粗方片付けたわ。残った敵の処理をお願いできる？」

「任せておけ。峯雲が来ているから安全な場所で戦闘が終わるまで休憩していると良い」

雲龍と武蔵が話をしていた。

峯雲が居るといふ情報に、雲龍の後ろに居た空母たちが色めき立つ。

「峯雲が居るの？ なら妖精さんも居るわね。艦載機も修理してもらおうかしら」

「えっ峯雲来てるの？ ラッキー！」

「ちよつと早いけどおやつにしようかな」

敵性の艦載機を片付けるという一仕事を終えた空母たちの頭は、峯雲が齎すであろう憩いの時間のことでいっぱいだった。

しかし峯雲の癒しは中毒性が高く、用法用量を守らないが故に峯雲を母と認識する人まで出たのは別の話——

「じゃあ遠慮なく休ませて貰うわ」

「待て、二人にはまだ働いてもらおうぞ」

「そんな……」

中にはしれつと混ざって休憩しようとする伊勢と日向の姿もあったが、武蔵に肩を掴

まれて頂垂れていた。ちなみに最上と三隈は見逃されている。

「艦載機が無くなった今、あとは砲雷撃戦だけだ。ここまでお膳立てしてもらった以上、中途半端な勝利は認められんぞ！」

空母が退き、それ以外の艦種の出番になっても勝ちはもちろんだからと流れ試合のようになつて弛んだ空気を武蔵が引き締める。

喝を入れる武蔵の剣幕に飛び上がって我先へと最前線に向かつていく駆逐艦娘の中で一人、様子が少し違うのが一人居た。

「んふ〜」

駆逐艦が持つには大き過ぎる砲を撫でる清霜である。その視線はテキパキと指示を飛ばす武蔵から離れない。

まるで適性距離は長距離じくじだと言わんばかりの態度だ。

「清霜、航空戦艦を指ささないか？ 今なら特別な瑞雲をやろう」

「えっ、くれるの!?! 戦艦たるもの艦載機の一つや二つくらい……え？ 航空戦艦？」

戦艦の言葉を餌に悪魔的囁きをする日向の手には瑞雲。

航空戦艦と言う言葉に引つかかるものはあるけれど、それでも瑞雲を受け取ろうとし

た清霜に待ったがかかる。

「待て日向。清霜、まずは戦艦になるんだらう？」

「うん！ いっぱい戦果を挙げて、いっぱい改装してもらおう！ そうやって一歩ずつ戦艦になっていくんだ！」

「ああ、いい心がけだ」

そう返しながらも『駆逐艦がどう改装したら戦艦になるかは分からないが……目標に向かつて努力する姿勢こそ大事な物だろう』と考えている武蔵。口に出さないのは武士の情けかもしれない。

それでも、自分に懐いている妹分が盗られるようでちよつと嫌だった武蔵は清霜の考えを修正した。

「あくあ、日向振られちゃったね」

「むう……だが、瑞雲はいいぞ。最高だ」

「そんなに言うなら加賀と艀装を交換してもらえ。……そろそろ誰かしらが接敵するだらう。私たちも準備しよう」

戦艦が砲撃を始めてからしばらく経った。

残りの敵は艦載機の大半を失っても尚戦闘意欲を失わずに砲撃を続けながら逃げる空母棲鬼と、追い詰めたと思ったら現れた複数の戦艦レ級。

無視して戦闘を続行した場合に被害が激増すると判断した武蔵が駆逐艦を後方に下げ、重巡と戦艦が壁になるように指示を出した。

「ん？ くそ、弾切れか」

前線の中の一番後ろ、所謂最終防衛ラインのような位置から砲撃を続けていた武蔵が顔を顰めた。

自身の砲撃に自惚れる訳では無いにしろ、それなりに効果のある援護だと思っていた武蔵は、無いものは仕方ないと、装填を待つ時間をどうしようか考え始めて——自分の方を向いている清霜を見つけた。

「その砲で戦果を挙げると意気込んでなかったか？」

「そうだった！ 見てて武蔵さん！」

今気づいた！ といった反応をして砲を構えて……否、振り回されるような清霜。狙いを定めることはおろか、まともに持ち上げることすら儘ならないようだ。

それを見て仕方ないなと溜息を吐いた武蔵は、清霜が構える砲を支える。

「戦艦の砲は重いから、駆逐艦の小さい砲と同じように構えるのは無理だ。身体づくりと訓練を怠るなよ」

「分かった！」

「さて、よおく狙うんだ」

「！ 今だあ!!」

放たれた特大の砲弾はレ級の頭部に吸い込まれた。

そして清霜は、大湊鎮守府の駆逐艦娘の中で初めて戦艦レ級を倒したとして一目置かれるようになる。

艦装を手に入れ、将来へのヒントを手に入れ、機会に恵まれ、チャンスをも物にして少ないけれど華々しい戦果を挙げた。

こうして清霜は夢への第一歩を踏み出した。

・反転と不屈の意思

『ウアアアアアアアアアア！』

深海棲艦特有の異物感あふれる、化け物という表現がピッタリな艦装が大きく吼えて

私の方を向きました。気持ち悪い口から漏れる光から目が離せません。

私には戦艦のような重厚な装甲はありません。

攻撃を避ける駆逐艦のような機動力もありません。

砲撃を無視できる潜水艦のような特殊性もありません。

戦艦棲姫の攻撃が当たれば一溜りも無いでしょう。

ですが私は、ここから退くことはありません。

例え、戦況を仕切りなおすために艦隊は一時撤退の指令が出ていたとしても。

何故なら、後ろには運悪く動力部中枢に被弾してしまった扶桑さんが居るからです！

「ダメよ御蔵ちゃん……私は良いから逃げて」

「できませんー！」

自分を奮い立たせる為に。叫ぶように意思を伝えます。

本当は今すぐに逃げたいです。でも、でも……

こんな時に引いては海防艦の名折れ！

艦隊の主力、作戦の要たる戦艦を守るなら！

「こういつた時の……その為の海防艦です！」

『これで終わりだ！』

目を瞑り衝撃を覚悟します。

でも、思ったような衝撃は何時まで経ってもやって来なくて、恐る恐る目を開けたら誰かが戦艦棲姫と私の間に立っていました。

「え？」

『なんだと？』

「ふむ……悪くない砲撃だな」

戦艦の砲撃を受けたとは思えないほどケロリとした若葉さんが居ました。

どうして砲も魚雷も無い、まさしく手ぶらの状態で若葉さんがやって来たのかは分かりませんが、今も砲撃を受け止め続けている以上、何かしらの秘密はある筈です。

「殿は引き受ける」

「御蔵さん。扶桑さんを連れて早く撤退してください」

それに、隣に来ていた神通さんはきつと無駄な人員配置をしないでしよう。

お二人を信じて明らかに普段よりもスピードの出ていない扶桑さんの手を引きながら後退します。

「申し訳ありません……すぐに戻ってきますね」

「心配しなくとも信念が揺らがない限り決して斃れん。安心しろ」

「ズ武運を！」

——それから暫くの間、若葉と神通は殿を勤め上げた。

「もつと撃つて来たらどうだ？」

『なんなんだお前は……』

何度砲撃を喰らおうが立ち上がる若葉は戦艦棲姫さえも慄かせた。

服がボロボロになろうが決して笑みを絶やさず、ギラギラと輝き続けるその眼が拍車をかけていたのは間違いない。

「んっ……ふう。流石に多いな」

「ですが着実に数は減らせています。」

若葉が攻撃を引きつけ、生まれた隙に神通が攻撃を加える。

たった2人の駆逐艦娘と軽巡洋艦娘は、この上ないコンビネーションの下に大量の深海棲艦を相手に善戦出来ていた。

その結果——

『ええい鬱陶しい！ さっさと水底へと沈んでいけ！』

「それは無理だ」

『な、ぐあぁッ！』

鬱憤が溜まりに溜まった戦艦棲姫が何度目かになる全霊の攻撃を加えようとした時、神通のものよりも数段威力の高い砲撃が戦艦棲姫に命中した。

「戻って来ないと思ったら……殿とは何だったのか」

追撃の阻止だけではなく何故反転攻勢を仕掛けているんだ……しかもたつた2人で。と嘆く長門の言葉に神通は顔を赤らめさせた。若葉は何故か既に赤くなっている。

艦載機を速やかに撃墜したのは神通の手際であるのは間違いない（若葉が攻撃手段を持たない以上自明の理）が、扶桑の艦装が応急修理を終え、もう何体か出現した戦艦棲姫を撃破するまでの時間を稼ぎ続けたのは若葉の手柄であることも疑いようのない事実だった。

そうして、完璧が過ぎて文句が出る殿を務めた2人は長門によってMVPに推薦されたが、詳細を聞いた多くの駆逐艦娘は「アレは真似できない」と揃えて首を横に振った。



8章 〱幕間③〱

・ 荒廃の使者

サングラス越しに見える景色は輝いてる。

燦然と輝く太陽は……流石に眩し過ぎてちよつと鬱陶しいけど、まあ悪くはない。

誰もが気持ちよさそうに日向ぼっこしててピクリともしないけど、それはここが安心できる場所だつて証拠だろう。

『……』

近くに置いてた火龍果ドラゴンフルーツを半分に切つて中身をスプーンで掬う。

『あく……ん、美味しい』

深海の水でキンキンに冷やされたソレは、日差しで若干火照っていた身体に染みわたる。

さつき食べたマンゴーも美味かつたし、人間も悪い面ばかりじゃないなど若干見直す。

『次はマンゴスチン……あれ？』

おかしい。間違いなくさつきまで手元にあったトロピカルフルーツが籠ごと無くなっていてる。

小鬼達には手を出さなつてキツク言っておいた筈なんだけど……

『……美味しい』

は？

危うく湧き出した殺意の下に集団リンチの刑に処そうかと思つたけど理性が仕事をした。

フルーツを籠ごと持ち出したのは駆逐棲姫。今まで見なかった顔だけど姫級の実力者なのは間違いない。後ろにも配下に空母やああ、ヤツまで居る。

まあ……騒ぎを起こさえない間は持て成そうか。

『ねえ、貴女の話聞かせてよ』

話しかけられたと思つたら内容が突飛だ。

もしかしてコイツ不思議ちゃんか？

まあいい。それにしても私の話か。

『仕方ないな、面白い話ではないが——』

ふと思えば返せば長い道のりだったと思う。

私は、随分前にこの島にやってきて拠点にした。

当時はゴミだらけの汚い島だったけど、独りでゴミを片付けたり資源せこせこ集めたりして少しずつ快適にしていった。

ある程度島がキレイになって資源が溜まって来た頃、私が居るとどうやって認知したのか輸送艦が寄り始めて、今度は防衛のことにも気を遣うようになった。

最初に対策したのは戦艦の問題児だった。嵐のようにやって来ては折角溜めた資源を根こそぎ奪っていくようなヤツは招かれざる客に他ならなかった。

だから、輸送艦に資源と艦載機のトレードを持ちかけた。砲台小鬼も連れてきてもらった。

確実に追い払えるようになるまで我慢に我慢を重ねた。

ヤツが初めて私の前から資源を奪うことなく退いていった時は、いつの間にか増えた頼もしい仲間たちと共に喜びを分かち合った。

だけど、私は問題児を撃退しただけでは安心できなかつた。

次に対処しないとイケないのは艦娘だった。

独自に仕入れた情報では、私以外の陸上型のヤツらは艦娘共の対地兵器……ロケット

弾や上陸用艦艇にコテンパンにしてやられるらしい。

それを知った私は、島を丸ごと改造した。

資源を安全に蓄えておけるように地下を用意した。

上陸用艦艇とやらの対策として砲台小鬼も沢山連れて来てもらった。

そして、そもそも攻められないようにヤシの木を育てて普通の島に見えるように偽装している。

今では立派なりゾートだ。

輸送艦の他にも駆逐、軽巡、重巡、空母、戦艦、潜水艦……色んなヤツらが来る。

昨日と一昨日は戦艦棲姫と空母棲鬼も来たし、間違いなくこの辺りで一番の憩いの場所になっていると確信できる。

誰もが足を運んで一休みできる場所の提供——私自身、こうして振り返らない限り気付かなかつた意外な内面が有ったんだな。

『まあそれはそれとして、これからも少しずつ資材を増やしてまだまだ発展させていくつもりだ』

『ふうん……貴女は人間についてどう思ってるの?』

話し終えると今度は人間について訊いてきた。

人間か……

『ソレ^{フルーツ}とか、良い物は生み出してるとし、悪い面ばかりじゃないんじゃないの？ 抹殺？

そんなの過激派が勝手にやってくれば良いと思ってるよ。ああでも、海を汚すのだけは許さない。それよりあんたはどなのさ』

私の考えを述べた上で逆に尋ねると、分からないとだけ答えた。

でも『色んな考え方があって良いのね？』と訊かれたから、そりやそうだろうって言うてやった。

『全員が同じ目標に向かって全力だったらその集団は確かに強力だろう。でも、多様性が無いから生き残れないとは思うね』

『そう。ありがとう……じゃあ、私たちは行くわ』

そう言うて離れて行く駆逐棲姫の背中に、お前の目標は何だと問いかけた。

『艦娘の中に絶対に沈めたい人が居るの』

そう答えた時の駆逐棲姫の顔は、さっきまで浮かべていた仏頂面ではなく、まるで艦娘を軒並み沈めた後の夢を語る戦艦棲姫のような顔だった。

『……そうか、頑張れよ』

ささやかな激励を送ると、駆逐棲姫が配下を引き連れて去っていった。

ああ、畜生！

私が何をしたって言うんだ！

『ふざけやがって……』

怒髪天を衝く、怒りのあまり頭を掻き毟る。

まさか、まさか夜にゆつくり星空を眺めていたら哨戒に出ていた駆逐艦が軒並みやられた上に私たちの居る島に砲撃が飛んでくるなんて思うだろうか。

『許さん……』

お陰様で平和だった島が大騒ぎだ。

鎮めた上で、警戒を厳にするように指示するのだから一苦労した。

あとは夜のうちに周囲のフリーの深海棲艦を集めて貰おう。

よし。

どこからでも掛かって来い艦娘共め。

対地攻撃は対策した。艦載機や戦艦が幾ら来ようが、私自慢の要塞を崩すことは出来ないと言え。

……そう思っていた。

『Shit! 沿岸からの援護砲撃が激し過ぎるネー!』

『申し訳ありません。艦載機を軒並み墮とされてしまいました……この屈辱、忘れませ
んわ』

『監視してる時は暗くて良く解らなかつたけど、深海棲艦多いねーアハハ……気が付か
なかつたよ』

戦っている前線のメンバーの通信を受けた大淀の顔色は悪い。

戦艦も嫌がるような援護砲撃があるせいでまともに近寄れず、艦載機は軒並み墮とさ
れ、深海棲艦の数自体が想定よりも随分多い。

幸いにして過剰に近づきさえしなければ被害は少なくできるものの、それでは目標の
集積地棲姫の撃破までに時間が掛かってしまう。

戦闘が長期化すればするほど資材に余裕のある敵が有利になっていくのも面倒なポ
イントだ。

『潜水艦は片付けたよー! 海中からの援護も任せて!』

一時撤退も視野に入れるべきかどうか悩んでいた大淀の下に、伊14からの通信が

入った。

潜水艦が居なくなったことで出来るようになったことは何かを考えた大淀は、横で小さくなっていた文月に声を掛けた。

「文月さん、潜水艦が片付いたそうですよ！」

「ふええ、凄い対策されちゃってるう〜……へ、そうなの？　じゃあ何時でも行けるよ〜」

先程までは陸上に砲台小鬼が多数居るといふ状況を見て出来ることが無いと首を横に振った文月は、新しく潜水艦が居なくなったという情報に顔を輝かせた。

「みんな準備は良い？　あ、コレあげるね〜」

文月が持ち込んでいた艀装は多いが、種類は上陸用舟艇と特型内火艇のみ。その内特型内火艇の一つに乗っていた妖精さんにスチュワートから受け取っていた焼夷手榴弾を手渡した。

「それじゃあ出撃い！」

文月の号令の下、特型内火艇が水中に沈んでいった。

「あとは待つだけだよ〜」

一仕事終わったとばかりに笑う文月は至っていつも通りの笑顔を浮かべていた。

大淀が文月の言葉を信頼して一時的に戦線を下げたから暫く経った頃。

島の一部で爆発が起きたと思つたら派手に燃え始めた。恐らく砲撃音や深海棲艦が上げる悲鳴や雄叫びも絶えず聞こえてくる。

「……」

何が起こつたのかと啞然とする艦娘たち。

どうしたら内火艇1つ2つでこうなるんだと思う大淀。

誰もが無言の中、文月だけが言葉を発した。

「陸戦隊も出撃〜！」

その言葉が聞こえてきたのは蜂が巢を守るように、島を守ろうと艦娘から注意が逸れた瞬間だった。

お世辞にも大きいと言えない艦装から展開された小型の舟艇には武装した妖精さんが搭乗している。

全員がそれからまた暫く待っていたら、島を守っていた多くの深海棲艦が散り散りに

逃げて行つた。

残党とも言えるような駆逐級や軽巡が迫ってくる光景に、誰もが正気を取り戻した。

「……」

戦闘が終わり集積地棲姫を確認に向かった一行が見たものは、燃やされて酸化し黒くなった砂浜と大量の瓦礫。燃料が燃えた独特の臭いと多くの深海棲艦の残骸だけだった。



1章 　　〈幕間②〉

・時間と孤独に侵されて

▼
私は沈んでしまいました。

魚雷に被弾したのが致命的だったみたいです。

海底で目が覚めた時は慌てて酸素を求めたけれど、沈んでしまった影響なのか全然苦しくなくて、水を吸って水を吐いてを意味もなく繰り返しました。

海の上に戻ろうと藻掻きましたが、もの凄く重たくなってちつとも動かせなくて、外そうにも引つかかってしまったのか壊れてしまったのか、錆び付いてしまったのか、いくら触っても外れなくて。

幸いにもあまり水深のある場所じゃなかったもので、どうしようかと混乱する頭を落ち着ける為にも、海面を眺めました。

近くにまだ艦隊が居るのなら見つけて欲しいです。

しかし誰かが見つけてくれることはなく、何回か水底で夜を過ごしました。

誰かが隣に居る訳でも無くて、お腹が空かないからご飯も要らない。呼吸すら必要ない。運が悪い事に通信機はダメになってるみたいなので助けも呼べません。

やる事と言ったら、眠たくなる度にこれは夢だつて思い込んで、目を覚ましては目の前に広がる光景に絶望して、涙を流すことくらい。

このまま心まで艤装と一緒に錆び付いていくのかな……

そう落ち込んでいたら視界に潜水力級が現れました。

『ぎゃあー！』

『……』

驚いて砲を構えようとしても全く持ち上がらなくて、叫んだ時に口から泡ではなく声が出て、海中なのに喋れるということに気が付きました。

そして当の潜水力級はというと、普段から私たちに向けて発射してた筈の魚雷を大事そうに抱えて、おっかなびっくりといった様子で私の方を見つめてます。

……沈んだから攻撃してこないの？

そんな疑問を持った私も突然現れた力級にビックリしただけで、よく見て見ると何故か脅威敵だとは思えなかったから見て見ないふりをしました。

そして1つ思いついたことがあったので、ダメ元で潜水力級に話しかけました。

『あの……』

『！』

『もしよろしければ、その魚雷で終わりに……ああ……』

「してくれませんか？」という言葉を紡ぐ前に逃げられてしまいました。

艦装の魚雷は綺麗さっぱり無く撃ち尽くしたなってるし、砲は信じられない辛い重たくて持ち上げられません。仮に持ち上げられても水の中だから火薬は湿気ってるどころじゃなさそうだから……持つてても意味が無さそうです。

今の私はただ海底に縛り付けられている状態です。

自分で何も出来ないなら雷撃処分を、せめて敵の手で。

だからと言つても本当にさつきみたいに大人しく終わりにして欲しいかと聞かれたらそんなことはありません。

『帰りたい……帰りたいよお……』

夕立姉さんのマフラーをぎゅっと抱き締める。

鎮守府の皆や司令官の顔が浮かんでは消える。

『皆と一緒に居たい。独りは嫌……』

せめてお話の出来る誰かが居ればなど思つて、直後に何てことを考えてるんだと首を振る。

“自分が寂しいから誰かも同じように沈んで居れば”

なんて恐ろしい発想でしょうか。

でも……

『海底は、寒いです……』

ぼんやりと海面を眺めるようになってからどれだけ経ったことでしょうか。

間違いない単位は日じゃなくて月、もしかしたら半年、いや1年以上……？

経過日数毎に外した砲の上に砂利のような小さな石を並べたりもしました。砂利の数が600を超えて、手の届く場所にそれっぽいのがなくなつてからは砂を積み上げるような真似が途端に馬鹿馬鹿しくなつたので止めました。

随分前には搜索とか来ないかな？　なんて思つてみたりもしましたけど、そういえばここは日本近海じゃないから期待は出来そうに無いかなあと自嘲交じりに振り返ることも一度や二度ではありません。

軍艦時代のような大きな大きさなら兎も角、途轍もなく広大な海から自分1人を見つけるのは簡単じゃないことくらい分かつてます。

深海棲艦の脅威を加味しなくてもコレなのだから、深海棲艦に気を割きながらの搜索

に出ようなんて提案なんて到底出ないであろうことも。

『……』

ふと、近くに落ちていたマフラーに目を配る。

藻に侵食され過ぎてて根本的などころから変質、変色しているように見えます。腕を前に出して海中に漂う自分の髪を梳く。

遠い記憶にある水死体の様に真つ青……病的なまでに白くなった腕と、同じように海に色が溶けてしまったみたいに真つ白になった髪。

『変わったっちゃったね』

今もこうして自分自我があることは果たして幸運なのか不運なのかよく分かりません。

全く動かさない足の感覚が無くなったのはいつから？

司令官や皆の顔の輪郭がぼやけ始めたのはいつから？

いつから狂うことに救いを見出し望むようになった？

『海底こゝろは何も変わらないよ……』

海底を寒いと感じなくなったのはいつから？

どれだけの時間が流れただろう？

やる事なんて無くて、出来ることと言ったら辺りを見回して呆ける事か海面を見上げて呆けること、目を瞑って靄のかかった過去に思いを馳せるだけ。

ようやく、自分の考え事には意味が無いと気が付いた。

今頃は別の私春雨が建造されて頑張ってることだろう。

鎮守府の皆は別の私春雨と楽しくやっているだろう。

きつと司令官は別の私春雨に笑顔を向けているんだろう。

『……』

どうせ誰にも聞こえないんだつたら幾らでも私の好きなようにに呪詛でも吐いてやろう。

どうせ誰の記憶にも残ってないならいつそ深海棲艦のように振舞って記録に残されるのも悪くない。

……私春雨はこんなことを考えるような艦娘だったっけ？ きつと違った筈だ。

ではどんな艦娘だったっけ？ ……忘れてしまった。

永い時間を掛けて少しずつ湧き出していた怒り、恨み、辛み、嫉み、妬み。

宛先が分からず溜められていたこれらの感情の矛先が艦娘——かつての仲間たちに向けられるようになってるのが自分自身でも感じられる。

でも、仕方ないよね？

誰も私を終わらせてくれなかったんだから。

何度同じ思考を繰り返しただろう？ そう思っていた時に遠くの方から聞きなれない音が聞こえた。

酷く新鮮に感じた音の方向に目を向けると、海面に光と影が1つずつ見えて、その光がなんとなく艦娘つてことが分かった。

そして影がイ級で、どうやら海上で交戦しているらしい。

最初は長い間隣人だったイ級を応援しようかと思っただけ、何故か艦娘であろう光から目を離せない。

艦娘に対してはさつきまでアレコレ考えていたようにベツトリと黒い感情がこびり付いていた筈なのに。

さつきと沈んでしまえと思っていたのに。

私と同じ目に遭ってしまえと思っていたのに。

その筈なのに。

なのに……。

『暖かい……』

海の上の太陽とはまた違う光から目を逸らせない。

冷え切っていた心、身体に染み渡るような心地良い暖かさを感じる。

さつきまで抱いていた艦娘に対する黒い感情なんて、この感覚に比べたらどれだけ小さくつまらないことだったのか。

そうこうしている内に交戦地点は真上まで来ていた。駆逐イ級相手に結構時間を掛けてるから艦娘の方はまだまだ弱いんだろう。……ほら、魚雷を外した。

そして外れた魚雷は勢いを失くして近くに降って来た。

『……』

一時期は自決するために切望して止まなかった魚雷が今、手の中にある。

『……ここから離れられる?』

直感的にそう感じた。

そして何も考えずに重りのようになっていた艦装に魚雷を叩きつける。

躊躇いなんて無かった。

海底に縛りつけられる生活に突然の終わりが到来した。

浮遊感に気持ち悪くなりながら、海面に進もうとする。

春雨私の艦装は海底に捨ててきた筈なのに、いつの間にか無くなった足の部分がに艦装があつた。

あつた。

海上に出て、忘れかけていた太陽の眩しさに思わず目を眩ませる。

風、波、水平線、雲。これら全てが懐かしく感じた。

後ろ姿を見た感じだと見たことない子だった。

こうして見ると意外と憶えてたんだなあと内心ビツクリしながらも、観察する。

なんと言おうかすごく眩しかった。暖かく感じた。

彼女から感じる暖かさは記憶にあるものとそっくりでそう、まるで——

『司令官?』

そう思った時に彼女は前進しようとしていた。

待つて! 置いていかないで!

私を独りにしないで!

寒いのはもう嫌!

だから——肩を掴んだ。

『行かせは………しない………よっ!』

沈めたら一緒に居られるよね?



幽霊船

帰還、仕事、未練

飛行機を乗り継いで日本へ、大湊へ帰ってきた。

休暇のようなそうでもなかったような、楽しむ為にもの淒く忙しいスケジュールを熟していた日々が終わり、見慣れた風景が目に入ったことでいつもの日常が戻ってきたんだと思うと少しホツとする。

警備所を超えて敷地の中に入ると、他所から警備の任務で来てもらっていた艦娘たちと留守を買って出た妖精さんたちが出迎えてくれた。

他所の艦娘たちの代表として報告してくれた横須賀鎮守府の霧島によると、特筆すべきことは無かったらしい。

ただ、捕虜の扱いが緩いのではないかと指摘された。

一瞬何のことだと思ってしまったけど、そう言えば港湾棲姫と北方棲姫は一応捕虜ということになってるんだったか。頻りにあの島から遊びに来るものだからすっかり大湊の一員として馴染んでしまっている。

自分たちの居ない間、やはりと言うべきか北方棲姫はじつとしていられなかったらし

い。一応他所の艦娘たちが来ると注意を……待って、何で自分は深海棲艦に優しくしているんだろう？

いや止そう。向こうもトラブルを起こそうという意図は無いのは分かっているし、艦娘たちも仲良くしている上にわざわざ連れてくる子まで居る以上今更だ。

霧島からの報告が終わると、今度は妖精さんたちが自分の帰りを待っていたと主張してきた。

一月近くも警備府から離れている間にまた想像力を掻き立てられることがあったんだらうか、申請書と書かれた紙を沢山持っている。

恐らく新しい艦娘が大湊に増えることになるだろうと思う。もしくは新艦装の提案や強化案だらうか？ とにかく今は、不定期に行われるという『魔改造フェス』と呼ばれる資源の無駄遣いが起こらないことを心から願うしかない。

艦娘たちを自室に戻らせて、自分も荷物を片付ける。

明後日からは通常業務が始まるけど、今日と明日くらいはゆっくりしたい。

しかしそうも言ってもらえないのは『提督』としての辛いところだと思う。

さつき大まかな報告は受けたと言っても詳細は紙面に纏めてあるだろうからその確認。大本営からもきつと細々とした連絡は来てるだろうし、一日だけとは言っても先延

ばしにしていると痛い目に遭うのは想像に難くない。

あとは妖精さんから各種設備の点検もやって貰っていたからその報告も受けないといけない。

それに警備に来てもらっている艦娘たちや警備所の職員さん、近隣の住民の方々との交流だつて疎かには出来ない。

「……何から手を着ければ良いんだろうね」

こんな時に彼女が居ればと思わずには居られない。

「間宮さんと買い出しに行くついでに警備所の方にお土産を渡してきます。提督から何か渡す物があれば一緒に渡しますが……ああそれと、時間があつたらコレに目を通しておいてください。各設備や備品の点検結果だそうです」

なんて言いながら書類を渡してくるんだろうなと思うと、普段から彼女に助けられていたことに改めて気が付いた。

「やっぱり自分の荷物は後回しかな」

まずはお土産を渡しに行くべきだろうと、バッグの中から出した衣類などをクロゼットのの中に押し込める。どうせ普段は使わないから暇な時間を見つけて少しずつ整理すればいい。

彼女の荷物を部屋に残して、警備所に向かい始めた。

「つまらない物ですが、お土産です」

「ご丁寧にもありがとうございます」

挨拶やお礼、当たり触りの無い世間話の後にお土産を渡した。

取り敢えずこれでよし。と警備所を出ようとした時、掛けられた一言に身体が固まった。

「今回はスチュワートさんじゃないんですね」

今までお土産などを渡していたのはほぼ毎回彼女で、何かしら客人が来た時その日の秘書艦の子の「案内してきます！」という言葉に甘えていた。

つまり自分は警備所に何かしらの用事で訪れたことが殆ど無い。だからそう訊いてきた職員さんはきつと悪くない。

でも今は。

今だけはその話題に触れて欲しくなかった。

忘れないにしても折り返いがついてない今は。

「……色々あるんです」

言葉に出して悔しくなった。

ぐつと我慢できたから良いものの本当は、何も知らない癖にと掴みかかりたかった。

子供の痲癩みたいだなと思うけど、最早顔も見たくなかった。

ではこれでと素つ気ない言葉をかけて、行き場のない感情に蓋をしながら警備所を後にする。

暫くは警備所に近寄りたくも無いと思った。

足音を荒くしたまま彼女の荷物を部屋まで運ぼうとして彼女の部屋の前まで来た時、アンティークな木製の扉が出迎えてくれた。

しかしドアノブを捻つてもガチガチという音がするばかりで一向に回らない。どうやら鍵が掛かっているらしい。

そう言えば彼女は自室を妖精さんから改装してもらっていたんだっただか。

入ったことがあるなんて話もほとんど聞かないが故に、入ったことがある極一部が内装を自慢げに語っていたことを思い出した。

当然自分も当然入ったことは無いけど、だからこそ少しワクワクしてしまう。

「……」

しかし入る為の鍵は恐らく彼女の鞆の中。

だからと言って鞆を漁るのは流石にデリカシーが……と頭を抱えなくなった時に声

が掛けられた。

『探し物はコレですか?』

「!?!」

突然声が聞こえたと思ったら、彼女専属だと妖精さんの間でも有名になりつつあった妖精さんが持つていたバッグの上に座っていた。その手には鍵を持っている。

「それは……の?」

『……』

頷いた。合ってるらしい。

差し出されたこれまたアンティークな鍵を受け取ってドアノブを捻る。

そして彼女の部屋に入った。

コーヒーの香りが微かに漂う、落ち着いた雰囲気の良いキレイな部屋だと思った。木製のテーブルや椅子、コーヒーを淹れるような器具が並んでいるシステムキッチンとまるで狭いカフェの様にも思える。1人部屋にしてはかなり広い部屋だ。

「あれ?」

「REST LOOM」と書かれた個室まであるのに、布団やベッドの類が見つからない。

何と言うか、この部屋はまるで誰に入られても問題ない部屋のように感じられた。普通の家で例えるとまるでリビングキッチンのような……。

『「ちらをどうぞ」』

妖精さんは椅子に座って彼女の部屋を見回していた自分に、小さな箱を渡してきた。受け取ってみると間違いない。自分が彼女にあげたもの指輪だった。

『一度も身に着けて無いそうです』

「え……」

少し、いやかなりシヨックな内容が妖精さんから告げられる。

曰く、普段から彼女は『提督しじふんは提督しじふんを慕う艦娘とくつつ付くのが一番』と言ってたんだとか。

それはそれで、自分は彼女から慕われてないということになるけど……ここ最近の艦娘たちとのデートを思い出して想像してみると、どうもスチュワートが彼女たちのように接してくると考えられない。

一歩近づけば一歩離れる。

二歩近づけば二歩離れる。

三歩近づけば牽制される。

思い返してみると、彼女とは薄い壁で隔たれたような付き合い方しかしてない。

彼女がいつも言っていたビジネスライクのようだった。

「ああ、成る程」

最初から叶わなかったのか……

「ケツコン指輪には、艦娘をちよつとだけ強くしてくれる効果があるのです。『戦艦のよ
うな戦術の要になる方に着けさせて艦隊を勝利に導くのが提督の仕事だろうに……』と
も言っていましたよ」

妖精さんから知らなかった指輪の秘密と共に、目の前の妖精さんだから知ってる彼女
が零した愚痴を話された。

如何にも彼女らしい考え方だと思った。

大事な事は絶対に感情よりも利益を優先する辺りが特に。

「それに、スチュワートさんは沈んでしまいましたでしたが消えてしまった訳ではありません。
次に会った時は今度は『勝負』するのでしよう？」

頷いて続きを促す。

「恐らく深海棲艦となるであろうスチュワートさんですが、倒しても沈めずにあの島に
居る深海棲艦のように扱えば良いとは思いませんか？」

「なっ!？」

とんでもない提案に目を見開く。

確かに、かつての如月の話は再度沈めたところで毎回話が終わってしまった。

もう一度建造されたのか、海から艦娘として戻って来たのかは分からないけど、自分は彼女が建造されるとはどうしても思えなかった。

だからこそ、ならいつそ深海棲艦のまままで良いのではないかという妖精さんの提案には目から鱗が落ちる思いだった。

「少しでも勝率を上げるために、ソレ指輪は誰かに渡してしまった方が良いのではないですか？」

「……それも、そうだね」

実はかなり負けず嫌いな彼女が勝負しましようなんて言うくらいだ。

そう簡単には勝たせてはくれないだろうと思っている。

こう考えてしまった時点で、彼女に対して相当執着しているんだなあと自覚した。だけど、妖精さんの話を聞いて沈んでいた心に火が付いたようだった。

「ありがとう。お陰でスッキリしたよ」

そう言つて席を立つ。

彼女との勝負に絶対に負けない為にも、やらないといけないことは沢山ある。

そう、休んでいる暇は無いだ。

沈黙、情報、天秤

退屈とは無縁だった。

「ここで大胆な隠し味！ ……待って！ どうして持ち去るのお!?」

「連日のお菓子パーティーは太るから止めるって？ 少しくらいは愛嬌だよ!」

「ご主人様！ 今日は何んとスチュワートにメイド服を『ぬるぼ』 ガッ！ あれ？ 意

外とこのノリに着いてくる……?」

個性的な人たちが居て楽しかった。

「最近各地から人が来るようになって賑やかになったと、みんな喜んでました」

「おやくまんだ買い出しだべが？ いつもこつたらほぼご鼻屑なところもの〜」

「いつもお土産ありがとうございます。——マトリョーシカですか……響さん、ロシアは楽しかったですか？」

“ 前 “ では分からなかった人付き合ひも楽しかった。

「天城さん、何で空母は競うように私を大破させようとするんですか？ ——中々撃破されない上に実戦形式だから艦装のテストや実力を測るのに丁度いい？ そんな……」
『そしたら夕立が「誰が相手でもパーティーする」って言うからさ、何かの隠語だと思った

わけ。……待てとお座りを覚えさせる？ そんなことしたら嘔まれちゃうよ』

「今日は子の日か……初春に胃腸薬を渡しに行かねば」

非日常と日常が曖昧になって、何もかもが楽しかった。

「また会おう」

その言葉を最後にゆっくりと身体が後ろに傾いて

景色が黒く染まる——

まるで寝起きのような感覚を伴って意識が覚醒した。

波打つ水面を見上げていることから海中に居ることは間違いないと瞬間的に理解して、起きあがろうとしたところで異常を感じた。

何か腰の部分がやけに重たい。

艀装が妖精さんパワーを失って鉄の塊と化したならしょうがないと思いつながら艀装を外そうと腰へ手を伸ばすと、変な感触の物に触れた。

何事かと視線を下げると、駆逐棲姫が腰をガツチリ掴んで腹に顔を埋めていた。
なんで？

あまりにも予想を超えているからか声が出ない。

だけど状況は待つてはくれず、俺が起きたことを察知した駆逐棲姫が顔を上げたことで目が合ってしまった。

『……』

ここでフリーズした俺に対して駆逐棲姫は俊敏に起き上がり、今度は胸にハグをしてきた。

だけど纏ってる雰囲気絞め落としてやるって感じのソレじゃなくて、まるでお気に入りのぬいぐるみを離さないようにしている子供みたいだから意味が分からない。

そして『もう離さない』なんて耳元で囁いてくる。何を言ってるかは分かる。でも頭が理解を諦め耳が飾りと化し、右から左へと聞き流すもんだから何を言ってるか分からない。

「孟・ハナサナイって誰だよ」なんて思考を放棄するのが精一杯だった。

これが海中での駆逐棲姫とのファーストコンタクト。
大体1週間くらい前だったと思う。

『はい、どうぞ』

『……』

渡されたのは頭を吹き飛ばされた魚。

まあ鱗と内臓さえどうにかすれば食べられないことはないだろうと思いつながら受け取ると、腹の辺りからウネウネしたのが飛び出しているのが見えた。

コレを食えと？ 多分俺より先に寄生虫の餌になつてゐるぞこの魚。

なんてことだ、もう食べられないゾ♡

受け取つた魚は駆逐棲姫が目を離した隙に足元の砂に埋めた。

これならそこら辺の子供が作るツヤツヤした泥団子の方がまだ食欲を唆る。食べられないのは変わらないけど。

そんなことを続けたのがこの1週間だった。

現状をどうにかしないといけない。

そう思い立つたのが今。

当然だけどころな生活はゴメンだから逃げようとした。

1度目は暗くなつてからそつと逃げたけど追いつかれてボコボコにされて、2度目は海底をコソコソしながら進んでいたら気絶させられた上でこれ以上逃げられないように鎖で岩と繋がられた。

しかも、2度も逃げた前科があるからか駆逐棲姫の隙が明らかに減つた。

今も俺のことをジッと見張っている。

これは3度目の正直以前の問題じゃないか？

『ねえ、何か喋ってよ』

何回か言われたセリフだけど、何も言うことは無いとばかりに無視する。

駆逐棲姫の意図が読めないし、得体の知れない不気味さがあるから正直会話もしたくないっていう本音もある。

『寂しいの……』

すると急に、今までの生活で初めて出て来た駆逐棲姫のパソナルのサムシングが飛び出してきた。

これは何かしらのヒントを得られると思い、興味があるように視線だけを向けつつも無言を貫く。

頼む。もう少し現状打開に繋がる情報を出してくれ！

その願いは叶えられ、駆逐棲姫の独白が始まった。

——結論から言おうと。

目の前に居るのは艦娘である。

誰が何と言おうと艦娘である！

『……帰ろう』

ガシつと肩を掴んで宣言する。

『え？ ……ええーっ!?!』

ちよつと間が悪くて可哀想な目にあつた艦娘の話を大人しく聞いてた筈の俺がいきなりそう言つてきたのを理解した駆逐棲姫、もとい春雨がキョトンとした後に大声を上げた。

『喋れたの?』

『人のことを何だと』

震える指先で俺を指しながら凄く失礼なことを言われた。

コミュ障だつて随分と改善されたんだし当然喋るくらい出来る。

『じゃあ何で今まで喋つてくれなかつたの?』

『話を聞くまでは駆逐棲姫だと思つてたから』

それについては本当に申し訳ないと謝つたら、どこか責めるような雰囲気が一転して落ち込んでしまった。

『その、本当にごめんなさい。私の我儘で沈めてしまつて……』

そう謝る春雨は、見た目こそ病的に真っ白になつても根本的な所までは変わつて無いように感じられる。ずっと独りで海底に置き去りにされてもこうやって罪悪感を覚え

るとか俺には絶対には出来ない。

この春雨の存在は「深海棲艦とは何か」と言う根本的な問題の解決に繋がるかもしれないなんて打算半分、同情半分で春雨の手を引いて進む。

それに、約束を守る為に大湊に戻りたい俺と独りは嫌だと言う春雨の目的も一致している。

『気にしなくていいよ』『それよりも、皆と一緒に居たいなら早く帰ろうよ』と慰めながら進んでいると、突然引いていた手を振り払われた。

『これ以上はダメ』

『何が?』

『私だって帰りたい。でも、もうこっち側の一員なの』

『ほう』

新しい情報が出てきた。

“ こっち側 ” について訊くと、どうやら深海棲艦には中枢棲姫による支配体制があるらしく、この春雨もその一員としてこの辺の海域担当にさせられたんだとか。

……コレ、特ダネじゃないか?

大湊ウチに居る港湾棲姫はずつと逃亡生活を送ってたらしいので “ こっち側 ” になつてない。だから深海棲艦の目的とかについて詳しく知らないのも無理はないと考

えると中々良い線行つてると思えてくる。

何だろう、春雨を叩けば叩くほど情報が出てくるような気がしてならない。

ベストは大湊に連れて行くことなんだけど、 “ こっち側 ” の事情で今は無理そうだし……。

だつたら俺が帰らなきや良いだけだよなあ？

『じゃあ一緒に居ようか』

そう言いながら引き返して春雨の手を取る。

おお、そんな驚いた顔をしなくても……

『いいの?』

『その中枢棲姫とやらに「どうして人間を襲うんですか」くらいは訊いても良いでしょ』
マジの戦闘民族だつたら救いようが無いけど、そうじゃなかったら何かしら打てる手はある筈だ。

それに、仮に中枢棲姫に接触しないにしても他にも言い訳は沢山あるんだからな。あんな話を聞いて置いて置いていける精神はしてないとか、大湊に帰るにしても早すぎるとなんか白けるとか。

『あとは……そう。これからよろしくね』

『……はい!』

名前、艤装、想像

『じゃあ今度は俺が話をする番だな』

『オレ?』

『そうそう。天龍さんとか木曾さんも「俺」って言うじゃん? 沈んだのも何かの機会と
いうことで色々とデビューしても良いかなあつて』

『そうなの?』

そうだよ……つて嘘に決まってるだろ。

本音としては色々と聞いちゃったし隠し事はしたくないなあつて感じだから緩い理
由なのは本当だけど。

それはそうと——

『なんで嬉しそうに口元を動かすの?』

『い、いいえ! 似合ってますよ、はい!』

この1週間の無表情と死んだ目は何処へやら。嬉しそうにしたり、何かを誤魔化そう
としたりと表情が忙しく動く。あ、視線も逸らされた。

やだ、この子分らない……

『まあいいや。で、俺の話だけどうだなあ……前世の記憶って信じる?』

『今の話を信じてても良いし、作り話だと笑っても良い』

『信じます』

『ホントに!?!』

話終わってから笑われても良いように予防線を張ったらあっさり信じて貰えたから逆に信じられない気持ちになった。

むしろ自分たちの居るこの世界を遊戯ゲームだつて言う俺のことをあっさり信じるとか、逆に心配になるんだけど。

『はい。だつて “ 普通の “ 人間から見たら艦娘と深海棲艦、そしてなにより妖精はオカルトそのものじゃないですか』

『確かに』

見える提督たちがおかしいだけで見えない人が大多数の妖精さん、艦装を着ければ非常識的なパワーを出す艦娘、近年まで発見すらされてなかった深海棲艦や主に鎮守府で使われる資材。

不思議なことだらけじゃないか……そりゃあ誰かが前世の記憶持つて艦娘になった

りしても「そんなこともあるでしょ」くらいで済みそうだ。

『あつそうだ。さつきも言ったけど俺は自分が何の艦娘なのか正確に把握してない。多分スチュワートって艦ふねだとは思うからそれで通してたし、大湊に居る時は一部からはスーちゃんって呼ばれてた。今は好きに呼んで良いよ』

『分かった。でも、私のことは春雨って呼ばないで』

『はい?』

『ソレは既に佐世保の春雨のもので、私のじゃないの』

あ、なるほど。

『便宜上春雨って呼んだけど……君は絶対に春雨じゃないから大丈夫だつて』

春雨は明らかに食べられない魚を食べさせようとしないうし。

俺の好みに合わせて激辛麻婆春雨を作ってくれる春雨の優しさはどこに消えたんだ

?

『出来れば、貴女に名前を貰いたい……です』

は?

実質告白でしょこんなの。しかもどこかの野郎ていどくとは違って可愛いし。

は? は? 可愛いんだが?

『よっし任せろ。一番良いヤツをくれてやる』

唸れ頭脳！ 轟け語彙力！ 来たれ閃きイ！

悪雨は『艦これ』における駆逐棲姫の愛称だし、愛称でも何でもない名前に悪ワルなんて付けるのはちよつとどうかと思う。

う〜ん……名は体を表すならその逆もまあアリなんじゃないか？ でも外見的特徴は白いの一言。でもぱつと見冷たい印象は受けるかも。それに独りで寒かつたつて言つてたしその方向性で行こう。

粉雪は吹雪型つぼいし、雹とか霰は朝潮型つぼいし……出来れば白露型らしく○雨つて感じて終わらせたい。でも霧雨とかはなんか居そうなんだよなあ。

『あ、氷雨なんてどう？』

良いじゃん。ぼいじゃん。ぼいぼい。

『氷雨……氷雨…… ありがとうございます』

『ツ!!』

口元に両手を当てて呟いて嬉しそうに微笑む春雨、改め氷雨。

同情とかが混ざつてないと言つたら嘘になるけど、扶桑型の2人とは違ったベクトルの幸薄さを纏つた人が細やかな喜びを表すのは俺の心にストライクだ。

つまり可愛い。これはもうこれ以上傷付かないように俺が守護まもらねばならぬ。そう思わせる辺りやはり山風の姉か……

『裏・白露型駆逐艦の1番艦の氷雨様じゃん』

『椰揄わないでくださいっ!』

バカ言え、コレは俺なりの照れ隠しだ。

『そう言えば、俺を沈めた時に周りに居た深海棲艦は何処に居るの?』

駆逐級は沢山居たし、空母ヲ級とか戦艦レ級とか居たような気がするけど。

『す、スーちゃんを沈めた時にお別れしちゃいました』

『この辺の海域を任されたとか言ってなかったっけ?』

そんな氷雨がこんな現状なのはヤバいじゃん。

『だからまた1から仲間を集めないといけません。はい……』

『俺は仲間の内に入らないのか?』

『それはその……艦装を壊しちゃったのでスーちゃんは戦力外と言うか、あつ、別に弱いと言ってる訳じゃありませんよ、はい!』

弱い云々は置いておいて、艦装壊したのは自業自得でしょ。

せめて見つからない場所に隠しておくくらいにしろよ……行動が極端なんだよ。

真つ暗な時間、フワフワと漂って揺れるように海底に着地した駆逐八級。

俺が付いてきていることも知らずにそのまま寝始めた。
……バカなヤツめ。

『ハア〜イ、調子良い?』

うん。口角も上がってるしゴキゲンじゃねーか。

だから尊い犠牲になっても笑顔で許してくれるよな?

錆びた鉄パイプを目の位置に思いきり突き立てた。

『と、手に入れたのがこちらの連装砲でございます』

所々に白い肉片の付着した艤装を氷雨に見せつける。

これで戦えないなんて言わせねえぞオイ。

『あと、タコ捕まえたんだけど食べる?』

ハ級の解体中に勝手に近寄って来たタコを見せつける。

色も白いし、逃げなかったし。絶対にコイツ生物としての本能をどこかに忘れてきてるぞ。

『食べませんよ……。むしろ、懐いてるみたいなのでその蛸を艤装にしてしまえば良いんじゃないですか?』

『は? そんなこと出来るの!?!』

氷雨から飛び出た言葉に驚く。

いくら深海棲艦が艦装オンリーのロボットじゃなくてどこか生物チックな所があると思つたらまさかそんな事が出来るなんて……やっぱり深海棲艦も謎だらけじゃないか。

でもそう言えば、アメリカの資料室で見たバタバア沖棲姫はオウムガイみたいな艦装だったっけ？ なら氷雨が言つてたことも出来る……いや無理だろ。

『ねえ、ぼくと契約して、深海棲艦の艦装になつてよ』

流石にこれは騙されてるだろなんて思いながら某白い侵略者をイメージしながら言う、タコは触手を2本持ち上げた。

○

『わあ、器用ですね！』

言葉が通じたことに突っ込みを入れろよ。

自由度の高い育成ゲームは根強い人気がある。

俺が思うにその手のゲームで一番楽しいのは『どうすれば自分の満足のいく形で最も強くなれるか考える時間』だと思う。

机上の空論や皮算用に想いを馳せて、希望を込めて祈りながら育成する。

つまり何が言いたいのかと言うと、最強を目指す過程で常識すら敵に回すヤツは一定数存在するということ。

『折角脚が8本もあるんだから有効活用しないとダメだと思う』

×! ×! ×!

『どんなものにも限界はあります』

だけど悲しいかな、タコからは猛反対されて氷雨からは呆れられた。

何? 連装砲を8つも斉射したら反動で吹き飛ぶって? タコは軟体だから伸びるだけで吹き飛ばないって。そもそも重量で動けない?

ならその分大きく育てれば良いだけじゃん。

それはもう駆逐艦じゃない? ……それもそうか。

『じゃあ4つならどう?』

半分ならどうだと聞いたら答えは○。5つで△になったから4つと考えよう。

『艦装4つで最も隙の少ない組み合わせは……その場合の仲間の装備や編成のバランス、相手によって戦術を変えられる柔軟さ……フフフ。ん、氷雨どうかしたの?』

『中枢棲姫から連絡がありました。……』 あっち側 “で集会があるみたいです』

化粧、集会、油断

『 “ あつち側 ” で集会があるみたいです』

『それはまた』

深海棲艦の集会だって？

！
そんなの、話題に上がった時から参加したいとは思っていた。だけど……早いんだよ

一応沈んだ事実があるし、先輩深海棲艦の氷雨が言うには既に深海棲艦のカテゴリに属しているらしい俺が集会に参加するのは問題ないにしても、今はまだ深海棲艦にしては顔色血色が良いから何かしらのカモフラージュした方が良くとの事。

それを聞いて思いついたのがへ級とかチ級みたいなお面を被って『おつ、新入りか？』みたいな感じで行く方法。

だけど何事にも準備は必要な必要な訳で。

『どこで集会するか分かる？』

『割と近くみたい』

『マジか』

出来れば遠くの方であつて欲しかった。そしてら行き掛けの駄賃つてことで野良はぐれへ級とかを見つけて急襲してお面を剥ぎ取ろうかと考えてただけ……これじゃどうしようもないじゃないか。

『じゃあ時期は分かる?』

集会つてくらいだし主催者の名前には中枢つて付いてる以上、相当広い範囲から多くの深海棲艦が集まってくると思う。

だけど、だけどまだ希望はある。時間さえあれば準備は出来るから……

『ちよつと先かも?』

かなりフワツとした答えが返ってきた。

だけど考えてみたらどうだろう。太陽が出て沈んだら一日! みたいなクソ時間感覚の持ち主である深海棲艦相手に細かい時間の指定なんて難しいよなあ。

でも出来ることはやらないといけない。

例えばそう、俺とこのタコを少しでも深海棲艦らしくすることかね。

じゃあ深海棲艦らしさとは何かと考えた時、現状で分かるのは外見的特徴くらいしかない。

全体的に病的な白さなのは、俺の場合露出を限界まで減らせば誤魔化せるから良いと

して、だ。

艦娘が女の子十艤装　なのに対して、深海棲艦は艤装のお化け十オマケ女の子である。つまり俺が深海棲艦として艦娘の敵として現れた時、メインは俺ではなくタコである。

だって俺、沈んだからって「艦娘を沈める。それだけが存在理由……」なんてなっていないし。

『だからお前が頑張る必要がある。OK?』

どうせならクラークンみたいなデカさを目指そうぜ。

男ならデカさと強さに憧れるだろ？　同じだよ同じ。

明らかに生物としてのサイズを凌駕している深海棲艦とか食べさせてみるか？

なんか深海棲艦の因子みたいなものがあるかもしれないし。それを取り込むことでワ
ンチャンあるかもしれない。

『なあ。イ級って食べられるらしいんだよ』

そう言つて懐からイ級の肉を取り出す。

ハ級から連装砲を強奪した時に試し打ちで仕留めたイ級のものだ。

!!

運が悪かったか人俺を見る目が悪かったか、あるいは両方か。とにかく逃げようとするんじゃない。

『お前も生物を辞めて深海棲艦になるんだよ〜ッ!』

イ級の肉をタコに押し付ける。

意外と強いパワーで拒否されるけど、このままだと絶対に俺が嘴に肉を捻じ込むことになるから早いところ諦めてほしい。

『……かわいそうに』

俺に寄生虫の沸いた魚を食べさせようとした氷雨の言える事じゃないからな？

『やっぱり駄目か……』

ぐったりしているタコを見て呟く。

当然、イ級の肉を食べたからと言って突如として巨大化はしなかった訳で、ただ明らかに力を失って真っ白になってる様はまさに深海棲艦を思わせる。

これはこれで成功なのかもしれない。

特に大きくもないタコには連装砲を持って漂ってもらうしかない。某機動戦士のフア○ネルみたいな格好良さが出そうだからな。

まあ、新人深海棲艦だから艤装が貧弱でも特に問題は無いのかもしれない。それはそれとして俺は俺で、露出を極力減らす工夫を考えないといけない。

それから時間は進み、オーストラリア周辺の海溝にて深海棲艦の集會が開かれた。数多の深海棲艦、それも鬼級や姫級が集まった集會所の隅の方に駆逐棲姫の姿があった。

姫級と言つても比較的新參の部類で元から注目はされておらず、他の深海棲艦よりも小柄で視界から消えやすく、存在感もやや薄く、駆逐棲姫自身も全力で氣配を消しているにも関わらず、今は集會所の視線を一身に浴びていた。

主に隣に居る珍妙な「配下」の所為で。

『俺について何か言われても氷雨の手下つてことで進めてくれよな!』

こんな言葉に対して『えっうん……』などといった返事をしてしまったのが運の尽きだと、駆逐棲姫はハッキリと自覺していた。

『アナタ、見ない顔ね。名前はあるの?』

駆逐棲姫を心配してか、隣に居た配下——顔の部分に蟹の甲が付けた見慣れない深海棲艦に駆逐古姫が声を掛けた。

『ウエツ……オエツ』

しかしその配下からの返答は一切の要領を得ず、人型だから會話は可能だと思つてい

たのにと呆れ果てた駆逐古姫は溜息を吐いてから駆逐棲姫に話かけた。

『ねえ、手下はもう少し選んだ方が良いと思うわ』

『ハイ……ソウオモイマス』

顔から火が出そうな思いで駆逐棲姫が応えようと、蟹面の深海棲艦が駆逐古姫の肩を叩いた。

『テシタオエツ……ゴボツゴボボツ』

『何を言っているか全く分からないわ』

そう言われた蟹面の深海棲艦は舌打ちするような音を立ててから蟹の甲を外した。しかしそこにあつたのは、駆逐古姫を含めてこの奇妙な深海棲艦に視線を向けていた深海棲艦の予想とは違った貌だった。

確かに隠したくなるのも納得の今にも死にそうな顔をしているのは深海棲艦でも珍しい。だけど予想していたような醜さは何処にも無かったので、駆逐古姫は目をパチリと見開いた。

『あら、意外とちゃんとしてるじゃない』

『超生臭い……最近駆逐棲姫サマに拾われた者です』

ヨロシク、と手を差し出した駆逐棲姫の配下に流されるように握手をした駆逐古姫は、何か話題は無いものかと近くに浮いていた白いタコについて訊こうと思った。しか

しその時には再び蟹の甲を顔に着けて吐き気に喘ぎ始めた異常な新人深海棲艦に呆れ直した。

深海棲艦の中でも比較的社交的な駆逐古姫でさえ手に負えないイカレっぷりを披露した超ド級の新人を配下にしたということもあつて、駆逐棲姫に降り注ぐ視線は止まなかつた。

——主催者が現れるまでは。

『皆、よく集まってくれた』

ザワついていた会場がその一言で静まり、視線は奇妙な存在から禍々しくも神々しい存在へと移る。

『最早我々に硬い挨拶は不要だろう。本題から話そう……知っている者は知っているだろうが、最も艦娘の多い国である日本に新たな鎮守府が出来たらしい』

その一言で再び会場がざわつき始める。

しかし中枢棲姫が手を挙げて再び場を静かにさせる。

『これは我々にとつて大きな痛手だが、それだけではない。世界中で新たな艦娘が建造されているのも事実だ。これらは我々の不利、そして敗北が近づいていることに他なら

ない。

そんな現状、より効果的に艦娘を沈める為に我々が出来たことは今まで以上に互いに協力し合うことだ！』

中枢棲姫による演説が始まってから、密かに蟹の面を外した珍妙な深海棲艦はジツと話を聞いていた。

何故深海棲艦は艦娘と戦うのか。

全ては、この疑問を解消する為に。

そして集会が始まってから時間が進み、遂にその瞬間がやってきた。

『我々は人間を必ずや打倒しなければならぬ』

『全ては我々の戦ってきた海を、世界を、人間の好きにはさせない為に！』

『』 全ては海を、世界を守る為に！ 『』

『』 ————— 『』
なるほど』



『お前たち精鋭を集めたのは他でもない—————』

集会も終わりに近づいた頃、鬼級と姫級ばかりの如何にもなスペースが設けられて、そこに氷雨が呼ばれたから付いていった。

重巡棲姫や潜水棲姫みたいな見覚えのあるのは勿論、やけに長い帽子被ってるのとか、超^{スーパー}駆逐ナ級みたいな見たこと無い深海棲艦まで居る。

集会でもかかと集まった深海棲艦にビビったけど、姫級とかヤバイレベルの強敵たちがこんなに沢山……と戦慄する。

『日本に新しく出来た鎮守府は大湊警備府というらしい——』

知ってる。っていうか話題に挙げるの遅くね？ 設立されたの去年だぞ？

でも微妙にポンコツ臭するこの面子も、中枢棲姫の言葉からして『海と世界を守る』為に戦っているのは間違いない。

ここで問題だ。

艦娘は『平和な海と世界を守る為』に戦いを。

深海棲艦は『海と世界を守る為』に戦っている。

互いに守る物は海と世界。じゃあなんでこの両者は争っているのか。

『ふむむ……』

何かが引つかるんだけどピンとこない。

頭の中でもう一度だけ整理するために顎に手を当てて考える。

この時の一連の行動を、後に俺は後悔することになる。

中枢棲姫の切り出した話題は「大湊の偵察」だった。

『まあいざとなったら他所から応援もらうだろうし大湊は大丈夫でしょ』なんて考えて、自分の考えに没頭していたのが良くなかった。

会議の輪から抜けて俺の方に向かってきていた深海棲艦に道を譲った時、不意に体当たりされてバランスを崩した。

『えっ』

マズいと思った時にはもう遅く、軍人然とした深海棲艦から腕を押さえられていた。

『確保完了』

機会、理由、進展

『確保完了』

驚愕に埋め尽くされる頭に響くその言葉は死刑宣告にも聞こえた。

こんなに沢山の深海棲艦が居る中でわざわざ声に出すと言うことは確認と周知を兼ねているに違いない。……それにしてもなんで？ 何かそんなにマズいことした？

いや、潜在的敵だらけの状態で迂闊に接近を許したからこうなってるんだらうけど……ああ！ まともな結論が出せる気がしない！

『ありがとう。わざわざごめんなさいね』

『いい。これまで以上の協力を宣言されたからには不穏分子の排除は尤もだ』

嘘だら、排除されるの？

しかも不穏分子ってなんだよ。確かに蟹製のお面はちよつと奇抜だけどそれだけだし、さつきよろしく言つたじゃねーか和風な装いしておきながら滅茶苦茶かよ。お淑やかさの欠片も無えな。

何してくれやがると思いながら和風の深海棲艦を睨むけどどこ吹く風。苦手なタイプだ。

『さて……コレを連れてきたのは？』

そんな俺を一瞥して何とも言えない顔をした中枢棲姫がそう言うのと、視線が氷雨に集まる。

そんな氷雨の視線は俺と周りの間をしきりに行ったり来たりしてる。

助けて！ 助けてヘルプミー！

いや やっぱり無関係を装ってくれ！

あ、でもちよつと助かりたいかも。

『えつと、私です……はい』

『ほう？ 何処で拾ってきた？』

『それは……』

言い淀む氷雨の視線が俺に助けを求めている。

俺を見捨てても良いのか助けた方が良いのか決めかねてそうだから、任せろと視線で訴えたら明らかにホツとした様子を見せた。意図せずに他人の生殺与奪権が与えられたと困るのはみんな同じか。

じゃあ、と覚悟を決めて後ろで押さえられた腕、その先の手首で押さええる深海棲艦の腹をタツプアウトして降参する。

流石に世界共通の言語だから通じるよね？

通じた。

それでええつと……何処で俺が拾われたつて話だ。まるで勝手に拾ってきたペットみたいな扱いなのは不服極まるけど、所詮俺は降参せざるを得ない敗北者だし我慢しよう。

さて、この質問に嘘を吐くのは簡単だ。だけど嘘を吐いたら頭をブチ抜かれる可能性も捨てきれないから大人しく従うしかない。

取り敢えず会話する以上、最低限のマナーとして蟹の面を外すことにした。

『大湊警備府から来ました』

『随分素直に答えたな。何が狙いだ？』

『深海棲艦が戦う理由が分からないから、知りたいと思つた』

どうだ？ 嘘は無いぞ。

『意味も分からずに戦うなどまるで人形だな。それを知つてどうするつもりだ？』

『そんなのは……今から考える！』

開き直るしかない。

だつて分からないものは分からないし、知らないものは考える事すらできない。これ
真理。

『そうか。ならば……我々の戦う理由は 無いよ』
マジかよ。

まさかまさかの理由が無いと来たか。想定の中で最悪と言っても良い。

何かしらの理由があれば良かったんだけど、中枢棲姫の言ってることが本当だとしたら深海棲艦はただただ人間を襲うだけの存在で、そんなのもう災害の類だ。

つまり深海棲艦とは永遠に理解し合えない。港湾棲姫と北方棲姫がイレギュラーだっただけか？

『そう険しい顔をするな』

半分は冗談だ。

そう言つて微笑んだ中枢棲姫はフワリと移動して氷雨の肩を持った。氷雨がガチガチに固まつて、ついでに俺の頭もガチガチに固フリーズしたまつた。

さつきまでの威圧感は何処へ？

『駆逐棲姫もまだ新米だったからな。我々と人間、艦娘、そして妖精が争う理由を知らないのも無理はない』

『じゃあ……』

教えてくれるなら願ったりだけど、教えてくれるのか？

『教えよう。但し、今から話す内容を聞いたからには相応の対応を求めろぞ』

その瞬間、軟化した中枢棲姫の雰囲気再び威圧的なものに変わった。

相応の対応なんて言うからには明らかに面倒な内容だつて分かるし、いつもなら前置きで『じゃあいいです』つて断つたんだらうけど、中枢棲姫と他の深海棲艦からの圧がそれを許してくれない。

『我々の戦う理由は、先程の集会でも言つたように海と世界を守る為だが、これは多くの深海棲艦に向けたスローガンに過ぎない』

まあ確かに、大まかな指針だつてあるのと無いのでは大分違つてくるし……

『大湊、日本の鎮守府から来たと言う貴様は当然艦娘の、人間の『大本営』が掲げるスローガンも知つているのだろうか？』

『確か……『平和な海を守る為』だつたと思う、ます』

『そう。ここで肝心になつてくるのは守るべきものや倒すべき敵に対する認識が我々と大本営で違つていることだ。大本営側が我々のことをどのよう認識しているのかは大体察しが付くが、我々としては大本営……もつと言うなら人間だが、彼らを意味もなく積極的に攻撃しようという気は無い』

『『え？』』

予想してなかった言葉に混乱する。氷雨も困惑したような顔をしている。

『意外か？ 再三言うが我々のスローガンは海と世界を守る為に戦うことだ。そしてこれも集会で言ったが、我々は海や世界を人間の好きにはさせないように戦っている。つまり……』

『人間が海に干渉しないなら争いは発生しない？』

でもそんなの嫌だよ。魚食べられないとかさあ……拷問だぜ？

『その通り。……と言いたいところだがそれでは争いは止められない。我々の守る対象は海だけではなく世界だということだ』

……つまり海だけじゃなくて地球そのものに干渉するなってこと？ つまり人間は地球から出て行ってことか？ もしくは大人しく滅亡してくれと？

超大型コロニーで地球から脱出なんてSF映画の世界んだけど……どうすりゃあ良いんだよ！

『勿論地球に、海に一切干渉するなという不可能を求めるほど我々も厳しくはない。……話を戻そう。つまりだ、我々は人間が地球上で好き勝手に戦っていることを抑制するために戦っているんだ』

『その好き勝手のし過ぎって具体的にはどういったものが当てはまるんですか？』

氷雨が中枢棲姫に質問する。

すると返ってきたのは、ごく当たり前の言葉だった。

『一番は自然破壊だな。海や川での漁、森の開拓。これ自体は昔から行われているから特に咎めるつもりはない。人間にも人間の生活があるからな。しかしだ、昔の自然と一体となっていたそれらは姿を消した。今の人間は過剰に魚を獲り木を倒し余ったものは捨てる。心当たりはあるんじゃないか?』

心当たりがありすぎる。

確かに自然破壊は人間の得意技だ。これはどう足掻いても否定できない。

でも漁師には漁師の生活があるし、増えた人間を^{高層建築}上で生活させるのにも限度はある。

『しようがない部分もあると思うんですが……』

『だが限度というものがあるだろうが!』

後ろで中樞棲姫と俺たちの話を聞いていた深海棲艦がいきなり怒鳴りだした。

『2度に渡って行われた長い争いは多くの犠牲を出したものの終わりを見せた。だけどその後は?』

『……平和になりました』

『ああそつだ。人間は呑気にも平和を享受している。技術の発展や進歩? それはどうした?! だったら何故自然破壊は止まらない!? 空気や海は汚され、人間以外の命が消え続けるんだ!』

『……』

耳が痛いってレベルじゃない。

思わず苦い顔になる。

『平和になつたんだろう!? なら今度は人間が、自分たちで荒らした地球を守る番じゃないのか?! 散々荒らしておきながら人間たちは自分たちの事ばかりで地球のことを考えない! こんな……こんなの!』

『気持ちは解るが落ち着け。……とまあ、今しがた南方棲戦姫が言ったのが我々の戦う理由の全てだ。我々は地球の怒りを背負っている』

『人間も人間で自然破壊を始めとする環境の問題は重く見えます。だから深海棲艦の主張も会話を通せば、ああそっか』

敵対しちゃってるもんなあ……当然人間サイドは深海棲艦の目的なんて聞いてないし聞いても信じないだろうし、襲ってくるから艦娘と妖精に撃退してもらってるって認識で。

深海棲艦は人間に物申したいけど艦娘と妖精が崩せないから言葉が届かない。会話や対話が出来ない。

要するに艦娘と妖精さん、そして深海棲艦の両方がいがみ合ってる現状を仲裁できる第三者が居ないのか。

『分かったか。非常に残念なことに我々は初手を間違えてしまったんだ。今はもう我々と人間の両方が対話の席に着いていない。だから我々は無理矢理にでも人間を椅子に座らせる必要がある』

今はもうこの有り様だからしようがないにしても、ファーストコンタクトを致命的に間違えた深海棲艦の初代トップは絶対に俺よりコミュ障だぜ？

『過去にも貴様ら……君たちのような艦娘と深海棲艦を繋げられるような存在は居たんだ。だが失敗した』

多分これは如月のことだと思う。

恐らく失敗の原因は、如月に深海棲艦の意思を伝えずに鎮守府に送り込んだこと。

艦娘や妖精さんなら深海棲艦の戦う理由を知っていると思つてたのが前回の間違いだったのかもしれない。

『今回は貴様……君たちに願つても良いか？』

あれだけ威圧的だった中枢棲姫が、溜めてた鬱憤を吐き出した後の子供のように弱々しく見えた。

『この通りだ』

そしてなんと、頭を下げた。

相当参つてたんだらうなと思うと、何とも言えない気持ちになる。

『ねえ』

肩を持った氷雨が声を掛けてくる。

その目に強い意思が宿ってるのを感じた。
なるほど、やるのか。

頷き返事とした。

『任せてください』

知識、計画、準備

『……』

『人の心が無い。私よりよっぽど深海棲艦です！』

水雨はご機嫌斜めだった。

さつきからチクチク小突いてくるくらいには不機嫌だった。だけどやつぱり根っこ部分は春雨だから口撃もかわいいモンだし、全くダメージがないどころかむしろあの優しい春雨の反抗期^{ビフォーアフター}を見てみたいで微笑ましく思う。

『まあ今は深海棲艦だし。それにしても……』

集会が終わってみると、情報収集とかそういうレベルを超えた結果になったと言うしかない。

深海棲艦の戦う理由は把握したし、次の目標まで完璧に定まったから只管に突っ走っていいける。しかも深海棲艦サイドから支援までして貰えるとか最高かよ。

大湊の偵察と言う名の襲撃作戦^{プレゼント}に向けての準備として部下の異動^{プレゼント}、艦装の配備^{プレゼント}から始まり、作戦中の指揮権の獲得と充実した、し過ぎたサポートにもう乾いた笑いしか出ない。これで失敗しましたなんて言えないよなあと、大きいプレッシャーを逃がすよう

に溜息を吐く。

こう、調子良くまつり上げられた感じがちよつとモヤモヤするけど、まあ突飛な話だったからこんなもんだらうと自分を納得させた。

『こんなことになるとは思ってなかったんだよねえ』

これも全て『はい。ここにい、大湊警備府のことをよく知ってるのが居ますよ?』なんて調子に乗ったことを言った俺が悪いんだよね……。

『我々は日本の鎮守府から把握されている。当然だが対策もされている。そんな我々よりも、大湊をよく知ってる上に深海棲艦としては未知数の君を尖兵……リーダーとして征かせたいと思う』

だからそう言った中枢棲姫の言葉は、ご尤もで、それについては考えさせてくださいって曖昧にはぐらかした。

まあ、その後、『旗艦は駆逐棲姫が良いと思います!』なんて言つて氷雨を推薦したから今拗ねられてるんだけど。

氷雨を旗艦に据えたのは、俺がイ級とかに指揮をしたくないって理由だから。今回はなんとなくつていう理由じゃない。

だつてアイツら《▶たたかう》と《▶にげる》以外の言う事聞かねえんだもん……実

力を見たいって適当に理由付けてチーム分けして演習させたら嬉々として暴れ出してズタボロになるまでバトリ始めるのに、纏まって移動しようとする途端に脱落者が出来るのかなんなだよ。

多少雑に扱っても良いけどまともに動いてくれない駒を使って将棋やチェスをしたいかと言われたら俺は嫌だと言う。つまりそういう事だ。

『ガアッ!』『ギギギ……』

『グルルアー!』『グオオ……』

ポンコツどもめ、まだやってら。

旗艦を氷雨にしたから俺は暇……ではない。

中枢棲姫も警戒してたから大湊の警備体制について一番知ってるのは俺だから、必勝を期す為に作戦を考えないといけないという軍師ポジについてる。

知ってますよお! なんてイキった手前、戦術的ミスは許されないと思ってる。墓穴掘っちゃったなあなんて思うけど大きなミスをしなきゃそれでいいだろう。

そんな俺たちが攻め込みます大湊の警備体制はと言うと、日中は空母が広範囲に艦載機を飛ばしてるから潜水艦以外はすぐに見つかると、その潜水艦だって低速故に遠征中の駆逐隊からの辻爆雷で沈められる悲しい宿命を背負っている。

駆逐艦ではちよつと太刀打ちが厳しいような戦艦が居たとしても、だいたい数人の戦艦がいつでも出撃できるように準備してるから警備府に近づいたら最後、沈められる。

夜に攻めると戦艦や空母といった大きな戦力が引つ込む變わりに、日中の間はちよつとだらしなない川内さんが鬼神と化す。お供の駆逐艦娘も勘定すると脅威的な戦力になるのは間違いない。こつちの戦艦も使い物にならない状況でこれらを敵に回すのはちよつと無謀だと思う。イ級がどれだけでも夜間の川内さん一人に敵いやしない。

隙が無い。なんて言いたくなるけど、実際のところそんなことは無いからやりようは幾らでもあると思つてる。

例えばレ級みたいなを大量に喉けたりとか、大湊近海の資源を徹底的に回収して艦娘の出撃自体を制限させるとか、現実的じゃないから逆に想定もされてないような事態、日頃役に立たなかつた妄想がこんな時に役に立つ。

そして今回俺がやろうと思つたのは沖に出た漁船を襲うという選択肢。

艦娘たちが襲われた漁船を守りながら戦うことを強制されるからほぼ確実に俺たちが有利に戦いを進められるという特大のメリットがある。水雷戦隊にプラスで戦艦と空母も居るけど、数はだいたい決まつてるから戦力の予想も立てやすい。あと海賊みただちよつとロマンがある。

ただしこつちの駆逐艦たちがポカやらかすと漁船と乗組員がヤバいというこれまた

特大のデメリットも存在する。深海棲艦としては人間に積極的に害を為すつもりはないのにそれはマズい。

『という訳で協力してもらえませんか？』

そんな訳で、駆逐級の扱いが上手いと評判の駆逐水鬼に協力してもらおうと思つて駆逐水鬼の元を訪ねていた。

『それで私のところにねえ……自分で言うのもアレだけど所詮暴れる事しか能が無い駆逐級なんだけど……本気なの？』

『勿論です。歩の無い将棋は？』

『ふ〜ん……気に入った。なかなか見る目あるじゃない』

『それほどでもない』

握手を交わした。

駆逐級を作戦の中枢に据える俺が異端なのか、今まであんまり部下に大きな仕事が無かったのか駆逐水鬼が嬉しそうにしている。見て分かる程度にはウツキウキだ。

『作戦までしっかり準備しておくから、その時は声掛けてね。たかが駆逐級と侮るなこれ、驚かせてあげる！』

『期待して待ってます』

駆逐水鬼とその部下は間違いなくいい仕事をする。

そう確信した。

『服装が適当だと舐められるからね』と去り際に駆逐水鬼から渡された黒い布をどう処理しようか悩んでいたら、俺のファッションセンスを見かねた氷雨に奪い取られた。

一応のリクエストとしては露出控えめとだけ伝えてあるから変な風にはならないと思う。

服装で上下関係を認識する程度には賢さがあつたという事実に驚いた。

渡されたのは布だけだったけど、鋼材を始めとした何かしらの物資から靴とかも作ったりしないとイケないのか……

お洒落って難しい。

それはそれとして、今からやるのは野良深海棲艦の討伐。

俺がやらないとイケないことは作戦立案も含めて色々とあるけどその中に俺自身の強化が含まれてる。

今更野良の深海棲艦程度で俺に何か得るものはあんまり無いと反論したら、俺じゃなくてタコの強化に繋がるんだとか。

詳しい原理を知ってる有識な深海棲艦は誰も居なかったけど、説明を受けた限りだと

蠱毒みたいな感じで俺の場合はタコが強くなるらしい。まるでゲームみたいだ。

まあ、道理でタコに無理矢理イ級の肉だとか燃料だとかを捻じ込んでもちよつと大きくなつたかな？ くらいの変化しか起きない訳だと納得した。変化が起きてる時点で大分普通とはかけ離れてるけど、やつぱりなつてくらいの感想が出てくる辺り俺の感覚もかなり麻痺してると思う。

誰かの部下じゃない野良の深海棲艦は戦力も統率もないから余程のことが無い限り人間に損害は与えられない。漁船を守ってる艦娘に倒されるか、遠征の辻魚雷で駆逐されるか、変に鎮守府に近付いて滅されるか。

その癖に次から次へと生まれる、正に毒にも薬にもならない存在だから好きだけ狩つても構わないらしい。だったらこの機にこれでもかとタコを強くしたいと思う。

『やつぱりお前はビッグにならないとな』

目指せクラーケン！ と言うと諦めたように触手をぐつたりとさせた。

タコにとつては嫌な作業かもしれないけど、最近は頭脳労働ばかりしてる俺にとつては気分転換以外の何者でもないところが悲しいところだよねと、他人行儀なことを考えながらタコの頭を掴んで海を徘徊し始めた。

そんな生活が半年くらい続いた。
『そろそろやるか』

予定、不足、不測

「ん？」

ペンを走らせる音しか聞こえない執務室。

ふと、今日の秘書艦の竹が声を上げた。

何かあったのかと目を向けると、訝し気な目で書類を見ていた。

書類自体に不備が無いのは確認してるけど……

「何かあったかい？」

「いや、何でもねえよ。邪魔して悪いな」

「そうか。何かあったら遠慮せず言ってくれ」

「ああ、分かってるよ」

そう言つて再び書類に判子を捺していく竹は明らかに集中を欠いている。

だけど、初めての秘書艦としてはかなり頑張った方だと思う。

普段のぶつきらぼうな言葉遣いとは裏腹に嫌々書類仕事をするような雰囲気は出なかつたし、真面目に仕事に取り組んでた。ただ、部屋の中でジツとしているのは苦手

みたいだったから次からは途中でリフレッシュも兼ねて長めに休憩でも取った方が良いと心のメモに記入する。

だけどそんな感心も束の間、眉間に皺を寄せた竹がとうとう降参だと言わんばかりに判子を机に放った。縁に付いてた朱肉が書類に赤い破線を引いていく。

「ヤツベ……あー提督。ヒトナナマルマルだ」

罰が悪そうに頭を掻きながら今の時間を言う竹に、まさかと思う。

まだだ。

日中と変わらず宙を舞う雪が灯りに照らされていたことが仕事を始めてから随分と経ってたことを証明していた。

「ありがとう」

ペンを降ろすきっかけをくれたことに感謝して、お礼を言って話題を探す。

そう言えば松が竹の作るご飯は凄いつて言ってた筈だから、この話題を振ってみようか。

「今日の夕飯は竹が用意してくれないかな？ 松が自慢してたから食べてみたくてね」

「松姉が？ ……よし、ちよつと待っててくれ」

そういう竹は肩を回して首と手首、あと指を鳴らしながら執務室から出ていった。

「……………ふう」

誰も居なくなつた部屋で息を吐く。

最近は何よりも仕事に没頭するようになった。今だって、竹に言われるまで昼食から少ししか経つてないと錯覚していた。

それだけ自分が集中している証拠なんだろうけど、それはそれで秘書艦の子たちがやり辛いだろうとは思う。間違いなく前まではもつとゆつたりとした雰囲気だった。

だけど今はそんなことは言つてられない。

大和の建造。

あの休暇兼作戦から早くも半年以上。ようやく武蔵との約束を果たせそうだ。

艦装の修理や改装は一段落した。それでも遠征班には更に資材を集めてもらった。

あんまり武蔵を待たせても不満の種になるだろうと思つてそう計画したけど、大量の資材が無くなることは何時来るか分からない脅威に対応出来なくなることに等しい。

やつぱりもう少し武蔵には我慢してもらうか……いや、彼女が何時攻めてくるか分からない。

どうしたものか。

取り敢えず資材を溜めておけばいざとなつた時に柔軟に対応できるだろうと思ひ、資材を集めさせている。

逆に、それ以外のやる事が殆ど無い状態。

それがここ最近の一番の悩みだった。

窓の外を眺めながら考え事に耽っていると頭をパコつと叩かれた。

「なに難しい顔してんだ。ほれ、晩飯だ」

「ああ、ありがとう。……?」

お盆の上には麦飯と味噌汁。そして簡単なおかずと、よく分からない物があつた。

「姜びた人参? いや、なんだこれは。」

「ははっ、良い反応だ。『くちこ』って言うらしいぜ。食つたことねえか? そりやあ物が無い時は工夫してやりくりするが、やっぱり物が有るつてのは良い事だな、うん」

……聞いたことが無い。

でも名前が付いてて出回つてると言うならば食べられないことは無いと思う。

恐らく人参か大根辺りが材料だろう。

一口。

微かな塩味と、旨味を凝縮したような味が口の中に広がった。

確かにこれは竹がとつておきだと言つたのも頷ける。

……原材料を聞いた時は噎せたけど。

「竹はこれが好きなのかい?」

「ああ。流石にまだ食つたことはねえが、その内蛇肉とかも食つてみたいもんだ」

鶏肉みたいで美味いらしいぜ。という竹の口からは、とても普通の人が食べたがらないような人を選ぶ……正直に言うとかゲテモノや珍味の数々が飛び出して来た。

松が一言で凄いつて言つてたのは自慢じゃなかったと気が付いた。

黒ずんだ飛蝗イナゴを食べる竹と一日を振り返る。

話題は自然と書類整理、そしてその内容に移つていく。

「書類仕事なんて今日が初めてだったけど、いい経験だったよ。まあ、次やりたいかつて言われたらやらねーけど。……それより気になつただけど、資材の収支の表からしてみるとやたらと資源を溜め込んでるじゃねーか。何かあるのか？」

まさかあの戦艦大和の建造かと訊いてくる竹は鋭い。

当たりとだけ答えて続きを促す。竹の考えを知りたい。

「それにしたつて溜めこみ過ぎじゃねえか？ いや、足りないよりか全然いいんだけどな。何か引つかかるといふか……」

再び感心していたところに聞こえた言葉で、一気に頭が冷えた。

そうか。いや、そうだったな。

竹はスチュワートが居なくなつてから建造されたから、彼女を知らないのも無理はな

い。自分は何も言っていないし、竹の様子から誰も彼女について言及してないんだろう。つまりそんな竹に戦艦大和の建造を抜きにしても資材を溜めこむ理由を彼女のこと
に触れずに話すとしたら……

「厳しい戦いが後に待っている。その時の為に今から余裕を作っておかないといけないんだ」

こう言うしかない。

それを聞いた竹は指をパチンと鳴らした。

「そう、それだ。他のセンパイたちに聞いても似たようなことばかり言うんだ。厳しい戦いが待っている……これは理解出来る。今の内に余裕を作る……これも理解できる」
だけどな、と言う竹の目は真剣だ。

一瞬たりとも離されぬ視線からは怒りすら感じる。

「過去の資料と比較してみたんだ。するとどうだ、半年前から明らかに哨戒に割く人数が増えている。演習の頻度も増えた。資材を溜めこみ始めたのもこの頃だ。そう、半年前から不自然なくらいにだ。これが理解出来ねー。なあ……その厳しい戦いはもうすぐそこまで来てるのか？ 大本営からの発表は無かった筈だ。半年前に何があつた？
何を知ってる？ 何を隠している!？」

恐らく無意識の内に机に手を付いて身を乗り出して詰問してくる。

机が無かったら胸倉を掴まれていたと思うほど激しい。

軽く注意するとハツとしたように椅子に座った。

「……悪い。でも俺だけじゃねーんだ。巻波さん、涼波さん、伊^ヨ47さん、伊^フ203、桃……最近建造された同期連中はみんな同じ疑問を持つてる！　なあ提督……詳しい説明は、してくれねえのか？」

流石にここまで言われたら説明をしない訳にはいかないと思つてしまう。

半年前のことを色々調べたであろう竹がそれくらいの情報しか知らないのであれば、大淀が上手く隠しているんだろう。

でも自分が説明すると自分が何も言わなかった意味が、みんなが隠してたことが無駄になつてしまう。

「大淀を呼んでも良いかい？」

だから大淀を呼んでしまおう。

上手く暈^{ぼか}しながら説明してくれるだろう。

そう思つたところで待つたがかかった。

「……分かつた。そんなに話しにくい事なら無理に追及はしねえよ。だから半年前に何が起こつたかはいい。せめて近いうちに何が起こるのか、これだけは説明してくれ」

竹が折れた。

誰に訊いても無駄だと判断されたのか、だとしたらとても悲しい。だからこそ、今言われたことだけは答えなくては。

「彼女が来ます」

「大淀!?!」

さて、なんて言おうか……と悩んでいたら突然開かれた扉から現れた大淀が口にした。

あまりにもタイミングが良すぎる。さては何処かからこの会話を聞いていたな。

だけどそれはそれ。あとは大淀が説明してくれるだろうと思つて大淀を見ると、頷いてから竹を見据えた。

「大淀さん、彼女つて?」

「事の発端は半年前。私たちはとある作戦で勝利しましたが同時に敗北もしました。彼女は私たちの前に再び現れるとだけ言つて居なくなりまして。つまり彼女は来ます。海の底から、私たちの予想を裏切る形で」

流石大淀だと思ひ、その言葉に乗る。

「ああ、彼女は規則に囚われはしないけど約束を破つたことは一度も無い。絶対にやつてくる」

「ふ〜ん……つまり、過去の因縁つてヤツだな?」

提督も大淀さんも、その他全員が警戒

するような強い敵が絶対に現れる」

なるほどなくと、背凭れに体重をかけた竹が言う。

「分かった。巻波さんたちには俺から説明しておく。因縁の深海棲艦が来るってな」

「……」

「こうしちゃ居られねえな。さつさと飯食つてくれよ提督。そんで俺は皿を片付けて秘書艦業務終わり！ 提督は疲れてるみたいだからさつさと寝ろ！ ……よし。お粗末様だ。じゃあまた明日！」

竹が執務室から飛び出るようにして居なくなつたことで、大淀と自分が残された。

「因縁の深海棲艦ね……間違いでは無いけど」

やり切れない気持ちでいっぱいだ。

彼女を知らないとは言え、そう表現されたのは素直に寂しい。

「最初に全部教えた方が良かったと思いますか？」

「分からない。……当時は、スチュワートを知らないが故に彼女を相手した時に情も無く全力で攻撃出来る子が居ないと勝てないって考えていたんだ。だから何も言わなかった。絶対に沈まないこと、なんて当たり前前のことを伝えただけだよ。失望したかい？」

「はい。軽蔑しました。当然ですけど私たちにも仲間意識があります。彼女のことを伝

えたかった。凄い子が居たんだって共有したかったんです。でも提督が黙っていたのでそれは叶わなかった。とても残念です。……ですが、提督に失望はしていませんよ」「それはどうして?」

「提督の仕事は極論を言つてしまえば私たちを勝ちに導くことです。時には、提督だけでなく私たちも苦渋の決断をしなければならぬ時はあるでしょう……ですが、例え勝つ為だとしても今回のようなやり方はこれつきりにしてくださいね?」

「それは勿論。次は無いと約束しよう」

そもそもこうなつたのは自分の未熟さの他にも、敵に回つた彼女が未知数過ぎるのが原因だ。

つまりスチュワートも悪い。共犯と言えるだろう。

「その約束を破らない限り、私たちは提督に希望を見続けるでしょう」

「ああ、もしもが起らないように努力を続けよう」

「ふふつ、頼もしいです。それでは私もこれで……今日の書類は貰つていきますね。お休みなさい、提督」

「お休み」

大淀が出ていった扉を眺める。

緊張が解れて、疲れていたこともあつてか一気に眠気が襲つてきた。

「……風呂に入って寝よう」

竹の頑張りもあつて書類仕事は予定よりも片付いたから、今日はゆつくりと眠れそう
だ。

しかし、そんな自分に全く遠慮しない相手は居る。

次の日の朝、それも日が昇る前に事件は起こった。



闇夜、急襲、姑息

吹雪と高波で荒れる海を切り裂いて進む闇と化した集団が進む。その動きは非常にスムーズで停止や減速は一切しない。

どれだけ悪天候でも本調子で動けるのさ。

そう、深海棲艦ならね。

艦娘だったときはマジで寒くて死ぬんじゃないかと思いつつながら哨戒とかしてた記憶があるけど、深海棲艦になってからと言うもの、寒さをあまり感じなくなった。

寒いには寒いけどまだ我慢できるレベルだと思う。でも氷雨は普通に寒そうにしてるし駆逐水鬼と部下たちは平気そうだから正直個人差だと思う。

陽が沈む前から大湊を目標に移動していた俺たちは、とうとう遠くに漁船のものと思われる光の点を見つけられる程までに接近した。

『漁船を発見。Are you ready?』

『……』

ちよつと茶化しながら話しかけるも駆逐水鬼から調教された駆逐艦からの返答は沈黙。数の多さと凶暴さが売りの駆逐艦にあるまじき静かさだけど、これは決して牙を抜

かれて大人しくなった訳じゃない。

今静かなのは全力を出す為に不必要なエネルギー消費を無くしているからで、実際に全力を出した時は文字通り目の色を変えて暴れ回ることを俺は知っている。

一応隠密を心がけて移動中だから大咆哮を上げるなんてことはして欲しくないけど、それでもやつぱりつまらない物はずまらない。

やはりここは何か面白い事でもして主に俺の緊張を解すべきか？

『下らないこと考えてる顔してる』

『そんなことはない』

『日頃の行いって知ってる？』

まずは手頃なサイズのホタテを探そうかと考えていたら氷雨に窘められた。

この半年、事あるごとにイタズラしてたから氷雨が冷たい。それはもう文字通りの冷たさだ。

でも絶交もとい殺し合いに発展しないのは、氷雨もまたイタズラで仕返ししてくるからだ。ある日なんて目が覚めたらイソギンチャクに頭を突っ込んでいた。というか寝てる間にイソギンチャクを被せられてたことがあるからお互い様ってヤツだ。

何だかんだで氷雨も嬉しいからガチで止めさせようとしなくて俺は知っているからな。

『砲身にチューブワーム詰めたのは謝ったじゃん』

『へえ、弾が出ないと思ったらそんな事してたんだけ？』

あの時は弾撃つたら何か出てきて本当にびっくりしたんだけど。なんて言いながら氷雨がジトつと睨んでくる。うん、かわいいね。

『で、漁船が見えたから……何？』

こっちは準備出来てるんだけど、なんて言ってくるのは駆逐水鬼。

ちよつと口が悪いけど、後ろの艦装が グッドサイン b 出してることも分かるように割と

お茶目だ。

『プランAを続行するよ。作戦通りに行動してね』

事前に仕込んで貰った指示に従って駆逐級が行動を開始する。

プランAの内容は、これから駆逐水鬼率いる駆逐級隊に護衛艦を相手に小規模な衝突をしてもらう。そしてそこそこ粘ったら引き返してもらうこと。

そしてそれを俺が遠くから観察することで、向こうからは俺たちの存在は目の前に現れた駆逐級以外気付かれないが、俺たちは一方的に艦娘達の情報共有が出来るいう寸法だ。

漁船の護衛が任務だから過度な追撃はしてこないだろうし、いざとなった時の撤退も簡単だ。

『さて、どうなるかな……』

今まで漁船の護衛任務に割り当てられたメンバーの大まかな人数配分からすると、駆逐艦娘が3人に軽巡が2人くらいだと思っただけ、油断は出来ない。

勝負しましょうなんて煽ったから、警戒されてその倍が出てくるかもしれない。

因みに川内さんが出てくるようなら問答無用で作戦は中止するつもりだ。死神に対して首を差し出すのはバカのやることだからな。

そうこうしている内にドン、ドンと砲撃の音が聞こえてくる。それと同時に漁船の灯りが強くなった。

『おお?』

恐らく誰かが上から大型のライトで照らしているんだろう。

考えたな。あれなら夜間の戦闘でも照らされた範囲だけは探照灯が要らなくなる。その分砲撃や雷撃に特化した艦装を持って来られるんだから、それだけ相手が強くなるということだ。

記憶にある漁船にはあんな強力な灯りは付いてなかったし、やっぱり警戒されてるんだらう。

『それでも漁船の近くだけしか照らせないんだけどね』

それに、夏場はそれで良いかもしれないけど今は冬。艦娘の速度で動いたら雪の反射

が眩しくて逆に視界が悪くなるかも知れない。それに明るくし過ぎた所為で俺たちからは誰が居るか分かりやすくなったまでである。

妖精さんお得意の謎技術によって夜中に太陽を顕現させるなら話は別だけど、ちよつと相手が強くなつたつてくらしいの認識で良いだろう。

『それで艦娘は……球磨さんに能代さんに、松と見たことないのと秋月と、天津風と時津風に……ゲエツ、雪風も居るのか』

ピンクのヤツは誰だ？ 艦装からして駆逐艦娘だろうけど、と考えるけど今は置いておく。とにかく予想通り駆逐級の人数が増えることが問題だ。

それに雪風まで居るとなるとかなり厳しくなりそうだ。運要素を持ち込んだら負けるから、詰みの状況を作つて押し付けるように立ち回らないとダメだろう。

一週間だから戦艦と空母は出てこない筈だ。重巡は基本的に警備府周辺の哨戒に回してるだろうから居ないだろうし。潜水艦も海防艦も……いや待て

『何で占守と国後が居るんだ？』

遠征班や哨戒班、艦載機の偵察をすり抜けてきた潜水艦を確実に葬る為にいつも警備府の防衛してた潜水艦対処のプロフェツショナルじゃん。

俺の知る内では漁船の護衛には配属されたことは無かつた筈だけどいやホント、何で居るんだ？

さてどうしようかな……

とりあえず艦娘の面々は確認したから駆逐水鬼には一時撤退をして貰おうか。いくら駆逐水鬼が率いてるエリート駆逐級だったとしてもあの人数には勝てはしない。

『駆逐水鬼、相手の勢力は大体把握したから一回退いて貰える？ 追撃に注意してね』
『安心して、そんなヘマはしないから』

そんな通信があつてからすぐに砲撃の音が止んだ。

そしてあまり時間を置かずに駆逐水鬼が俺たちの居るところに戻つて来た。

『こつちはまだ被害なし。次はどうするの？』

『漁船を港に戻さないように立ち回る』

艦娘たちからすれば、襲つてきた深海棲艦を“追い返した”だけで倒したわけじゃないから、漁船の乗組員のことも考えて引き返さざるを得ない。

そして漁船を港付近まで寄せてしまうと、護るべきお荷物は無くなったと言わんばかりに艦娘達が一転して攻勢に出てくるのは間違いない。そしてそうなると一気に厳しくなるのは目に見えている。

『それは安心して、ツーンポくらい遅れさせたから』

そしてそれを予防するといった意味では、漁船にそう易々と進路変更させないよう四方から包囲するように駆逐級をけしかけかけて、また四方に散らせた駆逐水鬼の指揮能力はか

なり高い。

『流石。深海司令官金賞は要りますか?』

『要らない』

『そう? じゃあ時間稼ぎ。氷雨、行ってきて』

『打合せ通りね。皆行くよ、引き際を見誤らないで!』

氷雨が駆逐級を連れてまた短時間の接触と戦闘をする為に漁船を襲撃しに行った。

そしてまた漁船を動かさないように四方に散りながら撤退してもらおう。そして氷雨たちが戻ってきたら今度は後方に待機してるクソ餓鬼……PTB小鬼と駆逐水鬼に呼ばれてたチビたちをメインにした嫌がらせ艦隊を率いて俺が襲撃を仕掛ける。

『駆逐水鬼たちは休憩して待機。駆逐棲姫が戻ってきたら今度は俺が交代する』

『了解。その時は起こして』

そのアイマススクどっから出てきた。

吹雪で見辛いけど、一時撤退つてことを忘れてるんじゃないかと氷雨を心配するくらい激しい戦闘音が聞こえてくる。

一言で言っちゃえば俺たちがやってるのは波状攻撃だから、そこまで一気に仕掛ける

つもりは無い。

漁船の最高速度が艦娘や深海棲艦に遠く及ばないのを活かして部隊を入れ替えながらヒットアンドアウェイの戦法を取ること、艦娘の戦力をゆつくりと確実に消耗させることが狙いだからだ。

潜水艦も空母も味方には居ないから、海防艦と秋月はそこまで大きな脅威にはならない。

そして今は深夜帯。提督は寝てるだろうからの確な指示の無いまま現地の判断で漁船を守りながらどうにかするしかない。

問題があるならこの作戦は艦娘の消耗具合によっては時間がかかるってことだけど、漁船から大湊に連絡したところで援軍がすぐに到着するとは考えにくい。

そしてこれは誤算だったけど、寒さは体力的に大きく影響する。勿論漁船の乗組員も例外ではない。

つまり全員を無事に家に帰す為には早く深海棲艦を処理しないといけないから艦娘たちは焦る。そして焦りは隙を産む。

『完璧では？』

まあ、俺と氷雨以外にはいつもと違って艦娘を沈めてはいけないうっていう枷があるけど、まあハンデだよハンデ。

『見せて貰おう、貴様らの力を……なんてね』

防衛、消耗、危機

暴風と寒さ故に深海棲艦も大人しくなると言われている東北の冬、今まで通りなら船内と海上をこまめに交代しながら寒さに耐えつつ乗組員と世間話をして、時折現れる逸れ深海棲艦を撃退していれば終わる筈だった漁船の護衛任務。

「能代、敵を発見したわ」

「雪風、同じくです！」

「あたしもあたしもー！」

「こつちも同じ……待って、これ囲まれてない?」

しかしそんな任務はこのやり取りを切っ掛けに終わりを告げ、艦娘たちは今まで経験したことのない戦いに飲み込まれていくことになる。

深海棲艦に囲まれた、という事実は艦娘たちに大きな衝撃を与えていた。

安全に漁船を護る為には現在海上に居る4人だけでは駄目だと判断した能代が、確実に護る為には夜間の戦闘に向いている全員を海上に呼び出した。

そして艦娘たちが出揃った頃、まるで見計らったかのようなタイミングで深海棲艦が発砲してきて、その一発を合図に深海棲艦が突撃してくる。

「そんな攻撃、雪風には当たりません！」

『オオオ……ヴァアアア！』

深海棲艦の攻撃は急襲してきた割には随分控えめで動いている限りそうそう当たることは無く、艦娘たちは避けた弾が漁船に向かわないように立ち回ることを意識していた。それでも発生する流れ弾は漁船に穴を開けていくが妖精が迅速に塞いでいた。

深海棲艦も駆逐級ばかりで素早く、その所為で艦娘からの攻撃も中々当たらない。また被弾した深海棲艦が後方に退いてしまう為になかなか深海棲艦の数を減らせないでいた。

互いに決定打に欠ける砲や魚雷の射ち合いが暫く続いた頃、深海棲艦が多少の被弾も気にせず一斉に退いていく。

「こらあ！ 逃げるな！」

「追撃するつす？」

「二人は追いつけないでしょ。それに駆逐級ばかりとは言っても数は多かつたから追撃はちよつと危ないかも。暫くは警戒で良いと思う」

「漁船の安全確保を第一に、ですな！」

そう言う秋月の声色は明るい。

一度撃退した深海棲艦の群れは早々戻って来ないという経験則が彼女たちの警戒を僅かに、ほんの僅かに緩めさせていた。

「扶桑さんもありがとうございます！」

「今は灯りで支援するけど危なくなつたら言つて頂戴。機会は少ないけど夜戦も大丈夫だから」

「一回交代するクマ。色々と補充するついでに暖まつてくると良いクマ」

「本当に良いの？」

「じゃあお願いね、と言われた球磨の指示で和やかな雰囲気に含まれたまま、海上で警戒するメンバーが交代する。」

経験に基づいて今まで通りな行動をした艦娘たちだが、今回の襲撃はスチュワートが主動となっていて、深海棲艦の襲撃がまだ始まったばかりだということを知る由もない。

一難が去つたと認識した漁師たちが船内から再び顔を出して配置につき、もう少しだけ沖に進むもうと漁船が少しずつ方向を変えていく。

その直後。

『グオオオオオツ！』

遠方から、深海棲艦の唸り声が接近してきた。

再び乗組員たちが慌ただしく船内に撤収し、扶桑が飛び出てきて灯りを点ける。

少し遅れて一休みしようとしていた4人が海上に出てきた。

そして開戦。

今回の襲撃も駆逐級ばかりで、威嚇と回避に徹してる癖に艦娘たちが弾を節約しようと慎重に狙いを定めると今度は漁船狙つて来るといふ並の深海棲艦とは一線を画す狡猾さを見せた。

これによつて艦娘たちは漁船の安全を確保する上で排除しなければならぬ脅威として相手取らざるを得なくなり、深刻な消耗を強いられることになる。

しかし艦娘たちも百戦錬磨。やられっぱなしでは終わらない。

巧みに深海棲艦を誘導して爆雷に引っかけたり、殆どノーモーションで一撃を急所に撃ち込んで致命傷を負わせたりと熟練の技を見せた。

『ガアア……』

漁船を囲むように襲つてきた深海棲艦の包囲網が少しずつ欠けていく。

防戦一方だった戦局が変わろうとしたその時、深海棲艦が再び波が引くように退いて

いった。

「……追撃する?」

「二度あることは三度あると言うし、まずは漁師さん達に引き上げるように説得かな?

そして提督に連絡を入れて貰って。あとは弾とか燃料が心許ない人は船内で補充してきて」

「了解」

「ちよい待つ……マジ!? もう次の敵来たんだけど!」

『瑞鳳さん、警備府に連絡をお願いします』……桃、騒がない。船内に戻って漁師さんの説得に行ってきた」

そう言われて桃が船内に引き返した次の瞬間、今度は風に煽られた高波に紛れて高笑いを上げながら小鬼と呼ぶべき小さな深海棲艦が多数で出現した。

ケラケラと笑い続け、時折魚雷に乗ってサーフィンのような恰好を取ってふざける深海棲艦が、^{ナマモノ}海産物や時々魚雷を放ってくる。

そんな小鬼たちは駆逐級並に素早い上に的が小さいので攻撃が当たらず、しかも荒ぶる鷹や涅槃、幽波紋使いのポーズで攻撃を回避することで艦娘たちの神経を逆撫でしていた。

そして今まで同様、戦闘開始から暫く経った頃に投げキッスをして大きく手を振りな

がら超スピードで去っていった。

「クマー！ ツ！ アアアアアッ！」

「落ち着いてよ！ すぐに次が来るだろうからこんなことでエネルギー使わないで！」

大咆哮を上げた怒れる球磨を数人で宥める。

二人掛かりで羽交い絞めして押さえ込み、正氣に戻した時には球磨の足元には小鬼だったものが転がっていた。

「ガルル……ふう、ちよつとスッキリしたクマ。大きな被害はまだ出てないクマ？」

「被害は無いけど……このままだと私があと1、2波で弾薬が尽きそうだよ」

「……」

時津風の答えは、ほぼ全員の現状を表していた。

小鬼の後にも駆逐艦が押し寄せては引いていく波のように何度も襲撃してきて、それに対応するために艦娘たちは弾薬の消費は避けられず、回避に徹した深海棲艦はまだ多く残っている状態のまま今に至る。

「漁船に置いてた予備の弾薬はあとどれくらい残ってるクマ？」

「もう殆ど残ってないわ。使い所を見極めないと厳しいと思う」

「大湊からの援軍は？」

「既に三水戦が出撃してるみたい。島風が先行してるらしいけど……まだ掛かりそう」

このままでは勝てないと全員が悟っていた。

何か手を打たないといけないということも。

「増援が来るまで全力で時間稼ぎするしかない、か……」

「いざとなったらあたしがやりますよ?」

辛気臭くなった艦隊に、朗らかな雰囲気で声を掛ける艦娘が居た。

誰であろうか、雪風である。

「雪風……」

そしてその言葉を吟味して目を瞑り、決意を固めた能代が苦悶の表情を浮かべながら言う。

「今から最低なことを言う。仮にその時が来たら、漁船を護る為に犠牲時間稼ぎしてになつてくださ
い」

「了解しました。……安心してください! 雪風は絶対に沈みませんから!」

「はあ……雪風が言うとおひよっこり帰ってきそうだから心配できないわね」

天津風の一言に、堅くなった雰囲気が軟化する。

雪風の言葉が強がりでも何でもないと感じたからだ。

「それにしても、まさか駆逐級相手にここまで手古摺るなんて思わなかったなあ」

「しゅっしゅっしゅ……この常軌を逸した駆逐級の練度、今までの常識の通用しない深海棲艦の戦い方、そしてわざわざ漁船の護衛を狙ってくるセコさ……この名探偵シムツシュ・ホームズにはお見通しつす！」

「えーなにになに？ 教えて教えて！」

「敵の旗艦ドクはスチュワートっしゅ！」

輝いた目を向ける時津風に占守が胸を張って答える。

それを聞いた時津風を除く全員は溜息を吐いた。

その名前は彼女たちにとって『敵に回すと最高に面倒くさいヤツ』という認識で一致しているからだ。

「到着っ！ みんな大丈夫!？」

神速の駆逐艦が艦隊の下に駆けつけたのは、全員が消耗しきった後だった。

幾度となく繰り返された襲撃について弾薬が切れ、どうしようも無くなった艦娘が出始めて、時間と共に増えていく。

そして遂に、まともな反撃すらされなくなった深海棲艦は、満足げに後方に引き返していった。

「島風、雪風の援護に言つて頂戴！ あつちの方向よ！」

「オウツ!? 漁船の守りは？」

「私が居ます」

島風の言葉に答えるのはどつしりと構える扶桑。

「私もいるよっ！」

再び海上に出てきた桃。

「あつ連装砲ちゃん、どこ行つてたの！」

島風の後頭部に飛びついた不思議な艀装。

その連装砲と、抱き着かれていた島風に声を掛ける艦娘が一人。

「その子は私に届け物があつたんだって。ありがとね」

「ふう、これからは瑞鳳も一緒に一緒にします」

夜間作戦航空要員

お届け物を渡された軽空母が、夜の海に立つ。

敵の本陣が近づいてくる。

援軍の本隊はまだ来ない。



攻勢、微光、参戦

俺たちにとって良い意味で混沌としている戦況を見て呟く。

『完璧すぎる……』

駆逐級の機動力で漁船を釘付けにしつつ艦娘たちを少しづつ消耗させていった。

始めは威勢よく反撃してた艦娘たちが少しづつ追い込まれていくのを安全圏から観察していた時は嗜虐心が鎌首を持ち上げて、我ながらヤバイ扉を開けちゃったかなあ？
なんて考えたくらいだ。

それくらい、今回の作戦はハマっていた。

時間が経つにつれて有利になる戦局に深海棲艦のボルテージは上がる一方で、極度の興奮状態になった駆逐級を宥める為に駆逐水鬼は奔走しながら愚痴を零していた。だ
けど駆逐級が大活躍したことは事実で、その顔は嬉しそうだった。

一方で氷雨はと言うと、艦娘から補足された途端に集中砲火を受けたとのことで被害
状況は深刻。また沈みたくはないと後方に引き籠った。

その報告を受けた時は俺の仇かよ、勝手に殺すなって鼻で笑ったけど、敵討ちかたきされる
程度には愛されてたのかなあなんて考えに至って、途端に恥ずかしくなった。

そうと決まれば照れ隠しだ。恩を仇で返すようで悪いけど――

『漁船をジャックしに行こうかと思う』

『分かる言葉で話して頂戴』

『例えばチェスで、漁船はキングだ』

一番動けなくて一番取られ守らなちやいけなないモノという意味ではピッタリだろ。

『乗っ取ればチェックメイトってね』

『乗っ取れば……なに?』

『嘘だろ?』

駆逐水鬼はチェスを知らないのか?

まあ俺だって駒の種類くらいしか知らないから人のことは言えないけど。

『?』
『?』
『?』

おう駆逐級共はアホ面晒してんじやないよ。

お前らが理解してるなんて微塵も思っちゃいねえから。

『漁船の中に俺か氷雨か駆逐水鬼が入り込んで、艦娘と船員たちに』この船はいただいた

!』って言えば勝ちってこと』

『それをする意味は?』

『楽しいからって嘘だよ嘘。艦娘の援軍が来ても意味が……説明が難しいな』

語彙力不足ですまねえと言いながら肩を叩いて氷雨に頼んだとパスすると、嫌そうな顔をしながらも引き継いでくれた。

『そもそも私たちは深海棲艦の考えを大湊警備府……引いては日本の大本営に伝える使者のようなモノで、漁船を巡る攻防をしているのは漁船と乗組員っていう人質を手に入れる為』

『人質を手に入れたら艦娘は手出し出来なくなるから援軍が来ても無駄。そのまま大湊に直行しても交渉できるって訳？』

アンタ頭大丈夫？　なんて言われるけど知ったこっちゃない。

テロなんて昔からこんなもんでしょ。

『まあそういうこと。既にポロポロの艦娘たちを蹴散らして漁船を制圧すれば、鎮守府に乗り込むっていう全深海棲艦未踏の大偉業だ。歴史を動かす準備は良いか？』

そう言うのと駆逐級たちが大咆哮を上げた。

俺が煽った反応がコレとか、ライブでフロアが熱狂した時と同じ最高潮の雰囲気を感じる。凄まじい一体感と押せ押せムードがヤバイ。

勢いのままに最後の仕上げだと駆逐級と小鬼たちを連れて漁船に向かうと、信じられないものを見た。

「??????」

別次元の速度に膝まで浸かつてる島風がここに居るのは分かる。
扶桑さんもまあ、運バッドラックなが無いだけで万能選手だから夜戦に参戦してもおかしくはない。

だけど……

なんで瑞鳳が居るの？

俺の困惑を後ろのバカ共駆逐級は待ってくれない。

流れを止める訳にもいかず、押されるように前に進む。

ここままでやっておけば勝ち筋よりも負け筋を見つける方が難しいけど、だからと言って何もしない訳にもいかないのも事実。

『ナ級たちは戦艦に警戒！ 可能だけ撃墜して！』

『攻撃出来る艦娘は少ないから落ち着いて対処して！』

どんな指示を出そうか悩んでたら二人が部下に指示を出した。

素早く制圧。とかじゃないからかなり堅実な指示だと思う。だったら俺が出す指示は……

『黄色いのを自由に動かさせるな！ 徹底的に包囲しろ！ 艦載機は無理に墮とそうとしないで大丈夫だから、とにかく生き残れ！』

二人には出来ないような細かい指示だった。

内容は島風の封殺。手が付けられなくなるトップスピードだろうと、乗られる前に圧倒的物量差で囲んでしまえば正に俎板の鯉。

瑞鳳は俺が相手しよう。

『最後の仕上げだ、行くぞお！』

『『ウオオオオオオオオ！』』

全員に発破を掛けたは良いものの、俺自身のモチベーションはと言ったら……ゴミだ。

何故なら俺が瑞鳳に勝とうが負けようが戦況に大した影響は無い、消化試合みたいな感じだと思ってるからだ。

それに所詮は夜戦に出てきた瑞鳳^{軽空母}。さらつとこなしてから船内に侵入、無線で大湊に勝利宣言をすれば良いやと思ってる。

『まあやってみようか。どうにでもなるはずだ……ん？』

吹雪の中に雪とは違う煌めきが見えた。目で追い顔を向けた……その時だ。
チツ

鼻先に明らかに自然的じゃないダメージが入った。

煌めく何かを注意深く見てみると、白以外の弱い光を放っている。

『艦載機……嘘だろオイ』

誰だよ夜戦の瑞鳳は軽く相手に出来るって言ったの？

『まさか夜戦に対応してる空母が大鷹さん以外にいたとは』

『深海棲艦が思ってるより私たちだって進歩してるの！』

『成る程……面倒だな。いっちょ大破してみるか？』

そう言つて海中からタコを呼び出す。白く、デカくなったタコはジャコンと、脚に持ってる砲と魚雷を一斉に瑞鳳に向けた。

連射性を棄てた代わりに瞬間火力がとんでもないことになってるから、喰らえば一溜りも無いぞ。

「嫌やだよ！ 艦爆隊、お願い！」

あゝ、ビビツてくれよマジで……沈めちゃいけないってハンデが地味に面倒くさいんだって！

艦載機を墮とせるような砲はあるけど、夜の暗さと雪が相まって艦載機の撃墜は思っ

てた以上に難しい。

『助けてハ級キユえもくん!』

俺の情けないヘルプに応じて数体のハ級がやって来て、飛んでる艦載機を認識するや否や撃墜しにかかった。

フェアじゃないけど、勝てば良からうの精神だ。

如何にも悪役っぽく薄くニヤつく俺と、被弾が嵩んでボロボロになりながらも闘志を目に漲らせる瑞鳳の頭に砲を向けるタコ。

島風の方は駆逐級で構成された時々爆けるおしくらまんじゅうになってるし、扶桑さんは小鬼たちに良いようにやられてる。……やっぱり戦いは数だな!

『何か言い残すことは?』

「……スチュワートって知ってる?」

時世の匂じゃなくてなんか質問が飛んできたんだけど。

『蕁麻疹が出るまで伊達巻の試食に付き合った』

そもそも俺以外の艦娘スチュワートなんて知らないけど、こんなことやったのは俺くらいだろう。

取り敢えず本人確認って事で正直に答えた。

「やっぱり……だから誰も沈まないんだ」

『深海棲艦にも色々と事情が有ってね。降伏して?』

「深海棲艦を相手に降伏したらどうなるかわからないじゃん。漁師さんたちが居るならもっとそんな事出来ないよ。……あ、ちよつと遅かったみたい」

『え?』

待つて、猛烈に嫌な予感がするんだけど?

!!

タコが俺の右側面に脚を伸ばした。

直後、凄まじい音と共に脚が吹き飛び、破片が俺の体と顔にベチャつと叩きつけられる。

『ホワアイ!?!』

「シッ!」

殺意を感じ取った瞬間に脊髄でバックステップ。

爆風の中から現れた影は既に、魚雷を振りかぶっている!?

『ま!?! くそあー!』

横っ飛びして回避!

さらなる追撃に備えて魚雷を投げておくと、ようやくその影は動きを止めた。
「みんな、もう安心して良いよ！」

ほうら、嫌な予感はどうな時だつてよく当たる。

聞き覚えも心当たりもあるけど、その声は今、一番聞きたくなかった。

「私が来た!!」

笑顔で胸を張つてる死神がそこに居た。

死神、閉幕、再開

「私が来た!!」

目の前に立ち、笑顔で胸を張るのは川内さん。

夜戦時は非常に頼もしかったその存在は、敵対する立場となった今では死神だとしか思えない。

援軍艦隊を置いてきたのか一人だけど、その存在感は誰よりも大きい。今も俺のことを漁船から放たれる灯りで爛爛と輝く双眸で見据えてくる。

大して感じない寒さとは全く別の理由で多くの臓器が縮みあがり、蛇に睨まれた蛙とは正にこのことかと思いつながらもどうにかならないかと突破口を探す。

戦闘? 死神を相手に出来る訳ない。

撤退? 死からは誰も逃げられない。

交渉? 死は耳を持ち合わせてない。

……どれを選んでも上手くいく未来が見えない。

状況は絶望的だった。

『』 …… 『』

チラリとハ級たちの方を見ると、無機質な視線を俺に寄越したまま固まっていた。

助けて欲しいのか？ 俺だって助けて欲しいんだけどなあ!! 川内さん死から首に鎌掛けられてるから下手に行動出来ないの！

さつきまでは頼りにしてたのにいざとなると使えないヤツらだな、なんて自分でも現金だと思いい心の中で愚痴る。

それにしても、何時まで経っても止めを刺されない。

夜戦大好きな川内さんのことだから、それはもうあつという間にボロ雑巾みたいに見えるかと思つたらそんなことは無く、その視線は多少は歯応えのある獲物を見つけた狩人の目から、興味深々と言つた仲間を見る目が変わつていた。

「瑞鳳ちゃんから聞いたけど、本当？」

『ン天使イ!』

「え？ 天使？」

間違つても川内さんの事じゃない。絶体絶命のピンチに光明を与えてくれた瑞鳳の事だ。

〃天死を振りまくに昇らせる者〃 って意味では川内さんも天使で合ってるだろうけど。

『 野郎ども撤退! 撤退だア! 』

「あつ、待つて！」

『嫌だ！』

八級を盾にするようにして逃げる。2体の八級が吹き飛んだけど、流石にもうボロボロの艦隊を放置して追い討ちは出来なかったのか瑞鳳に止められたのか、川内さんは追ってこなかった。

斯くして、完璧だと思っていたプランAは失敗という形で幕を閉じた。

折角消耗させた艦隊も放り出して撤退するのは勿体ないけど、これから来るであろういつもの夜戦メンバー……好戦的な夜戦の精鋭たちが来るとなると苦戦は免れない。

恐らく報告などから提督もこの状況の解決策も用意して、ブラスタータービンを搭載した速吸さんも向かわせると思うから消耗したとか人も復活するだろうし、そしてそこに援軍まで加わるとなると彼我の戦力差はヤバいことになる。

『——って訳でプランAは失敗かな』

『ごめんなさい。もつと早く消耗させていれば……』

各々が隙を見ついたり見逃されたりして漁船から離れて、今はまた集まって追撃に注意しながら話し合いをしている。

が、空気が重い。勝ち確の押せ押せムードから一転、まさか撤退する羽目になるとは

誰が思ったか沈痛な反省会みたいな雰囲気にもまれていた。

……ニヤニヤしてる俺を除いては。

『ねえ、何が可笑しいのよ』

『別に？ 確かにプランAは失敗したけど、プランDに移行すれば良いだけだから』

『プランDってなんのこと？』

『姫級たちに動いてもらう』

何を当たり前のことを聞いてくるんだ。

俺たちの手に負えなくなったら手に負えるヤツに投げてしまえばいいだけだろう。

タコにアレを出してくれと言うと、口の付いた黒いボールを取り出した。

格好つけながら『時は来た。機を逃すなよ』なんてメッセージを伝えて、口の中に駄賃として鱧と捌いたフグを入れて飛ばす。

タコが羨ましそうに触手を伸ばしてるけど俺には関係ないから説明を続ける。

『大湊警備府からそこそこ離れた場所に待機して貰ってたんだよね』

『どういう事なの!?!』

しかしそういう駆逐水鬼の表情は険しい。

うん分かるよ？ 折角『駆逐級がメイン』の作戦だと思って喜んで参戦したら全然そ

んなことありませんでしたくではキレても仕方ないだろう。

「ただど言い訳だつてちやんと用意してあるんだ。」

『敵を騙すなら味方から。全力で戦えたでしょ?』

『それはそうだけど』

『それにプランAだけで上手く行ったらそのまま続行するつもりだったんだよね。まあ、運が悪かったつて事で許してくれい』

『……納得出来ない』

『じゃあこう言い換えよう。重巡や戦艦ですら屠る大湊きつての夜戦集団を俺と氷雨と駆逐水鬼の部下だけで釣り出せた』

艦隊一つ潰した上でこれとか勲章モンだぜくなんて言うのと、渋々ながら納得した様子を見せた。

実際に、駆逐級の艦隊なんて鎧袖一触出来る夜戦メンバーズをこんなところで駆逐級の相手をさせるのは勿体なさすぎる。

『確かに漁船襲撃は失敗したけど、最初から全部上手くいくなんて思つてないよ。だからプランニングは綿密に立てておいたから安心して』

『分かった、分かったから。次はプランDだっけ? 私たちはどうすれば良いの?』

『夜戦チームが引き返したと思われるタイミングで、また漁船にちよつかいを掛けに行
くよ』

『……やることがセコい』

『どんなにセコくても勝てばいいでしょ。それに、何でも貫く一番槍を砕いた時点でMVPだよ多分』

出来ることを積み重ねて行けば結果は付いてくる。

川内さん達には勝てないから戦わない。だけど、補給が終わった護衛艦娘たちには勝てるならそれを続ければいい。

『敵が嫌がることは積極的にやれってよく言うじゃん？』

『うわあ……』

『今決めたわ。アンタは敵に回さないようにする』

『褒め言葉として受け取っておくね♪』

『死ね』

『そろそろか？』

撤退からそこそこ時間が空いた頃。

護衛艦隊は補給を終えて元通りになったとして、そうなると川内さんたちを遊ばせる理由はないだろうから引き返すと思われる。

それは大歓迎だから良いとしても、一緒に引き返すであろう漁船をそのまま逃す訳にもいれない。乗組員の人には申し訳ないけど、もう少しだけスリルを味わっていて欲しい。

だけど今回は夜戦チームがまだ残ってる可能性を考慮して、小鬼たちと駆逐級数匹を連れて俺が威力偵察に向かうことになった。

正直行きたくない。

でもずっと後方指揮官面してたら颯爽だしなあ……

『あ、そこに艦載機。墜として〜』

『！ ゴアア』

ナイスショット。

でも位置バレちゃっただろうし一回引き返すか？

「見つけたよ」

風の音に紛れて声が聞こえてきた。

その直後に、小鬼が魚雷で吹き飛ばされた。

艦載機を墮としてから発見されるまでの間隔が短すぎる。

そして誰かが既に近くに居ると理解する。

すぐに感覚的にも気配を察知して、波の向こう側を睨む。

果たしてそこに居たのは……

「嫌な予感はしてたんだよな」

「僕らのやる事は変わらないけどね」

嫌なものを見るような目でこつちを見ながら頭を掻く嵐と、困ったように応えながら視線と砲身をこつちに向けたままの時雨だった。

そのすぐ後ろには補給を終えたのか、臨戦態勢の護衛艦隊が見える。

『なんてこつた』

この二人が居て川内さんが出てこないなら引き返したと考えて良いと思う。だから戦闘を続行したいけど……嵐かあ。

慎重で堅実な戦い方と大胆で爆発力のある戦い方の使い分けが上手い。チャンスを決して逃さない戦術眼がヤバイ。そしてそれらを活かせる技術があるのがヤバイ。

隙を見せない癖に、こつちが隙を見せたら一発アウトにしてくる戦い方は心臓に悪いから相手にしたくない。

一方で時雨も時雨で厄介だ。特に雪風と時雨が一か所に集まるのは条約違反だと思

う。
時空が歪んでるとしか思えないレベルで砲弾が当たらなくなるのは当然として、深海棲艦の魚雷だけ不発弾になりかねない……幸運量保存の法則が乱れるだろ！

「さて、こてんぱんにされる準備は良いかい？」

『抜かせ。最後に笑うのは俺たちだ』

漁船周辺の決戦が始まる。

再臨、抗戦、暴走

『攻撃が当たらないヤツ
時雨と雪風、島風は無視だ！ 確実に戦力を削げ！』

『ギギイ！』

俺は勝つ為に小鬼達に指示を出し、小鬼はそれに応えてくれる。

だけど戦況は非常に宜しくない。

「球磨たちのこと舐めすぎじゃないクマ？」

『危ねっ！ もつとお淑やかに痛っ!? 艦載機い……』

人数が増えた分だけ負担を分散できるから適宜交代することで消耗を抑えつつ安定して戦える——なんてことはなく、頭数と手数を増やして被害が出る前に決着をつけてしまおうなんて考えるのは如何なものか。

絵に描いたような先手必勝戦法ではあるものの艦娘の数が多い事には変わりなく、実際に最後の仕上げだと舐めて掛かってたチンケな艦隊では小細工を弄する前に艦隊の戦力を削がないとどうしようもないという事実。

戦力差が大きすぎてどうこうする前に返り討ちされそうといった『戦力の小出し』による負けフラグがバベルの塔の如く聳え立っていた。だけど折ってくれる神様は居な

いという悲しい現実。

完璧なジリ貧。

善戦とかそんなレベルを通り越して一方的でさえあるけど『じゃあ仕方ないね』と諦めたくない。自分から売った喧嘩である以上、相手より先に俺が冷めるのはダメだと思う。

勿論、不利を悟った瞬間に一時撤退しようとしたけど、小鬼たちでは止められなかった島風が無尽に暴れている以上タダでは逃げられそうもない。だからと言って俺一人を逃がすために犠牲になれなんて言うほど非情になれる気もしない。これでも俺を信じて……るかは分からないけど付いて来てくれたから。

氷雨たちには連絡したけどまだ到着しない。この状況をひっくり返すのは無理だと判断して見捨てられた可能性も考えられる。

でも、最低でも小鬼たちは逃がすのが俺の責任ってヤツじゃないか？

『俺に任せてズラかれ野郎ども！』

なんと、小鬼達は無事に撤退した。

まさかまさか、本当に艦娘たちのターゲットが俺個人だったとは露程も思わなかった。深海棲艦を一匹でも多く沈めるものとはばかり。

そして今は嵐が目の前に居て、俺を逃がさないように二人を囲んだ包囲網を敷かれてしまった。こうなったらもう勝ち目は無いだろう。

海中にはタコがまだ残ってるけど包囲網が駆逐艦中心に構成されてる以上どうにもできない。

漁船は瑞鳳と扶桑さん、海防艦二人と松とピンクと能城さんに護衛された状態で運航を再開し始めた。

完敗である。

『何を間違ったんだろうなあ』

「意識が戻った時、真っ先に帰って来なかったことだな」

相変わらず嵐はズバツと言ってくれる。

でも帰るも何も、どうせなら何かしらの手土産は欲しいじゃん？ 結果として巻き込

まれたと言うか余計なことに首を突っ込んだ形になったけど。

『良い勝負になってたら良かったんだけど、どう？』

「流石つつーか……汚すぎるな！」

『ヒドい』

なんて言いながら嵐の魚雷目掛けて一発。

瞬時に魚雷を切り離して誘爆を防いだのは流石だけど、距離を取ることに成功し

た。

「ただとすぐ後ろには天津風が。」

「そういうところなんだけど……さっさと降参して、明石と夕張に直して貰いなさい」

頭の中に工具を手に目を輝かせながら悪魔らしい笑みを浮かべる二人が出てきたんだだけだ。

……絶対に碌な目に遭わないだろ。

貴重なサンプルとか言っておんな事やこんな事をされて二度と消えないトラウマを植え付けられそうさ。工場で虚ろな目をして独り言を呟き続ける俺の姿がありありと浮かんでくる。

『くっ、殺せ！』

「なにバカなこと言ってるのよ」

畜生……結局のところ勝手に油断して返り討ちとか、あまりにも恰好が付かないだろ。

「ただとタダでは終わるつもりは無いと、ニヤリと笑う。」

『ククク、今頃は大湊に深海棲艦の大群が押し寄せているだろうよ。つまり俺は陽動！

こんなところまで川内さんを釣った時点で俺の勝ちだあ！』

言ってやったぜ。

負け犬の遠吠えだけでもあいいや、スツキリしたし。

あとは盛大に自爆すればパーフェクトだけど、流石にそこまではテンションがアガつてない。戦利品俺の身柄くらいはあっても良いでしょなんて言う理性がブレーキをかけた。邪魔しやがって。

最後に、衝撃の事実慌てる天津風の顔を拝もう。

「ふーん……」

おかしい。まるで些事を聞いた時と同じ反応だ。

他の面子は!? 誰も慌ててねえじゃねーか。

「なによその顔? まさか提督の指揮下で私たちが敗北すると思ってるの?」

『ツー!』

嘘だろ? 提督めつちや信頼されてるじゃん。

いやでも、確かに大本営から課された任務や作戦では失敗らしい失敗はしてないし……もしかして提督ってかなり優秀?

「言い残すことは無い? それじゃ、またよろしくね」

『させない!』

何者かに突き飛ばされて吹き飛んだ天津風は唸る高波に尻餅を付き、砲弾は彼方へ飛んでいった。

そしてなんと、包囲網に突っ込んできたのは氷雨だった。

『どうしてここに』

『勝手に死のうとしないで』

『エッ』

なにそれヤンデレみたい……そういえば微妙に病んでたわこの子。独りは嫌だったんだよね。

ほら、丁度良いところに他所で建造されたから義理とは言え姉の時雨が居るから仲良くしてきなさい。

「スチュワートに執着する駆逐棲姫……なるほどね」

ダメそうだ、なんか怖い事言ってる。

『死にに来たようなモンだ。引き返せ』

『無理！』

『それはどういう』

「疲れた子は補給しておいで！ その間は穴埋めするから！」

川内さん居るじゃん！ 今まで居なかったのに!?

『まさか』

川内さん相手にここまで逃げてきたのか？ いやいや此処に来ても袋の鼠、飛んで火にいる夏の虫だぞ？ 逃がされたんだらう。

『こうしたのは私だけだよ、私たちを巻き込んでおいて諦めるの?』

『……そう言うのズルくない?』

『うん』

「あつちの駆逐棲姫は私の獲物だから、盗らないでね!」

殺る気満々の死神含めた艦隊相手に徹底抗戦しろって?

自殺行為だけどやるしかないじゃん。

『そつちこそ勝手に沈むんじゃねーぞ』

多少の被弾は許容する。

『まだまだあ!』

強風に煽られる霰の方がまだ痛かったぜエー! ツ!

あつ魚雷はダメだって。死んじゃう死んじゃう。

『やれ』

「ひあっ!？」

『手癖が悪くて済まん。隙ありだ』

そう言つてビクリと全身を震わせた時津風から砲を取り上げる。

確かに首筋と背中の下ら辺を撫でるように指示したのは俺だけど、姉の弱点を他人に教えるような秋雲も秋雲だ。

そしてなんでタコはタコでご満悦な雰囲気になつてるんですかねえ……ド変態め。

b

これは世代交代次のタコが必要かなあ……なんて思つたら他の陽炎型の三人が襲いかかつてきた。だから魚雷はダメだつて！ いや、一発くらいならイケるかもしれない。

「あつ、待つてー!」

『グアアアアアッ!』

タコ目掛けて放たれた魚雷を体を張つて受け止める。

尋常じやない痛みが駆け抜けるけど、思つてた程じやない。多分アドレナリンとかで脳ミソがヤバイことになつてんだろなあなんて思いながら砲を撃とうとすると、左手に持つてた砲が無くなつた。

というか左腕の肘から先が無くなつた。

『は?』

「ちよつと!」

オイオイオイ、見なきや良かったわ。

認知したからなのか、今まで感じたところが無いレベルの痛みが襲いかかってきた。

『アアアアアアアアアアア!』

涙でぼやける視界に映る光景を第三者の視点のように冷静に見ると、パニックで真つ白になった頭で身体を勝手に暴れさせているらしい。

視界の端でタコが真つ赤になつてるのが見えた。最初から本気出せやなんて思いながらも、理性を棄てて野獣のように暴れまわる俺の身体に対して止めを刺さないように遠慮している艦娘たちにエールを送っていた。

ほら、頑張れ頑張れ。

死にかけの駆逐艦一人くらい簡単に止めてみろよ。

ああ! 違う違う、そこは右に避けるんだよ。

はあつ!? なんだこの神エイム!?

あれ、手加減してるとは言え川内さんと対等つてかなりいい勝負じゃね?

しかし、自分が命を削りながら戦う視界何だかんだ面白かつた見せ物もしばらくすると終わりを迎えた。

後ろから誰かに捕まったらしい、ということが感触で分かった。

『こんなモザイクを、剥がすなんて！ なんて嫌らしい人でしょう……』
言葉は碌に聞こえず、意味も分からなかった。

だけど身体は止まり、意識は暗転した。

再起、呼称、萎縮

目を覚ますと、そこは明るい天井だった。

深海の暗闇でも広大な空でもない。

随分と見慣れた天井だった。

幾度となく俺を見降ろした蛍光灯。

懐かしい天井だった。

『工廠?』

ウソだろ?

帰って来てもらうなんて言いながら本当に連れ戻すヤツがあるか? 元々仲良くしてたのは事実だけど敵である深海棲艦だぜ?

でもいつかは情報を抱え落ちしない為にも帰ってこないといけない訳で、帰ろうとする意志は実際あった。寄り道し過ぎただけで。結果として全く意図してないタイミン
グで帰って来ちゃったけど。

チラリと見渡すと窓の外は暗くて、あれからどれだけ経ったのかがイマイチ分からないけど、砲撃の音とかが聞こえてくるから時間はあまり経ってないと思う。

それとは反対に工廠の中は不気味な程に静かで、工廠明石とタ張の主も居なさそうだ。

そうと決まれば脱走するしかあるまい。と決意し行動に移したところで、右手が何かに固定されたような感覚を得た。

『……』

右手の方を見ると、険しい目つきで俺を睨んだままの氷雨が居るではありませんか！
目がガラガラしてゐるから超怖い。

『は、ハアイ？』

『……』

しかも相当ご立腹。

にこやかさを意識して笑った顔の口角が引き攣るのが分かる。

どないせつちゆうねん。

途方に暮れてたところで無造作に小さな紙が渡された。

それを受け取り中身を確認する。

【君たちの艤装は君の部屋にある】

『へえ……』

漁船を人質に取った作戦で攻めたら艤装を人質に取られた。因果応報ってヤツだ。

自分のことは棚に上げてやってくれたなど、悔しさ半分と怒り半分で紙をグシヤリと

潰す。

丁度ゴミ箱があつたから投げる——外れ。右手なら入つてた。

『ん?』

左腕が生えてるやんけ!

多少動かしても違和感が無いとかどんな技術だ。でもそう言えば、艦娘の周りつて魚雷を始めに爆発物だらけで四肢なんて簡単に吹き飛びそんな環境なのに欠損した艦娘つて見えないな。やっぱり謎の技術で直してたりするのかな? 妖精さんが一番フアンタジーだ。

でもそんな妖精さんだろうと、真つ白な俺の腕を見る限りだと深海棲艦と化した身体はどうしようもなかったらしい。まあ俺は俺だし、見た目なんてそこまで気にしなくても良いでしょ。艦娘みたいな今をときめく乙女じゃねーし適当で良いんだよ適当で。

なんて、すっかり思考がズレたところで氷雨が声を掛けてきた。

『部屋場所は分かるの?』

『まだそこまでボケてないよ』

不自然な程に誰も居ない廊下を氷雨を連れて進む。

足音は俺の分だけなのもあり非常に静かだ。

……妖精さんの謎技術に戦慄したばかりだけど、深海棲艦も深海棲艦でヤバいというのを再認識した。その原因は浮遊してスウーっと音もなくスライド異動してる水雨。

海の上なら艦装の不思議パワーで浮いてもまあ……でギリギリ許せたけど、流石に陸上でも浮いてるのはヤバイ。ドラ○もんかな？ でも多分、然るべき研究機関に預けたところで何の成果も得られないんだろなあ……

外からは依然として微かに戦闘音が聞こえてくるからのんびり考え事なんてしてて良いのかと思わなくもないけど、時間が惜しいならもつとちゃんとした措置がされてるだろうし、俺を俺の部屋に呼ぶことに何かしらの目的があるんだろう。

『しかしまあ……』

何が艦装は俺の部屋にあるだよふざけやがって。でも艦装が無いとまともに逃げられない以上、罨だと分かっているも乗らざるを得ないのは癪に障る。

でも結局のところ俺の部屋で何が起こるか。これに尽きるだろう。

俺と氷雨を待ち受けていたのは待機していた熟練の艦娘たちで、即座に捕縛されて拷問に掛けられるような未来は流石に無いだろう。悪くても捕まって深海棲艦に対する

人質。良い方向に振れたら結構和やかな雰囲気では話が出来るかもしれない。

「ただどそんな皮算用は、久しぶりに戻った部屋に入った直後に裏切られることになった。」

「君たちに頼みがあるんだ……出来るだけ早く戦線に出てくれないかな？」

タコが透けて見える大きな網で出来た容器と、氷雨のものとと思われるコンパクトな魚雷や砲を両脇に置いてあるソファに腰かけた提督がそこに居た。

第一声がまずおかしい。まさか俺たち二人を戦力としてカウントしてるとは誰が思うだろうか。見ろ、ヤンキーみたいな駆逐艦が『ウソだろ……？』みたいな顔して固まってるぜ。多分俺も似たような顔してると思う。

『裏切られるとは考えなかったの？』

氷雨が尤もなことを言う。

「そうだそうだと便乗して俺も言う。」

『艦装を受け取った直後にアンタの頭を吹き飛ばすことだって出来るんだが？』

「出来るものなら……やってみたいらしい」

俺の言葉を受けた提督は立ち上がり両手を広げた。

口角をやや持ち上げ更に続ける。

「そうしたところで次の提督が大湊に配属されるだろうね。深海棲艦との戦いはこれからも続いていくという訳だ」

『……………』

そして突然、深海棲艦の抱える問題の本質を突くようなことを口にした。

コイツは何を、何処まで知ってるんだ？

「深海棲艦の目的は知っていたよ」

俺たちの考えを全て見抜いたようなタイミングでのカミングアウトに言葉が出てこない。

なんで知ってるんだとか、どうやって知ったのかとか、まさか世界線的な何かに接続したりしたのかとか訊きたいことが山ほど出てきた。

するとまたしてもタイミングよく提督が口を開く。

「深海棲艦の大群が攻めて来たから避難するように言ったところ港湾棲姫が硬い口を開いてね」

『……………』

成る程。

港湾棲姫なら確かに知っていてもおかしくはない。港湾水鬼が不肖の妹だとか言うてたし深海での会議に参加したことはあるだろう。そして、平和の為に戦うという矛

盾を嫌がり、北方棲姫と放浪して大湊に辿り着いたんだろうな？

そして、大湊でゆっくりしてたら遂に深海棲艦の大群がすぐ近くまでやって来たから、戦いに終止符を打つ一助として提督に話した……といったところか？

流石に妄想が過ぎるけど仮に、仮に合つてたとするなら——そうだ、カマかけてみよう。

『負けるつもりか？』

「その為の君だろうか？」

合つてた——！

つまり俺は自分から持ち掛けた勝負に敗れはしたものの、中枢棲姫の掲げる深海棲艦としての意思『大本営や提督が深海棲艦と落ち着いて対話するようにする』という目標を達成した。つまり勝負に負けて試合に勝ったことになる。

『じゃあ交戦中の艦娘と深海棲艦に宣言しちやつて良いんだな？』

「うん。……間違つても変なこととは言わないでね？」

そ、そんな変なこと言うつもり無かつたし？

しかし釘を刺された以上、簡潔に終わらせるのがベストだと判断する。

『じゃあ、タコを開放してもらおうか』

「分かつた。竹、鍵を開けてくれ」

「なあ、アンタは先輩たちが言ってたスチュワートで良いのか？」

竹……なるほど松の姉妹艦か。

そんな竹が、俺の方を見て名前を訊いてくる。

確かに初対面だし、素性も知らない深海棲艦の艦装を開放するのは気が引けるってか？　じゃあ名乗りを上げて挨拶しようじゃないか。

『如何にも！　俺こそが『駆逐幽姫』ああ!?!』

何言ってるの氷雨え!?

今までスーなんて呼んでた癖になんで今になって深海棲艦っぽい名前付けちゃってくれんのお!?

「ほーん。で、どうなんだ？」

『……駆逐幽姫です』

竹も提督も本^{マジ}当か？　って顔で見えてくるけど、嘘に決まってるんだろバカかって言いたくなる。

でも本物の艦娘スチュワートが建造された時に面倒だし、そもそも俺の名乗りって自称だったからわざわざ訂正しなくても良いか。

思っていた回答を得られなかったのか随分と不満そうな顔をする竹に対して提督がもう一度鍵を開けるように指示を出し、ようやくタコが解放された。氷雨は武装解除と

言う意味で艤装を返してもらえなかった。

「さて。長々と話したけど、最初に言ったことは憶えてるよね？」

提督は深海棲艦に歩み寄る決意を固めたらしい。

後は提督が降伏したと思わせない為に、深海棲艦である俺が『勝ち申した』と宣言して中枢棲姫率いる大軍勢がこれ以上戦わなくても良いようにすればいい。

あれ？ これ俺が宣言する必要なくない？ 港湾棲姫か北方棲姫で良いじゃん。

『これで深海棲艦の悲願が達成されるね』

『悲願？ ……あつ』

氷雨が変なこと言い始めたよと思つたら、忘れてたことを思い出した。

そう言えば中枢棲姫の掲げた悲願『多少無理矢理にでも大本営陣営を深海棲艦との対話の席に着けさせる』って事実上の和平交渉に持ち込むための前段階じゃん。

というか提督もその気だから俺が宣言して中枢棲姫を止めたら実質ゴールインじゃん。

……俺の宣言によって深海棲艦と艦娘たちの戦いに終止符が打たれる可能性が濃いとなると、もしかして歴史的瞬間に携わる？

改めて俺の宣言がかなり重い責任を伴うと思うと、緊張で急に吐き気がしてきた。

一回冷静になった所為かそこまでパッションが迸ってない。この状態の俺にそんな

重すぎる仕事振ってくるんじやねえよなんだよ終戦宣言つてバカか。

氷雨にヘルプを求めなるべく視線を送ると『頑張つて』と笑顔で返された。
……逃げだしたい。

畜生、変化、防鑄

歴史的瞬間に携わる。

名誉だと喜ぶ人も居るだろう。だからなんだと冷静な人も居るだろう。

でも俺は、嫌だ嫌だと駄々をこねたい。

名誉なんて要らないし、素直に受け入れるほど立派な精神は持っていない。

今は注目的になれるような精神状態でもないし、ノミの心臓のことを考えると秘密裏に事を終わらせて大本営に事後報告してくれよなんて言いたくなる。

その時は提督が消されるかもしれないけど、他人他に無茶を強いたんだから提督も無茶をするべきそうすべき。自分だけ高みの見物とか許さねえからなあ？

まあ、深海棲艦に降伏しましたくなんて言ったら結果オーライだったとしても何かしらの処罰はされるだろうから提督も綱渡り無茶をしてるって頭では分かってるんだけど。

それに、実際のところやれと言われたらやるしかないのが辛いところ。

そもそも提督から言われなくても、中枢棲姫からやれって言われてたし……忘れてたけど。

『はあ。水雨はこうなっちゃダメだぞ』

『社畜』

たった一つの単語が心に突き刺さる。言葉とは時に純粋な暴力を越えるとは習わなかったのか？

全くその通りだから反論も出来ないし……シヨックだ。

『代わりにやってくれても良いんだよ？』

『さっき話に出てた北方棲姫？ に会ってみたいなあ』

完全スルーかよ。そうかそうか、つまり君はそんなヤツだったんだな。

だが――

『北方棲姫はいいぞ。』

『え？』

『いいぞ。』

これだけは言っておかないといけない。

別にロリコンって訳ではないけど、美味いものを持っていけば見た目相応の反応を見

せてくれるから嬉しくなる。海防艦のチビたちはみんなしつかりしてるからなあ。

求めている反応は『ありがとうございます！』じゃなくて、我先にとお菓子を取り合う

微笑ましい光景なのに……

『うわ……』

なんて思ってたら顔が緩んでたのかドン引きされた。でもかわいいモンは可愛いんだし、他に現しようがないだろう？

……これからデカい事をやるとは思えないくらい緊張感が足りてないけど、身構えてガチガチになるより万倍マシだ。

なにせ、ただスピーチするだけだと思ってたのにまさかあんな事を言われるとはね。

『前線の艦娘たちには連絡をしてないよ』

……はあ〜っ？

袋叩きにされろっつてどういうことだよ。

普通にクソだが？

やっぱり何度思い返してみても頭おかしいだろこの条件は……俺に死ぬと申すか！

『でも提督は俺の使い方が荒いけど扱い方をわかってる』

『そうなの？』

そうなんだよ。

悔しいことに、誠に遺憾ながら！俺の性格を考えるとあながち悪い判断じゃないん

だよなあ。

『絶対に生き残ってやる』

「なあ、やつぱり提督は深海棲艦の言うことを信じてなかったのか？」

2人きりになった執務室で竹に質問される。

信じてない、とは恐らく駆逐幽姫……彼女に放った最後の一言のことだろう。

「戦線の艦娘たちには連絡を入れてないよ」と言われた彼女の顔は面白かった。ピタツと動かなくなつた代わりに目は泳いでた。あそこまで動揺した様子は滅多に見られないからちよつと面白いものを見られたと思う。言葉には出されなかつたけど絶対に正気を疑われていただろう。

それはそれとして――

「信じてるよ。彼女は嘘を吐かないからね」

「駆逐幽姫がその彼女だつていう保証はあるのか？ ……アタシとしても信じたいけどよ、これが個人的な賭けじゃなくて皆を巻き込むってんなら、どんなに得るものが大きなくても綱渡りは御免だぜ？」

なるほど、周りを大切にする竹らしい考えだと思う。

だけど、綱渡りという表現は少し違うような気がする。

「ただ単に、港湾棲姫の言うことを事実とするならばこうするのが一番早いと思つたん

「だけどね」

「それがあの条件か」

「まあ……彼女にはちよつと悪いと思ってるよ」

「あれでちよつと？ 流石に可哀想になつてくるな」

呆れたように肩を竦める竹。

流石に可哀想だなんて、そんなに酷いことを言つたかな？ 彼女なら出来ると思つた

んだけど。

「竹。私は提督の面子つていうモノの所為で簡単に降伏なんて出来ないんだよ。艦娘だつて同じだろう？ そうすることが一番いい判断だったとしても大人しく降伏なんてするかい？」

「それは……」

言い淀む竹。

そしてその反応で確信した。艦娘たちは間違いなく最後の最後まで戦い続ける。どれだけ状況が絶望的でも、ボロボロになるまで叩きのめされていたとしても、後ろに守る物があるなら決して諦める訳にはいかないと奮起して立ち上がり、命を燃やすように戦うだろう。

でも、それじゃあダメなんだ。

今まで深海棲艦との戦いに人類と艦娘は勝ち続けてきた。なのに戦いは終わっていない。なら誰かが妥協変化しなくちゃいけないのではないかと、最近はそう思うようになっていた。

「そう。誰も諦めないなら、誰も譲らないのなら今までと同じなんだよ」
その場合、変化するのが自分なだけで。

いつかは深海棲艦だって諦めるかもしれない。

限界に達した人類が降伏するかもしれない。

それまでにかかる時間は？ 被害は？

そう考えると、降伏することで下されるペナルティも軽く思える。

何にせよ、港湾棲姫から話を聞いて良かった。

深夜の漁船襲撃から始まった今回の深海棲艦の大規模侵攻。彼女が嫌らしい時間には作戦を開始したこともありなかなか難しい戦いを強いられているもの、時間は掛かるけれど勝利を収めることは出来るだろうと判断していた。

けど、艦娘たちが出撃した後に港湾棲姫の語る深海棲艦の目的を聞いた自分は、勝利を収めることが本当に正しい事なのかという疑問に対する答えを得た。

仮に港湾棲姫が話をしてくれなかったとしても彼女がきつと情報を持ってきてくれただろう。

誰も真似出来ないことを薄く笑いながらやってのける彼女に驚いたことも、畏敬の念を抱いたことも一度ではない。

「でも、それはそれとしてみんなに迷惑をかけた彼女に少しくらい罰を与えても良いと思わないかい？ あの手件にはそういう狙いもあるんだよ」

「……そうだな。よし、俺もあの駆逐幽姫とやらに吠え面かせてやるか！」

そう言った竹が指を鳴らし始めた。

でも、秘書艦は護衛も兼ねてるから出撃はさせてあげられないかな……。



「もつと訓練とか演習を真面目にやっておけば良かったなあ……」

そう呟く俺たちの視線の先には空母がズラリ。

軽い気持ちが一気に引き締まって、嫌な汗が噴き出るような錯覚を受ける。全員が沖の方に集中してるからまだ気付かれてないのが救いだけど海に出たら最後、愛と殺意の爆弾で挽肉にジョブチエンジするのがオチだ。

バカ正直にシューティングさながら避けまくってもいいんだけど何より疲れるし、避け切れるとは思えない。

前線に出るところか海に出る、建物から出る時点で難易度が高いとかヤバいわ。やっぱり提督の御乱心だとしか思えんね。

このままずっと空母たちの背中を眺めてても良いんだけど、あんまり時間を掛け過ぎると艦娘たちが深海棲艦を鎮圧しそうなのがなあ……制限時間ありとか止めてくれよ。だから身の安全を考えてジツとしてる訳にはいかない。

『 艦装を拝借してこようか 』

『 うん 』

没収された艦装を返されただけじゃあ準備不足も甚だしいから、一回戻って工廠からパクってしまおう

という訳だ。さっき見た感じだと誰かが持つて行かなかった艦装が沢山あったから選り取り見取りって感じだな。

荷物持ちも居るから多少欲張っても大丈夫だろ。

工廠に戻った俺たちは、誰も居ないことを良い事にそれはもう堂々と火事場泥棒に励んでいた。

ちよつとビビってる氷雨に白露型の魚雷を押し付けて、俺は俺で探し物をしていた。

『ほれ、これなんか良い感じじゃないか?』

『……確かに。貰って良いの?』

『あれほど泥棒に気を付けろと言った提督が俺たちにこんなことさせてる時点で提督が悪い』

『そうかな? ……そうかも』

『タコはあつちの魚雷から良いの選んでくれ。おい、溶けるな。……擬態してサボろうとするな!』

こんなやり取りをしながら探し物を続けて、行きついた先は工廠の奥。

そこで俺が目にしたモノは――

綺麗に磨かれた盾と、探し物その上に布団を敷いて寝てる見覚えのある妖精さんの姿だった。

『なああにやっつてんだお前はあああつ?!』

工廠に他に妖精さん居ないよね!? 他の妖精さんが頑張ってるのに何ゆつくり寝てるのさ!?

……錆びてるだろうと思ってた盾が綺麗だったときは感動したんだけどなあ。

回収、点火、花火

『よオ……良い夢見てたか?』

おままごととサイズの布団をひっぺ返し、そう言った時の妖精さんの反応は劇的だった。

全体的なカラーが白と黒な俺たちを見て即座に深海棲艦だと判断したらしく、見て分かるレベルで青くなった。更に口元に手を当てて白目を剥いている。

さっきまでガッツリ熟睡してたのにこの変わり様。氷雨は堪えきれずに顔を背け肩を震わせ、タコは高速で体色を変化させることで煽り始めた。

でも実際に漫画みたいな顔をリアルでやるとか、実は結構余裕あるんじゃないか? みたいなことを考えていたら俺たちが何もしていないのに逃げ出そうとしてた。

まったく、見た目がモノクロっぽくなっただけで誰だか分からなくなるとか仕事意外はポンコツと名高い提督未満ってことだけ? まさか不思議の塊である妖精さんがそんなザマな訳無いよなあ?

『その盾は俺ののだぞ?』

そう言いながら盾を手に取っていつものように構えると、妖精さんがピシリと固まっ

た。

……マジ？ 本当に気付いてなかったの？

というか盾が本体で俺はオマケみたいな認識されてるみたいで腹立つんだけど。

『お前も革命派にならないか？』

意外と頑丈だし大丈夫だろうと遠慮なく驚掴みにしてそう言うのと、仕方ないなあって感じにゆつくりと首を横に振った。

スゴい嫌そうにするじゃん。

でも強く反対されないってことは良いんだな！

『さあ征こう、お前も歴史に名を刻む英雄となるのだ』

そう言うって妖精さんをタコに投げ渡し、盾が置かれてた台のサイドテーブルの引き出しを漁ったら出てきた投擲物を回収した。

これで目的のものは全部見つけたことになるな。

妖精さんはずっと俺サの装備ボつての点検倉庫番してたみたいだから盾もキレイ。投擲物のメンテの日付もつい最近。

余りものとは言え、氷雨もタコも準備万端。

『よし、参るか』

まずは海に出る為に空母たちの相手をしなきゃいけないけど、正々堂々を好む人が多
いから背後からの急襲はちよつとだけ心が痛むなあ……でも俺にだって使命ってモン
があるのよ。

『深海棲艦として艦娘を大量に戦闘不能に追い込み、尚且つ深海棲艦が優勢になった
タイミングで艦娘に投降を促す』という使命がな。

……めんどくさ過ぎて頭が痛くなってくるような内容だけど、俺のガバガバなプラン
ニングによると案外行けそうにも思えてくる。

何処かで確実に破綻するだろうけど思っただけなら自由なんだよなあコレが。ハハ
ハッ！

うーん、なんかいろいろ漁ってた辺りから脳内麻薬とかでアガって来たかもしれないな
い。

工廠で物色に時間使い過ぎたし、このノリを大切にして迅速に終わらせてしまおう。
百戦錬磨の艦娘たちをどうにかするにはやっぱり勢いが大事だ。

静かに扉を開けると、並んだ空母の背中が見える。皆に音を立てないように指示を出
し、そつと近づいていく。

ターゲットに選んだのは翔鶴さんだ。

すぐ後ろに移動したけど誰一人として気づかない。集中力が仇になったなと考えながらも遠慮なく背中を押す。

「えっ?」

何が起きたか分かってないような声を出しながら海に突き落とされた翔鶴さんを尻目に、背を押した勢いそのまま海面にジャンプ! 着水!

そして前進しながら反転して後方で海面に尻餅を付いている翔鶴さんに魚雷を4本発射! よし3本命中! ……やり過ぎたか? 沈めてないよね? うん、ポロポロだけど沈んでないからセーフ。

「翔鶴姉!? つ、敵襲!」

予測だと瑞鶴さんはかなり狼狽える。そしてククク、どうやらその通りになったな。殺意が込められてると一目で分かるくらい引かれた弦が怖すぎる。

でも狼狽えた瑞鶴さんが弦を絞るのより俺の砲撃の方が早い。牽制として砲弾をプレセント。

「くっ!」

明後日の方向に飛んでいった艦載機は無視でいいか。

ってか朝潮の連装砲狙いやつす……良いなあコレ。

そして、そろそろ艦載機から爆弾が落ちて来そうだから盾を上に構えて……ふむ、予想よりも衝撃が少ないな？

チラリと海沿いを見ると、なんとタコが俺に付いてこないで加賀さんと雲龍さんを触手で拘束していた。しかもその2人を盾に攻撃を牽制してる。

勝手になにやってんだアイツは？ でも空母のみんなが攻めあぐねてるし、かなり良い仕事してるのは間違いないから強く責められないのがなんか悔しい。

それにしても絵面が凄まじくエツ……エゲツない。

『……でかした』

とにかく、海に集中してた空母たちのほぼ全員が俺とタコに意識を割いた。

当然だ。ベテラン3人があつという間に無力化されたんだ。しかもそれをやった深海棲艦は何故か後方から現れたときた。こんなの警戒せざるを得ないだろうな。

これだけでも空母のパフォーマンスはガタ落ちで、最前線で戦ってる深海棲艦との力の関係の逆転に大きく寄与するのは間違いない。

タコのおかげで想像以上に俺の負担が少ないから、氷雨には予定通りに中枢棲姫に提督の考えを伝えに行つて貰つても良さそう……じゃない。

『やっぱりそう簡単にはいかないかあ』

『どうするの？』

そう言う俺たちの目の前には海防艦がメイン且つ少数とは言えちゃん砲撃戦が出る面子が集まってきた。

タコのやらかしによつて想定よりも大分楽出来てるけど、それでも俺の処理能力ギリギリの攻撃を仕掛けてくる空母の相手をしながら空母と反対方向に居る海防艦たちを砲撃戦なんて出来ないし、仮に出来たとしても加減する余裕なんて無いから、やり過ぎが發生しそうで怖い。

『手伝つて貰つても良い?』

『任せて。貴女を沈めさせたりはしないから』

キリつと顔を引き締めて砲を構え、さつそく撃ち放ち始めた氷雨が心強い。

でも俺だつて氷雨を沈めさせるつもりは無いんだよね。

あ、翔鶴さんは艤装のバランス悪いんだからもうちよつと転んでもらて。魚雷あげるから……無理しないで引つ込んでくれ頼むからあ! そうそう、バランス崩して転んでれば良いの。

『背中任せて!』

『そつちこそ。いのちだいじに ヒエツ!』

瑞鶴さんが弓矢を艦載機に変化せず直接叩きつけてきた。普段は神風特攻なんて絶対にしないのにどういふことなの……。

でもその攻撃力はヤバいの一言。盾で防いだら大きな衝撃と共に今までで一番大きく盾を凹まされた。咄嗟の反応で防げたけど、直撃してたら爆散してたかもしれない。そしてヤバいことは続く。

瑞鶴さんの攻撃をきつかけに、タコを警戒してた空母たちが最低限の人数を残して目標を俺に変えたつばい。

瑞鶴さんの猛攻に便乗する形で確実に敵を減らそうってことだろうな。

これは流石に投擲物の出番だな。

ピンチの時の切り札をこんな早く切ることになるなんて思わなかったけど、使わないでやられるなんてもつとダメだろ。

艦載機の数はいけど、雪で閃光のフラッシュ効果は減衰するだろうから音響手榴弾かなと判断して缶に手を伸ばした……その時だ。

ドオオン！

『は？』

タコの居た辺りから、とんでもない爆発音がした。

……何かが爆発した？

チラリと見てみたところ、タコが爆発したらしい。

足を1、2本くらい吹っ飛ばされたタコの足元に肌面積が随分増えた加賀さんと雲龍

さんが伸びている。

……どういふ状況!?

でも、警備府の近くに居たタコが空母二人を抱えながら爆発しただけあつて空母は勿論、海防艦の手も止まつたらしい。

それでも目標艦に向かつて機銃やら何やらを放つ艦載機は止まらず、手の止まつた俺に砂利をぶつけられたような痛みからデッドボールを喰らつたような痛みを与えてくる。

そのおかげで他の艦娘よりも早く立ち直れた。

同じように魚雷を回避していた水雨も手が止まる程タコには意識を向けてないみたいで、辺りを見回したのか一瞬だけ視線が交差した。

数の差はまだまだあるけど、十全に動けるのは二人だけ。

今がチャンスだ。

炎上、過程、隠者

常在戦場。

『常に命のやり取りをしてるような心持ちでいること』という意味で使われる言葉らしいけど、実践しようとするときと実のところかなり難しい。

それは世界大戦時代の記憶や記録の一部を引き継いでるような艦娘が、ガチの戦場である海上に居て尚、目の前の敵（俺ら）に集中しきれてないことから明らかだ。

そりゃあね？ 何が起きてても不思議じゃない戦場に突然大きな音がしたら気になるだろうし、それも司令塔の居る建物に近い場所からしたのなら尚更。意識がちよつと逸れて手が止まってしまっても責めることは出来ないだろう。

だから目の前の出来事を起こした張本人である俺たちが、意識を爆音に割いた艦娘たちより早く次の行動に移れたのは当然だった。

戦場や戦闘に關しては見た目不相応なくらい覚悟がキマってたりする艦娘たちではあるけど、流石に20人前後で2人と1匹を囲んでいる現状は、各々が5〜8割くらいの実力を発揮すれば十分に勝利出来るだろうという油断を招いたらしい。

だつてちよつとヤバくなくても取り返しがつくから。

だつたら、一手で “ ちよつと ” じゃ済まない程度に被害を出したり、取り返しの付かない状況にすれば良いだけだろう。

そう考へて取り出したのは赤い缶。焼夷手榴弾は前に条約違反つて言われたことがあるけど……知つたことじゃない。

『戦況をひっくり返してやる』

今は艦娘の敵としてここに居るんだしお行儀よく戦つてられないんだよ！ 自重して負けましたなんて恥ずかしいことも出来ないし。それに……結果が良ければ過程は多少滅茶苦茶でも許されると思うんだ。

それポイっつと。

飛んでいった赤い缶は艦載機にぶつかつて予定よりも手前で爆発した。引火したゲル状のモノが空母が居た辺りに撒き散らされて宿舍棟を赤く照らす。

雪の反射もあつて、一気に明るくなる。

想定よりも広範囲が燃えているけど、最悪の事態に陥つても提督の部屋には竹が居るし住宅街からはかなり距離があるから被害は大湊警備府だけに留まるしセーフだと思ふ。

投擲物を投げた時に隙を晒したせいで多少の被弾はしたけど、警備府から火の手が上

がった今は艦娘たちもかなり混乱してるのか弾の密度が急に下がった。取り敢えず集中放火に晒され続ける状況からは抜け出せたかな。

少し余裕が出来たから合流しようと氷雨に視線を送ると領き返される。まあ一点突破にしろ何にしろ1人より2人……あつ。

『良いこと思いついた』

『どんなこと?』

『行きたい場所がある。だから逃げに徹しよう』

そう言うが早い、全力で鎮守府から離れていく。

逃すかと言わんばかりに艦載機が襲いかかってくるけど、実は秘密兵器に頼らなくても逃げ切るだけなら出来るだろうと確信出来る程度には素の対空能力にも自信があるんだよね。

そもそも、よく考えてみたら囲まれてのに真面目に相手する方がおかしいんだよ。だから火中の空母は放っておく事にする。流星にこの状況で心頭滅却すれば火もまた涼しの精神で、俺のプランをぶち壊しにくる人が居る可能性なんて考えたくもない。もしそうだったら素直に諦めるとして……我慢比べといこうか。

艦載機とは、適当に言ってしまうえば空母が繰り出す小型の戦闘機である。つまり飛行

速度と飛距離こそ優れているものの、エネルギーは有限だからどこまでも追いかけてくるなんてことはなく、補給の為に往復する必要がある。つまり空母の位置を中心に一定範囲を飛んでいると思えば良い。

幸いにも艦載機と、それに載っている妖精のことを一切考慮しない特攻を仕掛けてくるような空母は居なかったの、しばらく対空砲をフル稼働させながら移動していると艦載機の攻撃がそこまで気にならなくなってきた。

突然鎮守府を襲撃するような深海棲艦を逃さないという意思は流石だけど、鎮守府側から見た時、最も重要な戦局は俺の居る場所じゃないから、ある程度効果が望めなくなったら諦めたんだと思いたい。

氷雨と追いついてきたタコと一息付きながら、とある場所を目指して移動を続けていると今度は先の方に人影が見えてきた。間違いなく艦娘だろうから次の戦いが始まるのは間違いないんだけど、艦載機から逃げ続けて疲れたから遠回りもしたくない。出来れば不意打ちして楽に突破したいと切に願う。

「つー！ 敵発見！ 集中するんだ！」

だけどそれを簡単に許してくれなさそうなのは磯風。俺を見つけた途端に指示を飛ばすのは流石だ。しかも既に連絡を入れてあるのか、探照灯の灯りが近づいてるように見える。数は一つだけ……

「磯風さん！ 第一水雷戦隊到着、準備OKです！」

阿武つち！ 阿武つちじゃないか！

それに一水戦つてことは……

「磯風、大丈夫ですか？」

「ほんまに燃えとるけ、何の冗談じゃ？」

「目標はあの2隻で良い、みたいですねっ！」

「てーっ！」

あああああああああ！

一七駆逐隊じゃねーか！ 滅茶苦茶強いし、おおハズレだ。

しかも撃つてきやがった！

『ヤバっ』

氷雨は庇いきれないと悟つて魚雷を放つてから盾に隠れる。流石に氷雨もこの程度で沈みはしないだろうけど、蓄積してるダメージはあるし、被害を少なくするに越したことはないから氷雨を庇うように立ち回ろう。

「片方は盾のような物で砲弾を防いでるようですね。先にもう片方を片付けましょう」

「合点だ！ てーっ！」

しかしどうだろう。

艦娘たちは俺を無視して氷雨を狙うじやないか。

『おいおい』

キレそう。

いやいや、みんなの判断は正しいよ？ 効果が薄い方は避けて効果がありそうな方を

狙うのは当然のことだ。でも敵が大人しくそれを受け入れられるかは別問題なんだよね……せつかく氷雨を庇うべく前に出たのに無視される俺の気持ちにもなつて？

つまりなんだ。

『舐めてると痛い目に会うぞ？』

氷雨だけじゃなくて俺も狙わないと危険だと思ひ知らせてやるよ。俺と撃ち合いまする気は無い？ だったら狙いやすい至近距離めのまえに行つてやるよ。

盾を構えたまま更に前進すると途中で魚雷に引つかかつて浮遊感を得た。けど足を挫いた程度の痛み程度で止まるとでも？ 体罰上等の元日本男児を侮るな。

「えっ？」

誰かが驚いたような声を上げたのを聞いてすぐに魚雷を射出する。これは当たつたなど確信して盾の陰から顔を出すと、既に艦娘たちは散つていた。

しかし見てみると雪風がの服がいくらか煤けているように見える。あの雪風に短時間ダメージを与えられたなんてラッキーだと内心で喜びながら、一番近くにいる浦風

に再度突撃を仕掛けようと盾を構えた。

その時だ。

「うわあ!?! なんじゃ!?!」

浦風が突然、海中から生えたタコの脚に拘束された。

いつの間にも移動したのか分からないし、脚は何本か吹っ飛ばされたのか拘束力は強くないみたいだけど、浦風の抵抗を物ともせずにかチャカチャと手際よく艀装を剥いでいくタコの脚の動きのなんと嫌らしいことか。

「止めろ!?! んっ……離せえ……ひあつ!?!」

あまりにも戦場に似合わない艶っぽい声が聞こえるんだけど?

正直聞かなかったことにしたい。でも加賀さんと雲龍さんの事もあるし……もしかしてこのタコは相当な変態なのでは? と思い至り真顔になる。

そうこうしてる間に艀装を外された浦風が海に放り出され、その救出のために浜風の手が塞がった。無力化って意味では有効なんだけどなあ……絵面と方法が酷い。

『早く先に進まないよ』

近くに寄った氷雨に声を掛けられて、エロダコの成した事にドン引きしている場合ではなかったかと思ひ直す。過程は本当に滅茶苦茶だけどとりあえず戦力差は埋まったな。

タコがひん剥いた浦風の艀装から通信機を外して弄る。相手は……磯風でいいか。

『ちよつとやらなきやいけないことがあるんだよね。通してくれない?』

『貴様は何を……いや、まさか?!』

チラリと見ると磯風が驚愕に染まった顔を向けている。

『悪いようにはならないから大人しくしててね』

そう言う口をパクパクさせて大人しくなった。

……本当に大人しくなった!? いや、撃つのを止めただけか。

でも相変わらず魚雷を撃ちまくってくる谷風と、阿武隈は全然大人しくない。幸いにもタコを警戒してやや密集気味の陣形を取った十七駆は、持ち前の機動力を殺した形になつた。

だつたら速さで振り払えばいいかと思つたら足元に魚雷。

『ひよっ!』

ビックリして反射的に避けたのは良いものの、見事に転ばされた。

立ち上がりうとしたらここぞとばかりに砲弾を撃ち込まれ、盾を持ちあげたまま動けなくされた。早くしないと魚雷に当たるつてのに……

なんでたつた3人だけなのにこんな多方向から魚雷が向かってくるんだ? 何も感じないだけで潜水艦も来てるのか? いやでも、軽巡とか駆逐艦とは移動力が違うから

なあ……。

もしかして阿武隈の特殊潜航艇か!?

なら辻褄が合う。なんだよ、潜水艦がもう一人隠れてるようなものじゃないか。

これは厄介だぞ……阿武隈も、普段は駆逐艦から舐められてるからって実力不足って事はないし、なんならかなり優秀だし。

でもね、俺たちは駆逐艦なのよ。阿武隈も速いとは言っても速度の差は埋められないんだよなあ。

『逃げるよ。あっちだ』

『分かった』

「あつ、逃がしません!」

「逃げようたつてそうはいかせねえよ!」

ああ、面倒なのとしつこいのに補足された……。

どんな力が働いているかは謎だけど、深海棲艦は生体兵器的な存在だから激しく動きまくれば普通に疲れる。艦娘が妖精さんの力で艦装を手に入れた^{魔法少女}プ○キュアだとすると、深海棲艦は謎の力で生まれ変わった怪人だ。瞬間的な出力量は深海棲艦の方が優れていたとしても、艦装が出力する艦娘の方が持久力に優れているってことは間違いな

つまり、長時間の鬼ごっこはかなり不利だつてこと。

この深海棲艦の意外な欠点にへ口へ口になつてから気付くとは、流石に知らなかつたなガハハと笑えない。この程度の距離で艦娘は燃料切れを起こさないし、まさか持久力にここまで差があつたなんて……。

恐らく今の俺を鎮守府に居た頃の俺を同一視出来ている磯風は、谷風と雪風に追撃しないように通信を入れてくれなかつたのかと恨み節を溢しそうになる。

めつちや疲れた。

だけど遂に目的の場所が見えてきたのも事実。

『ちよつとゆつくりさせてほしいんだけど……時間稼ぎつて出来る?』

仮にも姫級でしょ、駆逐艦娘2人は何とかできない?

『無茶言わないで』

『オラツ! 早く盾を装備するんだよ! 今なら盾を持ったタコまで付いてくる。……』

お願いだから』

『遅れたら許さないから』

フフツ、怖い。

氷雨と別れて島に上陸する。

そして、一見すると廃墟に見える建物の扉を開ける。

『港湾棲鬼、力を貸して欲しい』

『……何の用だ』

『帰れ!』